

ありふれたRTAでラスボス撃破 タンクチャート

エチレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投降なので初投稿です。

目次

ゲーム開始	1
一学期～夏休み	9
二学期	19
冬休み～三学期	30
春休み～トータス召喚	42
幕間：持つべきものは理解者	52
幕間：もう一步踏み込んで	65
訓練期間～オルクス大迷宮20階層	76
ベヒモス戦～オルクス大迷宮攻略開始	89
100階層～封印部屋終了まで	100
101階層～200階層	111
幕間：今日も空は青い	122
オルクス大迷宮拠点	135
幕間：あなたの隣で	146
拠点出発～ハルツィナ樹海到着	156
ハルツィナ樹海～ブルツクの町到着	168
ブルツクの町到着～出発	179
幕間：そうして彼らは再会する(前)	189
幕間：そうして彼らは再会する(後)	202
ライセン大渓谷～ライセン大迷宮	213
ミレデイ・ライセン戦～アンカジ公国到着	224
幕間：託す者、進む者(前)	236
幕間：託す者、進む者(後)	246
幕間：託す者、進む者(EX)	260

グリユーエン大火山攻略	271
グリユーエン大火山出発くエリセン到着	284
エリセンくメルジーネ海底遺跡	295
メルジーネ海底遺跡攻略	306
幕間：それでも人は進み続ける (前)	319
幕間：それでも人は進み続ける (中)	329
幕間：それでも人は進み続ける (後)	344
幕間：それでも人は進み続ける (終)	357
王都く神山攻略開始	376
神山攻略く王都出発	389
幕間：ハイリヒ王国にて	398
幕間：王都での一日	409
幕間：神の山 (前)	435
幕間：神の山 (後)	449
フェアベルゲンくハルツイナ大迷宮攻略開始	466
ハルツイナ大迷宮攻略	479
幕間：ハルツイナ大樹海にて	494
幕間：惑わしの大樹海 (前)	508
幕間：惑わしの大樹海 (中)	532
幕間：惑わしの大樹海 (後)	549
幕間：惑わしの大樹海 (後②)	564
幕間：惑わしの大樹海 (終)	584

ゲーム開始

セーラーガール！（IRI兄貴リスペクト）

今回は2006年に発売された『ありふれた職業で世界最強』を原作とした『ありふれエンパイアーズ』の攻略プレイを行っていきましょう。

実はこのゲームなのですが、なんと物語の舞台である異世界トータスにたどり着いた時にもらえるトロフィーである『異世界召喚』の取得率が5%というフ○ムソフトウエアも真つ青の意味が分からない状態になっています。その原因はまた後ほど説明しましょう。

さて、今回はRTAなのですが、堅実、確実なチャートからくる安定ルートを走るのでガバもオリチャーもありません。（期待してた人は）すまん。

タイム計測はキャラクターで決定を押ししてから開始して、ラスボス撃破後のムービーが映った瞬間にタイマーストップです。

では、早速開始しましょう。まずはキャラクターからです。

このゲーム、自分のオリキャラを制作して物語を色々と改変……もとい介入できるんですよ。当然ヒロインも攻略出来ます。もちろん原作キャラを選んで普通に原作の物語をそのまま追体験できますし、お好みでプレイしてくださいという制作会社の気づかいが感じられます。

ではキャラクターの開始です。今回挑戦する少年の名前はまもるっ！ という訳で北条 衛（ほうじょう まもる）で略してほもです（ノルマ達成）。何故こんな名前にしたのかは、これも後ほど説明します。

性別は男、これにも訳があります。家族構成も決められますが、家族がいるとイベントシーンが増えてロスになるので（家族は）キャンセルだ。そのお陰でほもくんは、可哀想な子になっちゃったんだ（馴れーション）。タイムのためには必要なコラテラル・ダメージというやつです。

家族構成を決めたらキャラクターの特徴を決めます。パワポ○のマイライフみたいにキャラの強みを選んで決めれるんですね。ここ

は『我慢強い』と『冷静沈着』を選びましょう。これも後々のために必要な選択なので、これも後で時間がある時に説明します。

見た目もある程度決められますが、これは身長を高くして、後はランダムで良いでしょう。余程のブ男でない限りはそのままです。……おー、ええやん。中々の男前ですね。ほもくんも……おいしそうやな。

ちなみに年齢は原作主人公たちと同じになるみたいです。何度キラクリしても同じだったので。先輩風吹かせたかったなー俺もなー。

さて、キラクリも終わったので『決定』を押して、その瞬間にタイムスタートです。

イクゾー！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

＜自宅の一室で目を覚ました

物語の開始ですね。最初の一文はどんなキラクリをしても同じです。

＜そう言えば、今日から高校生だ。準備をしなければ……

＜誰も居ない家で食事をとって準備をした……

ここで家族が居れば会話パートが挟まってしまいます。大家族の場合は早送りしても30秒ほどのロスになってしまいます。それに比べて一人なら早いです。早速チャートが生きてますねえ。チャートを守るものはチャートによって守られるって偉い兄貴が言ってました。

ちなみに、スタートは強制的に高校入学時からになります。クラスは物語の都合上、原作主人公の南雲ハジメくんと一緒になります。別クラスだと物語にならないからしようがないね。

＜無事に入学式が終わったので教室に移動する

＜どうやら一人ずつ自己紹介をするようだ

＜自己紹介はどうしようか……

本来はここで選択肢が出るのですが、一週目は出ません。と言うの

もこのゲーム、色んなゲームをパク……もといンスパイアしており、この場合はペ○ソナで言う人間ステータスが足りないと無難な自己紹介一択になってしまいます。

◇無難に自己紹介を終わらせた……

初日は授業が無いので自己紹介をして解散となります。部活に所属する事も出来ませんが、それは翌日からです。寄り道も出来ませんが、特に何も得られるものは無いので今日はおとなしく帰ります。

これから一年間、トータスに召喚されるまで日常パートが続くわけです。……聞き間違えではありません。一年間、日常パートのみが続くのです。

はい、これがこのゲームが作りこみに対してクソゲーの烙印を押された理由になります。

パ○プロのマイライフで言うどひたすら休日を消化する作業を一年分、スキップも出来ずに全て操作をしなければいけません。精神壊れちゃーう！ どれだけ急いでも画面暗転とかロード時間とか合わせるど一日一分はかかるので、6時間くらいしないとほんへには入れないんですよ。

95%のプレイヤー兄貴たちはこの地獄に耐えられずに『異世界召喚』のトロフィーを取得することなくリタイアしてしまいました。5%の狭き門を潜り抜けた者だけがトータスに招待されます。

これが堅実、確実なチャートを選んだ理由でもあります。こんなのでステータスリセマラとか頭おかしくなるのでしようがないね。

◇二日目が始まった……

◇登校中にクラスメイトと出会った

おっと、画面では2日目スタートしましたね。基本的に流れとしては、平日は登校↓昼休み↓放課後↓夜、休日は朝↓昼↓夜の順番で行動します。登校中はこういう風にランダムでキャラクターと出会い、友好度が少しだけ上がります。幸い一日ごとにセーブをすればこのキャラガチャも狙ったキャラを引けなくはないのですが、RTAなのでセーブ&ロードしまっくてたらタイムがお通夜になっちゃうので私はやりません。通常プレイ兄貴はぜひ活用してください。

「おはよー！ 確か北条くんだったよね？」

〽 背の低い活発そうな少女だ

〽 確か谷口さんだったか……

原作キャラで攻略可能なキャラクターの一人、『谷口鈴』ですね。キャラとしての性能は防御タイプになっています。初見の敵に挑むときにパーティメンバーに入れて様子見をするのが主な役割ですね。通常プレイではパーティの耐久力を底上げしてくれるので中々に優秀ですが、RTAではフヨウラ！ 君は悪くないが天職が悪いのだよ。

〽 登校中に楽しく会話が出来た！

〽 少しだけ仲良くなれた気がする……

あ、友好度が上がりましたね。こうやってコミュが発生すると友好度が上がり、男女ともに友好度が一定以上になると友達のその先へ行けるようになります。攻略したいキャラが居れば、そのキャラに話しかけまくればいいのです。

〽 昼休みになった

〽 何をしようか……

そうしている間に昼休みですね。2日目の授業って何するんですかね？ オリエンテーション的なものだとは思いますが、そういうのは一切描写が無いので不明です。想像で補いましょう。

お昼休みは『自習』と『交友』のコマンドの二つから選びます。仲良くなったキャラがいればお誘いがかかる事もありますが、今のほんのくんの状態ではオフ会0人の状態なので『交友』を選びましょう。

〽 誰に話しかけようか……

『窓際で本を読んでいる男子生徒』『クラスの中心にいる男子生徒』『優しそうな女子生徒』など色々選択肢がありますが、ここは最初の『窓際で本を読んでいる男子生徒』一択です。

〽 窓際で本を読んでいる男子生徒に話しかけた

「えっ、もしかして僕？ ご、ごめん、本に夢中で気付かなかったよ」

この一般男子生徒な見た目をしているのが原作主人公である『南雲ハジメ』です。今はただの大人しい少年ですが、放っておくと奈落で

芸術しん・・・てあげんだよ！ 芸術し、品にしたんだよ！ 芸術品にしてやんよ（妥協）みたいな事になります。ハジメくんはルートによって性能がガラリと変わる珍しいキャラクターですね。原作通りに奈落に落ちれば超攻撃的な能力になり、特に単体に対する攻撃力は作中最強です。逆に奈落に落ちないルートもあり、こちらは補助向けのキャラとして有能です。

▽改めて自己紹介をした

「北条くんだね。僕は南雲ハジメ。これからよろしくね」

これで昼休みは終わりです。あまりにも短いですがゲームの仕様上致し方なし。と言うか毎回毎回長い会話が入るとさらに精神力がヤバいので、むしろ短いのは助かります。

▽放課後になった

▽何をしようか……

時間が放課後に移り、自由行動になります。さて、ここで初めて自分のステータスが見れるので確認します。そして最初で最後のリセットポイントです。では御開帳！

筋力：――

体力：――

耐性：――

敏捷：――

魔力：――

魔耐：――

技能：――

勇気：3 / 10（人並み）

忍耐：5 / 10（我慢上手）

寛容：3 / 10（人並み）

体力：3 / 10（人並み）

疎通：1 / 10（口下手）

沈着：5 / 10（冷静）

知識：3 / 10（人並み）

魅力：3 / 10（なくはない）

よし、良いですね。『我慢強い』と『冷静沈着』を選んだ甲斐がありました。コミュ力が富岡義勇になっていきますが問題ないでしょう。ラインが入っているところは(トータスに召喚されてから表示されるので今は)無いです。

これからの方針ですが、人間パラメータを上げつつ交友を重ねていくことになります。と言うかそれしかできません。時間が腐るほどあるので皆様のために大人気アニメを流しても良かったのですが、色々と説明することがあるので、それをすることにしましょう。

まず、チャートについてですが、主人公のほもくんはタンク役として育てます。いかんせんこのゲーム、火力バカは多いのですが盾役が出来るキャラが全然いません。RTAと言う事は必然的にレベルも低くなるわけで、そんな状態で進めていけば一瞬でパーティが壊滅してしまいます。

だったら作ればいいだろ！ という訳でほもくんは囿役として役立つてもらいます。これが性別を男性にして、最初に『我慢強い』と『冷静沈着』を選んだ理由になります。主人公が男性であれば攻撃力や防御力に補正が付き、女性であれば素早さや魔力に補正が付くのです。

そして『我慢強い』では体力、耐性、魔耐に補正が付き、『冷静沈着』では各種状態異常に耐性が付きます。ナチュラルボーンタンク、それがほもくんです。

さらにトータスに召喚されるまでに人間パラメータを上げると、それに応じて戦闘ステータスの成長率にボーナスが乗せられます。

▽運動をしよう

▽少しだけ体力が付いた……

なので、こうして人間パラメータを上げればそれだけ有利になります。目標としては『勇氣』を7以上、『忍耐』『体力』『沈着』は10、他は特にありません。盾役として必要なのはこの4つだけです。

▽夜になった

▽何をしようか……

ちなみに、家族がいるならば夜は街に行けません、一人暮らしで

あれば行けます。家族がない方がRTAとしては良い事尽くめで
す。ただし、虚しくなってくるので通常プレイでは家族有りを選ぶ
ね！

〓 街に行くことにした

〓 どこに行こうか

夜の街は行ける所が複数個所あり、行った場所に対応して経験値が
もらえます。例えば『ゲームセンター』を選ぶと『知識』が上昇しま
す。クイズゲームでもやってるのかな？ しかし『知識』を上げる必
要は無いのでここは『路地裏』を選びます。

『路地裏』では『勇気』が上昇するほか、場合によっては他のパラメー
タ経験値も上昇する事もあり、非常にうま味です。ダーク・ファイ
トが起こったら確定で経験値がもらえるので期待しましょう。

〓 不良たちと喧嘩になった！

〓 勝てなかった……

〓 少しだけ勇気・忍耐・体力が付いた……

どうやらダーク・ファイトが起こったようですね。3人に勝てるわ
けないだろ！ という訳でパラメータが足りないので負けましたが
経験値は入るので問題ありません。入学2日目にして乱闘騒ぎを起
こす人間の屑、それががほもくんです。

1日の流れとしてはこんな感じですね。とは言え、毎日喧嘩に明け
暮れるわけではありません。攻略に必要なキャラとのコミュもする
必要がありますので、そちらも行います。でも、チャートのにはコ
ミュする必要があるのは一人だけなんですよね……。コミュの時間
は余りまくるので適当に好きなキャラとコミュすれば良いんじゃない
ですかね（投げやり）。

〓 昼休みになった

〓 何をしようか……

〓 『南雲ハジメ』と話すことにした……

3日目の昼休みです。この日もハジメくんに話しかけます。そう、
コミュする必要があるのがこのハジメくんなのです。彼は、トータス

ではありふれた錬成師（大嘘）として活躍しますが、今回のチャートではありふれた錬成師（真）として活躍してもらいます。

先ほども言いましたが、彼は奈落に落ちるのと落ちないのでは性能が違ってきます。奈落ハジメくんは単体火力最強と言っても過言ではありませんが、それには十分下準備を整えればという但し書きが付きます。RTAの性質上、それはリソース的に無理なので、今回は補助役として存分に役立つてもらいます。

ハジメくんは補助役としても非常に有能であり、様々な道具を作成してくれます。耐久力はペラペラなので直接戦闘には参加できませんが、控えに入れておくだけで難易度が段違いです。この辺りは原作主人公リスpektですね。彼岸島という西山みたいなものです。でかした！

あとのコミュは上げる必要は無いので適当に流しましょう。上がっても害は無いので上げてても良いです。……え？ 可愛いヒロインとイチヤイチャしてるところを見せろ？ ……それは、自分の目で確かめよう！

さて、それではこのまま日常パートを送りつつトータス召喚まで一気に駆け抜け今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

一学期〜夏休み

2回目にして早くも倍速になるRTA、はーじまーるよー！

前回はキャラク리를終えて大まかなゲームの流れを説明したところまででしたね。

今回は日常パートを倍速で送りつつ、するべき事を説明します。

まずは人間パラメータを『勇氣』7以上、『忍耐』『体力』『沈着』は10に、その他は目標値はありませんが、高ければ高いほど楽になるので出来る限り上げていきます。これはよほどさばらない限りは達成できるので問題ありません。

次にキャラクターの友好度ですね。

これは『南雲ハジメ』の友好度を上げつつ、他のキャラクターの友好度も出来る限り上げる方向で行きます。

つまり、ベストを尽くせという訳ですね。

でも一年は長すぎる…長すぎない？ 原作ではWeb版と書籍版で召喚時期が変わったような気がするのですが、このゲームはシステムの都合上で転移時期が高校二年生の春になるんですよ。

あのさあ…日常パートはいいから、キャラ作ってさっさとトータスに行つてさ、終わりで良いんじゃない？

初めは楽しい日常パートもパターン化したその先に待っているのは地獄です。無表情でコントローラーをポチポチするだけの作業を6時間、あなたは行えますか？

…：申し訳ない。RTAでのストレスがつい出てしまいました。気を取り直して、倍速しているのもう6月まで来てますね。

部活動に所属する事も出来ませんが、そうすると放課後の時間が潰れてしまうので、狙ったキャラを攻略する以外で入るうま味は無いです。なのでほもくんは帰宅部で過ごすことになります。

さて、友好度を確認するとハジメくんが5/10になっていたのでもそろそろ休日とかに誘ってもいいかもしれません。他は『谷口鈴』が3/10、『遠藤浩介』『白崎香織』が2/10、『坂上龍太郎』『畑山愛子』『八重樫雫』が1/10ですね。

「おはよう、北条くん！」

〈登校中に『谷口鈴』と出会った

谷口くん、きみ登校時によく出会うね。これで20回目だよ。ほものストーカーか何か？ もしかして家が同じ方向なのかな？

基本的に登校時に会おう人はランダムなのですがかなり偏ってますね…。まあ、ガバではないので寛大な心で許しましょう。

「そう言えば今週からプール開きなんだって！ 楽しみだね！」

〈どうやらプール開きらしい

〈誰かを誘ってみるのもいいかもしれない

〈少しだけ仲良くなれた気がする……

おつ、夏のイベントであるプールの解禁ですね。

これは男女関わらず一緒に行くとき水着のCGが回収できる原作ファン歓喜の良イベです。友好度もぐっと上がりますし、体力や魅力も上がるのでうま味ですね。

〈昼休みになった

〈何をしようか……

なお、『知識』は授業を真面目に受けておけばある程度上がるので、自習を選ぶことはありません。ですが、学年一位になると『畑山愛子』の友好度が上がりやすくなるので、彼女を攻略したいときは頑張って勉強をして『知識』を上げましょう。ぼくはしません。

〈『南雲ハジメ』と話すことにした……

男ばかりに話しかけるほもの鑑。

ちまちまと話しかけて友好度を稼いだので、そろそろデートに誘います。とは言っても男2人なんですけどね。

〈放課後に街に行かないか誘う

「僕でよかったら一緒に行くよ。買いたい本もあったからちようどいいや」

はい、成功しました。

友好度が低いと断られることもありますが大丈夫だったようです。

ちなみに、ハジメくんであれば放課後に街に誘うと毎回このセリフが出ます。こいついつも本買ってるな。

また、友好度が6以上になれば自分をさらけ出してくれるようになります。確率ですが、個人ごとのイベントが起こる事があります。ハジメくんの場合であればいわゆる『オタク趣味』についてですね。ですが、まだ友好度は5なので何事もなく放課後は終わります。

〈『南雲ハジメ』と楽しく放課後を過ごした

〈『南雲ハジメ』との仲が深まった！

これで友好度は6ですね。

『仲が深まった！』の表示が出れば友好度が一段階上がった事になります。この調子で行けばトータス召喚までに余裕で友好度10は達成できますね。

ハジメくん以外に友好度を上げるのであれば『遠藤浩介』と『八重樫雫』が特にオススメです。友好度が高ければパーティの控えメンバーに入れた時に補助効果を戦闘中使ってくれる事があるのですが、この二人のサポート効果は凄まじく有能です。

『遠藤浩介』であれば戦闘開始時にパーティの物理攻撃のクリティカル率を上げてくれます。特に、友好度10にした時はほぼ確定でクリティカルが出るようになるので物理パーティで脳筋プレイをするときは必ず編成に入ってきます。

『八重樫雫』であれば主人公が行動するごとに敵に攻撃をして、さらに防御力を下げてくれます。敵にデバフを掛けてくれるだけでなく、友好度が上がるほど与える攻撃ダメージも大きくなるのでダメージソースとしても侮れません。

おっと、画面では文化祭についての話になっていますね。都合の良い事に票が綺麗に分かれて自分の投票でどれにするか決まる状態になっています。

〈文化祭の出し物はどれにしようか……

⇒喫茶店

お化け屋敷

縁日

出し物についてですが、『喫茶店』なら『忍耐』『寛容』『疎通』に、『お化け屋敷』なら『勇氣』『沈着』『魅力』に、『縁日』なら『寛容』『疎

通』『知識』に大きく経験点がもらえます。はぶかれた体力くん可哀想…。

ここは『お化け屋敷』を選びます。タンクを作るのであればこれが最適です。魔法使いでプレイしたい場合は『縁日』ですね。『喫茶店』は…んにやぴ、よくわかんなかったです。CGの回収くらいでしか選びません。

文化祭は7月10日に行われるので、程よく放課後の時間を使って準備をしましょう。

文化祭当日までは放課後のコマンドに『準備をする』が出現し、選ぶたびに『完成度』が上がっていきます。

『完成度』が高ければ高いほどもらえる経験点が増えます。

さらに、『完成度』が最大になるとクラスメイト全員との友好度も上がるので選ばない手はないでしょう。

＜放課後になった

＜何をしようか…

＜文化祭の準備をすることにした

＜少しだけ体力と忍耐が付いた…

こうして人間パラメータの経験点も入ってくるので、『完成度』が最大になるまで放課後はひたすら『準備をする』を選びましょう。

＜夜になった

＜何をしようか…

＜街に行くことにした

＜どこに行こうか

そして夜になったら街に繰り出してダーク・ファイトを繰り広げます。その前に現在のステータスを見ておきましょう。

筋力：――

体力：――

耐性：――

敏捷：――

魔力：――

魔耐：――

技能：――

勇気：5／10（度胸あり）

忍耐：6／10（江戸っ子）

寛容：4／10（人並み）

体力：6／10（エース級）

疎通：1／10（口下手）

沈着：7／10（氷の心）

知識：4／10（人並み）

魅力：4／10（なくはない）

順調に上がっていますね。

ただ、数値が大きくなればなるほど必要経験点がたくさん必要になつてくるので、特に『沈着』はこれから上がりにくくなつてきます。

でも『疎通』は1から上がってないのは何ですかね……。まあ、攻略にはあまり関係ないので放っておきましょう。誤差だよ誤差！

このステータスなら勝てそうですね。ではイクゾー！

▽不良たちと喧嘩になった！

▽勝てなかった……

▽少しだけ勇気・忍耐・体力が付いた……

こいついつも負けてんな。

でもグラフィックを見る限り怪我一つないんですよ……。リジェネーターか何か？

▽登校中に『畑山愛子』と出会った

「聞きましたよ北条くん！ 夜な夜な街をうろついているそうですね！ そういう危険な事って駄目だと思います！」

▽どうやら怒らせてしまったようだ……気を付けなければ

▽少しだけ仲良くなれた気がする……

たぶん気のせいだと思っんですけど（名推理）。

どうやら夜に街に行っている事がばれてしまったようですね。説教を喰らっています。

まあ説教されたから止めるとは言わんけどなブヘヘ。

経験点がうま味なのでやめる理由が無いんだよなあ。

そしてこのイベントが起きたことで、あるイベントが連動して起こります。

＜昼休みになった

＜誰かが話しかけてきた

「北条、ちよつといいか？」

＜『天之河光輝』の誘いだ。どうしようか……

はい、これですね。原作でも凄まじい存在感を出していた『天之河光輝』とのイベントです。もちろん、ここは『はい』を押します。

「最近、夜な夜な街で人に暴力を振るっているそうじゃないか。人を傷つける事は今すぐにやめて謝るべきだ」

一理あるどころかぐうの音も出ない程の正論ですねえ。

これが夜の街でダーク・ファイトを一定回数行くと、畑山愛子の説教と連動して起こる天之河光輝によるSEKKYOUイベントです。

どう言い繕っても天之河されるのでここは素直に謝っておきましょう。

＜素直に自分の非をわびた

「本当に反省しているのか？ 俺にはそうは見えない」

『疎通』の数値が足りないと、こんな風に話を通じない事があります。

とは言っても天之河の場合は『疎通』もほもくと同じ1なので、こちらの『疎通』が10でもない限りは同じ結果になるんですがね。

＜その後も天之河の説教は続いた

＜少しだけ忍耐と寛容が付いた……

これが誘いに乗った理由です。昼休みは通常、『自習』をして『知識』を上げるか、『交友』で友好度を上げる事しか出来ませんが、この天之河道場であればタンクに必要な『忍耐』を上げることが出来るのです。そして、これはまたダーク・ファイトを行えばイベントが復活します。

じゃけん夜行きましようねー。

という訳でここからはさらに加速していきます。

延々と同じことをするだけです。

早くもだれてきました。が、トータスに召喚されるまでの辛抱です。召喚されてからは一気にゲームが面白くなるのでご期待ください。

＜文化祭が始まった

＜：お化け屋敷は大盛況みたいだ！

＜皆との絆が深まった！

＜勇氣・沈着・魅力の高まりを感じる！

いつの間にか文化祭ですね。

完成度はもちろん最大まで上げておいたので大成功です。あく経
験値がうめえな！。

＜せっかくの文化祭なので誰か誘おうか……

そして文化祭では誰か一人を誘って好感度を大きく上昇させるこ
とが出来ます。好感度稼ぎを誰か一人に絞ればここで『特別な関係』
になることが出来ますが、メスなんて必要ねえんだよ！

なのでここは一番表示される文章量の少ない『坂上龍太郎』を選び
ましょう。ちなみに、一番長いのは『谷口鈴』で、その文章量はなん
と『坂上龍太郎』の5倍もあります。ムードメイカーですごく喋ると
いう原作設定がここで来ます。

＜『坂上龍太郎』を誘った

「俺と回りたいのか？ 分かった、付き合うぜ」

ちなみに『誰も誘わない』を選ぶと、その時点で最も友好度の高い
キャラからお誘いがかかる事になります。

ほもくんの場合はハジメくんですね。

彼もそこそこに長いので、『誰も誘わない』を選ぶとロスになってし
まいます。だから、坂上龍太郎を誘う必要があったんですね。

通常、異性のキャラクターを誘った場合はデートみたいの色々回る
のですが、なぜか坂上龍太郎は異性でも同性でも飯を食って終わり
という何とも味気ないものになっています。

開発は彼に何か恨みでもあるのでしょうか……

＜『坂上龍太郎』と楽しい時間を過ごした

＜『坂上龍太郎』との仲が深まった！

ともかく、これで文化祭も終わりですね。

これからは本格的な夏に入ります。イベント盛りだくさんですがRTAなので最低限のイベントだけこなして後は流します。

イベントをじっくり見たい兄貴は買って確かめてください（ステマ）。

「はい、では明日から夏休みになりますが、羽目を外し過ぎてはいけませんよ！ ちゃんと宿題もやってきてくださいね！」

＜夏休みに入った

＜朝は何をしようか……

おっ、夏休みですね。

7月20日から8月最終日まで夏休みとなりその全ての日が休日と同じように進行します。

家族がいれば色々なイベントが入るのですが、ほもくんに家族は居ないのでその全てをスルー出来ます。

夏休みに何をするかと言うと、ひたすら人間パラメータを上げます。

そうすればトータス召喚以降の走りが安定しますので、恋愛とかにかまけている暇は無いです。

ただし、『夏休みの宿題』があり、『自習』を10回以上選ぶ必要があるのでそこだけ気を付けましょう。

あとはコミュですね。プールは週末だけ行けるようになってるのでハジメくんを誘って友好度をがつつりと稼いでおきます。

＜運動をしよう

＜少しだけ体力が付いた……

＜昼は何をしようか……

＜街を散歩することにした

「あら、北条くんじゃない。こんな所で奇遇ね。折角だし一緒に街を見て回らない？」

＜たまたま出会った『八重樫雫』と一緒に過ごした

＜少しだけ寛容・魅力が付いた……

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

本来であれば街の散歩は『体力』と『寛容』に経験値が入るのですが、どうやら八重樫雫と遭遇した事で変化したみたいです。友好度が0か1なら誘われる事は無いのですが、文化祭で友好度が上がって2になったので引っかけられましたね。

休日以外を出歩いているとこうしてクラスメイトと出会う事があり、本来のイベントが上書きされてしまいます。ですが、トータス召喚までは時間はたっぷりありますし育成はうまくいっているので問題ないでしょう。

それに、八重樫雫の友好度を上げておけば非常にうまいイベントが起こる事があるのでむしろこれからは余裕があれば友好度を上げに行ってもいいかもしれません。

彼女との友好度が5を超えると低確率で『八重樫流』のイベントが発生することがあり、『体力』『忍耐』『沈着』の経験値がドカンと入ってくるのです。

とは言え低確率ですのでチャートに組み込むには心もとないものです。だったら安定して経験値を稼げるチャートの方が良いに決まっていますので厳正な審査のもと不採用となりました。

豪運兄貴は『八重樫流』のチャートを組んでみるのも良いかもしれませんね。

◇週末になった

◇朝は何をしようか……

◇週末になりましたね。

当初の予定通りハジメくんをプールに誘いましょう。文化祭の成功で友好度は7になっているので断られることはありません。

◇『南雲ハジメ』をプールに誘ってみよう

◇「もしもし北条くん？ どうしたの？」

◇一緒にプールに行かないか誘う

◇「プール？ いいね、僕もちよつと行ってみたいって思ってたんだ。それじゃあ早速行こうよ」

◇『南雲ハジメ』とプールに行くことになった

◇問題なく誘えましたね。

それにしてもハジメくん、かなりノリが良いですね。

原作のほんへ開始時は卑屈でしたが本来はこういう性格だったんですかね？

▽プールに着いた

▽かなり大きな施設だ

「プールかあ。友達と一緒に来るのは初めてだなあ」

ハジメなだけに。(大うまギャグ)(爆笑の嵐)

という訳でハジメくんとプールにやってきました。

ちなみに、交友で遊びに誘うと一日を丸々消費します。ですがその分友好度も上がるので時間短縮に便利です。

「波の出るプールに、ウォータースライダーまであるね。取りあえず一回滑ってこよう」

どうやらハジメくんはウキウキのようですね。おっと、ここでCG回収となります。

ウォータースライダーを楽しんでいる一枚です。いやー、年相応で良いですね。

「今日は誘ってくれてありがとう。すごく楽しかったよ」

▽『南雲ハジメ』と楽しく一日を過ごした

▽『南雲ハジメ』との仲が深まった！

これで友好度は8ですね。ただ、人間パラメータと同じくここからが上がりにくくなってきます。ですがチャート通りに行けば年明けには友好度10まで行けるので問題ありません。

むしろ順調に行き過ぎているので一月ほど早く目標を達成できるまでありますめえ！

では夏休みの計画としましては…。

平日：人間パラメータを上げる

休日：交友で友好度を上げる

これで行きます。ひたすら作業なので甥の木村、加速します。

×4倍速

さて、次回ですが夏休み終了から冬休みまでを駆け抜け今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

二学期

退屈な日常パートが続くRTA、はーじまーるよー！

前回は夏休み終了まで何と4倍速を使って終わらせました。

これで地球での日常パートは1/3が終了となります。

今回は2学期開始からのスタートです。

＜夏休みが終わった……

＜今日からまた学校が始まる

長期休暇が終わった時って学校でも仕事でもそうですが、開始日が本当にあってるのか心配になる事ってない……ないですかね？

まあ、私の個人的な感想はさておいて、2学期が始まります。

＜登校中に『遠藤浩介』と出会った

「よっす北条！ 宿題はちゃんとやってきたか？ 俺は最終日に何とか終わらせたぜ」

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

2学期初日は後の深淵卿こと遠藤浩介ですね。

どうやら彼は宿題はギリギリに終わらせるタイプらしいです。私と同じですね。

＜宿題は問題なく提出できた

＜畑山先生も喜んでるようだ

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

ちなみに宿題を提出できないとしばらく放課後に補習が入って身動きが取れなくなります。だから、宿題を終わらせる必要があったんですね。

「休み明けですが、来週からテストがあります！ しっかりと勉強してくださいね！」

＜来週から定期試験だ

＜しっかりと『自習』したほうがよさそうだ……

ほもくんのモノログでは『自習』を勧めてきますが、『知識』が一定以上あればやる必要はありません。そもそも『知識』はあまりチャートには影響しないので、極端な話、試験はドベでも問題ありま

せん。

補足ですが、試験前の一週間はテスト期間と言う事で部活動は行えなくなっています。

ほもくんは帰宅部なので関係ありませんが、部活に入るチャートを作りたい兄貴は気を付けましょう。

＜昼休みになった

＜何をしようか……

＜『南雲ハジメ』と話すことにした……

「来週から試験かあ。北条くんはちゃんと勉強してる？ 僕は……あはは……」

＜あまり歯切れがよくないようだ

＜一緒に勉強しないかどうか誘ってみよう……

テスト期間は昼休みや放課後に『交友』を選んでも『一緒に勉強をする』になってしまいます。

ですが心配することなかれ、一緒に勉強することで友好度はもちろんの事、『知識』も経験値が入るのでテスト期間は非常にうま味なのです。

「実は、さっきの授業で解らなかつたところがあつただけ……」

＜昼休みに一緒に勉強した

「ありがとう、これでここは試験に出ても大丈夫そうだよ」

＜少しだけ知識が付いた……

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

さて、この週は昼休みは『一緒に勉強』を選んで、放課後と夜は街で人間パラメータを上げる流れになっています。一応ちよろつと今のほもくんのステータスを見ておきましょう。

筋力：――

体力：――

耐性：――

敏捷：――

魔力：――

魔耐：――

技能：――

勇氣：7／10（怖いもの知らず）

忍耐：7／10（修行僧）

寛容：6／10（大らか）

体力：7／10（アスリート）

疎通：1／10（口下手）

沈着：8／10（鋼の心）

知識：6／10（物知り）

魅力：5／10（磨けば光る）

良いペースで上がっていますね。

『知識』が6あるので、このまま試験を受けると大体学年順位が20位前後になると思われます。

つまり、もう十分って事ですな。

それよりもなぜ『疎通』が1のままなんでしょうかね…。

確かに『疎通』が上がるようなイベントはほとんど起きてないですが、普通にプレイしてたら今の時期で3か4にはなってるはずなんですな。

まあ、チャートの進行には関係ないと思うので、ほもくんの個性としておきましょう。

＜定期試験が始まった

＜十分な手応えを感じる！

このテキストが出てきたら10〜30位くらいですな。全然『自習』を選んでいなくてもこの程度です。まあ、普通にプレイしていたらドベを取るの逆は逆に難易度が高いので…。

定期テストの結果は次週に貼りだされるので楽しみにしておきましょう。

さて、秋のイベントとしては修学旅行があります。どうやら旅行先はランダムで決まるらしく、狙った場所に行く方法はまだ見つかっていません。

CG回収をしたい場合はセーブ&ロードを活用しましょう。CGは画面に映った瞬間にギャラリーに記録されるのでコンプリートし

たい人は頑張ってください。

＜昼休みになった

＜誰かが話しかけてきた

「北条、ちよつといいか？」

＜『天之河光輝』の誘いだ。どうしようか……

天之河師範オツスオツス！ 今日も道場を利用させてもらうのでよろしく願います！

天之河光輝によるSEKKYOUイベントは、台詞が毎回同じなのでスキップします。

＜素直に自分の非をわびた

「本当に反省しているのか？ 俺にはそうは見えない」

＜その後も天之河の説教は続いた

＜少しだけ忍耐と寛容が付いた……

もう何種類か台詞を用意できなかったんですかね？ 毎回同じやり取りとかそのうち草が生えてきそうなんです。

定期試験が終わったらまたいつものローテーションに戻ります。

昼と放課後は交友、夜は街でダーク・ファイトですね。

ほもくんもですが、不良たちも毎日欠かさずに喧嘩しに来てるんでしようか。

この人たち、季節に関わらず路地裏に入るとほぼ確実に出現しますから。

＜不良たちと喧嘩になった！

＜何とか勝てた！

＜少しだけ勇気・忍耐・体力が付いた……

『勇気』『忍耐』『体力』が7を超えたら負ける事はほぼ無くなります。

また、10回連続で勝つと『街の番長』の称号が手に入ります。

称号が手に入ったらダーク・ファイトを回避することが出来ます。それ以外に効果は無いので完全にトロフィー用の称号ですね。

＜定期試験の結果が貼り出された

＜自分の順位は18位だった

定期試験の結果は18位だったようです。ほもくんは勉強のでき

る不良のようですね。すぐオサレだと思えます。

ここで一位だったら畑山先生からお褒めの言葉がもらえたり、クラスメイトから賛辞を贈られたりします。

この時に畑山先生の友好度がギョングン上がるので、彼女を攻略したい兄貴は一年間、学年一位をできるだけ保てるようにしましう。

「そろそろ修学旅行の時期です。パンフレットを配るので各自、しっかり確認してください」

＜修学旅行は『西京マウスパーク』に行くらしい

＜10月10日から3日間のようだ

＜しっかりと準備をしなくては……

修学旅行の行き先は、『西京マウスパーク』に決まったみたいですね。

他の行き先候補としては『ハワイ』と『京都仏閣』なので、行先としては当たり前と言えなくもないです。

さて、この修学旅行ですが、誰か決めた人を誘うことは出来ず、完全なランダムで班を決められて、班ごとに固まって動くことになりました。

なので、チャートでの友好度稼ぎは修学旅行を加味していません。

ランダム要素は禿げそうになるので極力省いています。

「わー、北条くんと一緒だー！ よろしくね！」

「どうやらあなたとは同じ班のようね。折角だし楽しみましょう」

「よー北条。お前が同じ班とは俺もツイてねえな」

「言つとくけど俺は勝手に行動させてもらうぜ」

えー、同じ班になったのは谷口鈴、八重樫雫、檜山大介、清水幸利の4人ですね。

これにほもくんを入れて5人で行動することになります。

修学旅行では、同じ班になったキャラクターの友好度を大きく高めることが出来ます。

では、修学旅行のイベントを垂れ流しつつ、チャートの説明をしていきましよう。

タイトルにもあるように、このチャートはほもくんを盾役とする事を前提に組まれています。

火力に優れたキャラを並べて、ほもくんが一人で殴られている内に敵を倒すので、絶対にほもくんは戦闘不能になってはいけません。

ほもくんの市はそのままパーティの壊滅、リセットになるので育成は一切妥協しません。

また、あまりレベリングしなくても通用するビルドがあるので、それによって大幅に時間短縮することに成功しています。

＜『谷口鈴』『八重樫雫』『檜山大介』『清水幸利』と楽しい一日を過ごした

！
＜『谷口鈴』『八重樫雫』『檜山大介』『清水幸利』との絆が深まった

画面では修学旅行初日が終わった所ですね。

西京マウスパークで楽しく過ごせたようです。

ちなみに、このマスコットキャラはグロッキーマウスという二足歩行のネズミです。

修学旅行でもCG回収があるので、コンプリートしたい兄貴は例によってセーブ&ロードで頑張ってください。

今回回収できたのは、グロッキーマウスの付け耳を付けてダブルピースする谷口鈴、グロッキーマウスの人形を抱えて笑顔の八重樫雫、ジェットコースターで絶叫して顔芸をする檜山大介、青い顔をしてベンチで吐きそうになっているのをこらえる清水幸利です。

あゝ、アンタたち、ホントに仲いいわね（RU姉貴）。

＜修学旅行2日目だ

＜今日は街で自由行動らしい

修学旅行2日目は自由行動ですね。

ここでしか手に入らないアイテムもあるので、見逃さないようにしましょう。

『西京マウスパーク』の場合は『幸運のダルマ』ですね。少しだけアイテムのドロップ率を上げてくれる有用なアクセサリですが、今回のチャートにおいては活躍の機会が無いので、買いません。

また、『ハワイ』では物理クリティカル率が上がる『情熱のレイ』を、『京都仏閣』では呪いの状態異常を無効化する『安寧のお札』を入手できます。

〈『谷口鈴』『八重樫雫』『檜山大介』『清水幸利』と楽しい一日を過ごした

〈『谷口鈴』『八重樫雫』『檜山大介』『清水幸利』との絆が深まった！

2日目もこれで終了です。

ここでもCG回収があります。

ちなみに、修学旅行だけでCGの数が200以上あるので、コンプ兄貴は血反吐を吐きながら頑張ってください。私は諦めました。

〈修学旅行3日目だ

〈今日は工場見学をするらしい

修学旅行3日目は真面目な内容です。

これは多分、医薬品の工場ですね。見学とは言え衛生的な意味で人を入れても良いんですかね？

まあ、そこはゲームの都合とでもしておきましょう。細かい事は気にしない方が、精神衛生上良いでしょうから。

「私たちが普段何気なく使ってるものって、こうやって作られてるんだね」

「見た事がない機械がたくさんあるわね。あれは何に使うのかしら？」

「衛生に気い使いすぎじゃね？俺なら絶対こんなのテキストにやっちゃまうぜ」

「同じ作業ばっかで飽きねえのかな。根気強いようで羨ましい限りだ」

〈知識が少し付いた……

〈『万能薬』を手に入れた！

3日目は友好度は上がりません。

旅行先がどこでも、3日目は知識の経験値が少し入るだけです。

また、工場見学では、あらゆる状態異常を治すアイテムである『万

能薬』がお土産としてもらえます。

現代の日本に何でこんなファンタジーなものがあるんですかね…。

まあ、凧揚げ大会の参加証に崩玉×1が配られるよりかはマシだと思いましょ。

▽ 修学旅行が終わった

これで修学旅行のイベントはすべて終了です。

明日からはまたいつもの日程ですね。

2学期の行事はこれで終わりです。

体育祭？ 知らんな。どうせコロナの影響でしょ（適当）。

後は冬休みになるまで人間パラメータ上げと友好度稼ぎを繰り返します。

冬休みは12月25日から1月10日までです。地域によって冬休みの長さは違ってくるんですが、この学校は結構長めみたいですね。

それまでにハジメくんの友好度を10にしておきたいです。

今の友好度を一度確認しておきましょう。

『南雲ハジメ』	: 8 / 10	親友
『白崎香織』	: 5 / 10	友達
『天之河光輝』	: 3 / 10	知り合い
『八重樫雫』	: 6 / 10	友達
『坂上龍太郎』	: 5 / 10	友達
『谷口鈴』	: 7 / 10	親友
『畑山愛子』	: 4 / 10	知り合い
『中村恵里』	: 3 / 10	知り合い
『永山重吾』	: 5 / 10	友達
『野村健太郎』	: 4 / 10	知り合い
『遠藤浩介』	: 6 / 10	友達
『辻綾子』	: 2 / 10	知り合い
『吉野真央』	: 3 / 10	知り合い
『檜山 大介』	: 5 / 10	友達
『中野信治』	: 3 / 10	知り合い

『斎藤良樹』	: 1 / 10	知り合い
『近藤礼一』	: 2 / 10	知り合い
『相川昇』	: 2 / 10	知り合い
『仁村明人』	: 2 / 10	知り合い
『玉井淳史』	: 3 / 10	知り合い
『菅原妙子』	: 2 / 10	知り合い
『宮崎奈々』	: 4 / 10	知り合い
『園部優花』	: 3 / 10	知り合い
『清水幸利』	: 5 / 10	友達

登場人物多すぎィ！ でもこの中の大半はトータスでは空気になるので、その人たちは今回限りの表示です（無慈悲）。

ちなみに、トータスの人たちも入れると100人を超えます。確認するだけで目が疲れそう。

ほもくん、割とリア充してますね。と言うか原作での小悪党と結構仲が良くて草生える。

ハジメくんの友好度はそろそろ9になりそうですね。

冬休み開始まであと2か月。それまでに9に出来れば、クリスマスと元旦で確実に10に出来ます。

つまり、余裕ってこったあ！ これは『八重樫流』のイベントも狙っていいかもしれません。

＜放課後になった

＜何をしようか……

＜『南雲ハジメ』と話すことにした……

＜放課後に街に行かないか誘う

「僕でよかったら一緒に行くよ。買いたい本もあったからちようどいいや」

そろそろハジメくんの買った本の数が114冊を超えそうです。

半年で100冊ということは最低でも2日に1冊は読破している事になりますね。

1冊500円と安めに見積もっても5万円使ってることになるんですが、お小遣いとか大丈夫なんですかね？

〈『南雲ハジメ』と楽しく放課後を過ごした

〈『南雲ハジメ』との仲が深まった!

〈『南雲ハジメ』との関係が『心の友』になった!

おっ、これで友好度9です。これにてハジメくんの友好度稼ぎは終了ですね、お疲れちゃーん。

後はクリスマスと元旦に『友好』で誘う事により友好度を10に出ます。

「……ちよつといいかな。どうしても話したいことがあるんだ」

〈『南雲ハジメ』に呼び止められた。緊張の面持ちだ……

〈話を聞くことにした

そしてようやく絆イベントが来ましたね。

以前に友好度が6以上になれば、自分をさらけ出してくれるようになるイベントが確率で起こると説明しましたが、今回の交友でその絆イベントをようやく引き当てました。

「実は僕、漫画とかゲームとかラノベとかが好きで。世間ではその、……いわゆる『オタク』って呼ばれるような人なんだ」

知ってた。100回以上一緒に本屋に買い物に来てるので、気付かない方がおかしいんだよなあ。

原作ではそれが原因で友達0人な上、イジメに遭ってたしね。

とりあえずこのイベントでは、全肯定マシーンになっておけば大丈夫です。

〈知ってる

「あつ、そうなんだ……。それで、その…、北条くんは僕を軽蔑したりしないの?」

オタクを軽蔑するのはジジババとメスだけだからね(酷い偏見)。

かくいう私もオタクでしてね。どちらかと言うと軽蔑される側です。

〈趣味は人それぞれだ

「軽蔑する理由にならない、か……。でも、その、僕のせいで迷惑が掛かっちゃわないかな……?」

人は誰でも他の誰かに迷惑を掛けながら生きてるって、それ一番言

われてるから。

何が嫌いかより、何が好きかで自分を語れよ!!!

〈胸を張って好きと言えればいい

「！・ はは、確かにその通りだね。好きなものはしょうがないんだし、いつそ開き直っちゃえばいいか。……ああ良かった、実はこの事で嫌われないか、すごく不安だったんだ」

〈どうやら悩みは解決したようだ……

「ありがとう北条くん、やっぱり相談して良かったよ。これからもよろしくね」

〈『南雲ハジメ』との絆の高まりを感じる……

〈『持つべきものは理解者』の称号を手に入れた！

工事完了です…（達成感）。

これで放課後のハジメくんコミュは終了となります。

絆イベントは主役級の登場人物に限定して起こるイベントで、正しい選択肢を選ぶと称号が手に入ります。

そしてこの絆イベントが『特別な関係』になるために必須なのです。

『特別な関係』になると関係性が同性なら『魂の絆』に、異性だと『恋人』になります。

ちなみに、『恋人』は複数人作れます。

修羅場を楽しみたい兄貴は頑張って友好度を上げてみてください。

さて、今回は冬休みから春休みまでイベント盛りだくさんでお送り今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

冬休み〜三学期

すいませーん、本編までまだ時間かかりそうですねーなRT
A、はーじまーるよー!

前回は2学期が終わるところまで進めました。

今回は冬休みからのスタートです。冬休みのイベントはクリスマスと元旦の2つとなっております。

好きなキャラを誘うことが出来て友好度もガッツリ稼げますが、人間パラメータは上がりません。

孤独に強さを追い求めるのであれば、一人ぼっちのクリスマスと元旦を過ごしましょう。

さて、まずはクリスマスですね。

異性を誘えばイチヤイチャパラダイス出来ませんが、メスなんて必要ねえんだよ!

ちなみに、ここでもCG回収があります。

各キャラごとに同性バージョンと異性バージョンの2種類が用意されていますので、全部で48種類あります。

例によってコンプリートしたい兄貴はセーブ&ロードで血反吐を吐いてください。

余談ですが、CGをコンプリートすると『数えきれない永遠の思い出』のトロフィーがもらえますが、取得率0.1%となっております。

コンプリートした人は一体このゲームに何時間費やしたんでしようか…。ヤバイですね☆

〜今日はクリスマスだ

〜誰かと過ごしてみるのもいいかもしれない

クリスマスは、朝と昼は自由行動ですが、夜は誰かを誘えばそのキャラとのコミュが強制的に発生します。当然と言えば当然ですが、朝か昼の自由行動でクリスマスプレゼントを買っておきましょう。

という訳でハジメくーん、遊びましょうー!

〜『南雲ハジメ』を誘うことにした

「もしもし北条くん? どうしたの?」

▽クリスマスと一緒に過ごさないか誘った

「うん、僕でよければ。あ、そうだ。父さんと母さんがクリスマスパーティーをするらしいから、北条くんも家に来て参加する？」

▽参加させてもらおう

「うん分かったよ、それじゃあ父さんと母さんにも言っとくね。夜の8時から始める予定だから、それくらいにまたね」

これで万事OKだわ。後はクリスマスプレゼントを買いに行くだけですね。

クリスマスイベントは各キャラごとに固有のものがあるのですが、私が個人的に一番好きなのは清水幸利のイベントですね。

いわゆるナンイベントなのですが、クリスマスで気が大きくなっている清水幸利のイキリっぷりとか、その後のオチとかが、選ばれし者になれなかった彼をよく表現できていると思いました。

▽クリスマスプレゼントには何を贈ろうか……

さて、話を戻しまして、クリスマスプレゼントですね。

ハジメくんの場合は『最高級ブックカバー』を送ると喜んでくれますので、街のショッピングモールでこれを購入しましょう。

▽『最高級ブックカバー』を手に入れた！

後は夜になるのを待つだけです。

昼は適当に流しますね…。街の散歩でもしておきましょう。

▽夜になった

▽『南雲ハジメ』との約束があるので行かなくては……

画面が暗転して次の瞬間にはパーティー会場に到着です。

ここがあああの男のハウスね。

「いらっしやい、ちよつと騒がしいけど楽しんでいてね」

「よく来てくれた！ ハジメの友達である君なら大歓迎だ！」

ハジメくんの両親ですね。本編では全然出番がなく、後日談になってようやく出番が回ってきた人達です。

細かい事は忘れましたが、確か父が社長で母が漫画家でしたっけ？

はえー、すっごい裕福ですね…。

ちなみに、ほもくんの親は設定が無いので何をしてた人かは全く

分かりません。

▽クリスマスプレゼントを渡した

「これってもしかして、すごく良いやつなんじゃ…。ありがとう、大切に使うよ。これで外でラノベとかを読んでても恥ずかしくないね。あ、そうだ、これは僕からのプレゼントだよ」

▽喜んでくれたようだ……

▽クリスマスプレゼントとして『設計資料集』を手に入れた！

草。ハジメくん、そういうところやぞ。

普通高校生が資料集をプレゼントで渡されても困惑するだけなんだよなあ…。

でも後の重要アイテムなので、ありがたくもらっておきます。

▽楽しいクリスマスパーティーを過ごした

▽かなり仲が良くなった気がする……

楽しい宴会でしたね…。

多分、色々と楽しい会話があったとは思いますが、ほもくんのモノログ一行だけで終わりです。

容量とかの関係もあるから仕方ないね。

ともあれ、これでクリスマスイベントは終了です。

後は元旦に誘えば友好度は10になります。

元旦までは大晦日とかのイベントがありますが、これは主人公に家族がいる場合だけです。

なので、ほもくんは自由行動となります。

年末年始はダーク・ファイトをして過ごすとしましょう。

タフって言葉はほもくんのためにあるのです。

▽不良たちと喧嘩になった！

▽何とか勝てた！

▽少しだけ勇気・忍耐・体力が付いた……

お前ら年末もいるのか…。(困惑)。

もしかしたら、ほもくんと同じく親がいない可能性が微レ存…？

「くそっ、参った！ あんた強エな…！ これからはあんたが番長だ！」

〽どうやら不良たちに認められたようだ……

〽『街の番長』の称号を手に入れた！

そしていつの間にか10連勝していたので『街の番長』の称号ゲットです。

順調に最強主人公の道を歩んでいますね。

気になったんですけど今の時代に番長って存在するんですかね…

？

そしてようやく年が明けたので初詣にハジメくんを誘います。

〽今日は元日だ

〽何をしようか……

〽『南雲ハジメ』を初詣に誘うことにした

「もしもし北条くん？ どうしたの？」

〽初詣に行かないか誘う

「初詣かあ。うん、分かった。一緒に行くよ。準備ができたなら有触神社に集合だね」

無事に誘えたので、朝は初詣です。昼と夜は自由行動になります。

どうでもいい話ですが、元日は1月1日の事を意味して、元旦は元日の朝の事を意味するそうです。

さて、新年迎えてのステータス確認をします。

筋力：――

体力：――

耐性：――

敏捷：――

魔力：――

魔耐：――

技能：――

勇気：9／10（英雄）

忍耐：8／10（修行僧）

寛容：7／10（人情家）

体力：9／10（メダリスト）

疎通：2／10（口下手）

沈着：9／10（不動の心）

知識：7／10（博識）

魅力：6／10（磨けば光る）

順調に上がってますね。これなら4月までには十分間に合います。『勇氣』は目標達成、後は『体力』『沈着』を1、『忍耐』を2上げれば良いだけです。

「明けましておめでとう。うわっ、やっぱり人が一杯いるね」

＜『南雲ハジメ』と有触神社で初詣を行った

「あ、おみくじも売ってるね。北条くんは引く？」
初詣ではおみくじが引けます。

大吉、中吉、小吉、末吉、凶、大凶の6つがランダムに出ます。

大吉、中吉であれば人間パラメータが上がります。

何上がるかはランダムなので、これもチャートでは考慮していません。

大凶を引いても特にデメリットは無いので引いてしましましょう。

＜おみくじを引いた

＜『中吉』だった！

＜何か良い事がありそうだ！

＜『寛容』『魅力』の高まりを感じる！

＜『魅力』が『人気者』になった！

おっ、これはラッキーですね。

でも『寛容』『魅力』はあまりチャートと関係ないので、むしろまず味かもしれません。

「僕は大吉だったよ。もしかしたら今年はいいい年になるかも。それじゃあ参拝しようか」

＜一緒に参拝した

＜良い年になりますように……

＜『南雲ハジメ』との仲が深まった！

これにて友好度10は達成です。

あとは『交友』で誘えば『特別な仲』になれます。

ちやーんとチャート通りに進めてますね（激うまギャグ）。

後は3学期が始めるまで人間パラメータを上げる作業をします。倍速。

さて、今更ですがハジメくんの友好度を上げた理由を説明しましょうか。

今回のチャートでは、ハジメくんはサポートとして欠かせない存在になっていきます。

以前、友好度が高ければパーティの控えメンバーに入れた時に補助効果を使ってくれると説明しましたが、ハジメくんの補助効果は『オートアイテム』です。

あらかじめ条件を設定しておけば、戦闘中に行動消費なしで回復薬とかを使ってくれるようになります。

そして友好度が高ければ高いほど細かく条件を指定できるようになります。

『主人公のHP』が『50%を切った時』に『ヒールポーション』を使うといった感じですよ。

これによりパーティに回復役を入れなくて済むようになり、その分火力が大幅に上昇する事となります。

回復のために行動をしなくてもいいのは非常に大きいですね。

ちなみに、奈落ハジメくんだと『敵単体に防御力無視のクリティカル攻撃』となります。

ただし、これは装備の攻撃力に影響されるので、RTAではしよっぱい威力になってしまいます。ほとんど初期装備で駆け抜けるからしょうがないね。

なお、通常プレイではバランスブレイカーな模様。

装備を最強にすればラスボスのHPを一発で半分持って行きます。ゲームバランス壊れちゃうー！

～冬休みが終わった……

～今日からまた学校が始まる

さて、3学期の開始です。ここからは人間パラメータを出来る限り上げて、余裕があれば誰かしらの友好度を上げます。

あと残っている行事はバレンタインとホワイトデーですね。

定期試験もありますが、今のほもくんであれば乱数次第では10位以内に入れます。

話は戻ってバレンタインですが、男性主人公の場合は『友達』以上の女性からチョココレートがもらえます。

女性主人公なら逆ですね。『友達』以上の男性にチョココレートを贈る事になります。

『友達』以上なのは白崎香織、八重樫雫、谷口鈴、畑山愛子、宮崎奈々の5人ですね。

ほものくせに5つもチョコをもらうんですね、ふーん。

視聴者兄貴もご存じだとは思いますが、ホワイトデーがバレンタインにチョコをもらった女性にお返しを贈るイベントです。

個別にイベントが発生して、異性の友好度がかなり稼げるイベントです。

ですので、ハーレム希望兄貴はバレンタインまでに異性の友好度をしっかりと5以上に上げておきましょう。

イベント当日までは延々と同じような光景が続くので超スピードでお送りします。

＜バレンタインの日だ

＜学校がにわか騒がしい……

と、いう訳でバレンタイン当日です。

勝ち組と負け組が決まる運命の日ですね。ちなみに私は敗北者でした。

「あつ、北条くんおはよー！ 待ってたよー！」

＜『谷口鈴』に呼び止められた

トップバッターは谷口鈴ですね。基本的に友好度の高い順から渡しに来ます。

「はいっ、どうぞ！ チョコレートあげるから大切に食べてね！ 義理か本命かは……内緒だよっ！ どっちか考えてみてね！」

＜チョココレートをもらった

＜ホワイトデーに何か返さなければ……

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

うーん、この思わせぶりな態度。これは勘違いしてしまう野郎が続出しますね。騙されんぞ。

そして残念ですが、チョコレートはアイテムとして使い道がありません。

使用自体は出来るのですが、味の感想がモノログで流れて終了です。

一応、各キャラクターごとに感想は違うので、キャラの個性を出すのに一役買っていると思います。

「おはよう、北条くん。ちよつといいかしら？」

〈『八重樫雫』に呼び止められた

「普段からお世話になってるし、その、私には似合わないと思ったんだけど。お礼という訳じゃないんだけど、受け取ってくれないかしら」

〈チョコレートをもらった

〈ホワイトデーに何か返さなければ……

〈少しだけ仲良くなれた気がする……

ちよつと恥じらいながら渡してくる八重樫姉貴かわいいっすね。

教室で堂々と渡してるんですが、それは恥ずかしくないんですかね

……?

「おはよう。あつ、ちよつといいかな？ 渡したいものがあるんだけど……」

〈『白崎香織』に呼び止められた

「はい、これをどうぞ。いつも仲良くしてもらってるから、そのお礼として。受け取ってね」

〈チョコレートをもらった

〈ホワイトデーに何か返さなければ……

〈少しだけ仲良くなれた気がする……

割と味気ないっすね。まあ、白崎姉貴だとこれが普通だと思いません。

恋人同士ならもっと甘い会話があるんですが、友達止まりだから仕方ないね。

「あ、おはよう。そうそう、今日はアレの日だったよね」

◇『宮崎奈々』に呼び止められた

「これ。一応その、友達だし。渡さないのも薄情かなって。だからほら、受け取って」

◇チョココレートをもらった

◇ホワイトデーに何か返さなければ……

◇少しだけ仲良くなれた気がする……

原作では出番あったっけ？ な宮崎姉貴です。

一応愛ちゃん親衛隊に所属してたはずですが私は記憶にありません。

「北条くんおはようございます。バレンタインだからって浮かれてませんか？」

◇『畑山愛子』に呼び止められた

「北条くんがいつも頑張っている事を先生はちゃんと分かっているのです。ですので、これは先生からのご褒美です。……変な意味は無いので勘違いはしちやいけませんよ？」

◇チョココレートをもらった

◇ホワイトデーに何か返さなければ……

◇少しだけ仲良くなれた気がする……

ラストは畑中先生ですね。教師が生徒に堂々と教室でチョコを渡すのはまずいですよ！

ほもくんは未だにダーク・ファイトをしてるんですけど、先生は諦めたんですかね？

以上、5人分がほもくんのバレンタインイベントでした。

後はホワイトデーにお返しをして、3学期のイベントは終了です。それまではいつも通りなので、ぱぱっと倍速します。

◇不良たちと喧嘩になった！

◇問題なく勝てた！

◇少しだけ勇気・忍耐・体力が付いた……

◇『忍耐』『体力』の高まりを感じる！

◇『忍耐』が上がり『タフガイ』になった！

◇『体力』が上がり『人体の極致』になった！

倍速中に『体力』が10になって目標達成です。

『忍耐』『沈着』がもう1つ上がれば人間パラメータを上げは終わりですね。

…。
しつかり計算はしているものの、ガバが起こらないか心配ですね。

ともあれ、ホワイトデーのイベントです。

ホワイトデーでは様々な選択肢から何を返すのか自分で選べます。

それぞれに好物があるので、それを渡せば友好度の上昇にボーナスが付きます。

＜今日はホワイトデーだ

＜しつかりとお返しをしなくては……

一律で同じものでも良かったのですが、折角のイベントですし、ちゃんと好物を渡してあげる事にします。

お返しを返す時も好感度の高い順です。

＜『谷口鈴』に話しかけた

「おはよー！ なになに、私に何か用？」

＜ホワイトデーのお返しに『焼き菓子の詰め合わせ』を渡した

「わっ、これってもしかしてホワイトデーの？ ありがとう、覚えてくれてたんだ！ 実は前に見た時にちよつと気になって、お返しでもらえるなんて嬉しいな。大切に少しずつ食べるね！」

＜どうやら喜んでもらえたようだ

＜『谷口鈴』との仲が深まった！

素直に喜んでもらえると贈った甲斐があるってものですね。

＜『八重樫雫』に話しかけた

「あら、おはよう北条くん。どうしたのかしら」

＜ホワイトデーのお返しに『クッキーアソート』を渡した

「これって…。そう、今日はホワイトデーだったわね。ありがとう、すごく美味しそうね。稽古の合間にでもいただくわ」

＜どうやら喜んでもらえたようだ

＜『八重樫雫』との仲が深まった！

稽古の合間にクッキーって、口がパサパサになりそうですね…。

ちゃんと水分も一緒に摂ってくれよなー。頼むよー。

〈『白崎香織』に話しかけた

「北条くん、私に何か用かな？」

〈ホワイトデーのお返しに『バームクーヘン』を渡した

「お返しなんて別に良かったんだけど…ありがとう、それじゃあ遠慮なく受け取るね」

〈どうやら喜んでもらったようだ

〈『白崎香織』との仲が深まった！

普通の反応ですね。と言うかほもくんのお返しが一々高そう。

地球パートではお金の概念が無いのですが、ほもくんの経済状況はどうなってるんですかね。

一軒家に住んでるし貧しくもないみたいなので、お金に困ってはいないみたいですが、その辺の背景が不明瞭です。

〈『宮崎奈々』に話しかけた

「おはよう。朝からどうしたの？　もしかして宿題やるのを忘れたとか？」

〈ホワイトデーのお返しに『チョコレートのアラカルト』を渡した

「あ、そう言えばホワイトデーだった。今まですっかり忘れてた。しかもこれ、私が好きなのだ。ありがとう、勉強しながらの糖分補給に使わせてもらおうわね」

〈どうやら喜んでもらったようだ

〈『宮崎奈々』との仲が深まった！

ホワイトデーにチョコを贈るってありなんですかね。

まあ、渡された本人は嬉しそうなので良しとしましょう。

ラストは畑中先生ですね。

〈『畑山愛子』に話しかけた

「おはようございます北条くん。先生に何か用ですか？」

〈ホワイトデーのお返しに『瓶入りプリン』を渡した

「わあっ！　これってあの有名なパティシエの…はっ！　こ、こほん！　…北条くん、ありがとうございます。先生想いの生徒を持って私は幸せです」

〈どうやら喜んでもらったようだ

〈『畑山愛子』との仲が深まった！

一番年長なのに誰よりも子供っぽい反応ですね。だから生徒に愛されているんですけど。

好物を渡すと、必ず友好度が1以上は上がるようになっていきます。なので、友好度が上がりにくい9から10は、このイベントで上げてやると効率が良いです。

これにてバレンタインおよびホワイトデーのイベントは終了です。後は終業式、卒業式まで特に何もないのでまた倍速していきます。

〈ゲームセンターでシューティングゲームをした

〈『沈着』の高まりを感じる！

〈『沈着』が上がり『明鏡止水』になった！

そして、これで『沈着』も10になり目標達成です。

先輩方の卒業式は特筆すべきイベントではないのでキャンセルだ。「それじゃあ、これで一年生最後の日は終わりです。宿題とかはありませんが、しっかりと復習はしてくださいね？ それと、これからは先輩になるんですから、先輩と呼ばれるのにふさわしい行動を心がけてください。あとはですね——」

〈しばらく畑中先生の訓示が続いた

〈あつという間に一年が終わった……

〈明日から春休みだ……

後は春休みの間に『忍耐』を10にして、残った時間は適当に過ぎませう。

2年生になってもクラスの面子や担任は同じです。

この辺りはゲームの都合ですので、細かい事は気にしない方が良いでしょう。

さて、今回はついに本編開始です。トータスに乗り込んでやりたい放題やって今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

春休みくートータス召喚

ナイフもランプも鞆に詰め込む暇がないRTA、はーじまーるよー！
前は一年終了時まで進めました。今回は春休みからです。
春休みは3月25日から4月5日までの12日間です。これだけあれば『忍耐』も目標に届かせることができます。

『忍耐』が一番上がるのは『ボランティア活動』ですね。

朝と昼の時間を使って社会奉仕活動をするので、『忍耐』『体力』にかなりの経験値が入ります。

画面を見る限り、ゴミ拾いとか、老人ホームで話し相手をしたりとかしてみたいですね。

春休みは朝と昼は『ボランティア活動』を、夜は適当に交友でもしましょう。

＜『ボランティア活動』を行った

＜日が沈むまで根気強く街の清掃を行った……

＜少しだけ忍耐が付いた……

すでに前回は『体力』はカンストしているのでこれ以上は上がりません。

だからほくんのモノログでも表示されていないのです。

さて、夜の時間ですね。春休みは何故か夜にも交友を行うことができます。

ですが、交友の前に『忍耐』を上げた方が良さそうですね。ここは街に出かけましょう。

＜街を散歩することにした

「あつ、北条くん！ こんな時間に奇遇だね！もしかしてお散歩かな？ だったら一緒に行こっ！」

＜たまたま出会った『谷口鈴』と一緒に過ごした

＜少しだけ疎通・魅力が付いた……

＜『谷口鈴』との仲が深まった！

＜『谷口鈴』との関係が『心の友』になった！

また君か、壊れるなあ。まだ八重樫姉貴の方が『八重樫流』のイベントが起こる可能性があるのどうま味でしたね。

良い子は寝る時間だから帰って、どうぞ。

と言うか谷口姉貴も友好度9まで来てたんですね。

「ねえ、北条くん。私たちつてもう結構な付き合いだよね？」

＜『谷口鈴』に呼び止められた。少しだけ真剣な表情だ……

＜話を聞くことにした

あ、谷口姉貴の絆イベントですね。

真剣な表情と言ってもシリアスな内容ではないので身構えなくとも大丈夫です。

ちなみに、絆イベントで一番重いのは中村恵里です。次点で天之河光輝ですね。

二人とも『特別な仲』になるとやべー奴と化すので、確かめてみたい兄貴は是非このゲームを買ってみてください。

折角ですので画面右枠に絆イベントを垂れ流しておきます。一緒に見てみましょう。

「実はね。私って、男の子とここまで仲良くなったのは北条くんが初めてなんだ」

思わせぶりな言葉は思春期の学生に致命傷になるのでやめろオ！

谷口姉貴はどの選択肢を選んでも大丈夫です。選びたいものを選びましょう。

＜それは知らなかった

「うん、それでね。ここまで仲良くなったのに、ずっと『北条くん』って呼ぶのも何だかもやもやするんだ。どうすればいいかな？」

ここの選択肢は『あだ名を付ける事を提案する』と『名前で呼ぶことを提案する』の二択です。

以降は谷口姉貴に選んだ方で呼ばれることになります。

＜『あだ名を付ける事を提案する』

「あつ、それ良いかも！ えーっと、それじゃあ…『まもるん』なんてどうかな!？」

＜じゃあ自分も『リンリン』と呼ぶ事にしよう

「！ な、何だか男の子にあだ名で呼ばれるところばゆいね…」

余談ですが、あだ名を選んだ場合は、名前のひらがな2文字を繰り返すか、名前のひらがなの最後の文字に対応してくりん、くるん、くつちなどを組み合わせるかの、どちらか2通りの方法で決められます。

今回の『まもる』の場合であれば、前者であれば『まもまも』、後者であれば『まもるん』『まもっち』などになります。

これを利用して主人公の名前を『クロコダイ』にすれば、奈落に落ちるイベントで谷口姉貴に「ク、クロコダイーーン!!」と言わせることができます。ぐわあああーっ!!

＜今までより踏み込んだ関係になれそうだ

「まもるん！ これからもずっと仲良しでいようねっ！」

＜『谷口鈴』との絆の高まりを感じる……

＜『もう一步踏み込んで』の称号を手に入れた！

谷口姉貴の絆イベントはこれで終了です。

じゃあ、また倍速で流しますね…。

＜『ボランテティア活動』を行った

＜日が沈むまで根気強く街の清掃を行った……

＜『忍耐』の高まりを感じる！

＜『忍耐』が『不撓不屈』になった！

そして、これで『忍耐』が10になり、日本パートでの目標は全て達成でございます。

チャート通りに行けると組んだ甲斐があるというものです。

結局『八重樫流』のイベントは起きませんでしたね。やはりランダム要素はクソなんだってハッキリわかんただね。

＜春休みが終わった……

＜今日から2年生だ！

今日から高校2年生になり、ほもくんも先輩になりますが、それはたった1週間の間です。

来週の月曜日に旅立つので、その間だけの天下です。明智光秀の半分しかありませんね…。

＜入学式が終わった

〓後輩たちの見本となれるように頑張ろう

〓教室に移動した……

「またあなた達の担任になれて先生は嬉しいです。今年もガンガン行きますので、一緒に頑張りましたよね！」

そして、ゲーム的な都合でクラスメイトや担任は一年の時と同じです。

初日が終わったら1週間後まで強制スキップされます。

あくまで日常パートは2年生になるまで、というわけですね。

〓あつという間に1週間が過ぎた

〓日曜が終わり今日からまた学校が始まる……

このように、ほもくんの僅かなモノログだけで終了です。

さて、ここからはスーパージョウタイム（SST）です。

当然のように午前の授業は飛ばされて昼休みに場面は移ります。

〓昼休みになった

〓いつも通り教室が騒がしい

ハジメくんが白崎姉貴に話しかけられて、それを天之河師範に難癖付けられている場面ですね。

この世界線のハジメくんは割とスペック高そうなので、白崎姉貴とは十分釣り合うような気がします。

あつ、そうだ（唐突）。

白崎姉貴はトータスに召喚されるまでに友達以上にならないと攻略不可になるから気を付けようね！

現在は操作不可能なのでほもくんは眺めているだけです。

〓不穏な気配がする……

〓突如、『天之河光輝』の足元に魔法陣のようなサークルが出現した！

何の光!?! というわけで団体一名様ご案内です。

画面が暗転すると、そこは荘厳な神殿だった（文豪並感）。

「ようこそトータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は聖教教会にて、教皇の地位に就いておりますイシユタル・ラングバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

第一村人発見！ このローマ法王みたいな恰好をした、若干ロジカル口調が入ったおじさんは、狂信者です（直球）。

ここからはしばらく原作通りの会話になるので、倍速します。簡単に話を纏めると、3行で終わる内容です。

エヒト「このままじや人類滅びそうゴ……。せや、異世界から勇者を召喚すればええやん！」

人間「やったぜ。じゃけん、（戦争に）行きましようね〜」

勇者「しようがねえなあ。皆もそれでええよね？ ね？」

だいぶ端折りましたが、こんな感じですね。

トータスでは魔族を倒して人類を救済しなければ地球には帰れません。

まあ黒幕はウエスカーなんですけどね、初見さん。

どうやら、ほもくんたちは『ハイリヒ王国』という国で面倒を見てもらえるみたいです。

一生面倒見てもらいたいけどなく俺もなく。

そして、ここで新しくコミュできるキャラが追加になります。

この国の王子と王女である『ランデルⅡSⅡBⅡハイリヒ』と『リアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ』の2人ですね。この2人も、当然攻略可能です。

リアーナの方はともかく、ランデルの方は攻略すると完全におねシヨタになりますね…。

ここからの予定ですが、ハイリヒ王国で2週間訓練をした後、『オルクス大迷宮』に向かうことになります。もうしばらくは自由に動かせませんが、それもあと2週間の辛抱です。

2週間の間は、ようやく戦闘が解禁されるので、レベリングをします。

初戦闘までどう頑張っても6時間以上かかるとかゲームとしてどうなんですかね…。

さて、最重要場面がやってきました。

ステータスプレートを受け取って、ついにほもくんのステータスの御開帳ですね。

これでダメだったら最初からやり直しになりますので、祈りましよう。

天職：守護者

level：1

筋力：150

体力：200

耐性：200

敏捷：100

魔力：50

魔耐：200

技能：――

勇気：9／10（英雄）

忍耐：10／10（不撓不屈）

寛容：8／10（菩薩）

体力：10／10（人体の極致）

疎通：2／10（口下手）

沈着：10／10（明鏡止水）

知識：7／10（博識）

魅力：7／10（カリスマ）

ビューティフォー……。完璧ですね。

重要なステータスは『体力』『耐性』『魔耐』の3つです。

性別を男性に、特徴に『我慢強い』『冷静沈着』にすれば、このように防御力マシマシになります。他のステータスは飾りなので、極端な話1とかでも問題ありません。

天職の『守護者』ですが、これは防御特化のステータス成長とスキルを覚える職業です。

これが最初に名前を『北条衛』にした理由になります。

実はこの天職、主人公の名前に左右される場合があるようなのです。

例えば『島津』とか『下間』とかにすると攻撃特化の天職を引き当てやすくなったりします。

『北条』と『衛』の場合は防御特化の天職を引き当てやすい名前となっておりませぬ。

とは言っても確実に引き当てる事ができるわけではなく、あくまで『引き当てやすくなる』程度です。ポケモンで言うところ、ダメージ計算の時に高乱数が出やすくなるような感じですね。

ひとまず、最良のほもくんは用意できましたので、最大の山場は越えませぬ。

技能がないじゃないか！と思われるかもしれませんが、これは原作からゲームに落とし込んだ時に変更された点ですね。

技能は、レベルアップした時に得られるアビリティポイント（以下AP）を使用して習得できます。

これは後で、実際にAPを振りながら説明します。時は流れて、翌日の朝です。

この日から2週間、朝、昼、夜が自由行動になります。

レベリングするもよし、コミュするもよしです。実際にハジメくんも図書館で読書してませぬからね。

コミュをする必要は無いのでレベリングをしましょう。レベリングは『訓練施設』で行えます。

中央に突っ立っている『メルド・ロギンス』に話しかければOKです。

「おつ、訓練していくのか？」

「訓練をお願いする」

「分かった。おーい、そのやつ！ 相手をしてやれ！」

相手は騎士団の一般騎士くんです。おつすお願いしまーす！ というわけで、ほもくんの初戦闘です。

本作のバトルシステムは、コマンド操作式です。

ドラクエのように『決められた1ターンの間』に素早さ順で行動するのではなく、『敏捷』のステータスが高ければ高いほど、次の行動順が回ってくるのが早くなります。

早い話がf a i l c o mの軌跡シリーズみたいな感じですね。

コマンドは『攻撃』『防御』『スキル』『魔法』『道具』『逃走』の6つ

です。

今はスキルも魔法も道具もないので、攻撃と防御しか選べません。一般騎士くんのステータスはプレイヤーより低めに設定されているので、攻撃を選んでおけば問題ないでしょう。

戦闘は一定の広さのフィールド内で行われます。攻撃の時は自身の武器が届く位置まで移動するので、範囲攻撃を持つ敵との戦闘では、キャラクターの立ち位置にも気を配る必要があります。

守護者の初期武器は剣と盾なので、ほもくんは剣が届く距離に移動して攻撃します。

一般騎士くんの行動順が回ってきて攻撃されますが、ほもくんは防御が高いので全然ダメージが入ってませんね。

ペチペチと殴り合って無事勝利です。

～戦闘に勝利した！

～少しだけ強くなれた気がする……

そしてレベルアップですね。これでレベルが2になりました。

APも1ポイント入ったので早速振っていきたいと思います。

メニュー画面で『アビリティ』のコマンドを選ぶと技能習得画面に移れます。

守護者 AP : 1

物理耐性	: 0 / 10
属性耐性	: 0 / 10
状態異常耐性	: 0 / 10
盾防御	: 0 / 10
盾反撃	: 0 / 10
自動回復	: 0 / 10
不屈	: 0 / 10
背水	: 0 / 10
剣術	: 0 / 10
槍術	: 0 / 10
体力増強	: 0 / 10
防御術	: 0 / 10

めっちゃ多いです。全部で30くらいあります。

APはレベルアップすると1増えますが、レベルを最大にしても当然、全部は振り切れません。

なので、自分の組みたいビルドを考えてAPを割り振る必要があります。

ただ、今回はあらかじめビルドは考えてあるので、迷わず『盾反撃』に振ります。

盾反撃は、物理攻撃を受けた時に『自身の防御力を参照にした物理攻撃』で反撃する技能です。

これが、今回この守護者でのタンクチャートを選んだ理由です。では、昼になったのもう1回、戦闘訓練を試みましょう。

先ほどと同じようにほもくんが一般騎士くんを攻撃しますが、ダメージはさつきと同じくらいですね。

そして相手の行動順でほもくに攻撃してきます。

「ぐわあああーっ!!」

＜戦闘に勝利した！

＜少しだけ強くなれた気がする……

ヴォーツエー。盾反撃でさつきの3倍くらいのダメージが入ってますね…。

これこそがこのゲームの対物理最強ビルドの一角とも言われる『盾反撃守護者』です。

ハピナス並みのHPを持ったツボツボが、カウンターでボディプレスをしてくるようなものと言えばヤバさが伝わるでしょうか。

ただし、このビルドにも明確な弱点がありまして、盾反撃が反応しない魔法攻撃をしてくる敵と、盾反撃が届かない間合いから攻撃してくる敵、あとは物理攻撃無効の敵には滅法弱いです。

そう言った相手には、本当の意味でただの肉壁と化します。

なので、パーティはほもくんの穴を埋めるようなメンバーで組む必

要があります。

イカれたメンバーの紹介はまた後ほど、本人が加入した時に行います。

これから2週間の間はレベルを10まで上げる事が目標です。

止まるんじゃない、犬のように駆け巡るんだ！

レベル10にまでなれば天之河師範の攻撃もほぼ効かなくなりますので、彼に模擬戦を申し込んで、それを目安としましょう。

さて、それでは2週間をパパッと終わらせてオルクス大迷宮に今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

幕間：持つべきものは理解者

南雲ハジメは、いわゆるオタクである。

ゲームや漫画、ライトノベルなど、一般人から見た『オタクが好き
そんなもの』をこよなく愛している。それはゲーム会社で働いている
父親だったり、漫画家として連載を持つている母親の影響もあろう
が、そこには彼自身がそう言ったサブカルチャーが好きであるという
確固とした意志があつてのことだ。

だが、同時にハジメはしっかりと常識を持ち合わせている人間でも
あつた。

自分の趣味が世間一般的に白い目で見られるであろうことは理解
していた。

だからこそ、こうしてひた隠しにして過ごしてきた。

幸い、中学校の時は問題なく過ごせた。友達こそでできなかったもの
の、誰かから特に嫌われると言う事もなく。いわゆるボツチであつた
が、ハジメとしては自分の趣味に没頭できるので、むしろ好都合だつ
た。

(高校も今まで通り何事もなく過ごせたらいいなあ)

高校で配属されたクラスにはクセの強そうな人がいたが、上手くや
り過ごせば3年間平和に過ごせると考えていた。そうして初日をう
まく乗り越えて、問題なく空気になれそうだったので油断していたの
だ。

運よく窓際の席を手に入れることが出来たハジメはその日、まだ高
校生活2日目だというのに自分の趣味に勤しんでいた。平たく言え
ば、ラノベを読んでいた。

当然、ブックカバーは付けてあるので、後ろから覗き込まれなけれ
ば自分の趣味がバレることは無いだろう。

クラスメイトはすでにいくつかのグループを作っていたが、ハジメ
には関係のない事だった。

そのまま教室の喧騒を右から左に流しながらページをめくる。

「…少しいいか」

ハジメの反応は速かった。声が聞こえた瞬間、音を立てないように一瞬で本を閉じて、丁度挿絵が載っているページを見ていたのを隠し、何事もなかったかのように振舞う。

「えっ、もしかして僕？　ご、ごめん、本に夢中で気付かなかったよ」
本の中身が見られていませんように、自分の趣味がバレていませんように、と祈りながら愛想笑いを浮かべて声のした方に振り向き、そこでハジメは固まった。

「……」

そこには、偉丈夫が立って自分を見下ろしていた。

表情がなく、何を考えているのか分からない。無言で見つめられると威圧感がものすごかった。

（ま、まさか怒ってる？　もしくはラノベの挿絵が見えちゃったのかな？　これってかなりマズいんじゃない？　目を付けられちゃったのかな）
背中に冷や汗をかきながらその偉丈夫と見つめ合い、やがて最悪の想像が頭に浮かんでくる。

たつぷりと10秒ほど経って、二人の間にある沈黙を破ったのは偉丈夫の方だった。

「…北条衛」

声量はさほど大きくなく、教室の喧騒に掻き消されてしまいそうな大きさではあるが、不思議と耳に入ってくる声だった。

「北条くんだね。僕は南雲ハジメ。これからよろしくね」

内心はビクビクしながら、それをおくびにも出さずに自身も名乗り返す。

北条はそのハジメの言葉を聞いて頷いた後、ああ、と一言呟いて自分の席に戻っていった。

心なしかやり切ったような、一仕事終えたような面持ちである。
（……あれ？　もしかして自己紹介したかっただけ？）

拍子抜けである。ポッチである自分が目を付けられたのかと思っただが杞憂だったらしい。

ハジメは中学2年生の頃、とある事情で不良グループに暴行を受け

そうになったことがある。

その時も不良たちから威圧感を感じたが、少し離れて見ると、北条から感じる威圧感はその時のように肩が縮こまるような、暴力的なものではないような気がした。

(ひよつとしたら悪い人じゃないのかも?)

そう考えたところで白崎香織という目が奪われるような美少女に声を掛けられて、その考えは打ち切られる事となる。

だからその翌日。所々にあざを作り、絆創膏を貼った姿の北条が現れた時は驚いたのだ。

驚いたのはハジメだけではない。明らかに殴り合いました、という風体だったのでクラスの皆が遠巻きにしながらコソコソと好き勝手言っている状態だ。

「おはようございます！ さて、今日から授業が始まりますが……つて北条くん!? どうしたんですかその怪我!?!」

担任の畑山愛子が朝礼を始めてすぐに北条の怪我に気付いて驚愕の声を上げる。

それに対して北条は、転びました、とだけ言っただけで口をつぐむ。

追求しようとした畑山先生だったが、転んだの一点張りだったので、せめて保健室で治療してください、とだけ言っただけで諦めた。

「南雲。食べるぞ」

その日の昼休み。物珍しくても人はやがて飽きるということなので、すでに北条の怪我の件については誰も話さなくなっていた。

ちょうどハジメの前の席の生徒がいないので、机を挟んで向き合ってお弁当を食べる。

ハジメとしては栄養が摂れるならばゼリー食などでも良いと思っっているが、母親がやけに気合を入れて作っていたので断れずにこうして持つてくることになったのだ。

「その、北条くん。怪我の事についてなんだけど……あつ、もちろん答えたくなければそれでいいから! 変な事を訊いてごめんね!」

「…路地裏で転んだ」

好奇心が抑えられずについ訊いてしまったハジメだが、その直後に

後悔した。

もし触れられたくない事だったら怒らせてしまう可能性があったからだ。

だが、その心配は必要なかったようで、北条は弁当を食べながらポツポツと説明をしてくれた。

(もしかしてこの人、ポンコツなのでは?)

それが話を聞いたハジメの感想である。まず、説明が言葉足らずで分かりにくい。

何とか断片的な説明をつなぎ合わせてみると、ますますその思いが強くなるのを感じた。

ハジメなりに解釈したものが次のとおりである。

「昨日の夜、散歩して街の路地裏に入ったら不良に絡まれた。喧嘩になり、有利に立ち回っていたが、落ちていた布切れを踏みつけて足を滑らせて転んだ。その後、何回か殴られたので怪我をした」

である。それが何故か省略に省略を重ねて「路地裏で転んだ」だけになってしまったのだ。

その後も昼休み中、ハジメは北条の数少ない言葉から真意を読み取る作業に勤しむことになる。

これが北条衛と南雲ハジメが出会った日でもあり、ハジメにとっては苦労の日々でもあり、後に輝かしい思い出となる初めの日でもあった。

次の日から、北条は毎日のようにハジメに話しかけてくるようになる。

やがて一月が経ち、二月が経ち、じつとりと汗をかいて衣替えをする季節になった頃。

ハジメは北条の人となりを大体把握することができていた。

不愛想に見えるが、むしろ感情は豊かである。

あまり表情が動かないのでそうは見えないが、こちらの話にはしっかりと答えてくれるし、言葉少ないながらも感情を示してくれる。

頭の方も悪くはなく、最初に行われたテストでは平均以上の成績を取っていた。

怪我をして登校してくるのは相変わらずだが、それもすでに誰も気にしなくなっていて、むしろ無傷で登校してくる方が珍しいとまで言われるようになっていた。

話を聞いたところ、夜の街に出かけるたびに喧嘩を売られているという事だった。

口数が少なく言葉足らずで、聞きようによつては下に見られていると感じる人もいるので、気の短い相手なら確かに手が出るだろうなどハジメはそう思った。

制服が完全に夏服になった頃から、時々ハジメは北条と放課後や休日を過ごすようになっていた。

本屋まで新刊を買いに行ったり、普段は入らないような路地裏にある怪しい店を巡ってみたり、あるいはゲームセンターで並んでゲームに興じたりと、色々な事を一緒にした。

そうして二人の間柄が親友と言ってもいい様になると、ハジメは言葉少ない北条の言いたい事をほとんど理解できるようになり、そのお陰もあつてか翻訳係として不動の地位を得るようになっていた。

その頃から、北条が夜な夜な街で他校の生徒と喧嘩をしているという噂話が流れることになる。

時々畑山先生や天之河に呼び出されては説教を受けているが、顔色一つ変えずに聞き入れ、それでも一向に変わらないものだから、やがて『札付きの不良』のレッテルを貼られることになる。

ハジメも北条に話を聞いてみたが、必要な事、とだけ言われて、それ以上は聞きだすことが出来なかった。

文化祭が大成功に終わり、長いはずの夏休みがあつという間に過ぎる。

夏休みにも北条に時々誘われて色々なところに遊びに行つており、特にプールと一緒に رفتった時の北条のアスリートもかくや、という肉体美による注目され具合は強烈に記憶に残っている。

友達がいらないんじゃないかと心配していた両親も、ハジメが北条を紹介することで安心したようで、「イマジナリーフレンドじゃなかったんだな、良かった」と、割と失礼な言葉を撤回させることができた。

なお、母親は漫画の登場人物のネタが出来た、と喜んでいた。

休み明けの定期試験が終わり（一緒に勉強したおかげか成績はかなり良かった）、修学旅行という一大イベントが終わるころになると、北条が怪我をして登校する事がほとんどなくなった。

畑山先生はついに喧嘩をしなくなったのか、と喜んでいたが、実際に話を聞いてみると単純に喧嘩で傷を負う事がほとんどなくなっただけで、普通に今まで通り不良のたまり場である路地裏には行っていないようだ。

時間は経ち、少し肌寒くなってきた頃。

ハジメはこれ以上は隠すのは難しいと判断して、両親の後押しもあり北条に自身のオタク趣味を打ち明けることにした。

もちろん隠す事も出来なくはないのだが、ハジメ自身が隠したくないという想いがあったのだ。

とある日の帰り道。その日もハジメは北条と一緒に放課後を過ごしていた。

いつも通りであればそのまま解散になるが、今日に限ってハジメは北条を呼び止める。

「……ちよつといいかな。どうしても話したいことがあるんだ」

北条は喋らない。ただ、黙って話を聞く姿勢を取る。

夕暮れ時の閑散とした住宅街にカラスの鳴き声が3回響き渡り、ややあつてハジメは緊張で乾いた口を開いた。

「実は僕、漫画とかゲームとかラノベとかが好きで。世間ではその、……いわゆる『オタク』って呼ばれるような人なんだ」

「……ああ。知っている」

「へあつ!? そ、そうなんだ……。それで、その……北条くんは僕を軽蔑したりしないの?」

あまりにもあつさりと自分のカミングアウトを流されて変な声が出る。

しかし冷静になって考えてみれば、何度も一緒に本屋に行っているのだ。

自分がどのようなものを買っているのか、自然と見えてしまうとい

うもので、それに今まで気付かなかった己がひどく滑稽に思える。

「…人による。俺にとってお前は軽蔑どころか嫌悪にすら値しない」

普通、こう言われれば無価値な趣味だと切り捨てられているように聞こえる。

ハジメとて、出会った当初にこう言われたらそのままの意味で受け取っただろう。

「えっと、『好きなものは人によって違う。少なくとも俺にとってはお前の趣味は軽蔑するどころか嫌いになる理由にすらならない』、正しいのかな…?」

だが、この半年間で鍛えられたハジメは一味違う。

基本的に、北条は相手を貶すつもりでものを言うことは無い。

ほんの時々、致命的に言葉が抜けるので真逆の意味に聞こえる事があるのだ。

ある意味、才能なんじゃないかとハジメは思っている。

北条が頷いたので、今の翻訳で合っているようだ。

「でも、その、僕のせいで迷惑が掛かっちゃわないかな…?」

「思わない。好きならば胸を張ればいい。周囲を伺っても付き合いはその程度だ」

つまり、そこまで付き合いがないたくさんの他人の顔色を伺って、陰気に過ごすのではなく。

自分を受け入れてくれる少しだけの仲間と陽気に過ごした方が良いと、そう北条は言っているのだ。

その言葉は、ハジメの中にストンと落ちた。

「！ はは、確かにその通りだね。好きなものはしょうがないんだし、いつそ開き直っちゃえばいいか。…ああ良かった、実はこの事で嫌われないか、すごく不安だったんだ」

そして、少なくともここに一人、自分の趣味を受け入れてくれる人がいる。

ならば、何も心配するような事は無いのだ。

「ありがとう北条くん、やっぱり相談して良かったよ。これからもよろしくね」

「ああ、俺からもお願いする」

その日から、ハジメの世界は少しずつ変わっていく。

オタク趣味を隠すのではなく、むしろオープンにしていくスタイルに。

当然、敬遠されることも少なくないが、北条のように受け入れてくれる者もいた。

元々優しい性格をしているハジメであったから、北条以外の友達が幾人か出来るのにさほど時間はかからなかった。

「よお南雲お！ また徹夜でゲームでもしてたのか？ 俺も人の事は言えねえが夜更かしはダメだぜえ？」

「お前にエロゲはまだ早えぜ。俺くらいのキモオタにならねえとなあ！」

「ちよつ、斎藤言い過ぎ！ いくら本当だからってさあ、ぎやははっ！」

「なんで毎回新刊を買えるわけ？ 俺なら小遣いが足りなくて無理だわ！ はあ……」

檜山 大介、中野 信治、斎藤 良樹、近藤 礼一の4人は最初、ハジメのオタク趣味を知って、それをネタに虐めようとしていた。

が、その場に北条がやって来たのが運の尽きだった。すでに多くの不良が道を開ける程に強さが知れ渡っていた北条に

4人は締められた。

「ま、まあまあ。北条くん、別に僕は怒ってないから。あ、そうだ。折角だから4人とも、コレ読んでみる？ もしかしたらハマるかもしれないよ？」

「…分かった。次は無い」

制止するついでにラノベの布教を試みるハジメは、この半年でだいぶ強かになっていた。

その翌日、4人から「続きはねえのか」と催促される事となる。

今ではこうして、友達という程ではないが、軽口を言い合う程度の仲にはなっている。

それから少し時は流れて12月25日。

クリスマスに北条から手触りの良い革製のブックカバーが贈られた。

ハジメからは、家にあつたものから厳選したお気に入り資料集を贈る。

普通、高校生が贈るようなものでは無かったが、北条は喜んで受け取ってくれた。

「俺も持っている。いつか、古びたら交換しよう」

ブックカバーを渡された時に北条が言っていたことがハジメにはよく分からなかったが、それについては両親が後で教えてくれた。

「あら、これってブライドルレザーじゃない。良い友達を持ったわね、ハジメ」

「ちよつと不愛想だがいい子だな！ 彼との繋がりを大切にするんだぞ！」

どうやら、このブックカバーは何十年もの使用にも耐えうる物のようで、年月を重ねるごとに変化が楽しめるらしい。

次の日から、ハジメはこのブックカバーにラノベを入れて持ち歩くようになった。

大晦日になって、新年を迎える興奮が煮えたぎる中、活気付いた街をハジメが歩いていると、いつか見たような光景がハジメの目に飛び込んできた。

「すみません、すみません！」

「ああ!? 謝って済む問題だと思つてんのかコラア！」

泣いてぐずる子供を庇つて、必死に頭を下げる中年の女性と、それを睨みつける3人の不良たち。

2年前のあの時に比べると、おばあさんか中年の女性か、という違いこそあれ、焼き増しのような状態だった。周りの人達は関わりたくないのか、遠巻きに眺めているだけだ。

ハジメに迷いはなかった。

「すみません、堪忍してくださいー！」

あの時と同じように間に割って入り、迷わずに衆目の前で土下座をする。

だが、前と同じように上手くはいかないようだ。

不良たちは見事な土下座をするハジメを見て、ゲラゲラと声を上げて笑い始めた。

「どっ、土下座っ！ 俺初めて見たぜ！ 超面白れエ！」

「傑作だ！ 写真撮れ写真！」

「オラ、そいつらの代わりにお前が殴られとけ！」

腕が振り上げられる気配がしたので、歯を食いしばって殴られる痛みに備えるが、痛みは来ない。それどころか、不良たちの笑い声も止んでいる。

どういうことかと思ひハジメが顔を上げると、他でも無い北条が不良の腕を掴んで、ハジメに振り下ろされる前に止めていた。

「間に合ったな」

「ぶ、黒鬼……！」

（えっ、何その厨二病満載の二つ名!）

彼は自分の与り知らない所で一体何をやっていたのか、ものすごく気になった。

「お、おい！ これマズいんじや……！」

「……何が楽しい。何が面白い。何がまずい。言ってみろ」

「ぶうっ……！ ギブギブツッ！ すいませんでしたあ！」

目を細めた北条が不良の腕を握ると、骨が軋むような音が鳴る。

たまらず不良は謝り、次の瞬間には北条の手から解放された。

這う這うの体で逃げていく不良たちを見送って、何度も中年の女性にお礼を言われた後、今度は二人の不良らしき男が息を切らせながらハジメと北条の前に現れた。

すわ何事か、と身構えるハジメには目もくれず、二人は北条に向かって一礼した。

「北条のアニキ！ 奴らのアジトを見つけたつすよ！」

「ここからさほど遠くない廃工場です！」

「……そうか」

置いてけぼりにされるハジメに構うことなく話が進んでいく。

街中で何してるんだこの人たち、という視線にハジメも巻き添えに

なりながら待つこと数分。

話が終わったようで、北条はハジメに向き直って結論を述べた。

「南雲、俺は行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

言葉は少なく、気持ちは多く。

今から北条が何処に行くのかは分からないが、決意を宿した目をした親友を送り出してやるのが自分の役割だと、ハジメは直感的に判断した。

一人を先導にして去っていく北条。残ったもう一人がハジメに声を掛ける。

長ランにリーゼントという絵に描いたような不良の男だった。

「アンタが南雲サンっすか？」

「え？ うん、そうだけど…」

「なるほど。アニキのマブダチってのはアンタの事っすか。なら話しといてもいいっすね」

そこから先は、想像力豊かなハジメをしても超展開と言わざるを得なかった。

ひよんなことから街を荒らす不良グループに一人立ち向かうことになった北条。

一つ一つ路地裏を回っては、不良グループのメンバーを倒して回る日々。

孤独な戦いの中で二人の舎弟に出会い、とうとう本拠地に殴りこむ。

(北条くん……きみは一体どこの世界に生きてるんだ……)

頼りになる親友が、喧嘩番長の世界の人だった。

ラノベが一本書けそうなくらいの濃い内容である。

その後、家に帰ったハジメは年末の行事もそこそこに、自室でダラダラと過ごすことになる。

薄っすらと朝日が見えそうになる頃に北条から電話があり、初日の出を見に行かないかという誘いがあったので、両親に行先を告げて小さな山の上にある有触神社まで出かける。

石で出来た階段を上ると鳥居の間に、朝日を後光のように背負った男が立っていた。

「勝った」

「うん、知ってる。…お疲れ様」

初めて話をした日と同じように怪我をした北条に拳を突き出すと、驚いたように目を少し見開いた後、同じように拳を突き出して、コツンと拳がぶつかり合う小さい音が鳴った。

大きくて堅い拳だった。

「…俺は、あまり言葉を伝えるのが得意ではない」

(今更過ぎるよ…)

おみくじを引いて参拝を済ませた後、帰り道で北条はおもむろに口を開いた。

最初の頃より少しだけマシになったが、それでも他人に誤解されることは多い。

「だが荒事には強いと思っている。お前は口が上手いが荒事はできない」

「そうだね。何と言うか、あまり怒ったりするのが得意じゃない事は自覚してるよ」

「ああ。だから埋め合っていければと思う」

ハジメはそうだね、と一言返してそれっきり二人は何も話さなかった。

「それじゃあ僕はこっちだから、ここでお別れだね」

「…次は新学期か。またな、ハジメ」

「うん、またね、衛」

3学期は怒涛の速さで過ぎていった。

充実していればこうも日が経つのが早いのかと、自分でも驚いたものだ。

「ねえねえ南雲くん、北条くんって甘いものは好きなのかな?」

「うん、確か結構な甘党だったと思うよ」

バレンタインでは北条が割と女子に人気がある事を知ったり。

ついでにハジメもいくつかチョコレートを貰うことになったりし

た。

そうして3学期が終わり、平和な春休みが始まる。

春風を感じながら街を歩いていると、恰好からして不良であろう学生たちが、何故かボランティアに精を出している光景が毎日のように広がっていた。

春休みが終わって新学年になると、ハジメや北条にも後輩ができる。

桜がはらはらと舞う通学路を歩いていると、校門の前で北条がおろしたてであろう制服を着た生徒と話していたが、あまり言葉が通じていないのか怖がられているようだった。

(全く、仕方ないなあ。ここは僕が一肌脱ごう。あ、ついでに布教するのも良いかも)

そんな他愛もない事を考えて、ハジメは桜吹雪の中を軽やかに走り出した。

南雲ハジメは、いわゆるオタクである。

自分の趣味が世間一般的に白い目で見られるであろうことは理解していた。

けれどもう、それをひた隠しにすることは無い。

(今年もまた楽しい事があるといいなあ)

だって、それが原因で誰かから嫌われる事はあるけれど。

それでも一緒に笑い合える人がいるのだから。

幕間：もう一步踏み込んで

何だかやたらと目立つなあ、と言うのが北条衛という男子生徒を見た時の谷口鈴の第一印象である。

180を優に超えるであろう長身に、動かない表情。何というか、そこに居るだけで存在感を放っていた。

「おはよー！ 確か北条くんだったよね？」

「…谷口か」

だから、こうしてたくさん生徒がいる通学路でも一目でそれと判る。

駆け寄って近くで見ると、さらに大きく見える。

鈴自体が140程度と背が低いと言うのもあるが、これではまるで大人と子供である。

「おお、ちゃんと覚えてくれてたんだ！もしかして鈴に興味があったり？」

「ああ。当然だ」

「!？」

何とかして鉄仮面を動かしてみたくて揶揄うように言ってみれば、ドストレートな言葉が返ってきた。

「へ、へー、そうなんだ！ち、ちなみに鈴のどこら辺が良かったりするの…?」

「お前の事など知らん」

「!？」

流石の鈴も真正面から「お前に興味がある」などと言われれば照れるというもの。

控えめに問うてみれば、返ってきたのは凄まじく辛辣な答えだった。

(つまり…どういふこと?)

興味があるのか無いのか、好きなのか嫌いなのか。

全くもって伝わってこない。

これが、谷口鈴と北条衛の最初の会話だった。

それから、谷口鈴の挑戦の日々が始まる。

なんとかして北条の鉄面皮を剥がそうと毎日話しかけては辛辣な言葉で撃沈する。

一月経ち、二月経つ頃には、それがクラスにおける日常風景と化していた。

「ぐぬぬ……！ こ、このまま終わってなるものか……っ！」

「す、すごい根気だね、鈴……」

昼休みに友達の中村恵里とお弁当を食べながらギリギリと歯を食いしばる。

今日もまた登校時にわざわざ待ち伏せて驚かせようとしたのに、北条の表情を動かすことが出来なかったのだ。

鈴は、人と仲良くなることに関してはそれなりに自信があった。

事実、明るいムードメイカーである鈴の事を嫌っているクラスメイトは居ないと言っても過言ではない。

「プライドだよ！ このままじゃ鈴のプライドがへし折れちゃう！ 見てろく北条くんめく！ 明日こそはそのすかした表情を驚きに彩ってやるっ！」

「あ、あはは……。が、頑張つて、ね？」

その北条はいつも通り、窓際の席で大人しくて目立たない男子生徒の南雲ハジメとお弁当を食べていた。

「そうか。南雲は考えるんだな。意外だ」

「今はまだ母さんの手伝いとかをしてるくらいなだけだね」

今も割と失礼な事を言っているが、言われた南雲の方は特に気分を害したような雰囲気はない。

(もしかしたら南雲くんには聞けば何か分かるかも……?)

おそらく、このクラスで一番北条と付き合いがあるのは彼だろう。

何か、北条の表情を動かすヒントを持っているかもしれない。

そんな考えで善は急げ、早速その南雲に話を聞いてみたところ予想外の答えが返ってきた。

「ああ、北条くんはまた……。ごめんね谷口さん、北条くんは言葉が致命的に抜ける事があるんだ」

「えっ」

出会った当時の事を説明すると、南雲は快く北条の言葉を翻訳してくれた。

「ああ。当然だ」というドストレートな言葉であれば「ああ。これから一緒の教室で過ごすクラスメイトになるのだから、興味を持つのは当然だろう」になる。

「お前の事など知らん」という辛辣な言葉であれば「まだ出会ったばかりだから、お前の事は何一つ知らない」になる。

(北条くんって、もしかしてポンコツでは?)

それが、南雲から話を聞いた後に鈴が抱いた感想である。

いくら何でも言葉が抜けすぎている。

この人、今までどうやって生活してきたんだろうという疑問すら湧いてくるレベルである。

そしてその翌日。種が割れば話は速いと言う事で、早速北条を待ち伏せる。

「おはよー、北条くん！」

「…谷口か。暑いからやめておけ」

いつも通りの辛辣な言葉。だが、鈴は南雲に教わった知識を思い出す。

基本的に北条は人を貶したりする目的で言葉は使わない。

そう聞こえるのであれば、何かが抜けている証拠だ。

…相変わらず何が抜けているかは分からないが。

邪険にされていないのであればそのままにしておけばいい。

「そう言えば今週からプール開きなんだって！ 楽しみだね！」

「そうか。気楽で羨ましいな」

「北条くんはプールは行ったりするの？」

その後も会話のドツチボールは続き、鈴は初めて会話を続けたまま登校を終える事に成功した。

「やった！ やったよエリリン！ これはもう鈴の大勝利と言っても過言ではないね！」

「え？ でもそれって鉄面皮を剥がせてな…いや、何でもないです」

会話できると分かれれば、そこから早いのがムードメイカーたる鈴の強みである。

どこか放っておけない雰囲気を持つ北条に毎日のように話しかけて、少しずつ仲良くなっていく。

文化祭が終わるころには、友達だと胸を張って言える程度にはなっていた。

夏休みは時々街で出会う事もあり、その流れで一緒に遊ぶこともあった。

北条は不愛想に見えるが、割と付き合いは良い。誘えば大抵は頷いてくれる。

なお、南雲からチャットアプリで北条の上半身裸の水着写真が送られてきて、しばらくまともに目を合わせられなくなったのは余談である。

鈴も年頃ね、と家族にからかわれたのは良いのか悪いのか分からない思い出である。

夏休みが終わってしばらくすると修学旅行が始まる。

親友たる恵里とは別の班になってしまったものの、北条とは一緒に班になれた。

「北条！ こっちはもう2発しかねエ！」

「あと3回当てりゃあ景品なんだ！ ぜってー当てろよ！」

「…任せろ」

西京マウスパークでは檜山や清水と射撃ゲームをする姿を見守ったり。

「ほ、北条くん？ ちょっと力入れ過ぎじゃないかしら？」

「…そうか。強くてすまない」

カヌーを漕ぐアトラクションで八重樫と息が合わずにあつちこつちに彷徨ったりするのを苦笑いで眺めたり。

「ほら北条くん！ ピースピース！」

「…こっか？」

マスコットであるグロッキーマウスと一緒に写真を撮ったりと、あつという間に時間が過ぎていった。

「あー、楽しかった！ 今日には遊んだねー！」

「そうだな」

夕日が差す頃、集合時間も間もない時間に、鈴は北条と並んでベンチに座っていた。

檜山と清水は絶叫系のアトラクションに乗りすぎて、真っ青な顔でトイレに行った。

八重樫は呆れながらも付いていくあたり、彼女の面倒見の良さが伺える。

「北条くんは楽しかった？」

「ああ」

「…むう。そう言っつて、今日はずっといつも通りの仏頂面だったよ」

結局のところ、鈴はまだ北条の表情を一つも見れていなかった。

南雲からは「判りにくいけど結構微笑んだりする」とは言われているが、全然違いが分からない。

「でも、いいや！ 今日は無理だったけど、いつか絶対、鈴が北条くんを笑わせてみせるからね！」

「…！」

笑顔でそう言う鈴に、北条は僅かに目を開いた。

最初は意地だったけれど、今は本気で北条の表情が見たい。

一体、どんな顔で笑うのか。どんな声で笑うのか。それが知りたいのだ。

「谷口」

「どうしたの？」

「…ありがとう」

その時、鈴は見た。

夕日に照らされた北条の口元が僅かに緩んで、確かに微笑んだのを。

（…あつ。北条くんって、こうやって笑うんだ…）

もしかしたら光の加減のせいで、本当は笑っていないのかもしれないかもしれないけれど。

それでも、鈴が確かに見た笑顔だったのだ。

「鈴、今戻ったわ。あの2人はもう少ししたら…ってどうしたの？」
「ふえ？ ど、どうしたのって、何が？」

「顔が赤い…ふふっ。いえ、夕日のせいかしらね」
何かに気付いたかのように、八重樫は微笑む。

その後、鈴は慌てて顔を洗いに行くことになった。

その日から、北条に対する認識が変わった。

ただの友達から、少しだけ気になる男の子へ。

とは言っても今までの関係が変わったわけではない。

一緒に登校して、ほんの時々放課後に街に出かける。

けれども、認識が変わると、今まで気にしなかったような所も気付くわけで。

例えば、通学路を歩いている時は、必ず道路側を歩いてくれていた
り。

雨の日に傘を忘れて入れてもらったときは、鈴が濡れないように傘
を傾けてくれていたり。

一緒に買い物に行ったときは、さりげなく荷物を持ってくれたり。

相変わらず口数は少ないけれど、良いところをたくさん見つける事
が出来た。

やがて年が明けて元旦を迎え、鈴は恵里と共に初詣に来ていた。

参拝を終わらせておみくじを引き(中吉だった)、さて帰ろうとした
とき、鳥居の間に北条が立っているのを見つけた。

「ね、ねえ鈴。あれってもしかして、北条くんじゃない？」

「ほんとだ！ でも何で怪我してるんだろう。最近はそんな事も無
かったのに」

とてもじゃないが声を掛けれる雰囲気ではなかった。

そして、見つけて直ぐに南雲が階段を上ってきて、北条と拳を軽く
ぶつけ合っていた。

「な、何してるんだろうあの2人…？」

「え、えーっと、友情？みたいな感じなのかな？」

何をしているのかは鈴と恵里にはサッパリだったが、すごく親しい
雰囲気である事は理解できた。そして、それは男同士でしか出来ない

であろう(こ)とも。

(いいなあ、南雲くん…)

「す、鈴、すごく羨ましそうな顔してる…」

「!? べ、別に鈴は南雲くんが羨ましいとか思っていないしっ!?」

「か、語るに落ちてるよ…」

冬休みが終わって3学期が始まると、やがて例のイベントがやってくる。

乙女にとっては非常に重要なあのイベントである。

「ねえねえ南雲くん、北条くんって甘いものは好きなのかな?」

「うん、確か結構な甘党だったと思うよ」

南雲に訊くと、あっさりと情報は得られたのでとびつきり甘いチョコレートを作ることになった。

やたら乗り気なお手伝いさんに手伝ってもらって、完成したそれを小さな紙袋に入れて北条に挨拶に向かう。

「あつ、北条くんおはよー! 待ってたよ!」

「ああ、おはよう。俺に何か用か?」

「はいっ、どうぞ! チョコレートあげるから大切に食べてね! 義理か本命かは…内緒だよっ! どっちか考えてみてね!」

「…分かった」

顔は赤くなつてなかっただろうか。声はいつも通りだっただろうか。仕草は自然だっただろうか。

若干語彙力が上がった北条に、震えそうになる手で押し付けるようにしてそれを渡し、逃げるように去っていく。

恵里がいる階段の踊り場まで行くと、彼女がサムズアップして待っていた。

「わ、渡せたみたい、だね!」

「ひいひい…! 一杯一杯だよ! の、喉がカラカラ…!」

肩で息をしながら、とりあえず渡せたことを喜ぶが、その後北条が他のクラスの女子からいくつかチョコレートを贈られている所を目撃してやきもきする事となる。

少しだけそわそわして迎えた一か月後。

北条はいくつもの紙袋を抱えて登校してきた。それはもう、注目的になる程度に。

(多っ！ まさか北条くん、全員に返すの!?)

「谷口。いいか?」

「お、おはよー！ なになに、私に何か用?」

真つ先に声を掛けてきた事に喜び、少し期待しつつ挨拶すると、北条が大きめの紙袋を鈴に差し出した。

「お前に受け取ってほしい」

「わっ、これってもしかしてホワイトデーの？ そ、それにこれって！」

なんてとぼけつつチラリと袋の中を見やると、そこには鈴が以前から一度食べてみたかったマドレーヌやフィナンシエの詰め合わせの箱が入っていた。

非常に人気がある商品であり、予約して半年は待たないと手に入らないというそれは、気軽に手に入るものではない。

「…以前欲しがっていただろう」

確かに北条の言う通り、9月頃にたまたま街で出会って一緒に買い物をした時に、そんな事を話の流れでぽろっと言った事があった。

だが、本当に話の流れで言っただけで他意は無かったし、むしろ今まで鈴もその事を忘れていたほどだ。

「覚えてくれてたんだ。うん、実は前に見た時にちよつと気になって」

「ああ。運が良かっただけだ」

予約して半年かかるものを、先月から用意して間に合うはずがない。

つまり、例えバレンタインに何も贈らなくても、9月の時点で北条はすでにホワイトデーにこれを鈴に贈る事を決めていたのだ。

「…ありがとう。お返しでもらえるなんて嬉しいな」

「そうか。先月に報いる事が出来たならそれでいい」

「…うん、大切に少しずつ食べるね」

紙袋をぎゅっと抱きしめる鈴を近くで見ていた恵里は、眼鏡を光ら

せて「堕ちたな…」と心の中で呟いた。

少し時間が経ち春休みに入って、鈴が街の散歩をしていると、不良らしき生徒たちに囲まれた北条を見つけた。

とは言っても険悪な様子ではなく、むしろその逆だった。

「アニキ！ 南区の『掃除』は終わりやした！ へへっ、綺麗さっぱり全滅ですぜ！」

「次は商店街だ」

「畏まりやした！ ククツ、草の根搔き分けて、探し出して『処分』してやりますよ！」

軍手と、火バサミと、ゴミ袋の3点セット。

物騒な発言に反して清掃のボランティア活動に精を出す数多の不良たちがそこにいた。

噂では北条が街の頂点になったと聞いたが、どうやらそれは本当らしかった。

春休みが終わる2日前、明後日から2年生だと言う事をあまり実感できなかった鈴は、夜風に当たるために外に出ていた。

街は夜になっても明るいので、変なところに入らなければ問題は無いだろう。

そうして鈴が街を練り歩いていると、北条にばったりと出会う。

「あつ、北条くん！ こんな時間に奇遇だね！もしかしてお散歩かな？ だったら一緒に行きっ！」

北条相手であれば、これくらい強引なのが丁度いいのだ。

何だかんだで彼は寛容なので、嫌がることなく付きあってくれる。

「ねえ、北条くん。私たちってもう結構な付き合いだよね？」

小さな噴水がある街の広場。

そこまでいつも通りお喋りしながら歩いていたが、鈴は立ち止まって話を切り出した。

夜と言う事もあり人はいない。

「実はね。私って、男の子とここまで仲良くなったのは北条くんが初めてなんだ」

いつものように自分の事を「鈴」と呼ぶのではなく「私」と呼ぶ。

北条も立ち止まって、真剣な顔で聞いてくれている。

「…そうは見えないが」

「うん、それでね。ここまで仲良くなったのに、ずっと『北条くん』って呼ぶのも何だかもやややるんだ。どうすればいいかな?」

たぶん、もややもやを感じたのはホワイトデーの日辺りから。

自分でもよく分からない感情が湧き上がってくるのを感じていた。もう少し側に行きたいような、でもそれはこっぴടずかしいような。それでいて心地いような不思議な感覚だった。

「変わった呼び方をするのはどうだ?」

「それってあだ名を付けるって事でいいの? それじゃあまもっち…まもまも…うーん…」

「……」

「あつ、それじゃあ『まもるん』っていうのはどうかな!」

「そうか。なら俺は『リンリン』とでも呼ぼう」

まもるん。リンリン。2人の間だけの特別な呼び名。

「! な、何だか男の子にあだ名で呼ばれるとこそばゆいね…」

そう思うと、胸の中心にほわーっとした熱が生まれて、顔まで上ってくるのを感じた。

もつと以前から、一緒にいると時々感じていた熱が大きくなったよ
うなもの。

俺もだ、と北条が僅かに微笑んで——そこで鈴は唐突に気が付いた。

(あつ、そうかあ。鈴って——)

一度自覚してしまえば一瞬だった。

今できる精一杯の笑顔で笑って見せる。

「ねえ、まもるん! 鈴はね——」

「…どうした?」

「——ううん、何でもないっ! これからもずっと仲良しでいようねっ!」

「ああ、こちらこそ」

(『あなたが好きです』なんて、今の鈴にはまだ言えないや!)

いつかきつと、今よりももう一歩だけ進む勇気が出る時が来たら。
その時にはきつと、とびっきりの言葉で伝えよう。

訓練期間くオルクス大迷宮20階層

盾の勇者と化した主人公のRTA、はーじまーるよー！

前回はトータスでの訓練初日を終わらせたとこまででした。

今回は、2日目以降の訓練期間からお送りいたします。

訓練期間は、基本的に訓練施設でレベリングをしますが、4日目以降からは魔物の討伐依頼が出現するので、それも行いたいと思います。

では、レベリングですね。

訓練施設ではメルド兄貴に話しかければ一般騎士くんと戦闘になります。訓練施設にいる他の生徒とも戦えます。

とは言え、戦闘で得られる経験値は変わらないので、早く終わる一般騎士くんで稼いだ方が早いです。

「おっ、訓練していくのか？」

く訓練をお願いします

「分かった。おーい、そのやつ！ 相手をしてやれ！」

盾反撃を取得した後は直ぐに戦闘が終わります。
殴って、殴られてで終了です。

く戦闘に勝利した！

く少しだけ強くなれた気がする……

まずはこれを4日目まで繰り返します。

倍速したらすぐですね。

4日目になりました。

ほもくんもレベル5まで上がっていますね。

APは3溜まっていますが、それはまた後ほど。

一々メニュー画面を開くより、まとめて振った方が時間を短縮できます。

「今日からは簡単な魔物の討伐も訓練の一環として行う！ 希望者は装備をしっかりと整えとけよ！」

くいよいよ魔物との戦いだ

くしっかりと準備をしなければ……

4日目になると、メルド兄貴から朝にこのような通達がされます。この時に気を付けなければいけないのは、魔物の討伐は朝にしか選べないと言う事です。

朝から昼にかけての訓練になるので、昼からは選択肢が消えてしまいます。

というわけで、朝の内に訓練施設にいるメルド兄貴に話しかけましょう。

「おっ、訓練していくのか？」

∨ 魔物の討伐をする

「よし、分かった。それじゃあしばらく待っている」

魔物の討伐ではパーティでの戦闘が行えます。

画面が暗転して、場所が城壁の外になりました。

ちなみに、魔物の討伐は希望者のみで行われるので、その日によってメンバーが違います。

「皆いるな。それじゃあ集団戦の心得を教えるからよく聞いとけよ！」

画面でチュートリアルが始まりましたが、キャンセルだ（無慈悲）。

ゲームは習うより慣れろって、それ一番言われてるから。

それではパーティの編成ですね。

これはメニユー画面の『パーティ編成』から行えます。

フロントが4人で、これが実際に戦闘に出るメンバーです。

バックが2人で、これが控えメンバーですね。控えメンバーは戦闘中に補助効果を使う他、いつでもフロントメンバーとの入れ替えが可能です。

ですので、状況に応じて戦闘メンバーを入れ替えることで有利に戦闘を進めることができます。

今回はフロントにほもくと天之河光輝、八重樫雫、坂上龍太郎を。バックに遠藤浩介、白崎香織を入れておきます。

魔物との戦闘は3回連続で行われ、その全てが一般騎士くんよりも経験値がうま味です。

では戦闘の前にAPを振り、隊列を設定しましょう。当然、盾反撃

に全振りです。

隊列はメニュー画面の『戦術』の画面から行うことができ、戦闘初期のキャラの立ち位置を決めれます。

ほもくんを一番前に出して、他のメンバーは全員少し後ろに下げてください。

まだ解放されていない『連携』という項目がありますが、それはまた後ほど解説します。

▽魔物が襲いかかってきた！

では戦闘開始です。ホイ！

敵は3体、ビッグボア×3です。ほもくんが行動一番手ですね。

ここは『スキル』を使いましょう。スキルは技能とは別に、キャラがレベルアップで覚える特技のようなものです。

ほもくんの天職である守護者であればレベル4で『挑発』を覚ええます。敵のターゲットインングを引きつける、タンク職によくあるやつですね。

では、ほもくんを敵陣に突っ込ませて挑発しましょう。

その後は八重樫雫、天之河光輝、坂上龍太郎の順番が来ますが、それぞれ違うビッグボアを殴ってください。通常攻撃で大体3割くらい減りますね。

敵の行動順が来て、まんまとほもくんを攻撃してますね。

当然、近接物理攻撃なので盾反撃が発動します。オラツ、詩ねっ！HPが消し飛びましたね。お疲れちゃん。

ちなみに、戦闘前にAPを振らなければ乱数次第では敵が倒れず、微ロスになってしまいます。

だから戦闘前にAPを振る必要があったんですね。

これが今回のチャートの基本戦術です。

ほもくんが敵に突っ込んで挑発、他のメンバーでほもくんを殴っている敵を袋叩きにするネトゲじみた戦法ですね。

魔物の討伐ではこれを3回繰り返します。作業ですね。

じゃけん倍速しましょうね。

ちなみに白崎姉貴ですが、補助効果はリジエネです。味方であれ

ば、行動するごとに友好度×1%のHPを回復します。現在の友好度は7なので、行動毎に7%回復します。

短期戦であればあまり有効ではありませんが、長期戦であれば頼もしいですね。

「よし、今日はこれで終わりだ！　しっかりと動けてるみたいだし、これだと俺も楽できるな！　ああ、それと、宝物庫を開けるそうだから、良さそうな装備があれば選んでも良いとお達しがあった！　欲しい奴は忘れずに取りに行けよ！」

＜魔物の討伐が終わった

＜少しだけ強くなれた気がする……

特に何事もなく終わりましたね。

経験値も一般騎士くんの4倍くらい入ってうま味です。

＜夜になった

＜何をしようか……

魔物の討伐をすると、夜に訓練が出来なくなります。今日はもう休め、という事ですね。

なので、夜にはコミュを行うことが出来ます。

この時、図書館に行くとトータスについての資料を閲覧できます。

いわゆる、原作のトータスに関する設定集みたいなものですね。

＜城の中を散歩しよう

＜どこへ行こうか……

ですが、それを見ても特に意味はないので城の中を散歩します。

見たい兄貴は自分の目で確かめよう！

行く場所は宝物庫です。原作では天之河師範の聖剣とかが置いてあった所ですね。

さきほどメルド兄貴が言ったように、魔物の討伐をクリアすれば宝物庫が解禁されます。

当然ですがほくくんも宝物庫から拝借することが出来ます。

宝物庫から装備を拝借できるのは、オルクス大迷宮に行くまでの2週間限定になりますので、取り忘れないように気を付けましょう。

＜宝物庫へ行く

「どうされましたか？」

〈装備を整えたい

「畏まりました。それでは中へどうぞ」

見張り兵くんに話しかければアツサリと通してもらえます。

顔パスつてわけ？ なかなかやるじゃない！

宝物庫の中は博物館みたいです。飾ってある装備を調べれば手に入れることが出来ます。

とは言っても、無制限に手に入るわけではなく、選べるのは2つまでで、自身で装備できるもの以外は選べないようになっています。

〈金の豪華な装飾が施してある白い盾だ

〈この装備を選ぼうか……

では、ほもくんの装備を紹介します。

一つ目は『アイギスの盾』です。

ファンタジー作品ではお馴染み、アテナ姉貴が使っていたとされる
武具ですね。

なお、グラフィックで見ると限りはメデューサの首は嵌ってません。
物理防御力、魔法防御力共に高い数値を誇りますが、その真価は固
有効果にあります。

なんとこのアイギスの盾は、装備しているだけで魔法の被ダメージ
を半減してくれる上に、状態異常を50%の確率で無効化してくれま
す。

敵の攻撃を一手に引き受けるほもくんには有用な装備ですね。

〈『アイギスの盾』を手に入れた！

〈もう1つ選べるがどうしようか……

さて、2つ目ですが、これは剣を選びます。

盾役なのに鎧とかを選ばないのか？ と思うかもしれませんが、今
回のビルドに丁度いいものがあるのです。

〈幅広の青い長剣だ

〈この装備を選ぼうか……

2つ目は宝物庫の隅に飾ってある『ソード・オブ・オーダー』です。
多分、『秩序の剣』とかそんな感じの意味だと思います。

攻撃力は店売りレベルなのですが、防御力が防具並みにある変わった武器です。

さらに、固有効果として物理防御力を50%アップさせる効果があります。

防御力が上がる⇨盾反撃の威力が上がるなので、今回のビルドには最適クラスの装備です。

＜『ソード・オブ・オーダー』を手に入れた！

＜これ以上は選ばない方が良さだろう……

「おや、もう決まりましたか？」

＜装備を決める

「畏まりました。それではお持ちください」

というわけで選んでから見張り兵くんに話しかけて、装備品をゲットだぜ！（ピッピカチュウ！

すぐさま装備画面でしっかりと装備をしましょう。

武器や防具は持っているだけでは意味がありませんからね。

これにて第一回・装備調達は終わりました。

鎧や籠手などは後で取りそろえるのにちょうどいい場所があるので、その時に更新します。

それまでは支給品の『見習いの鎧』『見習いの籠手』『見習いのレギンス』で我慢しましょう。

「おっ、訓練していくのか？」

＜魔物の討伐をする

「よし、分かった。それじゃあしばらく待つている」

あとは魔物の討伐を訓練終了日まで繰り返すだけです。

装備を手に入れて物理防御力が上がった事で盾反撃の威力が上昇したので、これからの戦闘では盾反撃だけで敵が氏にます。

なので、ほもくんを突っ込んで挑発した後、他のメンバーはその場で防御で良いでしょう。

…よし、問題なく盾反撃一発で倒せましたね。

では訓練終了までは倍速で良いですね。

夜は適当にコミュでもしておきましょう。

当然ですが、トータスに来てからも友好度は上げることが出来ません。

ちなみにですが、リリアーナ姉貴とランデル兄貴は警備上の都合からか、夜はコミュが出来ません。

2人を攻略したい兄貴は昼の内に話しかけましょう。

余談ですが、白崎姉貴と友達未満の状態で夜にうろつくと、ハジメくんの部屋に入っていく白崎姉貴を拝めることがあります。

あつ…（察し）。

＜夜になった

＜何をしようか……

＜『谷口鈴』と話すことにした……

今回は谷口姉貴にしましょう。お前は初回に不要だと言ったな。

あれは半分は嘘だ。

ぶつちやけ、ここまで谷口姉貴の友好度が上がるとは考えてませんでした。

普通プレイをしていると、いつも4か5くらいでトータスに来るの採用を考えていませんでしたが、友好度が9もあれば採用に値します。

谷口姉貴の補助効果は、パーティ全体のダメージカットです。

友好度×1%のダメージをカットしてくれます。友好度9なら物理、魔法問わず9%のカットです。

これは低レベル進行においては非常に有用です。

バック枠にはハジメくんを入れて、もう一人は誰でも良かったので、適当に遠藤浩介でも突っ込んでおこうかと思いましたが、予定変更です。

じゃけん友好度を10にして使い倒しましょうね。

例によって倍速ですが、折角なので前と同じように右枠で垂れ流しとききます。

「まもるん？ こんな夜更けにどうしたの？」

＜少し話さないか提案した

「お話？ いいよいいよ！ さつ、入って！」

〈『谷口鈴』と話すことになった……

夜更けに男を部屋に招き入れるメスの屑ですねこれは……

まあ、全年齢対象のゲームなのでいかがわしい事は起こらないんですがね。

「それにしても大変なことになっちゃったね……」

〈どうやら不安を感じているようだ

〈確かにいつものような明るさが無かったような気がする……

クラスメイト全員分に用意されている『召喚された事への不安』イベントですね。

召喚されても動じていないつよつよメンタルも何人かいますが、基本的には谷口姉貴と同じような感じですよ。

「あはは……やっぱりまもるんには分かっちゃうんだ。今の所は何とか普段通り振舞ってるんだけど……私達、ちゃんと日本に帰れるのかな……？ お父さんやお母さんに会いたいよ……」

〈心配しないでほしい、自分が何とかする

この選択肢は『勇氣』が8以上ないと出ないやつですね。

デフォルトだと『……』と『帰れることを祈ろう』の2択になります。

「……ありがとう。まもるんは優しいんだね。でも、無茶はしたらダメだよ？ 絶対にみんな揃って帰るんだからね」

〈必ずみんなまで帰還する誓いを立てた

「……よしっ！ 落ち込んでるのは鈴らしくないねっ！ まだまだ夜は始まったばかりだし、いっぱいお話をしよう！」

〈どうやら元気を取り戻したようだ

〈その後も消灯時間前まで話を続けた

〈少しだけ仲良くなれた気がする……

これで以上ですね。画面では、倍速している間に2週間が終わりましたね。

明日はオルクス大迷宮でのイベントです。

「明日から、実戦訓練の一環としてオルクス大迷宮へ遠征に行く！ 必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との

実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日はゆっくり休めよ！ では、解散！」

メルド兄貴の言う通り、最終日は夜に行動不能です。

画面が暗転して翌朝です。

「それじゃあ出発するぞ！ 今回は行っても20階層までだ！ それくらいだったら何かあっても俺達でカバーできるからな！ だが、勝手な行動は慎んでくれよ！」

訓練施設に集合して、また暗転です。

この場面いる？

そして『ホルアド』の宿屋に到着です。この日は夜だけ自由行動になります。

このタイミングで溜まったAPをドバードと使います。

レベルは11で、しっかり目標も達成しています。

天職：守護者

level：11

筋力：221

体力：523

耐性：325

敏捷：165

魔力：82

魔耐：305

技能：盾反撃lv. 4

自動回復lv. 6

今のほもくんのステータスはこんな感じですね。結構ガチガチです。

自動回復は行動順が回って来た時に技能レベル×3%のHPを回復する技能です。

盾反撃と同じくらいに非常に重要な技能なので、これは10まで振ります。

さて、翌日になりオルクス大迷宮にやってきました。

いわゆる『洞窟ダンジョン』ですね。

アミューズメントパークと化した入り口を通ったら、操作可能になります。

では、スタメンを発表する！

フロントはほもくん、天之河師範、坂上兄貴、白崎姉貴の4人です！

基本的にはほもくんの盾反撃だけで19階層までは一人で何とかできます。

バックは谷口姉貴と遠藤兄貴です！

ぶっちゃけ誰でも良いです。ほもくんはガチガチなので自動回復だけでHPは維持できます。

隊列はほもくんを一番前に、残りは限界まで後ろに下げて完了です。

イクゾー！

デッデッデデデデ！（カーン）デデデデ！

デッデッデデデデ！（カーン）デデデデ！

今回は20階層まで行きますが、すでにマッピングはされており、トラップの類も騎士団のみなさんが頑張って解除してくれているので、快適に進めます。

つまり、ほとんど一本道ってわけです。

早速エンカウントしましたね。力を試すのに丁度良い相手が現れたな（殿下）。

敵はラットマン×3ですね。訓練期間に魔物の討伐で倒したビツグボアよりもレベルが高い相手になります。

ですが、相手は近接物理攻撃しかしてきません。

つまり、そう言う事です。…じゃあ、師農家。

～戦闘に勝利した！

ワンターンスリーキルウ…！ ほも突撃からの挑発で終わりました。

敵の方から氏にに来てくれるので、戦闘も短いですし操作ガバも少なくて一石二鳥ですね。

この調子でサクサク進んでいきましょう。

×4 甥の木村、加速します。

特に苦戦もせず20階層までやってきました。

でも20階層分下りるのはいやー、キツいです。

なお、その間にほもくんのレベルが15まで上がりました。

これからの戦闘に備えて、自動回復に全振りします。

これで自動回復のレベルが10になり、ほもくんは行動順が来るたびにHPを30%回復する不沈艦になりました。

さて、20階層の奥まで行ったらボス戦です。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

岩に擬態できるゴリラの魔物、『ロックマウント』です。

ポーウ！ キョウテキトージョーダナ！

というわけで20階層のボス戦であるロックマウント×4です。

このゴリラたちは、魔物の屑です。

とりあえずいつも通りほもくんを突っ込ませて挑発させましょう。

「ロックマウントは投石した！」

はい、これですね。これが私が屑扱いした理由の一つになります。

間合いを詰めると距離を取って投石をします。当然、距離を取られているので盾反撃は発動しません。

なのでこの戦いでは、ほもくんはひたすら挑発して岩を投げつけられるだけの的になってもらいます。こんなやつら、攻撃用のスキルがあれば……！（ビクンビクン

あ、ちなみにほもくんはレベル10で『力碎剣』を覚えました。

相手単体に等倍攻撃しつつ、物理攻撃力を低下させるスキルですが、今回のチャートでは出番はそこまでありません。

それじゃあ3人も、がんばえー。

ほもくんが挑発を切らさずに殴られている間は3人の安全は担保されているので、ガン攻めで良いです。

「行くぞ！ 万翔羽ばたき、天へと至れ——天翔閃！」

天之河師範迫真のボイスと共にまず一匹撃破ですね。光属性の単体攻撃です。

燃費も良く、デイレイも少ないので重宝するスキルですね。

デイレイというのは各種行動に設けられている『行動の重さ』の事です。

これが大きい技を使うほど次の行動順が回ってくるのが遅くなります。

【ロックマウントは威圧の咆哮を使った！】

層な理由の2つ目です。威圧の咆哮は全体に行動一回分の麻痺を付与してきます。

麻痺をしたら行動不能になりますが、ほもくんはアイギスの盾のお陰もあって逃れたようですね。

オラツ、挑発！ 打ってこい打ってこい！

【ロックマウントは投石した！】Critical!

クリティカルはやめろオ！ クリティカルは与ダメージ計算の最終数値を1.5倍にします。

ソード・オブ・オーダーのお陰もあり、この程度ではほもくんはまだ平気ですが、流石に何回も喰らっていると自動回復が追いつかない恐れがあります。

ちなみに、今のを白崎姉貴が喰らったら一撃で落ちます。

人は投石にぶつかれば氏ぬ、ハッキリわかんかね。

「オラアツ！ 吹っ飛ばべ！」

坂上兄貴の攻撃スキル『連弾拳』で2匹目撃破！ でかした！

よっしゃ者ども、畳みかけろ！ あと一息じゃあ！

【ロックマウントは威圧の咆哮を使った！】

おいゴラア！ 免許持つてんのか！

またほも以外が麻痺してる！ 遅延行為はやめろオ！

白崎姉貴がさつきから一回も動けてないじゃないか！

挑発にMPを使わなくても良いのが不幸中の幸いですよ。はいはい、挑発挑発。

【ロックマウントは投石した！】Critical!

…………お前を頃す(デデン！)

このほも、容赦せん！ お前ら全員、微塵切りにして！ 養殖場の生け簀にばら撒いてやる！

「行くぞ！ 万翔羽ばたき、天へと至れ——天翔閃！」

3体目！ 流石です天之河師範！

もう挑発もいらん！ 総攻撃じゃあああ！

＜戦闘に勝利した！

＜少しだけ強くなれた気がする……

……虚しい戦いだった。

初のボス戦がこれとかこの先不安しか感じませんね。

次回はついにあのベヒモスとご対面をしてメガト今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

ベヒモス戦くオルクス大迷宮攻略開始

ここは俺に任せて先に行け！ なRTA、はーじまーるよー！
前回は、20階層のボスであるロックマウントを倒したところまででした。

いやな出来事だったね…。

原作ではあっさり終わってたのに、こんなに苦戦するなんて頭に来ますよ！

さて、気を取り直してロックマウントを倒したらその奥でイベントがあります。

引き返せないイベントなので、プレイ予定兄貴はしっかりと考えてから進みましょう。

崩れた壁の隙間から『グランツ鉱石』の青白い光が出てますね。

装飾品に使われる宝石ですが、今作ではアクセサリィを作る時の素材として登場したりします。

「あれはグランツ鉱石だな。何か効能があるわけじゃないが、ご婦人やご令嬢方に大人気な宝石だ。装飾品にして贈ると喜ばれる。求婚の時に選ばれる宝石の人気ベスト3以内には必ず入ってくるらしい」

メルド兄貴が説明してくれてますね。

はえー、貴族様に人気あるんですね。結婚指輪にも使われてるんですか。

まあ、ほもくんには関係のない話です。

「だったら俺らで回収しようぜ！ あれだけデカけりや、これからの資金の足しになるかもしれないねえしよ！」

檜山兄貴うきうきつすね。でもすまない、それトラップなんだ。

メルド兄貴に止められてますがバッジが足りないのか言う事を聞いてませんね。

はい、転移罫発動。

「くっ、しまった！ 撤退だ！ 全員早くこの部屋から出る！」

まあ、間に合わないんですけどね。何の光!? というわけで画面がホワイトアウトして場所が移ります。

100メートルくらいあるストーンブリッジですね。

余談ですが、タイヤメーカーのブリヂストーンって、創業者が石橋さんだからこんな名前だそうです。

割と有名な話ですね。

さて、ではイベント戦です。

奥に続く通路側には怪物を超えた怪物である『ベヒモス』が、上に続く階段側には骸骨戦士である『トラウムソルジャー』が大量に湧き出していきます。

ここで、運命の分岐路その1です。

戦う相手を『ベヒモス』か『トラウムソルジャー』のどちらかから選びます。

「くそつ、異常事態だ！ アラン！ お前は生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ 何としてでもヤツを食い止めて時間を稼ぐぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！ おそらくあっちが地上に繋がる帰り道だ！」

＜挟み撃ちにあつた！

＜自分はどうしようか……

最初に『勇気』を7以上にする必要があると説明しましたが、それはこの場面のためです。

勇気が7未満だと強制的にトラウムソルジャーの方に行くこととなります。

＜ベヒモスの足止めをする

今回は9まで上がっているので迷わずベヒモスの方へ行きましょう。

さて、イベント戦です。今から5回、ベヒモスの攻撃を凌ぎましょう。

通常プレイでは初見殺しイベントです。

【しばらく時間を稼げ！】

ベヒモスは65階層に出てくる魔物なので、ステータスが桁違いです。

ほもくん以外は当たれば即昇天します。

開始時のパーティメンバーは天之河師範、坂上兄貴、そして八重樫姉貴で固定です。

ポーウ！ キョウテキトージョーダナ！

ではほもくんを突っ込ませて正面に陣取りましょう。いつも通り肉壁オナシヤス！

ベヒモスの攻撃は、その全てが範囲攻撃です。

AIの行動パターンが『近くにいるキャラを攻撃』という脳筋仕様なので、挑発は無くても大丈夫です。

ですので、ここは挑発ではなく『防御』を選びます。

防御を選ぶことによって、次の行動順が回ってくるまで被ダメージを半減させることが出来ます。

さらには被ダメージ時にクリティカルが発生しないようになる効果もあるので、事故も防げます。

他のメンバーは巻き込まれないように隅っこに避難していきましょう。

レベル差が違い過ぎるので、攻撃しても今はダメージが全然入りません。

「ベヒモスはヒートクラッシュを使った！」

アツイッシュ！ ほもくんのHPが4割ほど減りましたね。

今のは単体を中心として円形範囲に攻撃する『ヒートクラッシュ』です。

防御特化のほもくんでも素で受けたら8割吹き飛ぶ威力があります。

たぶん、ソード・オブ・オーダーが無ければ即氏してますね。

一応射程内にいるので盾反撃してますが、ミリしか減ってないです。

つよい。今はかてない。

幸いベヒモスは素早さはそこまで高くないので、連続して動かれることは無いです。

自動回復が無ければ3回目の攻撃で師んできましたね。

皆はそこでゆっくりしていつてね！

【ベヒモスは突進をした！】

おう打ってこい打ってこい。

突進は直線範囲攻撃です。これに巻き込まれないようにするため、ほもくん以外は隅っこに固めてあります。

通常攻撃はうま味ですね。ほもくんが防御していれば一割ほどで済みます。

「早く皆のところへ！ 天之河くんがいないと切り抜けられないんだ！ 一撃でこの状況を覆せるのは天之河くんだけなんだから！」

3回凌いだのでイベントですね。ここからはパーティが変更になります。

トウラムソルジャーの方の戦況が芳しくないので戦力を移動させるみたいですね。

天之河師範、坂上兄貴、八重樫姉貴が離脱して、ハジメくんとメルド兄貴が加入します。

ハジメくんは素のステータスは貧弱なので隅っこに下げます。メルド兄貴は盾持ちなので一撃は耐えられますが、逆に言うと2撃目で昇天するのでこちらも下げてください。

2人でお茶でもしばいててください。

つまり、今までと同じって事ですね。それじゃあほもくんは残り2回、殴られてください。

がんばれ♥がんばれ♥

「俺が切り開いてみせる！ 神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ——神威！」

おつ、天之河師範の必殺技が炸裂してトウラムソルジャーが全滅しましたね。

原作ではクソ長い詠唱だった気がしますが、ゲームではテンポのため短縮されています。

流石師範は頼りになるぜ！

というわけでベヒモス戦での時間稼ぎは終わりです。

では者ども引き上げじゃあ！

〈時間稼ぎは成功したようだ！

〈みんなからの援護が飛んでくる！

すまないが派手なエフェクトを乱発するのは処理落ちが発生するのでNG。

ベヒモス兄貴がめっちゃ走って追いかけてきますね。

おーっと、そのまま飛び上がって飛鳥文化アタックだあ！

画面揺れ過ぎイ！ 酔いそうですよこれ。

さて、運命の分岐路その2です。

先ほどの戦闘でハジメくんより前に出ていたらこのイベントが発生します。

逆に、ハジメくんより後ろにいれば別のイベントが起きます。

こんなの初見で分かるわけないんだよなあ…。

味方の援護もむなしく飛鳥文化アタックによって石橋が壊れてしまいました。

ベヒモス兄貴は早々にメガトンコインしましたが、ほもくんのいる足場も碎けてメガトンコインしそうになってますね。

〈このままでは落下してしまう！

「衛！ はやく手を掴んで！」

〈『南雲ハジメ』が手を伸ばしている！

〈彼の足元は今にも崩れてしまいそうだ！

〈どうしようか……

きみたち…いつの間にも名前呼び合うようになったんですかね？

それはさておいて、『思いつきり跳躍する』『手を掴む』『突き飛ばす』の3択から選びます。

『思いつきり跳躍する』を選べばハジメくんだけメガトンコインします。

『手を掴む』を選べば2人もろともメガトンコインします。

奈落ハジメくんが目当てなら、この2つのどちらかを選びましょう。

今回のチャートではきれいなハジメくんに頑張ってもらうので、3つ目の『突き飛ばす』を選びます。

〈……彼を巻き込むわけにはいかない！

〉『南雲ハジメ』を突き飛ばした！

悪いな、この奈落一人用なんだ。

というわけであればよダチ公！　ほもくんがいなくても、しつかりとレベリングするんやで！

また後でチエツクするからな！

この3つ目の『突き飛ばす』ではハジメくんはメガトンコインしませんが、代わりにほもくんがメガトンコインします。

「そんな……衛……」

「ま、まもる……ん！」

ハジメくんと谷口姉貴迫真の叫び声です。

でも谷口姉貴はクロコダインを思い出してちよつとだけ笑いそうになる。

なお、友達0人だと誰も叫んでくれません。

無言で落ちていきます。悲しいなあ……

というわけでほもくんは一人で旅立つことになりました。

ここからしばらくはソロです。

次にパーティを組むのは1……か2時間くらい後ですかね。

いや、多分もつと後ですね。

あ、ちなみにですが、20階層までにレベルを上げまくればここでベヒモスを倒すことも出来ます。

倒せばこのイベント自体発生しなくなります。

誰一人欠けることなく、普通に帰って終わりです。

『怪物殺し』のトロフィーを入手できるので、コンプ勢兄貴は頑張ろうね！

〈奈落の底に落ちていく……

〉みんなは無事に脱出できたろうか……

ほもくんがモノログを垂れ流しながらメガトンコインしている間にこれからの予定をば。

まずは当然ですが、オルクス大迷宮の攻略をします。

オルクス大迷宮は全部で200階層からなるクソみたいに長いダ

ンジョンです。

ただ、100階層までは遠距離攻撃をしてくる魔物がほとんどいません。

なので、ほもくんのレベリングをしながらパパッと進めます。

それ以降からいやらしい攻撃をしてくる魔物がちらほら出てきますので、途中でメイン火力を回収してごり押ししながら、一気に攻略します。

ラスボスが出現するにあたっては、全ての迷宮の攻略完了および神代魔法の回収がフラグとなっています。あくめんどくさ。

メルジーネ海底遺跡とハルツィナ樹海を考えた奴はもう許さねえからなく？

攻略する順番は一部を除いて自由ですが、効率などを考えた結果、ここを一番最初に攻略するべきだと結論が出ました。

つまり、オルクス大迷宮でメガトンコインをした原作のハジメくんはRTA走者だった…？

さて、説明している間にメガトンコインが完了しました。RPG特有の落下ダメージゼロです。

伝説のウィッチャーなら間違いなく肉片も残ってませんでしたね…。

そしてイベント戦開始です。

着地狩りのごとく出現したのは『スタンプラビット』『ライトニングウルフ』ですね。

セイバーオルタ姉貴みたいに赤黒い線が脈動してるけど、何かスポーツでもやってたの？

原作では敵対してた奴らですが、なぜか手を組んで襲い掛かってきます。

まるでモンハンみたいだあ…（直喩）。

～魔物が襲い掛かってきた！

戦闘開始です。気を付けるべきなのはライトニングウルフの放電攻撃くらいですね。

スタンプラビットは物理攻撃しかしてこないの、ほものおやつで

す。

こちらはほもくん一人なので挑発は要りません。防御しましょう。

【連携が行えるようになった！】

あ、ベヒモス戦が終わったので機能が解放されましたね。

『連携』というのはキャラをトゥーマンセルにして、互いにキャラ固有の恩恵を受けさせたり、合体技が繰り出せるようになったりする戦術です。

ですが、今のほもくんはソロなのでどうやっても使えないですね…。

またパーティメンバーが加入したら実際に使いながら説明しましょう。

チュートリアルはキャンセルだ。

【ライトニングウルフは激しい放電を行った！】

アツイツシュ！ …なんて言うと思ったか馬鹿めが！

放電は魔法攻撃に分類されます。つまり、アイギスの盾と防御の効果によってダメージは負いません。

ほーら、物理攻撃じゃないとほもくんのHPは削れないよ？（煽りカス）

…かかったなアホが！ オラツ、盾反撃！

＜戦闘に勝利した！＞

＜少しだけ強くなれた気がする…＞

うーまーあーじー！

この経験値効率がオルクス大迷宮の最も優れた所です。

200階層付近でうろついているれば、クリアレベルまであつという間にレベルアップすることが出来ます。

＜何か近付いてくる気配がする！＞

奈落最初のイベント戦は、2連戦です。

原作でハジメくんの腕を持って行った爪熊ですね。

ゲームでの表示名は『クルーティベア』です。

＜魔物が襲い掛かってきた！＞

というわけで2戦目です。

敵の行動パターンは、遠距離魔法攻撃の風爪と、近接物理攻撃のアームクラッシュの2通りです。

つまり、さつきと一緒にですね。防御してればそのうち勝手に氏んでくれます。

普通に戦うと結構な強敵なのですが、盾反撃守護者のタイマン性能のお陰で無傷の突破です。

やはり防御力は正義だって、ハッキリわかんだね。

∨戦闘に勝利した！

∨少しだけ強くなれた気がする……

そしてこれでレベル18ですね。APは状態異常耐性に全て振りましょう。

状態異常耐性はレベル×3%で状態異常を防ぐ技能です。レベル10にすれば30%ですね。

さらにさらにいい、キャラメイクで『冷静沈着』を選んだことで状態異常耐性がデフォルトで10%付いています。

アイギスの盾と合わせて、これでなんと90%の確率で状態異常が効かなくなります！

これにて護身完成。鉄壁のほもが出来上がります。

それでは、ダンジョンを進めていきますが、代り映えのしない光景が続くので倍速で行きます。

×4 甥の木村、加速します。

ちなみにステータスについてですが、原作ではハジメくんがやべーことになっていましたが、ゲームバランスを考えて今作ではナーフされています。

とは言っても、それでも他のキャラに比べればだいぶ高いんですけどね。

あ、ダンジョンの所々に宝箱が置いてあるのでしつかり回収はしていきます。

MP回復用のマジックポーションが入っているとうま味です。

また、オルクス大迷宮ではランダムに鉱石や植物などが採取できるポイントが湧き出る事があります。

モンハンの採取ポイントみたいな感じですね。
ピッケルとかは要らないので、これも通りすがりに回収しておきま
しょう。

後でこういった資源は必要になってきます。

次のイベントまでだいぶ時間がありますので、皆様のためにいゝ。

迷宮攻略の順番を説明しようと思います。

ラスボスフラグである7大迷宮は、簡悔精神に溢れた、クズの所業
によって作られたダンジョンです。

解放者はヴァナ・ディール出身だった…？

攻略する順番は一部を除いて自由と言いましたが、メルジーネ海底
遺跡はグリユーエン大火山を攻略しないと入れないですし、ハルツイ
ナ樹海に至っては迷宮を4つ以上クリア、かつメルジーネ海底遺跡の
攻略を完了させている必要があります。

ファミ通の攻略本と睨めっこしながら考えて出た結論が、以下の攻
略順です。

オルクス大迷宮↓ライセン大渓谷↓グリユーエン大火山↓メル
ジーネ海底遺跡↓ハルツイナ樹海↓神山↓シユネー雪原。

おそらくこれが、今回のチャートでの最適解です。

もつと早いルートを知ってる兄貴は是非走ってみてください。オ
ナシヤス！

おつ、倍速してる画面ではちようどほもくんがレベル25に上がり
ましたね。

凄まじい勢いで経験値を吸引しております。

天職：守護者

level：25

筋力：350

体力：1032

耐性：541

敏捷：231

魔力：152

魔耐：527

技能：盾反撃lv. 4

自動回復lv. 10

状態異常耐性lv. 10

これが今のほもくんのステータスです。

紛れもないガチタンですねこれは…。

魔力がレベル10の天之河師範より低いのは草生えますよ。

ここまでのレベルになると100階層まで苦戦することはありませぬ。

途中でベヒモス兄貴も出てきますので、リベンジする事も出来ません。

今のほもくんであれば後れを取る事は無いでしょう。

ただ、このゲームはシンボルエンカウト方式なので無駄な戦闘は避けていきます。

さて、それでは一気に100階層まで飛ばして真の仲間を今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

100階層く封印部屋終了まで

火力を探して三千里なRTA、はーじまーるよー！

前回は奈落開始までお送りしました。

今回はその続きからですね。

特に苦戦するような要素もなく、無事に100階層まで着きました。

：嘘です。実は何回か氏にかけました。生きてるからセーフです。気にするな！

厄介な敵とはエンカウントを避けていたので、あまり苦戦する要素は無いんですね。

楽に勝てる相手とだけ戦えばいいのですよ。

100階層に到達するまでにヒールポーションを8つ、マジックポーションを5つ拾ってます。

ヒールポーションはともかく、この先のイベントのためマジックポーションは絶対に1つは拾っておきたかったので運が良かったです。

その間にほもくんのレベルも30まで上がっており、獲得したAPは体力増強にすべて振ってます。

体力増強はレベル×10%だけHPの上限が増える技能です。

現在はレベル5まで振ってるのでHP50%上昇となります。

ほもくんのHPが現在デフォルトで1500程度なので、2200程度まで増えています。これは大きい。

当然ですが、HPが増えれば自動回復の量も増えます。肉壁役としては必須と言っても良い技能の一つですね。もちろんその他にも理由があつての事ですが…。

レベル30もあれば100階層も突破できますよ。

さて、100階層では、新たな仲間を迎え入れることが出来ます。では下に続く通路は一旦無視して脇道に逸れましょう。

脇道をまっすぐ進めばいかにも扉がありますね。

く扉には2つの窪みがある

＜何かはめ込む物がありそうだ……

RPG特有の封印されし扉要素です。

扉の両隣にクソデカサイクロップス先輩の石像があるのでそれを調べます。

＜今にも動き出しそうな石像だ

＜もう少し調べてみようか……

当然、答えは沈黙！ ……ではなく『調べる』です。

＜石像が突然動き出した！

＜魔物が襲い掛かってきた！

ポポポ……

ダルビツシュ……

CAPTURED……

戊辰戦争……

EMURATED

EMURATED

EMURATED

というわけでイベントボスである『ガードサイクロップス』×2との戦闘です。

デカイ剣を持っている事から分かるように、こいつらは物理攻撃しかしてきません。

ただし、間合いが密着く中距離と広いので、しっかりと距離を詰めて防御します。

いつもの盾反撃ですね。

【ガードサイクロップスは金剛を使った！】

こやつらは物理防御力を上昇させる『金剛』を使ってきました。

やたら性能が良いバフなので、効果があるうちは物理攻撃はほとんど効きません。

が、ほもくんはレベル25で、相手単体に攻撃しつつバフを1つ剥がす『廻盾』を覚えているので、金剛を使ってきたらこれで対処してやりましょう。

明らかに盾を投げつけてるんですが、どうやって回収してるんです

かね…。

【ガードサイクロプスは衝撃剣を使った！】

イタイツシュ！ HPが半分消し飛んだ！

ガードしてない時に攻撃するのはNGだって言ってるだろオオ！？

衝撃剣は、単体を中心とした円形範囲に攻撃する技です。

やたらと範囲が広く、しつかり下がっていないと後衛も巻き込める恐れがあるので気を付けましょう。

解説している内にあと一体になりましたね。

サイクロプス先輩は鈍足な上、魔法防御力が低いので、魔法を連射していればすぐに倒せます。

なので、通常プレイでは箆にも棒にもかからないボスになっています。

＜戦闘に勝利した！＞

＜少しだけ強くなれた気がする…＞

戦闘終了です。自動回復のお陰もあり、ほぼ無傷での突破ですね。

やっぱり盾反撃守護者の安定感を…最高やな！

＜『開錠の魔石』を手に入れた！＞

サイクロプス先輩を倒したことでイベントアイテムが手に入りましたね。

ここでしか使いどころさんが無いのでさっさと使いましょう。

＜扉には2つの窪みがある＞

＜何かはめ込む物がありそうだ…＞

＜『開錠の魔石』が使えるそうだ！＞

おつ、開いてんじやーん！

それじゃあAPを振って入りましょう。

天職：守護者

level：31

筋力：465

体力：1623（+973）

耐性：762

敏捷：350

魔力：241

魔耐：754

技能：盾反撃lv.4

自動回復lv.10

状態異常耐性lv.10

体力増強lv.6

うーん、この偏り具合よ。まあ、育成は上手く行ってるのでこれで良いんですけどね。

あ、ちなみにこの部屋ですが、開けなくてもラスボスを倒すこと自体は可能です。

その場合、ここにいる人はずっと放置されたままエンディングを迎えることになります。

金髪の子可哀想…。

＜辺りは真っ暗だ…＞

＜少しずつ目が慣れてきた気がする…＞

デカイ直方体が置いてあるデカイ部屋ですね。

ここに今回チャートのメイン火力が生息しています。

「……だれ？」

アレーティア・ガルデイエ・ウエスペリテイリオ・アヴァタールさんオツスオツス！

白刃一掃しそうな名前だけど、何か剣術でもやってたの？

この直方体に埋まって封印されている金色のワカメが、今回チャートでの固定砲台さんです。

＜どうやら誰かがいるようだ

＜何者だろうか…＞

『自己紹介をする』と『そっとしておこう』の2択ですが、後者を選ぶと無駄に時間を食うのでちやつちやと話を進めましょう。

オツス、オラほも！ ここにはメガトンコインして来たんだ！

助けてあげるから火力奴隷として働いてくれない？

ねね、いいだろう？ ぼく絶対にしゃぶらないよ！

「……お願い！ ……助けて…！」

あつ、いいつすよ（快諾）。

じゃけんパーティに入りましょうね。

「……お願い……なんでもする……だから……！」

ん？ 今なんでもするって言ったよね？

なんて言っているうちに、聞かれてもいない身の内話を勝手に始めます。

詳しく知りたい人は原作を読んで、どうぞ（ダイヤモンド）。

へー、おじさんに裏切られて、腹筋ボコボコにされてここに封印されたのか。

そのおじさんってもしかして竹刀持ってなかった？

カツラギさんって言うんだけど…。

＜どうしようか……

『助ける』と『立ち去る』の2択ですが、さっさと助けます。

（葛藤だとかは）無いです。余計な会話は挟みたくないの。

『立ち去る』を選べば引き留められますが、そのまま無視して部屋を出る事が出来ます。

＜助けることにした

ちなみに、ここの封印ですが、原作では魔力全開にしなければ解けませんでしたが、近接職で魔力が無いお一人様のための救済措置として、足りない分のMPをHPで肩代わりすることが出来ます。

魔力が枯渇した時に生命力で補う展開すき。

必要なMPは1000なので、ほもくんの場合は1000から241引くことの759、HPが減ります。

もちろんMPは空っぽです。すっげー疲れたゾー。

＜どうやら封印は解けたみたいだ

＜かなりの疲労を感じる

「……ありがとう」

というわけで無事に確保しました。ちよろいもんだぜ。

以降はパーティの火薬庫として括約してくれるでしょう。

「……名前、付けて」

彼女の名前は、自分で決めることが出来ます。

ヒロイン：名前を付けられる…うっ、頭が！ それはそれとしてヨコは氏ぬべきだと思う。

名前はデフォルトのユエで良いでしょう。申し訳程度の原作要素です。

「…んっ。今日からユエ。ありがとう」

はいはい、それじゃ早速イベント戦に移りましょうね。

あ、余談ですが、この時のユエ姉貴の服装は先頭にいるキャラの着ている上着をそのまま移す感じになります。

ほもくんの場合はフード付きの白コートですね。

∨何かの気配を感じる！

上から来るぞ、気を付けろ！

ユエ姉貴の封印を解いたことでイベントボスである『センチネルス コーピオン』が出現しました。

5メートルくらいある4本腕、2尾のサソリです。

∨魔物が襲い掛かってきた！

さて、イベントボス戦です。

センチネルスコーピオンは遠近共に隙の無い性能をしています。

耐久力も高く、特に物理攻撃に対しては常時90%カットというすさまじい耐性を誇ります。

ただし、炎属性の魔法には弱いので、魔法使いを複数連れていけばわりと簡単に勝てます。

この戦闘では、時間経過でユエ姉貴が参戦してくれるので、それまで何とか耐え凌ぎましょう。

具体的には、ほもくんが5回行動をするまでです。

ユエ姉貴は隊列の後ろでじっとしてしますので、攻撃が行かないように立ち位置には十分に気を付ける必要があります。

彼女の耐久力は濡れたティッシュくらいしかないので、通常攻撃一発で昇天します。

というわけで、センチネルスコーピオンの横まで移動して挑発しておきましょう。いつもの。

ちなみに、ほもくんのHPは2600程度なので自動回復は780

くらいです。さつき使ったHPは取り返せましたね。

【センチネルスコープピオンは剣を振り回した！】

イタイツシユ！ これは物理攻撃2回ダメージですね。

ほもくんを以てしても4割ほどのHPが無くなりました。

一応、盾反撃はしてませんが、全然減ってないですね…。

これが90%カットの力です。100回殴っても倒せないゾ…。

挑発は2回行動するまで続くので、挑発が切れるまでは防御しましょう。

じゃないと自動回復が間に合わず、ほもくんが氏にます。

【センチネルスコープピオンは針を飛ばした！】

痛いんだよオオオ!! 今のほもくんのガードの上から4割弱持つて行くってどんな火力なんだよチクシヨウ！

今のは大外れの行動です。単体攻撃+出血の状態異常付与です。

幸い出血は弾きましたが、それ抜きにしても痛すぎる。

あ、出血は行動するたびにHPが2割減る状態異常です。

挑発が切れたので再度使います。針飛ばすな…針飛ばすなよ…!

通常攻撃はセーフ！ 直撃しても3割くらいで済みます。ガード、

ガード！ 固めてるか？

【センチネルスコープピオンは酸をまき散らした！】

これはうま味ですね。酸まき散らしは状態異常判定のみでダメージはありません。

ほもくんの90%耐性が良い仕事をしています。

今回は無事に弾きましたが、酸の状態異常は防御力低下+行動毎1割ダメージなので、入ったら割とシャレになりません。

よしよし、これなら虎の子のヒールポーションを使わなくても良さそうですね。

【センチネルスコープピオンは針を飛ばした！】

針飛ばしはジリ貧になるのでNG。遠距離攻撃なので盾反撃も反応しません。

ですが、今ので5回目の行動になります。

しばし遅れをとりましたが、今や巻き返しの時です。

「……信じて」

時間が経ったのでユエ姉貴が参戦してくれます。

とはいえ、初期状態ではMPはすっからかんの状態です。

吸血して回復したい？　そこにマジックポジションがあるじやろ？

じゃけんポジションをさっさと飲んで攻撃してくださいね。

マジックポジションはMP最大値の半分を回復します。ちなみに、端数は切り捨てです。

ユエ姉貴のMPは893なので446回復します。

道具を使うのにも行動1回分を消費するので、ユエ姉貴に攻撃が行かないようにほもくんはしっかりとタゲ取りをしておきましょう。

【センチネルスコピオンは針を飛ばした！】

ヴォエ！　防御してない所に針が飛んできた！

氏ぬ師ぬ詩んじやう！　ほもくんのHPがあと200しか残ってない！

なんで今回に限ってこんなに針を飛ばしてくるんだコイツ！

よし、ユエ姉貴の番が回ってきた！　もう許さねえからなく（豹変）。

魔法コマンドからとっておきの一撃をお見舞いしてやりましょう。

「蒼天」

オラツ、蒼天！　弱点の炎属性じゃあ！

MPを200消費しますがその威力は折り紙付きです。HPが半分減りましたね。

ユエ姉貴の強みはこれです。通常、魔法を使うためには、選んでから発動するまでにデイレイが掛かるのですが、彼女の場合は一切デイレイが掛からず、即座に発動させることができます。

それじゃあ、ほもくんは防御しといてくださいね。

【センチネルスコピオンの周りの地面が波打った！】

自分を中心とした円形範囲内の敵を動けなくして、次回行動時にダメージを与える行動ですが、ハッキリ言って今更遅いです。

その前にユエ姉貴の行動順が回ってきて終わりですね。あ、ほもく

んはそのまま防御しててね。

「蒼天」

最後の一発くれてやるよオラ！

＜戦闘に勝利した！＞

＜『シユタル鉱石』の塊を手に入れた！＞

＜少しだけ強くなれた気がする……＞

これにてセンチネルスコアピオンの撃破完了です…。

そしてドロップアイテムである『シユタル鉱石』をゲットですね。

途中危ない場面もありましたが何とか耐えました。やはり低レベルチャートだと事故が怖い。

本来ならレベル50くらいまで上げてから挑むボスですからね。

防御特化のビルドだからこそレベル31で耐え切る事が出来ました。

「……とりあえず……早くここから出たい。……行こう？」

＜『ユエ』が仲間になった！＞

ともあれ、これで真の仲間の一人であるユエ姉貴が啜りました。

これからは敵の殲滅速度が桁違いになります。

ついでに封印石が拾えれば良かったのですが、残念ながらラスボスと顔合わせしなければ拾うことができません。

そして、パーティメンバーが入った事で『連携』が設定できるようになりました。

前回のパートでチラツと説明しましたね。では、実際に使いながら説明しましょう。

まずメニュー画面の『戦術』から『連携』を選んで、組ませたい2人を選びます。

ほもくんとユエ姉貴しかいないので、今はこの2人だけです。

組ませたいキャラを選んで、連携の設定は終了です。これでお互いに戦闘中、連携の効果を受けられるようになります。

レベリングも兼ねてエンカウントしましょう。

雑魚敵の『サーベルバード』×3です。

ユエ姉貴に攻撃が行かないように、ほもくんは開幕でしっかりと挑

発をします。ユエ姉貴は適当に待機しときましよう。

【サーベルバードは鋭い羽根で斬りつけた！】

いつも通りほもくんが攻撃を受けますが、そこまで痛くは無いですね。

この程度じゃ虫も頃せねえぞ！

「……お返し。『緋槍』」

そして連携が発動してユエ姉貴が反撃してくれました。流石の攻撃力というべきか、一撃で焼き鳥が出来上がりました。

これこそが連携の効果です。組んだ相手が攻撃を受けたり、攻撃を行ったりした時などに追加で行動をしてくれるようになります。

今のはペアが攻撃を受けた時に発動する『魔法反撃』ですね。

盾反撃守護者と非常に相性が良いです。

ただし、魔法反撃にも問題点はあつて、当然ですがMPを消費するのでMP管理はしっかりする必要があります。

さらに使われる魔法は攻撃魔法から完全にランダムで選ばれるので、例えば炎属性無効の相手に延々と蒼天や緋槍を使い続ける場合があります。ドジっ子かな？

＜戦闘に勝利した！＞

速いっすね。1回ずつ魔法反撃しただけで戦闘終了です。

では、再び階層を下りつつ、ユエ姉貴についての解説をしましょう。

ユエ姉貴は、魔法ゴリラです。このゲームを象徴するかのような偏った性能をしています。

全魔法使い中最強の攻撃力！ 先手は取れる程度の素早さ！ そしてスペランカー並みの耐久力！

やられる前にやれという言葉を実に再現しております。

そして、ユエ姉貴の最も優秀なところとして、全属性の魔法を使える点が挙げられます。

ほぼ全ての敵に対して安定した高火力を発揮できるのは非常に強みです。

ただし、燃費が劣悪です。考えずに魔法を連発しているとあつという間にガスケツになります。

ですが、それは対策済みです！

ユエ姉貴はスキルに『吸血』があり、これを行う事でMPを回復できます。

吸血は、戦闘中だけでなく移動中にも使うことが出来るスキルです。

味方一人の最大HPの10%を消費して、その消費したHPの1/2のMPを得ることが出来ます。

ほもくんの最大HPは2600なので、吸血すればMPを130回復できる計算になります。

そしてほもくんは戦闘で行動するたびにHPが3割回復します。

基本的に戦闘では、モンスターシンボルに後ろからぶつかられない限りこちらが先手を取れます。

ほもくんはユエ姉貴よりも素早さは高いので、確実に開幕で回復できます。

ユエ姉貴の魔法で速攻をすれば攻撃を受けることなく戦闘を終わらせることができるので、つまりそういう事です。

ユエ姉貴が魔法を使って敵を頃して！

ユエ姉貴がほもくんの血を飲んでMPを回復…！

永久機関が完成してしまいました。ノーベル賞ものですねコレハ…。

この吸血がほもくんの技能で体力増強にAPを振った理由の一つです。

HPが多ければ多いほど回復量が多くなりますからね。

ほもくんにはこれから肉壁の他にMPタンクとしての役割も熟してもらおう事となります。

それでは、ほもくんから血液を奪いつつ火力でごり押しして一気に200階層まで今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

101階層〜200階層

常に貧血気味の主人公が駆け抜けるRTA、はーじまーるよー！
前回は封印部屋でユエ姉貴を仲間に啞え入れたところまで進めました。

戦闘が早く終わるようになったので、倍速で一気に進めていきますよ。

×4 甥の木村、加速します。

原作ではここから50階層ほど下りればゴール地点でしたが、このゲームではあと100階層下りなければゴールにたどり着けません。馬鹿じゃねえの。

すまないが、カルピスを薄めたようなダンジョンはNG。
時間泥棒のオスカー・オルクスはもう許さねえからなく。

封印部屋の100階層からさらに10階層進めば原作でもあったアルラウネ兄貴のイベントが起こります。

お前、薄い本で重宝されそうな能力持つてんな。

あ、画面ではちょうどユエ姉貴が操られてますね。
早速ですがイベント戦です。

＜『ユエ』が操られている！

＜魔物が襲い掛かってきた！
さて、それでは『オペレイトアルラウネ』と『ユエ』の相手をしてしよう。

とは言ってもオペレイトアルラウネだけを倒せば戦闘は終了しますので、ユエ姉貴を攻撃する必要はありません。

そしてユエ姉貴を操っている時はオペレイトアルラウネは動けません。

じゃけん防御しましょうね。

「……逃げて……」

ユエ姉貴が悲しそうに緋槍を使ってきましたが、ほもくんは防御しているのでダメージが無いです。春日効かねえんだよ！

当然ですが、魔法はMPを使うのでその内ユエ姉貴はガスケツしま

す。

さつさとオペレイトアルラウネを倒せばええやん、と思うかもしれませんが、奴はほもくんの攻撃では2回ほど殴る必要があります。

ユエ姉貴の魔力ゴリラっぷりは半端ないので、使われる魔法によっては一撃でほもくんが蒸発する可能性があります。なので、ここは確実な方法で行きます。

「……私の事はいいから……!」

何か言ってますが黙って盾を構えておけばOKです。うつかりMPが切れた状態で頃しちやうと復活アイテムの『神水』が無ければ復帰できません。

折角だから燃費の良い風刃よりも蒼天とか凍獄とかの方がうま味だったんですがね。

まま、エアロ（チョコ並感）。

今までの戦闘で減ったHPを自動回復で補充できるので、このチャートではある意味ではうま味イベントです。

あ、MPが切れましたね。MPが切れるとユエ姉貴はポコポコ殴ってきますが彼女が物理で殴っても当然ダメージは無いです。逆に拳を痛めそう。

き…きかぬ、きかぬのだトキ!!

ユエ姉貴がクソ雑魚になった後はオペレイトアルラウネを殴って終わりです。

こやつは耐久力が無いのでほもくんでも2回ほど殴れば倒せます。ちなみに、この時にユエ姉貴の腹筋をボコボコにすることもできるので特殊性癖の人はやってみるのも良いんじゃないですかね。ぼくはやりません。

当然ですが、ユエ姉貴のMPが無い状態で腹ボコして戦闘不能になると自動再生は発動しないので、神水が手元にある時だけにしようね。

∨戦闘に勝利した!

というわけで無傷の突破です。ユエ姉貴はMPが空っぽですが吸血で回復すれば問題ありません。

それじゃあチューチューしましよーねー。

クククク……。血はビタミン・ミネラル・タンパク質……そして塩分が含まれている完全食だア。

「…………ごめんなさい」

あつ、良いっすよ(快諾)。ノーダメでしたし気にしなくてもええんやで？

じゃけん、謝っている暇があるなら先に進みましよーねー。

ここから先は横道に逸れれば様々なイベントがあるのですが、強制的に起こるイベントは今のだけです。

では、また倍速しつつ、各種解説をば。

まずはユエ姉貴ですが、ほんの一部を除いて離脱することは無いのでパーティには出ずっぱりになります。何気に初期レベルが60もあり、普通プレイでも即戦力レベルの強さですね。

低レベル進行ではまさに天の恵みです。最上級魔法も最初からすべて使えるので、ガンガン使っていきましょう。

一応『高速魔力回復』の技能があるのでフィールドを歩いていたら少しずつMPが回復するのですが、正直雀の涙しか回復量がないので当てにしない方が良いでしょう。

自動再生？ どうせ攻撃は喰らわれないしフヨウラ！ 自動再生は行動毎にMPを使つてベホマ、もしくはザオリクを自身に使う技能です。MPがもつたいたない。

ほもくんに關しては特に言うことは無いでしょう。

肉壁兼ガソリンスタンドとして役に立ってもらいます。

ほもくんの連携に關してですが、こちらは連携相手が攻撃された時に庇う効果があるので、後衛であれば誰でも相性が良いでしょう。

ただし、範囲攻撃であれば庇っても半分ダメージを通すので勘弁な！

それにしても平和だねー。特に苦戦する要素もないですし、エンカウントは最低限にしているので、眠くなってきました。

オルクス大迷宮のマップとして一番近いのはテリーのワンダーワンド3Dでしょうか。

ある程度ランダム生成になっていますが、階層ごとの雰囲気は決められている感じです。

でも、迷宮の中に青空があるっておかしい…おかしくない？

…細かい事は気にしない方が精神衛生上いいので、放っておきましょう。

あ、もちろん道中のアイテムは取れるものは取っておきます。

後々の事を考えると出来る限り多い方がいいですからね。

それにしても道具はどこに入れてるんですかね…。現在ヒールポジションが12個、マジックポジションが10個あるんですが、どう見ても靴一つに入れられる量じゃないです。

まあポケモンとかでも靴に釣り竿が3本入ったり自転車が入ったりボールが99個入ったりするので、ゲーム上の表現としておきましょう。

あ、そうそう。マジックポジションはボス戦のために念のため5つは用意しておきたいです。

今回は10個も拾えましたが、足りなければ階層を行き来して探しましょう。

▽この先からとてつもない嫌な感じがする…

▽どうしようか…

そしてようやく200階層に到達です。おつかれちゃーん。

この先はオルクス大迷宮のボスであるヒュドラくんがいます。

天職：守護者

level：57

筋力：682

体力：2820（+2820）

耐性：1251

敏捷：450

魔力：345

魔耐：1198（+599）

技能：盾反撃lv. 4

自動回復lv. 10

状態異常耐性 1 v. 10

体力増強 1 v. 10

起死回生 1 v. 10

魔耐強化 1 v. 10

敵視強化 1 v. 2

ステータスはこんな感じですよ。

今更ですが、このステータスは装備の数値を反映していない数値となります。戦闘時には装備による防御値や補正が加わって計算されず。

馬鹿みたいな体力の伸びのお陰でユエ姉貴も吸血1回でMPが300近く回復するようになりましたね。

そして、新しく『起死回生』『魔耐強化』『敵視強化』にAPを振りました。

『起死回生』は、即死回避+回復です。(100-技能レベル×9)%以上HPが残っていたら、それ以上のダメージを受けてもHPが1残るようになり、さらに技能レベル×3%のHPを回復します。

レベル10まで振っているので、10%以上HPが残っていたら即死回避をして30%回復ですね。

ヒュドラくん相手に少しでも事故を減らすために振りました。

これから先必要な技能でもあるのでちょうど良かったです。

ただし、発動するのは1回の戦闘で1回限りなので過信しすぎないようにしましょう。あくまで保険です。

『魔耐強化』は読んで字のごとく魔耐を技能レベル×5%上昇させる技能です。

ヒュドラくんは魔法攻撃が激しいので最大まで振ってます。

このゲームでは魔法攻撃をしてくる敵が多いので、とりあえず振っておけば仕事をしてくれます。

『敵視強化』は自身へのヘイトを上がりやすくします。

挑発が切れてしまったときのための保険です。以上。

それでは先に進みましょう。長かったオルクス大迷宮もこれで最後です。

その前に吸血でユエ姉貴のMPを全回復させて、ヒーリングでほもくんのHPを全回復させておくのを忘れないようにね。

あ、ちなみにユエ姉貴もレベルアップしてレベル70になりました。

ますます魔力ゴリラつぷりに磨きが掛かっております。

MPも1320になり、ある程度最上級魔法を連発できるようになりました。

イクゾー！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

＜広大な空間だ

＜柱が淡く輝いている……

この階層は雑魚モンスターは出ません。ひたすら真つ直ぐ進みましょう。

しばらく進めばイベント発生です。

なんか静かですね。200階層には魔物もないし、199階層までとはえらい違いだ。

ああ。200階層の戦力は軒並み向こうに回してんのかもな。

まっそんなのもう関係ないですけどね！

上機嫌だな。

そりやそうですよ！ オルクス大迷宮をクリアできるし、タカキも頑張ってたし！ 俺も頑張らないと！

＜巨大な扉がある。あそこが出口だろうか……

＜！ 何かが起こりそうな気配を感じる！

おっと、くだらない事を言っている間にイベント発生地点まで辿り着きました。

「——クルアアアアン!!」

クルルア！（対抗）

そしてボスのお出ましですね。空中に出現した魔法陣からボスが出てきます。

このクソデカイ6頭（大嘘）の大蛇がオルクス大迷宮のボス『ラー

スヒュドラ』です。

大体30メートルくらいですかね。デカ過ぎんだろ…。

「……大丈夫……私達、負けない……!」

即落ち2コマしそうなセリフはやめてくれ。

▽魔物が襲い掛かってきた!

ポーウ! キョウテキトージョーダナ!

さあ、ラースヒュドラ戦の開始です。

いつも通りほもくんは挑発しつつユエ姉貴が範囲攻撃に巻き込まれない位置に移動、ユエ姉貴は高火力の範囲攻撃で6つの首を削っていきます。

赤い頭が炎属性の魔法を、青い頭が水属性の魔法を、緑の頭が風属性の魔法を、黄の頭が地属性の魔法を、白い頭が回復魔法を、黒い頭がデバフ・状態異常を使ってきます。

ただし、全ての行動で魔法を使ってくるわけではなく、時々物理攻撃も使ってきます。

それぞれが別モンスター扱いなので敵の行動がやたら多いですが、ほもくんはタゲが向いていれば問題ありません。

「ラースヒュドラ・赤頭は炎を吐いた!」

アツイッシュ! とは言っても魔耐強化に振ったおかげであまり効いてないですね。

今のは直線範囲上に炎属性の魔法ダメージを与える行動です。

そしてほもくんが攻撃を受けたということは魔法反撃が発動すると言う事です。

「……お返し。『嵐帝』」

風属性の範囲魔法攻撃ですね。雑魚敵ならHPを8割方減らせるんですが流星にボスなだけあって堅いですね。

魔法ゴリラのユエ姉貴を以てしても1割程度しか減ってないです。ほもくんは挑発が切れた時以外は防御です。そうすれば魔法攻撃は怖くありません。

「ラースヒュドラ・黒頭は邪眼で睨みつけた!」

恐怖、もしくは麻痺の状態異常を付与してくる行動です。恐怖は攻

撃、スキル、魔法のコマンドが選べなくなる状態異常ですが、問題なく弾きましたね。ほもくんの状態異常耐性が良い仕事をしています。ほいほい挑発挑発。

「ラースヒュドラ・青頭は水流を吐き出した！」

水属性の魔法攻撃ですね。敵の数が多いので、攻撃力は割と控えめに調整されていますがそれでも10000くらい減ります。アイギスの盾が無ければヤバかったです。

「……お返し。『蒼天』」

ええぞ！ ええぞ！ 最上級魔法はうま味です！

しかも範囲魔法なので良い感じで削れてますねえ！

あ、ユエ姉貴は自分の番が来たらマジックポジションを飲んでてください。

「ラースヒュドラ・白頭は癒しの光を放った！」

「ラースヒュドラ・緑頭の傷が癒えた！」

おげっ、単体を最大HPの1/2回復する魔法ですね。原作のように全回復はしませんが、それでも厄介な行動です。しかも攻撃行動ではないのでこちらの反撃各種は反応しません。黒頭のデバフも同様ですね。

ただ、自身の回復をしてこないように設定されているのがせめてもの救いですので、このまま削っていきましよう。

御覧のようにラースヒュドラ戦は少しだけ持久戦になります。

ほもくんは挑発と防御を繰り返し、ユエ姉貴はマジックポジションをがぶ飲みして、MPに余裕があれば範囲魔法攻撃を使う。

こちらが行うのはこれだけです。

「……お返し。『天灼』」

こいついつもお返ししてるな。

これでマジックポジションは4本消費です。そろそろユエ姉貴のお腹がタプタプになってそう。

そして、これでようやく白頭は撃破です。回復される事がなくなつたのでここからは一気にダメージが加速します。

オラオラア！ ユエ姉貴の蒼天を喰らえい！

「リースヒュドラ・黒頭は邪眼で睨みつけた！」
馬鹿め！ ほもくんにそんなものが効くわけないだろ！

……ん？

……。

……。

麻痺ったwww動けねえwww10%の当選おめでとうございま
すっつてかwww

しかも挑発が切れたwww

……ライダー助けて！

お願い！ ほも殴って！ ほも殴って！

ユエ姉貴に攻撃が行ったら昇天しちゃう！

「リースヒュドラ・緑頭は風の刃を飛ばした！」Critical！
けっ、甘ちゃんが！ でもクリティカルは勘弁な！

2000くらい喰らいましたが、ほもくんは何とか元気です。

「……お返し。『蒼天』」

ユエ姉貴の魔法ガチャの引きが良いっすね。

……あつ。今ので6つの頭が全て倒れた。

✓残った胴体から銀色の頭が姿を現した！

……やばくね？

「リースヒュドラ・銀頭はカースドブレスを放った！」Critical
！！

ゆんやあああああ（ゆ虐）！！

よりにもよって麻痺して防御できないほもくんにクリティカル
ヒットしたあああ！

どうしたんだほもくん！ 何のための状態異常耐性だ！ これは
いけませーん！

これだけは防御して受けなければいけませんでした！

HPが10000くらい飛びましたね……。

ほもくんが約1.8人ほど氏んだ計算になります。

【技能『起死回生』が発動した！】
持つててよかった食いしぱり。カースドブレスは、極太の光線で

す。太すぎるツピ！

直線範囲に魔法極大ダメージと呪いを付与するラーズヒュドラの必殺技ですね。

呪いにかかるとHP回復量が1/10になります。

本来HP1回復は呪いで回復量が1/10になれば、小数点以下切り捨てなので回復しないのですが、起死回生では『死亡判定からHPが1回復する』のではなく『HPが1から減らなくなる』という処理なので、ちゃんと発動します。

やはり食いしぼりは神スキル。

「……お返し。『嵐帝』」

ナイスウ！ 最上級魔法助かる！

というかほもくん、呪いも受けてるじゃないか！ 状態異常耐性90%とは一体何だったのか。

そのせいで起死回生での回復が160くらいしかないじゃないか。ですが、後は止めを刺すだけです。

銀頭は魔法耐性がガバガバなので最上級魔法を2発も打ち込めば倒せます。

ホント、初見頃しのためだけに仕込まれた存在ですよ。

「『蒼天』」

▽戦闘に勝利した！

▽少しだけ強くなれた気がする……

これにてオルクス大迷宮は工事完了です…。

一瞬諦めそうになりましたが、何とか勝てましたね。あと1回攻撃を受けてたら負けてたかもしれません。

「……ふん、私達の勝ち……出直してきて」

リザルト画面でユエ姉貴がドヤ顔をしています。ほもくんが虫の息です。

でも今回ダメージを稼いだのはユエ姉貴なので当然の権利ですね。肉壁はそこでハアハアしてて、どうぞ。

それじゃあ、この先の休憩ポイントで全回復が出来るのでさっさと入ってしましましょう。

∨扉が開いた！

∨先に進めそうだ……

おっ、開いてんじゃくん！

ここから先は非戦闘エリアですので回復などはする必要はありません。

さて、これで長かったオルクス大迷宮の攻略は終了です。次回はクリアまでの準備を整えながらまったりした生活を今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

幕間：今日も空は青い

北条衛という生徒について学校全体が知るところは、やたら言葉が悪く、札付きの不良であるという事だけだ。

だが、交流のあるクラスメイトであればその評価には首を傾げるだろう。

彼は確かに言葉は足りないが、他人を貶めるつもりで言葉を遣うことは無い。

彼は確かに不良のような行動をしているが、自分から人に殴りかかる事は無い。

口下手で威圧感がある見た目だが、基本的に優しい人。それがクラスメイトからの概ねの彼に対しての評価である。

そして、それはトータスに来てからも同じだった。

言葉には出さないが、戦いでは真つ先に一番前に進み出て攻撃を一手に引き受ける。

こちらに来てからまだ二週間ではあるが、北条と同じパーティで戦ったことがある生徒はその間、一度も傷を付けられることが無かった。

普段は突つかかっている天の河ですら、戦いでは頼りにして守りを全て任せていたのだ。

「ここは引き受けた。お前は役割を果たせ」

そう言つて、かつて最強の冒険者をして勝つことが出来なかったという怪物であるベヒモスの前に進み出て一步も引くことなく、ついにはその猛攻をしのぎ切り、あまつさえ反撃をしてのけたその姿を皆は目にしていた。

決して勇者のように華のある戦い方ではなく、むしろひたすらに地味な戦い方である。

だが、どつしりと盾を構えて敵を一步も通さない背中は見ているだけで戦いの中で安心感を覚えてしまうほどだった。

盾と剣を打ち鳴らして耳障りな音を立てたり、攻撃をする仕草を見せた瞬間に盾で顔を殴りつけたり、土を蹴り飛ばしたり、ただひたす

らに敵愾心を自身に向けるような行動で攻撃を引きつける。

20階層までの戦いはメルド団長をして唸らざるを得なかった故に、ベヒモスに立ち向かおうとする勇者を止めなかったのだ。

事実としてメルド団長を含めベヒモスと相對していた天之河や坂上、八重樫などは傷一つ負わなかった。

倒せこそしないものの、時間稼ぎとしては十分すぎる程の戦い方。これならば、とメルド団長は自身の見る目は間違えていなかったと確信し。

そして、その後止めなかったことを後悔することになる。

呆然として奈落を覗き込む男子生徒と、北条を追って奈落に飛び込もうとして押さえつけられる女子生徒。それは、自分の判断ミスが生んだ結果だった。

「落ち着きなさい鈴！ あそこに飛び込んだところであなたが死ぬだけよ！ それにあの高さじゃあもう……！」

「放してっ！ 皆で揃って帰るって！ 皆を護ってくれてっまもるんは鈴に約束してくれたんだもん！ まもるんは鈴とした約束は絶対に破らないから！ だから絶対に生きてる！ だったらすぐに助けに行かないと！ だから放してよお！」

3人がかりで押さえつけられて、なお地面を引つ掻いて進もうとする鈴はやがて力尽きて、項垂れて嗚咽を漏らし始めた。

ハジメは北条に差し出した手をぼんやりと眺めていた。香織が駆け寄ってハジメの名前を呼びながら肩を揺ると、ハジメはハツとしてよろよろと立ち上がる。こちらは何かを考えこんでいるようだった。

「……い、いやだ……こんなうそだよ……まもるん……」

「鈴……」

「皆、早くここから脱出するんだ！ 北条が自分を犠牲にしてまで作った状況を無駄にしてはいけない！」

ベヒモスは奈落に落ちた。だがトラウムソルジャーが出現する魔法陣は消えておらず、今も少しづつ湧き出ている状態だ。メルド団長を筆頭とした騎士団はともかく、クラスメイト達は呆然と壊れた橋を

見つめており、とてもではないが天之河のかけ声一つで戦えるような状態では無かった。

先ほどまで数を減らしていたトラウムソルジャーは階段への道を塞ぐくらいにその数を増やしてしまったている。

「このっ！ 道を、開ける！——『天翔閃』!!」

天之河の放った斬撃が直線状にいたトラウムソルジャーを吹き飛ばす。

それを連続して三度放ち、強引に階段までの突破口を作り出した。

「自分の情けなさに腹が立つてくる！ ええい、全員何をやっている！ さっさと連携を取れ！ 光輝が作った道を閉じさせるな！」

メルド団長が怒りと共に剣を振るうと、天翔閃にも劣らない斬撃がトラウムソルジャーをなぎ倒し、さらに騎士団が突破口を広げる。

そこからは早いものである。精神的には動揺しているとはいえ、常人よりも遥かに優れた力を持つ生徒たちの魔法は、トラウムソルジャーを一掃するには十分すぎる威力を持っていた。

あつという間に階段への道を確保し、全員無事に逃げ延びることに成功する。

帰りの道中は騎士団が率先して敵を蹴散らし、ホルアドの宿屋で誰も言葉が発さないまま一晩体を休め、一番足の速い馬車で王都へと帰還した。

お通夜状態。

オルクス大迷宮から帰還した勇者一行の間に流れる雰囲気の名前を付けるとすれば、これが適当だった。

迷宮での事件から早三日。王国へと戻って事の経緯を説明した彼らに伝えられたのは北条衛の死亡確認だった。

奈落に落ちた故に死体は確認できていないが、あの高さであれば助

かるまいと言う事で、早々に教会と意見が一致してその翌日には死亡認定が出された形だ。

「まさか勇者一行から死者が出るとは」

「こんなにも早くになるとは予想外だったな」

「うむ…だが、勇者が無事であるならば良いのではないか？」

「そうだな。不幸中の幸いだと思っておこう」

「勇者を守った末の名誉の戦死というやつだな」

「あのベヒモスと相打ったとなれば美談にも出来よう」

基本的に勇者一行と言うのは人類の希望であるので、負けては困るのだ。

だが、『勇敢に戦い、勇者を守って強大な敵と相打ちになった』となれば民への言い訳には十分である。

その後、「奴は勇者一行でも最弱」「殺されるのが勇者じゃなくて良かった」「ちくわ大明神」などと割と好き放題に言われているのを聞いて、流石の天之河も肩を怒らせて抗議をしていた。

「あつ、中村さん。鈴ちゃんは…？」

「…だめ。ま、まだ閉じこもってる…」

朝の食堂。クラスの皆が集まるそこに入ってきた中村恵里に、誰かが声を掛けるも彼女はゆるゆると首を振ってそう答えた。

谷口鈴が北条衛に好意を抱いているのは、クラスの中ではもはや共通の認識になっていた。

それこそ『何時になったら付き合い始めるか賭けようぜ』といった娯楽が行われるほどに。

だからこそ、こうしてクラスのムードメイカーが部屋に閉じこもって姿を見せない事について誰も咎める事が出来ないのだ。

幸い、ご飯は食べてくれるし受け答えもしてくれるので、後は時間が心を癒してくれるのを待つしかない。

「…南雲くん、大丈夫？」

一方、南雲ハジメは北条衛の親友として、そして彼の言葉を完全に翻訳できる存在として認識されている。おそらく、北条と一番密度の高い付き合いをしているのは彼だろう。

それを目の前で失った心中は計り知れない。

…と、誰もが思っていたのだが、心配されている当のハジメは割と立ち直るのが早かった。

「ああうん、僕は大丈夫。だって衛だから、その内ひよっこり戻ってくるよ」

心配そうに声をかける香織にハジメが苦笑いして答える。

これは別にハジメが薄情というわけではない。ただ、信じているだけだ。

「先に行け。あと俺は怒ってない」

北条がああ橋でハジメを突き飛ばした時に言っていたことだ。

前半はハジメを含めたクラスメイトに対して。

後半はおそらく檜山個人に対して。

檜山はあの事件が終わった後、完全に針の筵状態だった。

軽率な行動でクラスメイトの命を奪ったようなものだったからだ。

ハジメが北条の言葉を伝えなければ今頃どうなっていたか分からない。

一番の被害者(?)である北条が怒っていないのであれば、という事で今は一応形だけとは言え赦しを得て、白い目で見られるだけになっている。

「愛子先生はショックで寝込んでしまっ…。私たちはこれからどうなるんでしょうね…」

ポツリと雫が溢した言葉に誰も答えることが出来ない。

北条は、天之河とはまた違った形でこの集団の柱的な存在だった。

天之河が皆の道を切り開いていく剣とするならば、北条は道を歩いていく皆を守る盾だった。

存在感も合わさって、ただそこに居るだけで何となく安心感を得る事が出来るのだ。

一先ず、勇者である天之河と、食糧問題を解決する鍵である畑山先生がいる限り勇者一行は無下に扱われることは無いだろう。だが、これ以上戦えるかと言われればほとんどの者が首を縦に振れない。

端的に言えば、あのような形で北条を失った事で心が折れる者がた

くさんいた。

今は天之河が「今の皆には考える時間が必要です」と国王や貴族の方々に掛け合ってくれているものの、近いうちに戦線復帰を促されるだろう。

最後まで沈んだ雰囲気のまま朝食の時間は終わり、各々が自由に過ごすことになる。

ハジメは朝食が終わった後、何となく訓練場へと向かっていた。

普段であれば図書館で本を読んでいるのだが、それでは心が落ち着かないのだ。

「坊主：ハジメだったか。訓練しに来たのか？」

訓練場には生徒はおらず、メルド団長が団員と共に訓練をしていた。

しかし訓練とは言っても騎士団長が行うような訓練ではなく、明らかにハジメたちがここに来た当初やっていたような初心者向けの訓練だ。

それを大真面目にやっていた。

「僕は何となく来ただけです。何というか、落ち着かなくて：メルドさんはその、どうしてそんな初心者向けの訓練をしているんですか？」

「一からやり直す必要があると思ってな。：結局ベヒモス相手に俺は守られるだけだった。本来ならまだ守るべき奴に守られて、のうのと過ごせるわけがねえさ」

オルクス大迷宮から帰って、事の顛末を報告したメルド団長は最悪、自身の首が切られると思っていた。勇者の同胞を守るところか逆に守られて、あまつさえ命を落とさせてしまったのだ。

それくらい覚悟はしていたのだが、お咎めが無かったどころかいレギュラーな事態から勇者を生還させた事を褒められる始末。

その日、メルド・ロギンスは訓練を一からやり直すことに決めたのだ。

新兵がやるような走り込みや素振りなどを、ただひたすらに熟していく。

「そうだ、ハジメも付き合わないか？ 今はごちゃごちゃと色々考えるより体を動かした方が良さだろうよ」

「え、ええ…。でも僕なんかが混じっても迷惑なんじゃ…？」

「問題ない。ここにいるのは新兵のメルド・ロギンスとその仲間たちだからな。ほら、とりあえず打ち込んで来い」

「それじゃあ…お願いします！」

渡された訓練用の剣を握りしめて、ハジメはメルドに斬りかかった。

ハジメは、こういった武器を使った戦闘ではへっぴこも良いところである。それでもメルドは馬鹿にすることなく、真剣に一つずつハジメの攻撃を捌いていった。

「はあ、はあ…！ あ、ありがとうございます！」

「いや、こつちこそ良い訓練になった。初心を思い出せただけで実入りはあったってもんだ」

お昼時まで訓練は続いた。まあ当然と言うか、ハジメは結局メルドに一回も攻撃を当てられなかった訳だが、それでも少しは気が紛れたようだ。

「ハジメはあまり気落ちしてないんだな。…ああ、別に非難してるわけじゃない。衛の友達だって聞いたんで心配したが余計なお世話だったかもしれないな」

「まだ死んだって決まったわけではないですし、衛の事だからきつと何だかんだで生き残ってると思います。だから僕は信じて待つだけです。…うっかりオルクス大迷宮を攻略しちゃうかもしれないので土産話に期待ですね」

メルドはハジメの言葉にキョトンとして、やや間があって大きな声で笑い始めた。

「何か変な事を言っちゃったかな」と戸惑うハジメの背中をメルドがバンバンと叩き、力が強かったのでハジメはすぐくむせた。

「ハハハ、確かにハジメの言う通りだな！ よくよく考えてみればベヒモスの突進を真正面から受け止めるような奴がそう簡単に死ぬはずがなかったな！」

「あいたた…あはは、少しでも元気が出たようで良かったです」

「お前さん、良い男だな！ 衛もお前みたいな友達を持てて幸せだろうよ！」

人とは想定外の事が起こった時には悪い方向に考えが傾いてしまうものだ。

特に今回の状況は絶望的で、ほぼ誰もが諦めてしまっている。それでもほんの僅かな希望を信じて歩き続けるなど誰でも出来る事ではない。

きつと、それが出来る人が勇者と呼ばれる資格を持つのだろう。

(召喚される勇者は一人だつて聞いたんだがな。二人も三人も続けざまに出てくるとは、もしかしたら俺はある意味良い時代に生まれたのかもしれん)

やたらと上機嫌なメルドと別れたハジメは昼食を摂り、ぶらぶらと城の中を歩いていた。

当てもなく歩いていると、いつもの四人組と鉢合わせる。

「よお南雲。散歩でもしてんのか？」

檜山大介、中野信治、斎藤良樹、近藤礼一。クラスでは『いつもの四人』と呼ばれているほどツルんでいる彼らは、それぞれ旅の荷物を背負っていた。

「ああうん。特に当ては無いんだけどね。ただ何となくじつとしていられなくて腹ごなしがたら。檜山くんたちはそんな荷物を持って、どこかに出かけるの？」

「…ああ、俺たちはここを出ようと思ってる」

「えっ」

「本当は俺一人で行こうと思ってたんだどな」

檜山は、今回の騒動の原因である。

彼が軽率な行動をしなければ、皆揃って帰ってこれただろう。

だからこそ檜山はやるべき事をやろうとしている。

すなわち、トータスの各地を冒険しながら北条を探す。そして皆の前に連れ帰って初めて今回の事が本当の意味で赦されるのだ。

探すのであればオルクス大迷宮では？という考えがあるかもしれない

ないが、そちらはおそらく天之河が攻略を進めていくので、それ以外の場所を探すのだ。

北条であればオルクス大迷宮から脱出した後、迷子になってそこら辺を徘徊しているかもしれない。

冒険者になれば色々な所に行けるだろうし旅の路銀も稼げるので、部屋に書置きだけ残して出て行こうとしたのだが、中野、斎藤、近藤の三人に見つかってそのまま四人で出立することになった、と言うのが経緯だ。

「そうだったんだ。その…四人とも変わったよね。去年はチンピラみたいだったのに、今ではまるでラノベの主人公みたいだよ」

「お前はさらつと毒を吐くようになったよな！ 人の黒歴史をほじくり返すのはやめろお！」

「あの大人しい文学少年は死んだんだ」

「いくら呼んでも帰っては来ないんだ」

「もうあの時間は終わって、俺たちも現実と向き合う時なんだ」

去年までの自分たちだったならこんな行動を取っていない事は檜山自身理解しているの、何も言い返すことが出来なかった。

「まあなんだ、悪いな南雲。俺たちはちよっくら行ってくるわ」

「うん、分かったよ。皆にはそれっぽく説明しとくね」

「助かるぜ。…それじゃあ行くか！」

「チーム名はどうする？」「SOS団で良いんじゃないか？」「俺的にはヴォルケンリッターとかが良いと思うんだけど」「いや、俺ら騎士じゃねえだろ。四人だし無難にフォー・オブ・ア・カインドとかで良くね？」などと言いながら四人は去って行った。

しばらく背中を見送っていたハジメだったが、ふと思立ってとある方向に足を向けた。

一方その頃、谷口鈴はと言うと、割り当てられた自室で手帳を開いてぼーっと眺めていた。

トータスに召喚された際に持ってきた数少ないものだ。

手帳には一緒に撮ったプリクラや写真が貼ってあったり、交換日記じみたやり取りが書かれていたり、たくさんの思い出が詰まっている。

「…まもるん」

見ているだけで三日前の事を思い出して辛くなってくるが、ふとした拍子に見てしまう。

辛くなつて、泣きそうになつて手帳を閉じて、しばらく経つとまた手帳を開く。

ただ、それだけを繰り返していた。

そうして気付くのだ。ああ、自分はこんなにもあの人の事を想っていたのだと。

けれども、そろそろ立ち直らないといけない。一人だけこうして閉じこもっているわけにはいかないのだ。だから今日だけはこうしてしよう。明日からはまたいつもの谷口鈴に戻るように。

「谷口さん、いるかな？ あっ、扉は開けなくてもいいよ。僕が勝手に来ただけだから」

そう考えたところで控えめなノックの音が鳴る。

この声はハジメだ。倦怠感のある体に入れて扉を開けようとするも、それを遮られる。

「衛はあの時『先に行ってくれ、後で追いつく』って言ってたんだ。だから僕はそれを信じて今できる事をするよ。ずっと立ち止まってる後で衛に怒られちゃうからね。：谷口さんにどうしようろだなんて僕には言えないけれど、それだけ言いに来たんだ。それじゃあ」

本当にそれだけを言いに来たようでハジメの気配は直ぐに消えた。少しの間静寂が部屋に漂っていたが、やがてふう、とため息をつく音が鈴から漏れた。

「カオリンが南雲くんを好きになつた理由が分かった気がするよ。：うん、きつと南雲くんの言う通りまもるんは生きてる。だったら鈴が

することはこうやって立ち止まってる事じゃないよね」

パアンと音を鳴らして手で頬を叩く。

今できることは諦めない事。彼の生存を信じる事。

死んでしまったと決めつけたら、それは北条がその程度の男だと思っっていると言う事だ。

「よーし、それじゃあ頑張ろう！ 確か愛ちゃん先生が農地巡り？をするはずだから、まずはそれについて行ってまもるんの情報を集めて、それとあとはオルクス大迷宮で実践を積んで強くなって今度こそ鈴が守ってみせるんだ！」

えいえいおー、と一人で掛け声を上げる鈴は、すっかり元の調子に戻っていた。

（待っててね、まもるん！ 鈴が絶対に見つけてみせるから！ そうしたら、その時にちゃんと自分の気持ちを伝えるんだ！）

「あつ、南雲くん」

「白崎さん、ここにいたんだ」

その後もハジメは散歩を続けて、よく手入れされた中庭に来ていた。

綺麗に手入れされた草花を眺めながら進んでいると、隅っこのベンチにはクラスのマドンナである白崎香織が座っていた。

手招きされたので、ハジメは少し離れた所に座る。

「……南雲くんはすごいね。私なら鈴ちゃんにあんな風に言えないや」

「…えっ、もしかして聞かれてたの？ えっ、どこから聞いてたの？」

『谷口さん、いるかな』あたりからかな。私も鈴ちゃんの様子を見に行こうと思ったんだけど、ちようど南雲くんがいたから立ち聞きしちやった。ごめんね？」

「まさかの最初からだった！ あの、こっぴどずかしい事を言っただと
思うから忘れてくれると嬉しいんだけど…」

「ううん、恥ずかしいだなんて、そんな事ないよ…」

頭を抱えて項垂れるハジメを愛おし気に目を細めて見る。

高校入学当初のハジメは、香織が知るように優しい男の子だったが、どこか自信が無いような、卑屈な雰囲気があった。

秋になった頃からだろうか。何がきっかけかは分からないが少しずつ胸を張って歩くようになって、卑屈な雰囲気は消えてなくなっていたのだ。

それが悪いというわけではなく、むしろ逆である。

ハジメの良いところを皆が分かるようになったのは喜ばしかつたがしかし、一部で人気が出るようになったことに対しては複雑な思いもあった。

「さっきの南雲くん、すごくかっこ良かった」

「その、あまり褒められると流石の僕も照れると言うか…」

もによもによと口ごもるハジメに、香織が少し近づく。それを見てハジメが少し遠ざかる。

やがてベンチの端っこに追い詰められて、ぴったりとくっつかれたハジメは仰け反ってしまいが、香織はお構いなしに体を寄せる。

「ち、近い！ 近いよ白崎さん！ こんなところを誰かに見られたら白崎さんの評判に傷が——！」

「……香織」

「へあつ!？」

「私の事は香織って呼んで？ 私もハジメくんって呼ぶね？」

にっこりと可愛らしい笑顔で告げられた内容にハジメは頭が一瞬停止するのを感じた。

ハジメは健全な男子高校生なので、人並みには恋愛に興味があるし、友達と「あの娘可愛いなく、お前はどうぞよ？」みたいなやり取りもしていたことはある。

だが、南雲ハジメからして白崎香織は高嶺の花であった。…あつたはずなのだ。

(何でこんな流れに!? こ、小悪魔を超えた小悪魔だ…! 助けて衛
! いつもみたいに空気を読まずにぶち壊しに来て!)

「……か、香織、さん……!」

期待に満ちた目を裏切ることが出来ずに、ハジメは屈した。

さん付けをしたのはせめてもの抵抗である。

「もう…呼び捨てで良いのに。……ふふっ、ハジメくん」

「な、何か用かな?」

「ううん、何でもない。呼んでみただけ」

「……アツハイ」

(もうどうにでもな—れ!)

天之河にこんな光景を見られたら、多分骨も残らないだろうなあと思
いながらハジメは空を仰いだ。憎々しいほどに青い、雲一つない空
だった。

オルクス大迷宮拠点

ルーンファクトリーと化したRTA、はーじまるよー！

前回はオルクス大迷宮のボスであるラースヒュドラを撃破したところまででした。

今回は反逆者の住処で色々と準備を整えたいと思います。

200階層の奥の扉をくぐると、オスカー・オルクスの拠点だった場所に出ます。

はえー、すっごい大きい…。

3階建ての広い家ですね。1階は居住区、2階は書斎や工房、3階は謁見の間みたいな場所です。

奥にある水源や畑などについては後ほど説明します。

まずは体力を回復がてら1階を探索しましょう。

むむむ、臭うぞー！ お宝の臭い！

▽『調味料』を手に入れた！

▽『調理器具一式』を手に入れた！

▽『食器』を手に入れた！

台所では『料理』に必要な各種道具が手に入ります。

料理はこれもいずれ説明しますが、キャンプで料理をする事でbuff効果が受けられるのです。

最近のRPGとかではよく見受けられるシステムですね。

ちなみに、調味料はどれだけ使っても何故か無くなりません。

市場価格こわれちゃ〜う！

寝室、もとい休憩室では休むことでHPとMPを回復させることができます。状態異常に関しても治すことが出来るので、機会があれば使ってみましょう。

今は朝ですが、ちょうど良いタイミングでもくくんが氏にそうなので、早速休んでみます。

▽豪華な寝室だ

▽休んでいこうか…。

というわけでお休みなさい。当然、全年齢対象のゲームなのでいや

らしい事はありません。

画面が暗転して翌日の朝になって、それで終わりです。

ちなみに、朝に寝ても夜に寝ても翌日の朝までスキップされます。

◁ぼつちり目が覚めた！

◁体力が回復した！

「……んっ、おはよう。体の調子は大丈夫……？」

オツハ——！（クソデカボイス）

これにてほもくんは全快しました。それじゃあ2階に行きましようね。

2階は書斎とか工房とかがある階層です。ここにもお宝がたくさんあります。

原作では指輪が無ければ開きませんが、ゲームではバグなのか最初から開いています。

修正パッチも来てないので仕様だと思えます。

お前のセキユリテイ、ガバガバじゃねえかよ。

何だこれは？ 証拠物件として押収するからなく？

◁『アザンチウム鉱石』×5を手に入れた！

他のファンタジー作品で言うオリハルコンとかのポジションにあたる素材ですね。

これから先使う予定があるのでしつかりと回収しておきます。

お次は宝物庫ですね。ここには各種武器が置いてあります。

性能も非常に良いので、ありがたくもらって行きましょう。

◁『宝物庫』を手に入れた！

宝物庫の中に宝物庫が置いてあります。原作でハジメくんは使っていた、いわゆる『道具袋』ですね。

これがあればより多くのアイテムを持てるようになります。

◁『アザンチウムクロス』を手に入れた！

◁『バイタルグローブ』を手に入れた！

◁『ジエネラルグローブ』を手に入れた！

◁『オーグメントリング』を手に入れた！

◁『セイブ・ザ・マジック』を手に入れた！

＜『ドラゴン殺せる剣』を手に入れた！

＜『ストロングガントレット』を手に入れた！

＜『ウインドブーツ』を手に入れた！

というわけで新装備の回収です。

頭用の装備は何故か一つも置いてないので、お尊顔は生身のままで
す。

本当はもつとたくさん装備が置いてあるのですが、RTAで使う分
だけ頂いていきます。

『アザンチウムクロス』は体装備です。

物理防御力がやたらと高く、それでいて鎧を装備した時に発生する
素早さの低下がありません。

『バイタルグローブ』は腕用の装備です。

物理、魔法防御力共に店売り程度ですが、体力の上限を30%上昇
させる効果があります。

『ジエネラルグローブ』は足用の装備です。

物理、魔法防御力共に終盤まで通用するだけの数値があり、さらに
奇襲を受けなくなります。

以前も説明したように、このゲームはシンボルエンカウント方式で
すが、敵に後ろからぶつかられたりすると、隊列がランダムになり、さ
らに先手を取られるようになります。

また、一部戦闘でも奇襲状態から始まる事があります。

これを装備しているとそれを防いでくれるのです。事故防止のた
めに有用ですね。

この3つをほもくんに装備させて、これが最終装備となります。

『オーグメントリング』は魔法攻撃を増加させる指輪で、『セイブ・
ザ・マジック』は消費MPを20%軽減するアクセサリです。

これはユエ姉貴に装備させます。

他の防具？ どうせ装備させてもオワタ式なので、装備させるだけ
無駄です。

他の装備についてはまた後ほど、使う時が来たら説明します。

それじゃあ2階にはもう用は無いので3階に行きましょう。

3階では、オスカー・オルクス兄貴から指輪を貰えます。あと、黒幕の説明もしてもらえます。

▽白骨化した遺体が椅子にもたれかかっている

▽かなり長い年月が経っているようだ……

鬼畜メガネオッスオッス！ クソ長迷宮はもう許さねえからなく？

まあ、オスカー兄貴はすでに故人なんですけどね。それじゃあさつさと説明を聞いて指輪を貰いましょう。

▽魔法陣から光があふれだす！

▽理知的な眼鏡をかけた青年が現れた

▽彼がこの骸の生前の姿なのだろうか……

そのグルガン族の男は静かに語った……。

クソ長い話なので倍速。簡単に纏めると次のようになります。

昔々、世界中で大惨事大戦が起こっていた。

これも全部エヒトってやつのせいだったんだよ！ ナ、ナンダツテー！

神々の血を引く反逆者が立ち上がって戦いを挑む。

なお、その前に神敵として扱われ、無事頃された模様。

そして、彼らは敗北した。新生の未来へと希望を託すために。

まあ、だいぶ端折りましたが大体こんな感じですね。

ここでラスボスである『エヒト神』の存在を知らされます。

つまり、人間と魔族が争っているのも、ほもくんたちが召喚されたのも、ガシヤットを生み出したのも、変身後に頭が痛むのも、全てエヒト神の仕業だったわけです。

な、何てことだ……！ 早く金田一さんに知らせないと！

話が終わったら神代魔法の一つである『生成魔法』が手に入ります。

戦闘で直接使う事は出来ませんが、武器や道具の作成で活躍する魔法です。

▽頭になにかが流れ込んでくる………！

▽『生成魔法』を習得した！

というわけで生成魔法、ゲットだぜ！ あと『オルクスの指輪』も

ゲットだぜ！

ちなみに、主人公の神代魔法の適性は一律で全て『並』となっております。

それなりに使えるけど特化したキャラには勝てない器用貧乏な感じですね。

さて、これで拠点の機能が全て解放されたのでこれからは旅立ちの準備をします。

することは3つです。

まずは『移動手段』の確保。

外に出るとクソデカフィールドマップを移動しなければいけないので、徒歩だと日が暮れてしまいます。

時間経過と共に夜になり、夜になると強制的にキャンプになってしまうので、少しでも速い移動手段が必要になってきます。これに関しては錬成師主人公じゃない時のための救済措置があります。

次は『道具の補充』です。

主に食料品ですね。このゲーム、とにかく移動が多いのでキャンプは頻繁に発生するのですが、キャンプ時に食料が無いと次の日はステータスがダウンしてしまいます。

腹が減ってはなんとやら、というやつですね。変な所でリアルにしないで良いのですが、文句を言っても仕方ないので食料品はしっかりと確保しましょう。

ちなみに、一部以外のダンジョン内ではどうやら時間は経過しないようで、例えば24時間突っ立っていてもキャンプは発生しません。ええ…（困惑）。

あ、ちなみにこの拠点では朝↓昼↓夜の順番に時間が進みます。日常パートと同じですね。

そして最後に『レベル上げ』です。

オルクス大迷宮は経験値がうま味なので、199階層をうろついていけばガンガンレベルが上がります。

装備も新調したのでレベリングでの事故も起こりません。

ここで一気にクリアできるくらいのレベルまで上げちゃいます。

ではイクゾー！

オルクスの指輪を所持した状態で、2階の書斎にある机の右側を調べればとあるアイテムが手に入ります。

……あれ？

……。

…。

左側だった（微ガバ）。

▽『錬成師の指輪』を手に入れた！

これが救済措置である『錬成師の指輪』です。

アクセサリーとして装備するアイテムなのですが、戦闘においては一切の効果を発揮しません。

ですが、装備をする事によって錬成師でないキャラでも錬成が使えるようになります。

これが無ければこのチャートは成り立たないと言っても過言ではありません。

ただし、錬成のレシピは難易度に依じて☆1〜☆10で設定されており、錬成師の指輪で作れるレシピは☆6までになります。それ以上は天職が錬成師でないと作れません。

今回作る『二輪駆動』は難易度が☆6であり指輪があれば何とか作れますが、『四輪駆動』は☆7なので残念ながら作れません。なので、一先ずの足として二輪駆動を作りましょう。

……と、思っていたのかあ？（ブロリー）

以前、日常パートでハジメくんにとあるものを貰ったのを覚えているでしょうか。

そう、クリスマスプレゼントの『設計資料集』です。

これがあればレシピの☆を1つ下げて扱うことが出来るのです。レベルステイラーか何か？

なので、錬成師の指輪でも☆7のものまで作ることが出来るようになっていきます。

じゃけん、四輪駆動を作りましょうね。

四輪駆動は、二輪駆動よりも必要素材は多いですが、レベルリングが

てら採取をすれば余裕で集まります。

流石に潜水艇や飛行艇などは作れないので、それはハジメくんと合流した後で作ってもらいましょう。

物資の補充については農場や水源を利用します。

110階層などの植生エリアでは植物の種が拾えるので、それを農場で育てれば食料が収穫できます。

水源では魚が釣れるので、やる事がない時に釣っておきましょう。

これらを統合して、一日の流れを組み立てると、次のようになりま

す。
朝は農場で作業して、昼はオルクス大迷宮でレベリングがてら素材収集、夜はコミュをしたり適当に過ごす。

なんて健全な一日なんだあ…。

そんじやあ早速農場に向かいましょう。

▽農地がある……

▽作物を育てる事ができるようだ

農場では5×5マスの農地に好きな種を蒔いて、作物ごとに決まった時間が経てば収穫できます。

当然の権利のようにトマトとかニンジンとかレタスとかが出てきますが気にするな！

まあ、原作でも○○モドキっていう表記だったし、分かりやすさ重視だと思えます。

畑を耕して、道中で拾った種を全て蒔いていきましょう。配置はテキストで問題ないです。

わっせ、わっせ。ふう、終わりました。後は水をやって待つだけです。

この時、土属性の魔法が使えるキャラがいれば成長を促進させて、翌日に収穫できるようになります。

てなわけでユエ姉貴、オナシヤス！

「……んっ、任せて……」

これで翌日の朝には作物が収穫できます。

ちなみに、畑山先生を連れてくると即時収穫が出来ます。農業こわ

れる。

あとは水源に行つて如雨露に水を汲んで、パパパつと撒いて終わりっ！

これを毎朝繰り返します。種は収穫時に入手できるので尽きる心配は無いです。

＜昼になった

＜何をしようか……

昼からはオルクス大迷宮でレベリングと素材収集です。

魔物との戦闘はナニモイウコトハナイ。

装備を整え、奇襲もされなくなった以上はただの作業です。倍速。

×4 甥の木村、加速します。

基本的には199階層でレベル上げをしますが、魔物由来の素材をゲットするために他の階層に行く必要があります。

例えば『フールデーパー』：原作でのタール鮫ですね。こいつの皮を取ったりするためには50階層近くまで行く必要があります。ただ、オルクス大迷宮をクリアすると指定の階層まで一瞬で行くことが出来るようになるので、その点については問題ありません。

採取ポイントは一度採取すると翌日にならないとリスポーンしないので、階層をぐるっと回つて魔物とは出来る限り戦いつつ、採取しつくしたら帰還という流れになります。

おー、中々の収穫ですね。各種鉱石や素材、種が結構回収できてます。

レベルも65まで上がつて成長もしていますね。

ちなみに、200階層のボスであるラーズヒュドラですが、こいつは一日経過すればリスポーンします。

稀にアザンチウム鉱石をドロップする事があるので最強武器を作りたい兄貴は頑張つて周回してください。僕はしません。

天職：守護者

level：65

筋力：765

体力：3450（+4485）

耐性：1654
敏捷：533
魔力：410
魔耐：1320（+660）
技能：盾反撃1v. 4
自動回復1v. 10
状態異常耐性1v. 10
体力増強1v. 10
起死回生1v. 10
魔耐強化1v. 10
敵視強化1v. 10

今回の成果はこんな感じですね。化け物みたいな耐久力です。魔力は相変わらず育ってませんがね…。

APは敵視強化に振ってレベル10にしました。ここまで上げれば挑発が切れても8割方攻撃がほもくんに集中します。

＜夜になった

＜何をしようか…

さて、夜は釣りをするか、コミュをするか、そのまま寝るかです。

ユエ姉貴の友好度は8からスタートなので、割とすぐに10まで上げれます。

当然ですが、絆イベントもランダムで発生しますよー。

では、せっかくなのでユエ姉貴とコミュってみましょう。

＜『ユエ』と話すことにした…

「……どうしたの？」

＜散歩に行かないか誘う

「……んっ、分かった」

まあ、散歩と言っても行く場所は農場か水源（川）しかないんですけどね。

あつ、オスカー兄貴の墓がある。余談ですが、オスカー兄貴の墓は主人公の寛容が高ければ高いほど豪華になります。

ほもくんの寛容は8なので、かなりしつかりとした墓が出来ていま

すね。

寛容が10なら白ひげの墓くらい立派なものが出来上がります。

「……すごく静か。滝と川の音も良い感じ……」

〈『ユエ』と穏やかな一時を過ごした

〈少しだけ仲良くなれた気がする……

ユエ姉貴は奈落に落ちないと攻略できませんが、逆に言うとな落に落ちて助ければギユンギユン友好度が上がっていくので、放っておいてもよっぽどの事がない限りは大丈夫でしょう。

「……私を助けてくれてありがとう……」

あ、ユエ姉貴の絆イベントですね。交流一回目で発生するのは運が良いんだか悪いんだか……。

「……改めて……言っておきたかった……」

ところでユエ姉貴って台詞に三点リーダー多くない？

ここで選択性が出ますが取りあえず優しい事を言っておけば良いでしょう。

〈気にはすることは無い

「……んっ……衛はこれからどうするの……?」

〈元の世界に戻るための手段を探す

「……そう。……でも私は……戻る場所は……もうどこにも……」

戻る場所なんてないようです。まあ封印されている間に300年経ってるし、国も滅んでるからね。

じゃけん辿り着くべき場所へ行きましようね〜。

〈居場所が見つかるまで一緒に来ないか？

もう一つの選択肢は『好きな所へ行けばいい』です。どっちを選んでもその後の展開には変わりがないので好きな方を選びましょう。

ああ分かったよ！ 連れてってやるよ！ 連れてきやいいんだろ

！（オルガ並感）

「……いいの?」

むしろ来てくれなくちゃ火力担当が減ってタAIMがお通夜になっちゃうから困るんですね。

まほうつかって、やくめでしょ。

ほもくんは土下座して一緒に来てくれるように頼んで、どうぞ。

「……ありがとう。私の居場所は……あなたの隣……」

〈どうやら悩みは解決したようだ……

「……んっ……これから、ずっと一緒……」

〈『ユエ』との絆の高まりを感じる……

〈『あなたの隣で』の称号を手に入れた！

最後の台詞がまるでヤンデレみたいだあ……（直喩）。

まあ、ユエ姉貴はヤンデレではないんですけどね。心配しなくてもヤンデレキャラはちゃんと存在するのでヤンデレ好きの兄貴は攻略してみてください、どうぞ（販促）。

これでユエ姉貴の絆イベントは終了です。原作の焼き増しと言っ
てはいけない（戒め）。

夜行動も終わりましたし、これで拠点での活動初日はお終いとなります。

明日からも同じですね。四輪駆動の素材が集まって、食材をしこたま貯めこんで、目標レベルに到達するまでは今日と同じサイクルを繰り返します。

目標としては大体14日間程度ですね。

ちなみに、ハジメくんと一緒に落ちるところで強制的に60日間の足止めをくらいます。

時間の差にして一時間とちよつと差が付くのでかなりのロスですね。

さて、次回は倍速で準備を終わらせて娑婆の空気を吸いに今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

幕間：あなたの隣で

ユエの朝は割と早い。

地球で言うのであれば七時には起床する。寝室が一つしかない故に同衾している相方はすでに布団から抜け出しており姿が無い。

「……むう」

手を隣に彷徨わせて、すでに温もりが消えている事を確認して唸る。

欠伸をかみ殺してベッドから抜け出すとどこからかうつつすと良い匂いがしてくる。

まだ少しぼーつとする頭をふらふらと前後させながらベッドルームを抜け、隣接した居住区に入ると良い匂いが飛び込んできて少しだけ目が醒めた。

すでにテーブルの上にはサラダやスープ、焼き魚などが並べてあり、いかにも出来立てですと言ったふうに湯気を立ち昇らせている。キッチンには北条が立っており、ユエに背を向けて何やら作業をしているようだった。

気付かれないように、足音を立てないようにそろりそろりと忍び寄る。

「……んっ！」

体当たりをするように抱き着くが、体格差からか小動もしない。

そのまま背中にぐりぐりと顔を擦り付けていると、北条が手を止めて顔だけ振り返った。

「…狂いそうになる。やめておけ」

「んー……」

料理中は抱き着かれると手元が狂いそうになるからやめておけ、という意味だろう。

それを無視して北条の大きな背中にべったりと抱き着く。

ユエはこの背中が好きだった。大きくて、堅くて、暖かくて、自分の全てを乗せても揺るがない大木のような背中。この拠点で過ごすようになってからもう一週間が経つが、こうして背中に抱き着くのは

日課のようになっていた。

「…朝ごはんはもう出来ている」

「…もう少しだけ」

「…寝ぼけているのか？」

辛辣にも聞こえる台詞を言いながらも何だかんだで振り払わない。

ユエを抱き着かせたまま無表情で北条は作業に戻ってしまった。

「…むう」

この一週間、お風呂に入っている所に乱入したり、寝ている所に薄着で圧し掛かったり、こうしてシャツ一枚で抱き着いたりしているのに一度も手を出されることは無かった。

もしや女性と認識されていないのでは？ と訝しんだがどうやらそうではないようで、寝る時だって最初は「自分がソファで寝ようか」と提案してきたりと一応女性として扱われている…と思う。

「…終わったから席についてほしい」

作業が終わったようで、北条がお腹に回されたユエの手を優しく突く。

どうやら迷宮にあった果実でジュースを作っていたようだ。

名残惜し気に額を押し付けると、ようやくとユエは北条を開放した。

「…おはよう」

「…ああ。服はちゃんと着ろ」

今日もまた鉄面皮を崩せなかった。

しぶしぶ用意された服を着こむと席について朝食をとる。

「…いただきます」

「ん、いただきます…」

今日もご飯はおいしい。この一週間で使い方を覚えた箸で焼き魚をほぐしつつ（骨は抜いてあった。食べやすい）、北条の顔を見やる。

ユエは、自分の表情があまり動かない事を自覚しているが、北条はそれ以上である。

相変わず何を考えているか分からない無表情だが、彼が割と感情豊かである事はすでに分かっているので、今となっては慣れたもの

だ。

だが、出会って最初の頃はあんまりだったと思った。

封印部屋で自分の事を洗いざらい話して必死になって助けてほしいと言ったら躊躇わず助けてくれた。

300年もの間ずっと暗闇で一人だったのだ。当然助けてもらったお礼はするべきだし、文字通り何をしてでも恩を返すつもりだった。実際にそう申し出た。

「…そうか。だが、俺がお前に期待することは無い」

「……えっ」

しかし返ってきた言葉がこれである。あまりにも辛辣な言葉だったのでユエは言葉に詰まった。

自分の事など眼中にないのかと落ち込んでいたが、その後巨大なサソリが降ってきて情け容赦なく攻撃をして来た時は、自分を置いて逃げてても良かったというのに、身を挺して多数の傷を負いながら庇ってくれた。

北条が傷を負ったそばから治癒していくのを見てシンパシーを感じたのもある。

「……信じて」

だからこそ一大決心をして、嫌われる覚悟で吸血をしようとしたのだが、後ろ手で差し出されたのはマジックポーションの瓶だった。

「それは無理だ。これを使え」

「……えっ」

あまりにもあっさりとした拒絶。やはりこんな所に封印されていた自分の事など信じてくれないのか、としよんぼりしつつマジックポーションで魔力を回復してサソリを撃破する。

「…俺は行く」

「……ま、待ってー！」

その後、もう用は無いとばかりに部屋を出て行った北条を、着せてくれた白コートの裾を引き摺りながら慌てて追いかけると部屋の入り口付近で周囲を警戒していた。どうやら先行って魔物が寄り付いていないか確認をしていたようだった。

「……あ、あの」

「……何だ？」

「……わ、私も連れて行ってほしい……」

「分かった」

今度はあまりにもあつさりとした肯定。ユエにとってはわけが分らなかった。

表情も変わらず、何を考えているのかが分からない。

「この部屋は安全だが」

「……とりあえず……早くここから出たい……」

先ほどの戦いで北条は傷だらけだ。

体を休めたいはずなのに自分の我儘を聞いて、ヒールポーションを飲んで部屋の外に出てくれた。

もしかしたら意外と優しい人なのかも？　と思っていると北条は腕を捲ってユエに差し出してきた。

突然の行為に首を傾げていると、じつと見つめてくる。

「……飲まないのか？」

「……いいの？　……さつきは……無理だつて言つてた……てつきり嫌なのかと……」

吸血を拒絶されたのはつい先ほどだ。

てつきり嫌悪感から来る言葉だと思つていたが、今の北条の言葉からはそう言つた感情を感じられない。

「……戦いで余裕が無かつた。嫌ではない」

つまり、「今は戦つていて余裕がないから」それは無理だ。（吸血されるのは嫌じゃないけど今は）これを使え」と言いたかつたと。

ユエは頭が良いので、脳内で補完するのは難しい事ではなかつた。

「……んっ、ありがとう……それじゃあ……」

吸血を嫌つていないのであれば躊躇う必要はない。

北条のガツシリとした腕をつかみ、口を開いて牙を突き立てて――

「……首筋で……いい……？」

「……分かつた」

腕が太くてユエの小さな口では目一杯開いても牙を突き立てる事が出来なかった。

最後が締まらなかったが、これが北条衛とユエの出会いである。なんともちぐはぐなやり取りだったが、今となっては良い思い出かもしれない。

そう言う事にしておこう。

「……………ちそうさまでした……………今日も良い……………」

「…ああ」

朝ご飯を食べ終わると、ユエはとてと座っている北条の元に近寄り、そのまま抱き着いた。

一日一回、朝ごはんの後は欠かさずにこうしてハグをしている……………というわけではない。

ユエは北条が着ているシャツの襟をずらして、遠慮なく首筋に牙を突き立てた。

毎朝、朝ごはんの後はこうして血を飲ませてもらっている。

抱き着いて吸血している間、北条はユエの体がずり落ちないようにしっかりと支えてくれている。

まだ出会って一月と経っておらず、口数の少ない彼については知らない事が多い。

でも、優しい人だと言う事は分かる。だって、北条の血は特別に美味しいと言うわけではないが泣きたくなるくらい優しい味がするから。

……………最初に飲んだ時に、飲みながら泣いてしまつて、頭をよしよしされた事は内緒だ。

十秒あれば終わる吸血をたっぷりと一分以上かけて、一緒に皿洗いをした後は畑に向かう。

ここでは雨は降らないので、晴耕雨読という言葉とは無縁だ。

ユエは外に出るときは必ずフードの付いた白いコートを着る。

封印部屋で北条にもらったあのコートだ。

「新調しないか？」

そう言われたのは拠点に来て二日目の夜だった。

拠点には当然サイズは合わないが質の良い布地はある。

仕立て直せば今のものよりも上等なものが出来上がる事は分かっていたが、最初にもらった贈り物を手放したくなかった。

「……このままがいい……」

「…分かった。じゃあ脱げ」

「……！」

ユエは頭が良いので、脳内で補完するのは難しい事ではなかった。そう、つまりこのコートの対価として『そういう事』をやらせてほしいと言いたいのだろう。

普通なら嫌悪感を覚えるような状態だがむしろユエはやつと来た、という内心だった。

(……そう、マモルも男の子……ようやくこの時が来た……！)

ここに辿り着くまで袖にされる事十回以上、ついに反撃の時が来たのだ。

今こそ自分の実力を発揮する時である。

「……先に寝室で待ってる……」

手を差し出す北条にコートを渡し、すれ違いざまに妖艶に微笑んでユエは寝室で待機する。

しかし十分経ち、二十分経ち、さらに時間が経っても北条は来ない。まさか放置プレイ？ と戸惑っていると、ようやく北条が入ってくる。

「……遅い」

「…そうか。出来たぞ」

女性を待たせるとは何事かと頬を膨らめますが、北条は気にした様子もなく脇に抱えた白い物をユエに渡した。どうやら先ほど渡したコートのようだ。

訝しみながらも広げてみると裾がユエにとって丁度いい長さになっており、今までの戦いで解れた部分も修復されていた。

「……これは……？」

「着れるように仕立て直した」

「……えっ」

「…今日はもう遅い。寝るぞ」

そう言うや否や、北条はさっさとベッドに入って布団をかぶって丸まってしまうた。

残されたのはコートを持って呆然とするユエだけである。

「……えっ」

つまり、脱げと言ったのはコートを仕立て直すから脱いで渡してほしいという意味で、自分が想像していた意味など全くなかったと。

勇み足だったとはいえ無駄に期待させられただけであった。

「……むーっ！ むーっ！」

布団の上から北条を殴るがポスポスと柔らかい音がするだけで全く堪えてないようだ。

その日からユエの誘惑が始まったのだが、未だに成果は全く出していない。

閑話休題。

拠点にある農場へ来た二人はまず、野菜の出来栄を確認する。

「……んっ、今日もいい出来……」

「ああ、これなら十分だ」

土の魔法のお陰で一晩で野菜は収穫できて、土地の体力も枯渇とは無縁である。

地球の農家さん方々が見たら発狂しそうである。

北条が耕して種を蒔き、ユエが土魔法を使って育てる。

(……つまり、実質セ○クス……)

ユエは頭が良いので、脳内で補完するのは難しい事ではなかった。この一週間、あらゆる手を尽くしても手を出されなかった故に少し頭がおかしい事を考えながら昼前には農作業を終える。

農作業が終わった後は農場の片隅に作ってあるオスカー・オルクス墓に二人で手を合わせて、お昼ご飯の時間である。

食材が野菜と魚しかないのでメニューは限られているが、幸い調味料は何故かあったので北条が飽きないように味付けを少しずつ変えてくれている。

お昼ご飯の後はオルクス大迷宮で必要な物資集めを行う。鉱石

だったり植物だったり魔物からとれる素材だったりとその日によって行先はバラバラだ。

北条が魔物の攻撃を全て防ぎ、ユエが反撃とばかりに魔法で攻撃をする。

もはやすでにそれは作業と化しており、ユエは掠り傷一つ付くことが無かった。

すでにユエは完全に北条の事を信頼するようになり、例え魔物に睨まれようと、もはや回避する仕草すら見せなくなった。

「…通さん」

なぜならこうして例外なく割って入ってくれるからだ。ユエは北条が作った隙に魔法を打ち込むだけ。

いくら攻撃を受けても山のように動じない姿を見ると、命のやり取りをしているというのに安心感すら覚えるのだ。きつとこの人とならどんな困難でも乗り越えられると、そう思った。

オルクス大迷宮からは夜になる前には帰る事になっている。

折角拠点があるので使わない手はないからだ。

北条が夕食を作る間、ユエはソファで寝転がりながら本を読んでいる事が多い。

(…………この雰囲気…………好き…………)

キッチンに立つ北条の背中をぼーっと眺めながらそんな事を考える。

包丁がまな板を叩く音。湯気が上がり漂ってくる良い匂い。鍋の蓋がかたかたと鳴る音。

気を張ったりしなくてもいい、心から安らげる時間。ずっと欲しかったありふれた幸せがここにはあった。

「…もうすぐ出来る」

「…………んっ、分かった…………」

夜ごはんが終わったら後は寝るまで自由行動だ。

北条はどこにしまってあったのか分からない分厚い本を読むこともあるのだが、この日は魚を釣りに行くようだ。ユエもそれに付いて行く。

静かな滝音に川のせせらぎ、そして天に取り付けられたアーティファクトから放たれる月の光。

雰囲気としては上々である。

持ってきた莫塵を敷いて座り、錬成の練習がてら作った釣り竿から糸を垂らす。

北条は胡坐をかいて座っているの、ユエはその間にすつぽりと収まるように腰掛ける。

凭れかかってもびくともしないユエにとっては一番豪華な椅子だ。

お互い会話は無く水音だけが静寂の中を流れていくが気まずい雰囲気はない。

背中に体温と鼓動を感じ、水面で揺れる浮きを眺めていると自然と眠くなってくる。

心から安らげる状態で温かい微睡に浸る。これ以上の幸せはないだろう。

「…寝ると風邪をひくぞ」

「……んっ……」

うつらうつらと舟を漕いでいると、北条が着ているコートを布団代わりにかけてくれた。

もぞもぞと体を動かして、耳が北条の心臓の上にぴったりと当たるように姿勢を変える。

「……ずっと、いっしょ……」

「最初に言ったが、俺は見返りを期待してお前を助けた訳じゃない」

すでに半分寝ていたユエは殆ど生返事で言葉を発していた。

「……ん」

「俺よりも良い男など星の数ほどいるだろう」

もしも北条が封印部屋に来なかつたら今頃はきつと、あの暗闇でずっと一人で過ごしていたに違いない。

でも今はこうして自由に動くことが出来て、こんなにも安らかな気持ちで過ごすことが出来る。

助けてくれた。守ってくれた。受け入れてくれた。連れて行ってくれた。

出会ってまだ数える程しか日が経っていないが、もらったものは積み上がっていくだけで何一つ返すことが出来ていない。

「……ん」

「…だからお前が幸せになれる居場所を見つけたら俺の事など迷わず捨てていけ」

北条が何か言っているような気がするが、今はこのふわふわした心地で一杯である。

心臓の音を聞きながら、温もりを感じながらユエの意識は閉ざされていった。

「……ん」

「……それで良い」

(……ずっと……あなたの……隣で……)

幸せな気持ちで眠りに落ちる寸前。

ひどく優しい声を聞いたような、そんな気がした。

拠点出発くハルツイナ樹海到着

300年のオナ禁から解き放たれたヒロインと駆け抜けるRTA、はーじまーるよー！

前回はオルクス大迷宮の拠点で牧場物語を開始したところまででしたね。

今回はパパつと準備を終わらせて旅立とうと思います。

やることは毎日変わらないので倍速ですね。

朝に農業、昼に採取、夜はその場のノリです。

×4 甥の木村、加速します。

目標レベルとしては90を考えています。

低レベルクリアなのに結構高くな？ と思うかもしれませんが、このゲームではレベルを200まで上げることが出来ます。原作では基本的に100まででしたっけ？

しっかりとレベルを200まで上げて、最強装備を揃えれば大抵のキャラはラスボスをソロで撃破できます。

なので、原作では脇役だったあのキャラでエヒトに勝つ事も出来ませんし、かませ犬だったあのキャラでエヒトに逆襲をかける事もできません。

なお、やろうと思えばミュウ姉貴でも勝てるようにできています。

4歳の幼女にボコボコにされる神がいるらしい。

情けない格好、恥ずかしくないの？

クリア自体はレベルが100もあれば可能なので、色々試した結果90が安定を取れる最低レベルだと判断した次第です。

ちなみに他の仲間に関してですが、合流した時にはそれまでのレベルが1だったとしても最低保障として主人公のレベルー10までは上がっています。

今回はほもくんのレベルを90にするので、合流時には80になっている計算ですね。

これからの予定に関してですが、まずはハルツイナ樹海に寄ってメイン火力その2を回収してからハジメくんと合流します。

その後にはライセン大迷宮の攻略と言う手筈になっています。

ちなみにハジメくんですが、奈落に落ちないルートでは畑山先生に引っ付いて行動しています。

畑山先生は日によって出現する位置が違うのですが、メガトンコインしてから20日後にはブルツクの町にいます。なので、それまでに辿り着く必要があります。

また、友好度が『心の友』以上になっているキャラも畑山先生に引っ付いて動いているので、多分谷口姉貴もそこで回収できると思います。

さて、画面ではちょうど14日が経過しました。

レベルも目標である90を超えていますね。各種素材や食材も十分に確保できているのでこのまま出発して良いでしょう。

天職：守護者

level：95

筋力：1220

体力：5830 (+7579)

耐性：3240 (+1620)

敏捷：710

魔力：630

魔耐：2200 (+1100)

技能：盾反撃lv. 10

自動回復lv. 10

状態異常耐性lv. 10

体力増強lv. 10

起死回生lv. 10

耐性強化lv. 10

魔耐強化lv. 10

敵視強化lv. 10

防御術lv. 10

移動強化lv. 4

このステータスで最後まで駆け抜けます。まあ、道中の戦闘でレベ

ルが上がりますけどね。

ステータス高すぎね？　と思うかもしれませんがこのゲームではこんなものです。

あのミュウ姉貴ですらレベル2000まで上げれば5000を超えるステータスがちらほら出てきます。

そして守護者がレベル80になると『城郭』のスキルを、レベル90になると『要塞』のスキルを覚えます。

『城郭』は次の行動順までパーティメンバー全員のダメージを引き受ける、いわば全体庇うです。

ただし、城郭を使っている間に受けるダメージは庇われるパーティメンバーの防御力で計算されます。

例えば、ある敵の攻撃でユエ姉貴が10000のダメージを受けるとして、ほもくんが100のダメージを受けるとしましょう。

普通に庇えば100のダメージで済みますが、城郭で庇えばそのまま10000のダメージをほもくんが受けることになります。

使えねえ…と思うかもしれませんが、パーティメンバー全員の生存一回分を買えるのは非常に大きいです。範囲攻撃でもほもくん一人

が痛い思いをすれば耐えられます。また、庇った際のダメージは解除後に纏めて一回分で受けるので、

しっかりと食いしばりも発動します。『要塞』のスキルはパーティ各員の受けるダメージを一回だけ無効

化できるスキルです。非常に強力ですが消費MPが400と非常に重い上に連続して使

えないので、戦闘中は使えて一回ですね。これはいざという時の緊急回避用として使います。

▽『四輪駆動』を作成した！
▽これで移動が楽になりそうだ

そして無事に移動手段も確保できました。おー、ええやん。気に入ったわ。

見た目はランドクルーザーみたいな感じですね。作った乗り物に名前を付けることが出来るので、次の世紀になって

も通じるように願いを込めて『センチユリー』と名付けておきます。それでは用意も出来たので3階に行きましょう。設置されている魔法陣を調べれば外に出られます。

「……………行くの……………」

行きます（鉄の意志）。

あ、ユエ姉貴はいつの間にか友好度が9になってました。

まあ、コミユ相手がこの子しかいないからしょうがないね。

＜魔法陣を調べた

＜『オルクスの指輪』があれば起動できそうだ

＜魔法陣が輝きだした！

何の光!? というわけでワープして外に出ます。ワープ先はライセン大渓谷です。

大陸をちようど南北に分ける、ワンピースで言うレッドラインみたいなものですね。

「……………やつと……………外……………出れた……………」

あゝ娑婆の空気は美味いんじやゝゝ！

ユエ姉貴が感動していますが、残念なことにライセン大渓谷はクソフィールドです。

原作設定のせいか、一部魔法の消費MPがなんと5倍！ しかも威力が半分になってしまっています。

なので、いつも使っている蒼天の消費MPが1000になります。馬鹿じゃねえの。

現在の最大MPが1600くらいなので一発撃つたらガスケツです。

まあ、ほもくんを吸血したらMPが670ほど回復するので一戦一発程度なら何とか使えますが。

そんじやまあ、センチユリー（ランドクルーザー）に乗って移動しましょう。

仕組みはよく分かりませんが、乗り物に燃料は必要ありません。多分ファンタジーらしく魔法で動かしているんでしょう。

ここでのイベントですが、原作では物理ゴリラことシア姉貴が登場

します。

センチユリーで走っているとすぐにイベントが起きるので回収していきましょう。

本来よりもほもくんは早く辿り着いているので出てこないんじゃない？ というかそもそもシア姉貴が魔法を使える事はまだバレてないんじゃない？ と思うかもしれませんが、未来視がどうのこうなので屁理屈が付けられるらしいです。

バレてしまう未来が見えたので、その前にさっさとんずらしたとかそんな感じです。

理由は主人公くんが通るルートによってそれぞれ違うみたいですがね。

お前の時間軸ガバガバじゃねえかよ。

でも、RTA的にはありがたいので気にしません。2か月くらい誤差だよ誤差！

というかアフラック？ アルフレリック？ でしたっけ。あの人が絶対シア姉貴の事気付いてたですよ？

まあ、でもそんな事はどうでもいいんです。重要な事ではありませんん。

ライセン大渓谷は一本道です。なので真っ直ぐ進みましょうね。乗り物に乗っていると、自分より遥か格下の魔物であれば撥ね飛ばすことが出来ます。

具体的には先頭にいるキャラー20レベルまでですね。

ほもくんのレベルは95なので、レベル75までの魔物ならエンカウト回避できます。

余談ですが、100回撥ね飛ばせば『不運と事故ってしまった』の称号が手に入ります。

音量注意！

「だずげでぐだぎくい！ ひい、死んじゃう！ 死んじゃうよお！
だずけてえく！ おねがいしますうく！」

うるせえ！

ウサギの皮を被ったゴリラ姉貴おつすおつす！

このモンスタートレインをしてMPKを仕掛けてくるメスウサギが、今回チャートの物理火力担当である『シア』姉貴です。

◀泣きながら必死にこちらに走ってくる！

◀助けようか……

『いいえ』を選んでも、無駄に会話やイベントシーンが増えるだけで結局戦闘になるので、『はい』を選んだ方が早いです。

というわけでイベント戦の魔物である『ダイヘドア』です。

二頭を持つキング・レックスの羽なしバージョンみたいなやつです。

ダイヘドアですが、雑魚です。ナニモイウコトハナイ。

近づいて物理攻撃しかしてこないなので、挑発をして突っ立っているだけで勝手に氏にます。

あ、ユエ姉貴はMP節約のために今回は防御して待機しててね。

◀戦闘に勝利した！

はい、終わりです。レベル差もあって無傷での勝利ですね。

ちなみに、ダイヘドアのレベルは40程度なので、フィールドで出てきたらセンチユリーで撥ね飛ばすことが出来ます。どう見てもサイズのにおかしいですが、ちゃんと撥ね飛ばせます。

「ほ、本当にいた……！ あっ、助けて頂きありがとうございます！

私は兎人族ハウリアの一人、シアといいます！ 取り敢えず私の仲間も助けてください！」

そしてこの凶々しさである。

初対面でこの態度、中々出来る事じゃないよ。いやまあ、家族の生き死にが掛かっているなら私も土下座くらいはしますがね。

◀助けを求められた……

◀どうしようか……

つらつらと事情を話してきますので、これもさっさと『はい』を選んでおきましょう。

見捨てて行くことも出来ませんが、そうすればシア姉貴がパーティに入ってくれないので『いいえ』を選ぶ意味はありません。

「そ、そんなご無体な！ ここで会ったのも何かの縁ですし、助けてく

れても……えっ、良いんですか？」

「……いいの？ ……でも樹海の案内にはちょうどいいかも……」

誰かを助けるのに理由はあるかい？（ジタン並感）

もちろん、火力を得るためです。理由もなく助けるわけないだろう、いい加減にしろ！

「あ、ありがとうございます！ うう、よがっだよお！ ほんどによがったよお！ ごれで皆だすがるよ！」

オラツ、さっさと案内しろっ！

助け終わったらこき使つてやるからなく。

一連のイベントが終わるまではシア姉貴は戦闘に参加してくれません。あほくさ。

それではシア姉貴をセンチュリーに乗せて進みましょう。

今まで通り魔物を撥ねながら真っ直ぐ進めばすぐに着きます。

ひたすら無言で進んでいますが、道中ではイベント会話を聞くことが出来ます。

テイルズオブシリーズで言うところのスキットですね。

再生しても特に何かが起こるわけでもないし、再生するだけ時間の無駄なのでキャンセルだ。

今更になりますが、今までもいくつかスキットはありましたが全スルーしてます。

あのキャラの意外な一面を知ることが出来たりするので、興味がある兄貴は買って、どうぞ（ダイヤモンド）。

「あつ！ もう直ぐ皆がいる場所です！ あの魔物の声……ち、近いです！ 父様達がいる場所に近いです！ 急がないと！」

おっ、この台詞が出たと言う事はゴール地点までもうすぐですね。

おらおらー！ ほもご一行のお通りじゃー！

着きました。そして再びイベント戦です。

ハウリア一族を襲っている魔物を一掃しましょう。

「父様！ 助けてくれる人を連れてきました！ さあ、二人とも、やっちまってください！」

「……」

黙れ（ドン）

何でシア姉貴はこんなにも態度がデカいんですかね…。ユエ姉貴も半ギレになってますよ。

というわけでイベント戦の『ハイベリア』×6です。

こいつらも雑魚です。フン、ザコカ！

先ほど温存していたユエ姉貴のMPで雷槌をドーン！ はい、わずから5秒で戦闘終了です。

＜戦闘に勝利した！

十分にレベルを上げているので、もはや雑魚敵では相手にもなりません。

サクサク進んであゝ気持ちいいぜ。

そしてハウリア族の族長である『カム』おじさんオッスオッス！

「この度は娘のシアのみならず我が一族の窮地をお助け頂き、何とお礼を言えればいいか。しかも、脱出までご助力くださると言う事で

……。父として、族長として深く感謝致します」

あつ、良いっすよ（快諾）。

そのかわり娘さんを貰っていくからなく（豹変）。

ともあれ、これで一旦イベント戦は終了です。

カムおじさんに話しかければ出発できるのでさっさと話しかけましょう。

おっと、ユエ姉貴に吸血させてMP回復させるのを忘れずにね！

この時、他のハウリア族に話しかければお礼を言われたり称賛されたりして、承認欲求を満たせます。

「こちらの準備は整っております。出発いたしますが、よろしいですか？」

＜出発の準備は出来ているようだ

＜どうしようか……

では出発しましょう。

ここからは乗り物は使えず、徒歩になります。イライラタイム。

途中で何度か強制エンカウントしますが、全て雑魚敵なので問題ないでしょう。

敵が一体の場合はほもくんに処理させて、複数いる場合はユエ姉貴の魔法で一掃します。

道中ではモブハウリア族と会話するスキットが発生します。

ここでしか見れないので、興味がある方は見逃さないようにしてください。

ハウリア族の少女はその手の人にはああ、くたまらねえぜ。ナナチはかわいいですね（ボ並感）。

「おいおいマジかよ。マジで生き残ってやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだが、こりやあいい土産ができそうだぜ」

コピペ帝国兵くんオツスオツス！

ライセン大渓谷から脱出できる階段を上ると帝国兵とのイベント戦闘に入ります。

ちなみに帝国兵ですが、魔物凶鑑に表示されるのでどうやら魔物扱いみたいです。スツゴイカワイソ。

レベルは30程度なので、フィールドで出現した場合は当然センチュリーで撥ね飛ばすことが出来ます。

小隊長が何かごちやごちや言ってますがスルーです。

男は犯せ！ 女は頃せ！ みたいな感じでしょう。

ではイベント戦の『帝国兵』×6です。例にも寄って雑魚です。

小隊長だけレベルが40くらいありますが誤差ですね。

ユエ姉貴が魔法をドーン！ はい終了です。流星の殲滅力やでえ…。

「た、頼む！ 殺さないでくれ！ な、何でもするから！ 頼む！」
ん？今なんでもするって言ったよね？

とうるかユエ姉貴の魔法が直撃してたんですけど、何でこいつら全員腰を抜かしてるだけで生きてるんですかね…。やはり実力主義の帝国では鍛え方が違うのでしょうか。

全員が全員同じポーズで腰を抜かしてるので何かの宗教にしか見えません。

まあ、多分実際は何人か氏んでたり顔面がボコボコになってたりす

るんでしようがね。

『見逃す』と『見逃さない』の選択肢が出るので、手短に終わる『見逃す』を選んでおきましょう。

どちらを選んでも、捕らえたハウリア族は帝国に送ったとかいう情報や、ある程度頃したとかいうをベラベラ喋ってくれますが、ほもくんには関係のない事です。

「あ、アンタたちにはもう手を出さねえ！ 本当だ！ だから見逃してくれ！」

おう、無駄な会話してないでさっさと行けや！ こちとら、一分一秒を争ってるんだよ！

よしよし、それではハルツイナ樹海までパパパッと行きましょう。

平原に出たら乗り物が使えるので最短距離で進んでいきましよう。コーナーで差を付けろ！

画面右下でスキットくんが主張していますが無視だ無視！

話す余裕があるならアクセルをベタ踏みするんだよ！

×4 甥の木村、加速します。

このゲームですが、以前にも言った通りフィールドマップがクソデカイです。

総面積でいえば、ブレスオブザワイルドの3倍くらいの広さはあったと思います。

こんな事に容量を使うくらいならもっとキャラのイベントを増やしてほしかった…。

移動するとともに時間が経過していき、だいたい30分程度で日没となります。

センチユリーに乗れば20分程度でハルツイナ樹海に着きますが、徒歩だと3回くらいキャンプをしなければ着きません。

R T Aだけでなく、通常プレイでもストレス削減のために移動手段の確保は必須となります。

移動速度もそうですが、フィールドの雑魚エンカを無視できるのも非常に大きいです。

お、着きましたね。このごちやごちやした森がハルツイナ樹海で

す。

モンハンでいう古代樹の森くらい迷いやすいフィールドです。つまり、クソだよクソ！

モンハンワールドは神ゲーだけどあのマップだけは擁護できない(憤慨)。

「それでは行きましょう。中に入ったら決して我らから離れないで下さい。あなた方を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですから。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」

ハルツィナ樹海の大迷宮は今の時点では入れないので行くだけ無駄ですが、シア姉貴を仲間に啜え入れるためには必須のイベントなので、おとなしく案内されておきましょう。

ここはカムおじさんについて行けば問題ありません。ほぼ最短ルートで案内してくれます。

道中でエンカ回避不可の魔物が出てきますが、雑魚なので瞬殺しておきましょう。

基本的にこの辺りの魔物は近接物理攻撃しかしてこないのです、ほものおやつです。

ちなみに、逃走は格下が相手でも一定の確率で失敗するので、瞬殺できる相手なら戦った方が安定して早く終わらせることができます。

さて、それではハルツィナ樹海を駆け抜けて亜人くんたちのおいしそうな体を今回はここまでです。ご視聴、ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ。

ライセン大渓谷を、ハウリア族を先導しながら歩いている途中の事である。

唐突にシアが声を上げた。

「ただ歩いてるだけって言うのも退屈ですね。あつ、そうだマモルさん！何か面白い事をしてくださいよ！そうすれば子供達も気が紛れると思いますので！」

「……………図々しいウサギ……………」

ユエがシアをジト目で睨むが、シアは気にした様子はない。

先頭を歩く北条は辺りに魔物がいない事を確認してから「任せておけ」と一言だけ言って領き、目を輝かせる子供達に向かって親指を曲げて手を十字に重ね合わせた。

「…親指が…移動する」

「……」

辺りは何とも言えない雰囲気にも包まれた。

子供でも分かるような手品を得意気に見える表情で披露されて、ハウリア族の誰もが言葉を発することが出来なかった。

おいお前何か言ってやれよ、子供も真顔になってるぞ、などとひそひそ言い合う。

「…行きましようか。その、無理を言っでごめんなさいマモルさん」

「…親指が…移動」

「…そうだな。こうして守ってもらっているだけで有難いというもの。ここまでお世話になるわけにはいかないな」

「…親指が…」

申し訳なさそうな表情をしたシアが歩きだし、それに続くようにカムとハウリア一族も続く。

後に残されたのはそのままの格好で手品を繰り返す北条と、それを見つめるユエだけである。

「……親指」

「……しよんぼりとしてるマモルかわいい。ブチ犯したい（……大丈夫……ちゃんと面白かった……）」

「ユエさんは何を言ってるんですか!?!」

優れた聴覚で聞いていたシアが突っ込みを入れに戻ってきた。

今日も色々ありながらトータスはいつも通りである。

ハルツイナ樹海くブルツクの町到着

時空間が歪むRTA、はーじまーるよー！

前回はハルツイナ樹海に辿り着いたところまででした。

今回はその続きから始めたいと思います。

カムおじさんについて行けばイベントが勝手に進行するので、おとなしくついて行きましょう。

というか追い抜いても勝手に歩く速度が落ちるので、自分だけで先に進めないです。イライラタイム。

それにしても霧が深いですね。これは案内が無いと迷うのも納得ですよ。

ちなみに、亜人族の案内が無くても攻略サイトでマップを調べればハルツイナ大迷宮に辿り着くことはできます。シア姉貴とかが不要な方は強引に突破するのもアリですね。

紡がれた絆の道標（笑）。

所々で会話が発生しますが倍速で飛ばします。

簡単に纏めると、ハウリア一族の安全を確保出来たら旅の仲間には関わってもいいですか？ 自分魔法使えるので居場所ないんすよ、って感じの内容です。

どうやら亜人たちの間では、魔法を使える者は魔物と同じような扱いを受けるらしいです。

来てくれなきやタイムがお通夜になるので来てくれよなく頼むよ。

おっと、お誂え向きに少し開けた場所に出ましたね。

まるでイベントのために作られたような空間だあ…（直喩）。

「お前達…何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

くどうやら歓迎されていないようだ

く説得してみよう…

中間管理職の虎さんオツスオツス！

というわけであっけなく亜人たちに見つかってしまいます。

まあ、こんな大人数で移動していれば多少はね？

ほもくんが弁明しようとしていますますが問答無用なようです。

「亜人族の面汚し共め！ 長年同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！ これは反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！ 全員この場で処刑する！ 総員かかれ！」

余談ですが、この会話はどの時間軸でも同じです。

例えばシア姉貴の事が全くバレていなくても当然のように知っている前提で話を進めてきます。

多分、台詞を一種類しか用意してもらえなかったんだと思います。かわいそう。

ではイベント戦です。

森のお友達が5人ですね。こここの亜人たちは魔法を使えず、全員が全員、近接物理攻撃しかしてきません。

つまり、どういう事かもうお分かりですね？

▽戦闘に勝利した！

まあ、ほもくんのおやつですね。ざつこww亜人族抜けるわww今更この程度の敵に苦戦はしませんね（イキリ）。

「な、何が目的だ！ ま、まさかフェアベルゲンに復讐でもしに来たのか…！ いや、だが…！」

▽改めて目的を説明した方が良さそうだ…

と、ここでネタバラシ。実は大迷宮を探してここに来たんですよ。

じゃけん通してくださいねー。

大迷宮はこの樹海そのものだ！ なんて言ってますが、俺知ってるんですよ。

「お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

ついさつき5人くらいボコされてたんですが、それは良いんですね…。

取りあえず自分では判断できないので長老を連れてきてくれるそ

うです。おう、あくしろよ。

ここで小休止タイムです。一旦準備を整えるために動ける時間が設けられています。

ただしこの空間からは逃れられないので、さっさと虎さんに話しかけてイベントを進めましょう。

スキットを聞くことが出来ますが、例によってキャンセルだ。

「私はアルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預らせてもらっている」

エルフ爺さんオツスオツス！

おらほも！ ここには迷宮を探しに来たんだ！

ネネ、いいだろう？ ぼく絶対にしゃぶらないから！

「うむ、お前さんの要求は聞いているのだが、その前に聞かせてもらいたい。解放者については何処で知ったのだ？」

＜どうやら解放者について何か知っているようだ

＜ここまでの経緯を話した……

当たり前ですが、このお爺さんはどれか一つでも迷宮をクリアしていないと通してくれません。

『オルクスの指輪』や『グリューエンのペンダント』などのクリアした証のアイテムのいずれでも良いので持っていれば大丈夫です。

「これは…確かに、お前さんは解放者の隠れ家にたどり着いたようだな。他にも色々気になるところはあるが…。うむ、よかろう。取りあえずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」

はい、それではフェアベルゲンの町に出発です。

とは言っても画面暗転ですぐに着きますがね。ハルツィナ樹海は、パーティに亜人族がいれば行きたい場所に即座に行ける便利仕様です。

……じゃあ何でこんな嫌がらせのような広いクソマップを作ったんですかね？

フェアベルゲンの町に到着しました。

はえくすっごい大きい…。まるでファンタジー小説の中の世界

だあ…（直諭）。

クソデカイ樹の中にマンションみたいに部屋を作って住んでいるようですね。

まさに森の住民って感じがします。

「……ふむ、なるほど。試練、神代魔法、それに神の盤上……初めて聞く内容だな」

「ここから長々と会話を垂れ流しますが、途中で一度だけイベント戦？　みたいなのが起きます。

「アルフレリック！　貴様、どういふつもりだ！　なぜ人間を招き入れた？」

森の熊さんオツスオツス！

今回は新キャララツシュですね。森の長老たちのエントリーだ！

熊のジン兄貴、虎のゼル兄貴、狐のルア兄貴、鳥のマオ兄貴、ドワーフのグゼ兄貴です。

ここで原作ではかませで終わったジン兄貴と一戦交えます。

エルフ爺さんが説明しているようですが熊さんは納得してないようです。

こやつらも当然の権利のようにシア姉貴の事を把握しています。時空こわれる。

実はハウリア族のファンなのでは？　ボブは訝しんだ。

「……ならば今、この場で確かみてやろう！」

ちよつとこの熊誤字ってんよー。

ボイスではしっかりと「確かめてやろう」と言っているので、まあ多分パロディネタだとは思いますが。

というわけで熊の亜人である『ジン』との戦闘です。

この戦闘では主人公一人だけで戦います。

一対一だ。楽しみをふいにしたくはないだろう。

こいよジン！　武器なんか捨てて（元々持ってない）かかってこい！

まあ、お互いに丸腰状態ですがね。

防具はありますが武器は無い状態での戦闘になります。

ジン兄貴は長老を任されるだけあって、レベルが40と高めです。ですが、近接物理攻撃しかしてこない時点ですでに詰んでいます。〈戦闘に勝利した!〉

はい、終了です。ほもくんの盾反撃一発で決着が付きました。

なお、『盾』反撃ですが、盾を装備していなくても技能は発動します。

「ぐうっ……い……こ、こんな小僧に……!」

その小僧に負けたんやで（ニッコリ）。

レベルが違い過ぎるからね、しょうがないね。

巫人の中でも一、二を争う手練れであるジン兄貴に勝ったことで長老の皆さんに一応は認めてもらえます。

後は会話を垂れ流すだけです。倍速です。

話の内容を纏めると、（ハウリア族の処刑は）キャンセルだ。

奴隸になった奴は死亡扱いなので、ほもくんの奴隸と言う事にしとけばいいですよ。

じゃけんハウリア族はフェアベルゲンに戻らないでくださいね、つて感じですよ。

「あ、あの。私達……死ななくていいんですか?」

「……シアたちは救われた。その事実を受け入れて素直に喜べばいい」

そうだよ（便乗）。まあ、永久に国外追放になりますかね。

しかもほもの奴隸とか、完全に罰ゲームです。

これでめでたしめでたし、と終わればいいんですが、イベントはもうちつとだけ続くんじゃないよ。

シア姉貴は、一度ハルツィナ大迷宮に辿り着かなければ仲間に啜わってくれません。

そしてハルツィナ大迷宮に辿り着くためには霧が弱まる日を待つ必要があるのですが、それが今から3日後になります。

原作では10日間足止めを喰らって、その間ハウリア族に生き残るための特別な稽古を付けていましたが、今回は3日の間特別な稽古を付けることになります。

このゲームでは20日周期で霧が弱まるようになってるので、ハ

ルツイナ大迷宮に向かう時はしつかりと日付を確認するようにしましょう。

ここで鍛えたハウリア族は、後々パーティに参加できるようになるのですが、鍛える日数が多いほどステータスが高くなります。まあ、そこまで大きな差は出ないんですけどね。

また、後々帝国などのハウリア族絡みでのイベントで有利に立ち回れるようになるのですが、今回のチャートでは特にそう言った寄り道はしないので鍛えるのは最低限で良いでしょう。

それでは修行開始です。

霸王化をお前に教える。

とは言っても特別に何かを指示すると言う事もなく、ひたすらハウリア族と戦うだけです。

朝、昼、夜とそれぞれ一回ずつ戦闘をするので、合計9連戦ですね。

一回の戦闘につき『ハウリア族』×5が出現するので、45人抜きとなります。

なお、ハジメくんと一緒のルートだと10日間分なので30連戦するハメになります。

「よ、よろしくお願いします!」

なお、彼らは例にもよって近接物理攻撃しかしてこないのです、ほもくんが突っ立っているだけで問題ありません。殴ってきますがレベル差が著しいせいでダメージが入ってませんね…。

〽戦闘に勝利した!

ひたすらこれを繰り返します。一戦あたり一分あれば終わるので、ロードの時間とかも合わせれば合計で15分くらいですね。では倍速です。

なお、ハジメくんルートだと場合によっては一時間くらい足止めをくらいます。精神壊れる。

〽戦闘に勝利した!

これにて工事完了です…。

ぬわああああん疲れたもおおおん!

やっとなら姉貴が仲間になってくれますよ。

あ、ちなみにシア姉貴ですが、ユエ姉貴が勝手に稽古を付けてくれます。

こちらは特に戦闘とかは無く、修行後の熊人襲撃も会話イベントだけなので倍速で飛ばしています。

原作であつたサブイベントとかはスルーするので、味気なくなるのはお兄さん許して！

「マモル殿、この度は我らに身を護る術を授けてくださり感謝の言葉もありません。我らハウリア族、決してこのご恩は忘れませぬ。我らの力が必要であればいつでも仰ってください。喜んで力になりますよ」

あつ、いいつすよ。それじゃあ俺、ギャラもらって帰るから…。

というわけで、ハルツイナ大迷宮に行けるようになりました（入れるとは言つてない）。

カムおじさんについて行きましょう。

…：嘘だよ。何故かここではカムおじさんを追い抜いて先に着いてもイベントは進行するので、あらかじめ調べたマップを見ながら最短距離で駆け抜けます。

＜ハルツイナ大迷宮があると思わしき大樹に辿り着いた

＜どうやら枯れてしまっているようだ…：

置き去りにしたはずなのに、当然の権利のように隣にワープしてきたカムおじさんが大樹の説明をしてくれます。

カムおじさんはグリュエーン大火山を突破していた…？

さつさと根元の石板まで行つて調べます。

ここも迷宮をクリアした証が一つ以上あればOKです。

＜どうやら指輪をはめ込む場所があるようだ

＜『オルクスの指輪』をはめ込んでみた…：

＜石板が眩く光りはじめた！

何の光!? 石板に文字が浮かび上がりますが、簡単に纏めると次の通りです。

やあ（・ω・）

ようこそ、ハルツイナ大迷宮へ。

このメツセージはサービスだから、まず読んで引き返して欲しい。うん、「まだ」なんだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。でも、このメツセージを見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない「苛立ち」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。

そう思っつて、この石板を作ったんだ。

じゃあ、他の迷宮を4つ以上攻略しようか。

リユーテイリス・ハルツィナ姉貴はもう許さねえからなく。

でも泣き言を言っつてもしょうがないので、引き返して他の迷宮を攻略しに行きましょう。

「ユエさんから合格はもらいましたよ！　というわけで私も旅に連れてっつてください！」

＜シアが仲間になりたそうにこちらを見ている……

＜どうしようか……

そしてようやくシア姉貴が仲間に啜わります。な、長かった……！
もつとユエ姉貴を見習っつて、どうぞ。

＜連れていく

「やったー！　これからよろしくお願いします！」

＜『シア』が仲間になった！

オツスお願いしまーす！　これからこき使っつてやるから覚悟しろよなく。

さて、ハウリア一族に見送られてこれからはブルツクの町へと向かいます。

ただひたすらクソデカフィールドをセンチユリーで走り抜けるだけなので倍速で良いでしょう。

×4 甥の木村、加速します。

では移動中にシア姉貴についてお話しします。

シア姉貴は、物理版ユエ姉貴です。奈落ハジメくと並んで作中随一の物理攻撃力を誇りますが、耐久力は例にもよっつて紙切れです。ユエ姉貴が濡れたティッシュだとすればシア姉貴は障子紙くらいです。

かね。若干マシな程度です。

素のステータスは低いですが、強化魔法を使う事によってゴリラを越えたゴリラと化します。

なので、シア姉貴は常に強化魔法を使いながら戦う事となります。なお、残念ながら上昇するのは攻撃力と素早さだけで、体力や防衛力は上昇しません。

シア姉貴は強すぎてナーフを受けた一人ですね。

それでもポケモンで言う竜の舞い4積みくらいの性能があるので壊れてるんだよなあ…。

また、障子紙のような耐久力ですが回避率が高めに設定されており、さらには『未来視』の技能によって致命傷となる攻撃を戦闘中一度だけ回避できるので、短期決戦であれば耐久力の低さを気にする必要はありません。

総評すると、このゲームでのぶっ壊れキャラの一人ですね。

通常プレイでもお世話になる人は多いと思います。

▽夜になった…：

▽これ以上は行動しない方が良いでしょう

おっと、キャンプが発生しましたね。

原作では日が落ちる頃には到着してたはずなんですけどね。

クソデカフィールドのせいで一日では到着しません。

以前もちよろつと説明しましたが、フィールドを移動していると時間経過で夜になり、夜になった時にフィールドにいるとキャンプが発生してその日は動けなくなります。

さらに、旅の人数に応じて食料を消費します。

食料があれば、翌日には体力回復および少量のバフ効果が得られます。

逆に食料が無ければ翌日にステータスが少しだけダウンします。オルクス大迷宮の拠点で十分に食料は確保しているので問題ないですね。

でも念のためブルックの町に着いたら肉とかをしこたま買い込みます。

「いやー、これぞ旅の醍醐味って感じがします！ あ、お代わり貰ってもいいですか？」

「……んっ、今日も美味しい……満足……」

今日はシチューと魚の香草焼きみたいです。私よりも良いものを食べてる…。

魚系のメニューだと魔力と素早さに少しだけバフがかかります。

逆に肉系のメニューだと筋力とか耐久にバフがかかります。

「んふふ。こうやってテントで並んで寝てるとなんだかワクワクしますよね！ あ、そうだ！ せっかくだから恋バナとかしませんか？」

「……うるさい……寝れない……」

キャンプではご飯↓テントの2回に渡って短い会話を聞くことができます。

キャラの組み合わせによって会話の内容は様々なので、興味がある兄貴は色んなキャラと旅してみてください。

あ、ちなみにですが、当然テントは男女別となっております。

狭いテント：男複数人：何も起こらないはずが…。

まあ、今回男側はほもくんは一人なんですがね。

「……おはよう……」

「お早うございませす！ 今日もう元気に行きませすよう！」

おっは——！

では出発しましょう。朝ご飯を食べている描写はありませんが、おそらく昨日の残り物を食べているのでしょう。

昨日と同じくひたすらセンチユリーで走るだけです。

×4 甥の木村、加速します。

すいませくん、木下ですけど。まうだ時間かかりそうですかね？

このゲームの評価を下げている原因として、この無駄に広いフィールドがあります。

ただでさえあちこちに移動しなければいけないゲームなのに、移動に時間がかかりすぎて途中で投げたくなってきました。

ファストトラベルのような機能もないので、RTAに限らず通常プレイでもいかにしてこの移動距離を少なくするかがストレス軽減に重要な要素となってきます。

ですが、その割にはあちこちにお遣いに行かされたり回り道をさせたりします。

ラスボスを撃破した時に取得できる『神殺し』のトロフィーの取得率が3%しかないので、いかにこのゲームがアレな感じかはこの時点で察することが出来るでしょう。

おっと、そうこうしている間に町が見えてきました。

メガトンコインしてから18日目なので余裕をもって間に合いましたね。

ぬわあああん疲れたもおおおん！

原作ではバイクを怪しまれないようにある程度の距離で降りてから徒歩で入っていましたが、このゲームでは門の前までセンチユリーで来ても何も言われません。

流石にセンチユリーに乗ったまま町に入る事は出来ませんがね。

余談ですが、戦車に乗って門の前で突っ立つてる兵士にぶつかってもびくともしません。体幹が強すぎる。

「止まってステータスプレートを見せてくれ。あと、町に来た目的は？」

門の前でセンチユリーをドリフトして停めたにも関わらず冷静な門番くんオツスオツス！

では20日目まで時間を潰しつつ感動の再会を今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

ブルツクの町到着く出発

仲間が一気に増えるRTA、はーじまーるよー！

前回はブルツクの町に着いたところまで進めましたので、今回はその続きからですね。

無敵の門番くんにステータスプレートを見せてほしいと言われたところですよ。

ステータスプレートの開示を求められますが、無くても問題ないです。

この世界の住民全てがステータスプレートを持つてるわけじゃないからね。

普通に「しょうがねえなあ。騒ぎは起こすなよ」と注意するだけで通してくれます。やさしい。

町に入ると日常パートと同じように朝↓昼↓夕の順番で時間が過ぎていきます。

なお、フィールドでの時間経過によって入った時の時間が決まるので、今回は昼からのスタートですね。

夕暮れ時に町に入ると夜からのスタートになります。

町での時間はコミュをする事で過ぎていきます。

宿屋以外の施設の利用では時間は経過しないのでご安心を。

それじゃあまず物資補給のためにお金を得る必要があるのですが、要らない魔物の素材を売りに行きましょう。素材の売却は冒険者ギルドで行うことができます。

また、冒険者ギルドでは食事も行うことができます。

なお食事はコミュ扱いになり、パーティ全員との友好度が僅かに上昇します。

町は例にももれずやたら広いので、あらかじめ調べた地図を見て最短距離を駆け抜けましょう。

「両手に花を持っているのにまだ足りなかったのかい？ 残念だったね、美人の受付じゃなくて」

有能おばさんオツスオツス！

現在はほもくんに女性2人のパーティなのでこんなことを言われますが、パーティの男女比によって微妙に台詞が違ってきます。こんなところに力を入れなくてもいいんだよなあ…。

というわけで買い取りオナシヤス！ 原作では樹海の魔物の素材だけ売っていましたが普通に奈落原産の素材も売ることが出来ますし、なんなら使徒とかエヒトとかからドロップした素材とかも普通に買い取ってくれます。やはりやばい。

冒険者登録をしておけば買取価格が+10%されるのですが今回のチャートではフヨウラ！

「そんじゃあ買い取らせてもらうよ」

お値段は…30万!? ええやん、気に入った！

まあ、最低限しか素材は集めてないので余ったものを売ってもこの程度でしょう。

ですが資金としては十分すぎるほどです。

「また来なよ。良い素材を売ってくれるのはこっちとしても助かるからね。ああ、そうだ。これはオマケだ。受け取りな」

〓『ブルツクの町の地図』を手に入れた！

冒険者ギルドでおばさんに話しかければ、このようにして地図を貰えます。

ブルツクの町限定ですが、施設にファストトラベル出来るようになるので非常に便利です。

こんなのが出来るんだったら、町同士でのファストトラベルも出来るようにしてほしかった…。

それじゃあ20日目まで適当に時間を潰しましよ。

町に入るとパーティメンバーは散り散りになってそれぞれうろついています。地図を開けば居場所を確認できます。

ユエ姉貴とシア姉貴は服屋にいるみたいです。行ってみましょう。

「あら〜ん、いらっしやい♥来てくれておねえさん嬉しいわあ〜、た〜ぷりサービスしちやうわよお〜ん♥」

クリスタベル姉貴兄貴オツスオツス！

服屋では、当然ですが服を買うことが出来ます。服を買うと着せ替えが楽しめるのでオシャレ番長を目指す兄貴は各地で買い漁ってみてください。

着せ替えてもステータスには変化が無いので好きな衣装で旅してみるのも良いでしょう。

水着姿のミユウ姉貴でエヒトをいじめるの楽しい。

「……ん、服を選んでる……悩みどころ……」

「あつ、そうだ！ マモルさんも選んでみてくださいよ！ 美少女に自分好みの服を着せる絶好のチャンスですよ？」

「〜どうやら服を選んでいるようだ……」

「〜一緒に選ぼうか……」

服屋でのコミュニティイベントですね。良い感じの服を選んであげましょう。

私はあまり肌の露出が多くない服が好みですねえ！

それっぽい服をパパパッと選んで、終わりっ！

「おお、見てくださいよユエさん！ 今の私、すごいお洒落です！

これぞ美少女って感じがしますね！ 流石は私です！」

「……これがマモルの好み……これにする」

「あら、〜すごく似合ってるわあ〜♥お兄さんセンス良いのねえ〜ん」

喜んでくれていますが、クソみてエな服を選ばない限りは同じような反応です。

お値段は…5万ですね。まあ、一式買って女性2人でこれなら安い方なのかな？

「〜楽しく服を選んで過ごした」

「〜少しだけ仲良くなれた気がする……」

あ、今更ですが、シア姉貴は奴隷用首輪とかは付けてません。

そんなことしたらポリコレに怒られちゃうだろ！

さて、夜になりましたね。夜は宿屋で休んで終わりです。

宿屋では食事をする事も出来ますので友好度も上がって一石二鳥

！

ちなみに今の友好度はユエ姉貴が9でシア姉貴は5ですね。

＜みんなと一緒に食事をとった

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

あとはこれを一日繰り返すだけです。おおっと、食材の購入も忘れないようにね！

ライセン大溪谷では物理組の働きが重要になるのでお肉が欲しいです。お肉を食べなきゃ力は出ないからね。

「……ん、おはよう」

「お早うございませす！ いやー、ベッドがフカフカなお陰でよく寝れました！」

＜朝になった

宿屋は当然男女別です。キャンプの時のように会話は発生しませんがね。

それじゃあ今日も一日休養日としましょう。あ、食材は忘れないようにね。

あとは、残ったお金でポーション類を買っていきましょう。

＜みんなと一緒に食事をとった

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

20日目になりました。この日に畑山先生一行が来るのでしっかりと合流しましょう。

彼女たちが来るのは昼になるので、朝は適当に時間を潰します。

畑山先生に付いてくる生徒たちは、友好度が高い面子を除けばランダムです。

ただし、当然ですが天之河師範は絶対に付いてくることはありません。彼はオルクス大迷宮に挑んでいます。

お昼になったので宿屋に入ってイベント開始です。

折角なので一時停止して右枠で流しときますね。

ほもくん一行がお昼ご飯をもぐもぐしていると畑山先生一行がぞろぞろと入ってきます。

神殿騎士くんたちも合わせると10人以上の大所帯ですね……。

「ようやく一息つけそうですね。ここで宿をとって、ついでにご飯も

「食べて行きましょう！」

「畑山先生オツスオツス！ 今日もお勤めご苦労様です！」

都合よくほもくんたちの周りの席が空いているのでこっちに来ますね…。」

「あ、ハジメくんと谷口姉貴もオツスオツス！」

「あれ？もしかして、衛？ ……うん、やっぱりそうだ」

そして速攻でバレます。ボンドルドみたいなフルフェイスマスクを着けてもお構いなしです。

一番友好度が高いメンバーが気付いてくれるので、今回はハジメくんが気付いてくれましたね。

友達0人の場合は畑山先生が気付いてくれます。

「……えっ、ほ、本当に北条くんなんですか…？」

「……マモル、知り合い？」

「クラスの皆と再会した」

「< どうかやら今までの経緯を説明する必要があるそうだ……」

「うわああんまもる——ん！ 生きててよかったよ——！」

うるせえ！ というかほもくんのいるテーブルを10人以上で取り囲んでいる状況がおかしい。

明らかに周りの人の邪魔になつてるんだよなあ…。」

「生きてて本当に良かったです…：あなたが居なくなつた事を聞いたときは心臓が止まるかと思いました。ごめんなさい、先生が居なかつたばかりに…。」

「< どうかやら畑山先生は責任を感じているようだ…。」

「< 気にしていない事を伝えた」

「貴様！ 愛子に向かってその言葉はなんだ！」

「落ち着いてくださいデビットさん！ 私は北条くんとお話ししたいんです！」

早い、もう落とされたのか！ デビットさんは畑山先生の逆ハーレムの一人ですね。

この人たちは経過日数に関わらず畑山先生にぞっこんラブになっています。

「…教えてください北条くん。あの後、何があったのかを。例え何があっても先生は目を逸らしませんから」

あ、いいっすよ(快諾)。とは言ってもRTAやってただけなんですからね。

あと、谷口姉貴はほもくんから離れてあげて。そろそろ背中が涙とか鼻水とかでベトベトになってそう。

ベトベトすぎてベトベトンになったわね…。

〈今までの経緯を説明した

「…そうだったんですね。そんな事が…」

恐らくですが、神殿騎士くんたちの反応を見る限り解放者や神代魔法の事については話してないみたいです。まあ、流石にほもくんでも話してはいけない事は分かってるって事でしようね。

あと、亜人であるシア姉貴が居ても無反応です。優しい世界。

「…ねえねえまもるん。話は変わるんだけど、この女の子たちとはどういう関係なのかな？」

「ひいつ!? こ、この人笑顔なのにすごく怖いです!」

こわっ。笑顔で訊いてくるから余計に恐怖を感じますね…。シア姉貴もガチビビリしてます。

この会話が出ると言う事は、谷口姉貴の友好度は10になるだけ溜まってるってことです。

多分この後友好度が上がると思います。

「…私とマモルは深い仲。想像に任せる…あと、いい加減マモルから離れて」

「…へえ。ふくん。そうなんだ…鈴がこんなにも心配してたのに、まもるんはこんな可愛い子たちとよろしくやってたんだね。そっから、そうなんだね…」

「ユエさんは煽らないでください! あっ、私はお友達ですからね!

恩はありますが!」

「北条くん! これは一体どういうことですか! 先生に包み隠さず話してください! 未成年の不純異性交遊は許しませんよ!」

あーもう滅茶苦茶だよ。これにはクラスメイトも苦笑い。

せつかくほもくんの隣にいるんだし、ハジメくんもニコニコ顔でカレー食べてないで仲裁に入ってくれてもいいんとちゃう？

今回シア姉貴は友好度が5の『友達』なので止める側になっていますが、特別な仲になってると煽る側に回ります。

「……まもるんのバカ——！」

▽クラスメイトの視線が痛い……

▽再会できたが非常に疲れた……

▽『谷口鈴』との仲が深まった！

これにてイベントは終了、そして谷口姉貴が10%カットになりました。

それじゃあ再開しましょ。

「北条くん、それじゃあ戻りましょう。皆あなたの事を心配してるので顔を見せて安心させてあげてください」

皆の所に戻って来いと言われますが、当然断ります。そんな事してたらタイムがお通夜になっちゃうからね。向こうの戦力は師範がいるし大丈夫でしょ。

王都に行くとしてもメルジーネ海底遺跡を攻略完了した後ですね。

「……分かりました。そこまで決意があるなら先生は背中を押しましょう。……ただし！絶対に生きて帰ってきてください！あと危なそうだったら引き返すこと！北条くんの事を待っている人はいるんですからね！」

ありがとナス！それじゃあ何人かメンバーをもらって行くから……

畑山先生ご一行は一日だけ町に滞在するので、その間に仲間に入れたいキャラクターに声をかけておきましょう。

おつ、清水くんとエリリンがいるじゃん。他はめぼしいのは居ませんし、ハジメくんと谷口姉貴に啜えてこの2人をもらって行きましよう。

坂上兄貴や永山兄貴、檜山兄貴辺りの物理戦士が居れば迷いなく啜えてたんですがね……

まあ、運任せのチャートは嫌なので誰が来てもいい様にはしていま

す。

それじゃあパーティに啜えましょう。

話しかけて『仲間を誘う』を選べば付いてきてくれます。

「うん、分かった。僕がどこまで力になれるかは分からないけどね」

「ほほう、鈴ちゃんを選ぶとはお目が高いですな。この谷口鈴にパーティの守りはお任せあれっ！」

「しようがねエな。まあ力になってやるぜ」

「う、うん。あ、あまり私は強くないけど、それでも良ければ…」

よろしくお願いしナス！ これで4人が新たに旅の一行に啜わりました。

戦闘ではフロントに4人、バックに2人で合計6人で戦いますが旅の一行は10人まで編成できます。状況に応じてバトルメンバーを変えて攻略していく感じですね。

今現在、旅の一行は7人なので、あと3人枠が空いています。

それじゃあ早速出発……と言いたいですが、先程のイベントで時間が進んで夜になってしまったので、出発は明日になります。夜になっても町から出ることは出来るのですが、出た瞬間にキャンプになっってしまうす。

町の入り口でテントを建ててたむろする不審者になりかねないですし、無駄に食料も消費するのでおとなしく宿で一泊しましょう。

～朝になった

そして何事もなかったかのようになり次の日を迎えます。

ではライセン大渓谷へと出発しましょう。

ひたすらセンチュリーを走らせるだけなので倍速です。

×4 甥の木村、加速します。

さて、倍速中はまたキャラ性能の話でもしましょう。

まずはハジメくんですね。今回は通常のハジメくんの方なのでそちらの評価をします。

ハジメくんは、ハッキリ言って表立って戦闘に出す性能じゃないです。

装備を整えればそれなりに戦えますが、今回チャートではそんな余

裕はないです。

彼の役割は以前に説明した通りアイテム使用係、および錬成師としてのアイテム制作です。

オートアイテムにより回復に行動を割かなくて済むようになるので、間接的に火力がアップします。

また、錬成師である彼は生成魔法の適性が『最優』であり、飛行艇や潜水艇を作ることが出来ます。ゲームをクリアする上では、錬成師主人公以外では必ず一度はお世話になる事でしょう。

総評すると、壊れではありませんが普通に有能です。

〽夜になった……

〽これ以上は行動しない方が良いでしょう

キャンプ発生です。センチユリーよりも速い足が欲しいですね。まあ、飛空艇とかはもう少しの辛抱で手に入るので我慢しましょう。「こうやってキャンプするのは日本では中々機会がねエよな。冒険してるって感じがするぜ」

「そうだね。すごく星もきれいだし、良い思い出になりそうだよ」

「わーいご飯だー！ まもるんって料理上手なんだね！」

「う、うん。すごく美味しそう匂い……」

「……マモルの料理はおいしい。それにレパートリーも豊富」

「なにおう！ 私だって負けてませんよ！ 今度ハウリア族に伝える料理をご馳走しますから楽しみにしてくださいね！」

今日はお肉系統の料理です。野外で料理しているはずなのに当然のようにハンバーグとか作ってますね……。どういう理屈なのかコレガワカラナイ。ひき肉から作ってるんですかね……？

「今頃日本の奴らはどうしてるんだろうな。一クラス丸々消えたんだからマスコミとかが来てるのかもしれないねえ」

「少なくとも当分の間ワイドショーはネタに困らなさそうだね。でも少し経ったら忘れ去られそうだよ」

男性陣は今日はほもくん一人じゃないので会話が発生してますね。

基本的にテントでは割と誰でも仲良く会話してる感じですよ。

「……シアですがテントの空気がヤバイです。恵里さん、何とかでき

「ませんか？」

「……、ごめんなさい。私じゃちよつとあそこには割り込めないです……。そ、それよりも北条くんと南雲くんって距離が近いと思いませんか？ フ、フッフ……」

「……手と腕。これだけは絶対に譲らないよ」

「……背中と胸板こそが至高……やはり鈴とは分かり合えない」

何かのガールズトークですかね？

まあ何でもいいですが、人数が多いほど会話量が増えて内容もカオスになりやすいです。

旅の一行を全員男にした時とか完全に修学旅行のノリでしたからね……。

▽朝になった

そんじやあ出発しましょ。

今からの予定ですが、ライセン大渓谷の迷宮に挑む前に一度オルクス大迷宮の拠点に立ち寄って、他のメンバー……特にハジメくんに生成魔法を覚えさせます。

一度クリアしてしまえば、他のメンバーはいつでも覚えに行くことが出来る親切設計です。

道中に転移陣があるのでちよつどいいですね。

ライセン大迷宮を攻略すると自動的にブルツクの町の近くまで移動させられるので、この時に忘れずに立ち寄りましょう。

では、パパパつと生成魔法を覚えさせてライセン大迷宮の攻略を今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

幕間：そうして彼らは再会する（前）

北条衛が死亡確認を言い渡されてからすでに一月以上は経った。

しばらくは心が折れたように陰鬱と過ごしていた生徒も徐々に立ち直りつつあり、今ではオルクス大迷宮の浅い階層では言え戦闘訓練を再開するようになっていた。

特に天之河を始めとした主力メンバーは破竹の勢いで迷宮を制覇して、先日はついに六十五層であるベヒモスにリベンジを果たすと言う偉業を成し遂げていた。

堂々と凱旋した勇者一行に、首都ではちよつとしたお祭り騒ぎになつていたほどだ。

現在クラスは二つのグループに分かれている。

すなわち、勇者である天之河と共に迷宮で訓練を積んで戦争に備えるグループと、作農師である畑山愛子の護衛としてトータス各地を見て回るグループの二つだ。

そのどちらにも所属していない、あるいはどちらにも所属している者もいるが割愛しよう。

その片方のグループである『愛ちゃん親衛隊』のメンバーは現在、各地の農場の改善のためにブルツクの町に向かつていた。

複数台の馬車に揺られながら、道中出現する魔物を問題なく退けていく。

召喚された生徒たちにとってはすでに敵ではない強さだったし、護衛の神殿騎士もそれなりに腕が立つので苦戦する要素など皆無だった。

「いやー、それにしても馬車での旅もだいぶ楽になったよね。最初は揺れがひどくて色んな所が痛かったけど、錬成師様様よ」

「だよなあ。すわ無能かと思つてた錬成師がまさかこんなにも便利職業だったなんてな…」

「むしろその辺の戦闘職よりも役に立ってる説」

「やっぱり技術って言うのは偉大なんだなつて」

馬車に揺られる生徒たちがリラックスしながら会話をする。

当初、馬車は揺れがひどかった。そもそも道があまり整備されていなかったと言うのもあるし、見た目はそれなりに豪華でも日本の車に慣れ切った面々からすると、常にパンクした車で走っているような感覚である。

それを改善したのが他でも無い南雲ハジメだった。そもそも彼も馬車の揺れで腰をやりそうだったので必死だったのだ。

バネを使ったサスペンションや空気を入れたタイヤなどを錬成で組み込むことよって、馬車での揺れによる衝撃をおおよそ八割程度軽減することに成功していた。

この機構は早速取り入れられ、特に年配のご貴族の方々から非常に感謝されることになる。

「あ、後ろから魔物が来てる。どうする?」

「一体だけか。こんなんで一々停まるわけにもいかねえし、俺が追っ払っとくわ」

後ろから突進してくる魔物が一体。訓練でも討伐をしたことがある猪型の魔物だ。

当然ながら訓練当初より遥かに強くなった生徒たちの敵ではない。

よっこらしよ、と立ち上がったのは清水幸利。

『闇術師』の天職を持ち、勇者組と愛ちゃん親衛隊の二足の草鞋を履いている後衛を務める生徒だ。

「失せろ」

清水が魔力を込めて睨みつけると、魔物は怯えたように立ち止まり、一目散に逃げだしていった。

闇系統の魔法は、相手の精神や意識に作用する系統の魔法である。相手の知性や魔力が低ければ低いほど術中に嵌めやすく、今程度の魔物であれば軽く魔力を送るだけで恐怖状態にして退けるのはわけなかった。

「終わったぜ。まあ、この程度チヨロいもんだ」

「ありがとー、ご苦労様ー!」

「また清水がシャンクスごっこしてる…」

「シャンクス、闇術師で確定」

「この前は藍染ごっこやってたぞ」

「う、うるせえ！ お前らだつて似たような事やってただろうが！」

魔物が出現する世界とは思えない程和気藹々としながら馬車は進んでいく。

もう一つの馬車では畑山愛子や谷口鈴、それに南雲ハジメがデビットなどの神殿騎士を交えてこれからの予定を確認していた。

「確認ですが、今向かっているのはブルツクの町です。そこまで大きな規模の町ではありませんが、商業都市フューレンの比較的近くにあるのでそれなりに栄えています。人もそれなりに集まっていますかと」
「ありがとうございますデビットさん。それじゃあいつも通り、農地の改善をしつつ北条くんの情報が無いか確認しましょう」

「えーっと、確かブルツクの町には冒険者ギルドがあったから、まずはそこで聞き込みをした方がいいかな？ 人が集まるって事はそれなりに情報も集まるって事だし、僕はまずそっちを当たってみます」

「まもるん…今頃何してるのかな。一人ぼっちで寂しがってないかな…」

「だ、大丈夫だよ鈴、きつと北条くんなら生きてるよ。天之河くんも遺体とかは見つからなかったって言ってたし…」

天之河が六十五層を制覇してそれまでの道中も探し回ったが、結局北条の遺体や遺品は無かつたらしい。

あの橋の下が何処に繋がっているのかは分からないが、今の所は生存の可能性はある。

「愛子、きつと大丈夫だ。その北条という男の事は俺も聞いている。とても勇敢な子供だったと。愛子を悲しませたことは許せないが、愛子が望むのであれば俺が騎士の名に懸けて必ず連れ戻そう」

「あっはい。そうですか」

爽やかに笑って口説こうとするデビットであったが、畑山先生これをスルー。

すでにやたらイケメンなデビット達神殿騎士が自身を王国や教会に縛り付けるための鎖だと言う事は生徒達から口酸っぱく聞かされていたので業務的に付き合うことにしたのだ。

なお、当の神殿騎士達はガチ恋勢と化した模様。

「ではこれからの予定を確認しますね。ブルツクの町に着いたらまず宿をとって、それから私は生徒の皆と農地を見に行きます。南雲くんと谷口さん、中村さんは冒険者ギルドなどでの聞きこみ。どちらもいつ頃終わるのかは分かりませんが、終わったら宿屋で待機です」

教師らしくこれからの予定を分かりやすく説明する。

おおよそ一月前、北条が死亡確認された時の取り乱しようからは想像もつかない程しつかりとした姿がそこにあった。

「こっちは俺が何とかしておきます。これ以上は絶対に犠牲は出しません。だから先生は救える人を救ってください」

天之河にそう呼び止められたのは、これ以上生徒を戦いに送り出すことは出来ないと言ったシヨックで寝込んでいた愛子が復活してすぐに国王や教皇に、自身の能力を盾に交渉しに行こうとした時だった。

そもそも自分が寝込んでいた時にすでに天之河が直談判してくれたようで、リハビリしながら徐々に戦線に復帰していくと言う方向で話が固まったようだった。

最初はそんな事、と思っていた愛子だったが、一人、また一人と歯を食いしばりながら武器を取り戦い始めたのを見て、守るべき存在だと生徒たちを無意識に下に見ていた自分を恥じた。

そうして先日、ついにベヒモスを打倒して、今度は一人も欠けずに胸を張って凱旋したのを見て、愛子は生徒たちに戦いへ向かうのを引き留める事ついに止めた。

(……先生の知らない間にみんな、こんなにも強くなっていたんですね)

召喚された以上、戦争への参加はもはや避けられない。

きつと、心に大きな傷を負う事もあるだろう。

戦争に行くのを黙って見ているのは教師失格だが、腐っても畑山愛子は皆の教師だ。

だから、その時は自分に出来る事をして皆を支えようと、そう思った。

「愛ちゃん先生、何だか前よりも頼もしくなったような気がします。

少し威厳が出てきたと言うか……」

「えっ？　そ、そうですか？　うえへへへ、やっぱりそうですか？

あ、それじゃあこれからは愛ちゃん先生とかじゃなくなってせめて愛子先生、あわよくば畑山先生という威厳ある呼び名に！」

デビットの反対側、愛子の隣に座っていた園部優花が割と失礼な事を言うが、それに気付いていない愛子は照れたように頭を掻く。デビットはその仕草を見て天を仰いでいた。

「あ、そこは愛ちゃん先生で固定なので……」

「なんで!？」

あはは、と笑い声を上げながら馬車は平原を進んでいく。

馬車の窓から白い雲が千切れて流れていくのが見えた。

ブルツクの町は比較的小規模な町である。とは言ってもそれなりには栄えているし活気もある。

あくまでも首都や商業都市に比べてという話だ。

宿屋もあるし料理屋もあり、服屋や装飾品屋なども充実している程度には規模は大きい。

太陽が天辺まで昇る頃には愛ちゃん親衛隊一行は町に入る事が出来た。

「立派な町ですね。色々お店もありますし、旅に必要な物も買い足せそうです。それじゃあ宿屋に行きましようか。全員同じところに泊まればいいんですが……」

「キャンプ用品があるとは言え何日も野宿をしてると気が滅入っちゃいますよ。お風呂もあれば良いな」

「ふむ…ガイドブックによるといくつか風呂を設置している宿屋はあるみたいですね。もちろん、宿泊料金とは別途に料金はかかりますが」

「おー、やったー！　お風呂だお風呂だ！」

「ついでにメシも食いてえな。もうお腹がペコちゃんだぜ」

結局ガイドブックを見ながら吟味した結果、風呂があり一階が食堂になっていてそれなりに部屋数もあるという、まさにお誂え向きの『マサカの宿』という宿屋へと向かう事となった。

歩を進めようとしたその時、上空から鷲のような魔物が降りてきてそのまま清水の肩に停まった。

伝書鳩のように足に紙を入れる筒が取り付けられており、清水はそこから紙を取り出して皆が見守る中目を通していく。

最初は何事か、すわ襲撃かと身構える事もあったが、今では見慣れた光景だ。

ハジメが後ろから覗き込みつつ、皆にも情報が行き渡るように質問する。

「それで、なんて書いてあったの？」

「どうやらフューレンでは見つからなかったらしい。次はエリセンの方まで行ってくつよ」

紙を裏返して『了解。こちらは現在ブルック。道中気を付けろ』と書く。

紙を丸めて筒の中に入れてみると、次の瞬間鷲は飛び立っていった。

「ああ、あと白に昇格したらしい」

「凄いスピード昇格だね。流石と言うかなんというか…」

「でも『満足同盟』とか言うチーム名は何とかならなかったのかねえ」
連絡を取っていたのは檜山、中野、斎藤、近藤の『いつもの四人』である。

搜索報告や生存報告などを兼ねて二日に一回はこうして伝書でやり取りをしている。

「全く北条のやつ！ 愛ちゃん先生や鈴をこんなに心配させて今頃どこをほつつき歩いているのやら！ 見つけたらとつちめてやる！」

「ははは、案外この町のどこかで暢気にメシでも食ってるのかもしれないな」

その場でシャドーボクシングを始める園部に玉井が笑いながらそう返す。

再び歩きだした一行はお昼ご飯に何を食べようか、この後すぐにお風呂に入りたいな、など談笑をしながら歩を進め、マサカの宿へとたどり着く。

「どうやら一階が食堂になっているようだった。」

愛子先頭にして入ると、昼時と言うのもありすでに席はそこそこに埋まっていたが、愛ちゃん親衛隊一行が席を確保できる程度には空いているようだった。

「中々に賑わってますね。ガイドブックの評価に偽りはなさそうです」

「はい、ようやく一息つけそうです。それではまず宿をとって、運の良い事に席も空いてそうですしついでにご飯も食べて行きましょう！」「それじゃあ僕は席を確保しておきますから、愛ちゃん先生は部屋の確保をお願いします」

「お願いします南雲くん。えーっと、部屋は男女別だから取るべき部屋数は…」

まとまって空いている席は無いかとハジメは辺りを見回して、そしてある一点で目が止まった。

あまりにも見覚えのある背中。あの時と着ている服は全然違うが、ハジメが見間違えるわけが無かった。

「……あれ？もしかして衛？」

「——えっ？」

小さな声で呟いたはずの声は愛ちゃん親衛隊メンバーの耳にしっかりと届いた。

愛子を含め、全員で一斉にハジメの向いている方向を見る。

「……うん、やっぱりそうだ。間違いないよ」

「マジかよー」

「見間違いとかじゃないのか？」

「いや待て、あの孤独なSilhouetteは…？」

迷わずにそちらに歩き出すハジメに半信半疑ながらも続いていく一行。

非常に奇妙な光景だったと、後に居合わせた客は語った。

「久しぶり、衛」

「ふいふあふいふりふあな、ふあひめ」

「うん。まずは口の中のもの飲み込んでから喋ろうか」

「ほ、本当に北条くんなんですか…？」

「す、鈴！ 北条くんだつて！」

ザワザワと皆が騒ぐ中、恵里が鈴に声をかけるが当の本人はその場で俯いてプルプル震えているだけだった。

この一月、北条の事を考えない日は無かった。生きていると信じていても、ふとした時に心が痛くなつて泣きそうになつたことも一度や二度ではない。

会いたくて震えるという言葉が現実のものだったと知つた十七の夜だった。

鈴は弾かれたように走り出し、溢れ出る感情のままにその背中に抱き着いた。

「うわああんまもる——ん！ 生きでよがっだよ——！」

ここで一つの不運が一人の少女を襲う。

北条は、口一杯に食べ物を含んでいた。そこに体当たりをするように鈴が背中に抱き着いた。

そして背中と言うのは、思い切り叩かれたりすると咳き込むのだ。

「感動の再会ですね！ 良かったで——」

「——ブホッ！」

鈴が抱き着いた時の衝撃で北条の口から米粒やらの食べ物が弾幕のように発射されて、正面に座っていた兎人族の少女の笑顔に叩きつけられた。

「——んぶふっ！」

そしてその光景を見て、北条の隣に座っていた金髪の少女がツボに入ったのか同じく口に含んでいた水を噴き出した。その時顔は兎人族の少女の方に向いていたので、噴き出された水はそのまま兎人族の少女の笑顔に叩きつけられた。

「……………」

「………すまない」

綺麗な顔から米粒や水を重力に従って落としながら、表情を笑顔のまま固まらせた兎人族の少女に、神殿騎士を含めた愛ちゃん親衛隊の面々から同情の目線が送られることとなった。

「生きてて本当に良かったです……あなたが居なくなつた事を聞いたときは心臓が止まるかと思いました。ごめんなさい、先生が居なかつたばかりに……」

改めて、席に着いた愛ちゃん親衛隊の一行は北条と向き合つて、思いの料理を注文した。

なお、先ほどの鈴の悪質タックルからの一連の流れは見なかつたことにされた。

「……居なかつた貴方には関係のない事だ」

鈴を背中に抱き着かせたまま北条は淡々と答える。

愛子に向けられた凄然とした言葉にデビットはいきり立った。

「貴様！……愛子に向かつてその言葉はなんだ！」

「落ち着いてくださいデビットさん！ 私は北条くんとお話したいんです！……ところで南雲くん、北条くんは何て言ってるか分かりますか？ 恥ずかしながら私ではちよつと……」

最早クラスの中では周知の事実となつた北条の口下手。

ハジメであればほぼ百パーセント翻訳できるので、愛子は迷わず彼に頼つた。

ちなみに北条の背中に抱き着いている鈴は八十パーセントほど翻訳できる。

『愛ちゃん先生はその場に居なかつたんだからどうしようもない。手の届かない所で起こつた、あなたに関係のない事で責任を感じる必要はありません』……で合ってるかな？』

「……初めからそう言っている」

「ええ……」

これにはデビットも振り上げた拳の下ろしどころが無いほどに困惑した。

北条はスプーンを置いて、背中で泣いている鈴に声をかける。

「…リンリン、気持ち悪いから離れろ」

「北条、アンタ！　鈴はアンタの事を心配して……あ、北条だった。南雲」

「涙や鼻水で背中が気持ち悪い事になってるからいったん離れてほしい」

「……やっぱ本物の北条だわコイツ」

呆れたように行儀悪く肘をつけて清水が言うと、生徒たちのほぼ全員がうんうんと頷いた。

鈴は北条を解放せずさらに強く抱き着く。

北条の隣に座っている金髪の少女がそれを見て眉を顰める。

「こほん！……教えてください北条くん。あの後、何があったのかを。例え何があっても先生は目を逸らしませんか」

咳ばらいをして愛子が北条に向き直る。

ずっと探していた生徒と再会できて、このまま祝いたい気分だったがそれでも訊かなければならない事があった。

どんなに耳が痛い事でも、恨み言でも生徒からは逃げずに受け止める。それが戦えない愛子が自身に課した事である。

「あの後……進んだ。準備をして外に出て、一度樹海に行つてからここに来た」

だが北条はそれだけ言つて残った料理を食べ始めた。

「……………え？　そ、それだけですか？　な、南雲くん！」

「いやあ、流石に今のはちよつと……。多分に推測を含みますけど、オルクス大迷宮を最後まで進んで、それから何らかの方法で地上に出て、樹海？で何かの用を済ませてからここまで来たって感じだと思います」

「……………そ、そうだったんですね。なるほど、そんな事が……」

ハジメが匙を投げたため、愛子は理解するのをあきらめた。

まあ、こうして生きて再会できたわけだし、細かい事はどうでも良

いのだ。重要な事じゃない。

言葉に詰まった愛子は「あー」だの「うー」だの頭を抱えて唸りながら質問すべき言葉を探す。

「……ずびびっ！　ねえねえまもるん。話は変わるんだけど、この女の子たちとはどういう関係なのかな？」

鼻水をすすってようやく顔を上げた鈴がユエとシアを視界の端に捉えながら笑っていない笑顔で質問した。それはもう正面から見てしまった愛子やシアが「ひいっ!？」と仲良く声を上げるような表情だ。

なお、すでに北条の背中では涙やら鼻水やらがべつとりと付いて大惨事になっていたが、気にする者は北条しかいなかった。

「あっ、それは私も気になってた！　今までスルーしてたけど鈴と言うものがありながらどこで引っかけてきたのさ！」

「ラノベ主人公みたいな事しやがって……！」

ユエもシアも、滅多にお目にかかれない程の美しい少女である。

男子生徒は先ほどからチラチラと二人を熱い目で見ていた。特にシアの方は思春期の男子には目に毒である。

北条の隣に座っているユエは、彼の腕をとって抱きしめた。

「……私とマモルは深い仲。想像に任せる……あと、いい加減私のマモルから離れて！」

鈴を睨みながら言い放たれた言葉に空気が凍り付いた。

その時シアは未来視の技能が発動したのか定かではないが、何かを察した表情であっと思を漏らした。

「まもるん、この二人の事、どういう事が説明してくれるよね？」

「こ、この人笑顔なのにすごく怖いです！　ユエさんは煽らないでください！　あっ、私はお友達ですからね！　一族を救われた恩はありますし、どんな事をしてでも恩返しをするつもりですが違いますからね!？」

すぐさま修羅場から逃れるために早口で捲し立てるシア。

このまま巻き込まれると精神的にマズい事になるのは分かり切っていたので、亜人族特有のカンによる行動だった。

そして、自分のカンが間違っていない事を直ぐに理解する事とな

る。

「……私はマモルと一緒に風呂も入ったし、一緒にベッドで寝たこともある。毎朝ハグもしてる」

「ユエさん、さっき私がいった事聞いてましたか!? 火に油を注いでどうするんですか!」

「……実質セ○クスまでした」

「もうやめてくださいユエさん!」

美しい少女の口から放たれたとは思えない言葉に一同が顔を赤らめる。

そして北条の肩からミシリ、と何かが軋む音が聞こえてきた。

「……へえ〜。ふ〜ん。そうなんだ〜……鈴がこんなにも心配してたのに、まもるんはこんな可愛い子たちとよろしくやってたんだね〜。そつかく、そうなんだね〜……」

鈴の筋力は低く北条は耐久が高いのでダメージは無かったが、何故か痛みが走ったような気がした。

聞き捨てならなかったのは鈴だけでなく愛子も同じである。行方不明になっていた生徒が年下と思われる少女と同衾していた。

机を叩きながら立ち上がって北条に迫る。

「ほ、北条くん! これは一体どういうことですか! 先生に包み隠さず話してください! 未成年の不純異性交遊は許しませんよ!」

「…俺は出していない」

「避妊すれば良いと言う話ではありません! まだ二人とも若いんですから交際するならともかく子供を作るには早すぎます!」

(いや、今のは手を出していないという意味だと思うけど……まあ、心配をさせた罰として今回はこのまま眺めていよう。いやあ、このカレーみたいなの美味しいなあ)

ガミガミと説教を始める愛子とプルプルと震える鈴。

クラスメイト達は現実では滅多に見る事が出来ない修羅場をニヤニヤしながら見守っている。

「……将来は十人くらい子供が欲しい」

「……まもるんのバカ! 鈍感! 唐変木!」

「…心配をかけた。すまなかつた」

ポカポカと肩を叩き出す鈴だったが北条の言葉に手を止めて、額を彼の肩に当てて小さくつぶやいた。

「……本当にまもるんなんだよね？　ちゃんと現実なんだよね？　鈴が見てる都合の良い夢じゃないんだよね？」

「…ああ」

「……そっかあ。えへへ、まもるんだあ。ちゃんとここに居るんだ。あつたかいなあ……」

「す、鈴、すごい幸せそう……」

首に腕を回して顔を埋めて、蕩けたような声を出す鈴にクラスメイト一同は拝む者が半分、胸やけを起こしたような表情の者が半分であった。そしてユエは青筋を浮かべていた。

色々と聞くべき事は残っているが、兎にも角にもこうして愛ちゃん親衛隊一同は北条を見つけることが出来た。最近では一番明るいニュースになるだろう。クラスの雰囲気も一気に良くなるに違いない。

（早く他の皆にも知らせてあげないとなあ。……あれ？　と言う事は僕がもうあそこから逃げ…じゃなかった、離れる理由が無くなっちゃったって事？　どうしよう……）

最近やけに積極的になって迫ってくる一人のクラスメイトを思い出しながらハジメは少しだけ重い気持ちである。朝起きた時に顔を覗き込まれていた時は悲鳴を上げそうになった。ちようど通りかかった天之河が居なければ今頃どうなっていたか…。

衛なら何とかしてくれるだろう、と他力本願な結論を出したハジメは取りあえず再会できたことを喜ぶ事にした。

（……背中がべたついて気持ち悪い……）

なお、渦中にある北条は暢気にそんな事を考えていた。

幕間：そうして彼らは再会する（後）

「それですね、マモルさんは言ってくれたんです。『お前たちのその優しさは失われるべきではない。倒す術よりも護つたり制圧する術を学んだ方が良い』って。あれは凄く嬉しかったですねえ、ちゃんと皆の事を尊重してくれているようで」

「へえ、そうなんだ。それでそれで、その後はどうなったの？」

「熊人達との小競り合いがありましたが見事に無力化してました！

関節技って凄いですね、あの力の強い熊人が全く動けなくなってましたよ！」

「ああなる程。力押しをしてくる奴には関節技って凄く有効だからな。素早く身軽な兎人にはピッタリかもしれねえ」

マサカの宿で再会した北条一行と愛ちゃん親衛隊一行は和やかに話をしていた。

ユエとシアの自己紹介から始まり、二人が北条と共に行動するようになった経緯などを説明していく。

「ユエは……連れてきた。シアは……付いてきた」

「いや、何の説明にもなってねえよ」

当然、北条だけで説明できるわけはなく。オルクス大迷宮での出来事はユエが、ライセン大渓谷やハルツィナ樹海での出来事はシアが説明を九割ほど補助していく。

ただし、神代魔法や解放者の事は神殿騎士達がいるので口にはしていない。

「……私はマモルと同棲していた。すでに三歩も四歩も抜きんでている状態」

「うぐっ……！ す、鈴はまもるんと一年間の濃い付き合いがあるし、付き合いの深さでは負けてないよ！」

「……それもこれからすぐに逆転する。あと、そろそろマモルから離れるべき。そこは私のポジション」

「離れないよっ！ 一か月以上ぶりのまもるんなんだから思う存分堪能するのだ！」

なお、簡単に説明した後はすぐに話が脱線した模様。

シアはウサミミ敬語口調スタイル抜群という属性過多のお陰で皆の人気者と化していた。

デビットが「亜人族なんて…」と愛子に忠告したが、愛子が「すごく良い娘じゃないですか！」と反論して、生徒たちもそれに便乗したおかげで論破された。現在は眉を顰めながら経緯を見守っている。

ユエは鈴と先ほどのやり取りの続きをしている。こちらは見守るだけで誰も話に割って入ろうとしていない。修羅場好きの面々がニヤニヤしているだけである。

鈴の腕が北条の首に完璧にキマっているが本人は特に苦しそうにしていないし、それどころか上半身がブレる様子すらないので、ハジメはそのままにしておく事にした。

触らぬ神に祟りなし、である。

「衛といると飽きないって言うか…日本でもそうだったけど何かしらのイベントに巻き込まれる呪いでもかかっているんじゃないのかって疑いたくなるよ」

「……………そうか」

「羨ましいいっちゃ羨ましいいけどな、流石に死ぬような目に遭うのは俺は御免だぜ。俺は安全に成り上がりたいんだよ。成り上がりやあその内ちやほやされるからな。人類は殆ど劣勢状態だが、とりあえず俺はそこそこの魔族を倒して名声を得るぜ」

「清水、それ死亡フラグじゃね?」

一通り料理を食べ終わり、いつまでも大所帯で占領しているのは迷惑だと言う事で、一先ず部屋で準備を整えて本来の目的を果たしに行くことになった。

どうやら北条もこの宿で部屋を取っているらしい。二人部屋を二つ、男女別に取ってあるとの事だった。男女別室と言う事を聞いて鈴は少しほっとした。

そして後で遊びに行く気満々だった。

「北条くん、それじゃあ私たちと一緒に来てください。その後はハイリヒ王国まで戻りましょう。皆あなたの事を心配してるので顔を見

せて安心させてあげてください」

愛子の申し出は当然のものだった。

北条が戻れば戦力の大幅な向上にもなるし、何よりも生徒たちの心が軽くなる。

誰よりも前で皆を守ってきた背中では安心感を与えてくれるだろう。

「…すまない。それは出来ない」

「……………えっ?」

当然、首を縦に振るものと思っていたので、ゆるゆると首を振りながら返された言葉に驚きを隠せなかった。そしてそれはクラスメイ卜一同もほぼ同じだったようで、口々に北条に詰め寄った。

「えっ?… えっ?… どうしてですか?」

「そ、そうだよ北条! アンタが戻って来てくれれば皆も楽になるし、檜山達だつてあちこち飛び回る必要は無くなるんだよ!? むしろ戻らない理由は無いって!」

「そうだそうだー! 我々のメイン盾はやくきてー!」

「天之河や八重樫も心配してたぞー!」

洪水のように北条に言葉を浴びせられてユエは顔を不機嫌そうに顰めた。

北条が戻るといふ事は、一緒に居られる時間が減るかもしれないという事と同じだ。無論、離れるつもりは無いが。

しかも、腹立たしくも今現在、自分の特等席である彼の背中に抱き着いている鈴という女も付いて回るといふ事でもある。戻ってほしくないというのがユエの内心だ。

一方でシアは事の成り行きをじつと見守っている。

シア:…と云うよりハウリア一族は北条に救われ、さらには身を護る術を与えてくれた恩がある。

これに報いないようでは情に深いハウリア族として失格だろう。

個人としても北条の事は気に入っているし、大切な友達だと思っているのです、このまま彼が戻ろうが戻るまいが付いて行く考えだ。自分が巫人という事で一悶着あるかもしれないが、そこは北条個人の奴隷と云う事にでもしておけば問題ない。

「…もしかしたら地球に帰る方法が見つかるかもしれない」

「……………なっ!!」

「なにっ!」

「そ、それは本当か!」

地球に戻るには魔族との戦争に勝利するしかないと思っていた彼等にはさつき以上の衝撃だった。

そもそも一部を除いて彼らが戦争に参加するのは地球に戻るためであって、この世界の人類を助けるためではないのだ。それ以外に帰る手段が見つければ、当然ながらそつちを利用する。

「す、少し待て! それはエヒト様の御意志に背くことになるぞ!」

「エヒト様は人類救済のために召喚を執り行われたのだ。勝手に帰られては流石に困るぞ!」

それに焦ったのはデビット達神殿騎士である。

愛子に即堕ちニコマした彼らを見ていると忘れそうになるが、一応彼らは教会所属の騎士であり、唯一神であるエヒトの意志に従う事が職務である。

人類救済の鍵となるだろう勇者一行に帰られるのは非常にマズかった。

「事情は分かっている。後の保険だ」

「…………… どういうことだ?」

「投げ出すことは無いが、当然の事だろう」

「??」

「まだ時間が残っているうちに確保するだけだ」

「??」

「それだけだ。安心してほしい」

「??」

「北条の説得(?)に神殿騎士達はお互い顔を見合わせて首を傾げる

だけだった。

「…南雲くん、お願いします。先生もサツパリです」

「あなた達の事情は分かっています。戦争が終わった後の帰る時の保険として考えています。一度請け負ったからには戦争を投げ出す

ようなことはしませんが、その後の事を考えておくのは当然の事です。まだ戦争が始まるまで時間は残っているようなので、その間に帰還手段を確保しておくつもりです』

「……すまない南雲くん、君はなんで分かるんだ……？」

「いやあ、これでも去年に比べるとだいぶマシになってるんですよ。去年だったらこれの半分しか言葉が出てこないですから」

苦笑いするハジメにデビットが凄いものを見たかのように慄いた。

だが、今の言葉が本当だとすると帰還手段についてはどうあれ、しっかりと戦争に参加してくれる以上、人類救済と言うエヒトの意志に反することは無い。

色々言いたい事はあったが、デビットは取りあえず引き下がることにした。

「北条くんの言いたい事は分かりました。でも、それなら尚更皆と合流すべきです。日本への帰還は皆の問題なんですから話し合って力を合わせるべきだと思います」

「そうだよまもるん！ 一緒に戻ろうよ！ それからでも遅くないよ！」

愛子と鈴が食い下がるが北条は頑として首を縦に振らない。

「…見つかると確定したわけではない。危ない橋も渡る。巻き込むわけにはいかない」

「…先生としてはそれも含めてみんなで話し合うべきだと思うのですが、北条くんは自分の決めたことに頑固な所がありますからね…」

頭を抱える愛子を一瞥して、北条は水を一口。

目を瞑って、数秒考えこんでから口を開いた。

『誰一人欠ける事なく、皆で揃って故郷に帰る』

「…！ まもるん、それって…！ 鈴との約束、覚えててくれたんだ…」

オルクス大迷宮に行く前夜に二人で交わした約束。ただ安心させるための方便かと思っただが、北条は至極真面目に言っていたのだ。

そして、今でもそれは続いている。

「お前との約束を忘れた事は無い。一度言っただからには必ず守る」

「……うん。ありがとう」

「……チツ」

(ひいつ!? ユエさんの顔が凄い事に! ひ、人殺しの顔ですよこれは!)

二人の間にほわほわした空気が流れ、クラスメイトは少しほっこりして生暖かい視線を向けた。

一方、ユエの顔を正面から見てしまったシアが心の中で悲鳴を上げる。

空気を読んで声を出さなかった自分を褒めてあげたいほどだった。多分、樹海での特訓が無かったらチビってた。

「畑山先生、申し訳ないが俺はまだ戻れない。帰る手段を手に入れるまで待つてもらってもいいだろうか」

「……っ! ……分かりました。そこまで決意があるなら先生は背中を押しましょう。天之河くん達への説明もしておきます。……ただし! 絶対に生きて帰ってきてください! あと定期的に連絡を入れてください! それと、危なそうだったら引き返すこと! 北条くんの事を待っている人はいるんですからね!」

「…温情に感謝します」

愛子は今までの経験から、北条がこうなってしまうては何をしようが意見を曲げることは無い事を理解してしまった。

個人的な感情では、本当は引き摺ってでも連れ戻したかったが、帰還手段が見つかるかもしれないのであれば、それは無視できない。先ほどの説明であるオルクス大迷宮を踏破したと言っていたので、そうそう死ぬようなことはないだろう。

現在は魔族側の動きも無く、戦争が始まるにしてもあと数か月は後だろうというのが王国や教会の見解であり、魔物の方も天之河チームで十分対応出来ている。

総合して考えた結果の折衷案だ。

「……はあ。北条くんといい檜山くん達といい、どうして私の生徒たちはこうも行動力がありすぎるんでしょうか…。檜山くん達は手紙一枚残して旅立ちましたし…連絡はくれるのでまだ許せるん

ですけどね…」

「あ、愛子、大丈夫だ！ きつと愛子の気持ちは彼らにちゃんと伝わっている！」

久しぶりのネガティブモードに入った愛子を慌ててデビットが慰める。

話はすでに終了のような雰囲気であり、今こそ私のターンとばかりにユエが北条の袖をくいくいと引く。あざとさ全開の上目遣いも完備である。

「……マモル、話が終わったなら行く？ ……部屋に戻って『いつものアレ』をやりたい」

「…分かった。畑山先生、話も終わったので俺は失礼する」

「あつ、ちよつと待っててくださいよ！ 私を置いて行かないでくださいー！」

この後部屋に戻ってイチヤイチャ（ユエ視点）して、その後は買った服の着せ替えショー。

『不慮の事故』で着替え中の自分が押し倒されてそのまま合体である。

ユエは頭が良いので、脳内で計画するのは難しい事ではなかった。
シア？ 当然別室待機である。

ちなみに、いつものアレとは吸血の事だ。

「まもるん、いつものアレって何かな？ もちろん鈴も付いて行っているよね？」

「……あなたには関係のない事。……これは私だけの特権……あと、そろそろマモルから降りるべき」

「いやです。まもるんのはここはずっと前から鈴の特等席です。そうだよね、まもるん？」

「……こうなったら力づくでどかす。……確信した……あなたが一番の強敵……！」

北条が立ちあがると、鈴もそのまま持ち上げられてプラプラと足が揺れる。

地球に居た頃によく見られた光景である。

いつまでも離れない鈴に痺れを切らしてユエが引きはがしにかかるが、吸盤でも付いているかのようには離れない。ただ、腕を回されている北条の首への負担が増えるだけである。ヘルニアになりそう。

「……ハジメ。これをどうにか……」

「あはは、僕じゃ無理かな。あ、そうだ。衛はこれからの予定はどうなってるの？ 僕でよければ力になるよ。……まあ、戦闘の方はからっきしだけど錬成師としては役に立てると思う」

北条が助けを求めるようにハジメに視線をやるが、流石のハジメでも無理なものはある。プチ修羅場を仲裁できる勇気が足りなかった。

そしてさりげなく自分を売り込む。ハジメが愛ちゃん親衛隊に加わっている理由は色々あるが、北条を探すのは当然として、最近ではちよつぴり香織に対して身の危険を感じるようになったからというものもある。

ある意味では渡りに船であった。

「……いいのか？ 危険な旅だが」

「うん、戦闘になったら後ろに下がってるから。それに、衛が守ってくれるなら心配ないよ」

「……分かった。よろしく頼む」

こうして南雲ハジメが北条一行に加わった。

ユエからすれば男だしライバルにはならないだろうから問題無しと言う事で反対する理由はない。むしろ北条のあれこれを聞きだせるチャンスだった。

「だったら鈴も連れてって！ これでも自分の身を守るくらいの実力は付けたんだから、まもるんの足は引つ張らないよ！ 今度こそ鈴がちやんと力になるから！ 危険は承知！」

「す、鈴が行くなら私も！ それに北条くんと南雲くんの絡みを間近で……じゃなかった、二人が心配だから……！」

「……分かった」

そして当然と言うように鈴が名乗り出て、恵里も便乗した。

鈴はたとえ断られたとしても、しがみついても付いて行くつもりだった。こうして再会できた今であっても、オルクス大迷宮での事を

思うと心臓の辺りがキュツとなる。

自分の居ない所で北条がまた同じようなことになれば、今度こそ耐えられる自信が無かった。

あと、付いて行かないとマズいような気がしたのだ。主にユエ的な意味で。

なお、恵里は趣味と実益を兼ねての事である。

「……こんなはずでは……私の計画が……」

「ああつ!? ユエさんの顔が芸術的な事に!」

ユエが、ムンクの叫びのような顔になった。

明らかに北条に好意を寄せているライバルの参入である。

「と言うか北条、お前どうやって連絡を取るつもりなんだ?」

「……それは」

「魔物の使役は俺の得意分野だ。今使ってる連絡用の鳥型の魔物は俺が調教したやつなんだぜ? お前用に新しいのを用意してやつてもいいんだが、俺もちよつと冒険してみたい気分だし連れて行け。……まあ、俺にも考えあつてのことだ。勝手に同行するだけだから気に入んな」

「…分かった」

清水は清水で何か考えがあるらしい。

短い話し合いと言う名の屁理屈合戦の末、愛子から許可をもぎ取って付いてくることになった。

ハジメ、鈴、恵里、清水の四人は北条一行に同行して帰還手段の探索。

他の者はそのまま愛ちゃん親衛隊として各地を回りつつ今まで通りの活動を行う。

これが最終的な結論である。

愛ちゃん親衛隊の連絡係は園部になり、伝書を受け取る役割は彼女に譲渡される。

鷹師のようなことができると言う事もあり、園部はちよつとはしやいだ。

愛子は生徒たちが遅しくなりすぎたことに、ちよつと泣きそうに

なった。

こうして、新たに四人の愉快的仲間たちが旅の一行に加わったのだ。

「……絶対に負けない……マモルの隣は私……！」

「今の鈴ちゃんは無敵だよ！ ユエちゃんみたいな美少女が相手であろうと勝ち取ってみせる！」

「い、いやー、一気に賑やかになりましたね！ 楽しい旅になりそうです！」

シアは、隣で行われているやりとりを聞かないようにした。痴情の纏れで北条が刺されないように願うばかりである。

□どうでもいいオマケ□

北条と再会した夜、鈴はこっそりと部屋を抜け出して北条が泊まっている部屋へと向かっていた。昼の間はユエに阻まれてあれ以上くつつくことが出来なかった。

一か月ぶりなのでもっと触れ合いたかったのだ。

抜き足差し足で廊下を進んでいく。

(待っててねまもるん、今あなたの鈴が到着するよ)

今日は月の綺麗な夜だし、そのまま良い雰囲気になってあわよくば、何てことは少ししか考えていない。いつもより薄着なのはたまたまである。

階段を上り、目的の部屋の前まで辿り着くと、ユエとぱったりと鉢合わせた。

「……」

「……」

お互いに目を見合わせる。

ユエはどこで手に入れたのか『Yes』と書かれた枕を持っていた。どちらからか、腰を落として組みつく姿勢をとる。

奇しくも構えは同じであり、それはとある国の国技にそっくりだった。

「……言葉は不要」

「……押し通る！」

勝った方が甘い夜を過ごすことが出来る。

本能以理解した二人はその場で相撲を始めた。

「……ねえ衛、何だか部屋の外が騒がしいんだけど」

「……放っておけばいい」

「……そっか」

繕い物をしている北条に声をかけるが気にしていないようだ。

苦笑いをして、ベッドに寝転がったハジメはハイリヒ王国の図書館から借りてきた本のページをめくった。

なお、宿屋のおばちゃんに騒いでいるところを見つかった二人は翌日になってミノムシみたいに吊るされている所を発見されたという。

ライセン大渓谷くライセン大迷宮

ハジメのアトリエ くトータスのオタクな錬成師く のRTA、
はーじまーるよー！

前回は新たな仲間を啜え、ブルツクの町からライセン大渓谷を目指してセンチユリーを走らせるところまででした。

キャンプから一晩明け、昼になるころには辿り着く計算ですね。
ひたすら車の操作をしてるだけとかどんな苦行なんですかね？

愚痴っている間に着きました。

そんじゃライセン大渓谷を駆け抜けてオルクス大迷宮のアジトに行きましょ。

転送の魔法陣は生きてるので、それを起動すればわざわざ迷宮を攻略する必要はないです。

ただし、アジト側から起動しないとその後の使用は出来ないのので、ライセン大渓谷にある魔法陣を探してオルクス大迷宮をスキップすると言う事はできません。

意地でも一度は攻略させていくスタイル。

～魔法陣を調べた

～『オルクスの指輪』があれば起動できそうだ

～魔法陣が輝きだした！

と言うわけでオルクス大迷宮のアジトに転移です。

ほもくんがユエ姉貴と14日間過ごした場所ですね。

ここでハジメくんに生成魔法を覚えさせるわけですが、覚えるためには該当のキャラクターを旅の一行に啜えた状態で、ボスである『ラーズヒュドラ』を倒す必要があります。

シア姉貴の試運転も兼ねてボコしましょう。

では、以前此処で入手した『ドラゴン殺せる剣』『ストロングガントレット』『ウインドブーツ』をシア姉貴に装備させましょう。

『ドラゴン殺せる剣』は、単純な物理攻撃力ならトップクラスです。

付加効果はありませんが、それを補って余りある脳筋武器です。

『ストロングガントレット』は筋力を40%上昇させる効果がある

籠手です。

『ウインドブーツ』は筋力と素早さを20%上昇させる足装備です。暴力、暴力、暴力！　って感じの装備構成ですね。

パーティはフロントメンバーにほめくとユエ姉貴とシア姉貴、後は清水くんを入れておきましょう。

清水くんはデバフ、状態異常魔法を複数持ついやらしい性能をしています。

世界樹の迷宮で言うカースメーカーみたいな感じですよ。

取りあえず放り込んでおけば大抵の戦いでは一定の活躍はしてくれませぬ。

なお、デバフを弾く敵に対しては…んにやび。

隊列はほめくんを一番前のだ真ん中に、ユエ姉貴と清水くんは一番後ろの左端つこに固めておきます。

シア姉貴は一番前の右端に配置。いの一番に敵を殴りに行きましょう。

バックメンバーはハジメくと谷口姉貴です。

ハジメくんの補助効果であるオートアイテムは『戦術』から設定できます。

ほめくんの体力が50%を切ったら回復ポーションを使うように、パーティメンバーのMPが50%を切ったらマジックポーションを使うように設定しておきましょう。

よし、これでアイテムさえあれば自動で使ってくれるようになります。便利な男やでえ。

～！　何かが起こりそうな気配を感じる！

～魔物が襲い掛かってきた！

アジトを突っ切って200階層へ続く扉を開けるとすぐにラースヒュドラくんが出迎えてくれます。

チカラヲタメスノニチヨウドイイアイテガアラワレタナ！

というわけで再び『ラースヒュドラ』との戦いです。（もはや苦戦する要素は）ないです。

ほめくんは挑発してユエ姉貴は最上級魔法連発です。いつもの。

「隙だらけだぜえ。よそ見してるからこうなるんだよ」

清水くんは範囲内の物理防御力を下げる『軟化』を使っておきます。そしてシア姉貴は『強化魔法』で戦闘形態へ入りましょう。

シア姉貴の強化魔法は使用后すぐに再行動できるチート仕様です。そんじやあ次に行動順が回ってくる赤頭に単体物理攻撃であるスキル『碎撃』を喰らわせましょ。

「ぶっ飛びやがれですうー！」

翠星石みたいな喋り方しやがって。でも一撃で倒しましたね。やっぱりこの兎火力がバグってる…。

挑発しているほもくに何やら攻撃してきてますが、装備が整いレベル上げも完了したほもくんなら自動回復で受けきれます。

＜戦闘に勝利した！＞

＜少しだけ強くなれた気がする…＞

＜『アザンチウム鉱石』を手に入れた！＞

特にこれと言ったアクセントもなく撃破ですね。銀頭のカーズドブレスでも半分喰らわなかったですし良い硬さですよ。谷口姉貴の10%カットが身に染みる。

アザンチウム鉱石が運よくドロップしたので折角だし武器の強化に使つときましよう。

ラーズヒュドラを瞬殺した事で、生成魔法を手に入れる権利を得ました。

3階にある魔法陣の所に行けばパーティメンバー全員に該当する神代魔法を覚えさせる事が出来ます。

オスカー兄貴の説明は一度聞けばスタートボタンでスキップできるのでキャンセルだ。

生成魔法は、ハジメくんの適性は『最適』です。様々なアーティファクトが作れますし、武器の強化で特性を付与する事も出来ます。

なお、谷口姉貴、シア姉貴の適性は『不適』で、清水くんと中村姉貴は『並』です。

ちやうど2階に工房もありますし、ここで新しい乗り物の作成や武器の強化を行っておきましょう。

ここで以前集めておいた素材が役に立つわけですね。

「工房があるね。何か作れるけどどうする?」

乗り物は潜水艦と飛行艇を作ります。

潜水艇は☆8、飛行艇は☆9ですが、設計資料集のお陰で☆が1つ下がっているので実際は☆8までのレシピ作成能力があれば問題ありません。

錬成師は自身のレベルを10で割って、端数を切り捨てた数値までのレシピを作ることが出来ます。

ハジメくんのレベルが現在86なので、それを10で割って小数点以下を切り捨てた☆8までのレシピを作ることが出来ます。計算通り……!

「うん分かった。ちよつと待っててね」

画面が暗転して、作成終了ですね。時間を待たされることが無いのが幸いです。

「よし、出来たよ。中々満足いくものが作れたと思う」

〈『潜水艇』を作成した!〉

〈これで移動が楽になりそうだ

これで海の中を移動できますね。地上では役に立たないですが、迷宮攻略にはほぼ必須です。

〈『飛行艇』を作成した!〉

〈これで移動が楽になりそうだ

これで空を移動できます。移動速度がすごく速いので時間の短縮が出来ます。

乗り物の確保はこれで終わりですね。

ちなみに、この2つの乗り物はそれぞれアザンチウム鉱石を1つずつ使うので、足りない場合はラーズヒュドラのマラソンを強いられることとなります。あらかじめ工房で拾っておいたので安心!

次は武器の強化をしましょう。

生成魔法の真髄をとくと見よ!

「どの武器を強化するの?」

工房の武器強化画面で、現在装備している、もしくは荷物にある武

器を強化できます。

鉱石を使えば攻撃力や防御力を上げれますし、ほもくんが装備している剣や盾のように付加効果を付けることが出来ます。

なお、付加効果をつけるのには特に素材は要らないですが、武器によつて付与できる効果は決められています。いくつかある候補の中から選べる感じですね。

ほもくんの『アザンチウムクロス』に追いアザンチウムをして物理防御力を上げて、付加効果は『状態異常耐性+20%』を選びます。これで状態異常は全てカット！

以前のラースヒュドラ戦の時のような事故は起こらないようになりました。

『バイタルガントレット』と『ジエネラルグリーブ』は付加効果は最初から付いているので、アザンチウム鉱石を使って防御力を上げるだけですね。

あとはシア姉貴の『ドラゴン殺せる剣』に付加効果で『筋力+50%』を付けておきましょう。

当初はこれだけで強化を終了するつもりだったのですが、さっきの戦いで運よくアザンチウム鉱石が手に入ったのでシア姉貴の『ドラゴン殺せる剣』も強化しておきます。

ユエ姉貴の装備は強化のしようがないのでそのままです。

「出来たよ。これで戦闘がもっと楽になるといいけど…」

ありがとナス！ ほもくんの生成魔法ではここまで良い数値になりません。適性が低いと付加効果の倍率が低くなってしまいます。

例えばシア姉貴が自分で付加効果を付けようとしても+5%程度が関の山です。

ともあれ、これで準備は整いました。それじゃあ3階にある魔法陣からライセン大渓谷に行きましょう。

＜魔法陣を調べた

＜『オルクスの指輪』があれば起動できそうだ

＜魔法陣が輝きだした！

ライセン大迷宮は、転移した場所から飛行艇で2日分ほど移動した

場所にありません。

完全にノーヒントなので初見では見つけるの無理だゾ。

まあ、道中に居る雑魚敵は飛行艇で移動するためスルー出来るので大丈夫です。

ちなみに、センチユリーだと5日くらいかかります。徒歩だと考えたくもないくらいかかります。このマップを作ったのは誰だ！

▽夜になった……

▽これ以上は行動しない方が良さそう

飛行艇も夜になると地上に降りてキャンプしなければいけない謎仕様です。

せつかく安全に休める飛行艇があるのに何でコイツらわざわざ外で休んでるんですかね……

「それにしても大変な事になっちゃったね」

「解放者、神代魔法、狂った神……まあ、ありがちっちゃありがちな設定だな」

「神様かく、ほんとにいたんだね。あつ、まもるんお代わり！」

「世界の裏を知っちゃいましたね。むむ、これは中々……！」

「帰るためにはその神様を倒す必要があるのかな……？」

「……はむはむ……うまうま……」

君ら軽すぎへん？ 世界の裏事情を知ったんだからもつとこうさあ……

まあ、無駄にシリアスになられても困るのでこれで良いんですけどね。

「それにしても便利だなこのテント。空調までついてんのか？」

「せつかく生成魔法を手に入れたんだし、冷暖房完備、防音、防虫機能付きにしてみたんだ」

はえー、すごーい便利……。日本で売りに出したら絶対にヒット商品ですね。

ただ、キャンプ醍醐味の環境音が聞こえなくなるのでそこはマイナスでしょうか。

「うあく食べ過ぎたく！ これじゃあ太っちゃうよ、ポヨンポヨン

だよ〜!」

「体重計がないのが救いだっただね…」

「……ん、お腹いっぱい……もう寝る」

「野菜を食べれば大丈夫です! 野菜を食べましょう! 明日は野菜三昧です!」

そう言えばユエ姉貴の自動再生って肥満防止の効果もあるんですかね?」

生活習慣病とは無縁そうで羨ましい限りです。

つまりエヒトは生活習慣病克服のためにユエ姉貴を狙っていた?」

〜朝になった

そんじゃ出発ですね。最短距離を突き進めば今日中には着くはずですよ。

これから挑むライセン大迷宮ですが、初見では非常に難しいダンジョンになっています。

一定時間ごとにマップの配置が変化するので迷いやすいんですね。トラップも満載で、何も考えずに進んでいると簡単にガメオベラまで追い込まれます。

さらに、この迷宮内では時間が進行するので、迷ってしまえば原作ハジメくんのように何日もこの迷宮の中で過ごすこととなってしまいます。

とはいえ、時間経過によるマップの変化は固定なので、あらかじめ道順を覚えておけば特に問題とはなりません。最短距離で駆け抜けろ!

道中出現する雑魚敵は物理攻撃しかしてこないのです、ほもくん一人で突破できます。

魔法職はあまり力を発揮できないので、今回はほもくんとシア姉貴に頑張ってもらいましょう。

一応MP効率度外視であればユエ姉貴も括約できますが、雑魚敵でそんな事したらマジックポーションの消費がマッハなので、エンカウントは出来るだけ避けます。

お、そうこう言ってる間に着きましたね。斜めに立てかけてある岩盤が目印です。

では飛行艇から降りてライセン大迷宮に入りましょう。ここからは徒歩です。

岩盤と崖の隙間に通路があるので、そこを進めばライセン大迷宮の入り口に辿り着きます。

入り口の近くにミレディ姉貴渾身の歓迎メッセージが書いてありますが無視だ無視！

∨壁に切れ込みがある

∨どうやらここから入れそうだ

入り口である回転扉くんは分かりやすく見える化されているのでちやつちやと調べて入りましょ。

原作ではシア姉貴が盛大にやらかしてましたがここではそう言った事はありません。

よかった、聖水で汚される回転扉くんはどこにもおらんのかな…。

∨矢が飛んできた！

∨体力が少し減った…。

一部トラップは全員に効果が出ますが、基本的にこういった物理系のもものはトラップによる効果はパーティの先頭にいるキャラが受けます。ほもくん肉壁になって、やくめでしょ。

それじゃあ進んでいきますが、ここからは瞬速です。

右側の通路を真っ直ぐ！ 2つ目の階段を上る！ 上ったら左に進んで突き当りの階段を下りる！ その後はすぐ右にある部屋に入って正面にある通路へ！ 飛んでくる矢はライフで受ける！ 左側の4番目に見えた階段を下りて三叉路を右へ！ 半分進んだところで移動床が来るのを待って乗る！ 移動床を下りた後は右側の上り坂を進んで、上り切つてすぐのところにある階段を上る！ そしてそのまま道なりに進む！

よし、完璧ですな！

このようにしっかり道順を覚えておけば10分ほどでライセン大迷宮は抜けることができます。

後ろから騎士人形くんが追いかけてきているので、ほもくんをポーションで回復させてからさつきとボス部屋に入りましょう。

〈とても巨大な空間だ……〉

〈どうやらここが最奥らしい〉

たった10分で渾身のトラップダンジョンを抜けられたミレディ姉貴かわいそう。

原作では不意打ち即死攻撃をかましてきたミレディ姉貴ですが、このゲームでは流石にそんな事はしてきません。やさしい。

格納庫から出撃する巨大ロボのように、ダイマックスした騎士人形くんが昇ってきます。

こやつが解放者の一人にしてライセンス大迷宮のボスであるミレディ・ライセンスですね。

「やほ、はじめまして〜！ 皆大好き、ミレディ・ライセンスだよお〜！」

ミレディ姉貴オツスオツス！ わずか10分で迷宮を踏破された気持ちはどうだ？ 感想を述べよ！

「しゃ、喋った……！」

「うわ、すっごい大きい！ 写真撮りたかったな〜！」

「ミレディ・ライセンス……オスカー・オルクスの手記に書いてあった名前だね」

「オスカーの手記が正しければミレディ・ライセンスは人間だ。だとしたらすでに寿命でくたばってるはずだぜ。これも神代魔法とやらか？」

「……実は人間じゃなかったとか？」

「ユエさんという例があるからあり得ますね。オスカーさんがミレディさんの事でわざと嘘の内容を書いた可能性もありそうです」

谷口姉貴がのんき過ぎる……。そして誰一人として挨拶を返さないのは草。

ここは連れてくるキャラによってセリフがそれぞれ違ってきます。

「目的は何？ 何のために神代魔法を求める？ 嘘偽りなく答えて」

わちやわちやどうでもいい事を話した後にマジモードのミレディ

姉貴に問われますが何を選んで大丈夫です。

『エヒトを討つため』『故郷に帰るため』『特に何も』の3つがありますが、『故郷に帰るため』を選びましょう。なお、『エヒトを討つため』を選んだらご機嫌ニコニコ顔でデュエルを仕掛けてきます。

「……ふくん、そっかそっか。なるほどねえ。別の世界からねえ。うんうん。それは大変だよねえ。よしつ、ならば戦争だ！ 見事この私を打ち破って神代魔法を手にするがいい！ いくよー！」

ではライセン大迷宮のボス、『プライドゴーレム』との戦闘開始です。

オマエヲオセナケレバ、カミヲコエルコトナドユメデシカナイナ！

今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

ライセン大渓谷に向かう途中での車内で、助手席に座って地図を広げるハジメが不思議そうに言った。

「そう言えば衛、この車どうやって作ったの？ 錬成師の指輪があっても車の構造なんて普通分らないと思うんだけど……」

「だよなあ。少なくとも男子高校生じゃあよっぽどの車オタクじゃない限りこんなのは作れねえ。北条、お前って車オタだったのか？

つか見た目がランドクルーザーっぽいのになんで名前がセンチユリーなんだよ」

三列目のシートに座っている清水も首を捻る。

北条は膝に座っているユエにハンドルを任せてごそごそと自分の懐に手を突っ込んだ。

「……これだ」

体積を無視してずりりと懐から取り出したのは分厚い設計資料集だった。

当然、ハジメには見覚えのあるものだ。なぜならクリスマスプレゼントで自分が渡した物だったから。

「それって僕がプレゼントした……。いや、何で持って来てるの……？」

「いやいや、どうやって懐に入れてたんだよ。明らかに体積が合っていないだろ」

「やはりハジマモ…つまりこの車は愛の結晶…？」

「ギギギ…次は鈴があそこに…ハッ！ まもるん、それ貸して！」
「…分かった」

二列目のシート、北条の後ろに座った鈴はユエを齒軋りしながら睨んでいたが、何かに気付いて北条に設計資料集を渡すように頼んだ。手渡されたほんのり温かい設計資料集をぎゅっと抱きしめる。

「これがまもるんの体温…！ つまり、これは実質まもるん…！ ぐへへ…！」

「……！ スズ、天才……？」

そのまま頬ずりを始めた鈴に驚愕したようにユエが振り返る。

ユエは頭が良いので、脳内で補完するのは難しい事ではなかった。

「何やってんだコイツ等…もうまともな女子はシアさんだけ——」

呆れたように清水が溜息をついた瞬間、横に座って爆睡を決め込んでいたシアが清水の方に倒れこんできた。美少女との急接近に心臓が跳ね上がった清水だが、次の瞬間には違う意味で心臓が跳ね上がった。

「……うへへ……うん……もう食べれないですよ」

「ぐえっ！ 涎垂らすな！ 俺のお気に入りの一張羅がつ！ チクシヨウ、やっぱりまともな女子なんて居なかった！ お、おい、誰か助けるー！」

「助手席は平和だなく。あつ、ちよつと進路がずれてるかな？ もう少し右側にハンドルを切った方が良いと思うよ」

「…分かった」

騒がしく砂煙を巻き上げながら旅の一行は進んでいく。

ミレディ・ライセン戦くアンカジ公国到着

ガンダムファイトレディーゴー！ なRTA、はーじまーるよー！
今回はライセン大迷宮のボス、ミレディ・ライセンが操る『プライドゴレム』との戦いが始まったところまででした。今回はその続きから始めていこうと思います。

プライドゴレムは物理、魔法両方ともに強力な攻撃が多く、さらにダメージを与えても行動が回ってくる毎に少しずつ回復する厄介な性質を備えています。

まあ、厄介なのは対策せずに戦った場合なのですがね。

「それじゃあ騎士くんたち、カモ〜ン！」

【ゴレムナイトが現れた！】

戦闘が始まると開幕でゴレムナイトを3体召喚してきます。そこまで素早くは無いですが、後衛組の防御力がアレなので一発でも通すとヤバいです。ほもくんはすぐに挑発！

幸いゴレムナイトは近接物理攻撃しかしてこないなので、挑発を切らさなければ盾反撃で勝手に倒れていってくれます。

プライドゴレムですが、右腕、左腕、胴体の3か所を削り切ればコアが露出して、それを破壊すると勝利になります。まずはやっかいな左腕から破壊しましょう。

「受けきれるかな？ そ〜れっ！」

【プライドゴレムは棘付き鉄球を射出した！】

左腕のガンダムハンマーでの攻撃ですね。非常に攻撃力が高いですが、単体攻撃です。

ほもくんであれば余裕で受けられますが、ユエ姉貴や清水くんに直撃したら10回くらいは氏にます。

清水くんは弱体化させといてください。ゴレムというだけあって麻痺や毒などの状態異常は入りませんが防御力低下などの能力下降であれば通じますので。

一応能力効果のデバフに対しても耐性があるので入るかどうかは半々くらいの確率です。入ったらラッキー、くらいに考えておきま

しよう。

「もつと力抜いたらどうだあ、オイ」

よし、入った！ 攻撃力を低下させる魔法である『脱力』によってほもくんの受けが楽になりましたね。とはいえ元のMP消費が50なので、ここでは250消費してしまいますが。

清水くんのMPは800くらいしかないので普通はそう連発出来ないのですが、ハジメくんの補助効果があればマジックポーションがある限り打ち放題です。

シア姉貴は強化魔法を使った後に最大火力をひたすらぶつ放しましょう。シア姉貴のスキルはライセン大渓谷の影響を受けないので安心！ おらつ、『大豪打』！

「おりゃああああー！」

流星の火力、一発で左腕のHPが半分くらい消し飛びましたね。

ユエ姉貴は今回は最上級魔法ではなくて単体用の上級魔法で攻めます。いくらマジックポーションがあるとと言っても、そもそも威力がライセン大渓谷の特性で半減するので、時間当たりのダメージ効率は最上級と上級でそこまで変わりありません。

今回はシア姉貴がメイン火力なので、むしろ清水くんのデバフ維持にマジックポーションを回した方が効率的です。道具も無限にあるわけじゃないですしね。

後はほもくんが攻撃を引き受けて、範囲攻撃に巻き込まれないように気を付けながら戦うだけです。

「これはちよつと痛いよ〜！ て〜い！」

【プライドゴーレムの右手が赤熱化した！】

炎属性の直線範囲物理攻撃ですね。ほもくんの真後ろに後衛キャラを配置すると巻き込まれて蒸発するので、前回でユエ姉貴や清水くんは後ろの左端に配置しておきました。

装備を強化した事もあり、ほもくんのHPは2000くらいしか減ってないですね。現在のHPが14000くらいなので、4000程度までのダメージであれば自動回復で相殺できます。

「隙だらけだぜえ。よそ見してるからこうなるんだよ」

デバフナイスウ！ 防御力低下が入ったのでシア姉貴がさらに輝きますよ！

「はいはい、それじゃあお代わりいつてみよ〜！」

【ゴーレムナイトが現れた！】

ゴーレムナイトは現れた3体全てを倒すと再召喚されます。ウザいと思うかもしれませんが、挑発が切れなければ無害ですし、再召喚に一回分行動を消費してくれるのでむしろうま味行動です。

「『破断』」

魔力ゴリラのユエ姉貴をもつてしても威力半減じゃあまりダメージが出ないですね…。でもそれなりにダメージは出てるのでよし！
大体一割ちよつとですかね。

「これで終わりですう！」

「うわわっ、中々やるねえ〜！」

よし、左腕撃破！ これで一番痛いガンダムハンマーは封じました！

右腕は先ほどのヒート・ナックルと薙ぎ払いを、胴体は単体攻撃のブロック飛ばしと重力魔法による攻撃や妨害、破壊された部分の修復を行ってきます。ただし修復してもHPは一割程度での復活になるので、ユエ姉貴の上級魔法でも復活した瞬間に攻撃すれば処理できません。

そうすれば胴体は延々と腕を再生するだけの置物となり果てるので最初に左腕を狙ったわけですね。

あとは同じようにシア姉貴で右腕を落とすだけです。

「もらったああああ！」

はい、右腕撃破です。胴体は修復を優先して行うので、もう攻撃が一生行えない置物が出来上がりました。お前を芸術品にしてやったんだよ！

さて、以前にフロントメンバーとバックメンバーはいつでも入れ替え可能と言いました。その機能をここで使います。

清水くんの番が回ってきたのでメンバーチェンジでハジメくんに入れ替わります。『攻撃』のコマンドにカーソルを移動して△ボタン

を押せば入れ替わるメンバーを選べます。

「そんじゃあ後は任せませー！」

「分かった、何とかやってみるよ」

これで清水くんがバックメンバーに引っ込んで、清水くんの位置にハジメくんが出現します。それじゃあハジメくんを一番前、ほもくんの横に移動させましょう。胴体だけしか残っていないなら攻撃されないのが安心！

ではシア姉貴で攻撃しましょう。最後の一撃くれてやるよオラ！

「くっ、このっ！ 調子に乗って！ これならどうだっ！」

【部屋が激しく振動し始めた！】

胴体を破壊すると、ゴーレムのコアが露出します。原作踏襲でアザンチウム鉱石で守られているのでクツソ堅いです。そしてこのテキストが出ると今回のボスの初見殺しであるフィールド全体に極大ダメージを与える『万物落下』を次の行動で使ってきます。

当然ですが、このまま受けるとほもくとシア姉貴以外は即氏します。そこで以前話した『城郭』のスキルの出番なわけです。次の行動順までパーティーメンバー全員のダメージを引き受ける、いわば全体庇うですね。

全員の受けるダメージを一回分無効にする『要塞』はライセン大渓谷の影響を受けますので、MPが2000必要です。ほもくんのMPじゃ発動すらできませんね…。

「ふっ、お返しだよー！ 見事凌いでくれたまえー！」

【天から様々な物が降り注いでくる！】

ダメージはほもくんがダイソンするので全員ノーダメです。そしてほもくんの行動順が来たので城郭が解除されてダメージが入りません。

……20万ダメージで草。ほもくんが10人以上氏んでますね。でも食いしぼりがあるから安心！

【技能『起死回生』が発動した！】

例え一億ダメージを喰らってもこれがある限り、ほもくんはどんな攻撃でも一回は耐えれます。

そしてハジメくんの行動順です。たった300ぽちしかないMPですが、ギリギリ使えるスキルがあるのでそれで仕事をしてもらいます。

「錬成っ！」

使う相手にピッタリとくつつかないといけませんし、効果時間もたった一ターンの間ですが、敵の物理防御力をゼロにできる『崩壊錬成』です。フレイバーテキストを見る限りでは、鋼の錬金術師でエドがグリードにやってたあれと仕組みは同じだと思います。

これの前ではアザンチウムの守りであろうと無駄無駄ア！

そしてシア姉貴でフィニッシュ！ 最後の 一撃くれてやるよオラ！

「これで、終わりですうううう！」

防御力ゼロであればシア姉貴が一撃で倒してくれます。最大火力の『絶衝』を叩きこめ！

……よしよし、削り切れましたね。若干オーバーキルのような気がします。

＜戦闘に勝利した！＞

＜少しだけ強くなれた気がする……＞

これにてミレディ・ライセンもといプライドゴーレムの討伐完了！
同時にライセン大迷宮の工事も完了です。

戦闘職じゃないハジメくんも大括約で僕満足！ 何気に谷口姉貴の10%カットも良い仕事をしてました。

中村姉貴は…また出番が来ると思うのでその時に頑張ってもらいましょう。今回は無機物が相手なので使いどころさんがありませんでした。ごめんね。

「どうですか皆さん！ 私だってやればここまで出来るんですよ！」

シア姉貴は今回の MVP ですね。お前は誇っても良い。

リザルト画面でシア姉貴がドヤ顔をしています。ほもくんが虫の息です。肉壁はそこでハアハアしてください。

「あ、あはは……いや、負け負け、あなた達の勝ちだよ！ 試練はこれでクリア！ あとはちよつとだけ話すしか力が残ってないやく！」

この後ミレディ姉貴が何やらわちやわちや言ってますが倍速でキャンセルだ。概ね原作と同じなので知りたい人は読んで、どうぞ(ダイヤモンド)。

「あなた達は……思った通りに生きればいい……その選択が……きつと……この世界にとつての……最良になるだろうから……」

今わの際みたいなことを言ってますが普通に生きてるのでさっさと進みましょう。

奥に扉があるのでそれをくぐればミレディ姉貴のアジトに入れます。

ここがああの女のハウスね。

「やつほー、さっきぶりー！ ミレディちゃんだよー！」

＜間違いなくミレディ・ライセンだ

＜スピアのボディなのだろうか……

ミレディ姉貴オツスオツス！ このニコるマークが付いたテルテル坊主みたいなのが予備のボディですね。それじゃあ俺、神代魔法貰って帰るから…。

散々煽ってきますがテキストスキップをすればストレスも溜まりません。

「それじゃあ魔法陣を出すから入った入った！ ミレディちゃんの魔法は重力魔法！ 攻防一体のすごい魔法なのだ！ 上手く使つてね〜！」

＜頭に何かが流れ込んでくる……！＞

＜『重力魔法』を習得した！

出してくれた魔法陣に入って取得完了です。これで2つ目の神代魔法が手に入りました。

ほもくと谷口姉貴の適性は『並』、中村姉貴は『優』、清水くんは『最適』となっております。

生成魔法とは違い、戦闘で使える高威力の魔法が同時に習得できるのはうま味ですね。

これで清水くんもそれなりの魔法アタッカーとして使うことができます。

「あとついでだしこれもあげる☆ ミレデイちゃんの優しさにむせび泣いても良いよー!」

◇『神水』×5を手に入れた!

◇『感応石』×10を手に入れた!

◇『念話石』×5を手に入れた!

◇『タウル鉱石』×20を手に入れた!

◇『フラム鉱石』×20を手に入れた!

◇『シユタル鉱石』×10を手に入れた!

◇『アザンチウム鉱石』×1を手に入れた!

ありがとうございます……やさしいおねーさん。

特に復活アイテムである神水は素直に嬉しいですね。事故つても安心!

「これで迷宮攻略は完了だし、強制的に外に出すね☆ それじゃあ残りの迷宮攻略、頑張つてね〜!」

◇壁から水が流れ込んでくる!

◇どうやら逃げる事は出来ないようだ!

巨大なトイレに流されてライセン大迷宮を出立します。

流された先はブルツクの町から歩いて一日、センチュリーでは10分ほどの場所にある泉です。

あ、今更ですが、ミレデイ姉貴はプレイアブルキャラです。

今は無理ですが、神代魔法を全て取得してから訪ねると普通に付いてきてくれます。友好度が存在するので当然攻略も出来ます。興味ある兄貴は是非やってみてください(ダイヤモンド)。

「ひ、ひどい目に遭った…」

「チクシヨウ、最後までクソみてエな迷宮だった!」

「め、眼鏡眼鏡…!」

「服がびしょびしょ…ま、まもるん! あんまり見ないでっ!」

「お、溺れ死ぬところでした…ありがとうございますユエさん!」

「……ん、服は魔法で乾かす……」

さて、これからの予定ですが、西のアンカジ公国に寄って道具を補充してからグリユーエン大火山に向かいます。アンカジ公国には飛

行艇であれば2日ほど進めば到着します。

何？ ブルツクの町で一度休みみたいだって？

そんな暇、RTAにあるわけじゃないじゃないですか。このまま強行軍ですよ。

テイオ姉貴？ 知らなーい。その辺で寝てるんじゃない？

……というのは冗談で、その内出番はあるのでご安心を。

そんじゃあ飛行艇で移動しましょ。

重力魔法についてですが、ミレディ姉貴が言った通り攻防において非常に心強い魔法です。

敵全体の素早さを下げる『過重』や、味方の筋力、素早さを上昇させる『戦身』などの補助魔法も豊富であり、まさに万能の名に相応しいですね。

消費MPがやや重いのが難点ですが、ハジメくんのオートアイテムがあるのでそれも気にしなくて済むようなレベルです。

また、取得することによってユエ姉貴の『雷龍』などの一部魔法が開放されます。

〽夜になった……

〽これ以上は行動しない方が良さだろう

砂漠のど真ん中でも当然のように外でのキャンプです。砂漠の夜は氷点下になる事もあるって聞くし、流星に飛行艇の中で過ごした方が良いと思うんですけど（名推理）。

「この世界の料理も地球と大差ないんだな。まあ、キャンプで出来る料理だとそんなもんか」

「食材も似たようなものがあるし、同じような発展をしたのかもね」

「でも味付けとかは…独特なものもあるよね…」

「うー、ここに白米があれば！ すぐご飯が進む味だよこれ！」

「……マモル、これあげる。頑張ったからご褒美……」

「ユエさん！ 嫌いなものだからって他の人に押し付けちゃダメですよー！」

砂漠で鮭のホイール焼き食ってんじゃないやねえ！ こ奴らはシユネー雪原で冷やし中華とか食い始める事がありますからね…もう滅茶苦茶

だよ。

「砂漠の夜か…このテントのお陰で冷える事がないのは良いな。ちよつと外に涼みにも出るのもアリか…?」

「上が透けて見えるようにすれば星空を見ながら寝れるかもしれないね…」

そう言えば砂漠の空つて雲とかも全然ないから夜空がすごい綺麗らしいですね。

「ち、ちよつとお花を摘みに…」

「そ、外は冷えるから気を付けてね…?」

「うくん、むにやむにや…うへへ…」

「……むぎゆつ！ スズ、足が邪魔……!」

ユエ姉貴が思いつきり足蹴にされてて草。

そんじやあ夜も明けましたし、進みましょ。

アンカジ公国は、今日の数だと原作であったポイズンスライムくんによる熱病が蔓延していません。無駄なイベントはキャンセルだ。というより事が起こる前に全てを終わらせる予定なので、そもそもそんなイベントは未来永劫起こりません。

このゲームでは経過日数や人物の状態によって発生するイベントがありますが、ある程度コントロールしてやる事が出来ます。例えば清水くんをずっとパーティに入れておけばティオ姉貴との戦闘イベントやウルの中の襲撃イベントは起こりません。

なので、愛ちゃん親衛隊に中村姉貴がいたのはラッキーでした。後々王都にちよつとだけ寄り道して回収する予定だったので思わぬ時間短縮になった形です。

アンカジ公国が見えてきましたね。透明なバリアーみたいなのに守られているので砂嵐が来ても安心らしいです。黄砂対策に欲しいけどなく俺もなく。

原作では病気の事もあり、暗かった雰囲気のアムカジ公国ですが、今の経過日数ではすごく明るい雰囲気です。これが本来のここの活気というやつですね。

んじや、門の前で飛行艇から降りて入りましょ。相変わらず門番く

んは飛行艇が目の前に降りてきても無反応です。私だったら迷わず手を伸ばしてその船に乗り込みます。

「アンカジ公国によるこそ。ステータスプレートか、もしくは身分証明になるようなものはあるかい？ すまないが決まりでね。協力してくれると助かる」

相変わらずユエ姉貴とシア姉貴はステータスプレートを持っていませんが普通に通してくれます。お前の国の警備ガバガバじゃねえかよ。

さて、入った時が夕暮れ時だったので町は夜からのスタートです。アンカジ公国はゲームプレイ中の観光地として、非常にスクショ映える場所がたくさんあります。北側の果樹園、東側のオアシス、西側の白い宮殿、この辺りが絶景のスクショ場所ですね。

そして町中に川が流れているので、小舟に乗って町の風景を楽しむ事も出来ます。私も初プレイ時には3日くらい観光してました。

食料は十分あるので大丈夫ですが、ミレディ姉貴との戦いでマジックポーションを消費したので補充します。ミレディ姉貴にもらったタウル鉱石、フラム鉱石、シユタル鉱石を売却しまして、そのお金で出来るだけ買い込みましょう。

……ケツ、たった5万ルタぽっちかよ。ペツ！

マジックポーションは一つ5000ルタなので10本買えますね。

買い物も終わったので、あとは皆でご飯でも食べて、明日への英気を養いましょう。

～みんなで一緒に食事をとった

～少しだけ仲良くなれた気がする……

明日はグリュューエン大火山の攻略をします。ついにあの魔人族が登場すこ今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

グリュューエン大砂漠の岩場でキャンプ中の夜、シアはテントを抜け出してお花を摘みに行っていた。

確かに恵里が言った通り砂漠の夜は寒かった。

(あれは……幸利さん？ こんな夜中に一人で何を……？)

ぶるりと寒さに震えて手早く用を済ませようとした時、男子用のテントから黒いローブを目深にかぶった清水が、明らかに人目を気にしながら出て行くのを見てしまった。

(…怪しいです。ちよつとだけ見ていきましよう)

清水は何か考えがあつて旅の一行に加わつた。悪い人ではないのは分かるが、こんな夜中にコソコソしているのはあからさまに怪しい。シアは、ハウリア族の特技である気配消しをして後を付けることにした。

二、三分ほど歩いて岩場の影に入った清水は周りを見回して、誰もいない事を確認すると何かを決心したように頷いて口を開いた。

息を飲んで事の経緯を見守るシア。

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器

湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる

爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形

結合せよ反発せよ 地に満ち 己の無力を知れ」

「†破道の九十・黒棺†」

「……ちつ、無理か。重力魔法って聞いたから出来ると思つてたんだがな……」

(……重力魔法の特訓ですか。幸利さん、頑張つてるんですね……あつ、そうだ！ ユエさんなら魔法について詳しいですし、明日の朝食の席で皆にも相談してみましよう！ あと、幸利さんが頑張つてる事も皆

に知ってもらいましょう！）

完全に良かれと思つての行動である。

その翌日、清水は生き恥を感じる事となった。

幕間：託す者、進む者（前）

ライセン大迷宮を攻略する北条一行は激怒していた。

入り口にあったふぎけたメッセージはまだお茶目として許せる。迷宮内にある数々のトラップも試練とすれば許せる。

『ププツ、焦ってやんの〜！』

『馬鹿にしか引つかからないように作ったのに…頭が悪いと辛いよね…』

『うそ…今の引つかかったの？ まさかそんな間抜けがいるなんて…』

『はい残念！ 最初からやり直してね〜！ ここまでご苦労様〜！』

『……コロス』

『……ミレデイ・ライセン許すまじですう…！』

『ふふふ…流石の鈴ちゃんも軽くキレちまったよ…！』

『ミレデイ・ライセンは見つけ次第すぐに殺すぞ！ どの道ろくなやつじゃねえんだ…！』

『すでに故人だと思うけどね…。生きてたら僕も何か仕返しはしてやりたいよ』

だが、明らかに「これいる？」と言いたい煽りメッセージは許せなかった。ハジメも青筋を浮かべるレベルである。

殺気立つ面々を北条が先導してトラップの人柱になりつつ、ついに体感時間的に一週間程度かかって迷宮の最奥と思わしき所に続く通路に辿り着いた。

せめてもの仕返しとばかりに迷宮内でキャンプした時に出たゴミなどはそのままポイ捨てである。

通路に出現する重力を無視した動きをする騎士人形を北条とシアが物理で蹴散らしていく。

騎士人形は吹き飛ばされてバラバラになってもすぐに修復されて復活するようでキリがない。ゴール地点はすぐそこだが、後ろから追いかけてくる十体以上の騎士人形は無視できない状況だ。

「倒しても復活するタイプの雑魚敵は無視するに限る！ おい北条、

まともに相手しようとするな！」

「二人とも下がって！ 丁度いいのがあるから！」

ハジメの言葉に北条とシアが後ろに飛んで下がると、入れ違うように榴弾のようなものがコロリと騎士人形達に向かって転がっていった。

パアン！ と破裂する音と共に榴弾が炸裂し、中から白いトリモチが飛び出して蜘蛛の巣を張るように通路を塞いだ。突っ込んできた騎士人形は哀れ、トリモチに引っかけた動けなくなってしまうた。

「ナイスだよ南雲くん！」

「……ハジメ、すごい」

「これでも錬成師だからね。直接戦闘では役立てない分こういった道具は充実させてるよ」

「ざまあみやがれてっんだ！ これでゴールだぜ！」

「うん、多分この先が終点……！」

後続の騎士人形はトリモチを突破できず、まさに飛んで火にいる夏の虫である。蜘蛛の巣にとらわれた虫のように藻掻いている姿を見ると少し溜飲が下がる思いだった。

しばらく眺めていた一行だが、やがて北条が翻って先に進み始めた。

「…行くか」

「こういうのってラストにボスが待ち受けてるって言うのが王道だから油断はできないね」

「ボス部屋から、せめて魔法が使えればいいんだけど。ここじゃあ、聖絶を一瞬出すのが精一杯だし、それだけでも魔力がごっそり持っていかれるし…こんなところに大迷宮を作るなんて意地悪すぎるよ…」

がつくりと鈴が肩を落とす。北条が奈落に落ちてから必死に修行と実践と重ねて、結界師としてすでに一廉の使い手になったと言う自負はある。騎士団員が複数人掛でも止められなかったベヒモスの突進だつて、一人で完璧に止める事が出来るようになった。

これでようやく守られるばかりじゃなくて並び立てる、と思ったらその矢先にこれである。

世界が私に対して厳しすぎる、というのが現在の心境だ。

「もしかして俺達魔法組は今回お荷物なのか？ 神代魔法がどうこう言う割に魔法禁止とかどんなコンセプトで作られてるんだよ……」

「……上級までなら頑張れば使える。私もユキトシも出来る事はあるはず」

「だと良いんだけどな。ユエさんや谷口ならともかく、俺や中村みたいな精神系に作用する魔法は無機物には相性最悪だからな……。ボスがいっても生物である事を祈るぜ」

ぶつちやけ、魔法使い組は今回の迷宮で良いところなしだった。非戦闘職であるハジメよりも役に立っていないという現実が肩に重くのしかかる。そこまで適性がないとはいえ、ある程度の身体強化魔法は使えるので足を引っ張るとまではいかないが、得意分野の魔法が全く役に立たないのだ。

こんなはずじゃないのに、とぼやきながら部屋に入る。とは言っても通路が途中で途切れており、その前方十メートルほどにある足場まで身体強化をしたシアに担がれての不格好な入場だったが。

果たしてそこには不思議な空間が広がっていた。

大小さまざまな大きさのブロックが重力を無視して宙を動く広大な球状の空間。正確な広さは分からないが、最低でも半径五百メートル程度はあると感じられる。

「…重力系か」

「さっきの悪魔城みたいな騎士人形の動きからしてその可能性は高いね」

「横に落ちる変態とか、まさかりアルで見る事になるなんて思わなかったぞ」

「……じゃあ、ここの神代魔法は『重力魔法』？」

「これ、下に落ちたら間違いなく死んじやいますね……」

シアが往復して鈴と恵里を運びながらぼつりと呟く。落ちた時に不規則に移動する足場が無ければ、空を飛ぶ手段がないようであれば

そのまま落下死するのは目に見えている。

脇に抱えられた鈴と恵里がギクリと強張った。

「ひいっ！　こ、怖いこと言わないでよシアシア！　急に気になってきたじゃん！」

「ど、どこかに命綱を繋げられるような所は無いかな…？」

シアに解放された鈴は下を見ないようにしながら北条の側までそろりそろりと移動する。

物珍し気に周囲を見回す皆とは違い、北条は上のある一点をじっと見つめていた。

「どうしたのまもるん、上に何かあるの？」

「…来るぞ」

「へ？　来るって一体何が——」

首を傾げて鈴が問いかけると同時に巨大な影が上にある巨大なブロックの影から飛び出してきた。

それは全長二十メートルは下らないであろう巨大な騎士人形であつた。

それが一行の目の前にすいーっと等速でスライドして下りてきた。

「デカ過ぎんだろ…」

「きよ、巨大ロボだ〜!?　お台場に帰れ〜！」

北条一行を睥睨するガンダム(仮)に続くようにして先ほどの騎士人形が何処からともなく飛んできて一行を取り囲む。これがこの迷宮のボスか、と緊張が高まる中、場違いに明るい声が響いた。

「やつほ〜、はじめまして〜！　みんな大好きミレディ・ライセンだよお〜☆」

「……」

気さくに行われた挨拶に空気が弛緩する。誰も言葉を返さないまま、返せないまま時間だけが過ぎていく。おいどうすんだよこれ、と気まずい沈黙が十秒ほど続いたのち、ミレディ・ライセンと名乗った巨大な騎士人形が不機嫌そうに声を発した。

「あのねえ、ミレディちゃんが挨拶したんだから何か挨拶を返そうよ。最低限の礼儀だよ？　全く、これだから最近の若者は…：…やれやれ、

もつと常識的になりたまえよ」

一々煽るような物言いにイラツとする一行。

北条以外がアイコンタクトをして、一瞬で今までの仕返しのために行動を開始した。

(よし、北条。お前が会話してこい。お前なら何とかなるはずだ。人柱ともいう)

(……分かった)

(あれがミレディ・ライセン本人かは分からないけど、本人ならすごいお婆ちゃんだよね。確か衛は老人ホームでボランティアした事あったから対応は慣れてるはずだよ)

(……あれとは関わりたくない。マモル、お願い)

(私もあれはパスしたいなく。まもるん、頑張つて！ 鈴が応援してるから！)

(フアイトですマモルさん！ きつと同じ話を何回も繰り返されるかもしれませんが、マモルさんの忍耐力ならいけますよ！)

(きつと私の若い頃は、なんて自慢をし始めるかも……)

「君たち全部聞こえてるからね!? ミレディちゃんは永遠の美少女なのに老人扱いするなんて失礼にもほどがあるよ！」

あえて聞こえるような音量でひそひそ話をする。日本人特有の非常に精神に来る悪口の言い方であった。ぶんすかと怒るミレディの前に背中を押された(押し付けられたともいう) 北条が進み出る。

「…俺が対応しよう」

「わあ、すごい事務的！ 何百年ぶりのかの会話がこれって涙が出そう！ まあいいや、それで君たちはここに何をしに来たのかな？ 迷子かな？」

「…神代魔法を得に来た」

北条の言葉を聞いた瞬間、さきほどのおちやらけた雰囲気は消え去り声が真剣なトーンへと変わった。

解放者の用意した試練を突破したと言う事は、ともすると自身達の悲願の成就に繋がるかもしれない。戦えずに敗北者となった解放者の意志を継いでくれる者が現れたのかもしれないと言う事。

「へえ、神代魔法をね。と言う事は私たちの試練のいずれかを突破したって事かな？」

「ああ」

頷くと、北条は懐から眼鏡を取り出してミレデイに見えるように掲げた。

オスカー・オルクスの拠点に残っていた彼の眼鏡コレクションの一つだ。掛けるだけで鉱石鑑定の技能が使えるようになる優れモノである。

仲間であつたミレデイには見覚えがあつたのか、息を飲むような気配がした。

そして北条の後ろからは良い匂いが漂ってきて、お茶を飲むような音がした。

話が終わるまでは戦闘は始まらないと判断したので、宝物庫からレジャーシートやお菓子やらを取り出してすでにお茶会モードである。

「それはまさか……！ オーちゃん、そんな姿になつて……お労しや」

「オスカーは眼鏡じゃない」

「いやいや、そんなの当然分かつてるよ、ちよつとしたジョークつてやつさ！ 全く、そんな事も分らないようじゃ皆に嫌われちゃうぞ☆

でもそうかく、オーちゃんの迷宮をクリアしたのか。それで神代魔法を手に入れたって事だね」

「…ああ」

「それじゃあ事情については理解してるって事で良いのかな？ 神代魔法を求めるのはあのクソ野郎を抹殺するため？ それとも他の目的があつての事？」

ミレデイはただひたすら真剣に問いかける。神殺し、つまり世界を狂った神の軛から解放するのは彼等、彼女等の一番に譲れない願望だ。だからこそ此処に来た彼らが何のために神代魔法を求めに来たのか知る必要があつた。もしも悪しき事に使おうと言うものならば、刺し違えてでも止めなければならぬ。

「帰るためだ」

「ふくん？ 神代魔法が無ければ帰れないような所に君の故郷があるのかな？ つまり、あのクソ野郎を殺すつもりは無いって事でいいの？」

「…そうだが、そうじゃない」

「……うん？ どういう事かな？ そもそも故郷に帰れたとしてもあのクソ野郎の手は世界中に伸びてるんだから無駄だと思うけどね」
「俺達とお前とでは生きる世界が違う。こちらが上だ」

「……えっ。何でいきなり暴言を吐かれたの!？」

北条以外の面々は必死に笑いをこらえていた。案の定と言った様子だが、むしろこうなる事が分かっていたからこそ北条をミレデイの前に送り出したのだ。ささやかな嫌がらせである。

「最低限の礼儀が無いどころか普通に失礼だよ君！ 全く、ミレデイちゃんは繊細な美少女なんだから優しくしないとイケないんだぞ☆」
「俺はお前を女とは思わない」

「……」

「——ンブツ！」

「——ブフツ！」

「清水くん、谷口さん、アウトー」

幸利と鈴がお茶を噴き出して、ユエと恵里とシアは変顔をして笑うのを堪えていた。

ミレデイは、肉体があったのであれば間違いなく頬が引きつっていた。

「ふ、ふふふ……ここまでミレデイちゃんを馬鹿にしたのは君で二人目くらいだよ。でもでも、ミレデイちゃんは君と違って心が広いから許してあげる☆」

「そうか。年を重ねただけはある」

「——ひゅぶうっ！」

「——ンフツ」

「シアさん、中村さん、アウトー」

恵里とシアが噴き出して、ユエは変顔をして笑うのを堪えていた。
ミレデイは、肉体があったのであれば間違いなく青筋が浮かんでい

た。ちなみに北条は、素直に褒めていただけである。貶すつもりなどは全くない。

「おちつけくおちつけく。これは挑発、これは挑発…。あれ、何で試練を仕掛ける側の私が耐えなければいけないのかな？ ……とにかく！ 事情が何であれ神代魔法を手にしたければこの私を倒すがいい！」

「おつ、やっと終わったか」

「何だかグダグダだね」

「……ふっ、耐えきった」

広げたお菓子やシートなどを宝物庫にしまって一行は立ち上がる。

じゃらり、と棘の付いたフレイルを鳴らしてミレデイはすでに臨戦態勢だ。それに呼応するように騎士人形たちも武器を構えた。

「よくし、それじゃあ戦争開始だ〜！ 言つとくけど私は強いから死なないように頑張つてね！ お仲間が死んじやっても責任は取らないよ〜！」

「ようやくボス戦か。その前に一つ聞いときたい事があるんだけどよ。お前の操る騎士人形ってのはこれで全部なのか？」

「んっふっふ〜。総勢五十体、ミレデイちゃんのライセン騎士団に恐れをなしたのかな？ 言つとくけどこの人形達は倒しても復活するから一生懸命逃げ回つてね☆」

「…さっきので二十体、ここに居るのが三十とちよつとならこれで全部か。くくく、それだけ聞けりやあ十分だぜ…なア、南雲？」

「そうだね。それじゃあポチつとな」

「回避回避つと〜。一網打尽つてやつだね！」

「……？」

何が可笑しいのか、くつくつと悪く笑う幸利にミレデイが訝し気に首を傾げるが、その意味をすぐに知ることとなる。ハジメがニツコリ笑顔で手に握ったボタンのようなものを押すと、いつの間にか騎士人形のすぐ近くに転がっていた大量のラグビーボールのような形をした手榴弾が炸裂した。

それは、先程通路で使っていた物と同じものが入った手榴弾であ

る。ただし、炸裂の仕方が違うという点があった。いつの間にかばら撒かれた十個を超えるトリモチ手榴弾は蜘蛛の巣のように張り巡らされるのではなく、一方向に固まって飛んでいくタイプの物であり、人間程度の重量の物であれば身動きを封じるとともにある程度吹き飛ばすだけの勢いがあった。

トリモチが全身に絡みついて吹き飛ばされた騎士人形達は、そのままブロックの上から落下していき、そのまま落下した先の壁に叩きつけられた。

「……！」

「ちよつ、私の人形が〜！ でもでも〜、落下の衝撃で壊れても復活するから無駄だよお！ ……あれれ、動かない！ ナンデ!?」

「やっぱよお、倒しても復活する雑魚敵は無視するのが一番だよなあ」
「倒しても復活するなら倒さなければ良いだけの話ですう！」

「……いい気味」

騎士人形は破壊されても再構成される。慌ててミレデイが騎士人形が落ちていった先を見ると、粘着力の強いトリモチによって一つ残らず壁から剥がれなくなっていました。

ライセン騎士団、全滅。戦闘開始から僅か一秒も経たない間の事である。

「俺達が何も考えずにティータイムをしていたと思ってたのか？」

「作戦通り、だね！」

彼らはただ暢気に茶会をしていたのではない。戦闘が始まったら間違いなく騎士人形は脅威になると判断していたから、開幕で始末するために北条に目を向けさせて仕込みをしていたのだ。

わざわざレジャーシートやお菓子を広げたのは、手榴弾を配置するのをカモフラージュするためだった。なお、北条はハブられたので騎士人形が吹き飛んだことにちよつと驚いていた。

「あ、ちなみにあのトリモチってすごく粘着力が強いから中々取れないけど、後でメンテナンス頑張ってね」

「ひくん、オーちゃん並みに鬼畜だよ〜！ というか君もちよつと驚いてたよね〜！ ねえねえ、いつもお仲間にハブられてるのかな？」

「……俺はハブられてない」

「おつ、もしかして怒ってる？　ねえ怒ってる？　——隙ありっ！」
僅かな糸口から精神を乱すための煽りを探して煽るミレデイが、煽りながら棘付きフレイルを発射する。

北条が躲せないように他の者を斜線上に巻き込むような、いやらしい攻撃だった。

まるで落下してきたような勢いで飛来するそれを、北条は動揺することなく盾で掬い上げるようにしていなし、他の者が巻き込まれないように斜め後ろに受け流すようにして弾き飛ばした。

凄まじい重量の物が衝突したとは思えないような、金属がわずかに擦れる音が鳴る。

「ありや、先制は失敗か。ライセン騎士団はやられちゃったけど、まあいいや。それじゃあ、いつくよ〜！」

「…来い」

ヨーヨーのような軌道で戻ってきたフレイルがミレデイの左手に収まり、ぐつと右手をガッツポーズすると拳が赤熱し始めた。

「……ん。戦闘開始」

「よ〜し、少しでもまもるんの負担を減らすよ！」

「ようやく私の見せ所が来ましたね！　アザンチウム鉱石で強化したハジメさん特製『バルムンク』の切れ味をとくと見るがいいです！」

「ユエさんや谷口はともかく、俺らはなああ……」

「せめて足を引っ張らないように立ちまわろう」

「わ、私は逃げ足には自信があるから……」

それぞれが、それぞれに出来る事を。

ミレデイが赤熱した右手を振りかぶり、ライセン大迷宮最後の戦いが幕を開けた。

幕間：託す者、進む者（後）

ライセン大迷宮の最奥にて始まった最後の戦い。

先手はミレデイによる右ストレートだった。赤熱した拳によるシンプルかつ強力な攻撃。直撃すればただでは済まないそれを北条は真向から受けて立つ。先ほどフレイルを受け流したように受け止めるのではなく受け流すような盾捌き。

重量級の攻撃を受けたと言うのに足場に全く揺れは生じず、ミレデイの右腕が弾かれたように上に跳ね上がった。数々の攻撃、場数を一度も避けることなく潜り抜けた北条の防御術は単純な力押しでは突破することは出来ない。

「お、やるねえ〜！」

「隙ありですう！」

完璧に受け流されて伸びきったミレデイの腕にシアが跳躍して攻撃を加える。強化魔法によって振るわれる、常人では持ち上げる事すら不可能な大剣によって腕が装甲ごと半ばまで叩き砕かれる。ドラゴンの鱗ごと骨を断てるという売り文句に偽りない威力であった。

一撃入れたシアはそのまま腕を蹴って、別のブロックまで跳んで離脱。ヒットアンドアウェイがシアの戦法である。

「破断！」

「水のない場所でこのレベルの水魔法を……！」

そしてそこにユエの魔法が叩き込まれる。ウォーターカッターのように細く切れ味のある水流が幾条も殺到し、半ばまで破壊された腕を見事に斬り落とした。お返しとばかりにフレイルが発射されるがユエは回避する素振りを見せない。むしろのんびりと魔力回復薬を飲んでいっているほどである。

「通さん」

射線上に一瞬で割り込んだ北条が最初の光景の焼き増しのようにフレイルを弾き飛ばす。

「まずは腕一本だね。だいぶ有利になったかな」

「良いコンビネーションだったけど、残念ながら私も再生できるん

だよね〜」

ハジメの言葉に得意気に言い返したミレディは、近くのブロックを引き寄せて砕き、そのままそれを材料にして腕を新たに構成させた。これで状況は最初と同じである。むしろ魔力消費分だけ北条達が損をしているかもしれない。

「まあ、予測はしてたけどやっぱりって感じだよな。タイミングは任せろぜ」

「分かったよ。良いところでやればいいんだね」

「何をコソコソ話してるのかわかんない……ってうおつと〜！」

破壊した腕が修復されたにも関わらず、ハジメと清水は悔しがる様子も見せずに何かを言い合う。それを訝し気に見やるミレディだったが、後ろからシアが頭部を攻撃しようとしてきたので下に落ちて回避した。

「言っただけで実はこれも操れるんだよね〜。空中じゃ躲せないでしょ?」

「シアシア! 一瞬だけど足場作るよ!」

滞空中の無防備な瞬間を狙って、周囲のブロックを操作してシアに向けて飛ばす。そのまま激突するかに思われたが、突如シアが空中で跳躍した事で回避される。

飛んできたブロックはそのまま他のブロックに激突してビリヤード玉のように散らばっていった。

「ありがとうございますスズさん!」

「ううん、これくらい大丈夫……って言えたら良いんだけど、やっぱり魔力の消費が凄いよ」

「へえ〜、結界を足場にしたらだ〜。なるほど、そんな使い方もあるんだね〜」

谷口鈴は結界師である。普通であれば正面に展開して攻撃を受け止めるのが主な結界の使い方だが、何も無い所に動かない障壁を生み出せるという特性上、こうして上向きに展開すれば足場にする事も出来る。

とは言ってもここはライセン大渓谷であり、魔力分解作用が働いて

いるのでほんの一瞬足場にする程度の強度、時間しか作れないのだが。

「腕……が違うなら足も違うか。頭か、胸かのどっちかか？　中村、分かるか？」

「う、うくん……多分、心臓の辺り？」

「成程……シアさん！　心臓あたりに核があるからそこを重点的に狙って！」

「了解です！」

すでに故人であるはずのミレディ・ライセンがなぜガンダムになっているのかは分からないが、きつと神代魔法に魂の定着だとかそういうたのがあるのだろう。

中村恵里は降霊術師であり、本人はあまり目立つのを避けているがその才能は天才と言っても過言ではない程だ。ならばこそ、この場では流石に直接干渉するには無理ではあるが、どの辺りに宿っているのかは何となく感じる事が出来た。

「うえっ、なんで分かったの〜!?　攻略したのってオーちゃんの迷宮だけだよね!」

「攻撃はユエさんとシアさん、守りは北条に任せるとして、俺らは陽動でもするか……南雲、アレ出してくれ。ここではピツタリだろ」

「装備重量的に衛とシアさんは無理そうだから五つかな……はい、どうぞ」

「……ありがとう。実はちよつと使ってみたかった」

「これで機動力大幅アップだ〜！」

ハジメが宝物庫から取り出してシアを除いた面々に渡したのは銃口にアンカーが装着された大きめの拳銃のような物であった。引き金を引くことで縄付きのアンカーが発射されて、もう一度引き金を引くことで縄を巻き取ることが出来る、いわゆるグラップルガンである。

今まで迷宮にある落とし穴などのトラップで活用されて、突破する一助となった道具だ。

「ええい、何だかわからないけど厄介な〜！　これならどうだ〜！」

「うおおっ!?! ぜ、全員散開!」

急に足場がコマのように回転し始めたので各々散らばって別々のブロックに跳び移る。

北条、ユエ、シアは身体強化魔法により二十メートル程度であれば助走なしで跳ぶことが出来る。幸利、鈴、恵里はそこまで得意ではないので十メートル程度、ハジメに至っては精々が五、六メートル程度である。

足りない距離はグラップルガンで補いながらミレデイを取り囲むように動き回る。

「お、面白い道具だね。でも逃げ回るだけじゃ私は倒せないよ!」

「……楽しい」

ユエはグラップルガンで飛び回りながら物理的な破壊力がある破断や風刃などの中級の魔法を放つ。魔力の消費がシャレにならないが、そこは大量に用意してある魔力回復薬の出番である。

ミレデイからすると、倒す優先順位はシア、ユエ、北条、その他といった感じである。

見たところ、このライセン大渓谷で攻撃能力を持っているのはその三人。残りは放置してもそこまで脅威にはならないという判断であった。

「うくん、まずは兎ちゃんからかな?」

「……!」

「…させん」

そう言つて、赤熱した拳でブロックに着地した瞬間のシアを薙ぎ払うようにして攻撃する。が、いつの間にかシアの側にいた北条により腕が跳ね上げられた。

「やっぱりそう来るよね」

しかしそれはミレデイも織り込み済み。いかなる技をもって巨大なゴーレムの質量攻撃を捌いているのか、武術などの知識に乏しいミレデイには分からない。だが、そういった結果が起こる事さえ分かれば対策はとれる。

跳ね上げられた瞬間、隙を潰すようにフレイルを発射して攻撃。これでも北条に受け流されるが今度はシアが反撃できず仕舞いだった。

「同じ手は通用しないよ〜」

「すいませんマモルさん、助かりました!」

「この程度問題ない」

「強がるね〜。ならこれはどう——」

ミレディは周囲のブロックで四方八方から押しつぶそうと操作をしようとして、コツンと後頭部や背中に軽いものがぶつかるような音を聞いた。

何が、と思った次の瞬間、凄まじい爆発音とともにゴーレムの頭部、背中が爆風によって蹂躪される。

「~~~~~っ! い、一体何が……!」

「てやあああっ!」

後ろに回り込んでいたハジメや清水によって投擲された威力の高い手榴弾による攻撃である。

爆発の衝撃で身動きが取れないミレディにシアが飛び掛かり、渾身の力でバルムンクを振り抜いた。

ゴシャツ!! と硬いものがぶつかる耳障りな音がして胸部の装甲が砕け散る。巨大な割にそこまで強度は高くないようだ。

「……あれか」

「あの黒いのがコアなんですか?」

「もしかしてあれってアザンチウム鉱石じゃないかな」

砕けた胸部装甲の奥にある黒い装甲。グラップルガンを駆使して戻ってきたハジメがそれを見てすぐさま答えを出す。扱ったことがある素材なのでその強度は誰よりも知り尽くしていた。

だとすれば困った事である。現在の手持ちの火力であのアザンチウム鉱石の護りを突破する手段はない。シアの持つバルムンクを何千回も叩きつければ可能性は無くも無いが、それは現実的な手段ではない。

「大正解! ちょっとヒヤツとしたけど、これがある限りどんな攻撃も無駄無駄あ! ってやつだよ。くやしいのう、くやしいのう! は

い、装甲も修復くつと」

そして折角砕いた装甲もたちまちの内に修復されてしまう。

手榴弾程度の攻撃力であれば装甲で防げる。それ以上の攻撃でもコアの護りは突破できない。馬鹿みたいに攻撃力が高くて、馬鹿みたいに防御力が高い厄介な相手である。

そこまで素早くないのだけが幸いか。

「どうしますか？ 多分、私でもアレは厳しいと思いますけど」

「うーん、ただアザンチウム鉱石で守ってるだけなら何とかなるかもしれない……衛、ちよつと僕の言う通りに動いてもらっても良い？」

胸部装甲が修復されている間、ハジメが北条とシアに耳打ちをする。

「…分かった。ミレデイの胸は薄い。シアに任せる」

「ンフツ」

「フフツ」

胸部の装甲は薄いので破壊するのはシアに任せる、という意味なのだろう。

ハジメとシアから堪えるような笑い声が漏れた。ミレデイが怒りと共にブロックを複数飛ばしてきたので慌てて他のブロックへと跳び移って回避する。

「失礼な！ だくれがぺったんこかく！ 少なくともそのぺったんこな金髪ちゃんやお下げちゃんよりかはあるんだぞ〜！」

「は？？」

「は？？」

思わぬ流れ弾を受けたユエと鈴が低い声を出す。近くにいた幸利は、自分に矛先が向けられていないのにちびりそうになった。

ユエは破断で、鈴は手榴弾でそれぞれミレデイに攻撃を加えるが、当然見え見えの攻撃なので横にスライドして回避される。

「おおつとく、その爆弾にはもう当たらないよ。中々やつかいな事するね〜！」

目標を失った手榴弾はその先にあつたブロックに当たって爆発した。かなり威力は高いようで、ブロックが粉々に砕けている。お返し

とばかりに鈴にフレイルが飛ばされるが、これまたいつの間にか割り込んできた北条によって弾き飛ばされる。

「間に合ったな」

「さっすがまもるん！」

「いや、君さっきまで全然別のところにいたよね？ 何で当然のようにならなくなったの？」

「間に合ったからだ」

「答えになってないよ！」

ミレディの言う通り、先程まで北条は百メートルは離れた所のブロックに居た。今までの移動速度から考えると、とても間に合わないような距離である。

技能・移動強化。その派生で「+守護」「+危機回避」「+移動速度強化」「+移動距離増加」などが追加されている北条の機動力は、平時であれば天之河や八重樫に発現している縮地に劣るが、守りに入る時にはその数倍にも跳ね上がる。百メートル程度を瞬く間に移動するなどわけない。

「なるほど、君がいると攻撃が通らないって事だね。じゃあ、これならどうかな？」

「……！ 皆さん気を付けてください！ 上から来ます！」

ミレディが左腕を上に掲げると部屋全体が振動を始める。

シアの技能・未来視が発動し、迫る危機をほぼ正確に捉えた。

「分かったところで無駄だよ！ 半径二百メートル、ミレディちゃんスペシャルを喰らえ☆」

「——全員動くな！」

珍しく声を張り上げた北条に全員の動きが止まる。行動は迅速だった。すぐ後ろにいる鈴を左腕で抱きかかえ、近い順に幸利、ユエ、恵里をそれぞれ腕と手で回収。そのままシアとハジメがいるブロックまで移動する。

この間、僅か二秒である。凄まじいGが掛かるが、地球に居た頃よりも遥かに強靱になっっている肉体は問題なく耐えきった。若干幸利が酔いそうになっただくらいである。

全員が一塊になった瞬間、轟音と共に天井を構成するブロック群が流星のように降り注いできた。

ミレデイの取った手段は範囲攻撃。どんな攻撃にも追いついて防衛されるならマップ兵器を使ってやろうと言う魂胆である。

「全員、側で伏せていろ」

「ん、分かった」

「ま、まもるん、一体何を——ううん、せめて少しでも結界を張らせて！」

「待て谷口！ とにかく北条の言う通りにするぞ！」

「よく分かりませんが任せましたよマモルさん！」

せめてもの抵抗とばかりに鈴が結界を張ろうとする。おそろくライセン大渓谷では一秒も保たないが、何もしないよりかはマシだと判断しての事だ。だがそれは幸利に止められる。

北条は死の流星群を前にしても全く動揺していない。何かしらの手があると察した清水はそれに賭けることにしたのだ。ハジメと恵里は早々に伏せて頭を抱え、ユエは北条の足の間を陣取っていた。

北条は剣を誰にも当たらないように床に突き立てると、盾を上に掲げて、さらに右手で支える構えをとった。

「我が身命を捧げ輩の防壁とならん——城郭」

「ちよつとまって衛、今すぐく不吉な詠唱が——」

ハジメが突っ込みを入れる前に流星群が七人を飲み込んだ。

轟音を上げながら、ブロック同士が衝突した事で砕かれ粉塵が巻き起こる。

約十秒間にもおよぶ間断なき大質量の豪雨。何かしらの魔法のようなものは発動していたようだが、それだけで防ぎきれるとはミレデイには思えなかった。

攻撃が終わった事でしんと静まり返った空間。ミレデイは落胆したように溜息をつく。

「はあく、オーちゃん、の迷宮を突破したって言ってたから期待してたんだけどね。ちよつと頭数も七人だったしちよつとシンパシーを感じてたんだけどなく。お仲間を庇えず圧殺っていうのが結末かな。

まあ、ここまで来れたんだし、せめて骨だけは——」

天井のブロックにかけていた落下の魔法を解いて浮かび上がらせる。

次にここまで来るものが現れるのは何年後だろうか、この部屋の修復もしなくちやなく、と天を仰いだ瞬間、粉塵の中から流星のように飛び出してきた白い影によって、ミレディは胸部に凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされ、浮遊ブロックに激突した。

「……な、何々!?!」

完全に不意打ちであった。仰向けにひっくり返ったミレディの破壊されて拉げた胸部装甲に降り立ったのは、常人では持ち上げられない程の重量がある大剣を担いだ兎人族の少女、シアだった。その身には傷一つない。

「よくもやってくれましたね。これはお返しです!」

まさかあの崩落を凌いだのか、と思う暇もなくシアは露出した内部に向かって黒い球——すなわち手榴弾を幾つも投げ込む。

「しまっ——ほわああああっ!」

連鎖して大爆発を起こすミレディの胸部。装甲内部で巻き起こる破壊の嵐はアザンチウム製の装甲を損傷させるようなことは出来なかったが、それでも胸部にある表面装甲の殆どを吹き飛ばした。

「うぐうっ……ど、どうやって今のを凌いだのかな?」

「説明する必要は——もがっ!」

「まもるん、しっかりして! ポ、ポーシヨン! もっとポーシヨン飲んで!」

「……ミレディ・ライセン許すまじ……!」

ミレディが声のした方に目を向けると、そこには全身から血を流し死に体ながらもしっかりと二本の足で立っている北条と無傷の一行が居た。

守護者の奥義にして禁術扱いされている城郭の魔法。いや、魔法というよりはむしろ呪術の類に近いかもしれない。鈴が使うような通常の結界、障壁では魔力を使うが、城郭は『自身の生命力』を使って障壁を張る。

魔力を使わない分、ライセン大渓谷のような魔力分解作用が働く場所でも使えるが、それはまさしく『ライフで受ける』ような物である。すなわち、城郭で展開した障壁が傷付くと言う事は自身の命が傷付くと言う事であり、障壁が破壊されると命も破壊されると言う事に等しい。

戦いの中で魔力が尽き、窮地極まった状態で己の命を削って仲間を守るために使われる、守護者にとっては文字通りの最終呪文^{ラストワード}。それが城郭である。

血相を変えた鈴に回復薬の瓶を口に突っ込まれる北条。A n o t h e rなら今ので死んでた。

「防ぎ切った事は褒めてあげるけど、残念ながらコアは破壊できてないよ！ 結構大きく抉られちゃったけど、これくらいなら十秒あれば修復できるからね〜」

「ポチっとな」

そう言ってミレディはシアを右手で払いのけた後、ブロックを引き寄せて修復のための材料にしようとして——引き寄せたブロックが突如爆散した。

えっ、と思わず声を漏らして呆然とするミレディの左腕に向かってユエの破断と風刃が殺到する。

魔力回復薬をがぶ飲みしながら連続して放たれた水のレーザーと空気の刃は見事に左腕を半ばまで切断した。そこにすかさずシアがバラムンクを叩きつけ、左腕がメシャツ!! という音と共に千切れ飛ぶ。

種明かしをすると、グラップルガンでミレディの周りを飛び回っている時にハジメ、幸利、恵里が三人でミレディが修復に使いそうなブロックに爆弾を仕掛けており、それをハジメが手元のスイッチでちょうどいいタイミングで爆発させたのだ。

「行くぞハジメ」

「うん、分かった」

回復薬のがぶ飲みで大方回復した北条が動き出す。背中にはハジメが引っ付いていた。

真つ直ぐにコアを露出させているミレデイに向かつて跳ぶ。

「ま、まだ右腕があるから——」

「ポチつとな」

「ねえっ!？」

再び大爆発。ハジメが手元にあるボタンを押すとミレデイの振り上げた右腕が内部から爆発して千切れ飛んだ。

ミレデイは切り替えが早い。両腕が使えない状況で動かせる物、つまりフレイルを北条とハジメに向けて飛ばす。浮遊ブロックは先ほどの爆発でちょうど良いものが大方砕かれていた。

空中であれば踏ん張りは効かない。ならば最低でも二人を弾き飛ばすことは出来ると思いい、次の瞬間、北条が空中に立ってフレイルを弾き飛ばしたことで目論見が崩れ去った。

「感謝するリンリン」

「しまった! お下げの子を忘れてた〜!」

北条の足元には薄い半透明の障壁。完璧なタイミングで鈴が展開した人一人が乗れる程度の障壁の上で北条は踏ん張りを効かせて攻撃をいなしただ。

その後、北条が跳躍すると役割を果たしたと言わんばかりに障壁がガラスのように割れる。

鈴は今の魔法でかなり消耗したのか、肩で息をしている。

「届かせたぞ」

「うん、任せて」

「や、やめて〜! 女の子の胸に触るなんてセクハラだよ〜!」

内部にあるアザンチウム製の装甲に降り立ったハジメは、その堅い黒曜色の装甲に手を添える。

行使するのは特別な魔法などではない。このトータスで最もありふれた魔法の一つであり、ハジメが唯一胸を張って誇れる技能——!

「——錬成っ!」

紫電が迸る。だがしかし、何も起こらない。

「あ、あはは! 君はオーちゃんと同じ錬成師だったのか〜! でも残念、このアザンチウム製の装甲を突破するほどの腕は無かったみた

いだねろ。オーちゃんだったら突破できたのになあろ」

「…ミレデイ・ライセン。お前はハジメを侮り過ぎだ」

グラツプルガンから発射されたアンカーを北条が掴み取り、ハジメが内部から戻ってくる。

何も起こらなかつたことにミレデイが安堵するが、北条は特に動揺した様子はない。

そしてそこに落下してくる影。大剣の剣先を下にしてのシアによる落下攻撃だ。

当然だが、重量を乗せた一撃でもアザンチウム製の装甲は突破できない。

だが念には念を。爆発によって砕かれたお陰で小さく目ではあるが、ブロック片を落下してくるシアに向かって射出する。躲すにしても防ぐにしても十分に時間は稼げると判断したのだ。

そして、そのままブロック片はシアに直撃——せずにすり抜けた。

「——えっ」

「これで、終わりですうううう！」

何故、と思う間もなくバルムンクの切っ先がアザンチウムの装甲に接触して——鉛細工のように世界一堅いと言われる装甲を破壊して、その奥にあるコアに深々と突き刺さり粉々に砕いた。

ハジメは自分の力の程度を理解している。魔力分解作用があるこの場所で、分厚いアザンチウム製の装甲に大穴を開けるようなことは出来ないと分かっていた。

ならば、自分に出来る事を。破壊するのは無理でも脆くすることは出来る。シアの攻撃で突破できる程度まで強度を下げてやれば良い。アザンチウムは扱ったことがある素材だから、材質については十分に理解していた。

たった一度の錬成で煙も出ない程に魔力を消耗していたが、ハジメはしっかりと役割を果たしたのだ。

コアが破壊された瞬間、ゴーレムの目から光が消えて、やがてそのまま動かなくなった。

しばらく残心をしていたが動き出す気配がないゴーレムを確認し

て、各々戦闘態勢を解いた。

「終わった〜！ やった、勝ったよ〜！」

「あ〜〜、マジで疲れたぞこれ！」

「ユキトシさ〜ん！ ありがとうございます、助かりました〜！」

「お、お疲れ様清水くん。最後は凄かったね」

「最初から最後までかけ続けて出来たのがシアさんの位置を二メートルずらさだけとか、マジでこのフィールドクソ過ぎんだろ…！」

「…それでもすごい。ユキトシ、闇魔法については天才かも」

滝のような汗をかいて座り込んだ幸利の周りには魔力回復薬の空瓶が五つほど転がっていた。

清水幸利は闇術師であり、闇系統の魔法は、相手の精神や意識に作用する系統の魔法である。例えばいつかやってみせたように魔物を追い払ったり、あるいは操ったりすることが出来るし、今やったように物の位置を少しズラして見せる事だって出来る。

ただ、今回はライセン大溪谷という場所で、ミレデイ・ライセンという特級の魔法使いが相手だったので、これだけ魔力を使って最後の最後に少しかだけ奇襲的に効果が見込めるレベルだったのだ。

ちなみに、ミレデイの右腕が突如爆発したのは、最初にシアが半ばまで破壊した時に断面に爆弾を取り付けたからである。腕を蹴って離脱する時にちやつかりと仕事を熟していたのだ。決して修復に使ったブロックが中国製だったわけではない。

皆で集まってハイタッチをする。

守りを一手に引き受けた北条。

道具と錬成で攻略の糸口を切り開いたハジメ。

攻撃の要として動いたシア。

補助火力として貢献したユエ。

爆弾をこつそりとばら撒いて地味に貢献した恵里。

攻めと守りの補助を熟した鈴。

そして詰みの一手を打った幸利。

七大迷宮が一つ、ライセン大迷宮の最後の試練はこの七人によって今ここに攻略された。

幕間：託す者、進む者（EX）

ライセン大迷宮を攻略した北条一行（主に三人）は激怒していた。戦闘前のふざけた言動はまだお茶目として許せる。相手に有利なフィールドで戦わされた事も試練とすれば許せる。

「やつほー、さつきぶり！ ミレデイちゃんだよ☆」

「……………」

「……………」

「あれ？ あれれ？ テンション低いなく？ もっと驚いてもいいんだよお？ あっ、もしかしてえー、驚きすぎても言葉が出ないとか？ だったらドツキり大☆成☆功だねっ、イエイツ！」

「……………」

だが、この人の気持ちをおちよくる行動は許せなかった。

ミレデイのコアを破壊した後、今にも消えてしまいそうなほどに途切れ途切れに言葉を発して最後には真面目なメッセージを残して光の粒子となつて消滅した……はずだった。

そしてそのまま足場がミレデイのアジトの入り口まで移動して、ちよつとしんみりした空気で扉をくぐって、そうしたらこの有様である。

足場が移動していた時点でハジメと幸利は何かを察していたし、恵里に至ってはミレデイが光の粒子となつて昇天した時点で全てを察していたが空気を読んで無言だった。ユエ、シア、鈴がミレデイが消滅したところを見て黙祷をささげていた。北条は宝物庫から墓石を取り出してアジトに着いたら供養しようとスタンバイしていた。

「……………さつきののは？」

「ん〜？ さつきのつて、もしかしてあの光の粒子の事？ あんなの演出に決まつてるじゃん！ 死んだと思つた？ ねえ、死んだかと思つた？」

「……………演出つてあの、つまり私たちは騙された？」

「やつと能天気な君でも呑み込めたようだね☆ああ〜んな使い捨てのボデイには何の未練も無いんだよ。破壊される事を覚悟してたか

「らこそ演出に利用したのだ！」

「鈴のこのしんみりしたような物悲しいような気持ちは…？」

「えっ？・ 悲しんでたの？ ただの演出なの？ 意味無いよ☆」

ひゃっほい！ と重力を無視した動きで踊るのは白いローブを被った棒のように細い手足を持つ背の低い人形。丸いのっぺりとした顔にはニコるマークが描かれているだけでそれ以外に装飾は無い。

真っ白い四角い部屋。かなりの広さがある此処では魔法を使うことが出来る。神代魔法の伝授のための魔法陣を設置してある部屋なので当たり前と言えば当たり前である。

先ほどの戦闘ではしてやられたと言う事もあり飛び跳ねながらダンスをして北条一行の周りを動き回るミレデイ。この展開が予測できていたハジメ、幸利、恵里は溜息を吐いた。北条はそつと墓石を宝物庫にしまった。

「……コロス」

「ふ、ふふふ…バラムンクの錆にしてやるです…お覚悟を。」

「(ゴキゴキ) フー…っし」

ユエから陽炎のような魔力が滲み出し、シアがバラムンクを正眼に構え、鈴は首に手を当てる骨を鳴らし、それぞれ臨戦態勢をとった。

「きやく殺される〜！ 守って盾の人〜！」

じりじりと距離を詰めてくる三人に対しても余裕たつぷりなミレデイは、ふわりと宙を舞って北条の後ろに隠れる。これならば攻撃できまい、とほくそ笑んでいるとじつと熱い視線を感じた。

視線を辿るとパチリ、と北条と目が合った。ただひたすらにじつと見つめてくる。

「な、何かな〜？ もしかして君も怒ってるのかな〜？ 女の子の嘘は許すのが男の甲斐性ってやつだぞ☆」

「……」

無言で上から見つめてくる北条に威圧感を感じるミレデイ。内心では「やべっ、頼る人を間違えた」と思いつつも、それをおくびにも出さずに拳で頭をコツンと叩いて首を傾げた。

「て、テヘペロ☆ お兄さん許して！」

そう言つて逃げようとした瞬間、恐ろしく速い動きで北条に捕まえられるミレディは子供を高い高いように持ち上げられた。

「げっ、捕まった！　いっやく犯されるっ！　このボディが壊れると本気でマズいからやめてっ！　へ、ヘルプミー、耐久力は皆無なんだよおっ！」

「……流石マモル。まずは焼き焦がす……」

「その後に叩き潰してやりますっ……」

「粗挽き肉団子にしてくれるぜえ……」

じたばたと暴れて逃げ出そうとするが北条の手はびくともしない。ゆらゆらと体を揺らしながら迫ってくる三人に恐怖を覚えて、傍観しているハジメ、幸利、恵里の方を見て助けを求めようとする。

のんきに煎餅（北条作）をかじっていた。しかもわざとバリバリと音を鳴らして食べかすを散らかすような食べ方だ。三人の足元に煎餅の破片がぼろぼろと落ちていく。

「ちよ、ちよっ！　人の家で食べかすを散らかさないでよっ！」

「南雲おっ、ドーナツなかつたっけ？　ゴールデンチョコレートみたいなやつ」

「あるよ。はい、中村さんもどうぞ」

「わあ、ありがとう！　丁度甘いものを食べたかったんだ！」

ミレディの訴えを無視して今度はバタークランチをぼろぼろ床に落としながらドーナツを食べる。

「やめてっ！　ただでさえこの後迷宮のメンテナンス作業があるのにっ！　わざと食べかすを落とさないでっ！　酷いよお、こんなのあんまりだよお！　私が何をしたっけ言うのさっ！」

「……」

「……マモル？」

「まもるん、黙り込んでどうしたの？」

心なしか泣いているように見えるミレディをじっと見つ続ける北条。流石のミレディもこの視線には首を傾げるのみである。敵意や害意などは感じない。ただ、すごく見てくるのだ。

「……かわいい」

「えっ」

「えっ」

ぽつりと北条から漏れた言葉にユエと鈴が硬直した。ミレデイを見てみる。ニコるマークは愛嬌があると思う人もいるかもしれないが、特にかわいいとは思えなかった。

ユエはもちろん、鈴も北条が今まで誰かに対して可愛いだの綺麗だの言っている事を聞いた事がなかったし、二人とも言われたことは一度も無かった。

いつか自分にそう言つてほしいと思つていたのに、最初にかわいいと褒められたのがよりにもよつてアレである。ふつふつと二人の胸に感情が湧いてくる。

言われた当の本人であるミレデイも硬直していた。まさか、ノリで作つたボディにこんな評価を貰えるとは思つていなかったのだ。反応に窮していたが、ユエと鈴の二人が感情丸出しの視線で睨んでくるのに気付くと、良いネタを見つけたとばかりにニヤリとした。

シアは、何かを察してハジメのところ避難してドーナツを受け取り、一緒に食べかすをバラまき始めた。

「いや、そんなにミレデイちゃんが魅力的なのかな？ まあ、これでも経験豊富だし？ 昔恋人が百人くらいいたミレデイちゃんに一目惚れするのは無理も無いかな。その二人と違ってスタイル抜群だし、何よりも超美少女だし☆ お目が高いよ君は！」

「は？」

「は？」

煽るミレデイに低い声で迫るユエと鈴。ハジメ達四人はUNOをして遊び始めた。

手を伸ばしてミレデイを捕まえようとするユエと鈴に対して、ミレデイを取られないように高く掲げる北条。謎の攻防戦がしばらく続いた。UNOは恵里が一着だった。

「とまあ、煽るのはこれくらいにしておいて、本題に入ろっか！ まずは大迷宮の攻略おめでとう！ クリアしたのは君たちが初めてだよ。いや、今まで千年？それ以上？待ったけどまさか今の今まで誰

もクリアできないだなんて思わなかったよ〜」

「こいつ何事も無かったかのようには話を進め始めたぞ……」

ふわり、と北条の手から抜け出すと浮遊ブロックに乗る。

ミレデイの言った通り、ここライセン大迷宮をクリアしたものは作成時から今まで誰一人居なかった。

仲間を集めて立ち向かおうとして、それでも戦う前に散り散りになってしまった。自分達の代では神を討つことは不可能だと悟って、後の人に託そうとして気の長くなるような年月を待った。

そして今、ようやく待ち人が現れたのだ。テンションがアゲアゲになるのもしよがなかった。

「それじゃあクリアの御褒美として神代魔法をプレゼント！ ささ、魔法陣に入った入った〜！」

「のりこめ〜」
「わあい」

これで二つ目の神代魔法入手である。七人が魔法陣に入ったのを確認すると、ミレデイは魔法陣を起動させた。直接脳に刻み込まれる知識。すでにオルクス大迷宮で経験しているので誰もリアクションは取らなかった。

「……やっぱ重力魔法だったか」

「あつ、これ僕には無理なやつだ」

「イエスっ！ ミレデイちゃんの魔法は重力魔法！ 攻防一体のすごい魔法なのだ！ 上手く使つてね〜！ うくん、金髪ちゃんと黒ロ〜ブくんは十全に使いこなせそうだね。もちろん、修練は積む必要はあるんだけど。眼鏡ちゃんはそこそこかな？ 盾の人とお下げちゃんはまだ、使えなくはないくらいで、錬成師の人とウサギちゃんはもうびっくりするくらい適性がないね！」

「がくん、だね。出鼻をくじかれた…まあ、生成魔法はすごく適性があつたから良いんだけどね」

「あの〜、私、生成魔法も重力魔法も不適なんですけど……」

「……重力魔法、色々使えて便利そう」

「まもるんとお揃いだ〜！ 後で一緒に練習しようね！」

「闇…重力…。悪役街道まっしぐらじゃねえか！」

「私のこの偏差値55くらいの適性はどうすれば…」

しっかりとミレディが適性の評価をしてくれた。どうやら前衛組はあまり適性が無いようで、魔法使い組は適性が高めなようだ。生産職のハジメは適性が無いが、生成魔法によつて重力魔法をアーティファクトに組み込めば問題なく運用できるだろう。

「あ、そう言えば聞きそびれてただけど、君達の故郷ってどの辺なのかな？ 神代魔法が無ければ帰れないって相当だと思っただけど。もしかして海の遙か向こうにある辺境とか？」

「そう言えばそうだった…実は僕達は——」

開戦前の会話がアレだったので、結局ミレディは北条一行の事情はほとんど知らないままだ。

一番話し上手なハジメがミレディに説明をする。異世界からエヒトに呼び出された事。魔人族との戦争に参加させられる事。帰還手段になるかもしれない神代魔法を求めている事。

黙って聞いていたミレディだったが、エヒトの名前が出た辺りで「うげっ」と嫌悪感丸出しの声を出した。

「——というわけで帰還手段を探すために僕達は神代魔法を集めている。何せ神代と名前が付くわけだから神様が使った魔法にも届くんじやないかって思つて。それでこうしてここまで来たんだ」

「なるほど、違う世界からね。それなら仕方ないね。あのクソ野郎、今度は他所様の世界にも迷惑をかけてるのか。まさに害虫みたいな奴だねえ」

ハジメの話が終わるとミレディは腕を組んでうんうんと考える。ぶつちやけ想定外の案件だった。ユエやシアのような先祖返りの力を持つ者が攻略してくれたのは有難い。でも異世界人にこの世界の解放を託すのは何か違うような気がするのだ。

この世界の事はこの世界に住む人々の手によつて何とかするべきなのだがしかし、手段を選んでいられないのも正直なところだ。

まあ、あのクソ野郎を殺せるなら過程なんてどうでもいいか、と結論付ける。

「……でもきつと、いつか君達は狂った神と対峙することになると思うよ」

「だろうなア。こういうのって最終的に黒幕を倒さなければ帰れないってのがお約束だしな」

「地球から召喚する魔法があるって事は、帰ったとしてもまた呼び出される可能性があるって事だしね。根本的な解決をしないと意味が無いよ」

結局のところ、神は存在して世界を見ているのだ。たとえば北条達が帰還手段を見つけてそれを使おうとしたところで、絶対にバレル。人々を遊戯の駒にして遊んでいるエヒトがそれを見逃すわけがない。

よしんば見逃してくれたとしても、エヒトが今度は自ら地球にやってきて災厄を振りまいてきたら目も当てられない。もしも地球に魔物などをばら撒かれたら、それこそ漫画やアニメで見るポスト・アポカリプスのような有様になりかねないのだ。

つまりのところ、どういう道を進んでもエヒトとは戦う事になる。たとえ全員で揃って無事に帰れたとしても、その先の事を考えると神殺しは避けて通れないのだ。

オルクス大迷宮のアジトで考えた結果がこれである。

「…ならば神であろうとなぎ倒して進むのみ」

「……ん、マモルと一緒に大丈夫。絶対に負けない」

「エヒトが私達亜人族を迫害してる黒幕なら私にも…いえ、私達にも戦う理由があります」

北条、ユエ、シアが一步前に出る。

「正直な話、スケールが大きすぎて鈴にはあまり実感が湧かないんだけど、向こうの家族に危険が迫るかもしれないのならやるしかないよね！」

「私は家庭環境はアレだけど…。放っておくと同じ…じゃなかった、創作活動と、あとついでに天之河くんに差し支えるから……」

鈴、恵里が一步前に出る。

「ま、テンプレな理由だが『世界のために』ってやつか？ どっちかという俺はエヒトとか言うやつ面に一発ぶち込みたいだけなんだ

が。神を殴った男つてのもいいじゃねえか…」

「本当は僕はあまり争ったりはしたくないんだけど、今回ばかりは仕方ないよね」

幸利、ハジメが一步前に入る。

七人が横並びになる。

「…そういうわけだ。戦う理由は違うが俺達が解放者達の意志を先に進めよう」

「――」

言葉が出なかった。自分達解放者の意志を受け継いでくれる者が現れるまでどれだけ待った事か。諦めるつもりは無かったが、幾年もの月日を一人で過ごして、外の世界の状況も分からないまま夢を見続ける日々。ひよつとしたら自分達がやってきた事は無駄だったのでは？　と思いきやそうになる事もあった。

(…：無駄じゃなかった。私達が繋いできたものは、決して無駄じゃなかったんだ…！　勝てる…：勝てるんだ！)

「…そつかく。じゃあ、これを受け取ってね」

気持ちはおくびにも出さない。出来る限りいつもの声色で話す。

ミレディは宝物庫から指輪を取り出すと北条に手渡した。杭のようなもの真っ直ぐに落ちている様が彫られたそれは大迷宮をクリアした証であり、願いを繋げるタスキでもある。

「確かに受け取った」

「うん。残りの迷宮の攻略も頑張りなよ」

そうだとミレディは宝物庫から希少な鉱石やアーティファクトをぶちまける。

「ついでだし、これもあげるね。流石に全部はあげれないけど、きつと君達の助けになるはずだから。…：ミレディちゃんの優しさにむせび泣いても良いよ☆」

「ああ、感謝する」

「それじゃあ外まで送ってあげるね。ぐいっとな☆」

これでライセン大迷宮ですべき事は全て終わった。ミレディはいつの間にか手元にあった天井から垂れる紐を引く。何かの仕掛け

のスイッチなのだろう。

ガコン、と音がして四方の壁から水流が勢いよく飛び出してきた。さらに部屋の中央に穴が開いてその周囲が傾斜状に落ちくぼんでいく。

「うっそだろお前！ さっきの良い感じの空気はどうしたんだよ！」

「えっ、何のこと？ ミレデイちゃん、分かんない。さっき君達がさんざん落とした食べかすも掃除出来て一石二鳥だよね☆」

「こ、ここは聖域なりて！ 聖絶・球！」

「空域！」

洋式トイレに流される排泄物のように水流に吞まれる寸前、鈴が結界を全員を覆うように球状に展開し、さらにその意図を察したユエが結界の内側に空気を確保するための魔法を使う。

ほんの一節のみの詠唱で無理やり展開したので性能はお察しである。破壊される事こそ無かったものの踏ん張りが効かず、ピンボールみたいに結界毎北条達は流されていった。

「め、目が回る〜！」

「やつぱりろくな奴じゃなかった！ ぐえっ！」

「ご、ごめんなさいユキトシさん！ 思いつきり肘が入っちゃいました！」

「うえへへ…まもるん、こんな所でなんて困っちゃうな〜」

「……！ スズ、今すぐ場所を変わって——ふぎゅっ！」

「す、鈴！ 絶対に結界を解かないでね！」

水流によつてかき回され、結界の中でお互いに衝突してもみくちやになる。鈴がダメージを受けたら結界が解除される恐れがあるので、北条が胸に掻き抱いて守っているのだ。それを良い事にぐへへ、と下品な声を出しながら胸板に頬を擦り付ける。

シエイクされること十数分、時々岩壁に衝突しながら激流に流され続けてやがて出口に辿り着く。水路はどこかの泉に繋がっていたようだ。水面から勢いよく噴水のように打ち上げられ、それと同時に聖絶の効果が切れる。綺麗な放物線を描いて、七人は七つの水飛沫と共に着水した。

濡れる事は避けられたが結局ずぶ濡れである。這う這うの体で岸辺に上がると口々に文句を言い始めた。

「最後の最後にやりやがったあの女ア！」

「酷い目にあつたね…皆、大丈夫？」

全身から水を滴らせながら身を震わせる。ちよつと良い雰囲気での別れかと思つたらこれである。次に会つたら容赦せずに袋叩きにすることを決めた瞬間だった。

「……無事のようなな」

「うん、大丈夫。ありがとまもるん……つてうひゃあつ！ あ、あんまり見ないで〜〜！」

「マモル、私を見てほしい。濡れ透け。セクシー」

着衣水泳をした後なので、ぴっちりと服が肌に貼り付いており体のラインがくつくりと見えている上に、下に着ているインナーもちよつと透けていた。スカートも半ばまで捲れあがつており、もう少しで見えそうな状態である。

茹蟄のように顔を赤く染めてしやがみ込む鈴とは逆、むしろポーズを取つて見せつけてくるユエに、北条はそつと彼女の上着の前を閉じる事で答えた。

「め、眼鏡……どこ……？」

「これですね！ 運よく私の胸の間に入りました！」

「眼鏡がラッキースケベ粹なのか…」

シアが胸の谷間に入り込んでいた眼鏡を抜き取つて、眼鏡を探して地面に手を這わせる恵里に渡す。まさかの眼鏡がリトさん体質だったことに幸利は困惑した。ちよつとうらやましいとか、そういう事は考えていない。

「ここはどこなんだろうね。何か目印になるようなものがあれば助かつたんだけど」

「取りあえずこの辺りに魔物の気配はないようだからここでいったん休憩するか。久しぶりにしっかりしたメシが食いてえ。北条、頼んだぜ」

「分かつた」

日はもう少しで沈んでしまいそうだ。丁度水源があるのでキャンプ地にはもってこいである。女性陣が木陰で魔法を使って服を乾かし始めたのを横目に、男性陣は黙ってキャンプの準備を始めた。

グリユーエン大火山攻略

暑い火山の中、加熱した戦闘はついに危険な領域に突入するRT A、はーじまーるよー！

前回はアンカジ公国でポーション類をたんまりと買い込み、準備を整えたところまででした。今回はグリユーエン大火山の攻略からです。すね。

目標となる場所は、アンカジ公国を出てセンチユリーで北へ半日ほど進んだ場所にあります。結構近いですね。

ただ、グリユーエン大火山は四輪、戦車などの地上を走る室内空間がある乗り物、もしくは砂嵐を防ぐための魔法、アイテムが無ければ辿り着くことができません。

なければその手前にある砂嵐みたいなのに阻まれてしまいます。

▽砂嵐が行く手を阻んでいる

▽通り抜ける方法を探す必要があるそうだ

▽四輪駆動なら大丈夫そうだ！

というわけでセンチユリーに乗っているので問題なくクリアですね。ちなみに、飛行艇では通り抜けることができません。まあ、当然です。飛行艇で入ったら「もう助からないゾ」になる事間違いなしです。

砂嵐を通り抜けますが、いきなりレースゲームが始まります。迫ってくるサンドワームを躲したり迎撃したりする必要があるので頑張ります。ましよう。

○ボタンでアクセル、×ボタンでブレーキ、LRボタンで左右に風刃を出す攻撃、△で後ろに手榴弾を転がして攻撃します。攻撃されると耐久力が削られて、ゼロになると最初からやり直しになります。

また、サンドワームに攻撃を当てるとゲージが溜まり、全て溜まるとニトロみたいなので一定時間加速できます。なんでこんな意味不明なミニゲームを作ったんだ…エルシャダイを思い出しますね…。

特に難易度の高いゲームでもないのでササッとクリアしましょう。

このミニゲームですが、一度クリアすればいつでも遊ぶことが出来

ます。一応スコアアタックモードとかもあり、トロフィーを取得したりも出来るので興味がある人は頑張ってください。

その時の乗り物によって見た目は変わりますが、速さとかハンドリングとかは一律同じです。

▽無事に砂嵐を抜けた……

無事クリアですね。余裕でした。スコアは良くありませんが特に高くても何かがもらえるというわけではないので問題ありません。

正面に見えるデカイ一枚岩の山がグリューエン大火山です。山に入ってから迷宮の入り口までは徒歩となります。山にいるうちは時間経過はありませんのでキャンプをしなくていいのは有難いですね。ではイクゾー！

迷宮の入り口までは魔物とのエンカウントはありません。採取ポイントなどもなく、ひたすら走るだけです。入り口までの最短ルートはあらかじめ調査してあるので迷う事はありません。というか山頂にあるので時間を気にしなればひたすら上に向かうだけで大丈夫です。

おつ、見えてきました、あのアーチ状の石が目印です。あそこの下に迷宮への入り口がありますよ。

階段発見！ これを下りると迷宮攻略開始となります。おつ、開いてんじやーん！

「ここがグリューエン大火山……」

「宙をマグマが流れてやがる……。どうなってやがんだ」

「あ、あづい〜！ 砂漠なんか比べ物にならないよ〜！」

「……ん、あまり長居はしたくない」

「流石にロープは着てられないね……」

「早くクリアして脱出しましょう！」

では、攻略開始です。グリューエン大火山内部がそのまま迷宮になっています。原作でも評されていたように、ここは居るだけで体力を奪われます。

フィールドを歩いていると『熱ゲージ』が溜まっていき、ゲージが溜まりきると全員が割合ダメージを受けてしまいます。大体2割く

らしいダメージですね。岩間の影になっている所で立ち止まる事によって熱ゲージを下げる事が出来ます。ダメージを受けないように上手いことゲージの管理をする必要がある、面倒なダンジョンですね。

攻略ルートは2つあります。

まず一つ目は洞窟や階段を下りて真つ当にゴールを目指す正規ルート。魔物は弱いですが、大体50階層分くらい下りる必要があるので『安全だけど時間がかかるルート』となっています。また、各種鉱石が採掘できるルートでもありますので、武器やアイテム作成をしたければ推奨されます。

二つ目が原作でやってたようにマグマの河を岩盤に乗ってどんぶらこする短縮ルートです。こちらは比較的面倒な魔物が多く出現する上に、隠れる岩場が無いので熱によるスリップダメージを受けることとなります。ただ、最奥に辿り着くまで10分程度と非常に時間短縮が見込めるのでRTAではこちらが推奨されます。

それじゃあ短縮ルートに進みましょう。熱ダメージはヒールポーションガブ飲みでゴリ押せばええねん。そのための素材回収？ あとそのための売却？ K(カネ)、B(ガブ飲み)、S(ショートカット)！って感じで…。

一応ほもくとユエ姉貴は回復魔法を使えないことは無いのですが、精々がベホイミくらいの効果しかありません。普通に固定で5割回復するヒールポーションを飲んだ方が早いです。

どんぶらこできるポイントはいくつかありますが、最短距離で抜けるのは7階層らしいので、そこまでは徒歩です。wiki兄貴たちは本当に頼りになるでえ…！

道中の敵はスルーで良いでしょう。清水くんがフィールドで使える『戦慄の視線』のスキルをオオン！にしておけばレベルの低い雑魚敵は近寄ってこなくなります。先頭キャラの半分のレベルまでの敵に有効です。闇属性なのに聖水を使う男、それが清水くんです。

今回は戦闘は総スルーですが、グリユーエン大火山で出てくる敵は全て炎属性を持っており、炎属性の物理攻撃は威力が半減、魔法攻撃

に至っては無効化されます。いつか言ったかと思いますが、炎属性の魔法は無効なので、ユエ姉貴の『魔法反撃』で蒼天とかを引いたらMPだけ献上する事になります。祈りましょう。

▽マグマの河が宙を流れている……

▽丁度いい岩盤がある。船にすれば流れに乗れそうだ……

ベジータがめり込みそうな形をした岩盤を調べればどんぶらこ開始です。

清水くんのスキルで敵は寄り付いてこないので突っ立ってるだけです。楽ちんちん。グリュエン大火山の雄大な光景を眺めています。

今回のチャートはすでにレベル上げを終わらせていますが、奈落に落ちないルートだとグリュエン大火山は一番目か二番目に攻略する迷宮なので、レベルが40くらいで挑むことになります。フィールドの魔物もそれくらいのレベルなので清水くんでは追い払えないです。

最後の方に挑むオルクス大迷宮を最初に攻略するのがおかしいねんな…。

おつ、急流を下りましたね。ようやくボス部屋に到着です。熱ダメージのお陰でヒールポジションを20個くらい使いましたが問題無し！ 後でいくらでも用意できるので惜しみなく使いましょう。

激流を下ってその先にある上り坂を発射台にしてスポーンと放物線を描いてボス部屋に到着です。

クソデカイマグマ部屋です。中央にあるマグマに覆われた島がナイズ・グリュエン兄貴のハウスですね。では、その前にボス戦と洒落こみましよう。

▽広大な空間に出た

▽中央にある島が終点だろうか

「う、うわく、これ落ちたら骨も残らないね…。落ちたときは親指を立てながら沈めばいいのかな？ 確か昔見た映画でそんな場面があったような気がする！」

「いや、まず落ちないように気を付けようよ谷口さん…。いざとなれ

ば少しだけど足場になりそうな岩もあるね。位置だけはしっかりと把握しておいた方が良くも」

「……重力魔法があれば浮けるから大丈夫」

「私は体重を軽くするくらいしかできませんけどね……。落ちたら焼き兔になっちゃいます」

「……清水くん」

「ああ、分かっている。おい、暢気にしてんな！ 来るぞ！」

＜マグマの中から魔物が飛び出してきた！

＜魔物が襲い掛かってきた！

というわけでグリューエン大火山のボスである『グリードサラマンダー』との戦闘です。

原作にあつたように、このボス戦は少々特殊です。一体一体は雑魚なのですが、なんと100体もの敵がお代わりとして出てきます。あほくさ。

まあ、愚痴つてもしょうがないのでいつも通りやりましょう。

ほもくんは前に出て挑発、ユエ姉貴は炎属性以外の範囲魔法で攻撃、シア姉貴、清水くんは討ち漏らしを掃除です。清水くんは重力魔法を覚えたので攻撃にも参加できますよ。

「グリードサラマンダーはマグマ弾を発射した！」

こ奴らが使ってくる技は、このマグマ弾と体当たり、噛み付きだけです。全て炎属性の物理攻撃なのでほもくんの防御力をもってすればほぼノーダメです。大体ボスのレベルが50くらいですからね。レベル差の暴力というやつです。

マグマ弾は遠距離攻撃なので盾反撃は発動しませんが、ユエ姉貴の魔法反撃はしっかりと発動します。ヤッチマイナー！

「……お返し。『緋槍』」

あのさあ……。言わな、書かなかった？ 炎魔法は出すなって！ まあいいや、シア姉貴と清水くんがいるので討ち漏らしは心配しなくても良いです。

「纏めて吹き飛びやがれですよ！」

ちよどよく敵が固まってるので前方扇状の範囲に攻撃する『旋風

衝』で一掃しときましよう。流石の火力、レベル差もあって当然のように一撃ですね。あと80体!

体当たりと噛み付きは近接攻撃なのでうま味です。ほくんの盾反撃はそれなりの威力があるのでレベル差も相まって一撃で倒せません。

敵のお代わりですが、登場するたびに2秒ほどの短い演出が入るのでごくイライラします。

製作者はテストプレイしてて疑問に思わなかったんですかね…。

「宵闇より生まれし禁忌なる奔流よ、我が勅令に従いて集い、遍く光をも呑み込む顎となれ!」
「闇龍」

草。清水くんの魔法である闇龍です。ユエ姉貴が使う雷龍や嵐龍の闇魔法バージョンですね。

敵一体を中心として直線状の敵にダメージを与える、いわゆるごんぶとのビームで、追加効果で様々なデバフをまき散らす優秀な魔法です。MP消費が300程度なので連射が効く使い勝手がいい魔法です。

それにしてもこの詠唱は清水くんが考えたんですかね…?

「……お返し。『炎龍』」

もう許せるぞオイ! MP300使って何やってんですかねこのポンコツは。こんなんじやRTAにならないよ。あとでお仕置き(意味深)してやるからなあ?」

すでにグダグダになってきていますが、もう少しお付き合いください。あと60体ほどなので。

正規ルートなのですが、原作ではスキップされたので描写が無く可哀想な扱いでしたが、今作ではちゃんと存在します。熱ダメージがある上に所々で不規則にマグマが噴き出す場所があり、それに当たるとガツリとHPを持って行かれます。通路も狭く、普通に歩いていたら正面に陣取る魔物を避けて通る事が非常に難しいです。

総じて評するのであれば、クソダンジョンですね。良い所といえば鉱石系の素材が手に入るといふ事でしょうか。魔物もロクな素材を落としませんし、素材を売却しても端金にしかありません。

製作陣の簡悔精神が伝わってくるようです。

〱戦闘に勝利した！

やーっと終わりました。合計所要時間33分40秒！ただひたすら雑魚狩りするだけのつまらない時間でしたね。さて、これでグリューエン大火山は攻略完了、と言いたいところですがこの後ももう一戦あるので気は緩めないようにしましょう。

「ようやく来たか、異教徒共よ。やはりここで待つのは正解だったようだな」

フリード・バグアー兄貴オツスオツス！ 白い龍の背に乗って下りてきたのがグリューエン大火山の実質的なボスです。グリーンダサーマンダーは前座ですね。

〱魔族の男が現れた

〱どうやら自分たちを待っていたようだ

「死に行く前に私の名を骨身に刻むがいい。私の名はフリード・バグアー。異教徒共に神罰を下す忠実なる神の使徒である」

原作では開幕10割の卑劣光線をぶっ放してきたフリード兄貴ですが、ミレデイの時しかりこのゲームではそんな事はしてきません。流石に戦闘前に瀕死にされるのはゲームとして成り立たないからね。そういった都合により堂々と名乗り出てくれます。やさしい。

「なんだア？ てめエ……」

「魔族……！ 皆気を付けて！」

「……何で魔族がこんな所に……？」

「神代の力を手に入れた私に、我が神であるアルヴ様は直接語りかけて下さった。我が使徒、と。故に私は己の全てを賭けて主の望みを叶えてみせよう。そして、その障碍と成りうる貴様等の存在を私は全力で否定する。覚悟するがいい」

「……来ます！ 皆さん気を付けてくださいー！」

あいつアルヴ様の事になると急に早口になるよな。

というわけでグリューエン大火山のラストバトル、『フリード・バグアー』と『白竜ウラノス』です。原作ではずっと友だった2人ですね。バリアを使う亀さんはお留守番みたいです。

フリード兄貴ですが、どの時間軸でもここで出待ちをしててください。最短日数で来ても、一年間待ちぼうけをくらってもちゃんと待っていてくれます。雨の日も、雪の日も、嵐の日であろうとも、ずっと待っていてくれます。それが仕事だしね。しょうがないね。

どうやって魔族と接触のないほもくん達の事を知って行き先を突き止めたのかは永遠の謎です。全部エヒトが悪い。あと新井が悪い。

ではバトルです。フリード兄貴のレベルはこちらのパーティのレベルに合わせて調整されます。現在のほもくんのレベルは97なので、フリード兄貴のレベルは同じく97となります。

「異教徒共よ、ここで灰となるがいい！」

相手の行動としてはウラノスによるブレス攻撃と、フリードによる魔法攻撃、雑魚敵召喚があります。雑魚敵とは原作で出てきた灰竜の事です。

気を付ける行動はウラノスの呪い効果付きの『極光ブレス』とフリードの『震天』です。特に『震天』はフィールド全範囲に効果が及ぶので対策は必須です。

ほもくんはいつも通り挑発して肉壁になってください。フリード兄貴は煽り耐性が低いので必ず挑発が入ります。彼は竜騎士ガイアのようにウラノスに騎乗しているので、まずはウラノスを集中攻撃して叩き落としましょう。一定以上ダメージが入ると下りてくれます。

「この極光に耐えられるか！」

ウラノスくんから極光が放たれますが、これは魔法攻撃に分類されます。レベル97なのでラースヒュドラよりも若干威力が高めですが、あれからレベルが上がった上に素で6割カットしているほもくんには全然効きません。3000ちよつとのダメージですね。これなら自動回復で十分間に合います。状態異常も100%弾くので呪いも効きません。

「全力全開！これが私の本気ですう！」

重力魔法を会得した事で使えるようになった『轟爆』です。若干MP消費がありますが非常に威力が高いスキルで、単体相手ならこれを

中心に使っていくことになります。

「嵐籠」

順調にダメージが入っていますね。ほもくんが攻撃を受けてくれるので安定して戦えますが、原作メンバーで挑むとやるかやられるかの火力合戦になります。というか普通に負ける事も結構あります。フリード兄貴はハジメくんさえいなければ人類最強になれたかもしれない男ですからね。

「貴様達は危険だ…！ 全力で行かせてもらう！ ここで消えろ、イレギュラー！」

ウラノスクんのHPを半分削り、やっと下りてくれました。あとはウラノスクンをガン無視してフリード兄貴を殴りましょう。フリード兄貴さえ倒せばウラノスクンは倒す必要はありません。

「隙だらけだぜえ。よそ見してるからこうなるんだよ」

清水くん迫真のデバフが光る！ フリード兄貴はデバフ耐性とかはガバガバなので100%入ります。

おつ、フリード兄貴の行動順が来て足元に魔法陣が浮かび上がりました。『震天』の予兆行動なのでここでしっかりと対策を使いましょう。

スキル、『要塞』発動！ 味方が受けるダメージを一回だけ無効にします。物理だろうが魔法だろうが関係ありません。ほもくんの650しかないMPの内、400を使いますがその消費に見合った効果があります。

一応、オートアイテムがあれば3回ほど連続して使えますがマジックポーションも無限ではないのでね。こういう時以外は挑発してもらった方が良いです。（ほもくんに使うマジックポーションなんて）無いです。

シア姉貴はノーガードで問題ありません。ひたすらフリード兄貴に轟爆しましょう。

「逃れられるものか！ 汝 絶望と共に砕かれよ！ 震天！」

クツソ処理落ちしそうな衝撃波のエフェクトを出して震天が発動しますが、当然ノーダメージです。

もはや語ることは無いですね。後は適当に殴って終わりですがラストは必殺技で締めましょう。

キャラのHPやMPが表示されているバーの下にもう一つ謎のゲージがありますが(今更)、これが溜まると必殺技を出せるようになります。FFで言うリミット技、テイルズで言う秘奥義みたいなものです。ちょうどシア姉貴の必殺ゲージが溜まったのでトドメで使いましう。

残MPと同じ量のMPを消費して発動するためライセン大渓谷では使えませんでした。シア姉貴でもこれだけは何故か普通の魔法と同じ仕様なのでね。ユエ姉貴はそもそも最上級魔法で殴ってた方がダメージ効率が良いです。

「修行の成果を見せてやります！ ハウリアの健脚は流星の如く！ 私の未来視からは逃げられませんよ！ これで、終わりですううううう！」

身体強化魔法全開で移動してあらゆる方向から殴りつける！ そして最後に空中にいる敵を地面に叩き落としてフィニッシュ！ シンプルですが非常に画面映える必殺技ですね。まるで超級武神覇斬みたいだあ…。いや、どちらかというと裏蓮華ですかね。

必殺技の名前は『シューティングブリッツ』です。シンプルですね。「ば、馬鹿な…！ 選ばれた使徒である私が膝を付くだ…?!」

そしてこれでフリード兄貴のHPは削り切ったので戦闘終了です。あれをくらっても膝を付くだけで済むとかひで並みの耐久力をしてますね…。

〳戦闘に勝利した！

〳少しだけ強くなれた気がする…

「私たちに勝とうなんて百年早いですう！ 一昨日来やがれてやっですね！」

「いや、未来なのか過去なのかどっちかにしろよ」

これにてグリユーエン大火山での戦闘は全て終了です。ほもくんは今回ハアハアしませんでしたね。ノルマ未達成です。ではとつとと神代魔法をゲットしてこんな暑いだけの場所からはおさらば今回

はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

グリユーエン大火山に行く前日、英気を養う目的で宿屋に泊まった一行はそれぞれ別行動を取っていた。

ハジメ、清水は迷宮攻略のためのアーティファクトなどの準備を。鈴、恵里、シアは道具や食材などの買い出しを。そして北条はとユエは手持無沙汰だったので適当な場所を観光していた。

当初はハジメ達の手伝いをしようと思っていたのだが、「こっちは僕に任せて衛は気分転換してきなよ」とやんわり断られたのだ。ちようど暇人が二人出来上がったのでこうしてデート？と洒落こんでいる。

アンカジ公国にあるオアシス。そこにはトレビの泉のように、コインを投げ入れると願いが叶うという言い伝えがある場所が存在するらしい。特に恋人同士が同じことを願って投げ入れると永遠に結ばれるとか。観光案内所でそれを聞いた二人は早速そこを訪れた。

「……すごく良い場所」

「ああ。オアシスだな」

アンカジ公国には人の出入りが多いだけあって観光客も多い。二人の他にも家族連れのものや恋人同士なのだろうか、一緒にコインを投げ込んでいる男女もいる。

「…投げるか」

「んっ……マモル、一緒に投げよう」

「分かった」

期待の目線で見られて、北条が財布から金色の硬貨を取り出してユエに渡す。せーの、と声を合わせて二人同時に硬貨を投げ込んだ。トポン、と小さな飛沫を上げて沈んでいく硬貨。

「…ユエは何を願った」

「……ふふ、秘密」

「そうか」

波紋が広がる水面を眺めながら北条が問いかけるとユエは悪戯っ

ぽく微笑んだ。

「……マモルは何を願ったの？」

「……秘密だ」

「……そう」

ユエが問いかけると北条は無表情のまま口の前で人差し指を立てた。

「でも、願ったことが同じだと嬉しい」

「……そうだな」

「絶対一緒。私が保証する」

オアシスの側は砂漠にある街とは思えない程に涼しい。北条が胡坐をかいて、その中にユエがすっぽりと収まるように座る。木漏れ日が降り注ぐ中で二人はしばし、身を寄せ合って穏やかな時間を過ごした。

(……共同作業。これは実質ケーキ入刀、つまり結婚式では……?)

「……！ まもるんがユエユエに口説かれている予感がする！」

ピコン、と買い出しに出ている鈴のお下げが跳ねた。やはりユエを野放しにしておくべきではなかったか、と今更ながらに後悔する。もしユエとポジションが逆だったら今頃甘い時間を過ごしていたかもしれない。

「いやいや、何でここからマモルさんの状態が分かるんですか!？」

「女の感っていう乙女なら誰でもデフォルトで備わってる技能だよシアジア！ きつとまもるんは今頃あんな事やこんな事をされてるんだ……！ くうくうっ、こんな事なら鈴がまもるんと行動すればよかった！ 逆だったかもしれないねエ……！」

「今頃南雲くんと清水くんは宿で二人……ハジメユキも有り得る……？」

「いやだが……しかし……僕の解釈だとあれは……」

「大丈夫ですか恵里さん、一人称がおかしくなってますよ!？」

荷物持ちをして申し訳程度の奴隷カモフラージュをしているシアが突っ込みを入れるが、鈴には謎の理屈で北条の状態が分かるらし

い。ブルツクで再開した時から使えるようになったとか。
うがー、と吠える鈴とブツブツと変な事を呟く恵里に挟まれてシア
は気苦労が絶えなかった。

グリユーエン大火山出発くエリセン到着

汚くないドラ娘が仲間になるRTA、はーじまーるよー！

前回はフリード兄貴を倒したところまででしたので、今回はその続きからです。

「あのお方が危険視するだけはある…凄まじい力だ。今の私ではまだ力が足りんようだな。だが、次に相まみえる時にはその首もらい受けるぞ！」

フリード兄貴の出番は今回はこれで終わりです。原作では要石を破壊して迷宮を破壊、「環境破壊は楽しいゾー！」などとやりたい放題やりましたが、このゲームではそんな意地悪はしてきません。二度と入れないようになつたら他のキャラが神代魔法を取りに来れなくなるからね。

彼は、普通に白い龍の背に乗って出て行きました。後はナイズ・グリユーエン兄貴のアジトに入って神代魔法を入手するだけです。中央にある島を覆っていたマグマが無くなったので入りましょ。

岩盤くんもお疲れナス！ 最後まで足場として活躍したグリユーエン大火山におけるMVPです。

おつ、開いてんじやくん！ ナイズ・グリユーエン兄貴のアジトの入り口は自動ドアになっています。ハイテクですね。奥に進みまして、このこじんまりとした物置みたいな場所がアジトです。終活をしっかりしていたのか、宝箱とかアイテムとかは一切置いてありません。ケチんぼ。

「ここがゴール地点で良いみたいだね。魔法陣があるからあれに入れば神代魔法を入手できるのかな？」

「……今まで見た魔法陣と同じ形式。間違いない」

「みたいだな。さつきと入っちゃおうぜ。今回はどんな魔法が手に入るか楽しみだ」

「グリユーエン大火山の神代魔法…一体なんだろうね」

「今度はちゃんと私が使えそうなものだと言いますけどね…。生成魔法も重力魔法も全然ダメでしたし…心がひもじいです」

「大丈夫大丈夫！ シアシアは神代魔法が無くても十分強いし、未来視なんていう凄い力があるじゃん！」

〽頭に何か流れ込んでくる……！！

〽『空間魔法』を習得した！

魔法陣に入っ、て、神代魔法入手完了です。グリューエン大火山の神代魔法は『空間魔法』ですね。先ほどフリード兄貴が使った震天はこの空間魔法による攻撃です。

ほもくんは相変わらず適性は並です。ユエ姉貴と谷口姉貴は最適、ハジメくんと中村姉貴はほもくんと同じく並、清水くんは不適です。シア姉貴は可哀想な事にまた不適です。ユエ姉貴との格差が広がっていきますね…。

空間魔法は重力魔法と同じく攻防に優れた魔法ですが、どちらかというと攻撃側の性能をしています。範囲攻撃に優れ、雑魚散らしにはもってこいです。

特に谷口姉貴は空間魔法を取得していると魔法やスキルが多数追加されて一気に強キャラになります。なお、火力の面ではユエ姉貴やシア姉貴の後塵を拝するのでこのRTAでの出番は…んにやぴ。このゲームでは神代魔法を手に入れると色々と役割をこなせるようになりますが、一人のキャラであれもこれもとやろうとすると中途半端な結果になるので、ソロならともかくパーティ戦では役割はきつちりと決めて特化させた方が良いです。

〽『グリューエンのペンダント』を手に入れた！

それじゃあ空間魔法と攻略の証を手に入れたので、ここはもう用無しです。脱出しましょう。

『グリューエンのペンダント』を持っている状態でアジトのすぐ傍にある円形のリフトみたいなのに乗ればエレベーターみたいの上に上って外までショートカット出来ます。

〽この足場に乘れば外に出られそうだ……

〽どうしようか……

では諸君、サラダバー！ もうこんなダンジョン来ねえよ、ペツ！ 脱出した先は山頂となっております。麓まで送ってくればよ

かったのに、入り口もそうですがなぜ山頂にこだわるのか。ナイズ・グリューエン兄貴は馬謖だった…？

では下山しましょ。噴火していいのでまた来ることが出来ますが、今回のRTAではもう二度と来ません。オルクス大迷宮やライセン大迷宮であればボス戦が一、二分で終わるので問題ないのですが、こここのボス戦は三十分くらいかかりますからね。流星にロスが過ぎます。

さて、これからの予定ですが、一度ウル町まで行って、それからエリセンに行き、メルジーネ海底遺跡に行つて再生魔法を手に入れます。ウル町まで行くのは新たな旅の仲間を迎えに行くためです。

ちようどこの日数くらいに出現するので、ちやーんとチャート通りに走れば出会えるはずですよ。

ウル町はブルツクの町からセンチユリーで北に走つて二日、飛行艇なら一日もかからずに着く場所にありますが。グリューエン大火山からは飛行艇で西に半日程度ですね。

▽砂嵐が行く手を阻んでいる

▽通り抜ける方法を探す必要がありそうだ

▽四輪駆動なら大丈夫そうだ！

これ、最初の一回だけ強制で後は自由参加にすることは出来なかったのか…？ グリューエン大火山に入つたり抜けたりするたびにこのミニゲームしなきゃいけないんですけど、制作陣はこのゲームをそんなにやってほしかったんですかね？

倍速！ 風刃！ ハンドルを右に！ 手榴弾！ ニトロ！ クリア！

▽無事に砂嵐を抜けた…

二度と来たくない理由の一つに、このミニゲームがあると思います。一応空間魔法があれば乗り物が無くても抜けられますが、それはグリューエン大火山をクリアする必要があります。黒炎王リオレウスを狩るために黒炎王リオレウスの装備が必要な感じですね。

というか、帰りも馬鹿正直にミニゲームをやりましたが空間魔法でショートカット出来ましたね…。まあ、誤差だよ誤差！ 次からは

空間魔法を使うとちやーンとチャートに書いておきましょう。

砂嵐を通り抜けたら飛行艇に乗り換えて進路を西へ。ウルの間へと急行します。アンカジ公国にはもう用はありませんからね。オアシスの魚くん生存ルート。

さて、移動中にこれから啞え入れる仲間について…お話しします…。迎えに行く仲間はみんな大好きドMドラゴンこと『ティオ・クラルス』姉貴です。彼女は畑山先生のように日によって出現する場所が違います。今は24日目なので、ウルの間に向かって移動中です。25日目から27日目まではウルの間滞在中なのでその間に話しかけて仲間にしましょう。

ティオ姉貴はトータスに召喚された20日後から出現して各地をぐるぐるしています。原作では数か月たってから動き出していました。このゲームでは竜人族は即決即断したようですね。まあ、本当に仲間に来るのに数か月かかるようであれば出番もなくクリアされるからね。しょうがないね。

移動ルートは固定なので、あらかじめwikiで調べておけば待ち伏せして20日後に最短で仲間にする事も出来ます。

これから攻略するメルジーネ海底遺跡の攻略に有用であり、それ以外でも高い戦闘能力を誇るので準スタメンみたいな扱いになります。流石にユエ姉貴のように出ずっぱりではないですが、物理が効き辛い敵の時はシア姉貴と交代したりすることになるので括約を期待してください。

そんな事を言っている間にウルの間に着きましたね。それじゃあ門番くんに見せつけるように目の前で降りまして、町に入りましょう。湖畔にある綺麗な町です。近くにウルディア湖という絶景のスクショスポット、もとい観光地があるので暇があれば寄ってみても良いかもしれませんね。ボートに乗ってデートとかもできます。

「ここがウルの間か…。すごく空気が澄んでるね」

「凄いたくさんの水田があったよね！ 確か大陸一の稲作地帯だったかな？ 王宮ではお米が出なかつたから久しぶりに食べたいな」

「お、お米…！ 私も食べたい…！」

「近くにデカイ湖があるようだぜ。折角だしちよつと寄ってみるのも良いかもな」

「……ん、確かウルディア湖は大陸で一番大きい湖だったはず。魚も良いのが沢山獲れる」

「いやー、フェアベルゲンでは見れないものばかりで新鮮な気持ちですな！」

目的の人物は25日目に出現するので一晩ウルの町で泊まりましょう。ちようど夜ですしね。

適当な宿でご飯でも食べて一夜を明かしましょう。原作で愛ちゃん先生一行が泊まっていた水妖精の宿にも泊まれますが、一晩13万ルタとか宿泊料が高すぎるっぴー！ 逆に言えばどれだけ人類さんサイドが愛ちゃん先生を重要視していたかが分かります。

＜みんなどで一緒に食事をとった

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

＜『清水幸利』『中村恵里』『シア』との仲が深まった！

＜『清水幸利』『シア』との関係が『親友』になった！

＜『中村恵里』との関係が『友達』になった！

＜朝になった

ちなみに友好度が10であつても個別に交友で誘わなければ『特別な仲』になるためのイベントは発生しません。食事は個別の交友ではなく、修学旅行や文化祭と同じ全体に対する交友という処理なので発生しないわけですね。

それじゃあテイオ姉貴を探しましょう。探す場所としては宿屋、目抜き通りなどですね。完全にランダムな場所に現れるので根気強く探しましょう。オラツ、早く出てこい！

！ いたぞおおお、いたぞおおおおおおおおお！！

丁度 水妖精の宿から出てきたところにバツタリと鉢合わせしました。まだケツが無事な頃のきれいなテイオ姉貴です。お前、こんな良いところに泊まってたんか。流星、竜人族のお姫ちゃんは格が違った。やつほー、こんにちは。元気にしてたー？

「うむ、こんにちは。ふむ……？ 成程、もしやお主らが……」

ティオ姉貴は頭が良いので話が通じます。勝手に納得してこちらの素性を汲んでくれますからね。伊達に「ピー」年以上は生きてないって事です。ちなみに、町ではバラバラに行動してるはずなのにこういったイベントシーンでは一瞬で集結します。空間魔法か何か？「おつと妾としたことが。不躰に眺めて済まなかったのう。妾の名はティオ・クラルス。遠くにある場所からの旅人じゃ。ここでこうして出会ったのも何かの縁。せつかくじゃし、共に食事でもどうじやろうか？」

＜『ティオ・クラルス』に食事に誘われた

＜どうしようか……

流れるようなお誘い。これはやり手のナンパ師ですね…。断る理由も無し、お誘いに乗りましょう。断るとパーティに入らないです。

暗転して場所が変わり、水妖精の宿にあるレストランで8人での食事です。食事後も所持金が減っていない所を見るに、ここはティオ姉貴の奢りみたいです。よしみんな、一番高いもの頼もうぜー！

「まずは急な誘いに乗ってくれた事を感謝するのじゃ。実は初対面じゃというのにお主等をこうして誘ったのには訳があつてのう…」

ティオ姉貴の長話が始まりますが倍速でキャンセルだ。ですが折角の登場シーンなので右枠で垂れ流しておきます。一応内容をかいつまんで下枠に纏めておきますと、以下のようになります。

①ちよつと前にすんごい魔力を感じて何か変なのが世界に降り立ったことを同族の者が感知した

②普通は自分たちの一族は世俗の事に関与しないけど今回は流石に放つとけない

③話し合いの結果、自分が派遣されて調査をする事になった
そしてほもくん達を一目見てビビツときたらしいです。

一応ある程度の情報は集めてたようで、勇者一行がこの世界に召喚されたことは知ってたみたいですが、流石にハイリヒ王国の首都とか神山とかには迂闊に近づけず、こうしてちまちま行動していたのだとか。

まあ、竜人族はエヒトのせいで世間では絶滅扱いですし、エヒトの

目がある場所には行けませんよね。

現在の時点でティオ姉貴は自身の素性を明かしておらず、ほもくん達にはただの調査員と自己紹介しており、ストーリーが進むか友好度が上がるかのどちらかで自身の素性を話してくれるようになります。このチャートではメルジーネ海底遺跡で素性を明かしてくれますので、それまでは竜化はお預けです。

「——と言う訳なのじゃ」

「なるほど…確かに僕達はここじゃない世界から召喚されたけど…」

ティオ姉貴は自身の素性を隠す必要がありますが、こちらには隠す必要はありません。ハジメくんがほもくん達の境遇を話してくれますね。まあ、いざとなったら矛先が向かうのは勇者なのでほもくん達のような小者はへーきへーき。

「…うむ。やはり、妾の勘は間違っておらんかったの。そこで、お主等に折り入って話があるのじゃが…。妾を旅の一行に加えてくれぬか？ 異世界人と言うのは一族の記録でも一度も確認された事がないのじゃ。お主等が何を為すのか、それを見定めたいと思っておる」「だったら天之河…勇者の所に行った方が良いんじゃないかねえのか？」「…それも有りなのじゃが、お主等に付いて行った方が色々見れると思つてのう。どうじゃ？ 自分で言うのもなんじゃが、これでも妾は腕は立つのじゃぞ？ 足は引つ張らぬし、むしろ色々物知りゆえ、役に立つと思ふのじゃが？」

「お、おう……」

すつごい食い下がってきますね。ティオ姉貴の目的が目的なのでしようがないといえそうですが、それはそうと清水くん鼻の下すごい伸びてるゾ。まあ、ティオ姉貴は見た目は満点ですからしゃーない。ケツパイルされなければ中身も満点に近いです。

〈『ティオ・クラルス』が仲間になりたそうに見つめてくる

〈どうしようか……

〈仲間に加える

「うむ！ これからよろしく頼むのじゃ！」

〈『ティオ・クラルス』が仲間になった！

というわけでテイオ姉貴がパーティに加入しました。このパーティに入ったのが運の尽き、これから使い倒してやりましょう。

ウルの本にももう用はないのでさっさと出発してしましましょう。目指すはエリセンです。

エリセンは海上にある町で、ウルの本からは大体2日くらいの距離にあり、さらにそこから北にしばらく進むとメルジーネ海底遺跡がある場所に辿り着くことが出来ます。

気になったんですがトータスのデカさってどれくらいなんですかね…？ 地球と同じか少し大きいくらい？ 原作の舞台が世界の全てなんでしょうか？ 実は原作の大陸は世界のほんの一部で、他にも大陸があつてそこでも世界の存亡がかかった戦いが行われているのかもしれないね。地球の神話でも全知全能っぽい存在は複数いますし、他にエヒトみたいな奴がいても不思議じゃないです。想像が膨らみます。

▽夜になった……

▽これ以上は行動しない方が良いでしょう

「ウルの本：良い場所だったよね。空気もきれいだしご飯も美味しかったし。お米も手に入ったから、これからは毎日でも食べたいくらいだよ」

「さんせうい！ キャンプと言えばカレーだよね！ 明日はカレーにしようよ！」

「カレー…いいよね。ウルの本にあつたシル…シルツシル？ みたいなのも中々に美味しかった」

「おいおい、シルシルシルだろ？」

「……違う。ニツシルシルだったはず」

「いえいえユエさん、シルシルシルですよ」

「お主等、ちゃんと覚えてやってほしいのじゃ…。シルニツシルじゃろう」

全員間違つてて草。シルシルシルくん可哀想…。思ったんですが、トータスのお米ってインディカ米なのかジャポニカ米なのか、それともタイ米なのかどっちなんだろうかね？

「あー食った食った！ おっ、夜空が見える。向こうじゃこんな綺麗なのは滅多に見れねエよな」

「空間魔法が手に入ったから上が透けて見えるように改造したんだ。これでもつとキャンプ気分が味わえるよね。ついでに外の環境音も聞こえるようにしてるよ」

ハジメくん有能すぎイ！ このテントはどこで買えますか？

「……くっ」

「くっ」

「な、何故妾を覗むのじゃ？ 特に何かしたような身の覚えも無いのじゃが……」

「鈴とユエさんはその……、テイオさんの胸囲の戦闘力に慄いてるだけですから……」

「いやー、でも大きくても肩が凝るだけですよ？ そこまで良い事は無いと思うんですが……」

「は……」

「は……」

こちらは巨2並1貧2ですね。仲が良いようで何よりです。

では夜も明けたので出発です。エリセンには今日中に着きたいですね。最短距離で行けばおそらく日が沈む前には着くと思うのですが……。一応調査でも進路から逸れずに走ったら夕暮れ頃には到着できたので大丈夫だと思います。

さて、テイオ姉貴の性能ですが、彼女は数少ないタンクが出来るキャラクターの一人です。とは言ってもそれは竜化状態での話で、通常状態ではシア姉貴よりも若干耐久力がある程度であり、普通に魔法アタッカーとして運用した方が強いです。

火と風の属性魔法が特に強力で、この二つの属性であればユエ姉貴に迫るほどの威力を叩き出せます（勝てるとは言っていない）。

竜化すれば戦闘方法がガラツと変わり、肉弾戦とブレスによる範囲攻撃で雑魚敵であればほぼ一撃で蹴散らすことが出来ます。ただし、本人の当たり判定も大きくなり範囲攻撃に巻き込まれやすくなるので、範囲攻撃を連発してくる敵が複数出てくるといつの間にか蒸発し

てたりするので気を付ける必要があります。

後は画面の圧迫感が凄いいことになります。デカ過ぎんだろ…。

総評すると、強キャラ〜ぶっ壊れキャラの中間に位置する準ぶっ壊れキャラです。

敵によつて2つの形態を使い分けることが出来れば心強い戦力になつてくれるでしょう。

エリセンは飛行艇に乗っていると入れないので、海の手前で降りて渡りの船に乗るか、もしくは自前の船に乗って行きましょう。潜水艇があるのでこれに乗れば大丈夫です。

ちようど夜になる直前に着けそうですね。ではエリセンで一泊した後、メルジーネ海底遺跡で幽霊ハントを今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます。

□どうでもいいオマケ□

ウルの町で新たに謎の調査員ティオ・クラルスが仲間になったのは良いのだが、一つだけ問題があつた。

ここではお米が買えると言う事で幸利、鈴、ティオで買い出しに行く途中の出来事である。

「のう、何故ユキトシは妾を見る度に眉間と心臓を押さえるのじゃ？」
「い、いや。俺も分からねえ…。ただ、ティオさんを見る度に眉間と心臓に穴が開いたような感覚がするんだ。ポーション飲んででも変わらねエから病気とかじゃなくて、きつと気のせいだと思ふんだが…」

「それはきつと恋だよ清水くん！ いやはや、青春してますなく！」

見た目はドストライク。艶やかな黒髪に豊満な身体を着物のような民族衣装に包んでいる。日本で出会えたのなら是非お付き合いしたいくらいだ。

だが、幸利はティオを見る度に眉間と心臓にちよつと痛みが走るような気がした。それを聞いた鈴が幸利の背中をバンバンと叩いて茶化す。

「いや、多分違うと思うんだが…。そういうお前は北条とはどうなんだよ」

「うゝっ…！　そ、それはですね、いざ再開すると勇気が萎んでいったと思いますか…」

「おいおい、そんなんじやユエさんにかっさらわれてお前が負けヒロインになるぜ？」

「うぐぐ…！　い、嫌だ…負けヒロインなんかになりたくない…！」

「ほほう、スズはマモルの事が好きでユエとは恋敵である。とは言え険悪な雰囲気では無かったようじゃし、健全なライバルと言うやつかのう。うむ、やはりお主等に付いて行くのは間違いではなさそうじゃ」

あつさりと幸利の反撃で返り討ちにされる鈴。そのやり取りを聞いて大まかな人間関係を把握したティオは楽しそうに笑った。いくつになっても人の恋模様は観ていて楽しいものである。

なお、本人は長老から孫をせっつかれている模様。

「とつとと谷口が告つちまえば良い話なんだがな。コイツ、こう見えて臆病者だからなア。地球に帰るまでは無理なんじやねえの？」

「で、出来るもん！　波風を立たせないようにしていた鈴は死んだ！　もういない！　……な、七つ目の迷宮に行くくらいまでにはきつと…」

「早速先延ばししてんじやねエよ！」

「くふふ…！　た、楽しい旅になりそうじゃな…！」

鋭いツツコミと上品な笑い声がウルの町に響く。

今日も世界は平常運転である。

エリセンくメルジーネ海底遺跡

サクサクかと思いきやボスだけ異常なまでに強いダンジョンのR TA、はーじまーるよー！

前回はエリセン到着まででしたので、今回はその続きからですね。

正直な話、(エリセンでは特に重要なイベントは)無いです。ミユウ姉貴関連のイベントくらいですかね…。一応この時期でもレミア姉貴(24)は元気に未亡人をやっているので会いに行こうと思えば行けますが、特に理由もないのでキャンセルだ。

「ここがエリセンじゃ。世にも珍しい海上にある町であり、魚介類の名産地として知られておる」

「お、ほんとに海の上に町がある！」

「……地面じゃなくて木があるから浮島みたいなものだと思う」

「木で編まれた島って聞いてたけど、まさかそのままの意味だったとはね……」

「これ、津波とかが来たらどうすんだろうな。いや、来た事がないからここに作れんのか？」

「とんでもない所ですね…。この島を作るのにいったいどれほどの木が使われたんでしょうか…」

「潮風で眼鏡のフレームが痛んじやいそう…気を付けなきゃ」

エリセンは、木で出来た巨大な人工島です。言ってしまうとデカイ船の上に町を作ってる感じですね。ガルパンか何か？ ここにも門番くんは居ますが普通に通してくれます。潜水艦を見てもノーリアクションです。余談ですが、門番は全員同じ声優さんが使いまわされ…担当しているらしいです。

メルジーネ海底遺跡は何故か満月の夜にしか行けません。おそらく制作陣の嫌がらせ、もとい粋な心遣いと言うやつでしょう。簡単に迷宮に辿り着かれたら悔しいじゃないですか。(笑)

27日目に満月になるので一泊する必要がありますね。ちなみにこのゲームでの満月は9日毎に訪れます。この機を逃すと大幅ロスになるので気を付けましょう。

町に入ると海人族のお方が出迎えてくれます。見た目はあんまり人間と変わらないですね。申し訳程度にヒレが付いてますがアクセサリーと言われればそう信じてしまいそうです。

夕暮れ時に入ったので夜からのスタートですね。ポーシヨンは……まだ十分残ってますね。んだらば特に買いたい物も無いですし、最寄りの宿屋で一晩明かしましょう。

おーええやん。海が見えるんやな。気に入った！

＜みんなと一緒に食事をとった

＜少しだけ仲良くなれた気がする……

＜『ティオ・クラルス』との仲が深まった！

＜朝になった

異世界組は友好度7くらいまではポンポン上がります。チョロいです。

さて、それでは27日目の満月が出る日になりましたのでエリセンを出発しましょう。

目指すは西北西、メルジーネ海底遺跡の真上の地点です。大体半日くらい進んだところに突き出た岩があるので、それを目印にしましょう。

メルジーネ海底遺跡の場所はミレディ姉貴から聞くことが出来ませんが、ミレディ姉貴との会話がフラグになっていく訳ではないのでwiki等で調べれば普通に入れます。ただし『グリユーエンのペンダント』は必須なので注意しましょう。

おつ、ありました。先ほと言った目印です。あの突き出た岩から真東に30秒ほど進めば丁度メルジーネ海底遺跡の真上です。後は夜になるのを待つだけです。何かコミュとかがあれば暇潰しが出来るんですが、フィールド上では特別なイベント以外ではコミュが発生しないので何もできません。

しばらく海に浮かぶ潜水艦をお楽しみください。 nice bo
at.

メルジーネ海底遺跡をクリアした後ですが、神山の攻略をした後にハルツィナ樹海、シユネー雪原の順に攻略して、その後はラスボス撃

破という流れになっています。だいぶ進みましたね。

▽夜になった……

▽これ以上は行動しない方が良いでしょう

▽……！

通常は夜になるとキャンプが発生しますが、ちゃんと指定の場所付近にいればイベントが発生します。

▽『グリューエンのペンダント』から光が放たれる！

グリューエンのペンダントから一筋の光が飛び出しました。あの光の先にラピユタ…じゃなくてメルジーネ海底遺跡があります。それじゃあ潜水モードにして突入しましょう。潜水艇はL2で潜水モードと浮上モードを切り替えることができます。

光の道に従って潜っていくと岩壁があり、そこに近づくと自動的に迷宮への入り口が開きます。

おっ、開いてんじゃくん！ それじゃあメルジーネ海底遺跡の攻略開始です。

入ってすぐに円環状になっている通路があり、5つの魔法陣が分かりづらく書かれているのでそれを調べましょう。あらかじめ手書きの地図にマークしてあるのでへっちゃらです。

▽岩壁に魔法陣が刻まれている

▽『グリューエンのペンダント』をかざすと魔法陣が光り輝いた！

これを5回繰り返し返します。一応この通路にも雑魚敵は現れるのですが、レベルは40程度しかないので潜水艇で轢き頃せます。オラオラどけどけ〜！ 勇者一行のお通りじゃい！ 長いので倍速。

×4 甥の木村、加速します。

▽岩壁に魔法陣が刻まれている

▽『グリューエンのペンダント』をかざすと魔法陣が光り輝いた！

▽どこかで岩が動く音がした……

これにて第一関門突破です。海の中なのに音が聞こえるのは気にしてはいけません。仕掛けが解けた事を分かりやすくするための合図のようなものです。

では第二関門です。開いた奥への道へと進むと下への水路をメガ

トンコインして水エリアから陸エリアに移ります。上にある水路からは水が侵入してこないようになってるんですね。

そして強制エンカウントです。『ピアースバナクルス』×4です。原作でいうフジツボくんですね。

こいつらに関してですが、特に何も言う事はありません。レベルは40程度ですし、すでにレベル90台後半のほもくん達の相手ではないですね。

あえて言うのであれば破断の魔法を無詠唱で使ってくるくらいです。挑発しておけばレベル差もあつてダメージはゼロに等しいので、いつも通りの戦法で瞬殺しましょう。

＜戦闘に勝利した！＞

では先に進みましょう。おっと、その前に清水くんの『戦慄の視線』をオオン！にしまして、雑魚敵はスキップしましょう。膝の高さまで水が入り込んでいる通路をじゃぶじゃぶ進んで行きますが、この通路がやたらと狭いせいで魔物の脇を通り抜けようとしても不幸にも黒塗りの魔物に追突してしまうんですね。

その点、清水くんの霸王色の覇気であれば、向こうから逃げてくれるので安心！

通路の先にはデカイ部屋がありますが、その前にバトルメンバーを変更です。

シア姉貴を下げて、ティオ姉貴をフロントメンバーへ。隊列は最後に配置しましょう。

ここのボスは物理は有効じゃないですからね。魔法も軽減されるのですが、それでも物理攻撃よりは遥かに通るのでね。シア姉貴は今回はお休みです。バックメンバーはいつも通りハジメくんと谷口姉貴です。

イクゾー！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

＜広い洞穴に辿り着いた！＞

＜奥に続く通路が見える＞

「流石に足まで水が浸かっていると歩きにくいね」

「うえ、すぐく潮臭いよ。もうびしゃびしゃだし早くどこかで着替えたいよ」

「うむ、水を吸ってしまったって歩きにくい事この上ないのじゃ。海水だと生地も傷んでしまうから早いところ洗い流したいのう」

「す、住んでる魔物もヌメヌメしてそれで気持ち悪いよね…」

奥に続く通路に入れば本試験会場へと辿り着けますが、そうは問屋が卸しません。

部屋の中央まで行った辺りで通路への入り口がゼリー状の壁で防がれてしまいました。

「な、なんじゃこりゃ…。これも試練の一つなのか？」

「何だかブヨブヨしてますねえ。一発ぶちかましときますか？」

「……迂闊に手を出さない方がいいかも。ここは魔法で様子見るべき」

◇『ユエ』が魔法でゼリー状の壁に攻撃した

◇……！

◇なんと、壁になっていたのは魔物だったようだ！

◇魔物が襲い掛かってきた！

ユエ姉貴が勝手に魔法で壁を燃やし始めましたね…。『迂闊に手を出さない方がいいかも』とは一体。そして当然のように怒ったゼリーの魔物が襲い掛かってきます。

それでは巨大クリオネこと『???』との一回目の戦闘開始です。ここでは倒すのではなく、一定以上ダメージを与えて撃退する形となっております。この後も出番があるので倒すのはその時ですね。

この『???』は全ての攻撃に状態異常の判定があります。以前ユエ姉貴の封印部屋で酸の状態異常を使ってくるサソリくんがいましたが、その上位互換である『腐食』という状態異常です。

酸は『防御力低下と行動每一割ダメージ』でしたが、腐食の方は『防御力を0にして行動毎五割ダメージ』という凶悪過ぎる状態異常です。対策必須！

また、酸の状態異常とは別物なので、『酸耐性』を100%にしてい

ても防ぐことが出来ません。

ですがほもくんの場合は『状態異常耐性100%』なので防ぐことが出来ます。じゃけん、いつもどおり肉壁になりましようね。

幸い、『???』は近くににいるキャラから狙うベヒモスのような脳筋AIなので、ほもくんを前に出して生贄にしておけば後衛の安全は担保されます。

「『炎龍』」

『???』の弱点属性は炎です。魔法自体の威力を半減されますが、炎は二倍で通るので実質等倍ですね。ティオ姉貴、清水くんも炎属性の魔法で攻撃しましょう。逆に水属性の魔法は無効となります。

ちなみに、こやつにはデバフは効きません。

「灰となりて大地へ帰るがよい！ 『螺炎』」

「灰となりて大地へ帰れ！ 『螺炎』」

ティオ姉貴、清水くんのダブル螺炎です。ユエ姉貴とかの例外以外は同レベルだと詠唱時間が同じなので、素早さが近い者同士で同じ魔法を使うとこういった光景はよく見られます。ティオ姉貴もかなり魔法攻撃力は高いので結構ダメージが入っています。清水くんは：まあ、平均くらいです。

魔法のシステムとして『連携魔法』なるものがあるのですが、またいつか紹介しましょう。

『???』は体を広げ覆いかぶさってきた！

フィールドの前半分を範囲とした物理攻撃です。例に漏れず腐食の状態異常が付いてくるので要注意です。まあ、このチャートでは力モ行動なんですがね。

他には単体を対象として円状範囲にゼリーの雨を降らして攻撃してくる『雨蝕』、直線状に攻撃してくる『呑流』、単体を拘束して窒息、腐食状態を継続して与える『抱溶』などの行動がありますが、隊列に気を付けていれば現状さして恐れる必要はありません。

ちなみに窒息の状態異常は『魔法使用不可』と行動毎五割ダメージ』とこれまた凶悪です。腐食と合わせると合計十割のため、耐性が無いキャラが『抱溶』で捕まったら確札されます。窒息しながら溶かされ

る…グロい絵面ですね。ほもくんじゃなかったら即死だった…。

それでは三人がマジックポーションをがぶ飲みして燃やしつつ、ほもくんがゼリーでねちよねちよになる光景をしばらくお楽しみください。服とかは溶けないんですかね…？ 原作ではシア姉貴の服が犠牲になってましたが。まあ、ほもくんの全裸とか誰も得しないので気にしないでおきましょう。

現在は非常に安定して戦えています。普通プレイをするとメルジーネ海底遺跡は最難関の一つです。というのも、通常はここに来るのって大体60〜70レベルくらいの時なんですよね。推奨レベルもそれくらいですし。

ですが、このボスのレベルは何と95です。レベル95というと、終盤のダンジョンであるオルクス大迷宮のボスのレベルとほぼ同じなのです。完全に初見殺しですね。

生半可な防御力では押しつぶされますし、状態異常への耐性も疎かになりやすいので、恐らく殆どのプレイヤーがここで一度は全滅したことでしょう。私は三回くらい負けました。

そして、いかに状態異常の対策が大切か、隊列や戦術を考える必要があるのか思い知るのです。しっかりと対策すればレベル60台でも勝つことは出来るように設定はされているのでね。

「……お返し。『炎龍』」

魔法反撃での引きが良いですね。グリユーエン大火山でのガバを取り戻す勢いです。

一応、『???』の攻撃は分類上は物理属性なので盾反撃が発動していますが殆どダメージが無いです。百回くらい殴ればユエ姉貴の炎龍くらいのダメージになるんじゃないかな。

＜魔物が怯んでいる！＞

＜今なら奥の通路に入れそうだ！＞

体力を一定以上削り取ったので、これにて一回目の戦闘は終了です。また後でケツチャコ着けましょう。『???』は通路までは追ってきません。やさしい。

通路を進むと左右に分岐路があり、左は船の墓場、右は廃都市に繋

がっています。奥まで進むと魔法陣があるのでそれに乗ればOKです。原作では岩盤を破壊してメガトンコインしてたので、これは恐らくゲームでのオリジナル設定？みたいなものだと思います。というか岩盤破壊がイレギュラーなだけです。

私が選ぶのは右の廃都市です。なぜなら移動距離が少ない上に、道順も王城を目指して一直線なので記憶力もいらなからず。船の墓場は移動距離も長い上に通路が複雑なのでやりたくないです。

そんじゃ右側に行きまして、ちゃっちゃと魔法陣で移動しましう。

＜魔法陣がある

＜入れば起動できそうだ……

＜魔法陣が光り輝いた！

神代の都市（廃墟）に降り立ちました。

では、メルジーネ海底遺跡の本来の試験開始です。

「なんだこゝ……。都市の廃墟か？」

「……少なくとも私の知識には無い」

「ふむ：見たところかなり昔の街並みじやな。それも百年や二百年などというレベルではないほどの、のう……。解放者が存命であった頃のものかもしれないな」

「な、何だか『出そう』な雰囲気だよね……。エリリン、幽霊が出た時はお願い！」

「う、うん……。何とかできそうなら何とかするよ……」

「あつ、遠くにお城が見えますよ！ 取りあえずあそこを目指すのはどうでしょうか！」

「他に当てもないし、それが良いかもね」

いざ出発しようとしたほもくん達の周りの空間が歪んで幽霊兵が突然のエントリーだ！

強制エンカウントの『ゴーストソルジャー』×2と『ゴーストメイガス』×2です。

幽霊兵は人間族さんサイドと魔人族さんサイドの二種類がいます。人間族が物理攻撃を、魔人族が魔法攻撃を行ってきます。

ここに出現するゴーストは特殊な敵で、物理攻撃は一切通用しません。

ただし、魔法であればどれほど小さい威力であろうと、それが攻撃魔法でなくても一発当たれば昇天します。デバフをかけても即氏するってお前…。

なので、ここは普段使い道のない魔法を使いましょう。

「『衝波』」

MP消費がたったの3！ 画面全範囲に極わずかのダメージを与える使い道のないクス魔法です。普段使いではユエ姉貴を以てしても一桁ダメージしか出ません。ですがここでは全画面即氏攻撃に早変わり！

〈戦闘に勝利した！〉

はい、戦闘終了です。一応中村姉貴の縛魂が通じる相手のはずなんです。縛魂をかけてもなぜか即氏する敵なので意味が無いです。なんでやねん…。

「ひいっ！ や、やっぱり出たっ！ エリリンヘルプ！」

「きゃっ！ す、鈴！ どさくさに紛れて変な所触らないでっば…！」

「……！ きゃっこわっい。マモル、ヘルプ」

「何やってんだユエさん…。っーか思ったんだがコイツ等っつてよオ…」

「見境なし、ですよ。人間族と魔族、どちらの兵士もこっちに攻撃してきました」

「ふむ。これを作った何某メルジーネは妾達に何を伝えたいんじやろうな。戦の凄惨さか、それとも…」

「…とにかく進むしかないみたいだね。城に辿り着けば何かが分かるかもしれない」

では自由行動です。ここからはエンカウントを出来るだけ避けていきます。

幽霊兵は清水くんの覇気が通じないのでキビキビ走り抜けましょう。とは言っても大量に敵がいる上、こちらに向かつて一直線に向

かってくるので最低でも20回はエンカウントするんですがね…。

衝波があれば戦闘は一瞬で終わるので事故要素は無いのですが頻繁に画面が切り替わるので目が疲れます。この時代にシームレスで戦闘に移れないのはどうかと思う（突然の批判）。

では幽霊相手に無双をしながら王城に殴り込みを今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

「出来た…！ ついに完成してしまっただ…！」

「…ああ。やったな」

「これで…ついに…！」

水上の町エリセンにある宿屋で体を休める一行。当然ながら男女別で部屋を取っているのだが、男子部屋からは興奮した空気が発せられていた。彼等の前には一本の棒がある。真っ直ぐ、艶のある堅いそのの片端には魔獣の毛を束ねたものが括り付けられていた。

「空を飛ぶ魔法の筈…！」

「重力魔法を手に入れて苦節十数日…。俺達の努力がようやく報われたな」

「また偉大な発明をしてしまったよ…。僕、何かやつちやいました？」
すでに深夜になるというのに意気揚々と試運転をするために外に出る三人。波の音だけが聞こえる屋上に出ると、善は急げと清水は地面に置いた筈に手を翳す。股間を痛めないようにサドルが取り付けられている親切設計だ。

「上がれ！」

興奮を隠しきれないその言葉を合図として筈が跳ね上がり、清水の手に収まった。途端、上がる歓声。魔法が使えるなら一度はやってみたい事ベスト10くらいには入る事であった。

「よっしやー！ー！ 今、俺はすごく魔法使いをしてるぜ！ それじゃあちよっくら飛んでくるからな！」

「重力魔法は清水くんが一番扱いが上手いし、それがいいね。使用感とかの感想よろしく！」

任せろ！ と飛び立った清水の指には緑と青の指輪が嵌められている。緑色の指輪を使えば箒を引き寄せることが出来て、箒を握った状態で青色の指輪を使えば自在に箒を飛ばすことが出来るのだ。

改善すべき点が多いが、それでも三人が共同して作った初めてのアーティファクトだ。

箒には重力魔法が生成魔法を用いて組み込まれており、そのためシユタル鉱石で薄くコーティングがしてある。魔力を流せば硬度が増すシユタル鉱石であればいざという時、僅かな間だが盾になれるだろう。

「…上手いな」

「初めてとは思えない程に飛ぶのが上手いよね。やっぱり重力魔法では一番かな？」

今日初めて本格的に飛行するというのに、アクロバティックな飛行すらし始めた清水に感嘆の声が漏れた。もしかしたら昔読んだ事がある小説に出てくる主人公に匹敵するほどの才能があるのかもしれない。

「いつか皆でこんなふうにとータスを自由に飛び回れたらいいよね」

「…そうだな。いつか、皆で…」

それから一時間ほど経って、清水が帰ってくるまで二人並んで星の綺麗な空を眺めていた。

少しだけ欠けた月に、箒に跨った人の影が映った。

翌日、エリセンでは夜空を飛ぶ箒に跨った人間の影の話題で持ちきりだったという。

メルジーネ海底遺跡攻略

カミノゾンザイナドフヨウラ！ なゲームのRTA、はーじまーるよー！

前回はメルジーネ海底遺跡の本試験開始まででしたので、今回はその続きからです。

神代の都市では建物の中に入るとアイテムが置いてある事があるのですが特に欲しいものはないので全てスルーをして、ひたすら襲い掛かってくる幽霊兵を衝波で蹴散らしながら奥に見える城を目指します。

余談ですが、この幽霊兵は『魔法を受ければ自身のHPがゼロになる』という仕様なのですが、発売当初は稀に処理がバグって『魔法を受ければ自分以外のHPがゼロになる』になる事があったみたいで、魔法を使った瞬間にパーティが全滅したという報告がありました。お前のデバックガバガバじゃねえかよ。

＜戦闘に勝利した！

もちろん、現在は修正パッチで不具合は修正されているので、このように魔法で倒しても大丈夫です。

＜戦闘に勝利した！

まーだ時間かかりそうですかね。まあ、戦争中の戦場真ただ中を突っ切っているのでエンカウントが多いのは仕方ないのですが、こゝも単調だともまらないですね。やっぱりこのゲームはクソゲーだった？

：移動中は話す事がないですね。あ、そう言えばもう片方の船の墓場ですが、あちらは移動距離が長くて通路も複雑な分置いてある宝箱も多めです。金目の物が置いてあったりもするのでルタが不足している兄貴はそっちで稼ぐのも良いかもしれませんね。逆に言えばそれくらいしか良いところが無いのですが…。

＜戦闘に勝利した！

やゝつと市街地エリアを抜けましたね。ここからはエンカウントは固定以外はありません。ストレスから解放されてウレシイ：ウレ

シィ…。

市街地エリアを抜けると階段を上がって、その先の王城エリアへ入ります。ここに門番くんが居るのでちゃっちゃと倒してしまいましよう。市街地にいた幽霊兵と同じなので衝波で瞬札です。

〓戦闘に勝利した！

ナニモイウコトハナイ。それじゃあ門番くんも倒した事ですし城に入りましょう。おつ、開いてんじゃ〜ん！

「やつと着いたね…。奥に進めばいいのかな？」

「…：うん、奥の方に沢山の魂がいる。そこがゴール地点じゃないかな？」

「随分と慌ただしく女給が動き回っておるな。どうやら兵以外は襲い掛かってこぬようじゃ」

テイオ姉貴の言う通り、神代の都市での戦闘はこれで終了です。

もちろん、引き返せば無限湧きする幽霊兵くんとイチヤイチャ出来ますが経験値もまず味なので引き返す意味はないです。そのまま進みましょう。

後は奥に進んで重鎮たちから話を聞いたりして終了です。

道中のメイドさんとか文官とかからも情報を色々と聞いたりできますが、特に攻略には関係ない情報ばかりなので全スルーです。大体が神に祈ったり光教教会に対して暴言を撒き散らしてたりするだけなので。

というわけでパパッと到着です。しっかりと道順を覚えていれば三分程度でゴール地点まで辿り着けます。

〓ここが謁見の間だろうか

〓玉座には王冠を被った人が座っている。この国の王様だろう

偉い人たちが何だか話していますが倍速。話の内容を一言で表すと、満州事変ですかね？

魔族を抹札するために人間族の村を魔族の仕業と見せかけて滅ぼして、それを口実として戦争を仕掛けたんだとか。でも返り討ちにあつてこうして首都まで攻め込まれてるらしいです。清々しいまでのかませ犬っぷりですね…。

なお、村を滅ぼしたのは光教教会の司祭だった模様。やっぱり宗教はダメだな！

「酷い…。これじゃあ滅ぼされた村の人達は何のために殺されちゃったんだらうね…」

「…どこの世界でも人間は変わらねえんだな」

「光教教会…聖教教会とは何か関りがあるのかな？」

風景がぐにやくと歪んで教会の大聖堂に移動です。とは言ってもここでも戦闘はありません。

やらかした司祭が神に助力を乞うために子供たちを生贄に捧げているところを見るだけです（ニツコリ）。辺り一面真っ赤になってるんですがこれ、全年齢対象のゲームなんだよなあ…。

子供たちの命乞いも虚しく頃されてしまいましたね。なお、神は力を貸してくれん模様。神なんていねえんだよ！

「うっ…！…ここ、こんなもの過ぎます…！」

「…神に縋った結果がこれとは。子供たちは完全に無駄死にじやのう…」

「…もう終わった昔の事だけ…：…見てるだけで気分が悪い」

そして、これにてイベントは終了です。自動的に最奥の神殿に続く通路まで転送されるので、魔法陣に入ってさっさと神代魔法をもらっていきましょう。

〈通路の先に神殿が見える

〈あそこがメルジーネ海底遺跡の終着点だろうか

「おおっ、あれがゴール地点かな？ これで四つ目か。今度はどんな神代魔法なんだろうね」

「何にせよ、随分と趣味の悪い迷宮だったな。さっさと神代魔法をいただいてオサラバしようぜ」

「賛成ですう…。ちよつと精神的に疲れたので一休みしたいですね…」

〈頭になかが流れ込んでくる…：…！

〈『再生魔法』を習得した！

神殿の中央にある魔法陣に乗ればOKです。これでメルジーネ海

底遺跡の神代魔法は『再生魔法』です。このゲームでの戦闘では完全に補助系統の魔法という扱いです。

回復はもちろん、味方に素早さのバフを掛けられたり、敵の行動順を遅くしたりすることが出来る有用な魔法であり、また、再生魔法の取得で新たに使える魔法が開放されます。

特に白崎姉貴のような回復役や谷口姉貴のような補助役にとってはあるのと無いのとで天と地ほども戦闘能力が違ってきますので、プレイ予定兄貴は参考にしてください。

適性ですが、ほもくんは当然のように並です。最適なのは谷口姉貴、シア姉貴ですね。清水くんと中村姉貴は残念ながら不適で、ハジメくんとユエ姉貴、テイオ姉貴はほもくんと同じ並です。

「やりました！ やつと私にさえそうな神代魔法がきましたよ！」
「……見つけた、再生の力。これでハルツィナ樹海の迷宮に入れるかも」

「ハルツィナ樹海というと大陸の一番東の方じゃの」
「……あ、あの。もしかして大陸を横断する必要があるんじゃない？」
「移動手段があるとはいえ疲れるね……」

中村姉貴が言った通り、ハルツィナ樹海までは大陸の端と端なので移動にもものすごく時間が掛かります。大体飛行艇で三日くらいですね。センチユリーだと寄り道せずに走ったとしても七日くらいかかります。

現在が27日目なので、ハルツィナ樹海に着くころには30日目になります。

次にハルツィナ樹海の迷宮に入れるようになるのが37日目なので十分間に合いますね。

さて、それではメール・メルジーネ姉貴のビデオレターが始まります。全部ボイスを聞いてると長いのでキャンセルだ。

言ってる内容を意識すると、「立って歩け、前へ進め。あんたには立派な足がついてるじゃないか」みたいなニーサンのようなメッセージです。以上。

そんじゃ脱出しましょ。ここの脱出はライセン大迷宮の時と同じ

ように水攻めをされて、海中に放り出されます。ミレディ姉貴のアレはメルジーネ姉貴リスペクトだった…？

海の中に放り出されて、自動的に潜水艦に搭乗しました。そしてここでミニゲーム発生です。

～後ろから何かが迫ってくる！

～先ほどメルジーネ海底遺跡で見た魔物だ！

クリオネくんから逃げるゲーム、はーじまるよー！

原作では潜水艦に乗る前に襲い掛かってきてましたが、今作ではしっかりと乗り込むのを確認してから襲ってきます。やさしい。

で、肝心のミニゲームの内容ですが、ただの作業です。

迫ってくる触手を魚雷みたいなので迎撃したり躲したり、氷樞で防御したりするだけです。ただ、グリューエン大砂漠でのミニゲームとは違い、こちらは水中なので二次元的な動きをしなければならぬのと、あと触手との距離感が掴みにくいです。

油断していると潜水艦の耐久力が尽きてガメオベラとなってしまうます。

氷樞での防御は魚雷での迎撃が間に合わない場合に使いましょう。防御してもダメージは少し通るので、緊急避難的に使うのが正解です。楽しようとして防御ばかりしていると、いつの間にかガメオベラ一歩手前になってたりすることが多々あります。

時々予告線が出て、その後すぐに水流みたいなので攻撃してくるこどがあり、これは迎撃も防御も出来ないののでしっかりと躲します。たまに縦や横に薙ぎ払ってくるので気を付けましょう。当たるとガッツリ耐久力を持っていかれます。

ちなみにこのミニゲームにもスコアがありますが、特に意味は無いです。この後クリオネくんと決戦がありますが、高いスコアを取ったからと言って有利になったりする事はないので、頑張るだけ損です。

最低限の労力で切り抜けましょう。

目標をセンサーに入れてスイッチ！ どうでもいいですが、このミニゲームをやっているとスターフォックスの水中ステージを思い出し

ます。

何でこのゲームは変なところに力を入れるのか、コレガワカラナイ。

＼無事に魔物の攻撃を切り抜けた！

というわけでノーダメージでクリアです。フン、ザコカ！

辿り着いたのは少し西にある無人島で、ここが決戦のバトルフィールドとなります。波打ち際で巨大なクリオネくんがウネウネしてるので、接触すれば戦闘開始です。デカ過ぎて画面に収まりきってないですね…。

その前にメニュー画面を開いて隊列を確認しまして、ほもくん以外の全員が最後方まで下がっているかどうか、しっかりと確認しましょう。

それが終わったら連携で清水くんとティオ姉貴を組ませます。その理由は戦闘中に。

「少し話をしたいのじゃが、構わんかの？」

そして、バトル前にイベント発生です。オリ主人公の場合、ティオ姉貴は最初は自身の身の内を明かしてくれませんが、こうしてパーティメンバーに入れて迷宮を一つクリアすると自身が竜人族であることを明かしてくれます。

目の前にクリオネくんがいるのに暢気に長話をしてる暇はあるんですかね？ でもクリオネくんは空気を読めるのでしっかりと待っていてくれます。行儀が良いですね。

なお、この無人島には魔物が生息していますが、魔物がクリオネくんに近づくと触手で捕らえられてそのまま食べられてしまいます。細かいところに拘らなくてもいいんですがね…。

ウネウネする軟体生物の前で輪になって話を聞くほもくん一行：あ、牛みたいなの魔物がクリオネくんに捕まった。

なお、ほもくん一行は気にせず話を続けています。シユールすぎる。この辺りの演出は何とかならなかったのでしょうか？

「黙っていて済まなかったの。じゃが、竜人族は公には滅んだとされている一族故に軽々しく話すわけにいかなかったのは事実。お主ら

が信頼できると思ったからこそ、こうして打ち明けさせてもらったのじゃ」

あつ、良いっすよ(即許し)。皆特に気にしてなさそうですね。長々と会話してますが、一言で纏めると「私達、仲間だもんげ！」って感じですよ。

〓『ティオ・クラルス』が竜化を使えるようになった！

そう言うわけで、ティオ姉貴の竜化が解禁されました。この先きつと役立つ時が来てくれると信じましょう。

では、クリオネくんも待ちくたびれているようなので戦闘に入りましょう。

その前にユエ姉貴に吸血させてMPを全快させまして。

よしイクゾー！

〓魔物が襲いかかってきた！

さっきのやりとりを見てる身としては白々しいシステムメッセーじなんだよなあ…。ともあれ、メルジーネ海底遺跡のラスボスである『??』改め『グラトニーテンタクルス』との最終決戦です。

【急激に潮が引いていく！】

開幕で必殺技の予備動作に入るボスの屑。

まずやる事は、一番最初に行動するほもくんが要塞を使う事です。

次の敵の行動順でフィールド全体に現在のHPの100%のダメージを与えてくる『大海嘯』を使ってくるので、防御なり結界なりを使わないと即氏してしまいます。

ほもくんの要塞で対処できるので使う必要があつたんですね。

他の三人は炎属性の魔法で削っていくのですが、ここで『連携魔法』をお披露目しましょう。

連携魔法とは、戦術で連携させたキャラクターが特定の魔法を連続して使うことにより、その場で新たな魔法を追加で発動させる仕組みです。

今回は清水くんとティオ姉貴ですね。

「炎龍」

まあ、二人はユエ姉貴と違って詠唱があるのでね。敵の攻撃を凌い

でからとなります。それにしてもやたらHPが高い敵ですね。炎属性で攻めればダメージは相応に通るのですが、総HPで言えばラースヒュドラの三倍はあるらしいです。

攻撃できる箇所は胴体、左右の触手の三箇所ですが、どれを攻撃しても構いません。ミレディ姉貴みたいに部位破壊をすると隙ができるというわけではないのでね。

【巨大な津波が辺りを飲み込む！】

島ごと飲み込むような大津波ですが、当然要塞を発動しているのノーダメージです。やはり守護者の安定性を…最高やな！

「灰となりて大地へ帰るがよい！『螺炎』」

「一陣の風の前に散れ！『塵風』」

そして詠唱が完了したティオ姉貴と清水くんの番がきました。

中級の炎と風の魔法を連続して使った事で、追加で連携魔法が発動します。

【連携魔法発動】

「行くぜティオさん！」

「うむ、任せるがよい！」

「『鮮火烈風』！』」

中級同士の炎×風の魔法の組み合わせで発動する『鮮火烈風』です。威力は大体ユエ姉貴の蒼天の半分くらいですね。

これの優れたところは追加で発動するので、元となった魔法に加えてダメージを与えられるのと、MPを消費しない点にあります。

今回は中級同士でしたが、最上級同士での連携となると凄まじいダメージを追加で与えることができるので、火力源として非常に重宝します。

欠点としては若干や演出が入ることくらいです。

ちなみに最上級と中級の組み合わせでは連携魔法は発動しません。ユエ姉貴は最上級を乱射してた方が強いので、清水くと組み合わせるよりほくと組ませて反撃してた方が時間当たりのダメージ量は高くなります。

【グラトニーテンタクルスは触手を振り回した！】

「……お返し。『雷槌』」

おお、痛い痛い。単体二回攻撃に腐食効果が付いている行動です。状態異常対策をしていなければ、下手すれば一発で乙りますが、ほもくんであれば問題なく受け切れます。

谷口姉貴のおかげで思ったよりも被ダメージが低いですね。これなら防御しなくても自動回復だけで賄えそうです。やはり引き入れたのは正解だったみたいです。

ちなみに、今回の戦闘では脳筋AIではなくなり、『最もダメージを与えてくるキャラクター』を優先的に狙うようになります。つまり、最も火力の高いユエ姉貴にタゲが行きやすくなっています。

ですがユエ姉貴はほもくんと連携しているので、単体攻撃であれば今のようにほもくんがガツチリ庇えますし、範囲攻撃であつて発動までにデイレイがかかるのでその間に逃げてしまえば問題ありません。

何だつたら城郭を使って強引に攻撃を続けるのもアリです。

一発でも状態異常を喰らえばそのままジリ貧になる初見頃のボスですが、対策を立ててしまえばこの程度です。

ティオ姉貴と清水くんはそこそこの火力で殴っているので無警戒なままです。そのまま連携魔法で削っていきましょう。

ほもくんもショボイ威力ですが、一応初級の炎魔法が使えるので攻撃しておきましょう。ユエ姉貴の緋槍の10%以下のダメージしか出ないと思いますが一応ね。

【鋭い水流が発射された！】

「……お返し。『破断』」

(ダメージが) 入ってねえんだよこの野郎！

このボスは、水属性はほぼ無効化してきます。カスみたいなダメージですね。ほもくんの魔法攻撃と良い勝負です。まだ清水くんの塵風の方がダメージ出てたゾ。

MPに関しては介護士ハジメがいるので問題ないですが、そろそろマジックポーションを補充しとかないといけませんね。次の街に寄った時に買っておきましょう。一応錬成で自作も出来るのですが、素材を集める手間を考えると買った方が速いです。

【急激に潮が引いていく！】

また大海嘯ですね。ハイハイ要塞つと。ハジメくんのおかげで一回の戦闘において三回程度までなら使えるので助かります。オートアイテムが無ければ一々自分で回復しなきゃいけないので安定性も時間も損なってます。

もうほもくんはハジメくん無しでは生きていけない体にされてしまいましたね…。

「〃炎龍〃」

「〃螺旋〃」

「〃塵風〃」

【連携魔法発動】

「幸利よ、合わせるがよい！」

「そつちこそタイミングをしくじんなよ！」

「〃鮮火烈風〃！」

【巨大な津波が辺りを飲み込む！】

はいノーダメ。もう特に言う事はないですね。操作ミスをしなれば問題なく勝てるでしょう。

抱溶をしてきましたが、これもユエ姉貴が対象なのでほもくんが庇えます。そしてほもくんは状態異常無効なので腐食も窒息も効きません。うま味。

ただし抱溶は庇えるので攻撃ではあるのですが、何故か判定がデバフ扱いなので反撃は発動しません。

「〃炎龍〃」

そしてこれにて敵のHPは無くなりましたので、戦闘終了となります。

〓 戦闘に勝利した！

〓 少しだけ強くなった気がする……

「妾の炎は一味違うであろう？ 竜人族というのは伊達ではないのじゃ」

「……ん、流石。私も負けてられない」

ひとあじ派は賢いな。

あ、ちなみティオ姉貴が竜人族がどうの言ってますが、今回は特に竜化はしてないです。ぶつちやけタンクがいるのであれば人間の状態で魔法使って連携してた方が時間当たりの火力は高いですし…。

雑魚散らしには便利ですがそれはユエ姉貴と清水くんがいますし…。

完全に今回のチャートではロマン技ですね。

あ、今回のMVPはユエ姉貴です。ほもくん？　ロクにダメージを与えられてないので貢献度レースからは脱落ですよ(きくうし並感)。さて、メルジーネ海底遺跡も攻略し終わった事ですし、宗教の総本山で勧誘を断り続ける作業に今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

アーティファクトとは現在の魔法や技術では再現できない程の強力、または特殊な効果を持つ道具の事である。神代に造られたとも言われているそれは、ステータスプレートのような一部の物を除いて新たに作られる事も出回る事も無い。

だが、神代魔法を会得したのであれば話は別である。生成魔法は無機物に魔法を付与することが出来る、アーティファクトを作ることが出来る神代魔法なのだ。

「それにしても随分と色々作ったよね。このネツクレスって何に使うやつだっけ？」

「あつ、それ鈴が作ったやつ！　魔力を流すだけで“聖絶”が張れるタリスマンだよ！」

潜水艇の一室。倉庫として使える程に広いその部屋では一行が道具の整理整頓をしていた。

メルジーネ海底遺跡に行くためには夜にならないといけないとミレディに聞いたので、それまでの暇潰しと迷宮攻略に使えそうな道具の選別を兼ねての事である。

北条、シアは調理室で夕食の仕込みをしている。この二人が一行の

胃袋を握っているのだ。

今日の夕食はナポリタンにピラフ。地球組にとっては懐かしい料理。

床に無造作に置かれた数々のアーティファクト。見る者が見れば卒倒しそうな光景である。

「おっ、これは南雲が作った卑劣爆弾じゃねえか。一応持つてくか」

「卑劣爆弾？ その板はどう見ても爆弾のようには見えぬが…」

「それには空間魔法を付与してあって、中に大量の爆弾とこれと同じ板が複数枚入れているんだ。さらにその板にも大量の爆弾と同じ板が複数入れている。これを複数回繰り返してある。一度投げると連鎖して空間魔法が解けて、中身が尽きるまで爆発し続ける仕組みになってるんだ」

「お、お主…顔に見合わずえげつないものを造るのう…」

この板一枚でどれほどの威力が出るのか考えたくなかったティオは目線を逸らして他のアーティファクトを吟味する。おお、と声を上げて白い花の形をした飾りが付いた簪を手取る。

「見事な髪飾りじゃのう…。これを作ったのは誰じゃ？」

「あ。そ、それ、私が作ったやつ…」

「おお、恵里が作ったのか。して、どのような効果が？」

「挿した瞬間に髪の毛を空間魔法で根元から切り落とす効果が…」

試しにその黒い髪に挿そうとしていたティオの手が文字通り間髪で止まった。

あと一瞬でも遅かったら丸刈りになるところだった。冷や汗が頬を伝う。ティオは知る由も無かったが、簪に付いている花のモチーフはスノードロップと言う花で、イギリスのある地方では死を象徴する花として忌み嫌われているとか。

「あ、あぶなッ…！ 危なかったのじゃっ…！」

「ほ、本当は天之河くんに近づく人に贈ろうと思ってただけ…その予定も無くなったから今はただのジョークグッズに…」

「ジョークにしては質が悪すぎるのじゃ！ もしやここにがあるものはそのテの物ばかりというわけではなからうな!？」

「……これとかどう？ シアが作った体重が半減する腕輪……」

「……一度着けたら外す時が怖いのも」

うがー、と心の中で吠えるティオにユエが金属製の腕輪を渡す。シアは生成魔法、重力魔法、空間魔法のどれも赤点だったのでこの程度のアーティファクトとも呼べないようなものを作るので精一杯なのだ。

その後も刺さったら呪われるナイフやら空間ごと切り裂く剣やらヘビーマシンガンやら火炎放射器やらの危険物の間を歩き回るティオは、里への報告はどうしたものかと頭を悩ませることになった。

幕間：それでも人は進み続ける（前）

メルジーネ海底遺跡。それは海上の町エリセンから西北西におよそ三百キロメートルほど進んだ海中に存在するという七大迷宮の一つである。

ウルの町で食料などを補充して、新たに仲間を加えてから十日ほど経ったその日、北条一行は潜水艇に乗り込んでその地点に進んできた。

潜水艇アイゼンヴァール。オルクス大迷宮の最奥、オスカー・オルクスが使っていた工房で約二週間ほどかけて、設計資料集を広げて皆で額を突き合わせて作った全長五十メートル程度の潜水艇である。錬成によつて素材の加工や溶接などをショートカット出来たのが大きかった、とは幸利の言だ。

錬成師の指輪による効果も大きかった。大まかな加工を北条や幸利が、各種部品などの精密な錬成が必要な部分はハジメが担当することで作業が普通の何倍もの速さで進んだのだ。

なお、内装の間取りやシャワールームなどの施設は女性陣が主に考えたため、潜水艇とは思えないほどの内部空間になっている。キッチンなども完備しており、操舵室や通路、倉庫以外は普通の家とさほど変わらないほどに快適である。

「西北西に三百キロ…GPSとかがあれば良かったんだけど。今どれくらい進んだのかなあ」

「え、えーつと…、出発したのが八時で今が十二時少し前。大体時速三十キロで進んでるから…おおよそ百二十キロメートルくらい？」

操縦桿を握るハジメが方位磁石を見ながら進路を微調整する。当然ながらこの世界にGPSや距離を計測する機械などは無いし、潜水艇にも装備されていない。メルジーネ海底遺跡に行くためには、この凄まじいまでのアナログ的な手段で距離と方角を計算しなければいけなかった。

ハジメの問いかけに恵里が腕時計を見ながら答える。太陽光で充電できるタイプの腕時計なので、トータスに召喚されてからも電池が

切れることなくずっと動き続けていた貴重品だ。

正確に時間の分かる時計は非常に有用であり、クラス全体でトータスに持ち込めた数は全部で六つ。各グループで一つずつ持つても二つ予備が出来る計算である。

「それにしても便利な船じやのう。魔力を使うが速度は自在、船内は明るく、海中に潜ることも出来るとは。妾はそれなりに生きてはおるが、このような船は初めてお目にかかる。お主等の世界の船とはこういうったものが標準なのかの？」

透明な水晶で出来たガラス越しに見える景色を楽しみながら興味深そうにティオが言う。

ティオ・クラルス。ウルの町で出会ってそのまま旅の一行に加わることになった謎の女性である。黒髪に黒い着物ということ、もしや日本に関わり合いがあるのでは？と疑問が湧いたが、正真正銘トータス生まれトータス育ちらしい。

勇者一行の調査をするために隠れ里的な所から出張してきたらしい事以外は何も分からない。だが魔族やエヒトなどは関わり合いが無いようなので問題無しと結論付けた。今ではすっかり溶け込んで、立派な旅の仲間となっている。

「いや、流石に地球でもこんなのは民間では使わないよ。七大迷宮の一つがメルジーネ海底遺跡っていう情報があったからそのためだね」「成程……民間では、と言う事は民間以外では使われておるとい事じゃな。恵里の持っている時計と言ひ、チキユウという所は随分と技術が進んでおるようじやのう」

ふむふむ、と一人頷いて地球に想いを馳せるティオ。長く生きてきた彼女にとっても異世界の来訪者と出会うのは初めてなのだ。この世界と異なる文化、技術に興味を示すのは当然と言えた。

鳥よりも速く空を飛ぶ飛行艇。獣よりも速く、休みなく地を駆ける四輪駆動。どれもトータスにとっては有り得ないような技術である。聞けば地球という所には魔法は無いらしく、その代わりこういうった機械の技術が発展しているという。

かつては神の怒り、権能とも言われた雷でさえ地上に引き摺り下ろ

し、今では生活の糧としていらしいその知恵と勇気と不遜さ。

「どうしたの衛？ ……うん、分かった。今から行くね。それじゃあ。

……二人とも、ご飯が出来たから来てってさ」

「わ、分かった。じゃあ錨を下ろすね」

「ほほう、昼餉とな。してハジメよ、今日は何が出てくるのじゃ？」

これであれば、と思ったところで操舵室に備え付けられた無線から「昼御飯が出来た」という連絡が来たので、テイオの心は今日の昼御飯の方に向かう事となった。この一行の調理担当である北条とシアが作る料理はどれも美味しいのだ。

「今日はエリセンで獲れた魚を使ったムニエルと鳥の炊き込みご飯だったかな」

「テイオさん、すっかり食事が楽しみになっちゃってるね…」

「旅の娯楽と言うやつじゃな。まさか、旅中にあっても料理店にも劣らぬような料理を食せるとは思っておらなんだ。ところでムニエルとはどういったものなのじゃ？」

「えーつと、確か焼き魚の一種で——」

錨を下ろすのはボタン一つで簡単に行えるようになっていた。波に流されないようにしっかりと錨が下りたのを確認した後、三人は操舵室から出た。

今まで何度繰り返しただろうか。手を伸ばしてもその先にある栄光を掴めず、ただ手に入らないものを見て唾を飲むだけ。決して届かないその温もりにもそれでも手を伸ばすのは、ただ満たされたいと想う自身の欲望の発露であった。

そして、今日も昨日と同じように手を伸ばす。誰にも気付かれないように。浅ましいと自覚できるこの欲望を満たすために。少女はその細い指で——

「そこまですユエさん！ 卑しいですよー！」

「あう」

——湯気を立てる出来立ての料理を摘まもうとしたところをシアに見つかって、フライ返しで手を叩かれた。

潜水艇アイゼンヴァール。その厨房では本日の昼食が出来上がりつつあった。メニューはエリセンで獲れた新鮮な魚を使ったムニエル、ククルー鳥の肉を使った炊き込みご飯、野菜サラダの三品である。「……また私は……何一つ得ることが出来なかった……」

「そんな悲壮感を出してもやってる事はただの摘まみ食いですからね？ このシア・ハウリア、厨房を預かる身として不逞は許しませんよ！」

しよんぼりと肩を落とすユエに、シアが腰に手を当ててむんつ！と息巻いた。奈落で気配を消す術を覚えたユエの隠形を以てしても厨に立つシアを抜けたことは無い。今まで全敗中である。

ちなみに、現在黙々と盛り付けをしている北条は気配を消す術を覚えていない。むしろ気配を増大させる術を覚えており、それによって敵を引きつけているのだ。彼らしい成長の仕方である。

「……シアのケチ」

「ケチで結構です！ もうすぐお昼ご飯なので我慢してください！」
「むう……」

すげなく追いやられたユエは北条の袖をくいくいと引っ張っておねだりを開始する。完全に餌を強請る犬猫のそれだった。

「マモル……私、もう我慢できない……」

「…そうか」

パコツ、と音を立てて土鍋の蓋を開けるとふわりと漂ってくる炊き込みご飯の香ばしい匂い。箸で一口分だけ摘まんで、火傷しないようにフーフーしてからユエの小さい口に放り込んでやる。

「……んっ、うまうま……」

「もうっ！ マモルさんもあまりユエさんを甘やかさないでください！」

それを見てぶんすかと怒るシア。ここ最近ではよく見られる光景である。

オルクス大迷宮の拠点では毎日北条の手料理を食べ、立ち寄った様々な町の料理を堪能し、さらにキャンプで地球のレシピを味わい、食の喜びを知ったユエは少しだけ食い意地が出来ていた。なお、食べ専なので自分で料理は出来ない。

「新しいお水が出来たよ。まもるん、どこに置いとけば…つてあれ？ シアシア、そんなにお冠でどうしたの？」

「お、良い匂い。どうせまたユエさんが摘まみ食いしようとしてシアさんに止められたんだろ。そんで北条の方に行つたと。いつもの事じゃねえか」

シアが二人に詰め寄っていると扉が開いて、濾過された水をなみなみと入れたタンクを持った鈴が入ってきた。トータスに来て身体能力が向上した今では二十キロ程度の荷物であれば軽々と持てるのだ。さらにその後ろからは頭に鷲のような魔物を乗せた幸利が続いて入ってくる。

「どうやらこの魔物は海の上であろうが問題なく居場所を探知できるようだ。」

「…違う。私がやっているのは食の探求…断じて摘まみ食いではない」

「物は言いようですね…。全く、油断も隙もあつたものじゃありませんよ」

「悪いな北条、ヘルメスにも飯を食わせてやりてえんだが何かねえか？」

「…すぐに用意しよう。リンリン、水は冷蔵庫の横に置いてくれ」「りょうか〜い！」

ヘルメスとは伝令に使っている、現在幸利の頭に乗っている魔物（♂）の名前だ。いつまでも名無しの魔物では可哀想と言う事で、うろ覚えだった知識から伝令の神であるヘルメスの名前を引つ張り出してきてそのまま名付けたのである。

余った肉を食べやすいように切り分けていると丁度よくハジメ、恵里、テイオの三人がやってきたので、そのまま八人と一羽で食事を開始した。

「ふう…今回も美味であった。ご馳走様、なのじゃ」

「炊き込みご飯…美味しかった…また食べたい」

「土鍋で炊いたやつとか初めて食ったかもしれないねえ…」

「潜水艇の中でこんな美味しいご飯が食べれるなんて、私達ラッキーだね」

「もしかしたら僕達がグループの中で一番良いものを食べてるのかもしれない…。いやあ、何だか申し訳ないなあ」

「食事が終わってお茶で一服しながら口々に感想を言い合う。

旅の料理と言えば肉を焼いただけとか適当に材料を煮詰めただけのシチューとか、そういうものを想像していたので、初めてキャンプをした時に手作りのハンバーグが出てきた時は驚いたものだ。

「食べた食べた。いやあ、まもるんは料理上手ですな。家事もできるし裁縫もできるし…あれ、もしかして鈴、女子力でまもるんに完敗してる?」

「…考えてみれば確かに…将来的にマモルの妻になる私としては由々しき事態かも」

「あはは、ユエユエは冗談が上手いな。でもでも、ちよつとは女子力アップルとかした方が良くのかもね。ここまで溜めてきた鈴の女子力を解放する時がついに…!」

「いや、そもそも谷口に女子力なんてねエ——痛エ! 無言で足を蹴るな!」

「今のは幸利さんの自業自得です。でも正直、レシピの多さでは私も勝ってませんからね…。学ぶ事は多いです」

最近では一部の間で「北条衛、生まれてきた性別を間違えてきた説」すら流れ始めていた。なお、好き放題言われている当の本人は皿を洗うために席を外しているのでそれを知る由は無い。

昼下がりの時間、これから迷宮に挑みに行くとは思えない程に弛緩した空気が流れていた。

「そう言えばメルジーネ海底遺跡についてだけど、テイオさんは何か知ってるか? こう、なんだ、古い伝承みたいなのとか」

ヘルメスの毛繕いをしてやりながら幸利が話題を変える。このま

ま行けば日が沈む頃には目標地点まで辿り着く計算である。つまり、今がゆつくり出来る最後の機会だ。

「いや、海底遺跡については妾も初耳じゃ。故郷の集められた情報にも一切記載されておらぬ。七大迷宮については一般的に知られている知識と差はあるまい。じゃが、この辺りの海にはそれとは別に伝承があつてのう……」

「伝承？」

「うむ、遙か昔からこの辺りの海には悪食の魔物が現れると言う。真偽は不明じゃが……それは巨大な体を持ち、船ですらも一口で飲み込んでしまうとか」

「ぐ、ぐくり……」

「クラーケンみたいなものかな？ どの世界にもそんな伝承はあるんだね」

古今東西、海にまつわる伝説や伝承と言うのは非常に多い。それは人々の生活が海と密接に関わっているからであり、未知であるものが多い海への畏怖からくるものである。そして、それはトータスにおいても変わらないらしい。

船を襲う海魔というのは海にまつわる話の中でも一等にありふれた話だ。日本で十数年生きていれば大抵はその手の物語は聞くだろう。唾を飲むシアとは違って地球組は気楽なものだった。

「まあ、恐らくは漁師などが己を戒めるために作り話をしたか、大きな魚を見た話に尾鰭がついたかのどちらかじゃろうし、そこまで真剣に考える必要はなからう。心配せずに与太話として聞き流しておくがよい」

「あつ、知ってる！ こう言うのってフラグて言うんでしょ？ 絶対迷宮のボスとして出てくるパターンだよコレ！」

「一応それが存在すると仮定して物事を進めた方が良さそうだね。こう言う時って大抵は嫌な予感が当たるから……」

例えばグリューエン大火山であれば「あの山には竜が住んでいる」という言い伝えがあるけど所詮は伝承だ、心配するな」と説明されるようなものである。

その場合、まず間違いない最奥で出くわすような羽目になっていただろう。お約束というやつである。

「…茶のおかわりはいるか？」

「おお、済まぬ。ではもう一杯頂こうかの。…っと、あの辺りにある伝承はコレくらいじゃな」

「マジか。つー事はミレデイのヒントが無けりや永遠に見つからねえって事じゃねえか。性格が悪いにも程があんだろ解放者…あ、俺にも茶アくれ」

「少なくともオスカー・オルクスの手記にはメルジーネ海底遺跡の場所のヒントは無かったよね。あ、私もお茶いいかな？」

その後、一行はしばらく談笑をしてから行動を再開し、当初の予定通り日が沈む時間には目的の地点まで辿り着くことに成功する。

少し早めの夕食と言う事で、六時に食事をとった後、月が出るのを確認して一行は潜水艇の甲板に出た。

「おー、見事な満月だー！」

「今更だけどこつちにも月と太陽はあるんだね」

「月齢も地球とあまり変わらねえみたいだしどうなってんのかねえ」

今日は満月。雲によって見え隠れする金色の月とその下の海面に描かれる波打った金色の線が美しい。星々も綺麗に瞬いており、日本では滅多に見ることができない光景である。

トータスには地球と変わらず太陽と月が一つずつ存在する。日照時間も地球と比べて差はなく、月齢も存在する。一日は大体二十四時間と異世界に来たとは思えない程に都合よくできていた。

細かい事はさて置き、北条はグリューエン大火山で手に入れたペンダントを取り出して月に向かって翳した。

グリューエンのペンダントと月の光が導いてくれるというミレデイの助言に従っているのだ。エリセンで一泊した時にも翳してみたが無反応だったので、もしかしたら然るべき場所で行わないと反応しないようになっていたのかもしれない。

「……………」

ユエがさり気なくピツタリと身体を寄せながら北条が掲げたペン

ダントを覗き込む。

ミレディから得られたのは「月の光とグリューエン大火山の証に従えばいいよ」と言うかなり手抜きの助言だった。

ペンダントにはランタンを持った女性の姿が描かれていて、何故かランタンの部分だけ穴あきになっていたので、「もしかしたらこの穴に月の光が通れば良いんじゃないか？」という考えの元こうして月にペンダントを翳しているのだ。

「…溜まっている」

「あ、本当だ。ランタンに光が溜まっていつてる。このゲージが溜まり切れればいいのかな？」

「鈴にも見せて！…おおう、これはファンタジーですな！」

ハジメがユエの反対側を陣取り、鈴はユエに負けじと背中へのしかかって肩越しに覗き込む。

その後もがやがやと七人が北条の周りに集まってくるものだから、すぐく窮屈であり密であった。

やがてランタンに光が限界まで溜まるとペンダント全体が光り輝いて、一筋の光が海中に向かって照射された。

「この光の先にラピュ…じゃなかった。メルジーネ海底遺跡があるんだね」

「ミレディさんの言う通りでしたね。何だかロマンチックですう…：ライセン大迷宮とは違って」

「ライセン大迷宮…うっ、頭が…！」

「一体ライセン大迷宮で何があったのか気になるのじゃ…」

きつとこの光が示す先にメルジーネ海底遺跡があるのだろう。ライセン大迷宮の入り口のそれとは月とスツポンである。潜水艇の中に入っても光は消えないので、どうやら一度ランタンゲージを溜めればそれで問題ないようだ。

「それじゃあ出発しようか。持ち物の確認は大丈夫？」

「武器良し！ 防具良し！ アーティファクト良し！」

「眼鏡のスペアも良し！」

「…お弁当も作っておいた」

「自信作ですよ！ 力が出るようにお肉多めです！」

「……楽しみ。バナナはおやつに入る？」

「キーー！」

「お前ら遠足気分かよ！ あ、やべ。ヘルメス送つとかねえと」

「まあ、良いではないか。しっかりと肩の力が抜けておる証拠じゃ」

操舵桿を握るのは意外にも一番操作が上手かった恵理である。ちなみに、車や飛行艇を含めて一番下手なのは鈴だった。もう二度と握らせないと皆が思う程の腕前であった。

さり気なく混ざった鳴き声を聞いてヘルメスを飛び立たせる事を忘れていた幸利が慌てて甲板まで出て行く。魔物と言うだけあって、ヘルメスは三百キロ程度であれば休み無く飛び続けることができるので、途中で海に墜落してしまうという心配は無い。

ペンダントから放たれる光を頼りに海中を進んでいくとやがて岩肌に通り着き、軽い振動と共に岩肌が左右に割れて入り口が現れる。

「なんつーか、いかにも隠しダンジョンって感じの入り口だな」

「ここから先は魔物が出る事もあるだろうし、気を引き締めていこう」
一行を乗せた潜水艇が暗い洞窟の中に入っていく。

メルジーネ海底遺跡の攻略開始である。

幕間：それでも人は進み続ける（中）

「……なあ、この通路、いつまで続くんだ？」

「さてのう……。おお、『れーだー』に敵影が映つとる。ほれ幸利、出番じゃぞ」

「へいへい……」

メルジーネ海底遺跡に突入してから早三十分。ゲツソリした様子で幸利が愚痴た。

入り口に入った瞬間に激しい水流に流されて長い水路に流れ着いたのは良いものの、アイゼンヴァール号はただひたすらに変わり映えない暗い水路を進んでいた。

時々水生の魔物が出てくるが、それは幸利の闇魔法で十分追い払えるレベルであり、特にこれと言った障害もなく順調に進めていたはずだ。

だが、ペンダントは発光しているが光線はすでに放っておらず、進むべき方向も分からない状態であった。

空間魔法を付与したアーティファクトがあるので酸素については心配する必要はない。一月くらいであれば休まずに潜航を続けることが出来る。

食糧についても同様、宝物庫に相当な量が保管してある。宝物庫に入れた食料は鮮度が落ちないという嬉しい効果があるので、生ものもたくさん積んであった。

「…あ、あの、もしかしたらこの通路、円環になってるんじゃないかな？」

「エリリン、それ本当？ 鈴には真っ直ぐ進んでるようにしか見えなかったけど…」

「方位磁石はここでは役に立たないみたいだし、操縦してる中村さんの感覚が一番信じれるのかな？」

恵里は先ほどから水路を進むときに時々操縦桿を僅かに右に傾けていた。凸凹した岩肌のお陰で分かりにくいのが、この水路は少しずつカーブしているような気がしたのだ。

「……なら確かめてみるのが一番。『破断』」

「…目印か」

「おおく、成程！ 確かにこれなら同じ場所を通ってもすぐに分かりますね！」

ユエが水の魔法を使い、水路の壁の目立つ場所に十字の目印を刻み込む。

こうしておけばシアの言った通り、同じ場所を通ることになってもすぐに気付けるだろう。

そのまましばらく水路を進んでいくが、海の中と言うだけあって凄まじいまでの静寂である。

さらに三十分ほど経ち、一行の目に飛び込んできたのは先ほど付けた十字の目印。

つまり、この水路は恵里の言った通り円環になっていると言う事だ。

「途中に分かれ道とかも無かったし…これどうするんだらうね。引き返せるかなあ」

「ふむ……。岩肌には何かしらの紋様が刻まれておったのじゃが…」

「紋様？」

「うむ、このような紋様じゃ。うろ覚えで申し訳ないが大体この形で間違いなからう」

参ったなあ、と言う風にハジメが頭を搔くが、ティオの言葉に目を瞬かせた。細かく周囲を観察していなかっただったのでそんなものがあるとは気付かなかったのだ。

ティオが紙に書いたのは五芒星の頂点から糸で吊るすように三日月が描かれた紋様。

その特徴的な紋様には見覚えがあった。オルクス大迷宮の奥にあった資料に描かれていた解放者のシンボルマークの一つ。

「これは…まさか！ 伝説の…！」

「ストリングプレイスパイダーベイビー！」

「…トータスにも存在したか」

「いや、三人とも何言ってるんですか!? メルジーネの紋様ですよこ

れ！」

驚愕する男子三人にシアのツツコミが入る。実際三日月を縦の楕円にすればそれっぽく見えなくもないので、元ネタがちょっとだけ分かる鈴と恵里は嘖き出しそうになった。ユエとテイオは頭に？を浮かべている。

「ゴホン！ つ、つまりここはちゃんとメルジーネ海底遺跡って事だよねエリリン！」

「う、うん！ それじゃあ次に紋様を見つけたら側に付けるね！」

鈴と恵里が笑いそうになったのを咳き込みながら誤魔化して強引に話を進める。

五、六分程度進むと、テイオが言ったようにメルジーネの紋様が分かりにくく刻まれていたので、恵里が見事なテクニクでピタリと側に付けた。

「……確かにメルジーネの紋様。私とマモルが夫婦生活を送った愛の巣にある資料に載ってたのと同じ」

「甘いよユエユエ、すでにあそこのベッドは鈴によって侵略済みなのだ！ ところで話は変わるんだけど、まもるんの使ったベッドと布団で寝たという事はつまり、実質的にはまもるんに抱き枕にされて寝たという事と同じだよね！」

「……むっ。確かに一理あるかも」

「いや、一理もねえよ。お前らの頭の中はどうなってんだ……。で、この紋様にペンダントを近づけてみればいいのか？ 仕掛けとしては王道だが」

「ガラス越しでも大丈夫なのかな？ まあ、ものは試しだよ。衛、お願い」

「…分かった」

ユエと鈴の頭がおかしいやとり呆れつつ、幸利がガラス越しにメルジーネの紋様をじっと見つめる。この二人は北条を挟んで睨み合うことがあるのだが、こういう話題になると途端に気が合ったりするのだ。

こう言う時は余計なツツコミを入れずに適当に流して強引に話を

進めるのが一番である。

目を凝らしてみるが、紋様は特別何か魔力を感じたりとか、そう言った事は無い。至つて普通(?)の紋様である。

ハジメに頼まれた北条がペンダントを近付けるとランタンから光線が放たれ、それを受けた紋様が輝きを放ち始めた。どうやらコレで正解だったらしい。五芒星であるのなら紋様は五つあるのだろう。その後もゆっくりと水路を探索して紋様を見つけてはペンダントを翳して光を灯していく。

おおよそ一時間程度で五つの紋様を輝かせると、ズズンと重い振動が伝わってきた。どうやらどこかの壁が動いて先に進めるようになったようだ。絵に描いたようなRPG的迷宮に少し感動しつつ先へと進む。

「これ思ってたんですけど、こういう船がない人はどうするんでしょうね……」

「……空間魔法の取得が前提。だからそれを使うのだと思う」

考えなしで突っ込めば、海人族と言った水中でも生存できる種族以外はそのまま溺死と言う事も十分にあり得る迷宮である。もしかしたらこの状況に対する手段を考えるのも試練の一つなのかもしれない。

順路を進んでいくと下り道になっており、突如浮遊感と共に潜水艇が落下。そのまま水中ではありえないような速度で船首から地面に叩きつけられた。それはまさにエレベーターの落下事故のようであった。

「……!」

「んっ」

「うわっ!?!」

「きやつ!」

「うひいっ!」

「ぬわ——っ!」

当然予測できない衝撃に備えているはずもなく、バランスを崩して転倒したり尻もちをついたりする者が続出した。例外なのは北条と

テイオくらいである。北条はとっさにユエと鈴、ハジメを器用に抱えて膝で勢いを吸収して事なき事を得る。

テイオはシアと幸利を抱えることに成功したが勢いを殺す事に失敗して、もみくちやになって転がった。その際に運悪くテイオの髪が鞭のように幸利の目を叩き、シアの膝が幸利の鳩尾に突き刺さった。

そして誰も庇える位置に居なかった恵里は操縦桿に勢いよくぶつかって眼鏡が割れた。

「ふう、危ないところだったよ。ありがとう衛」

「……んっ、助かった。さすがマモル」

「ちよつとユエユエ！ どさくさに紛れてまもるんの服に手を入れるなんて……うわあ、すごい腹筋……」

(…くすぐつたい)

北条がぐるりと辺りを見回すと、慌てて体勢を立て直すシアとテイオ、倒れて痙攣したまま動かない幸利、蹲って肩を震わせている恵里が見えた。

「ご、ごめんなさい幸利さん！ 今思いつき入りましたよね!？」

「ぢ、ぢぐじよう…なんで俺は何時もおんな役回りなんだ…!」

「すまぬ、不覚を取った…怪我はないようじゃの」

美しい女性二人ともつれ合って倒れ込むという状況。主人公であればムフフな展開になっていただろう。実はちよつとだけ期待していたのだが結果はこれである。

現実は厳しかった。ラツキースケベなんて無かった。

割れた眼鏡を握りしめて呪詛を吐いていた恵里は、ハジメがその場でパパッと鍊成を用いて修理することで元に戻った。

「…散々な目に遭った」

「南雲くんが居て助かった…」

「あ、あはは…。どうやらここは水が入ってこないみたいだね。ここからは歩きかな？」

どういう仕組みか、落下した先には水のない空洞になっているようだ。見える限りでは魔物は居ないので潜水艇から降りて徒歩で進む事になった。北条を先頭にしてぞろぞろと降りていく。

「息は普通にできるみたいだな」

「おおく水が落ちてこない。ファンタジーな光景だけどどうなってるんだろうね」

「……」

トコトコと北条の側に寄って天井を見上げる鈴。

上を見ると天井には船が落ちてきた穴が開いており、そこには水が揺蕩っていた。

鈴の言う通り不思議な事に穴から下に水が落ちてこないが、それは一体いかなる魔法によるものなのか。

首を傾げていると突如として北条が鈴の肩を掴んで抱き寄せた。

うえっ!? と奇声を上げる鈴が一瞬前に居た場所を水のレーザーが薙ぎ払っていく。

「…敵だ」

「あ、ありがとうまもるん…」

「……むっ。スズ、ずるい」

現在の鈴は北条の右腕に抱かれて身を預けており、構図としては騎士に護られるお姫様といった状態である。自分から背中に抱き着いたりすることはあれど、こうして北条から（経緯はどうであれ）抱きしめられるのは初めてであった。

なお即座に障壁を展開して全員を攻撃から守っているユエは、オルクス大迷宮で同じような経験を何度かしていた。それでも気に入らないものは気に入らないのだ。

「はいはい、それじゃあお掃除するね」

「汚物は消毒だ〜!」

「うええ…気持ち悪い…」

鈴がドギマギしている内にハジメ、幸利、恵里の三人が火炎放射器を使って天井を焼いていく。

天井にはフジツボのような小さい魔物がびっしりと貼り付いており、それらが水を使って攻撃していたのだ。幸い炎には弱かったようで、数分もしないうちに魔物は全滅した。

「随分と変わった魔物でしたがテイオさんは何か知ってますか？」

「いや、初めて見る魔物じゃ。恐らく迷いこんで来たものを不意打ちで仕留める番人と言ったところであろうな」

「マジで？ 頭ミレデイかよ」

「集合体恐怖症の人には効果覲面だね…。衛、終わったよ」

「…分かった。あつちか…」

魔物を処理し終えた瞬間に鈴を開放して、奥に続く通路があったのでそちらに向かっていく。もう少しこのままでもよかったのになく、と鈴は内心で愚痴た。

膝のあたりまで海水が溜まっている通路には手裏剣のように飛来するヒトデ型の魔物や海蛇のような魔物がいたが、北条に叩き落とされ、ユエの魔法に貫かれ、時にはシアにホームランされて容易に蹴散らされていった。

オルクス大迷宮の魔物とは比べ物にならない程に弱く、一々立ち止まって相手をするまでも無い。おそらくこの程度であればトータスに來た当初の状態でも撃退できただろう。

「お、ようやく通路が終わったな」

「何かありそうだね…。気を付けて行こう」

相変わらず海水が膝まで浸かってしまっているが、見通しの良い大きな空洞に出る。

そのまま周囲を警戒しながら進んでいくと、全員空洞に入った瞬間に入り口と、反対側に見える出口がゼリーのような壁で覆われた。

「…これは」

「何ともブヨブヨした壁ですねえ。一発ぶちかましちやいます？」

「…待て」

しげしげとゼリー状の壁を眺めていると、シアがバルムンクを素振りし始めた。確かにシアの強化魔法によってバルムンクをフルスイングすれば鉄の扉であっても破壊できるだろう。

だがそれは北条に手で制される。おもむろに懐からナイフを取り出すと、壁に向かって投げる。

ズプリ、と抵抗なく飲み込まれたナイフは肉が焼けるような音を出して溶けていった。

「ぎ、酸だー!」

「…ぶちかまさなくて良かったですう」

「強く叩けば飛び散っていたであろうな。となると、ここは魔法か、もしくは先ほど使っていた火を噴く筒で焼き払うのが正解じゃろうな」
「……ん、それなら私がやる」

もしもあのまま叩きつけていたら金属をも溶かすゼリーを浴びていたかもしれない。それを想像してシアは顔を青くした。初めて見る物には迂闊に触ってはいけない事を学習した瞬間である。

物理攻撃は悪手と言う事で、ユエが炎の魔法を使って攻撃を試みる。水が蒸発するような音と共にゼリーが焼けていくが、その瞬間に天井から飛び出してきた触手が襲い掛かってきた。

「…させん」

「『聖絶』!」

一瞬で触手の軌道を見切った北条がユエを抱えて回避する。盾で受け止めなかったのは触手が入り口を塞いでいるゼリーと同じもので構成されていると判断したからだ。その判断は正しく、空振った触手が岩肌につつかると、先程と同じ肉が焼けるような音がして岩が溶けていった。

一方で鈴は瞬時に発動させた『聖絶』で皆を覆うドームを作って触手を防いだ。握られているのは鈴の身長よりも少し長めの杖。結界魔法の発動を補助する機能に全振りしたアーティファクトである。さらには杖だけでなく、服や靴の装飾、髪留めの紐でさえ生成魔法を使って空間魔法やらを付与しており、その全てを結界魔法に特化させてある。そのため、結界魔法だけに関してはずでユエを超える性能を発揮していた。

鈴だけではない。シアに関しては身体強化魔法を、ハジメであれば錬成を、幸利であれば闇魔法を、恵里であれば降霊術をそれぞれ補助するアーティファクトを全身の至る所に装備している。

生成魔法を手にした事でテンションが上がり、オスカーの拠点で調子に乗ってアーティファクトを作りまくった結果がこれだ。だが、そのお陰で戦闘能力が大幅に上昇しているので結果オーライである。

アテイアテイの実際の全身アーティファクト人間、と言うのがハジメの漏らした感想である。

「あく、お姫様だっこだく！ ユエユエ良いなあ〜！ あつ、もしかして聖絶を解いたら鈴にもワンチャンあるかもしれない…？」

「す、鈴！ これ無くなったら私達も溶けちゃうから解かないでね!？」
「って言うか何か結界が溶けてきてねえか？」

「すごいジュウジュウ音が鳴ってるね」

横抱きにされているユエを見てブーブーと文句を言う鈴。そうしているうちに結界から嫌な音がして少しずつ端から溶けていく。それを見て派生技能の「+連続発動」でさらに内側に結界を展開するが、このままではキリがないだろう。魔力は無限ではないし、連続で発動させ続けられどこかで集中力が途切れてしまう。

「仕方あるまい。ここは妾が一肌脱ごうぞ」

パンツ！ と扇を広げながらティオが魔力を高まらせた。この扇は船の中で渡されたアーティファクトであり、ティオに適性がある炎と風の魔法威力を高めてくれる効果があるのだ。

ちなみに何故扇なのかは「何だか鉄扇とか使って戦いそうな見た目だよな」と言われたからである。

「灰となつて消えよ！ 〃螺旋〃」

本来なら必要のない詠唱をして魔法を行使する。詠唱する事で魔力の消費を抑えることが出来るので一石二鳥だ。放たれた炎の渦が触手を焼いていくが、ティオの眉が顰められて「むっ」と声が漏れる。

「助かった〜！ さつすがティオさん!」

「ふむ、鈴の結界が溶けている故よもやと思うたが…どうやらこやつには物質だけでなく魔法を溶かす性質もあるようじゃな」

「マジかよ！ そんなのアリなのか？」

「……ん、確かに当たった魔法が弱まった。ティオの考えは正しいと思う」

北条に抱えられたユエがティオの意見を肯定する。

先ほどユエが使った魔法は「緋槍」。炎で形作られた槍を発射する中級程度の魔法だ。威力もそこで連射が効くので、オルクス大

迷宮では散々使ってきた魔法であり、ダメージ感覚は完璧に理解していた。

だが、ゼリー状の壁に当たった瞬間にいつもとは違う感覚があった。イマイチ威力を発揮しきれていないような不思議な感覚。そして鈴の結界が溶かされるのと、テイオの「螺旋」が触手に当たった瞬間に勢いを失っていったのを見て確信したのだ。

触手による攻勢が止まる。これ以上は攻めきれないと判断したのだろう。

天井や壁の亀裂から触手と同じ材質であろうゼリーが溢れ出し、空中で集まって巨大なクリオネのような姿になった。おそらくこの魔物が入り口を塞ぐ壁を作っていたと判断できた。

「おお、クリオネみたいで綺麗だね。すぐインスタ映えしそう！」

「は、映える…のかなあ？」

「物理攻撃はこっちが被害を受けかねない。かといって魔法での攻撃も減衰させられる。厄介だね。となれば…」

「火炎放射器の出番ってわけだな。魔法の炎じゃねえから効くはずだ」

「よし、私もやっちゃいますよ！ ハジメさん、私にも一つください！」

行動は素早かった。ハジメは宝物庫から火炎放射器を四つ取り出すと、幸利、恵里、シアの三人に配って自身も構える。防御に関しては鈴がいるので問題ない。結界が溶かされても内側に順番に張って行けば魔力切れを起こさない限りは凌ぐことが出来る。いざとなればユエも結界を張れるし、北条も短時間であれば可能だ。

後は手持ちの火力で押し切れるかだけ。魔法は減衰されるとはいえ通じないわけではない。となれば必要なのは減衰される間もなく焼き尽くすほどの圧倒的な火力のみである。

「吹き荒べ頂きの風…燃え盛れ紅蓮の奔流！ 『嵐焰風塵』」

四人が火炎放射器で気を引いている内にテイオの魔法が完成する。扇の一振りで解き放たれたのは直径十メートル程の炎の竜巻。本

来であれば数十メートル級まで大きくすることが出来るのだが、場所を考えて控えめに発動させていた。

クリオネは当然、触手で防御をして本体を守る。魔法を溶かしているのか、徐々に炎の竜巻は消えていくが、完全に消え去るころには防御に使った触手は全て蒸発していた。失った触手を補充するために周囲からゼリーが集まってくるが、それは四人が火炎放射器で薙ぎ払って阻止をする。

「これで守りはがら空きじゃな。ユエよ、止めは任せたぞ」

「……任せて。『蒼天』」

触手を失って隙だらけのクリオネにユエの最上級魔法が直撃して水蒸気爆発が起こる。飛び散ったゼリー片は鈴の結界に阻まれて誰にも当たることは無い。

水蒸気が消え去った後には何も残っていなかった。

「やりましたね皆さん！ ついに魔物を倒しましたね！」

シアがワアアアと喜ぶが、他の皆は臨戦態勢を解かない。前後の出入り口を見ても、ゼリー状の障害物は埋まったままだったのだ。

「…壁がない」

「だよね。倒したなら出入り口を塞いでるやつも消えるはずなんだけど…」

「——やべエな」

ぐるりと全体を見回して幸利が顔を引きつらせる。闇術師という天職の関係上、魔物の意思などを察知しやすい故に気付いた。この部屋全体から先ほどのクリオネと同じ「喰い尽くす」という意思を感じてしまったのだ。

ずるり、と岩の亀裂から大量に溢れ出てくる先ほどと同じゼリーが集まって、再び巨大なクリオネとなった。それだけではなく、小手調べは終わったとばかりにどンドン、次から次へとゼリーがあちこちから溢れ出してくる。

「…作戦を変更するぞ」

「だね。シアさんとテイオさんはこれを」

「俺と南雲と中村は火炎放射器だな」

一瞬で悟った。すでにこの部屋全体がこの魔物の胃袋だと。あまりにも不利なフィールドであり、持久戦などしようものなら確実に死人が出る。北条、ハジメ、幸利は一瞬だけアイコンタクトをしようとすぐさま動き出した。

「うわわっ!?!」

「……んっ」

北条がユエと鈴を担ぎ上げ、ハジメがシアとティオに結界を発生させるアーティファクトを渡す。鈴が生成魔法を用いて作ったタリスマンであり、魔力を流すだけで結界を張ることが出来る優れモノだ。

実行するのは逃走の一手。ジョースター家の伝統的な戦いの発想法。あるいは三十六計逃げるに如かずとも言う。

「皆、向こう側の出口に向かって全力で走るよ!」

「シアさんとティオさんはそのアーティファクトで結界を張って防御してくれ! 中村は俺、南雲と一緒に触手とかを出来る限り迎撃するぞ!」

「分かりました! 逃げましょう!」

「:ユエは出口を。リンリンは飛び込むときに結界を頼む」

「ん、分かった。焼き払う」

「了解だよ!」

クリオネが動き出すのと同時に一行の逃走劇が始まった。

全力で出口に向かって走る。触手や酸の雨が迫ってくるたびに炎放射器から吐き出される炎が迎撃し、迎撃できないものに関してはタリスマンの結界で防御する。

逃がすものかと攻撃が一層激しくなる。気付けば、膝までだった水位も徐々に上がってきていた。使える物は何でも使う。時には爆弾を投げつけ、炎放射器を振り回しながら下級の魔法を放ち、あらゆる手段を用いて攻撃を凌いでいく。

「全ての敵意と悪意を拒絶する。神の子らに絶対の守りを——」

「…今だ」

「『炎龍』!」

「——ここは聖域なりて、神敵を通さず! 『聖絶・界』!」

出口まで十メートル程のところ放たれたユエの「炎龍」が減衰する間もなく塞いでいたゼリーを呑み込み蒸発させた。炎属性の上級魔法である「炎天」と重力魔法を合成したユエオリジナルの魔法だ。最上級の「蒼天」を使えば上位互換の「蒼龍」になるが、溜め時間や必要な威力などを考えた結果、こちらを使った方が良いと判断したのだ。

そして鈴が「聖絶・界」——幾重にも重なる結界を発動。本来なら今の鈴には手が届かない魔法だが、アーティファクトの存在が発動を可能にしていた。全員を覆い、かつ出口が通れるサイズにまで微調整して結界のトンネルを形成する。この辺りの結界の操作は流石であり、結界師の面目躍如といったところだ。

当然結界に酸の雨や触手での攻撃、さらには魚雷のように放たれたゼリー片が襲い掛かるが、何重にもなっている強固な結界は時間稼ぎにはもってこいである。今回鈴が発動させた結界は実に十層。その内五つは溶かされたが、出口をくぐるまでには十分だった。

「足止めついでに！ 実戦で使うのは初めてだけど…！」

脱出する際にハジメが金属札をクリオネのいる部屋に投げ込む。空間魔法で中に大量の爆弾やらが詰め込まれており、さらには同じ金属札が入っていて連鎖的に爆発を続ける凶悪な道具である。

今回使ったのはその廉価版。威力こそ本格的に作った物に劣るが、部屋の広さを考えればこれで十分だろう。

出口にわずかにへばりついているゼリーはそのまま結界でゴリ押しして通路に到達。通路に入って来ようとする触手は火炎放射器で撃退した。そして、蓋をするように結界を移動させた次の瞬間、

「うひゃあっ!?!」

「…っ！ くううううっ！」

「きゃあっ!?!」

耳をつんざく爆発音がして通路が、いやメルジーン海底遺跡そのものが揺れた。

閉鎖空間で使ったため予想以上の威力が発揮しており、結界が瞬時に一層、二層と破壊されていく。完全詠唱の「聖絶・界」であつても

容易く受け止めきれない程の威力。全力で魔力を込める鈴は爆発が終わるころには肩で息をしており、結果も二層だけ残っているだけと言った様相だった。

「…さすがにもう追ってはこねエみたいだな。かと言って倒せたわけでもねエみたいだが…」

「痛み分け、と言うやつじゃな。恐ろしい魔物じゃった…」
「もうあんなのは勘弁してほしいですう」

緩やかな上り坂を全速力で登り切って海水が入っていない場所まで辿り着くと息を切らして座り込んだ。肉体的に、と言うより精神的にすぐく疲れたのだ。特に後先考えずに魔力を使った鈴はグロツキー状態である。

「はあ…はあ…な、何だったんだろうね、あの魔物…」

「少なくとも…はあ…ハイリヒ王国の魔物図鑑には…はあ…載ってなかったよ…」

「…うう…もうダメ…MPが足りない…」

「…スズ、頑張った。えらい」

「…ああ、良くやった。ここはシアに…」

「はあ…ふう…、あつ、北条くん、ちよつといいかな？」

ユエはまだまだ余力ありと言った感じだが、鈴はもう少し回復に時間が掛かりそうだ。幸い辺りに魔物の気配は感じないが、あまり長くゆっくりも出来ない。先ほどの強大な魔物が追ってくる可能性もある。

シアに鈴を負ぶってもらうように頼もうとしたが、恵里が北条に何やら耳打ちをする。黙って聞いていた北条は「分かった」とだけ言うと鈴を横抱きに抱えた。

「うひゃあ！ ま、まもるん!？」

「…むっ」

ぐん、と上昇する視界。急接近する顔。逞しい腕に抱きかかえられた鈴は体温が急速に上がるのを感じた。その少し横で魔力回復薬を飲んでいたユエが眉を顰める。

「…俺が良いらしい。不快なら降ろす」

「ぜ、全然嫌じゃないよ！むしろ役得と言うかバツチ来いつていうか！ エリリンナイスウ！」

先ほど恵里が耳打ちしていたことから、きっと彼女が何か吹き込んだのだろう。鈴が恵里の方を見やると、恵里は体を少し右に傾けてサムズアップしていた。それに同じく親指を立てて返す。

「あれ？ ユエさん良いんですか？」

「……スズは頑張ったし、ご褒美。それに妻として夫の甲斐性は認めるべき」

軽い水分補給をしてから一行は奥を目指して歩きだす。

いつもなら便乗しようとしたりするのだが、珍しく割り込んだりしようとならないユエにシアが問いかけると返ってきたのはそんな答え。

（いや、結婚どころか付き合ってすらないんじゃないや…まあ今更か。衛も大変だなあ）

（まったく、さっさとどっちかが告つちまえばいいのになア）

（見ている分には面白いのじゃがな…。いつまでもこのままという訳ではあるまい）

三者三様の感想を抱き肩を竦める。

それよりもこの先の事である。あの魔物が最奥の試練でないのであればこの先にはどれほど強力な魔物が待ち受けているのだろうか。改めて、気が引き締まる思いだった。

幕間：それでも人は進み続ける（後）

金属どころか魔法すら溶かしてしまう凶悪な魔物の手を逃れて奥に進むと左右に通路が分かれていた。二手に分かれて進む事も考えたが、何が起るのか分からないうちは固まった方が良く結論が出る。

クラピカ理論を交えた高度な話し合いの結果、まずは右側に進むことになった。

あれから魔物は出てきていない。あのゼリーに全て溶かされてしまったのかどうかは不明だが、一応警戒して進む。やがて行き止まりにぶち当たるが、そこには八人が十分に乗れるほどに大きい魔法陣が刻まれてあった。

「…違うな」

「……ん、今までの神代魔法を得る時に使われていた魔法陣とは別のタイプ。オスカーのアジトにあった転移の魔法陣に似てる。少なくともこれ自体に害はない」

ポツリと呟く北条に答えるように魔法のエキスパートであるユエが瞬時に魔法陣の効果を見破る。元々魔法については造詣が深かったが、一段と磨きがかかっていた。オスカーの書斎にはユエの生まれた時代よりもさらに古い、それこそ神代の魔法について記載された本が多数ある。それを宝物庫に入れて持ち出し、暇な時間に読んでいるのだ。

「まだ左側は見えてないけど魔法陣に乗ってみる？」

「鬼が出るか蛇が出るかってやつだ。どうせ左の奥にも魔法陣はあるんだろうな」

「まもるん、どうする？」

七人の視線が北条に突き刺さる。どうやら判断を委ねたらしい。たっぷりと五秒程考えたのち、進むという結論を出した北条は魔法陣に向けて足を出す。他のメンバーも異論は無かったよう魔法陣に乗り込む。そのまま魔法陣を起動させて、八人纏めて転移した。

光が収まると一行の目に飛び込んできたのは、『廃墟になった都市』

と言う表現がピッタリな、いかにもRPGなどで出てきそうな場所だった。

「これは…」

「廃墟…か？」

「…大丈夫か？」

「あ、うん、もう大丈夫。ありがとまもるん。ほんとはもうちよつこのままでも良かったけどいつまでもまもるんの両腕を占領は出来ないもんね」

鈴としてはあと十時間くらいはこのままが良かったが、何が起こるか分からない状況では、盾役である北条の腕を使えなくするわけにはいけない事は分かっていた。流石にTPOは弁えているのだ。

北条は体力が回復した鈴を降ろして辺りを見回す。

長い年月を経て風化した壁。元々は整備されていたであろう街路は苔生した瓦礫が散らばっていて見る影もない。

きつと青果店だったのだろう建物の軒下に置いてある朽ち果てた木箱や、陶芸品を扱っていたのであろう外壁が崩れ落ちた店の割れてしまっている芸術家的価値が高そうな壺や皿がかつての繁栄を思わせる。

人の気配はなく、魔物すら棲み付いていない物悲しい世界だった。

「これは…一体ここで何があったんでしょうか…」

「…分からぬ。見る限りかなり優れた文明があったようじゃが何故滅んだのか。しかし、ふむ…」

ざつと辺りを観察したテイオが閉じた扇でポン、と手の平を叩く。

「明らかに自然にそうなったものとは違う破壊の跡がある。となれば…」

「せ、戦争とかが起こったって事なのかな…？」

「かもしれぬのう。あくまでも可能性じゃがな」

石で出来た建物の屋根が不自然なまでに綺麗に吹き飛んでいる。壁に真っ直ぐな、剣で斬りつけたような傷が走っている。民家の中に真っ二つになった椅子やテーブルがある。折れて錆び付き、朽ち果てた剣が転がっている。

これだけの要素があればここで何が起こったのか、ある程度予測がつく。おそらくこの都市がある国は戦争に負けて滅んだのだろう。

そして思い出す。現在人類は魔族と戦争中であると。

ここはハイリヒ王国やヘルシャー帝国のあり得るかもしれない未来の姿だ。魔族との戦争に負ければ人類の住む世界はこうなってしまう。滅ぶとはこういう事なのだ。頭で分かっている、実際にその後の光景を見ると改めて事の重大さを認識してしまう。

一行がしんみりした面持ちでいると、突然辺りの景色がぐにやりと歪みだした。

「なにっ」

「なんだあっ」

驚くと同時にすぐさま戦闘態勢へ。死角が出来ないように背中合わせになる。近接能力の高い北条とシアを最後に、ユエとテイオは何時でも魔法を使えるように集中し、鈴はすでに詠唱を開始している。ハジメは宝物庫に手を突っ込み、探知に長けた幸利と恵里は索敵をする。

歪みはどんどんと強くなっていき、やがてそれが突然止むと、一行はいつの間にか炎上する都市に立っていた。今までの静寂を破るように耳に飛び込んでくるのは様々な音。破壊音、金属音、炸裂音、怒号、悲鳴、その他雑多な騒音。

「…戦場か」

「な、何が起こってるのさ〜！ 急展開過ぎてついていけないよ〜！」
辺りを見回すと音の正体がすぐに分かった。

人間族の兵士が魔族の魔法使いを斬り捨てる。魔族の魔法使いが放った炎が人間族の兵士を焼き尽くし、さらには民家まで破壊して燃やし尽くす。突き出された槍が胸を貫く。風の刃が首を断ち切る。

戦争だ。まさに今、ここで戦争が起こっている。

「死ねえ！ 汚らわしい魔族が！」

「灰になれよクソツたれの人間め！」

人間族と魔族が殺し合っている。お互いに殺意全開で殺すため

に戦っている。

これは恐らく昔から続いてきたという人間族と魔族の戦争の一場面。どうやら一行はそこに放り込まれてしまったらしかった。

「くたばれ人間ども！ 皆殺しにしてやる！」

「……」

人間の兵士を焼き殺した魔族の男がギョロリ、と狂気的な目を行に向けて風の刃を放つ。まさかいきなり攻撃してくると思わなかったのか、少し驚きながらも北条は盾で受けた。

理屈は分からないが、急に現れた兵士達はこちらをしつかりと認識しているようだった。

「エヒト様のために死ね魔族！」

「……目が見えないのか？」

「見境なしかよコイツ等！」

今度は人間族の兵士が槍を突き出してくる。近くに魔族の兵士がいるというのに、何故か北条一行を標的にしてくる。これまた盾で受け流して、今度はそのままの勢いで反撃をする。

技能・盾反撃。防御に使う盾を鈍器として、攻撃後の隙に強烈な反撃を見舞う攻防一体の技能である。度重なる戦いでこの技能を極めている北条の反撃は、奈落の最下層クラスの魔物であっても二、三発当てれば倒せるほどの威力を誇っていた。

北条としては殺したりするつもりは無い。しばらく行動不能になってもらおうと言う魂胆で、ある程度威力を加減して盾でカウンターを見舞う。

「……」

「ちよっ、攻撃が当たらないんですけどどうなってるんですかあ!？」

確かに盾を用いた打撃は相手を捕らえたはずなのに、するりとすり抜けてダメージを与えられなかった。再び槍を突き出してきたので、これも受け流して再びカウンターをしつかりと合わせるが、これまたすり抜けてしまつて当たらない。

どうやらシアの方も同じらしく、バルムンクを振り回しているがすり抜けてしまつて当たらないようだ。

「物理攻撃は効かないのかも。だったら魔法で……！」

ユエが発動させたのは魔力で小さな衝撃波を起こす初級の魔法。威力に関しては殴った方がダメージを与えられる程だが、吹き飛ばしたり体勢を崩したりするにはピツタリだ。魔力の消費量も極僅かであり、連射も利くのでこの状況では最適と言えた。

完璧にコントロールされた衝撃が北条に攻撃している兵士を打ち据える。すると、兵士はくぐもった声を出して体勢を崩すとともに煙のように消えてしまった。

「…効いたな」

「……ん、魔法なら通じる」

「成程のう。威力が低くても当たれば良いようじゃな。ならばほれ、これはどうじゃ？」

ティオが扇を軽く振るとふわりと攻撃とも呼べない程の風が吹く。精々が扇風機程度の風量だ。

だがそれでも魔法での干渉とみなされるようで、シアに斬りかかっていた兵士が煙のように消えた。

「ありがとうございますティオさん！ 助かりました！」

「マジか。そんなしよぼい魔法でも倒せるのかよ。つーか、コイツ等って実体がないのか？」

「うむ…、こやつ等は恐らく幻影と言ったところかのう。しかし、何かしらの魔法での干渉があれば容易く崩れ去る程度の強度しかないようじゃ」

「よ、良かった。それじゃあ、倒しちゃっても殺人にはならないよね！ 弱めの魔法を広範囲に使うのが攻略法って事かな？」

「な、なるほど…だったら…」

兵士は次から次へと湧いて出てくる。しかもその全てが北条一行を敵とみなしている状態だ。

人間族であろうと魔人族であろうと、こちらを見つけると最優先で襲い掛かってくる。とはいえ兵士の強さはそれほどないので、北条とシアに挟まれたメンバーに攻撃は一切届かない。

「『索魂』」

何らかの干渉であれば攻撃系の魔法でなくても良いのではないか。そう思った恵里が発動させたのは周囲にある魂や残留思念などを探知するための魔法。探知するだけで思念等は読み取れないが、それでも効果範囲は半径百メートル程もある。魔力の消費は僅かだが、恵里の考えが正しければ広範囲の敵を一気に倒せるはずだ。

果たして、恵里の予測は正しかった。『索魂』を使った瞬間、周囲の兵士達が一気に煙になって消え失せたのだ。

「あ、これでも良いんだね…」

「おお、全部消えちゃいましたね！」

「さっすがエリリン！ これぞまさしく一網打尽ってやつだね！」

「これ、全部中村に任せてもいいんじゃないやねエか？」

安全が確保できたところで、改めて辺りを見回してみる。よく見れば建物の配置や建築様式などは先ほどの廃都市と同じようであり、おそらくここは廃都市の過去の姿なのだろうと考えられる。なお、『索魂』の巻き添えを喰らったのか、倒れていた兵士なども消滅しているようで、スプラッタな現場は見ずに済んだようだ。

最前に防御力の高い北条を、最後尾に不意打ちに強いシアを配置して炎上する都市を進んでいく。時折恵里が『索魂』を使って周囲の兵士を蹴散らしてしまうので、先程のような前衛が必要になるような戦闘は起きなかった。おおよそ三十分ほど、戦場とは思えない程平和に雑談しながら進むと、やがて遠目に大きな建物が確認できるようになる。

それはまさに城だった。ハイリヒ王国にある宮殿とはまたデザインは違うが、それでも一目で「あ、王族が住んでるな」というのが分かるほどの城である。

「…城があるな」

「やたら目立つし、あれがゴール地点なのかもしれないね」

「何も手掛かりがねエんだし、とにかく行ってみようぜ」

「…ああ」

きつとあそこに行けば何かが分かる。この試練を終わらせるための情報が手に入るかもしれない。

そう結論付けて一行は城に向けて歩きだす。当然だが道中の戦闘は恵里の「索魂」でカットである。

「で、城に着いたわけだが」

「慌ただしいのう。戦時ゆえ仕方あるまいが……。どうやら城の中に居る者は襲つては来ぬようじゃな」

大きな門（門番は恵里の魔法に巻きこまれて消えた）を押し開けると、外観に相応しい豪華な内装だった。ハイリヒ王国の宮殿にも劣らないような高価そうな絵画や壺などが、赤い絨毯が敷かれた廊下に飾り付けられている。

ティオの言った通り、城の中の文官と思わしき男や女中はこちらに見向きもしない。先ほど都市の中で脇目もふらずに襲い掛かってきた兵士達とは大違いだ。

せわしなく動き回る人々にぶつからないように進むと、やがて玉座がある間に辿り着く。

玉座に腰掛けている老人がこの国の王なのだろう。下座には重鎮であろう、五人の大臣のような人間が言い争いをしていた。

「くそつ、魔族どもめ！ よもやここまで攻めてこようとは！ 兵士はもういないのか!？」

「すでに各所からかき集めた後です！ これ以上の戦力はもうどこにもいません！」

「も、もう駄目だあ……お終いだあ……！」

「何だか取り込み中みたいだね。状況から察するに、魔族との戦争で王都まで攻め込まれて陥落間近って感じなのかな？」

「……どうしようもないな」

「……ん、王都まで攻め込まれてる時点で負けは確定」

その後も何も進展のない会議と言う名の無駄話が続くがやがて、目の前の脅威についての話から責任の擦り付け合いへと変わっていく。

「そ、そもそも貴様が考え付いた事だろう！」

「何を言うか！ 貴様とて『村一つを滅ぼして魔族の仕業に見せかけて報復のための戦争を仕掛ける』という案に賛同していたではないか！ 私だけの責任にするな！」

「魔族を絶滅させるためには必要な事だと、そう言っていたのは貴様だろう！」

「わ、私ではない！ 光教教会の司祭殿が言っていたのだ！ 私はそれを俎上に載せたただけだ！」

「ち、ちよつと待っててください。つまり、自国の民を殺してそれを戦争の口実にしたという訳ですか？」

「光教教会なる手の者から入れ知恵があったようじゃが、聞く限りではそのようじゃな。そして戦争を起こしたものの、こうして劣勢になり現在に至るといのが事の真相のようだよ」

「そんなつ、そんなのってあんまりだよ！ これじゃあ滅ぼされた村の人達は何のために殺されちゃったのさ！」

「やがて起こるだろう魔族との戦争について理解していたのか？ そう聞かれると答えに窮する状況である。」

戦争と言うのは日本ではすでに遠い昔の出来事で、父や母の世代でさえも記録としてしか知らない平和な時代に生まれ育った。急に異世界という非日常に連れてこられて感覚が麻痺していたのかもしれない。これまで魔物と戦ったことはあっても人殺しというのはしたことがないのだ。

先ほどの都市部での戦闘を思い出す。

血走った目で、憎しみの目で、殺意を以て襲い掛かってくる。幸い北条やシアが防壁になってくれたものの、それでも背筋が凍るような気持ちだった。あの強烈な体験は忘れられそうにない。

「よく考えてみりゃあ、そもそも魔族ってのがどんなのかも説明を受けてなかったな」

「う、うん。悪い奴らだっことは話してたけど……」

「これじゃあまるで魔族の方が被害者だよね」

重鎮たちの言い争いを遠目に眺めていると、再び景色が歪む。最初にこの都市に来た時と同じ現象だ。

「……またか」

「……これで試練は終わり？」

「何が起こるか分からぬうちは油断はしない方がよからう」

今度は動揺することなく、何時でも動けるようにしていると、今度は城からどこかの教会と思わしき場所に一行は迷い込んでいた。

薄暗い教会内にはエヒトを表現したものであるろうステンドグラスが飾り付けられており、荘厳な雰囲気を放っている。ここが次の試練が行われる場所であろうことは容易に想像できた。

周囲に気を配りながら荘厳な教会内を進んでいくが、今度は戦闘が起こる気配はない。

「…無いか」

「うん、廃都市では戦争真つただ中つて感じだつたけど、今度はそうじゃないみたいだね」

「今度は何が起こるんでしょうか…あつ、あれ見てください！」

シアが指をさす方向には五十人は下らない子供達と豪華なローブを纏つた司祭と思われる中年の男性。先ほどまでは誰も居なかつたのに突然出現したのは廃都市での現象と同じだつた。もしもこれが神代魔法によるものであれば、『幻影魔法』あたりが適切な名称だろうか。

子供達がいる床には魔法陣が描かれており怪しい光を放っている。だが、子供達は不思議がつているが怖がつていない様子だつた。教会とはつまりエヒトのお膝元であり、危険なものでは無いと思つているのだろうか。

「さあ、祈るのです。そうすればきっとエヒト様が救つてくださる。あなた達に出来る事はただ心を込めて祈る事だけなのです」

「司祭さまー、祈つたらエヒト様が悪い魔人族をやっつけてくれるの？」

「ええ、もちろんです。エヒト様は我々を決して見捨てない。故に、心から救済を願うのです」

にこやかに子供達に語りかける司祭。その言葉を受けて子供達は「エヒト様、どうか我々をお救いください」と静かに祈り始めた。

司祭の口角が僅かに吊り上がったのを北条は見逃さなかつた。

「…待てー」

「まもるんっ！」

これから起こる事を察した北条は、咄嗟に盾をブルーメランのように司祭に向かって投げる。僅かに魔法の力を帯びた“廻盾”は今までの幻影兵にであれば間違いなく通じたが、司祭相手にはすり抜けて当たらなかつた。戻ってきた盾をキャッチして目を細める。

これに驚いたのはハジメを除く他のメンバーだ。北条が感情を声に出すのを聞いたのは初めてだったからだ。唯一ハジメだけは一度だけ同じような場面を目にした事があった。

あれはトータスに来る前の年末辺り、街で不良に暴行を加えられそうになった時の事だ。同じように北条が目を細めて睨みつけている所に居合わせたことがある。

そう、あの時は今のように、北条は確かに怒っていたのだ。

攻撃も虚しく、やがて子供達が乗っている魔法陣が光り輝き、そして惨劇が起こった。

「うっ……」

それは誰が漏らした声だったのだろうか。目の前で起こっている事に対して反射的に出てしまった声かもしれない。

飛び散る血。子供達の断末魔。血だまりの中に倒れる不快な音。司祭の狂信的な笑い声。

「エヒト様アアア！ あなた様に信仰を捧げる六百六十六の贄を捧げますぞ！ どうか私に力をおおお！」

「狂ってやがるっ……」

「こ、こんなのむご過ぎます……」

平和な日本で暮らしてきた耐性のない面々は吐きそうな顔色をしており、こういった事に耐性があるユエやティオですら顔を青くしている。唯一北条だけが狂ったように笑い続ける司祭を睨みつけていた。

おそらく子供達を生贄にして敗色濃厚である戦争をひっくり返そうとしたのだろう。犠牲になった子供達、笑い続ける司祭が溶けるようにして消えていく。床を染め上げていた血も綺麗さっぱり消え去り、後味の悪い静寂だけが残った。

沈黙する一行。あまりに衝撃的な光景を前に誰も言葉を発せな

かった。あの司祭は六百六十六の贄と言っていたので、あの後も同じように子供達が集められて同じように虐殺されたのだろう。

すぐに別の魔法陣が床に新しく現れ、乗れとでも言うかのように淡く光を放ち始める。

「……転移の魔法陣。洞窟の奥にあったのと同じ」

「…そうか」

「おいおい、まさかアレに乗るのか…?」

生贄の魔法陣を見た後にこれを用意する解放者は性悪に違いない。あんな光景を見せつけられたら、普通ならだれも乗りたがらないに決まっている。

幸利の漏らした疑問に答えるように魔法陣が点滅する。渋々ながらも魔法陣に乗り込むと、光が視界を塗りつぶして、次の瞬間には一行の姿が教会から消えた。

光が消えて、一行の目に飛び込んできたのは海上神殿とでもいうべきものであった。

言うなれば四本しか柱が無いパルテノン神殿。そこから前後左右に通路が伸びており、通路の先は円形の足場となっている。辺りに満たされた海水がゆらゆらと揺らめいて岩で出来た天井に光の波を映し出して幻想的な光景を作り出していた。

「…どうやら迷宮の試練とやらは終わりのようじゃな」

「そうみたいですな…」

「やっと終わった…。これまでで一番キツかったよ。主に精神的な意味で」

「しばらく肉は食いたくねえな…」

「うん、そうだね…」

正直な話、とてもきつかったと言うのが素直な気持ちである。今までの迷宮は肉体的に負荷がかかるものであったが、今回は精神的に負荷がかかった。今も吐きそうになっているのを堪えている状況だ。

攻略が長くなることを見越して弁当を作っていたのだが、残念ながら出番はもつと後になりそうだ。宝物庫に鮮度を保つ機能があつて僥倖である。

「……マモル」

「まもるん……」

ユエと鈴が遠慮がちに北条に声をかける。

二人とも北条が誰かに向かって怒りを抱いているのは初めて見た。入浴中に乱入したり、布団に全裸で潜り込んだり、勝手に服を拝借してみたり、後ろから首にぶら下がったり、膝を椅子にしたりしても冷静沈着だった北条が僅かに見せた怒気。

声をかけたは良いが、その後の言葉が見つからない二人を見てハジメが溜息をつく。

「ほら衛、そんな怖い顔をしてるから谷口さんとユエさんが困ってるよ」

「…そうか。そのつもりは無かったが、すまない」

「ん、大丈夫。珍しいと思っただけ」

「そ、そうそう！ いやー、まさかまもるんが怒ったりするなんて驚きモノノキってやつだよー」

「僕はかなり久しぶりに見たかな。半年ぶりくらいだね」

「…俺は怒ったりしない」

ハジメに背中をポンポンと叩かれた北条はバツが悪そうに…とは言っても表情が変わらないのだが、握った拳を解いた。すでに先に行ってしまったている（すでに魔物等が居ない事は確認済み）幸利達を追いかける背中を心配そうに見つめる視線が二つ。

実のところ、北条の身の上を詳しく知るものは本人があまり喋らない事も相まってクラスの中には一人も居ない。すでに両親と死別して一人で暮らしているらしい事は分かっているがそれだけである。

いつ両親が亡くなったのか？ どうして亡くなったのか？ どういった過去を送ってきたのか？ それらは全て謎に包まれたままである。

「……ハジメはマモルの昔の事、何か知ってる？」

「うくん、こればかりはちよつと。いつか話してくれると良いんだけど」

「そつかく、南雲くんでも知らないなら誰も知らないよね。むむむ…」

まだ好感度が足りないのか……！」

精々分かつているのは彼の人柄と、己の身を削るのに躊躇いが無いという性質だけ。事実、数か月間旅をして数えきれないほど魔物と戦闘をしてきたが、誰も怪我らしい怪我をしていない。一緒にオルクス大迷宮を攻略したユエですら精々一、二回掠り傷とも言えないものが付いた程度だ。全て北条が肩代わりしてくれている。

だからこそいつか、戦いの中で皆を護ってあっさり死んでしまいうので心配になってくる。それこそがユエが隙間時間に魔法についての知識を深める理由であり、鈴が結界術の練度を飛躍的に上昇させている理由であり、そしてハジメが過剰なまでに道具類を用意している理由でもある。

北条が護ってくれているように、自分達が北条を支える……ある意味最強だ。

「……頑張る」

「うん、絶対にまもるんは鈴が攻略して見せるよ！ そうしたら……ぐへへへへ……！」

「むっ、それは私の台詞。絶対に負けない……。すでに子供の名前も十人分考えてある……じゅるり」

（衛は幸せ者だなあ。こんなにも想ってもらって——あ、そういえばこれで迷宮攻略も折り返し地点だ。どうしよう……すっかり忘れてた）

二人が決意も新たに、一人はちよつと憂鬱な気分で遠ざかって行く背中を追いかけて始めた。

幕間：それでも人は進み続ける（終）

結論から言うと、吐いた。

メルジーネ海底遺跡を攻略した証として、祭壇の前にあつた魔法陣に踏み込んだ一行。オルクス大迷宮やグリューエン大火山と同じように記憶を確認して攻略をしたか確認をする仕組みだったのだが、それがまずかつた。

何がまずかつたのかと言うと、記憶の確認をするときは強制的に迷宮内の出来事を『思い出す』ようになっていくという点であり、つまり、戦争の狂気や子供達の虐殺などと言ったスプラッタな記憶までハッキリと一気に脳内再生してしまうと言う事だ。

「あ、すみません皆さん、私はもう無理っぽいです」

最初に脱落したのはシアだった。温厚で優しいハウリア一族である彼女は、試練の時のように小出しにされるのであればともかく、数秒の内に駆け巡る凄惨な記憶に耐えられなかったのだ。

「オロロロ……」

記憶の確認が終わった瞬間、ニッコリと悟ったように笑い、皆にかからないようにダッシュして神殿を取り囲む海の中に滝を流し込むシア。離れていてもちよつとだけ酸っぱい臭いが漂ってくる。そして、それを受けた何人かが顔を青くしてシアと同じように走り出した。

「ちよつ、おまつ、オロロロ……」

「折角我慢してたオロロロ……」

「気分が悪オロロロ……」

「そんまつ、そんまつ……オロロロ……」

犠牲者はハジメ、幸利、鈴、恵里の四人。シアと合わせて五人仲良く並んでもんじゃ焼きを海に不法投棄することとなった。ユエとテイオは顔を青くしているが何とか堪えたようだ。年の功と言うやつである。

ひとしきり出すものを出して口を濯いだ五人は仲良く肩を落とすて帰ってくる。

「すいません、お見苦しいものを…」

「いや、仕方あるまい。正直な話、妾もちよつと危なかつたのじゃ。記憶を覗かれると言うのはお世辞にも良い気分とは言えないのう」

「……ん、恥じる事じゃない」

気を取り直して、神代魔法の確認である。

今回手に入った神代魔法は“再生魔法”であり、記憶や記録の再現、また壊れた物や傷付いた生物を治す効果も見込める補助寄りの魔法だ。

「……“再生の力”。やっと見つけた」

「確かハルツィナ樹海の大迷宮に入るために必要なものの一つでしたよね。と言う事は、これでやっと挑めるって事ですか？」

「…意地が悪いな」

ハルツィナ樹海は大陸の東の果て。メルジーネ海底遺跡は大陸の西の果て。つまり、ハルツィナ樹海を攻略するためには大陸を往復して来いと言う事と同じである。最早、意地悪を通り越してイジメの領域にある悪意マシマシの配置だった。

マジかよミレディ最低だな、などと思っていると魔法陣が消えて床から小さめの祭壇がせり上がってくる。そして、発光したかと思つたら光が形を変え、女性の形を作った。

エメラルドのような美しい髪、ゆつたりとした白いワンピース。そして何より海人族特有のヒレ。祭壇に腰掛けている解放者の一人メイル・メルジーネは海人族だったらしい。

「よくぞここまで辿り着きました。私はメイル・メルジーネ。貴方が恐らく“反逆者”と呼ぶ者の一人です。ここに居る私はただの影法師。貴方の言葉には答えられない事を許してください——」

そこから始まったのはオスカー・オルクスが話した内容と同じようなものだった。

反逆者、もとい解放者の真実から始まり狂った神の事の説明へと続く。テイオは初めて聞く話だったので真剣な顔をして聞き入っていた。

「どうか、神に縋らないで。頼らないで。与えられる事に慣れないで。

掴み取る為に足掻いて。己の意志で決めて、己の足で前へ進んで。どんな難題でも、答えは常に貴方の中にある。貴方の中にしかない。神が魅せる甘い答えに惑わされれないで。自由な意志のもとにこそ幸福はある。貴方に幸福の雨が降り注ぐことを祈っています」

そう言つて、最後に一度だけ微笑んでメール・メルジーネは光の粒子となって消えた。

オスカー・オルクスも言っていた『自由な意思』と言うのが彼等解放者の掲げていた旗なのだろう。どうやって世界の真実を知ったのかは分からないが、彼らは世界の現状を良しとしなかった。神の玩具になる事を拒んだ。

神が実在する世界でそれがどれだけ大きな決断だったのか想像もできない。だが、一つ言えるのは彼等は世界を敵に回しても『自由な意思』のために戦う事を選んだと言う事だ。

一度道は閉ざされかけてしまったけれど、それでもその先を歩いてくれる者はいる。

恐らく彼等には無念はあつても後悔は無かつたのだろう。たとえば先が見えない道だったとしても。どれだけ険しい道だったとしても。一生かかっても歩みきれなかつたとしても。託された者が歩き続ける限り、彼等は死してなお進み続けることが出来るのだから。

「…行こう」

「ん、分かった」

北条が宝物庫から墓石を取り出して設置した後、彼女が座っていた所に出現したメルジーネのコインを回収して身を翻して歩き出す。ユエがそれに続く。それぞれ感じ入るところがあつたのだろう、他の面々は無言だった。

「少し話をしたいのじゃが良いか？」

「お？ どうしたんだティオさん。珍しく真面目な雰囲気じゃねえか」

ティオは何かを考えこんでいたようだったが、やがて息を大きく吐くと光を失った祭壇を背に一行に言葉を投げかける。ここに来るま

でに人柄は見せてもらった。何を目的として動いているのかを把握できた。そして解放者達がどういう意思を以て神に反旗を翻したのかを知ることが出来た。

ならば、全ては明かせないが、少しだけ自分の身の上を話すくらいはした方が良いと思っただのだ。この善き人々ならば自分の正体を知っても悪くは扱わないと確信できたから。

「全く、幸利は失礼な奴じゃのう。妾は何時でも真面目じゃと言うのに」

「幸利さんのデリカシーの無さについては今更ですう。それで、話して言うのは何ですか？」

「うむ、他ならぬ妾の事についてじゃ。実はのう——むっ！」

一度扇子で手の平をポンと叩いてから話し始めようとすると、その途端神殿全体が大きく振動を始めた。

それと同時に天井に当たる岩盤に丸い穴が開く。どうやらグリューエン大火山と同じように、攻略完了と共に脱出口が開く仕組みになっているようだ。

「…上が開いたな。脱出口か」

「海底神殿……上に脱出口……あつ、ふーん」

「はいはい、鈴ちゃんの出番ですよ！ ユエユエお願い！」

「……ん、分かった。全員集合」

「い、一体何が始まるのじゃ？」

「大惨事迷宮だ。取りあえず話は後にして、舌嚙まないようにしててくれ」

デジャビュである。具体的に言えばライセン大迷宮の最奥で体験したアレと同じ雰囲気を感じる。周りを見れば水位が徐々に上がってきていた。

いつかやったように“聖絶”と“空域”で生存圏を確保する。あの時とは練度が桁違いに上がっており、特に鈴に関しては以前の完全詠唱に匹敵するほどの強度の結界を一節詠唱で出せるようになっていた。

一行を結界の守りが包んだ瞬間、あちこちから海水がとんでもない

勢いで流れ込み、見る見るうちに水位が上がっていく。結界のお陰で一行は濡れることなく、脱出口から打ち上げ花火のような勢いで遺跡上の海中へと飛び出していった。

確かにここまで来れた者であれば水中での移動手段くらいは確保しているだろうが、これはあまりに横暴ではないだろうか。以前と同じように結界の中でシェイクされながら一行の心は一つになった。

「絶対ミレディにあのトラップ教えたのコイツだろ…！ 汚いなさすが解放者きたない！」

「全くですよ！ 思い出したらむかつ腹がたつてきました！」

「…：解放者は性格が悪い。間違いない。激おこ」

「あはは…、それじゃあ潜水艇を出すね」

結界内で、見た目に依らず乱暴なマイル・メルジーネの仕掛けにぶつくさと文句を言う。ともあれ、これで迷宮は攻略完了なので、あとは陸に帰還するだけだ。

苦笑いをしながらハジメが潜水艇を宝物庫から取り出そうとする。それを視界の端に捉えていた北条は、発見したくないものを発見してしまった。

「…：待て。追ってきている」

「あ？ 何が——げえっ！」

「きやあっ！」

幸利が悲鳴に近い驚愕の声を上げる。次の瞬間、結界が透明な太い触手によって横殴りにされた。

完全なる不意打ち。幸いにして物理的な攻撃力はそれほどではなかったために結界が破壊されることは無かったが状況は最悪である。「先ほどの魔物か！ ここまで追ってくるとは執念深いやつじゃない！」

「ま、まずいよこれ！ 完全に相手のホームグラウンドだよ！ 鈴の“聖絶”もあれ相手じゃあんまり保たないっ！」

迷宮の中ほどに居た溶解作用を持つ巨大クリオネ。一度は痛み分けて逃げおおせたが、相手はどうあっても北条達を溶かしたいようだ。しかも海中は相手のテリトリーである。半透明な触手が結界を

溶かそうと迫ってくるのだが、どういう訳か水の抵抗を全く受けていないかのような素早い動きであった。

あつという間に周囲を囲まれてしまう。このままでは結界が破られた瞬間に冒険終了である。

「…とにかく海上に上がる必要があるな」

「……私に考えがある。一分時間を稼いでほしい」

「時間稼ぎをすればいいんですね!? よっしゃー、やっ तरीますよー!」
ユエには何やら策があるらしい。それを聞いたシアが己を奮い立たせて気合を入れる。一分間の目標としては、息が出来る生存圏である結界を守り抜く事。幸い、手札はいくつかあるので出し惜しみなしである。

まずはタリスマンを使って鈴の張った結界のさらに外側に結界を張る。それは当然、数秒で溶かされて突破される程度の強度しかないが、かなりの脳筋であるシアがただ守りに徹するわけもなく、突破される瞬間にあえて魔力を過剰供給させて結界を爆発させた。

障壁を指向性を持たせて爆発させるバリアバースト、その劣化版である。結界師が使う本家本元には遠く及ばない威力とは言え、それでも触手を僅かながら後退させるには十分な威力があった。

「なるほど、今のを交互に行えば十分に時間を稼げそうじゃな!」

シアの行った事を瞬時に理解したテイオは、鈴の結界と触手の間に出来た隙間に、同じくタリスマンを使って結界を張る。そして溶かされる直前に爆発させて触手を僅かに後退させる。

ゴボオン!! ゴボオン!! と連続してくぐもった爆発音が結界内の空気を揺らす。理論上はこのまま魔力が尽きるまでは時間が稼げるが、そう簡単にいかないのが現実である。

二十秒ほど経った頃にタリスマンがパキツ、と金属が割れるような音を出して機能を停止した。当然だが、シアとテイオはかなり無茶な使い方をしており、タリスマンは過剰な魔力供給に何度も耐えられるような強度はなかったのだ。

「何とか間に合ったぜ! オラツ、
「絶禍」!」

「わ、私も何とか!
「絶禍」!」

すわ絶体絶命かと思われた瞬間、幸利と恵里の重力魔法が完成して前後に展開される。

極大の重力で出来た黒い渦巻く球体が、結界を襲う触手を呑み込んでいく。実は二人とも重力魔法に対する適性は高い。ユエのように瞬時に発動させることは出来ないが、二十秒も時間があれば十分であった。

「はい、二人とも。新しいタリスマンだよ。あと魔力回復薬も今の内に」

「任せてください！ ……んぐんぐ……ぷはー！ 二気百倍ですう！」

「うむ、助かる。…中々味も良いのう」

触手には魔力すら溶かす効果があるので「絶禍」と言えども長くは保てない。精々が数秒である。だが、その間にシアとテイオが態勢を整え、鈴が魔力を消費して結界を補強する。

「……『界穿』！ 皆、これに入って！」

「でかした！」

劣化バリアバーストと重力魔法で時間を稼ぐことに徹していると、三十秒ほどでユエの魔法が発動する。思ったよりも速く完成したようだ。今回使ったのは空間魔法の一つである「界穿」。二点間を繋ぐゲートを生み出す非常の難易度の高い魔法だ。

全員が迷わずに光り輝く楕円形の幕に突撃する。一行の姿が消えた瞬間、半透明の触手が結界を跡形もなく溶かしていくが、そこにはすでに誰も居なかった。

「あ、アイキャントフライ！」

「脱出できたのは良いけど今度は違う意味でピンチだー！」

（仕方あるまい、ここが切り時じゃな！ 本当はしっかりと説明してからお披露目したかったのじゃが…！）

出口のゲートはおよそ二百メートル程上空にあった。そこから飛び出した北条達は、当然重力に従って落ちていく。このままでは折角脱出できたのに、再び死地に逆戻りしてしまう。

各々が何とか打開しようとしていると、ふと大きな黒い影が下に割

り込んだ。

「ぐえっ！」

「わきやっ！」

「……これは！」

その黒い影の上に幸利が背中から激突し、シアと恵里とハジメがさらにその上に激突して、幸利からカエルが潰れたような声が漏れた。問題なく着地した北条は、落ちてくるユエと鈴を衝撃を殺すようにキヤツチして足元を見やる。

北条達が降り立った黒い影はドラゴンだった。北条達は、ドラゴンの背中に乗っていた。

「ど、ドラゴン……!?」

「な、何がどうなってるんですか……!?」

シアと鈴が驚愕の声を上げる。他の面々も、声にこそ出していないが急な展開に二人と同じような感想を心の中で叫んでいた。

『妾じゃよ』

それに答えたのは頭の中に響き渡るような声。どこからともなく聞こえてくる聞き覚えのある声に辺りを見回すが、居るのは自分を含めて七人だけである。

周りに居ないテイオ、突如出現した竜。

答えにいち早く辿り着いたのはハイリヒ王国の図書館で情報を収集していたハジメ、そして教養があるユエの二人だった。

「……まさかだけど、テイオさんって竜人族ってやつなのかな？ 本でチラッと読んだ事があるよ」

「……でも竜人族は五百年位前に滅びたはず」

『うむ、その事については黙っていて済まなかった！ 説明は後じゃ！』

ゴバアツ!! と水が弾ける音がして海上五十メートルまで落下していた北条達に巨大な津波が襲い掛かる。正直な話、滅びたはずの竜人族とはなんぞや、何故旅に付いてきたのか、などテイオには色々と言きたい事はあった。

だが、テイオの言う通り、まずは目の前にある脅威を退けるのが先

である。以前のようには逃げることは出来ない。海底遺跡というテリトリーから解き放たれた怪物は、放っておくと周囲の生態系を絶滅させる恐れがある。そうすればエリセンに、ひいては大陸全体に悪影響を及ぼしかねないのだ。

「…させん。『要塞』」

何とか津波から逃れようとするティオをすっぽりと、北条達をも包み込むようにして展開される黄金色のハニカム模様がある障壁。

海中で万が一の時のために詠唱をしていた北条の『要塞』だ。燃費が悪く、詠唱にも時間が掛かるがその強度は折り紙付き。たとえ隕石が直撃しても破壊されないと言われる防護壁が津波を完璧に防ぎきる。

さて、ここから正念場である。海面から上がってくるのは目算で全長五十メートル以上もある巨大クリオネ。以前とは比べ物にならないほどの巨大さであり、閉所ではない分全力モードと言う事だろう。迷宮に入ってからかなり時間が経っていたのか、すでに夜明け時であり、水平線から覗く太陽がまぶしい。

「デカ過ぎんだろ…」

「どうやって攻略します？ その、私にはちよつと思いつかないんですけどお…」

『むっ、来るのじゃ！ しつかりと捕まっておれ！』

どうやら向こうはやる気満々なようで、早速半透明な触手を鞭のようにならせて攻撃してきた。

それを見事な飛行技術で躲していくティオ。だが、一発でも当たればそのままお終いになりかねないのでかなり必死であった。

「ティオさん！ ドラゴンなんだしプレスとかは使えないの!？」

『使えるには使えるのじゃが、アレを削り切れるほどのものは無理じゃ！』と言うより回避で割と一杯一杯で使う暇がないのうー！』

触手を掻い潜るティオの背中中で交わされるやりとり。ごうごうと耳を風が打つが、ティオの声は念話のようになっていて問題なく聞こえる。

中々当たらない事に業を煮やしたのか、今度は半透明ゼリーを雨あ

られと広範囲に飛ばしてきた。咄嗟に鈴が「聖絶」を使うが全ては防ぎきれずに一、二滴だけ美しい黒い鱗に付着した。

『ぬおおっ!? わ、妾のビューティフルな鱗から煙が出ておる!』

「り、竜の鱗も溶けちゃうんだ…」

「鉄も魔力も溶かしちゃうし、まさに何でも溶かしちゃう凶悪な武器ってわけだね」

幸い付着したのはほんの少量であり、鱗の表面だけを溶かすだけに止まった。だが、これはすなわちまともに浴びてしまえばティオと言えども危険と言う事と同じである。

「…何でも?」

「…マモル?」

「どうしたのまもるん、何か気付いたの?」

ハジメの言葉に反応したのは北条だった。何でも溶かしてしまうと言う部分について何かが引っかかったのだ。ユエと鈴の視線を受けながら引っかかる部分を拾い上げようとして、すぐにそれが浮かび上がった。

「…岩は溶けた。だが岩壁は溶けていない」

「……そういえば」

何でも溶かすのであれば、一度目の戦闘で岩壁の至る所から半透明ゼリーが湧き出した時に岩壁も溶けていたはずだ。出入口だってそうだ。明らかにびっしりと詰まっていたのに周りの岩壁は溶けていなかった。

だが、『攻撃をしてきた時』『防御をした時』は地面に接触した半透明ゼリーは岩や魔法を溶かしていた。ただそこにあるだけで全ての物を溶かしてしまうのであれば、そもそもメルジーネ海底遺跡はとつくの昔に消滅しているはずだ。

「つまり…どういうことですか?」

「…無条件に溶かすわけではなく、溶かす意思がある時にのみ効果を発揮する」

「北条…そこに気付くとは…やはり天才か」

『それで、どうするのじゃ? それが、分かった、ところで、どうにか

なるとは、思えないのじゃが——ぬおつ、掠りそうになったのじゃ!」
つまり、鉄壁に見える触手での防御も反応できない、または認識できない攻撃に対してはその効果を発揮しないと言う事。だから派手なユエの魔法やテイオが使えらると言うブレス攻撃では効果が薄い。文字通り『認識してから防御』されてしまうからだ。

それにテイオが言う通り、先程からユエがちまちま炎属性の魔法で攻撃しているが、次から次へと新しい半透明ゼリーが海から染み出して補充されており、全くもって終わりが見えない状態である。

さらには最初は四本程度だった触手が今は六本までその数を増やしている。今はまだ何とか凌げているが、このまま手数が増え続ければいずれ被弾するだろう。

「…いや、どうにかなる」

「おう、さつすがまもるん! それでそれで、鈴達はどうすればいいの?」

「…ああ、まずは——」

攻防一体の半透明ゼリーに底が見えない耐久力。凄まじいまでに強力な相手だが、こちらの手札で勝利するためにはどうすればよいか、北条には道筋が見えたようだ。

触手を搔い潜るテイオの背中から落ちないようにしがみ付きながら作戦を伝える。

「…なるほどな。俺はそれで良いと思うぜ」

「それなら確かに倒せる可能性が高いね。でもそうなると思役が必要になるんだけど…」

「…囿役は当然俺が行く。最適だろう」

「…でもそれだとマモルが危険すぎる」

「ユエユエの言う通りだよ! 確かに理には適ってるとは思うけど、いくら何でも無茶だよ! せめて鈴も一緒に連れてって!」

「…俺は問題ない。皆頼んだ」

北条の作戦を聞いた反応は賛成四、反対二、どちらでもないのが一(テイオ)。

最後までユエと鈴は反対していたが、これ以上の作戦が思い浮かば

ないのも事実なので、結局は実行されることとなった。

宝物庫から『空を飛ぶ箒』を取り出してティオの背中から飛び出していく北条を心配そうな目で見つめる目が二対。北条と言う的が増えて攻撃の密度が緩んだ事で、多少の余裕が出来たティオが呆れ気味に溜息を溢した。

『…二人とも心配なのはわかるのじゃが、今は妾達は妾達の為すことを為すべきじゃろう』

「……ん、分かった。出来る限り早く終わらせる。でも後でお説教」

「全くその通りだよ！ まもるんはいつもこうなんだから！ 後でたっぷりとお仕置きしてやる〜！」

「あはは…、二人とも程々にね」

「そんじゃ、俺と中村は準備に入るからそつちは頼んだぜ」

空を飛ぶ箒で飛びまわる北条は、とある技能を使った。オルクス大迷宮で自然に覚えた技能であり、その効果は気配を消す技術の対極にある。目を逸らせない程に存在感を大きくすることで敵の攻撃を引きつける、盾役としては非常に有用な技能だ。

物理的に巨大なティオが居るので普段通りの効果は発揮しないが、それでも半分ほどの注意を引きつける事を可能としていた。

「蒼天” 炎龍” 炎天”」

『これならば妾も多少は攻撃できそうじゃな！』

そこにユエの魔法と、少し余裕が出来たティオのコンパクトな火炎ブレスが襲い掛かる。

半透明ゼリーが蒸発している事から多少のダメージは与えられているが、それもすぐに海中から補充されてしまう。だが、今はただひたすらに敵の注意を引きつけることが出来ればそれで良かった。

触手での攻撃を掻い潜り、飛ばされる酸の雨を結界で防ぎ、時間を稼ぐこと一分ほど。

北条が上手く引きつけているようで、途中からティオの方にはほとんど攻撃は来なかった。

消費した魔力回復薬が十を超えようかという時にようやく準備が完了した。

「…私は準備完了だよ。清水くんは？」

「俺も丁度終わった所だ。何時でも行けるぜ？」

恵里の言葉に幸利はニヤリと笑い、手に持ったロッドをクルリと一度回して地面を突いた。この動作はカッコいいからすぐく練習したという経緯がある。

『あふんっ』

ちなみに、幸利が突いたのは地面ではなくティオの背中である。

上手い事に『入った』ティオは、変な声を出して大きく体勢を崩した。

「ぬおおおっ!？」

「ちよっ、ティオさん、変な声出さないでくださいよ！」

『す、すまぬ！　じゃが幸利が変な所を突つたのが悪いのじゃー!』
「い、今はギャグパートじゃないのにく！　ってああつ、まもるんがつ
!」

「させないっ！　『緋槍』！」

フラフラしている間に北条が触手で叩き落とされた。接触直前に盾でガードしたようで、どうやったかは不明だが弾き飛ばされただけで大したダメージはなさそうだ。

とは言え、アザンチウムを編み込んである上着が溶けてしまい檻樓のようになってしまっている。最早この戦闘では使い物にならないだろう。

追撃をしようとする触手をユエが魔法で撃ち抜いて追撃を防ぐ。

「そ、それじゃあ行くよ！　『零落』！」

何とか体勢を立て直した後、恵里が杖を巨大クリオネに向けて魔法を発動させる。それは魂を落ちぶれさせる魔法であり、本来であれば強力な悪霊などを弱体化させるために使う魔法である。

生きている者に対しては当然、効果は薄い。だが、全身専用のアーティファクトで固めた事で神代魔法に片足を突っ込んだ恵里であれば、少しでも効果を發揮させることが出来る。

『零落』によって一時的に『魂の格』が下がった巨大クリオネ。だが、彼あるいは彼女は狡猾である。当然、自身に起こった異常は感知

できるだけの知能はあった。

「気付くのがおせーよ！　『掌握』」

自身にかかっている何かしらの魔法を溶かそうと動いた瞬間、幸利の闇魔法が発動した。

通常であれば効果を発揮するかどうか怪しい幸利の魔法はあつけなく巨大クリオネに通った。ビクン、と一度大きく痙攣をして沈黙する。

『おおつ、動きが止まったのじゃ！』

「……あれからさらに腕を上げてる」

「マモルさんの予想も当たってましたね！」

巨大クリオネは魔法に対しての耐性が高い。だが、それは魔法すら溶かすという特性ありきのものだ。

つまり、魔物そのものの魔法への耐性が低いからそれで補っているのではないか？　と北条は仮説を立てたのだ。そしてそれはズバリ当たっていた。

「お褒めに与り光栄——って言えたら良いんだけどな！　これでもあんまりは保たねエぞ！　南雲オ、ユエさん！　準備は出来てんのか!?!」

だが、闇魔法は相手の格が高ければ高いほどに使用する魔力が必要になる。どうやら今回の相手はそんなじよそこらの魔物とは格が違うようで、恵里の魔法によって格を落としたと言うのに、気を抜けばすぐにでも支配が解けてしまいそうだった。

当然ではあるが、恵里の魔法が解けてしまえばその時点で計画は台無しになる。精々保ったとしても三十秒が限界だ。汗を流しながら幸利は怒鳴るように叫んだ。

「ん、コツは掴んだ。何時でも行ける」

「大丈夫、僕も準備は出来てるよ。それじゃあテイオさんお願い！」

『よかろう。では行くぞ！　しっかりと掴まっておれ！』

ハジメが取り出したのは、メルジーネ海底遺跡でも使った爆弾であった。それも威力が弱めではなく、一番強いものである。それを十枚ほど用意する。当たれば確実にオーバーキルだ。

巨大クリオネに向かつて真つすぐに飛ぶテイオの背中から落ちないように、鈴が結界でサポートする。近づくにつれて巨大クリオネの形が球状になっていき、ストックしてあつただろう半透明のゼリーが海の中から飛び出してきて集まっていく。

闇魔法で一時的に行動を掌握した幸利が出した命令は二つ。

自身を構成する半透明ゼリーを全て一塊にする事。

そして、あらゆる外部からの干渉に対して無反応になる事。

それによつてこの魔物は、魔法が効いている間はただの的になる。たとえ素手で触つても溶けることはないだろう。

途中で北条を回収して、半径五十メートル程の巨大な球状となった半透明なゼリーの塊の側に近寄ると、ハジメは爆弾札を投げつけた。

トプン、と水音がして爆弾札が半透明ゼリーの中に飲み込まれていく。溶けたりする様子が無い事から北条の予測は正しかった事が判った。

「『界穿』！」

しつかりと爆弾札が当たつたのを確認してからユエがあらかじめ発動待機状態にしていた『界穿』を発動させて、皆を乗せたテイオが大きめに作られた入り口に身体を捻じ込んでその場から離脱。

約三百メートル程離れた地点にある出口から脱出した瞬間――

「……！」

「~~~~~っ！」

結界を貫通するほどの轟音と衝撃が北条達を襲う。最早音の衝撃波だ。

卑劣な爆弾札十枚もの威力はこれだけ距離を取つてもしつかりと伝わってきたのだ。

特に聴覚の鋭いシアは目を回してしまっている。

『き、キーンと来たのじゃ……。まさかこれほどの威力とは思わなんだ』
「僕もちよつとやりすぎたかなつて思つたよ……」

「ま、魔物は倒せたのかな……？」

あまりの威力に海面が大きく揺れている。聞こえるのは爆発の後の余韻の音と波のさざめく音のみ。

しばらく待ってみても魔物は一向に姿を現さない。どうやら今の
で全て吹き飛んだらしい。

「出てこないな」

「うん、終わったね…」

「……ん、疲れた」

「うう……頭がくらくらしそうです……」

戦闘が終了した事で気が抜けたのか、魔力を使い果たしたユエが座
り込む。上級、最上級魔法の連発に加え、難易度の高い空間魔法を行
使したため精神的な疲労が大きかった。

ユエだけでなく、ほぼ全員が魔力が底を尽きかけていたのでかなり
ギリギリの戦いだった。

「…うん、それじゃあ改めて潜水艇を出すね」

「うえ〜…潮風とか海水でベタベタだ〜。取りあえずシャワーを浴び
て泥のように眠りたいな」

『流石の妾も疲れたのじゃ…。何はともあれ、まずは休息じゃな…』

ティオが海面近くまで下降して、ハジメが潜水艇を取り出す。

色々と訊きたい事、話したい事はあるが体力的にキツイので一先ず
後回しにして安全な潜水艇内で休息をとる事になった。

顔を出した朝日の光が海面に反射してキラキラと、勝利を祝福する
ように光っていた。

「つまり、ティオさんは竜人族の生き残り『クラルス一族』の首領さん
の孫娘で、強大な魔力と共にこの世界に降り立った勇者一行を調査す
るために俺達の旅に付いてきたと」

「それで僕達の人となりを把握して、話してしまっても問題ないと判
断したと」

「うむ、その認識で合っておる。事情があったとはいえ、騙すような真
似をしていたのは事実。今まで黙っていて済まなかったのじゃ」

頭の後ろで手を組んで背もたれにもたれかかる幸利の言葉に行儀よくテイオが頭を下げる。

潜水艇に乗り込んでから八時間後。しつかりと休息をとって体力を回復させた一行はリビングルームに集まっていた。これからの方針を話し合う必要があつたし、テイオの事についても色々と言ふことがあつたからだ。

素直に事情を話して謝罪したテイオに対して不満を言う者はいなかった。むしろ「ああ、成程」と納得したくらいだ。竜人族と言うのは世間一般にはすでに絶滅したとされており、その原因は聖教教会に、ひいてはエヒトにある。

勇者である天之河は現在、ハイリヒ王国の首都に居る。しかし、聖教教会の勢力が強いそこに近づけなかつたのも当然である。

「事情があるなら仕方ないよね。鈴は全然気にしてないよ！でも竜人族かく。すぐくカツコ良かったよね、エリリン！こう、ビューッと飛んでぐわーって炎を吐くんだもん！」

「う、うん…、凄かったよね…！」

口々にテイオの竜化形態についての感想を言い合う。概ね好意的であり、素直な賞賛にテイオは少しむず痒そうにしていた。テイオの隠し事や種族について悪い意見は出なかつたので、どうやら許されたようだ。

「…許されたようだな。ならば俺も——」

「あ、まもるんはしばらくそのままだよ。鈴ちゃんはまだ怒っていません」

「……もうちょっと反省する必要がある」

「……そうか」

北条は、部屋の片隅で床に正座させられていた。

首から下げた板には『私は危険な行動をしました』と書いてある。テイオが許されたことで便乗して立ち上がったとしたが、鈴とユエに睨まれて静かに正座し直した。

北条の防御能力は知っている。今更それを疑う余地は無い。理屈の上でも必要だつたと言う事も分かる。だが、一人である危険な魔物

の攻撃を受け持つのは流石に心配だったのだ。

彼自身の耐性もあり酸によるダメージは殆ど受けていなかったが、アザンチウムが編み込まれている上着はすっかり溶けてしまっており、ドラゴンボールの戦闘後のように上半身の服が殆ど消え去っていた。

何か一つ間違えていたら怪我どころでは済まなかったかもしれないのだ。

「ま、まあまあ。作戦は上手くいったんですし、マモルさんも大きな怪我は無かったですから、そろそろ許してあげたらどうですか？」

「う、うむ。あの姿勢では辛からうて。もう十分なのではないか？」

「……ダメ。エリセンに着くまではこのまま」

椅子から立ち上がったユエは、トコトコと北条に近付くと、正座しているその膝に腰を下ろした。

「……！」

少しだけ痺れ始めている足にかかる負荷。いかに体重が軽いとは言えキツイものがある。とは言え、北条の顔には全く表情が出ないで、全く堪えていないように見える。

「あつ、鈴も座る！ ユエユエ、片方空けて〜」

「ん、分かった」

「……っ！」

そこに鈴が加わった。左足にユエ。右足に鈴。のしかかる二人分の体重。普通なら柔らかい感触に鼻の下が伸びそうなシチュエーションのだが、今は足が痺れていてそれどころではなかった。

「あ、ちよつと辛そう」

「モテモテじゃねエか。あく羨ましいなく」

ハジメと幸利がニヤニヤしながら見守る。明らかにこの状況を楽しんでいて。

助けを求めるようにシアとティオに視線を向けるが目線を逸らされる。恵里は我関せずと言わんばかりに茶をシバいていた。

「……」

詰んだ。どうしようもない状況になった。最早、エリセンに着くま

で耐えるしかない。

足に痺れを感じながら、北条は無表情のまま項垂れた。幸い、北条の回復力は異常なまでに高いので、正座から解放されればすぐに足の痺れは治るだろう。それを見越しておお仕置きだった。

その後も動けないのを良い事に、エリセンに着くまで二人に好き放題にされる事となった。

王都く神山攻略開始

消えろ、イレギュラー！（遺言）なRTA、はーじまーるよー！
前回はメルジーネ海底遺跡をクリアしたところまででしたので、今回はその続きからですね。

日付は27日目、今回の迷宮は入ったら時間が止まるタイプの迷宮だったので、入る時そのままです。

さて、何はともあれ、まずは次の迷宮の攻略です。

お次に攻略するのは神山。聖教教会の本部がある標高8000メートルの山です。ですがその前に、空いているパーティの枠を埋めるために後二人勧誘しておきましょう。

本当は一人だけで良いです。もう片方は必須と言う程ではありませんが、安定して走るため念のために居れば勧誘しておきます。『私は何も間違えない』と自信満々な方はそのまま神山に直行しましょう。

移動中にチャート解説を少ししておきます。

本来であればまずはハルツィナ樹海の迷宮を攻略してから神山に行く予定でした。

それは何故かと言うと、中村姉貴をパーティに啜え入れるためです。

正直な話、中村姉貴は戦力的な意味ではパーティに加える意味はありません。魔法に関してはすでに強力な手駒：もとい仲間がいますからね。

では何故、中村姉貴を仲間に啜えるのかと言うと、それは以前も言ったイベントの消失が関係しています。例えばアンカジ公国に早めに到達した事で熱病イベントが起こらなかつたあれです。

中村姉貴は放っておくと裏切ります。魔族に連絡してホイホイと付いて行ってしまふのです。そして王都とかラストダンジョンで面倒くさいイベントを多数発生させてくれやがります。ついでに檜山兄貴とかも連鎖して裏切りやがります。あーもう滅茶苦茶だよ。

その裏切りのタイムリミットが40日目なのです。つまり、中村姉

貴の裏切りイベントをスルーするためにはそれまでにパーティに啜える必要があるのです。

啜えなければ原作同様、何人かキャラロストする上にクソ長いイベントシーンを強制的に見せつけられることとなります。

40日目までに中村姉貴をパーティにずっと入れておけば裏切りイベントは当然発生しなくなります。そして、それに連鎖して起こるフリード兄貴の王都襲撃や檜山兄貴の裏切りも同様に発生しなくなります。良い事尽くめだあ…。

ですが、王都からハルツィナ樹海に行くためには最短でも3日かかります。

そして、ハルツィナ樹海で次に霧が晴れる日が37日目です。

なら日数的に間に合うので神山↓ハルツィナ樹海でいいじゃんと思うかもしれませんが、中村姉貴が王都に出没する日数が27日目以降は35日目、37日目〜40日目朝までになっているため、40日目以外では啜え入れるためにハルツィナ樹海の攻略可能日をスルーする必要があるのです。

ハルツィナ樹海の迷宮は、一度スルーしてしまえば20日経たないと再入場できないので、本来のチャートとしては『37日目にハルツィナ樹海↓40日目に王都に立ち寄って中村姉貴を回収してから神山攻略』となります。

ですが、運よくブルツクの町で啜わってくれたのでそのチャートはキャンセルだ。

素直に神山↓ハルツィナ樹海の順番で攻略します。大体20分くらいの短縮ですかね？

私は運ゲーが嫌いなのでブルツクの町で中村姉貴が加入しない前提でチャートを組みましたが、今回はラッキーでした。

そもそもファストトラベル機能があればこんな面倒くさい計算をしなくても良かったのに、どうしてこうなってしまったのか…。一応、『ワープポータル』というアイテムがありました、各町に設置すればポータル間を一瞬で移動できるようになるんですが、それが解禁されるのはラスボス撃破後なんですよ…。

クリア後にストレス解消機能を開放するとか開発者は何考えてるんだか。

閑話休題。という訳で、次は神山を攻略します。

「うわあ、ここが王都ですか！ 高い建物がたくさんですね！」

「……夜でも明るい。魔石を使った街灯がお洒落」

「ふう、戻ってきたね。取りあえず宿をとって、皆に会いに行くのは明日にするのはいかがかな？」

「王宮ならタダで泊まれるんだけどな」

「それじゃあ久しぶりの王宮にレッツゴー！」

「妾が行って大丈夫なんじゃろうか……」

「き、きつと大丈夫です。私達の紹介があれば、多分……」

おっと、そんな益体もない事を話している内に王都に着きました。現在は30日目です。

ハイリヒ王国の王都は、このゲームの中でも屈指の広さを誇ります。面積だけで言えばアンカジ公国の1.5倍くらいですね。街中で迷う事もしばしば。じゃけんあらかじめマップは作成しておきましようね。

現在の時刻は夜ですが、昼になると街の様子が変化するので色々と探索してみるのもいいかもしれません。王都ならではのサブイベントも充実しており、クリアすることでトロフィーがもらえたり特殊なアイテムが手に入る事があります。まあ、RTAなので今回は全部スルーしますがね。

ちなみにテイオ姉貴がスキットとかで「竜人族である自分が迂闊に王都や教会に近付くわけにはいかない」みたいな事を宣いますが、テイオ姉貴を先頭にして王宮や神山の聖教教会本部を訪ねても何も起こりません。

さて、王都でやる事なのですが、まずはアイテムの補充です。道具屋でポーション類を補充しまして、食料品が少なければ食料品屋で補充します。ちよつとマジックポーションが少なめなので買っておきましょう。

……はい、補充が終わりました。そんじゃあ次行きましょ。

それではこれから神山に向かいますが、神山は王宮から行けるのでまずはそこに向かいます。

今回の目的の人物は31日目に王宮に出発するので一晩泊つていきましよう。王宮であれば無料で泊まれるのでおススメです。なお、ユエ姉貴、シア姉貴やテイオ姉貴も普通に通してもらえます。

勇者一行が相手とは言えなんてガバガバなセキュリティなんだあ…。

メイドさんに話しかければ宿泊するかどうか訊かれるので、「はい」を選べば大丈夫です。

この時、王宮にいるクラスメイトに話しかければ『おかえりなさいイベント』が起きますがロスになるのでキャンセルだ。

あ、檜山兄貴だ。オツスオツス！ ごめんね、ゆつくり話すのはラスポスを撃破してからにしようね。

＜王宮で一休みすることになった…

＜朝になった

王宮で休憩を取ると暗転して翌日になるだけで特にイベントなどは発生しません。日数を早送りしたい場合は宿屋で休むよりこつちの方が効率的です。

さて、31日目になりましたので目的の人物に話しかけましょう。訓練所に居るのでそこまで移動します。

「久しぶりだね。無事で何よりだ。随分と大所帯になったみたいだけど寄り道をしていたのか？ 皆心配してたんだからなるべく早く戻ってくるべきだ」

お久しぶりです師範！ よろしくお願ひします！

そんじや誘いますよ。勇者を誘って大丈夫なのか？と思われるかもしれませんが、普通に大丈夫です。

補足ですが、天之河師範は何らかの補正が働いているのか何があってもストーリーの終盤までは生きてます。

試しにオルクス大迷宮で魔族に襲われる日時（40日目昼）に奈落ハジメくんをパーティに入れてスルーしても何故か普通に生還してました。

なお、絶対に生き残るのは天之河師範だけで、他のキャラは場合によつてはロストする模様。確か5人くらい帰らぬ人になってましたが、むしろあの状況から5人の犠牲で済ませたのが凄いなと思います。調査中には八重樫姉貴とか白崎姉貴も普通に氏んでましたね。

「世界を救うためにはもつと力がある。悔しいけど今のままじゃまだ足りないのは事実だ。北条が神代魔法とやらを手に入れて強くなったのなら、俺だつてきつと強くなれるはずだ。もちろん同行するよ」

あ、ちなみにですが、ブルツクの町で愛ちゃん一行と再会した時点でほもくんの行動は皆に伝わってます。という訳で9人目のパーティメンバーは『天之河光輝』です。性能についてはまた後ほど説明しましょう。

10人目のメンバーですが、ちょうど隅つこの方に居ますね。神山に行くためのリフトまでの道中で探して、そこで居なければスルーする予定でしたのでラッキーです。

「ハジメくん、久しぶりだね。それに北条くんも無事で何よりだよ。話は愛ちゃん先生から聞いてたけど大きな怪我が無くて本当に良かった」

白崎姉貴オツスオツス！

最後のパーティメンバーが『白崎香織』です。万が一の時のための回復薬（誤字にあらず）ですね。ポーシオン類は十分に確保していますが、最後の方になると敵の攻撃も痛いので保険のために啜っておきます。恐らくは大丈夫ですがここまで来て再走なんてしたくないですね。

「うん、もちろん私でよければ力になるよ。これからよろしくね」
よろしくナス！

これでパーティメンバーが10人になりました。これにて布陣は完成、このメンバーと、後はワンポイントの助っ人で駆け抜けます。

もう王宮に用は無いので神山に向かいます。さっそく扱き使ってやるからなく。神山は、王宮の外れにある塔から行くことが出来ます。屋上にある円形の足場みたいなのに乗ればOKです。

では、『移動する』を選ぶ前にパーティの編成です。天之河師範と清

水くん、テイオ姉貴とシア姉貴を入れ替えて、ほもくん、ユエ姉貴、天之河師範、シア姉貴をフロントに配置します。当然、隊列はほもくんを一番前にして、少し下がって左右に天之河師範とシア姉貴を、ユエ姉貴は定位置の最後尾です。

バックにはいつも通りハジメくんと、今回は谷口姉貴に外れてもらってテイオ姉貴に入ってもらいます。テイオ姉貴の補助効果は『主人公が行動するごとに物理・魔法の複合攻撃を行う』です。

物理耐性が高い敵には魔法攻撃、魔法耐性が高い敵には物理攻撃として働くのでどんな敵にも一定の効果は見込めるそこそこ便利な補助効果です。

＜この装置に乗れば神山に行けそうだ

＜装置を起動しますか？

ではイクゾー！

神山に着きました。そして、着いてすぐイベントバトル発生です。魔人族との戦争が発生していない状態で4つ以上の迷宮をクリアしていることが発生条件です。

「初めましてイレギュラー。私はノイントと申します。神の使徒として主の盤上より不都合な駒を排除させていただきますのでお覚悟を。」

ノイント姉貴オツスオツス！ このワルキューレって感じの格好をしたヤツが今回の相手です。ベラベラと説明してくれてますが大雑把に要約すると、エヒト兄貴が「勇者一行が順調に行き過ぎててもイベントが行らないから退屈だえ」と駄々をこねた結果、ほもくん一行を排除すれば面白いことになりそうだと言う事になって刺客を差し向けてきた感じですよ。

やはりエヒト兄貴は人間の屑、ハッキリわかんかね。

正々堂々名乗りを上げてきたのでボコしてやりましょう。

此方も抜かねば…無作法というもの…。

＜『使徒ノイント』が襲い掛かってきた！

神山最初にして実質ボスである『使徒ノイント』戦の開始です。

ノイント姉貴は、原作設定でもあったようにスペックが凄まじく高

いです。全ステータス10000オーバーと言う奈落ハジメくんにも決して引けを取らない性能を誇ります。

接近戦、魔法共に高水準の戦闘能力があり、回復を使つてこないという一点以外は非の打ちようがないやっかいな敵です。ですが、ノイント姉貴で一番やっかいなのが固有技能の『分解』です。

その効果はなんと『即氏効果』です。双大剣による近接攻撃と、滅光”という魔法に追加効果として付与されているのですが、どれだけ状態異常耐性があるうとそれを貫通して即氏させてきます。

防ぐ方法はただ一つ、『魔法ダメージを100%カットする』ことです。

どうやらこの即氏効果、『魔法ダメージを1以上与えた時に対象の最大HP値の追加ダメージを与える』という仕様のようで、例えばレベル200にして魔耐をカチカチにして挑んでも即氏させられます。

ここでほもくんの防御時に魔法100%カットが生きてくるわけです。谷口姉貴をバックに入れても素のままでは60%カットにしかならず、結局防御しないと即氏するので今回はお留守番になったという訳です。

幸い、挑発は効くのでいつものように開幕でほもくんが挑発します。

「ほうれ、オマケじゃ！ 受け取るがよい！」

ほもくんが行動した事でティオ姉貴の補助効果が発動しました。竜の爪みたいなカッコいいエフェクトが発生してますね。ノイント姉貴は魔耐耐久的なので、今回は物理攻撃として計算されます。

「排除します」

「……お返し。『炎天』」

ノイント姉貴の近接攻撃です。どう見ても物理攻撃ですが、追加で僅かな魔法ダメージが発生します。

当然ですが、挑発しているのではもくんは防御していません。

【技能『起死回生』が発動した！】

まあ、当然の結果として即氏する訳ですが、起死回生があるので凌げます。後は一気に押し切りましょう。

天之河師範お願いします！

「俺が守ってみせる！ 聖剣よ、俺に力を！」

今使ったのが天之河師範のスキル『聖剣の加護』です。

その効果は『自分のステータスアップ&味方の状態異常・能力低下解除&自分の間合い内にいる敵の能力値を下げる』という何ともゴージャスなものです。これがまた強く、天之河師範を強キャラに押し上げている柱になっています。

具体的に効果を言いますと、『自分の筋力、耐久、魔耐、俊敏を10%アップ』および『敵の筋力、耐久、魔耐、俊敏を10%ダウン』です。ヤバイですね。また、このバフとデバフは通常のものとは違う固有枠なようで、他のバフデバフと重ねることが出来ます。

しかも一度使うと戦闘中は効果が永続します！ さらにさらに、『聖剣の加護』はデブレイが無いのですぐさま次の行動に移れます！

これがお値段たったのMP100！

インチキ効果もいい加減にしろ！ と言いたくなるような優遇っぷりです。このスキル、エヒトにも通じるんだよなあ…。どういふことなの…。

これのせいで天之河師範はぶっ壊れキャラになってしまいました。対ボス戦では取りあえず入れておけば仕事をしてくれます。制作陣に枕営業♫したのかな？

「行くぞ！ 万翔羽ばたき、天へと至れ——天翔閃！」

後はダメージ効率の良い天翔閃を連射してもらいましょう。一番威力の高い神威は詠唱時間とデブレイが長いので今回は封印です。現在の天之河師範のレベルは89です。ノイント姉貴の適正レベルが95ですが聖剣の加護のお陰もあって結構ダメージは通ります。

10レベル差程度なら覆せる男、それが天之河師範光輝です。

「全力全開！ これが私の本気ですう！」

シア姉貴は強化魔法を使った後ひたすら轟爆をします。と言うか、むしろシア姉貴は基本的にこれ一本で食っていけるくらいです。物理ゴリラは伊達じゃない。

ユエ姉貴も出し惜しみは無いです。MP効率など考えず威力の高

いのお見舞いしてやりましょう。

「蒼龍」

やっぱりユエ姉貴の火力は…最高やな！ 天之河師範のデバフによってダメージがさらに加速しています。もうすでに3割くらい削れてますね…。

おっと、魔法陣が出てきましたね。色は銀色なので次に打ってくる魔法は「滅光」です。

そのまま受けると即死するので、ほもくんの要塞で流しましょう。「隙だらけじゃのうー！」

ダメージ100%カットなので即死効果も不発に終わります。テイオ姉貴の補助効果も良い仕事してますね。

「消えなさい、イレギュラー！」

あ、ちなみに「滅光」はフィールド全体攻撃です。対策してないと全員即死します。クソみてエな魔法ですが要塞の前では無駄無駄ア！ ほもくんはこれから要塞をし続けるだけの装置になってもらいます。

このように、初見殺しのノイント姉貴もほもくんがいれば完封可能です。要塞は若干デイレイが重いですが、聖剣の加護で相手の俊敏も下がっているので要塞が間に合わない、などという事ありません。やっぱり守護者の防御力を…最高やな！

＜どこからか歌声が聞こえる…＞

＜体の力が抜けていく！＞

ノイント姉貴のHPが50%を切ると、イシユタル兄貴達聖歌隊がデバフを掛けてきます。こっちのステータスを低下させてきますが、それも特に問題ありません。

「聖なる光よ、我らを邪悪から守りたまえ！」

そう、天之河師範ならね。『聖剣の加護』をもう一回使えばあら不思議、デバフが解除されました。ちよつとこのスキル便利すぎんよ。

もう見所さんはないのでちよつとちゃんと終わらせましょう。ユエ姉貴のゲージが溜まってるので止めです。

「これで終わり…『五天龍』」

地・水・火・風・雷の5つの龍を召喚して相手を攻撃する魔法です。相手に一番通る属性での極大ダメージに啜えて火傷・凍傷・裂傷・感電・石化の状態異常判定が発生します。

すごい強いじゃん、と思うかもしれませんが、そもそもボスクラスの敵は状態異常耐性が高く、上記の5つの状態異常はほとんど入りません。肝心の威力に関しても最上級2回分ほどと消費に見合ってます。

つまり、止めの一撃に使うくらいで普通に弱点属性の最上級魔法を乱射してた方がMP効率が良いのです。RTAではリソースも限られているのでポンポン使う事はありません。

「この力……やはり……あなた達は……危険……」

＜戦闘に勝利した！＞

＜少しだけ強くなれた気がする……＞

＜『使徒の器』を手に入れた！＞

これにてノイント姉貴は出番終了です。おつかれちゃーん。必殺技で止めを刺すとハジメくんのオートアイテムは発動しないのでマジックポーションの節約にもなります。後ではもくんから吸血しておきましょう。

「ふい。私達の勝ち」

「ふふくん、どうですか私達の連携は！ 逃れられるもの無し、ですう！」

『使徒の器』がドロップしましたが、これはノイント姉貴を始めとする使徒系の敵を倒すと時々ドロップするアイテムです。ノイント姉貴だけは確定でドロップしてくれます。

これ、フレーバーテキストを見る限りでは使徒の遺体なんですよね……。なお、アイテムのカテゴリは素材な模様。つまり、売れます。

はい、売れます。

普通にギルドの買取窓口とかで売れちゃいます。以前『なんなら使徒とかエヒトとかからドロップした素材とかも普通に買い取ってくれます』と言いましたがそれです。おひとつ300万ルタです。非常に高く売れます。

これのお陰で最後の金策では使徒を狩るのが一番効率が良くなつてしまいます。

狩られて遺体を売られるとかエヒト兄貴も流石に想定外でしょう。やはりイレギュラー…。

あ、今回取得した『使徒の器』は後で使うので売りません。宝物庫でゆっくり死んでいってね！

ノイント姉貴も始末しましたし、とつと神山に殴りこんで神代魔法を手に入れますよう。

雑魚敵としてイシユタル以下聖職者が徘徊していますが、ナニモイウコトハナイ。清水くんの『戦慄の視線』で追い払える程度のレベルです。

それでは進軍しましょう。オラオラ、勇者様一行のお通りじやく！ ついでに金目の物も頂いて売りさばいて今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます。

□どうでもいいオマケ□

「よし、今日はここまで！ しっかり休めよ！」

「「ありがとうございます！」」

ハイリヒ王国の王宮、そこにある訓練場では今日も戦士達が鎧を削っていた。

日が沈む前に訓練は終わり、各々休息をとったり、体力に余裕があったり時間があれば趣味に打ち込んだりする。

「よう、お疲れさん光輝。今日も頑張ってたな」

「お疲れ様ですメルドさん。俺にはもつと力が必要です。こんな所で立ち止まっている訳には…」

「つたく、真面目過ぎんのがお前の欠点だ。もつと肩の力を抜いたらどうだ？」

呆れたように溜息をつくメルド。オルクス大迷宮に最初に行った時から光輝は何かと気負い過ぎているような気がするのだ。勇者と云うのが重圧のかかる重要な立場と云うのはただの騎士であるメルドにも分かる。

だが、だからこそ時には気を緩めることが大切なのだ。ずっと張り詰めていると何かの拍子でいとも簡単に切れてしまう事がある。そうやってからでは遅い。

ここは大人である自分が息抜きの方法を教えてやるべきだと余計な事を思いついた。

ニヤリ、と下品な笑みを浮かべて光輝の肩を叩く。

「たまにはガス抜きでも……おつ、そうだ。街にそれは美人なお姉さんがいる娼館があるんだが、今夜どうだ？ 経験も豊富だから色々と相談にも乗ってくれると思うんだが」

「んなつ！ お、俺は勇者です！ そんな不純な事をするわけにはいきませんよ！」

「勇者だからこそ女を知るべきだ。俺はそう考えてるんだがな」

光輝は女性にモテる。それはもう、騎士の皆さんが齒軋りするくらいに。だが、それに反して光輝は女性を知らないままなのだ。口説くようなセリフは言うのにその先が無い。つまり、女性経験がない。

顔を真っ赤にして反論する光輝をからかっていると、慌ただしい声とバタバタと走り回る音が聞こえてくる。

「白崎が脱走したぞ！ 追え！」

「今週三回目じゃねえか！ 取りあえず城の出入り口を固めろ！」

「吉野がやられた！ 漫画みたいなたんこぶができてる！ 誰か辻を呼んできてくれ！」

「つ、辻ケアル……よろ……」

聞こえてくる声に光輝は「またか……！」と頭を抱えなくなった。

愛ちゃん親衛隊に同行していたハジメ、幸利、鈴、恵里の四人が北条に引っ付いて行ってからたまにこうして香織は脱走しようとするようになってしまった。幸い、今までそれが成功したことは無いし、ある意味では訓練にもなっているのだが、元凶であると思われる北条には一言文句を言ってやりたかった。

溜息をついていると雫が訓練場にやってくる。もしかして迎えに来てくれたのかと思い、光輝は笑顔で出迎えるが、般若のような表情の雫を前にして顔が引きつるのを感じた。

「し、雫…？ どうしたんだそんなに怖い顔をして。雫にそんな顔は似合わない——」

「香織のバカは何処!？」

雫の両手には抜身の曲刀が握られていた。キラリと光る刀身を見てついホルドアップしてしまう。漏れ出す闘気や魔力が原因か、ポニーテールがゆらゆらと海に漂う海草のように揺らめいている。

「し、知らない！ 俺はここでずっと訓練してたんだ！ で、ですよねメルドさん！」

「お、おうそうだな！ 少なくともこっちには来てないぞ！」

「……そう。嘘は言っていないみたいね。お邪魔したわ」

メルドと一緒に必死になって弁明していると、思いが通じたのか雫は踵を返して訓練所から去って行った。背中が見えなくなるまでホルドアップしていた光輝とメルドは、最初にベヒモスを見た時よりも威圧感を感じてチビリそうになっていた。

「……俺も香織を探してきます」

「……おう、無理はするなよ」

しばらく無言の空間が続いていたが、やがて光輝が香織の脱走を止めるために動き出す。最近香織の事を「もしかしてヤバイ奴なのでは？」と思う事が無い事も無いのだが、光輝にとってはずっと一緒にいる大切な幼馴染だ。

それを見送るメルドの目には、何だか光輝の背中が煤けてみえた。

神山攻略〜王都出発

トータス観光ツアーなRTA、はーじまーるよー！

今回は神山をパパッと駆け抜けて神代魔法を手に入れる所からです。前回は実質神山のボスであるノイント姉貴を撃破したので、これからは特に戦闘は殆ど起こりません。

一応、入り口の近くにイシユタル兄貴が居ますが、話しかけない限りは戦闘になりませんのでスルーしましょう。弱いし経験値は無いしアイテムは落とさないしでまず味です。イシユタル兄貴生存ルート。

では、無駄に豪華な教会を駆け抜けましょう。

神山の大迷宮への入り口は大聖堂にあります。原作では畑山姉貴がニコニコ本社してしまったのでカットされてしまいました。今回はそう言ったことは無いのでちゃんとしたルートで進みます。

なお、中村姉貴の裏切りイベントがあれば神山の大迷宮はスキップ出来ませんが、それに付随するもろもろのイベントを加味すると普通に攻略した方が速いです。

教会内部は迷路のように入り組んでいますが、あらかじめマップを調査してありますので迷う事はありません。最短距離で進みましょう。また、道中に置いてある宝箱には金目の物が入っているので、これは回収します。

▽ 宝箱の中には『黄金のネックレス』が入っていた！

▽ 『黄金のネックレス』を手に入れた！

こんなに貯め込んで、やはり宗教と言うのは儲かるんですね。回収するアイテムは『黄金のネックレス』『ジュエルリング』『プラチナムサークレット』『権威の綺羅衣』の4つです。すべて合わせて32万ルタとなっております。それじゃ、もらって行くぜ…。

さて、移動中に神山の大迷宮についての補足をば。ここの大迷宮では、このチャートでは一切戦闘が発生しません。ひたすら順路に沿って進んでいくだけです。

神山の大迷宮のコンセプトは『神に靡かない確固たる意志』を確認

する事です。なので、他の大迷宮をクリアして真実を知っていれば自動的にクリアできます。

それじゃあ天之河師範とか白崎姉貴は大丈夫なの？ という話になります。そもそも地球組は自動的にこの条件はクリアしている判定になっているので問題ありません。あくまでトータス出身のキャラに対しての話なのです。

また、ユエ姉貴やシア姉貴、ティオ姉貴などの宗教に対して好意的ではない、または無関心な一部のキャラクターも初期の状態でクリア可能です。なので、今回のパーティでは実質無料で神代魔法を手に入れることが出来ます。

なお、そうでない者がパーティに居た場合はお仕置き部屋に飛ばされる模様。

＜エヒトを象った像がある

＜どうやら動かせそうだが……？

⇒動かしてみる

そつとしておこう

＜なんと、像の後ろには扉があった！

大聖堂の奥にあるエヒト像を調べれば大迷宮への入り口があります。なお、他の大迷宮を攻略した証を2つ以上持っていないと入り口の扉は開きません。この仕様のせいでトータスに召喚されてから真っ先に攻略しに行くムーブが封じられています。

＜『オルクスの指輪』『ライセンの指輪』『グリユーエンのペンダント』

『メルジーネのコイン』が反応している…。

＜どうやら扉が開錠されたようだ！

すでに4つ、攻略の証を手に入れているので問題なく通れます。例えほもくん以外が一つも神代魔法を持っていなくても普通に通過してもらえます。扉をくぐりまして、後は一本道です。さつさと駆け抜けましょう。道中では直接脳内に宗教勧誘の声が聞こえてきますが、すべてスルーです。

俺は宗教なんかに興味ねえんだよ。二度と話しかけてくるんじゃないよ（倉地くん並感）。

原作では『その意志を確かめるようなあれこれがあつたのでは』なんて言われてましたが、まさかその正体がスパム勧誘だとは…。読めなかった、このリハクの目をもってしても！

「うわわっ、幽霊!？」

「くっ、こんな所にも敵がいたのか！俺が相手だ！」

「あの、天之河くん、これ幽霊じゃなくて何かの立体映像だと思うんだけど…」

しばらく歩くと半透明のハゲが現れて一緒に歩いてくれますが、特に気にしなくても良いです。

天之河師範の反応を見てるとなんか、ライセン大迷宮では一番良いリアクションをしてくれそうですね。リアクション芸人として売りに出せばワンチャン…？

解放者の一人である『ラウス・バーン』兄貴ですね。わざわざこんな所に大迷宮を作りやがった張本人です。教会があるところに大迷宮を作ったのか、それとも大迷宮のある所に教会が作られたのか気になります。本人が無言神代魔法授与兄貴なので真実は不明なままです。

バーン兄貴と一緒に歩いた先にある紋章に乗ればバーン兄貴の拠点にワープできます。

戦闘を終えて大迷宮深部へ向かうほもくん達。途中で出会ったバーン兄貴と一緒に歩いた疲れからか、不幸にも黒塗りの部屋に転移してしまふ。後輩をかばいすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは…。

＜部屋の中央に魔法陣がある

「……大丈夫、罨じゃない。あれに乗れば神代魔法を手に入れられる」「これで神山の大迷宮もクリアだね！」

「何か拍子抜けだったな。まあ、楽に越した事はねエんだが…」

「俺もようやく神代魔法を…。皆、早くあれに乗ろう！」

＜頭になかが流れ込んでくる………！

＜『魂魄魔法』を習得した！

はい、という訳で5つ目の神代魔法である『魂魄魔法』をゲットし

ました。

魂魄魔法は、直接的な攻撃力はありません。主に、敵にデバフを撒くために使われます。が、今回のチャートでは出番は…んにやび。

適性は例によってほもくんは『並』です。中村姉貴が最適、清水くん、ユエ姉貴、天之河師範、白崎姉貴が優、テイオ姉貴とハジメくんが並、シア姉貴と谷口姉貴が不適です。天之河師範は基本的に神代魔法に対して並み以上の適性を持ちます。神代魔法に関しては実質的にほもくんの上位互換ですね。

「今回は今までと違う感覚でしたね。ちよつと気持ち悪いですう」「う、うん。もしかしたら魂を探られてたのかもしれないね」

『魂魄魔法』かあ。治癒術の役に立つかどうかは微妙だけど…」

「これで5つ目だね。後は2つだけど、どっちから行ったほうが良いかな？」

恐らくですが、中村姉貴の言う通り魂魄魔法で神への依存心が無いかチェックされたのでしょうか。（神山関係は結構フワツとしてたので詳しい設定は覚えて）ないです。

それじゃあ攻略証明の『バーンの指輪』を回収しておさらばしましょ。側にある机にバーン兄貴の手記があります。日記みたいなもので、懺悔とか大迷宮を攻略した人に対してのメッセージとかが書いてありますが、当然そんなものは無視です。読むだけ無駄なのでね。帰りはワープで教会の出口まで送ってくれますので楽チンチンです。一応、神山はそのものがダンジョン判定なので、ここで飛空艇には乗れません。しっかりと行儀よくリフトに乗って降りましょう。

さて、これからの予定ですが、現在は31日目です。ハルツイナ樹海の攻略日は37日目なので、移動にかかる3日を除けばかなり余裕があり、特にやる事も無いので自由行動です。

ちなみにヘルシャー帝国とハウリア族のあれこれは60日目以降に発生するので、今回のチャートでは出番は無いです。ヘルシャー帝国の皇帝であるガハルド兄貴は、出番が無くても最終決戦でイベントだけ出演するのですが、当然ほもくんとは面識がありません。

それなのにほもくんの事を知った風に演説をし始めるので、「何か

知らないオツサンが知り合い面をしてる…」という奇妙な現象が発生します。まあ、実際には色々と情報を集めているのですが、プレイヤー目線では何の前触れもなく出現するので「誰これ？」とならざるを得ないわけですね。

リリアーナ姉貴でも同じ現象が起こるので、後方彼女面と呼ばれているとか。

小ネタは置いておいて、自由行動についてなのですが王都で過ごすとうと思いません。

朝昼は適当にデートでもしておいて、夜になれば王宮で即就寝です。これを33日目まで繰り返してから34日目に出発、36日目にハルツイナ樹海に到着してフェアベルゲンで一泊、翌日にハルツイナ樹海の大迷宮を攻略するという流れになります。トータス観光ツアーか何か？

あ、ちなみにですが、デートをする際にはユエ姉貴と谷口姉貴は誘わないようにします。いつの間にか友好度が100になっていたユエ姉貴と谷口姉貴は個別イベントが起こると告白される恐れがあるのでね…。

彼女が出来るると自由行動の時間が奪われたりイベントが増えたりしてロスになるので居ない方が良いです。まあ、最後の方になると彼女が出来ても大きな影響は無いのですが…。

じゃけんほもの事が好き（意味深）な2人は放置して他のメンバーとデートしましょうね。オススメは中村姉貴かティオ姉貴です。まだ友好度が5なので絆イベントが起こりませんから。天之河師範は王都に居る時は訓練ばかりしてるので、話しかけると交流（物理）になってしまいます。

今回は中村姉貴にしておきましょう。パーティメンバーが居る所にはパツと行けるようになってるので楽チンチンです。どうやら、中村姉貴は本屋に居るみたいです。この世界の印刷技術ってどうなっているのかコレガワカラナイ。異世界特有の技術とっておきましょう。

〈『中村恵里』と本屋で出会った

「あ、北条くん。北条くんも本を見に来たの？」

ぼくはエロ本を買いに来ました(迫真)。という冗談はさておいて、中村姉貴は結構気さくに話してくれます。まるで普段のオドオドした態度が演技に見えるなあ(棒読み)。

キャラによって自由時間に行きやすい場所があるようで、中村姉貴は地球では図書館とかに出没しやすいです。個性が出てて良いですね。会話の選択肢は適当でいいです。

〈トータスについて書かれた本を探しに来た

「や、やっぱりそうなんだ。実は私も…その、降霊術師だと戦いではあまり役に立ててないし…」

〈そんな事はない

「……あ、あの、北条くんって私の天職についてどう思う？ その、別に変な意味は無いんだけど正直な感想を聞きたくて…」

〈降霊術師についてどう思うか聞かれた

⇒優しい天職だと思う

「えっ、そ、そうかな…？ ありがとう、何だか少し自信を持てた気がする…かな」

〈どうやら元気が出たようだ

〈その後も楽しく話を続けた

〈『中村恵里』との仲が深まった！

これで中村姉貴との友好度は6です。なので、絆イベント回避のため今回はテイオ姉貴を誘いましょう。テイオ姉貴は服飾店や骨董品屋に出現しやすいです。女の子をとつかえひつかえする男の屑にして主人公の鑑。ちなみに、最後の『優しい天職だと思う』は寛容が8以上あれば選択できます。元々の選択肢は『頼りになる天職だと思う』『怖い天職だと思う』の2択です。

〈夜になった

〈何をしようか……

「お帰りなさいませ。ベッドメイクは済んでおります」

〈今日はもう休む

「畏まりました。お休みなさいませ」

そして夜になったら即就寝！ とても健康的な過ごし方ですね。

▽朝になった

後はこれを33日目まで繰り返すだけなので倍速しましょう。

×4 甥の木村、加速します。

さて、倍速中にハルツィナ樹海以降の予定をば。

ハルツィナ樹海の大迷宮を攻略したら、すぐにシユネー雪原へと向かいます。7つ目の大迷宮をクリアしたらイベント↓ラスボス戦という流れです。当然、寄り道などは一切しないので、アイテムを補充するのは実質的にこの王都が最後になります。なので、残りのお金でドバーツと買い込みましょう。フェアベルゲンで一泊しますが、ハウリア族のお陰で宿代はかからないので安心！

▽朝になった

おっと、これで33日目ですね。あの後テイオ姉貴を誘いまくったせいで友好度が6になりましたが、報告するのはそれくらいです。当然のことながらユエ姉貴と谷口姉貴はこの3日間、ずっと放置です。通常プレイであればこういう時にサブイベントとかを消化したりするんですがね。これはRTAなので時間が掛かるサブイベントはクビだクビだクビだ！

それじゃあ出発しましょう。飛行艇を使えば道中のエンカウントもないので快適です。

なお、原作でハジメくんは当然の権利のように自然破壊をしながらフェアベルゲンに着地しましたが、このゲームではハルツィナ樹海の上では飛行艇から降りることが出来ません。ちゃんと樹海の入出口で降りて、行儀よく入ることになります。

×4 甥の木村、加速します。

ハルツィナ樹海の大迷宮ですが、戦闘は2回だけで後はひたすらイベント会話が垂れ流されるだけです。

敵もそこまで強くないので特に苦戦することなく攻略できると思います。少なくとも私は一回も負けたことはありません。

▽夜になった……

▽これ以上は行動しない方が良いでしょう

「そう言えば、こっちに来てからこういうった形でキャンプをするのは初めてな気がするよ。その、結構本格的な料理みたいだけど、いつもこんな感じなのか?」

「俺も最初はマジで驚いたがいつもこんなのだぞ。おつ、今日は…なんつったつけコレ? お袋が結構作ってくれてたけど名前が分からねエ」

「スコッチエッグって言うらしいです! 衛さんに教えてもらいました! 後は余ったお肉と野菜と一緒に炒めたやつがありますよ!」

「ふっふっふ…モチロン、お米も炊いてあるよ、しかも釜で炊いたやつ!」

「初めちよろちよろ中ぱっぱ、ブツブツいうころ火を引いて、ひと握りのワラ燃やし、赤子泣くともふた取るな…この通りにすれば美味しく炊けるんだから、昔の人達の教えは大切だよね」

「うむ、コメか…: 竜人族の里でも育ててみるように進言しておくのも良いかもしれぬ。見たところある程度保存も利くようじゃしな」

「…: お米は炊いている時の湯気が良い匂いだから好き」

「ハジメくんのは大盛にしておくね。そう言えば右の奥歯に虫歯があったと思うんだけど、旅をしている時は大丈夫だった?」

「ええ…: そんな、平安時代みたいな盛り方をされても食べきれないよ。と言うか何で香織さんが僕の虫歯の事知ってるのさ…: 両親と衛しか知らないのに」

流石に10人ともなると大所帯ですね。そして相変わらず、飛行艇で移動しているのにキャンプは外でやっています。今日は肉と野菜なので翌日は物理系のステータスに恩恵があります。まあ、ずっと移動してるだけなので意味はありませんが。

食料はある限り勝手に使われるので、節約のために食事抜きとかは出来ません。

「あー食った食った。腹が一杯になったから眠くなってきやがった…」

「食材はこっちの世界のだけど、久しぶりに日本の料理を食べた気がするよ。まだ何か月も経ってるわけじゃないのにすごく懐かしく思

えてくるな。きっと日本を恋しく思っている人もいるはずだ」

「そうだね。早いところ帰還手段を見つけないと。神代魔法で何とかなると良いんだけど…」

狭いテントに男が四人。何も起きないはずがなく…。

小ネタですが、テントの大きさは大中小の3種類があり、4人までなら小さいテント、5人から8人までならちよつと大きめ、9人以上であれば大きいテントになります。

男子は4人なので小さいテントですが、女子は6人なので中サイズのテントを使っています。

「ユエさん、自動再生で虫歯とは無縁だとしてもちちゃんと歯磨きはしてくださいー！」

「…すでに再生魔法で最良の状態にまでしてるから大丈夫。普通に歯磨きするより綺麗になってる」

「なんと無駄な神代魔法の使い方。すでに使いこなしておる事を褒めるべきなのか、それとも不精であることを諫めるべきなのか…：どうすれば良いか分からぬ」

「このテント、ハジメくんが作ったんだ…。すごく過ごしやすいね。まるでハジメくんに包まれてるみたい…」

「いや、その理屈はおかしいよカオリン。流石に上級者過ぎるってば」「あの、鈴も似たようなものだと思うんだけど…。この中に居ると自分がまともに思えてくる…」

さて、次回はウサミミ一族に一晩泊めてもらった後ハルツィナ樹海の大迷宮をパパッと攻略して今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

幕間：ハイリヒ王国にて

ハイリヒ王国の王都は、現在活気に満ち溢れていた。

魔族との戦争が近いと言われていたのに、そんな事を感じさせないくらいに人々は普段通りに生活をしている。ここ最近の話題は、もっぱら勇者一行の事についてだ。

オルクス大迷宮のベヒモスを打倒し攻略階層を大幅に更新した、あのヘルシャー帝国の皇帝との決闘では互角以上に渡り合った、勇者だけではなくその一行も劣らぬ実力があるらしい、などなど日が経つにつれてどんどんと華やかな活躍や噂が市井の間で広がっていく。

王都で一番注目を集めているのは、間違いなく勇者である天之河光輝であった。

しかし一方で、それ以外の、特に田舎で最も注目され、感謝されているのは畑山愛子（25）だった。

畑山愛子は作農師である。今までの作物の収穫を何倍にもできるように、そして何よりも安定して作物を収穫できるようにするだけの能力があった。トータスに召喚されてからまだ半年も経っていないというのに、すでに飢えて泣く子供がほとんど居なくなっただけと言え、その凄まじさが伝わるだろう。

方々の町を、村を風潰しに回って食糧事情を改善し続けた彼女は、おそらく救った人の数であれば勇者一行で最も多いだろう。貧困な村ではすでに彼女を女神のように崇めている所もあると言う。

その注目を集める勇者一行は、現在王都の王宮に集結していた。

『これからの方針について、そしてこの世界の事について重大な事が分かったので一度直接集まって情報を共有したい』

伝書魔物であるヘルメスがそう書いてある手紙を持ってきたのが十日ほど前。

地球への帰還手段を探している北条チームからの提案とあっては無視が出来なかつたので、天河チーム、愛ちゃん先生チーム、檜山チームで日数を調整してこうして王宮に集結したのである。

そうして昼時が過ぎた現在、こうして食堂を一時貸し切りにしても

らって顔を突き合わせている。その際に一悶着起こったりしたが、ここでは割愛させてもらおう。

なお、この食堂には空間魔法をかけてあり、一時的に外部から完全に切り離されているので、ここでの会話の内容が外部に盗聴される恐れが無いように配慮されている。

「久しぶりだね北条。手紙で近況は伝わっていたけどまずは無事で何よりだよ。すぐに帰ってこなかったことについては色々と言いたい事はあるけど、何か収穫があったんだろう？ この世界を救うために必要な情報なら隠さずに話してほしい」

天之河チームを代表して、光輝が言う。天之河光輝の悪い癖として、自分の言いたい事をノンストップでワーツと言ってしまおうという点がある。それは子供のようだとも言えるし、老人のようだとも言える。

しかし、言っている本人には一切悪気はない。

「お前に向ける言葉はない。情報については、話せることは話す」

北条チームを代表して、北条が言う。北条衛の悪い癖として、自分が言いたい事を短縮しすぎた結果、全く違う意味の言葉としてアウトプットされてしまうという点がある。それは子供のようだとも言えるし、老人のようだとも言える。

しかし、言っている本人には一切悪気はない。

この二人はいつもこうだった。札付きの不良と言われる北条を、優等生と言われる光輝が説教するために詰め寄るが、お互い勝手に喋るので会話が成り立たない。会話が成り立たないから何時まで経っても話が終わらない。だから、同じやり取りを何回も繰り返すのだ。

そのせいで一部の間であまりよろしくない噂が広まってしまおうのだがそれはまた別の話である。

「北条、お前はまたそんなふざけたことを！」

「あ、前半のは『お前に苦労や心配をかけてしまった事については謝罪の言葉もない』って意味だからね。天之河くんも落ち着いて」

すかさずハジメがフォローに回る。地球に居た頃であれば放っておいたのだが、今は大事な情報共有の時間なので、いつものように二

人の中で言葉のノーコンキャッチボールが行われるのはマズいからだ。

「久しぶりに顔を見れて、何よりこうして全員大きな怪我も無く揃う事ができて先生は嬉しいです。皆も前と比べればすごく良い顔をするようになりました。それはきつと、それぞれが前に進もうとする気持ちをもつて一日一日を過ごしている証拠なんだと思います」

愛子は、まるで卒業式の時の校長先生の話みたいなことを言い出した。

トータスに召喚された時の不安と焦燥に満ちた表情をする者はない。こちらに来てから生徒達は一回りも二回りも大きくなった。今では魔物との戦闘中に軽口を言い合うことが出来る程の余裕があった。

嬉しさ半分、寂しさ半分と言ったところである。

生徒達が成長する事は嬉しいが、やはり先生として頼りにしてほしいと言う気持ちがあった。

「二応俺達の方もグリユーエン大火山だけは攻略して来たんだが、そっちはもう四つもだろ？ そろそろ他の大迷宮もクリアしてきたんで攻略情報頼むぜ？」

そして檜山チームの四人。中野、斎藤、近藤と合わせて四人で冒険者チームを組んで、各地で活動をしている。現在は金級のチームとして名を上げている。

アンカジ公国で発生した熱病の原因となっている魔物を討伐し、治療薬の材料である静因石をグリユーエン大火山から大量に持ち帰った事で、異例として銀級に昇格。そのついでに大迷宮を干乾びそうになりながらクリアしたらしい。

そしてフューレンでの奴隷市大捕り物で金級へとこれまた異例の昇格をした。

四人がフューレンに滞在していた時にたまたま奴隷オークションがあると言う事を耳に挟んでこっそりと見に行った際、海人族の子供が檻の中で泣いているのを見てキレて、その場のノリで全員ボコボコにしてふんじばったのだ。

なお、ギルドへ相談無しに奴隷オークションへ討ち入りをしたのでギルド長から事情聴取をされたのだが、容疑者である四人は『イエスロリータ、ノータッチ』『かわいそうなのは抜けない』『異世界特有のガバガバ倫理だったのでつい』『俺何かやっちゃいました?』などと供述していたという。

海人族はハイリヒ王国で大体的に保護されているのでギルド長も四人に対して大きく出ることが出来ず、そもそもその奴隷オークションを開催していたフリートなんちゃらとかいう組織には手を焼いていたので感謝の意も込めて金級へと昇格となったのだ。

なお、保護した海人族の子供は責任をもって親御さんの所に届けた。

「そうだな。そんじや、こっからは俺が話させてもらうぜ。北条だど話がややこしくなりそうだからな」

手を上げてから清水が立ち上がる。

勇者一行のチームがそれぞれで名前を上げていく一方で、これと言つて話題に上がらないのが北条チームだった。冒険者ではなく、かといつて方々で何か功績を残しているわけではない。

ユエ、シア、テイオのような顔だけで食べていけそうな美少女がいるので瞬間的に話題にはなるが、数日もすれば誰もが忘れてしまう程度のものだ。

だが、こつそりと大迷宮をクリアして神代魔法を集める事が目的なので、むしろそれは好都合だった。

あらかじめ情報をまとめた紙を手に情報を伝えていく。

『反逆者』と呼ばれる者達の真実に始まり、エヒトこそが戦争の黒幕である事、神代魔法と言うものがある事、大迷宮をクリアすれば手に入る事、など手に入れた情報は隠さずに開示した。

情報の共有は非常に大切な事である。当然ながら情報を知る人が増えると漏洩の恐れがあるが、それは特に問題なかった。何故ならば北条達が次に行くのは神山だからだ。

神山には聖教教会の本部がある。エヒトの息がかかった場所で大迷宮に挑むのだ。あくまでも『帰還手段を探している』としか伝えて

いないのに、世間一般では知られていない大迷宮に挑めば間違いなく世界の真実に辿り着いたことはバレルだろう。

十分ほどの時間を使って清水が語り終えた時、生徒達の間には表現できない空気が渦巻いていた。

「……そんじや俺達はそのエヒトとか言うやつに良い様に玩具にされてるってわけかよ」

天之河チームで前衛を務める坂上龍太郎が腹立たし気に吐き捨てる。

生徒の半数は彼と同じ気持ちだった。勝手に呼び出されて、勝手に戦争に参加させられて、あげくにはそれが神の娯楽だと言う。これで良い気分で居られるものはこの場に居なかった。

「成程なあ、ありがちな設定だぜ。つーか、グリューエン大火山を攻略した時にはそんな事は聞かされてねえんだけど。なんか壁に文字が出てきただけだったぞ」

「僕達が攻略した時も『人の未来が自由な意思のもとにあらんことを切に願う』っていう文章が出てきただけだったから、グリューエン大火山の迷宮だけが特殊なんじゃないかな?」

檜山達も大迷宮は一つだけ攻略していたが真実は初めて知ったようだった。

それもそのはずで、グリューエン大火山の大迷宮の主である『ナイズ・グリューエン』は神代魔法を授与するための魔法陣と、ハジメが言った通りのメッセージを残したただけなのだ。他の大迷宮であれば真実を知ることが出来たので、むしろそこだけが特殊だったと言えるだろう。

「な、なあ、それは本当の事なのか? 俺達を召喚した神が狂ってるって……だって、人類を救ってくれて頼んできたじゃないか! それも嘘だつていうのか!?!」

「嘘……じゃねえだろうな。ただ、人類と魔族は勝ったり負けたりを繰り返しているらしいから、今回は人類側だってだけだと思っただけ。俺の想像だが、状況が違えば魔族側に勇者一行として召喚されてたのかもしれないな」

信じられないといったふうに声を荒げる天之河に、清水が冷静に返す。

天之河光輝は神託によって人類を救う勇者として召喚された。それなのにその神託を下した神が狂っていたとなれば、人類どころか世界そのものを弄ぶような存在であれば、己という存在の根幹に関わる問題である。

「だが、これは好機だ。……光輝なだけに」

「……………」

「…光輝なだけに」

「……………」

「…………北条くん。あなたって人は…」

「…………光「はいはい、北条は大人しくしてような。谷口、ユエさん、コイツを好きにしていぞ」」

世界の真実を話して皆が取り乱すようであれば、場が荒れるようであれば、と心配して、もしそうだった時のために、和やかな空気に変えるため北条が頑張って考えた渾身の駄洒落。

本人は自信满满で言い放っていたが、食堂に寒い風が吹き抜けるだけだった。誰一人笑わなかった。愛子もこれには呆れ顔。

だが、光輝がポカンとした表情になっていたので、落ち着かせるという意味では効果があったようだ。

「好機…………光輝…………ふふっ」

「むー、むー！（雫ちゃん、何だか笑いの沸点が低くなってる？）」

否、一人だけ笑う者が居た。何があったのか、ロープでグルグル巻きになっていいる白崎香織の横に座っている八重樫雫が、堪えきれないと言ったふうに笑い声を漏らした。

「雫…………優しいんだな。北条のちっとも笑えない駄洒落で笑ってあげるなんて。でも今は真剣な話の場なんだ。つまらない駄洒落に付き合っただげる義務なんて雫にはないんだよ」

「…………」

光輝にとっては特に笑いどころは無かったので、雫が北条を気遣ってわざと笑ったフリをしていると判断した。その際に北条渾身の駄

洒落を糞味噌に貶していたので、北条は少し落ち込んだ。

普段ならここでユエや鈴が慰めるのだが、二人も正直サムいと思っ
ていたのかける言葉が見つからなかった。

「あー、天之河が落ち着いたところで話を進めるぞ。神が狂ってるつ
て所からだつたな。俺達で色々考えたんだが、結論から言うとな神であ
るエヒトを倒すことに決めた」

空気がグダグダになる前に清水が話を前に進める。

神と敵対すると言う言葉に驚く者もいたが、清水はその理由を説明
する。

第一に、エヒトを倒さないと人間族と魔人族の戦争は延々と続くと
言う事。黒幕を倒さないと本来の意味で戦争を終わらせたと言えな
い。

第二に、たとえ戦争を乗り切つて帰ることが出来たとしても、エヒ
トは召喚を繰り返すだろうと言う事。二つの世界を移動する手段が
あると言う事は、最悪の場合としてはエヒトが地球を侵略しに来る可
能性がある。

「それに、戦争が始まる前にケリをつければそもそも戦争なんて起こ
らねエように立ち回れるからな。そうすりゃ大手を振つて帰れるつ
てもんだ」

「だから僕達はこの結論を出したんだけど、皆はどう思うかな？」

最後にハジメがそう締めくくる。北条チームは、とても強い。神代
魔法を手に入れた今となっては、戦えば大抵の敵には勝てるだろう。
だが、相手は曲がりなりにも神の名を冠する者である。

事を構えるのであれば、おそらくは総力戦になる。自分達の力を卑
下することはないが過信する事はしない。きつと北条チームの八
人だけでは戦力が足りないだろう。だから躊躇なく、臆面もなく相談
をする。

「俺は乗るぜ。ぶっちゃけ戦争なんてゴメンだしな」

檜山がチームを代表して賛成をする。檜山は正義の味方という訳
ではないから、正義感から言っているわけではない。世界のためだと
か、トータスの未来だとか、そんな事はあまり興味が無かった。

乗った理由としては、単純に戦争するのが嫌だというのもあるが、第二の理由であるエヒトが地球を侵略しに来る可能性があるというのが大きい。檜山は、自分達が不良寄りの人間だと自覚している。だがそれでも家族や故郷にはそれなりに愛着があるから放っておけない。

それに、何よりも駒として、玩具として扱われているのが気に食わない。用済みになったら切り捨てられるのは目に見えている。だったら、良い気になっている神を後ろから刺してやろうという魂胆だ。

賛成をした事に驚いている者がいるが、一番驚いているのは当の檜山自身だ。

きつと、去年までの自分だったら適当な所で神に媚びでも売って裏切っていたか、それとも途中でドロップアウトしていたかのどちらかだっただろう。

四人一緒にトータスで色々な所を計画を立てながら、時にはその場の気分で旅をして、色々な人や考えがある事を知って、自分でも知らず知らずのうちに成長していた。自分で物事を考えられるようになって、心が自立していた。

自分の生殺与奪の権を狂った神に握らせるなど冗談ではなかった。だから、自分でも驚くほどあっさり賛成の意見が口から出てきたのだ。

「先生は皆の出した結論なら、どんなものであっても背中を押しします。先生が望むことは一つだけです。よく考えて、よく話し合って、後悔しない道を選んでください」

一応の保護者である愛子は、生徒達の出した判断を尊重する事にした。

愛子には戦う力がない。叶うならば光輝や北条のように、身体一つで生徒達を守るような力が欲しかった。だが持っているのは作農師という直接的には戦いに向かない天職で、戦いに赴く生徒達の背中を見送る事しか出来ないのが現実だ。

魔物といった目に見える危険がそこら中にあるこの世界で、今日こうして誰一人として欠けずに集まれたことがどれだけ幸運な事か、そ

れが愛子には理解できている。

愛ちゃん先生、愛ちゃん先生、と皆は慕ってくれているが、愛子は自分自身をそんな大した者では無いと思っている。皆がそう扱ってくれているだけで、実際として愛子は支えられている側だと思っっている。

だから、この素晴らしい生徒達が考えて選んだ道ならばどのようなものであっても一緒に歩く。どれだけ険しい道であっても、たとえ世界を敵に回す道だとしても味方であり続ける。

一緒に戦えないから、せめて心だけは最後まで寄り添い続けるだろう。

「お、俺は……いー」

光輝は頭がこんがらがりそうだった。そもそも情報量が多すぎる。

天之河光輝は、自分の事を正しいと思っている。自分がする事は正しいと思っっている。それに見合うように努力はしているし、今まで誰にも間違えていると言われたことはなかった。挫折を味わう事は一度も無かった。

トータスに召喚されて、勇者として持て囃されて、何をしても称賛された。

だから正直、この話を素直に受け止められずにいた。正しいと思っ てやっていた事が、ただの茶番だった。その『正しい事』の土台が丸ごとひっくり返されたような気分だった。

答えあぐねている光輝を、龍太郎や雫は黙って見ていた。前々から彼の事を知っている身としては、ようやく来るべき時が来たと思っ ている。

それはすなわち、挫折や失敗を経験すると言う事だ。光輝は人間としての性能が非常に高い。独り善がりな正義であったとしても、それをゴリ押し出来てしまうスペックがあつた。

今まではそれでも良かっただろう。だが将来大人の世界に入った時にそれが通用するかと言えば否である。水清ければ魚棲まずと言うように、人と言うのは清濁併せもってこそであり、清いだけの人間には誰も寄り付かない。正しい事だけしか言わない人間はきつとい

つか孤立してしまう。

だからこそトータスに召喚されたのは丁度良かったのかもしれない。

この世界では一人で何もかもが押し通せることはない。善や悪がそこら中に渦巻いている。

この世界で何を学べるか。それこそが天之河光輝のこれからの人生を左右する。

「俺は……！」

「ごめんなさい。私達の答えは明日まで待つてもらってもいいかしら」

無理やりにも答えようとした光輝の言葉を遮って雫が言った。

今の状態で、その場の流れや空気で何かを言っても悪い方向にしか物事が進まないだろう。幸い、まだ時間に余裕があるので一度じっくりと考えてから答えを出した方が良かったのだ。

「雫、俺は大丈夫だ！ 例え神が敵だったとしても——」

「もちろん良いぜ。今日明日に決めてほしい事じゃねエからな。俺達は明日にでも神山に向かう予定だったがちよつと予定を変更しとく。幸い、時間にも余裕があるしな。北条もそれで構わねエよな」

「当然だ。だが参加する必要は無い」

「待ってくれ！ 俺もこれからは神と戦う——」

「それでは天之河くんチームの答えが出たらまたここに集まりましょう。皆さんも自分の所属するチーム全体の参加に関わらず、一人一人がしっかりと考えて決めてください。北条くんが言った通り、戦うのが嫌だったら参加する必要はありません。何か不安な事、困ったことがあればいつでも先生は力になりますよ」

雫の意図を察した愛子が光輝の台詞に被せて会の終了を宣言する。

このままでは光輝は勢いのままに戦いに参加するだろう。そして、そうなったらおそらく致命的な事が起こるだろう事が予想できた。

遮られた光輝は悔し気に拳を握りしめた。

「そんじやあこれで終わりだな。最後になるが、何か言つときたい事はあるか？」

「むむむむ！ むーむむーむむ！（ハジメくん！ 後で一緒にお出かけしようね！）」

一人だけ何やら唸っている汚い禰豆子がいるが、その他の人は特に何も発言は無いようだった。

静寂の中、すつと手が上がる。他ならない北条の手だ。

「…先ほどの事だが」

皆からの視線が集まる中、ややあつて北条は口を開いた。

「…あれは天之河の名前である光輝とチャンスと言う意味の好機を掛けた洒落「はい、終了！ 以上！ 解散！ 全員帰っていいぞ！」」

最後の最後にこの始末である。

幕間：王都での一日

昼下がりの訓練場。普段であれば、この時間はメルドを始めとする騎士達が汗を流しているのだが、今日は様子が違った。

そこには黒山の人だかりが出来ており、騎士達も訓練の手を止めてその中に混じっている。

「悪いな北条、付き合わせちまってよ」

「この程度問題ない」

その中心では北条と檜山、近藤が模擬戦用の武器を握って向かい合っていた。

あの会議が終わった後、檜山はまず北条に挨拶をしに行った。オルクス大迷宮での出来事を謝っておきたかったのだ。予想通りと言いか、北条はその事については全く気にしていなかったようで、あまりにもあっさりと言山は許された。

その後、軽く初見のメンバーと自己紹介をした後（何故かユエからは礼を言われた）、攻略した大迷宮についての情報をやり取りした後、どれだけ腕を上げたかお互いに確認するために模擬戦をする流れとなったのだ。

メルドに頼んで訓練所の一角を使わせてもらえないか頼んだところのだが…。

「それは良いな！ 騎士達にとっても良い刺激になりそうだし、少しだけ訓練所を丸ごと使っても良いから観戦させてくれないか？」

快諾されるどころか、こうして見稽古と称してギャラリーまで出来てしまった。

そこからあつという間に話が広がって、クラスメイト達が観戦しに来たのだ。

北条としては対人戦の経験を積めるし、檜山としても今まで四つの大迷宮をクリアしてきた北条とは一度戦ってみたいと思っていた。自分の力がどれだけ通用するか試してみたかった。

「それじゃあルールの確認をするよ。この砂時計が落ちきる前に衛の後ろにある人形に攻撃を当てたら檜山くん達の勝ちで、当てれな

かったら負け。お互い身体強化以外の魔法は使用禁止。それでいいかな？」

「ああ」

「おう」

「はいよ」

三者三様にハジメの言葉に返事をする。北条の背後にはハジメが錬成でパパッと作り出した土人形が鎮座している。強度はスカスカで、訓練用の武器とは言え檜山や近藤の力で攻撃されたら一撃で破壊されるだろう。

檜山と近藤が攻めて、北条が守る。非常に単純な勝負であった。

なお、中野と斎藤は魔法使いタイプなので今回の模擬戦には不参加である。

「ねえねえ、どっちが勝つと思う？」

「やっぱ数的有利をとってる二人じゃねえか？」

「だよな。攻めてりゃいいだけだし。流石の北条も厳しいんじゃないか？」

邪魔にならないように観戦しているクラスメイト達が勝敗の行方について予想し合う。

意見を纏めると、概ね檜山側が優勢であろうという流れだ。

金級冒険者一党『サテイスファクション』。王都までちらほらとその活躍が噂として流れてくる超新星。アンカジ公国を救い、フューレンで闇組織を壊滅させ、さらには七大迷宮の一つを攻略せしめた注目株。一部地域では勇者よりも有名な四人組である。

「で、二人としてはやっぱり北条の勝ちを疑わないわけ？」

「モチのロンだよ！ まもるんの守りが抜かれる所なんて想像できないからね！」

「ん、当然。マモルの後ろは世界で一番安全。神話にもそう書いてある」

「いや、それはおかしい」

園部の言葉に鈴とユエが自慢気に答える。

二人だけではなく、北条チームに居るメンバーも概ね、北条の勝ち

を疑わなかった。

相手を倒すのであればともかく、味方を守るのであれば砂時計が落ちきる数分間どころか日が沈むまで余裕で防ぎきると思っっている。

「それじゃあ模擬戦——開始——」

ハジメが砂時計をひっくり返した瞬間には、すでに檜山と近藤は動き出していた。

縮地を使って一步で距離を詰めた檜山が、盾の無い右手側に剣を横薙ぎに振るう。二の腕、肘関節、手首を順に狙った三連撃。

その速度はまさに神速であり、観戦している騎士の目には辛うじて影が映るほどだ。

軽戦士らしく速度と手数に特化した攻撃。

それをさも当然のように反応した北条は、あえてそれを躲さない。

「——ッ！」

これに驚愕したのは檜山だ。確かに狙い通りに木剣が直撃したと言うのに、手に伝わってくるのは肉や骨を打つ感触ではなく、鉄柱を殴ったかのような堅い感触。

こちらが攻撃をしたと言うのに、逆に手が痺れそうになる有様。なお、北条の方は顔色一つ変えていない。お互いに防具は着けていないというのにこの堅さは異常だ。

『鋼のような筋肉』という表現があるが、北条の極まった耐久力や体幹はすでに肉体そのものが鋼の強度と化していると言っても過言ではなかった。一般人が素手で殴ろうものなら、間違いなく殴った方の手が骨折をする。

躲すなり防ぐなりさせて一手使わせれば儲けものと思っていたが、そうは問屋が卸さないようだ。

(なら顔面はどうだい！)

一瞬の思考の後、右足で顔面目掛けてハイキックをするがそれは盾で完璧に受け流される——どころか、受け流すことによって出来た一瞬の際に盾を使った打撃が繰り出された。

「ぐ——おおっ！」

コンパクトな動作に見合わない強力な威力。咄嗟に木剣を割り込

ませてガードしたと言うのにダンプカーに撥ね飛ばされるかなのような衝撃が襲い、そのまま吹き飛ばされて十メートル程地面を転がる。だが、一手使わせた。

受身を取りながら檜山はほくそ笑む。

「もらったー！」

いつの間にか右側の死角に回り込んでいた近藤が連続して刺突を放つ。

一息の間に繰り出された数十のそれは回避が出来ない程に広範囲を削り取る瀑布の様であり、盾一つではガードしきれないだろう。

「そうか」

「んなっー！」

問題無しとばかりに北条が右手の剣を振るう。

数十に及ぶ刺突を一瞬で見切って打ち払い、叩き落とし、一つ残らず相殺してしまった。

北条が握れば盾だけでなく剣も立派な防具となる。仲間が攻撃を受け持つてくれるからこそ自分は防御の技術を高めることが出来る。数多の鉄火場を潜り抜け練り上げられた防御術は、すでにトータスにおいても右に出る者はいないだろう。

反撃を受ける前に大きく後ろに跳んで離脱——しようとしたところで槍を掴まれ、檜山にぶつけるようにして放り投げられる。空中で体を捻り、器用に槍を地面に叩きつけて直撃コースから逸らし、檜山の横に着地した。

これで状況は振り出しに戻った形だ。

フーツ、と大きく息を吐いて構える檜山、近藤とは対照的に北条は始まった時と同じく自然体であり、息一つ乱していない。

「どっちも強すぎてワロタ」

「アニメみたいにファンタジーな動きしやがって…」

「俺達も出来るだろ」

ここまで僅か数秒であったが、それでも周りが沸き立つには十分な攻防だった。

北条の守りの堅さが目立つが、檜山のハイキックの爪先がこめかみ

に当たる軌道だった事や、近藤が北条だけでなく土人形もさり気に攻撃範囲内に入れていた事などの小技も輝いていた。

「へっ、簡単にはいかねええと思つてたが……」

「想像以上だぜえ……！ 俺の槍スピア・レーゲン 雨が撃ち墜とされるなんてよお……！」

ちなみに技名はたつた今思い付きで名付けた。

それなりに経験を積んで、大迷宮も一つ攻略して実力が付いたと思つていたが、こうして対峙してみると追いつくにはまだまだ遠い事が分かった。

きつと北条は倒せない倒れない。膝を付く未来すら見えない。しかし勝利条件は土人形を破壊する事なので倒す必要は無い。二人で連携して事に当たればまだ可能性はあるように思えた。

今度は左右に分かれて襲い掛かるが、檜山と近藤は知らなかった。

北条は自分が攻撃されるよりもむしろ、後ろにいる仲間に攻撃されそうになった時にこそ能力を発揮するということ事を。

(抜けねえ……！)

(左右同時でも無理なのか……！)

前後左右、どこから攻撃しても弾き飛ばされる。一撃の威力に重きをおいても手数で攻めても結果は変わらない。同時に攻撃しても瞬間移動と見紛うほどの速さで対応される。さらに合間合間に繰り出される盾での反撃も、直撃すれば間違いなく一時的に戦闘不能になるほどの威力がある。

模擬戦が始まる前に周りのやり取りは聞こえた。鈴とユエが得意気に語っていたがなるほど、いつもコレに守られていると言うのであれば納得がいった。確かに突破できる気がしない。

(コイツ……どんだけ間合いが有りやがるんだチクショウ……！)

(これ絶対訓練場全域が間合いだよな……！)

何度も動き回って攻めたからこそ感覚的に分かる北条の間合い。向こうから攻撃してくることはないが、少なくともこの訓練場の全てが盾の届く範囲なのだろう。きつと不意に観客に攻撃しても当然のように割り込んでくるに違いない。

だが、それでも諦めずに戦うのが檜山と近藤である。仮にも金級冒険者なのでそれなりのプライドはあるのだ。武器での攻撃だけでなく、タツクルを仕掛けたり反撃覚悟で組み付いたりするが悉くをいなされる。むしろ組み付いたところで投げられて投擲武器にされるだけだった。

「そこまで！　これで模擬戦は終了！」

やがて砂時計が落ちきるが、結局北条の背後に鎮座する土人形には掠り傷一つ付けることが出来ずに終わった。

「あゝ、畜生！　無理だったか！」

「あつちこつちが痛え…。ぜってー痣になつてるわコレ」

「…油断出来ない動きだった」

終わった途端、檜山と近藤が悔し気に唸る。わずか数分間の模擬戦で、手に持った武器はベコベコになっていた。王宮勤めの錬成師に言つて修復してもらふ必要があるだろう。

肩で息をしている檜山と近藤に対して、北条は特に変わらない様子だったが、内心では手放しに称賛していた。おそらくそこの騎士が束になつても敵わないだろうレベルにまで練り上げられている。今回は身体強化以外の魔法は使わないルールだったが、そうでなければまた違う結果になつただろうと思つていた。

「三人ともすごかつたぞー！」

「金級冒険者は伊達じゃないって事が分かつたよ」

「さすがはチームサテイスアクションのリーダーだ！」

「やめろ」

ギャラリーが、今の模擬戦を見て口々に囁し立てる。口ではなんだかんだ言いながら檜山や近藤も満更ではなさそうだった。その後、触発されたのか他の生徒達が俺も私もと模擬戦を申し込んでいく。

「どやあ…！」

「…どやっ！」

「いや、何でアンタらが得意気なの…！」

ふんす！と鈴とユエが得意気に胸を張る。その姿からは「どうだ、私の衛はすごいだろう」という雰囲気が出ている。

「あの檜山でさえこれほどの……」

反して、今の模擬戦を見て内心穏やかではなかったのが光輝だ。

トータスに来た当初であれば間違いなく光輝の方が遥かに格上だったし、実際模擬戦をしても負けることは一度も無かった。

だが今はどうだろうか。あの戦いに自分が入っても付いて行けただろうか。

檜山達が冒険者となるために旅立ってから半年も経っていないというのに、いつの間にか最初にあった差はすっかり埋まってしまっていた。

北条に至っては、完全に理解の外側である。当初は互角のライバルだと思っていたのに、すっかりと水をあけられてしまっている。すでに四つも大迷宮をクリアして、特別な力も手に入れて、これではまるで――

（違う！ 勇者は北条じゃなくて俺なんだ！ 俺が世界を救うんだ！）

嫌な考えを振り払うように頭を振る。

その姿を、心配そうに誰かが見つめていた。

鈴は今、非常に機嫌が良かった。

模擬戦が終わった後、みんなそれぞれ積もる話があると言う事自由行動になったのだが、当然と言うべきかユエ、シア、テイオの三人はクラスメイトに捉まってしまった。

三人は非常に容姿もよろしく、お近づきになりたいと思う男子や女子が多かった。手紙でその存在だけは知っていたが、実際に見ると想像以上だったようだ。現在は王宮の談話室で根掘り葉掘り（？）質問を受けているだろう。

ハジメは香織に連れられてどこかに行ってしまった。

つまり、今現在鈴と北条は完全にフリーなのである。そう、暇なのである。

二人は連れ立って、王都を歩いていた。つまり、デートである。

一応は買い出しという名目なので北条にはそんな認識がないかもしれないが、デートである。

(ありがとうエリリン！　ありがとう皆！)

心の中で頼れるクラスメイト達に礼を言う。シアとテイオはともかく、ユエは抜け出さずついて来ようとしたが、主に女子生徒の人垣に阻まれてしまったのだ。

恵里や園部、宮崎などがサムズアップしていた事から気を遣ってくれたのだろう。

「〜♪」

「…上機嫌だな」

「ふふん、モチロンだよ！　久しぶりにまもるんと二人でお出かけだからね！」

地球に居た頃は時々こうして一緒に帰ったり、休日にどこかに出かけたりしていた。お互い特に予定がなくて、街でバツタリと出会ったときにはそのままの流れで遊んだものだ。

トータスに召喚されてからはご無沙汰だったが、久しぶりにこうして以前のように二人で並んで歩いているのだ。日が沈むまでに帰らないといけないので数時間という制限があるが、スキップをしそうになるほど鈴は浮かれていた。機嫌を表すように二つに結んだお下げがピョコピョコと犬の尻尾のように揺れている。

旅に必要な物…主に食糧を買い込んで宝物庫に入れていく。こういう時、いくら買っても手荷物が増えないので宝物庫は非常に便利だ。

商店を見て回った感じ、食料品はたくさん並んでいるように思えた。ここに来た当初は品切れになっていることも多かったから、これは間違いなく愛子のおかげだろう。たった半年も経たない内にこうも食糧事情を改善させるとは、人類側からすればまさに柵から牡丹餅というものだろう。

「…これで終わりだ。帰るぞ」

「えー、まだちよつと時間があるよ！ ほら、まだ半分くらいしか日が沈んでないし！ せつかくだから色々を見て回ってみようよ！」

一時間ほどかけてあらかた必要な分を買って終えた二人は時間もあるといふことで少し寄り道をしながら帰ることになった。北条としてはまっすぐに帰っても良かったのだが、鈴たつての希望だったのでそれに従うことにした形だ。

夕暮れ時の王都を二人で並んで歩いていく。

「懐かしいなく。寒い時にはよくコンビニで肉まんを買って半分こしてたよね。まもるんだったら半分に割るのがへたっぴでいつも私に大きい方を渡してきたし、不器用にも程があるよ」

「…俺は不器用じゃない」

北条の方は手先が不器用であると言われたと思っていたが、鈴の方はそういう意味では言っていないかった。

何も言ってくれないが、鈴は知っていた。いつもいつも、わざとちようど半分にせず大きい方を渡してくれていたのだ。女の子としてはたくさん食べさせてくる事に言いたい事があつたが、不器用な優しさが嬉しかった。…そのおかげで一時期体重が増えかけたことがあつたのだが。

「そうだ！ せつかくだし、久しぶりに買い食いしちゃう？」

「分かった。ちようどそこにあるな」

「いらつしやい！ 出来立てのホカホカ肉饅頭、いかがだい？」

指をさした方向には軽食を売っている店があつた。しかも都合良く肉まんのようなものが売っている。愛想が良さそうなおじさんが営んでいる個人店のようだ。

人通りはそれなりにあるが、時間が時間なので客も並んでおらず、さして待たずに買った肉まん（仮）をいつものように半分にする。

「俺は不器用じゃない」

「おー、ぴったり半分…まもるん、気にしてたの？」

「俺は気にしてないし、不器用でもない」

どこか得意げな北条に苦笑いをして頬張ろうとするが、不意に足元

から鳴き声が聞こえてきた。

口を半開きのまま視線をやるとそこには薄汚れた子犬がいて、物欲しげにじつと二人を見つめている。

「…ワンちゃんか」

「こつちにも犬は居るんだよね。ものすごく見てくるけどお腹が空いてるのかな？ 飼い主とかも居なさそうだし…」

「ここら辺にはたまにこういうのが居るんだ。コイツはまだ子犬だな…、つて事は親が死んだか、それとも捨てられたかのどつちかだろうよ。下手に餌をやつて懐かれても困るだけだし、ほつとくのが正解だぜ」

「…そうか」

鈴の疑問に答えたのは、肉まん（仮）を買った店の店主だ。

ここで店を構えて十年以上になる、立派な王都の住民である。ずっとここで店を続けているので、この辺りの事についても詳しくかった。

今では生活に余裕があるが、少し前までは食糧不足や魔族との戦争などの事情が積み重なつて、今まで飼っていたペットを手放す人が続出した。そうして増えた野良犬が交配して子犬が増えたのだ。

とは言つても街の外に出て行っているのか最近は数も少なくなっているようだが、それでも外で生きていけないような子犬はこうして街中で彷徨っている。

「おーい兄ちゃん、俺の言う事聞いてたか？ 下手に餌をやると懐かれるぞ〜」

「…ああ、聞いていた」

「しようがないなあまもるんは…：私のもあげるよ！ おかわりもいぞー」

「嬢ちゃんまで…：。あーあ、俺知らねえぞ」

だが、店主の説明を聞いていたにもかかわらず、北条は犬に肉まん（仮）を食べさせていた。

「うりうり、ここがええのか？」と犬を撫でまわす鈴を見て溜息をつく店主の前に、袋が叩きつけられる。重い金属音を鳴らしてカウントーに置かれた袋の中には相当なお金が入っていた。

「…あのワンちゃんに餌をやってほしい」

「すまん兄ちゃん、俺の話聞いてた？ 野良犬には餌をやらない方が良いつて言ったよな？」

「…この残飯のような商品で十分だ」

「えっ、何で初対面の兄ちゃんにうちの商品が馬鹿にされてるんだ？

これでもうちは結構な人気店なんだが？ あの肉饅頭だつて一日に百個以上売れてるんだが？ 超人気商品なんだが？」

「おじさん、今のは『ちゃんとした餌じゃなくてこの店で売れ残った残飯みたいな商品でも十分だ』つていう意味だよ！」

「ええ…：兄ちゃん、初対面の人に嫌われたりしないのか？」

ちなみに少なくないお金を置いたのは売れ残りで破棄する予定の物とは言え商品は商品であり、それを餌としてやって欲しいと我儘を言っているのだから、対価を用意すべきだと思つたからである。

「はあ…：。まあ、最近では食糧事情も『豊穰の女神様』のお陰でだいぶ余裕があるし、その程度なら大丈夫だろう。ただ、毎日やれるかどうかは分からないがな」

「…十分だ。感謝する」

やっている事は、きつと偽善だろう。鼻で笑われる程度の事かもしれないがそれでも良かった。

そもそも北条は善に偽物も本物も無いと思つている。区別をつけられるようなものでもない。誰かにとつては偽物でも、別の誰かによつては本物である事もあるのだから。

「可愛い奴めこのこの。あ、まもるんもどう？ せつかくだし名前とか付けちゃう？」

「…ああ」

鈴から犬を渡された北条は、じつと目線を合わせる。迷子のような目だった。

——きつと親と離別して一匹で生きてきたんだろう。よく見れば小さな傷が付いているから、きつと他の犬に追いやられた事もあるんだろう。辛い事が沢山あつたはずだ。弱い自分が嫌になる事もあつたはずだ。わかるよ。それでもお前は俺とは違う。懸命に生きよう

と足掻いている。今は弱いけれど、いつか自分に向かってくる牙を折れるような強い犬になれ。

そう思つて、北条はその弱い子犬に名前を付けた。

「…今日からお前の名は『オルガ』だ」

「何だかよく分からないけどその名前はマズい気がするよまもるん！」

夕食後、談話室では北条、檜山、龍太郎、永山、遠藤の五人が集まつてトランプで七並べに興じていた。

数少ないトータスでの娯楽である。一応トータスにもカードゲームはあつたが、地球の事を懐かしんでクラスメイト達はこういった場所では地球のカードゲームを楽しんでいる。

「それで北条、どっちを選ぶんだ？」

「…？ 何の事だ？」

檜山がダイヤのジャックを置きながら言つた事に首を傾げる。脈絡もなくどつちを選ぶと言われも何の事かさっぱり見当が付かない。「いやお前、そりゃ谷口とユエさんの事だよ。あんだだけ好き好きオーラを出されてんだからとつくに気付いてんだろ？ お前も少なからず大事に想つてるみたいだしよ」

「ぐぎぎ…何で俺には出会いが無いんだ…！ やっぱり影の薄さか!? 影が薄いのが悪いのか!? メイドさんにも気付いてもらえないしよお…！ こつちに來てからもっと存在感が薄くなったような気がするんだチクシヨウ！」

「……」

ニヤニヤといやらしい笑みで訊いてくる檜山。遠藤は、嫉妬で人が殺せるのであれば三回くらい殺せるくらいの視線で北条を睨んでいた。だからと言ってオルクス大迷宮で落下したいとは思わないが、それとこれとは話は別である。

元々無口な永山（学校では柔道部に所属している）は聞きに徹しているようで、黙々と手札を減らす作業に勤しんでいた。

「…二人には分不相応だろう」

「そりゃどういう意味だ？ お前の事だから二人の事を悪く言ってるわけじゃねえってのは分かるがよお」

それに対して北条は特に表情を変えず事もなくクロバーの四を置いて答えたが、今度は龍太郎が首を傾げる。北条とはそれなりに付き合いがある龍太郎なので、彼が人の悪口を言ったりする事が無いと分かっているが、それでも言いたい事が何かは理解できないままだった。

「…二人は俺には相応しくないという意味だ」

「オイオイオイ何言ってるんだコイツ、ユエさん程の美少女に言い寄られてこの態度とかお前ホモかよ！ じゃあ俺が告白してもいいんだなオラア！」

「…好きにすればいい。あと俺はホモじゃない」

遠藤が何か喚いているが、北条は動じることなく淡々とトランプを並べていく。

北条は鈍感ではないし、ホモではない。むしろ人の機微は人並み以上に判っているつもりだ。だから、二人が好意を寄せてきている事は何となく分かっていた。

北条としても、二人の事は好意的に思っている。だが北条は、自分では二人を幸せには出来ないと思っっている。二人には自分よりも相応しい人が現れるに違いないと思っっている。

二人は見た目も性格も良いから引く手数多だろう。沢山の人から必要とされるだろう。

ユエは、自分自身の居場所を探している。帰れる場所を探してい

る。自分はいくまでそれまでの止まり木のようなものだ。だから、彼女が心から笑っていられる場所を見つけられたのであれば、その時は自分から離れていっても黙って見送るつもりだった。

鈴に関しても、日本に帰ればもつと良い男性がいるだろうから、時間が経てば自然に離れてそっちに行くだろうと考えている。

「おーい遠藤、横恋慕は感心しねえぜ」

「そうだけ。完全に悪者じゃねえか」

「やかましい！ お前等は余裕そうでいいよな！ 坂上はメイドさんたちよつと良い感じになってるし、檜山は海人族の未亡人と娘共々懇意にしてるらしいし！ お前らは全員『勇』を失った…！ 彼女いない同盟はここで解散だっ！」

檜山については手紙だけで詳細は不明だが、龍太郎については同じチームなので最近メイドさんと良い雰囲気なっている事は知っていた。サーネという名前の背が低めの可愛らしいメイドさんだ。ちなみに年齢は一個下らしい。

重い荷物を持ってふらついている所に龍太郎が声をかけて交流が始まり、今では休日になると一緒に王都に出かける仲だという。遠藤は血涙を流しながらトランプを叩きつけた。

「…終わりだな。俺は少し散歩をしてくる」

「ちっ、また北条の勝ちか。次はUNOやろうぜUNO」

最後の一枚を置いて、最初に上がった北条は席を立てて談話室から出て行った。

当てもなく歩いていると、楽しそうな声が聞こえてくるのでそちらを見やる。ユエ、シア、テイオがクラスメイトの女性陣に囲まれて楽しく談笑しているのが遠目に見えた。どうやら皆に受け入れられたようで、だいぶ打ち解けられたようだ。

「……」

自分には理解できない内容だろう。そう判断した北条は、声をかけずに黙って立ち去った。

王宮の中庭。夜になると月がよく見えるその場所で、光輝はベンチに座って星を眺めていた。

あの会議が終わってからずっとモヤモヤした感情が自分の中に渦巻いている。こうして星空を眺めていれば少しは気が晴れるかと思っただが、一向に胸のモヤモヤが晴れることはない。

「天之河くん、ここに居たんですか」

「愛子先せ……いっ!?! そ、その衣装は…!?!」

そのままぼんやりと星空を眺めていると不意に声が投げかけられた。光輝がそちらに向くと、担任である畑山愛子が居た——なぜかフリフリのファンシーなドレスを着て。

「えっ…? あ、ち、違うんですよ!?! これは無理やり八重樫さんに着せられただけで決して私の趣味という訳では! 確かにかわいい服だとは思いますが私の趣味ではないので勘違いしないでくださいね!?!」

「そ、そうなんですか……雫が……ん? いや、何やってるんだ雫!?!」
光輝に言われて初めて自分の格好に気付いたのか、愛子がわたわたと手を振って弁明をする。

二十五歳にもなってこんなフリフリのドレスを着ることになるなんて…と愛子は顔を覆わんばかりに羞恥心に呻いていたが、元々大人どころか下手をすれば中学生にしか見えないので非常に良く似合っていた。

何をやってるんだ雫、と光輝が顔を覆う。ここ最近結構ストレスが溜まっていたようなのでこれで発散していたのだろうが、せめて本人の同意は取ってほしかった。なお、光輝は知る由も無いが、愛子は恥ずかしがっていたが割とノリノリだった。

「隣失礼しますね。それで天之河くん、昼間の答えは出ましたか?」

「……それは……その、正直に言いますと全然…」

口ごもる光輝。今まで勇者として上手くやってきて、でもそれが茶

番で、さらには不良だと思っていた檜山があそこまでの力をつけて困っている人や虐げられていた人を助けていたという。

北条にしてもそうだ。オルクス大迷宮で死んだと思っていたら可愛い女の子を連れて世界の真実を掴んで大迷宮を幾つもクリアして、今まで自分のやってきた事は何かと思いたくなる。

「…きつと、世界の中心には誰も居ないのだと先生は思います」

「どうしたんですか愛子先生。その…哲学的な言葉だとは思いますが」

「いえ、天之河くんが今の自分の在り方について悩んでいるようでしたので。実は先ほど八重樫さんに『光輝の相談に乗ってやって欲しい』と頼まれました。きつと自分では何を言っても届かないからつて。本当は秘密にしておくべきなのでしょうが、あなたの心配をしている人がいると言う事を知ってほしいのです」

「雫が…」

「はい。天之河くんは自分で悩んで溜めこんでしまうようなので。客観的に自分を見詰めなおすための良い機会です。幸いここには私と天之河くんしか居ませんし、今悩んでいる事、思ってる事は存分に吐き出しちゃってください」

「…俺は……」

握った拳を見つめながら、ぽつぽつと少しずつ光輝は言葉を捻り出した。

今まで人として正しいことをしてきたつもりだった。悪いことをする人がいれば正してきたし、虐められている人や迷惑をかけられている人がいたら手を差し伸べてきた。実際それで上手く問題が解決したと思っているし、皆に感謝されていると思っっている。

この世界に勇者として召喚されてからも人類を救うためにひたむきに力をつけてきた。クラスメイト達が巻き込まれたことに関しては不本意だったが、そこは勇者である自分が守ってあげれば良いと考えていた。

だけど、トータスに来てからは思い通りにいかないことばかりだった。来た当初は良かった。だが、ベヒモスと遭遇した辺りから光輝の

思い通りに物事が進まなくなった。

ヘルシヤー帝国の皇帝には「力はあるが覚悟のない甘ちゃん」と言われる。

オルクス大迷宮で脱落したと思っていた北条は想像を超える力を得て、さらには可愛く強い仲間を引き連れている。

オタク趣味の不良生徒と思っていた檜山は冒険者として成功して各地で名を上げている。

本当なら、勇者である自分がそうになっていたはずなのに。

本当なら、勇者である自分が力を得ていたはずなのに。

本当なら、勇者である自分が世界の真実を真つ先に知っていたはずなのに。

本当なら、勇者である自分が可愛い女の子を助けて慕われていたはずなのに。

本当なら。

本当なら。

途中から何を言っていたのか、光輝は覚えていない。話すにつれて感情が高ぶっていたので、意味のない言葉を垂れ流していたのかもしれない。もしかしたら聞くに堪えない妄言を吐いていたのかもしれない。

それでも、愛子は真剣な表情で光輝の話を聞き続けた。

「ごめんなさい。天之河くんには謝らなければいけませんね」

「……………えっ?」

光輝が話し終えたとき、愛子のとった行動は謝罪だった。

急に頭を下げられて光輝は困惑する。愛子は何も悪いことはしていない。

むしろ、この世界に来てから多くの人を救っている。

それは光輝から見ても疑いのようなない正義だった。

だが、愛子が頭を下げた理由は光輝の思っていた理由とは違う。

「世の中には思い通りにいかない事が沢山あること。いろんな考え方があること。それを教えるのが教師の……いえ、大人の役割なのに、天之河くんの優秀さに頼り切ってそれを忘れていました」

これは大人の怠慢だ。

愛子を含め、光輝の周りの大人達は世の中には上手くないかない事だらけで、正しい人ばかりではないと言う事を教えるべきだったのだ。光輝は目上の人には敬意を払うことができる。

反発されたとしても、両親や教師が少しずつ矯正していくべきだったのだ。

そうしなかったツケが今になって出てきている。

「さっきも言いましたが、世界中を探しても世界の主役なんてどこにもいないと先生は思います。だって、世界が一人のためにあって、他の人が全て引き立て役だなんてそんなの悲しすぎますから。きつと世界中にいる全員が脇役で、少しずつやるべき事があって、それで世界という大きな物が成り立っているのだと先生は思うのですよ」

「それは……そうかも知れません。でも、俺は勇者で……」

「はい。確かに天之河くんは勇者としてここに呼ばれました。私を含めてクラスの皆はそれにオマケとして付いてきただけかもしれない。召喚されてからすでに半年近くが経っていますが、今でも天之河くんは私達を勇者のオマケだと思っっていますか？ 勇者という存在のアクセサリーだと思っっていますか？」

「思えなかった。思えるはずがなかった。だって皆、ひたむきに進み続けていたのは光輝も分かっていたから。」

「どれだけ勇者という称号を言い訳に使っても、それは覆しようがないことだ。」

「皆は勇者のオマケじゃない。装飾品でもない。」

「本当はずつと前に分かっていた。自分は世界の中心には居ないことを。」

「本当はずつと前に分かっていた。皆、自分よりも前に進んでいることを。」

「本当はずつと前に分かっていた。自分はただ状況に流されているだけだということ。」

「本当はずつと前に分かっていた。幼馴染が本当に好きなのは誰な

のかということ。

本当は。

本当は。

だけど、それを認めたくなかった。

勇者である自分が『特別な存在』だと信じていたかったから。

「思つて、ません……」

絞り出すような言葉だった。

それを聞いた愛子は良かったです、と安心したように息を吐く。

「……先生。今まで俺がやってきたことは間違っていたんでしょか……？」

いつも自信に満ちている光輝らしくない弱気な声色。

彼が今までやってきた事は正しかったか間違っていたか。

それは、そうとも言えるしそうでもないとも言える。

正しさとはそれぞれの人が培ってきた価値観のことだ。

だから力を尊ぶ人がいるし、和を以て貴しとなす人がいる。どちらも正解であるし、場合によっては間違いであることもあるだろう。

「きつと天之河くんは完璧な勇者じゃなくて、ちよつと人より優れてるだけの、思い込む癖があるだけの男の子なんです。だから、正しくなくてもいいんです。間違えてもいいんです。これから長く生きていくんですから色々なものを見て、色々な考えに触れて、色々な人と関わってみてください。そうしたらいつか、天之河くんだけの『正しさ』が育つはずですよ」

「俺だけの……正しさ……」

よいしょ、と愛子は掛け声を出してベンチから立ち上がり服の皺を整える。

「なんだか説教臭くなっちゃいましたね。私が言えるのはこのくらいで、後は天之河くん次第です。幸い時間はたくさんありますからゆっくりと考えてみてください。もちろん、先生はいつでも相談に乗りますからいつでも頼ってくださいね。あつ、考えるとは言ってもちゃんと睡眠はとってくださいよ？ もう夜も遅いんですし、そろそろ消灯の時間ですからね！」

お休みなさい、と言い残して愛子は去っていった。しばらく愛子が去っていった方向を眺めていた光輝だったが、やがて自分の手を見つめてぎゅっと握った。

『正しき』を育てる、か……。……。よし、決めたぞ！』

最初にしていたように星空を眺めてみる。

心なしか先程よりも光り輝いて見えた。

胸部に慣れた圧迫感を感じて目を覚ます。

北条の朝は早い。時間にすると、毎日五時には起きて活動を始める。

だが、王宮では朝食の準備や掃除、洗濯などをしなくてもいいので朝寝坊をしても問題はない。

習慣というものは体に染みついてしまうもので、それでも北条は五時過ぎには目を覚ましてしまった。

「……」

「……ん……すう……」

視線を下にやると美しい金色の髪がある。

いつの間にか部屋に侵入してきたユエが、いつも通りに北条を抱き枕にして寝ていた。人数が増えるにつれて男女別の部屋で固まって寝ることが多くなっていたので最近はずっかりだったが、シアを入れてた三人で旅をしていたころは毎日のようにこうして朝起きるとユエが乗っかっていた。

しかし記憶が間違っていないければ、昨日ユエは鈴の部屋に泊まる事になっていたはずだ。寝る時も部屋の扉はしっかりと施錠をした記憶もあるというのに、どうやって侵入せしめたのか。

細かいことはさておいて、いつも通りユエの拘束から抜け出して起き上がるうとした北条は、珍しくギョツとしたように固まった。

以前なら薄いシャツ一枚だけではあるが、服を着ていたユエが今回はそうではなかった。

つまり、すっぽんぽんである。真っ裸で抱き着いていた。

「……」

「くう……ん……」

胸板にほっぺすりすりをされる。しっかりと寝間着（ウサギ柄）を着込んでいたハズなのに、なぜかボタンが全て外されていた。

冷静に考えるとかなりまずい状況である。上半身全開の男と、それに抱き着く一糸纏わぬ少女。この場面を誰かに見られたら間違いなく誤解される。

何とか打開しようとユエに着せそうな服を探そうとするが、今日に限ってガツチリとホールドされて抜け出すことができない。無理に引き剥がすと起こしてしまうし、痛くしてしまうかもしれないからそれもできない。

ベッドサイドに置いてある宝物庫を取ろうと手を伸ばすが、絶妙に手が届かない位置に置かれていた。腕を限界まで伸ばしてもスカスカと手が空振るだけである。

「……」

気持ちよさそうに寝ているので無理やり起こすのも忍びないし、このままユエが自然に起きるまで待つしかない。それまでに誰かが入ってこないことを祈るしかなかった——が、得てしてそういう時にこそ最悪の事態が起こるといふものだ。

ガチャリ、と部屋の扉が開く。

「あ、鍵が開いてる。北条くん、起きてますか？ もし起きて——」
半開きになった扉からひよこりと顔をのぞかせたのは彼の担任である畑山愛子。

珍しく早起きした彼女はやることもなかったので散歩をしていたのだが、ふと北条も早起きだったことを思い出して、少しお話でもしようと思いい立ち、こうして訪ねてきたのだが……。

扉の鍵が開いていることからすでに起きていると判断して部屋を覗いた彼女の目に映ったのは、上半身全開の北条とそれに抱き着く裸

のユエ。下半身は布団に隠れていたので見えないが、傍から見たらどう見ても事後だった。

「……ほ、北条くん」

「…俺は出してない」

「……お、お邪魔しました〜」

バツチリと目が合った二人。顔を真っ赤にしてそそくさと扉を閉めようとする愛子に必死に弁明するも、そのまま誤解が解けることなく扉は閉まってしまった。

「……俺は、出してない」

ぽつりと言った言葉は愛子に届くことはなかった。

(以前は否定していましたがやっぱり北条くんとユエちゃんはそういう関係なんですね…！ 先生には分かります…あの二人、交尾してたんだ…！ 谷口さんも可哀そうに…！)

朝から衝撃的なものを見てしまった愛子は目をぐるぐるさせながら茹った頭で廊下を彷徨い続ける。メイドさん達が訝し気な表情でそれを眺めていた。

「んっ……おはようマモル」

「…まずは服を着ろ」

「……その前にマモルの一番搾りをもらう」

しばらくして目を覚ましたユエに対して常識的な言葉が投げかけられるが、ユエはそれを無視して北条の首筋に牙を突き立てた。据え膳なんだから手を出しても良かったのに、と思いつつながら。

これからの予定を話し合うために食堂に再び集まったクラス一同。以前と同じように空間魔法で外部の者に聞かれないようにしてあり、どのようなことを言っても外に漏れることはない。

「皆さんおはようございます。早速ですが昨日の続きを始めたいと思

います。それで、えー、あー、ほ、北条くんのチームは、その、神山に行くとのことでしたが……」

朝食をとった後、朝礼と話し合いの続きを始めるために愛子が教師らしく仕切ろうとするが、朝の事を思い出したのか、頬を赤らめてチラチラと北条に視線をやりながらになってしまおう。

言葉もつつかえつつかえになってしまっているの、大半の生徒がその尋常ではない態度に疑問を抱き、北条に一斉に視線を向ける。

「おい北条、愛ちゃん先生に何かしたのか？」

「…覚えがない」

幸利が北条に皆が知りたいであろうことを訊く。昨日の会議は特に変わったところが無かったので、昨日一日で何かがあったに違いない。

だが視線を集めている北条に関しても特に思い当たることはなかった。昨日一日はこれと言って何か個人的な話をした覚えはないからだ。

「ち、違います！ 私は何もされてませんよ!? そ、それに何かを見たというわけでもありません！ 決して北条くんとユエちゃんが一緒に寝てるのを見たわけではないですからね！」

語るに落ちていた。すべてを察したクラスメイト達、主に男子から視線が突き刺さる。嫉妬、妬み、羨望、などなその視線に込められた感情は様々だ。北条チームの面々は凧いだ面持ちだったが、鈴だけはすごい勢いでユエに詰め寄っていた。

「ちよつとユエユエ、確か朝に会ったときは『……早起きしたから散歩に行ってた』って言ってたじゃん！ あれ嘘だったの!?!」

「……嘘は言ってない。深夜に目が覚めたからマモルの部屋まで散歩に行ってただけ」

「うぎぎぎぎ……こ、こうなれば鈴も……!?!」

「鈴さん、あなたは常識を失わないでください！」

思えば先を越されてばかりである。これがトータスの女性のスタンダードなのか、と戦慄せざるを得ない。実際にはトータスでもおかしいのだが、他のトータスメンバーであるシアやティオも特殊な環境

下で育っているのです、この場にはトータスのスタンダードな女性は居ないと云っても良かった。

「なんでいつも話が脱線するんだろうね…」

「ふふ、良いではないか。これがお主等らしいというものなのじやろう」

げっそりとした様子の子のハジメが呟く。昨日はあれから一日中香織に付き合っていたようだが、何があったのか本人は詳細を語ろうとはしない。だがかなりお疲れのようだ。

「えー、それでですね！ えー、あー、…：天之河くん、あれからどうですか？ どうするか決まりましたか？」

「えっ、そこで俺に振るんですか!?! ぐっ、ぐっほん！ …正直言えば、良くわからないし、北条が言った世界の真実というものにも納得がいかない。だから、神山に行く北条達に付いていこうと思ってる。大迷宮を攻略すれば力も手に入るし、もしかしたら直接情報を確かめられるかもしれない。本当の意味で世界を救うにはどうすればいいのか、そうすれば分かるかもしれない」

神と戦うのか。戦争はどうするのか。それについての答えは一晚考えても出てこなかった。

だから、世界の真実とやらを確かめる。大迷宮を攻略すれば反逆者とやらが残した情報が手に入るらしいので、実際に攻略をして自分の目で直接確かめてみる。

ある意味では保留とも言えるような答えだったが、それでも今までの光輝であれば選ばなかったような選択肢だ。当然、北条はそれを受け入れる。光輝自身が考えて出した答えであるならばそれを拒む理由はないからだ。

こうして、光輝が一時的に…：かどうかは分からないが北条チームに加入することになり、恵理ははしゃいだ。

「分かった。よろしく頼む」

「あ、私もハジ…：北条くんのチームに付いていくね」

「分かった。よろしく頼む」

「えっ、っ!?!」

「行ってらっしゃい香織」

「うん、行ってくるね雫ちゃん!」

「何だこのテンポの良さ」

「ああ……雫がすごくいい笑顔に……」

その後も会議は続いていく。最初に光輝が出した保留という答えだが、それでも神と敵対する前提で事を進めたほうが良いだろうという方向に流れていく。何もなければそれでいいが、何かあったときに備えがないと詰む可能性があるからだ。

結果、光輝と香織が北条チームに加わって残りの迷宮を攻略。檜山チームは今まで通り冒険者稼業を続けながら、勇者チームの残りは愛ちゃん先生チームに合流して各地を回りながら、すでに北条チームが攻略完了している大迷宮をクリアして神代魔法を手に入れる流れとなった。

すでに攻略されている大迷宮であれば情報も出そろっているのだから比較的 safety に戦力を増強できる。そして、攻略に必要な道具や各員の装備するアーティファクトは順次ハジメが作っていく。

「そんなじゃ俺達はメルジーネ海底遺跡からだな。エリセンの西北西だったか?」

「ああ。昨日のうちに攻略情報は纏めといたんでそれを確認してくれ。夜にならないと入れないから気を付けろよ。あと、攻略には空間魔法か潜水艇がいるが……」

「それは共有の宝物庫に入れてあるから自由に使っても大丈夫。魔力充電式だから使い終わったらちゃんと充電しといてね」

「私達はグリューエン大火山から攻略すればいいのかしら?」

「だな。と言うかグリューエン大火山を攻略しないとメルジーネ海底遺跡は入れねえから最初に攻略するなら自然とそこになっちゃうわな」

「近くにアンカジ公国があるので視察という名目で行けば問題ないでしょう。その辺りの調整は先生に任せておいてください。今なら割とゴリ押しが効くと思いますので」

「グリューエン大火山は暑いからな。新しく作った宝物庫を渡すんで

水と塩はたっぷりと入れていってくれ。干乾びて死ぬのはシャレに
なんねエからな」

「冷却用のアーティファクトもいくつか入れといたから上手く使つて
ね」

一度方向さえ決まってしまうえば、後はトントン拍子にやる事が決
まっていく。

昨日とは打って変わってこれからの予定が決まっていき、昼頃に会
議が終わった。

会議が終わると昼食をとり、それからチームごとに行動開始であ
る。

幕間：神の山（前）

神山。

それは唯一神エヒトを信仰する聖教協会の総本山である。標高はおおよそ八千メートルにも達し、地球でもトップ十五に入るほどの高さがある。

トータスでは間違いなく最高峰であり、当然そんな高さには魔物などは近づけないので、環境さえどうにかしてしまえば本部を構えるには最適な立地だろう。

現在の教皇はイシユタル・ランゴバルド。

豪華なローブを纏った老人であり、いかにも教皇ですといった風貌だ。教会には信心深い教徒が勤めており、愛子の護衛として派遣されているデビットら神殿騎士達もこの所属である。

教義に忠実なので、魔族や亜人族の事は穢れた種族として見做しており、亜人の奴隷などについては黙認しているどころか推奨しているような節すらある。

「……と言う事らしいですが、その、私が付いてきちゃって大丈夫なんですか？」

「ううむ……妾はいくらでも誤魔化しが効くがシアは耳で一発じゃない」

「大丈夫じゃないか？ 勇者様一行の奴隷って事にしとけば見逃してもらえんだろ」

その聖教教会がある神山に向かうリフトでのんびりと会話する一行。

どういう仕組みか、リフトの上は風や寒さなどは感じないのでロープウェイ気分である。落ちたら人であれば間違いなく落下死するほどの高さだが、足場はクラス全員が乗っても余裕があるほどに広く、滑落防止用の柵もついているので周りの景色を楽しむ余裕さえあった。

「奴隷だつて!? そんな事は俺が絶対にさせ……、あ、いや、余計ないざこざを避けるには仕方がないのか？ でも嘘でも仲間を奴隷だな

なんてそんなのは……」

「だ、大丈夫だよ天之河くん。その、周りに何を言われてもちゃんと私達がシアさんの事、仲間だって思ってたれば良いんだから……」

案の定、光輝が幸利の「奴隷」という言葉に噛み付こうとするが寸でのところで踏みとどまる。

今までの光輝であれば上辺だけの言葉に反射的に言葉を返していたが、今の光輝は一味違うのだ。

『正しさを育てる』と意気込んでみたものの、どうすればいいかさっぱり見当がつかなかった光輝は、雫にどうすればいいか相談をしたのだ。

「とりあえず、相手の言う事を何でも悪い、自分が正しいと否定するのではなくて、『一理ある』と考えるのがいいと思うわ。相手の言う事をちゃんと考えた上で自分が思ったことは言う。まずはコレね」

そうすれば、雫からそんな有難い言葉をいただいた。それをしっかりと覚えていたので寸でのところで踏みとどまれたわけである。

「……ふふ、やっぱりここは快適」

「ユエユエ、あと三分で交代だからね！」

葛藤している光輝を尻目に、ユエは北条を椅子にしてご満悦の様子。北条が胡坐をかいて座れば、ユエや鈴程度の体格であればちょうどその中に収まるのだ。

鈴は、そんなユエを見ながらしきりに手元の砂時計を気にしている。どうやら砂時計が落ちきるまでの間、交代で座っているらしい。なお、勝手に椅子にされている北条は特に気にすることなく雲の形が変わっていくのをぼーっと眺めていた。

「三人ともすぐく仲が良いんだね！ ハジメくん、私達も負けてられないね！」

「アツハイ」

香織が期待の目でハジメを見るが、ハジメは目を逸らした。

昨日、ハジメは香織と一緒に王都に出かけていたわけだが、やけに香織がグイグイ来るので後退り気味なのだ。一緒にご飯を食べたり買い物をしたりするのは良かった。ハジメも年頃の男子なのでデー

ト気分を味わえたのはまあ、楽しかった。

問題は香織が飲み物や食べ物をつつかり胸元や太もみにこぼしてしまった時に「ごめんねハジメくん、両手が塞がってるから拭いてもらってもいいかな？」などとやり始めた事だ。キャバクラか何か？とハジメは訝しんだ。

しかも柔らかい感触や良い匂いに耐えながら仕方なく拭いてやると艶かしい声を漏らすものだから気が気でなかった。というか今も記憶に焼き付いていて、ふとした瞬間に思い出しそうになる。健全な男子高校生であるハジメにとっては香織の攻撃は効果覿面だった。

その後もさりげなく腕を組んできたり手を繋いできたりとゴリゴリ精神力が削られる事となる。ハジメは鈍感ではないので、ここまで露骨にされれば香織の気持ちには気付く事ができた。

だが基本的にハジメは卑屈ではないものの、自己評価が低めの男である。

好意を寄せられていることを喜ぶよりは何故？と考えてしまうタイプの人間だ。

特に好かれるような事をした覚えはないし、出会ったのも高校に入ってからで、昔に何か接点があったと言う事もない。

話を聞いてみると、中学生の頃に不良相手に土下座した所を見ていて興味を持ったらしく、年末にまたしても不良に土下座をかましているところを見て惚れ直した、などと言っていたがハジメ自身はそれが好きになった理由と言われてもイマイチピンと来なかった。

(まあ、その、気持ち自体はすごく嬉しいしいつかは返事しなくちゃいけないんだろうけど…。少なくともこの旅が終わるまでは待たせちゃう事になりそうだ)

ここまでされて保留するというのは男として最低な行為だとは思うが、何があるかわからない現在、一区切りするまではそういった事は避けるようにしている。

だから添い寝しようとしてきたり入浴中に乱入しようとしなくてくださいお願いします、と言うのがハジメの今の心境である。そういった事は躊躇なくやろうとするのに、ふとした瞬間に手が触れてし

いつもの漫才を繰り広げるシア、テイオ、幸利。

北条椅子からどうこうとしないユエと引っ張って引き剥がそうとする鈴。

負けじとスキンシップを取ろうとする香織と引け腰のハジメ。

それを見てやきもきする光輝ともつとやれと思う恵理。

神山に到着するまではずっと同じような光景が続いていた。

「……マモルさんー」

「任せろ」

神山に到着した北条一行を待っていたのは、銀色の極太光線だった。

普通であれば完全な不意打ちが成功していたのだろうが、『未来視』により迫る危機を察知し、悲鳴に近い叫び声を上げたシアによって失敗に終わった。

明らかに害意を以て放たれたその攻撃を、北条は盾で受け止める。

北条が持つ盾はアーティファクトである。

特に魔法に対しては絶大な耐性があり、さらに魔法攻撃に対しては見た目以上に盾面の『当たり判定』が大きいのが特徴だ。

それこそ、一行を完全に飲み込んでしまうほどの光線を受け止めきれぬくらいに防げる範囲が広い。

「……！」

魔物が吐き出した魔法とは明らかに手応えが違う。

グリューエン大火山で魔人族の男が使役していたドラゴンのブレスを受け止めた事があったのだが、アレは巨石をぶつけられたような感覚だった。だがコレは掘削機で削られているような感覚がする。

このまま受け続けるのは危険と判断した北条は、盾を動かして光線を上に受け流した。

「今のを防ぐとは予想外です。流石はイレギュラー、主が排除せよと

仰せられたのも領けます」

銀光が散っていく中、空中からふわりと空中回廊に人が下りてきた。

淡い銀色の長髪、作り物めいた整った顔立ち、戦乙女のごとき戦装束。陽光で煌めくその姿は絵画のように美しいが、氷のように冷たい表情がその全てを異質に感じさせる。

「な、何をするんだいきなり！ それに君は一体誰なんだ!？」

「…勇者ですか。あなたには用はありません。下がっていれば命まではとりませんのでご安心を」

光輝の言葉に一瞥もせずと答えた女性は、何も無い空間からずりと大剣を抜き放つと北条に切っ先を突き付けた。

「では改めて。私はノイントと申します。神の使徒として主の盤上より不都合な駒を排除させていただきますのでお覚悟を」

「俺達は駒じゃない」

ロクに会話もないまま戦いが始まった。ノイントと名乗った女性の大剣が煌めく。凄まじい速度で振るわれたそれは、常人であれば反応もできずに真つ二つに切り捨てるだけの威力があった。

だがノイントの手に伝わってきたのは骨肉を切り裂く感触ではなかった。ぬるりとした奇妙な感触がして腕が泳いだと思ったら、次の瞬間には顔面を殴り飛ばされて真つすぐに吹き飛ばされていた。

直感で受け止めるのは最善ではないと判断した北条は、盾の表面を滑らせるようにして斬撃を受け流し、出来上がった一瞬の隙について盾で殴り飛ばしたのだ。

「……っ、まさかこうも容易く反撃されるとは。ですが先程の砲撃同様に完璧には受け流せていないようですね」

受け身をとって着地したノイントからは鼻血が垂れていた。

一方、攻撃を受け流したハズの北条の盾を装着した左腕からは血が滴り落ちていた。

「……マモル!」

「カオリン、まもるんに回復お願い!」

「分かった、任せて!」

ユエが慌てて北条に駆け寄って腕を診て顔を顰める。服は左肘から先が吹き飛んでおり、肘から先は見るも無残な状態になっていた。所々が抉れており、さらには全体が酸で溶かされたように焼け爛れている。

北条には自動回復の技能があるので今も少しずつ治癒しているが、それでもユエの自動再生と比べると一段も二段も回復速度は劣っている。そこに香織の回復魔法が飛んできたことで表面上は元通りに再生した。

通常であれば魔法での攻撃は防御態勢に入った北条にはほぼ効かない。ユエが放つ最上級魔法であっても多少服が焦げる程度だ。見たところしつかりと魔法や斬撃は受け流せていたのになぜダメージが通っているのか。

「……ふむ。回廊の、魔力に触れた個所が消失しておる。どうやら奴の魔力には物質などを破壊する力があるのかもしれない。あの大剣にも魔力を纏っておるし、アレに触れるのは危険じゃろう」

「マジかよ。ってことはさっきのビームは北条が防がなきゃ俺達即死かよ」

テイオの考察は当たらずとも遠からずである。

使徒ノイントの固有魔法である“分解”は魔力に触れたものを文字通り分解させるという規格外のものだ。とは言え、何もかもを無条件で分解させることが出来るわけではない。

魔力に対しての耐性が極めて高いものや生物に対してはその効果を減衰させられる。

北条の盾が魔力の砲撃や大剣で分解しなかったのはそのためである。多少、表面に傷が付いているがその程度の効果しか発揮できていない。北条自身も魔力に対しては耐性があるものの、無効化できるほどには高くなく、技能込みでもノイントの“分解”の効果はある程度貫通していた。

「ち、ちよつと待ってくれ！俺達はここにある大迷宮を攻略しに来たんだ！君と戦うつもりはない！」

「あなた達が何をしに来たのかは分かっていますですが関係ありません。

イレギュラーは排除せよ。私は主に下された使命を完了させるだけです」

光輝の必死の説得にも耳を貸さず、ノイントは背中から銀色の翼を顕現し、大きく広げて空に飛び立った。ノイントの行う事は単純明快、先程の魔力砲撃を再び放とうとしているだけだ。

最優先目標である北条は完全にノイントの魔力を防ぎきれない。ならば先程のものよりもさらに強力な砲撃で受け流せないほどの攻撃をすればいい。

「消え——」

「雷龍——」

銀色の魔力が収束する直前、ユエが放った「雷龍」が号を広げてノイントへと襲い掛かる。

ノイントのステータスが高いとはいえ、直撃すれば大ダメージは避けられないので高速で移動して回避をする。飛び回るノイントを追うように雷の龍が曲がりくねり、さらにはもう一体、今度は炎でできた龍が追加で放たれ、敵を食い千切ろうと空を走る。

振り切れないと判断したノイントは羽を広げて魔力弾を連射した。もはや壁と言っても良い密度の「分解」が付与された魔力弾に打ちのめされた二匹の龍は、あつという間に火の粉と火花になって空に溶けていった。

「今のはヒヤリとしました。ですが——」

「『壊劫』——」

「雷龍」と「蒼龍」を処理したノイントは砲撃ではなく、先程の魔力弾を雨あられと降らせようとして——上からの凄まじい圧力がかかり、地面に叩き落された。

重力魔法「壊劫」。超重力の壁を作り出して相手を押し潰す魔法であり、対多数戦で真価を発揮する。

使ったのは重力魔法に適性が高い幸利。どうしても詠唱に時間がかかるものの、その威力は折り紙付きだ。だが今回これを使ったのは攻撃目的ではなく、空を飛び回るノイントを地面に縫い付けるためだ。

「ぐっ……、ですがこの程度であれば対処可能です」

ミシリ、と体が軋む音を鳴らしながらノイントがそう言う。神代魔法ではあるが、魔法は魔法。〃分解〃を以つてすれば幸利の魔法程度、一秒程度あれば振りほどけるだろう。だが、その一秒間は回避ができない致命的な隙となる。

体から魔力を放出しようとした瞬間、地に伏せるノイントの視界に光る花卉が入り込んだ。

「注文通りの場所に落とすたぜ」

「さつすがユツキー！ 夜な夜な黒棺をコツソリ練習してただけはあ
るね！」

「止めてくれ谷口、その攻撃は俺に効く。止めてくれ」

さらりと幸利に精神ダメージを与えつつ、鈴がパチンと指を鳴らす。

「〃聖絶・光散華〃」

「しまっ——！」

次の瞬間、空中回廊を揺るがすほどの爆発が連続して巻き起こった。

鈴の一番得意な魔法である〃聖絶〃を花卉状に展開して相手を取り囲み、それを連鎖的に爆発させる大技。防御寄りの戦い方をする鈴の数少ない攻撃方法だ。

オルクス大迷宮深層の魔物でも直撃すれば粉微塵になるほどの破壊力を誇り、ユエも太鼓判を押す程である。しかし練度不足でありまだ完成に至っていないので本来の威力の半分も出ていない。

「や、やったのか？」

「……さらにもう一発」

立ち上がる煙に向かって光輝が眩くが、ユエが追撃として〃蒼天〃を差し向ける。鋼鉄をも溶かす灼熱の蒼い炎球がノイントを蹂躪しようとした瞬間、煙を突き破って放たれた魔砲が〃蒼天〃を飲み込んで消し飛ばした。

ノイントが煙の中から飛び出して、銀閃を引きながら一直線に突撃する。狙いは厄介な後衛組。

先程の鈴の攻撃を咄嗟に銀翼で体を包むようにして防御したお陰で体は無事だが、その代償としてぼろ布のようになっており、しばらくは飛行できない状態だ。

当然ながら北条が一瞬で割り込んで大剣での連撃を受け流すが、“分解”の魔力を纏っているため火花が散るたびに北条の腕も傷付いていく。

あまりにも高速で攻防を行っているため血が勢いよく飛び散ってあつという間に床に赤い斑模様が描かれた。腕が抉れ、爛れて血が飛び散り、そして自動回復と時折飛んでくる香織の回復魔法で治っていく。

「(この男……やはり異常ですね)」

顔にこそ出さないものの、ノイントは驚愕していた。

それは北条がノイントの攻撃を全て受け流している……からではない。

確かに13000程もあるステータスから繰り出される大剣術を一手も間違える事なく受け続ける技量は神代であっても滅多に見ることは無い。しかも、これ程の実力があつてなお恐らくは発展途上。まさしくイレギュラーと呼ばれるに相応しいだろう。

だが、ノイントが驚愕しているのは腕が抉れ、爛れてもなお顔色を変えざる事なくこちらをじつと見てくる精神力の方だった。

恐らくこの男に痛覚を遮断するような技能はない。今もきつと腕を硫酸に浸けているような激痛が絶え間なく襲い続けているはずだ。常人であればショック死するか、既に激痛で気絶していると思われる。

感情が無い自分達のような使徒でさえ強烈な痛みがあれば動きは鈍るといふのに、平然と戦闘を続行し、あまつさえ反撃の機会すら伺っている異常なまでの忍耐力。

「(主の仰る事は正しい。この男だけは今ここで排除しておかなければなりません)」

だが、それでも北条はジリ貧にならざるを得なかった。大剣での斬撃は全て受け流されているが、ノイントに“分解”の能力がある以

上、受け流してもダメージは受ける。北条が持つ剣と盾はアーティファクトであり、魔力に対して強い耐性を持つがそれもいつまで耐えられるかは分からない。

ノイントもそれを理解しているので、先のように反撃を受けないようにもう一振り大剣を取り出して手数優先の攻撃を行っている。ピッタリと北条に張り付いてしまえば周囲の仲間達も魔法による援護はやりにくい。特にユエや鈴、ティオといった派手な魔法を使う面々は援護すれば間違いなく北条を巻き込んでしまうからだ。

「こういう時は俺達の出番だな！」

「闇魔法はまだ練習中だけど私も一応！」

見る見るうちにボロボロになっていく北条を見ている事しかできない状況にユエと鈴が歯噛みしていると、幸利と恵理から闇魔法の援護が飛ぶ。

数秒間の記憶を失わせる「邪纏」と脳からの命令を阻害する「落識」がノイントの動きを少しだけ阻害し、出来た隙に北条が反撃をして殴り飛ばす。

吹き飛ばされている間に闇魔法を振り切ったノイントは受け身を取ろうとするが、足が床に付いた瞬間、そのまま沈み込んですっ転んだ。

「これは……！」

起き上がろうとするが起き上がれない。いつの間にか回廊が一部液化化しており、藻掻けば藻掻くほど沈んでいく底なし沼のようになっていた。

「流石ハジメさん！ 私も一発やっときますよ、そりやあつ！」

「錬成師風情が……っ！」

目立たずに隅の方にいたハジメが地面に両手を付いていた。回廊の床下をぐるっと迂回してノイントが最初に受け身をとった場所辺りを錬成で液化化させていたのだ。

近付くのは危険なのでバラムンクを思いっきり投擲するシア。規格外の強化魔法で強化された身体能力で投擲された重力級の武器は、咄嗟に交差させて盾にした大剣を粉微塵に砕き、左腕を斬り飛ばし

た。

「それでは幕引きといこうかの。……うむ？　これは……歌声？」

魔力を練りに練って最上級魔法を発動させようとしていたティオだが、どこからか響き渡ってくる荘厳な歌声に眉を顰める。気にせずそのまま魔法を発動させようとするが、急に魔力が霧散してしまい不発に終わった。

「むっ、これはどういう事じゃ？　魔力が霧散するのじゃが……」

「……複数人で聖歌を歌うことで発動する状態異常の魔法があると聞いたことがある。名前は忘れた」

「わわっ、何か光の粉みたいなのが出てきた！」

「まじか！　くそっ、動きにくいし魔力が流出する！」

「厄介。あそこの歌を止めれば魔法は止まる」

それどころか光の粒子が何処からともなく現れて纏わりつき、行動を阻害してくる。

すぐさまユエが看破して歌声が聞こえる方向を指さして睨む。ノイントの後方、教会の正門前で魔法が使われているようだ。

そこにはイシユタルを始めとした教会関係者が祈るように手を組んで聖歌を歌っていた。

戦闘音を聞きつけて己に出来ることを実行しているのだろう。

「……イシユタル達ですか。己の役割を把握しているようですね。正直言うと——！」

助かりました、と左腕を失ったノイントが言おうとして、反射的に身を伏せた。

風切り音を鳴らしながら髪を掠めていくのは北条が左腕に装着していた盾。frisbeeのように投擲したのだろう。

しかし、伏せて躲したノイントは対応を誤った事を悟る。今の攻撃は折れた大剣で弾き飛ばすべきだった。

「ぶべっ！」

「がぺっ！」

「あべっ！」

回転しながら矢のような速さで放たれた盾は意志を持ったかのよ

うに動き回り、後方にいたイシユタル達を打ち据えて一撃でノックアウトしてしまった。

「…あっけなすぎますね」

「……思い出した。確か『墜の聖歌』という名前だった」

聖歌が途絶えたことで魔法も解除され、体に纏わりついてきた光の粒子も溶けていくのを見ながらぼつりとユエがイシユタル達の使っていた魔法の名前を呟く。

これでノイントにはほぼ勝ち目はなくなった。光輝はおろおろして何もせずに突っ立っているが、それでも九対一である。自身は翼と左腕を失い、武器も破壊された。おまけに体の半分がハジメ謹製の底なし床に沈んでいる。

「……ここまでですか。見事です。ですが、私の全魔力を以てせめて道連れにしてみせましょう」

ノイントには感情がない。それ故にあまりにもアツサリと敗北を認め、エヒトに下された使命を全うするための最適解を即座に実行しようとする。

すなわち、魔力を暴走させて己諸共辺りを分解させるという自爆行為である。後ろにいるイシユタル達も巻き込まれるだろうがノイントは気にしない。むしろ彼らの事だから、神に殉じて死ねたことを喜ぶだろうとしか考えていなかった。

「させぬ！」

だが、魔力が膨れ上がるよりもティオが動く方が速かった。

ティオが腕を振るって放った「竜爪」が飛び、ノイントに直撃して体を深々と切り裂く。大きなダメージを受けてノイントは吐血し、魔力の膨張が僅かに止まる。

そして、その間に北条が右手に握る青く光る剣を振るった。

技能・移動強化の派生である「十守護」「十危機回避」は、味方を庇う時のみではなく、敵を攻撃することによって結果的に味方を守るこゝとが出来るときにも発動するのだ。集団戦であれば非常に強力ではあるがタイマンでは非常に弱い技能である。

青色の光が帯を描く。直後、パン！ とあまりにも軽い音が鳴って

銀色の髪がくるくると空中を回った。

「…すまない」

ゴトンと音を立ててノイントの頭部が床に転がる。命令を下す脳が無くなった体が液化化した床に沈んでいくがその前に北条が引つ張り上げて墓にするように亡骸に手を合わせた。

幕間：神の山（後）

神の使徒であるノイントを討ち取り、少し刃こぼれしてしまった剣を仕舞う北条。

剣だけでなく、盾も服もかなり破損してしまっているので後で修理をする必要があるだろう。

服の方は再生魔法で直せるが、剣と盾についてはハジメの与りとなる。

「……マモル。腕を見せて」

「触るね。痛かったりはしないかな？」

まだ使い慣れていない再生魔法で服を修復していると、ユエと鈴が北条の腕にそつと触れる。

香織の治癒魔法の効果もあり、すでに表面上はいつもと変わらない状態にまで回復しているが、あれだけ傷付いたのだ。肉どころか骨まで見えてしまうような場面もあったので心配になってくる。

「この程度痛くない」

「……マモル」

小さな手で腕を優しく撫でてみる。ゴツゴツしていて、腕や手には沢山の細かい傷跡がある。

腕だけではない。服の下にも数えきれないほどの傷跡がある事を知っている。

思い返してみれば、ずっとそうだった。

オルクス大迷宮の封印部屋でサソリの針がたくさん刺さった時も、最奥に居たヒュドラのブレスで焼かれた時も、ライセン大迷宮の時も、そして今だって、一度だって痛みを感じさせるような素振りを見せたことはない。

常人であれば死に至るような傷を負っていても変わらずに動き続ける。仲間を庇い続ける。

ユエはあの封印部屋から出た後、自動再生の技能を発動させたことは一度もない。

シアもハジメも鈴も幸利も恵理もティオも、この旅の中では血の一

滴すら流していない。

皆が負うはずだった痛みや傷を全て一人で受け止め続けている。だからこそいつか、誰かを守ってあっさり命を落としてしまいうで、それが容易に想像できてしまつて恐ろしいと感じる。

「ユエユエ、言わなくなつて気持ちにはわかるよ。鈴だつてそうだもん」泣きそうな顔で北条の腕を抱きしめるユエに鈴が言う。

一度はオルクス大迷宮で絶望を味わつたのでユエが感じている恐怖はよく解るのだ。奈落に落ちていったのは、皆を守るために一人でベヒモスの前に留まり続けたのが原因だ。

もしあの時、もつと自分が強ければと何度も考えて、あれから死に物狂いで結界術の腕を磨き続けた。そのお陰でここまでこれたが、それでも今回はこのざまだ。

「ねえまもるん、痛かつたり苦しかつたりしたらちゃんと云つてね?」
「…俺は問題ない。自分の事を心配している」

冷たいようでもこちらを気遣う言葉に「不器用だなあ」と苦笑する。きつと、これからも一杯頼つてしまふだろう。だからこそ守られることを当たり前だと思つてはいけない。もつと強くなつて、これ以上傷付かないようにしなければならない。

そんな二人の内心には気付かず、北条はノイントの遺体に再生魔法を使い綺麗に整えた。

斬り飛ばされていた腕や首も繋がり、傍から見たらただ眠つているようにしか見えないくらいにまで修復をする。

「…………、殺したのか?」
「…ああ」

遺体の修復が終わるころに、今まで後ろで立っていた光輝が恐る恐る北条に問いかける。

あまりにも状況がコロコロと動く戦いだったので、ノイントの首が飛ばされるのを見た今でも彼女が死んだという事実をハッキリと認識できていなかった。

「何で…………、何で殺したんだ? 確かに彼女はいきなり襲い掛かつてきたけれど、テイオさんの攻撃でもう戦えるような状態じゃなかった

はずだろうか？ 殺す必要はどこにもなかったはずだ」

間違いないくテイオの攻撃で致命傷とまではいかないものの、重傷は負っていた。

片腕が無く、武器も失ったノイントであれば気絶でもさせるなりして決着はついたはず。

わざわざ首を刎ねるなどという残酷な殺し方をしてまでとどめを刺す必要はない。

きつと北条ならそれが出来たと光輝は思っている。

実際には自爆して北条達はおろかイシユタル達まで巻き込むつもりだったのだが。

「それは……違いますよ天之河さん。ノイントさんはマモルさんが首を刎ねなければ教会一帯を巻き込んで自爆していました。そうしたら、たくさん死ぬ人が出ていました。だから、マモルさんは間違えてないんです」

「そんな事は……！」

「分かるんです。私の『未来視』がそう言っていましたから」

投げたまま床に突き刺さっていたバルムンクを回収したシアは悲しそうな顔をしている。

元が虫すら殺せないどころか、花を踏んでしまえば涙を流すようなハウリア族である。この旅で魔物を倒すことには慣れたものの、人の形をしたものが目の前で首を刎ねられて死ぬのはかなりショッキングだったらしい。

それでも、メルジーネ海底遺跡で吐いていた事を考えるとだいぶ凶太くなつたようだ。

シアの『未来視』はしっかりと効果を発揮しており、北条が首を刎ねなければ教会全体を巻き込んで多数の死者を出していたことを正確に告げていた。

「天之河は殺さないのか」

「そんなの当たり前だろう！ 人殺しは絶対にやっちゃいけないことだ！」

「……、そうか。そうだな。ならお前はずっとそのままにいるといい」

日本においてはよっぽどの特殊な例を除き、どのような理由があろうと人殺しは罪である。

当然、光輝もそれは悪い事だと思っている。だから、人を殺しておいて表情一つ変えない北条が理解できなかった。

布に包んだノイントの遺体を宝物庫に入れた北条は、もう話すことはないと言わんばかりに先に進んでいく。床を修復し終えたハジメがその背中をポンと叩いた。

「今のは仕方がなかったから衛は気にしなくてもいいんじゃないかな。少なくとも僕は最適な行動だったと思うよ」

「そうか。ハジメは優しいな」

「南雲まで……！　こんな簡単に命を奪って、他の皆はそれで良いのか？」

要領を得ない事を言う北条と、それを庇うハジメ。光輝はとてもじゃないが納得いかなかった。

本来であればしっかりと考えてから発言するべきだったが、衝撃的な事態の前にアドバイスをすっかり忘れてしまっている。

「……マモルは間違っていない。私はマモルに付いていく」

何も知らないくせに、という悪態は辛うじて飲み飲んで、ユエは迷わず北条の背中を追った。

ユエは、オルクス大迷宮からの旅路を全てその目で見てきている。

ライセン大渓谷でハウリア族を捕えて奴隷にしようとしていた帝國兵であろうとも、北条は殴り飛ばすだけで一人も殺さなかった。

フェアベルゲンでジンという熊人族に理不尽に殴り掛かれた時も軽く反撃しただけで必要以上に痛めつけたりはしなかった。

どんな時だって、理不尽に暴力を振るう事は無かった。人の命を奪う事は無かった。

できるだけ人を傷付けずに、他人を尊重して行動していた。

だから光輝の「簡単に命を奪う」という言葉に内心腹を立てている。

「まもるんは理由もなく人を傷付ける事は無いよ。だから、今回は本当にどうしようもなかったと思うんだ。天之河くんもそれだけは分かかってあげてほしいな」

困ったように笑って鈴も追いかける。

「……うん、仕方ないよね。だってあの女の人、本気だったよ。シアちゃんの言う通り、北条くんがやらなかったら今頃は私達が死んじゃってたかもしれない」

「香織まで……」

ハジメくん、と追いかけて行った香織にガツクリと肩を落とす。確かに感情的な物言いだったかもしれないが、あんまりではないだろうか。

「ふむ……妾は道中、お主らの故郷についてある程度は聞きかじっておる。人を殺す事はおろか、少しでも暴力を振るえば悪者になってしまうとか。なんとも平和で素晴らしい世界じゃ。それに当て嵌めるのであれば勇者殿の言っている事は正しいのじゃろうな」

「テイオさん！」

扇子を広げて口元を隠したテイオの言葉に光輝が顔を輝かせる。

だがテイオは「じゃがのう」と続ける。

「今回のように正しいだけではどうにもならぬ事もある。勇者殿よ、もう少し清濁を持ち合わせてみてはどうじゃろうか」

「清濁を持ち合わせる？」

「うむ。極端に正しいだけの人間は逆に人々の害になってしまう事もあるのじゃ。そしてなまじ正しいだけに周囲の者も止めにくい。そうなると後は皆、纏めて崖下に真つ逆さまじゃ。時には間違いにしか見えない道や何もないようにしか見えない道にこそ答えが用意されていることもあるのじゃよ」

「それは……、あつ」

——正しくなくてもいいんです。間違えてもいいんです。これから長く生きていくんですから色んなものを見て、色んな考えに触れて、色んな人と関わってみてください。

昨日聞いた愛子の言葉が脳裏に浮かんだ。もしかして、これがそう言う事なのだろうか。

そう思うと、高ぶった気持ちがスーッと引いていくのを感じる。

「……昨日も畑山先生に似たようなことを言われたよ。正しくなくて

もいい、間違ってもいいって。せつかく雫からも忠告をもらったのに……」

「なあに、人というものは失敗を重ねて成長していくものなのじゃ。今日明日で変わるのであれば誰も苦労などせぬよ。じゃから、取り返しがつく内に沢山失敗をすればよい。歳を取って頑固になると直せるものも直せなくなってしまうからのう」

「へエ、成程。経験者は語るってやつ——ぐげっ！」

「……今のはユキトシさんが悪いと思いますすう」

腕を組んで納得したように唸る幸利の額にティオの投げた扇子が命中した。

女性を年齢の事で揶揄うのはタブーである。額を抑えて蹲る幸利にシアも呆れ顔だ。

「せつかく妾が良い事を言ったというのにお主というやつは！ それに妾は年増ではない！ まだピッチピチの花盛りなのじゃぞ！」

嘘である。長命な竜人族とは言え、ティオはそろそろ良い年齢である。

長老でもある祖父からは「いつ孫の顔が見れるのだ？」とせつつかれる事もしばしば。

自分より弱い相手とは結婚するつもりがないのだが、ティオは竜人族の中でも指折りの実力者なので見合う相手がいないという悲しい状況であった。

「えっ、ピチピチ……？ その言葉を使うこと自体がすでに……いや、よそう、俺の勝手な推測でティオさんを傷付けたくねエ……」

「全部聞こえておるぞ！ そこまで言うのであれば見るがよい、このハリのある肌を！」

「デカ過ぎんだろ……じゃなくて、おい待てエ！ こんな所で脱ごうとするんじゃないエ！」

「ユキトシさん……まさかそれが狙いで……？ 最低のスケベ野郎ですう」

「何で!?!」

「……何だか悩んでた自分が馬鹿みたいだ」

「大丈夫だよ天之河くん。私はちゃんと天之河くんの事を見守ってるから……」

「恵理……ありがとう」

そのまま漫才を繰り広げ始める三人。

それを見て肩を落とす光輝の傍によってさり気なくヒロインポイントを稼ぐ恵理だった。

バーン大迷宮の入り口は意外に簡単に見つかった。

正々堂々正面から教会に入った一行はどこかにあるはずの大迷宮の入り口を探す事になったのだが、「RPGとかだったらここにありそうだよね」と思い当たる場所から探し始めた。道中で教会の職員さんに出くわしたが、そこは幸利と恵理の出番である。

「お前は何も見なかった。勇者一行はここには居ない。いいな？」

「アツハイ」

闇魔法を使って一時的な暗示をかけてやり過ぎす事で邪魔を受けずに進むことが出来たのだ。

そして、一番最初に調べたのは大聖堂にある無駄に巨大なエヒト像の裏側だったのだが、そこがまさに大迷宮の入り口になっていた。エヒト像は台座ごと動かせるようになっていて、シアに頼んで前にスライドさせてみれば覆い隠すようにして一回り小さい台座が隠されていたのだ。

シアは「ええ……。これでも一応、私は女の子なんですけど……。力仕事を真っ先に任せるって酷いと思いませんか？ ねえ聞いてますかユキトシさん」と愚痴愚痴言いながらも強化魔法を使ってズリズリとエヒト像を引きずって動かしていた。

「これは……大迷宮と何か関係があるのか？」

「ええっと、何か彫られてるね……。『二つの証を示せ。神に惑わされない者にこそ道は開かれるだろう』だって」

「証つてのは大迷宮を攻略したときにゲットした景品の事か？」

「もう四つあるからメルジーネ海底遺跡の時みたいにかざしたりすればいいのかな？」

何事も試してみるのが一番と言う事で、北条は宝物庫からオルクスの指輪とライセンの指輪を出して台座に置いてみる。すると、指輪と台座が光を放ち、それに連動するようにして台座の後ろの壁も輝きを放ち始めた。

やがて光が収まると、壁には荘厳な宗教画が描かれた門が出現していた。

錆び付いたような音を立てて独りでに門が開くが、向こう側は真っ暗で何も見えない。それはまるで誰かが入ってくるのを大口を開いて待ち受けているようだった。

「……割とあっさり見つかったね」

「これが大迷宮……。これをクリアすれば俺も神代魔法が使えるようになるのか？」

「ああ。行くぞ」

光輝と香織がしみじみと開いた門を眺める。オルクス大迷宮の入り口は完全にアミューズメントパークの入り口のように整備されていたので、こう言った王道を往く入り口は新鮮に映ったようだ。

そんな二人の横をすり抜けて、北条は迷わずに門の向こう側に足を進める。

その後ろに続くようにしてぞろぞろと一行は歩を進めた。

「……どこだここは」

「……どこかの……街？」

門を跨いだ北条達が見たものは、活気付いた街だった。

ハイリヒ王国の王都に雰囲気は似ているが、熱気が天と地ほどの差がある。

青空の下で行き交う人々は希望に満ち溢れた顔をしており、不安なほど一欠けらもないといった様子であった。

「な、何だ!?! いきなり街に出たぞ!?! もしかしてオルクス大迷宮にもあった転移の罠か!」

「いや、メルジーネ海底遺跡と似た感じかもしれないエ。過去にあった事を映像として再生する、いわゆる幻影ってやつだな」

「あつ、本当だ。触れないね」

「うっ……、い、嫌なことを思い出しました……」

さつきまで神山に居たはずなのに、門を超えれば人が溢れる街中に居るといふ普通ではありえない現象。光輝が罨と思ひ身構えるが幸利が冷静に起こった事を分析する。

香織が脇に置いてある木箱に触れようとするが、手が貫通して硬い感触は返ってこなかった。リアリティが極めて高い立体映像のようなものなのだろう。

シアはメルジーネ海底遺跡での出来事を思い出して顔を青ざめさせた。また同じような映像を見る破目になつたらもんじや焼きを垂れ流してしまうかもしれない。

「しかし今回は平和じゃな。メルジーネ海底遺跡では否応なく戦闘を強いられたのじゃが、ここは誰も襲い掛かつてくる様子はないのう」
「と言うかむしろお祭り騒ぎって感じだね。何か催し物でもあるのかな？」

踊りだしたくなるような軽快な音楽が奏でられている。人々は少しだけおめかししているようにも見える。紙吹雪のようなものが所々で舞い散り、通りを横切るようにして家の二階同士で結ばれた紐には色とりどりの旗が吊るされている。

ハジメの言う通り、メルジーネ海底遺跡での戦争状態とは違って、むしろ平和な祭りが行われているといつても良いほどの活気があった。

「おうい、軍が帰ってきたぞ！」

「魔族を倒した英雄達の凱旋だぞ！」

お祭り騒ぎの街を固まって歩いていると、遠くから叫ぶような声が聞こえてくる。すると、思い思いに過ごしていた人々は途端に魚の群れのように一方向に向かってガヤガヤと騒ぎながら走り出した。

「…なるほど。メルジーネとは逆か」

「メルジーネ海底遺跡の逆？ まもるん、それってつまりどう言う事

なの？」

あつという間にぼつんと取り残された一行は、少し遅れるようにして人々が向かった方向に歩き出す。

どうやら北条はこれだけでこの試練の内容について本質を把握したらしい。

「栄光への欲に惑わされずにいられるかと言う事だ」

「……海底遺跡では神によって起こる悲劇を見せられた。……ここではおそらく神によってもたらされる栄光を見せつけられるはず」

手持無沙汰だったので北条の手をにぎにぎしていたユエも、試練の内容については理解していたようだ。北条が手短に言ったように、おそらくこれは『欲』に目が眩まない強固な意志を確かめる試練なのだ。しばらく進んでいくと、やがて街の入り口と思われる大きな門へと到着する。

そこには多くの人々が詰め寄り、まるで大統領のパレードかのように花道が用意されていた。

耳が痛くなるような歓声の中、武装した集団が街に入ってくる。

その誰もが誇らし気であり、観衆に対して手を振りながら真つすぐに歩いていく。

「これが実際に過去にあった事なのか……？」

「人類と魔族の争いの歴史の一欠片じゃな。状況から見ると、今回は人類側が勝利したようじゃが……」

人ごみの後ろから凱旋を見守っていると、不意に景色が歪んで場面が転換する。メルジーネ海底遺跡でもあった現象だ。

赤い絨毯が敷き詰められたそこは、召喚当日に勇者一行が訪れたハイリヒ王国にある王宮の謁見の間によく似ていた。王冠を被った王様らしき初老の人が先程凱旋してきた人達に褒賞を与えているようだ。

褒賞の内容も様々で、金や領地はもちろん、活躍が著しかった者は王女との婚姻を認められて王族の末席に名を連ねることを許された者もいた。

場面が転換する。

煌びやかに飾り付けられた会場ではパーティが開かれており、華やかな楽団が曲を奏でている。

会場の中心では、先程の男達が美しく着飾った女性達と代わる代わるダンスをしている。

場面が転換する。

今度は先程の街とは違う、現在で言えばブルツクの町程度の大きさの町に降り立つ。

魔族にやられたのか、所々破壊された町で人々は人類の勝利に沸いており、神に感謝の祈りを捧げている。息子の、娘の、父の、母の仇が取れたことを涙を流して喜ぶ人もいた。

場面が転換する。

先程の町よりさらに小さい、それこそ愛子がしらみつぶしに巡っている農村程度の大きさの場所だ。いつ魔族が襲ってくるかも分からない不安が取り除かれ、安心して明日を迎えることが出来るということに喜んでいる。

場面が転換する。故郷に帰って家族と幸せに暮らした人がいた。

場面が転換する。愛する人と結ばれて幸せそうに式を挙げる人がいた。

場面が転換する。貴族となり優雅な人生を送る人がいた。

その後も沢山の光景を見たが、そのどれもが等しく幸せそうで、満たされていて、そして自分達をそうしてくれた神に感謝を捧げている。

「……終わった、のか？」

「…そのようだな」

気が付けば薄暗い通路に立っていた。奥に続く通路がある。きつとこれがあの門をくぐった先にある本当の光景で、先程のはあくまで映像に過ぎなかったのだろう。

どれくらい続いたかは分からない。ひよつとしたら数分間だったかもしれないし、数日間だったかもしれない。終わってみれば夢見心地で、時間の感覚がふわふわしている。

「……な、なんだか宗教の成功体験みたいな感じだったね」

「そうそう、宗教の勧誘ビデオとかでありそうなやつ！」
「それな。先にメルジーネの方に行つてなかったらコロツと騙されてたかもしれねエ」

静寂を破った恵理の感想に鈴と幸利が頷く。この世界で得られる多くの栄光を見せつけられて、神の言う事に従いさえすれば自分もこれらが得られるかもしれないという希望を抱かせる。典型的な宗教勧誘の手口だった。

今回は人類側の栄光だったが、魔族がこの大迷宮に挑めば魔族側が勝利した際の光景を見せられたのだろう。魔族であろうが人である以上、欲望からは逃れられない。非常にいやらしい試練である。

「いやー、正直私はずっと森で暮らしてましたからこんなの見せられてもイマイチピンとこないと言うか……。あつたかい布団で寝てたほうが幸せですよ」

「妾も特に心動かされるようなものはなかったのう。この程度で惑わされるほど未熟ではないわ」

「……私はマモルが居ればそれでいい」

「ハジメくん、日本に帰ったら私達も幸せになろうね」

「えっ、ちよつと待って」

だが、それで揺らぐものはこの中には居なかった。そもそも神を倒して戦争になる前に帰ることが目的なのに、戦争後の後日談のようなものを見せられても意味がない。さらに、例え神の言葉に従って今回の戦争に勝利したとしても、次は魔族側が勝利することは容易に予想できる。

栄光を得たとしてもその次の戦争が始まれば失ってしまう泡沫のものにしか過ぎない以上、従ってやる義理もない。

「……確かに清水の言う通り、俺も事前に話を聞いてなかったら騙されていたかもしれない」

ほつりと光輝が呟く。確かにパレードの様子も、与えられる褒賞も、得られる名声も魅力的だ。だけど、それはずっと続くものではない。今の人類の状況がそれを物語っている。

きっと事前に神が世界を盤上に人類と魔族を争わせて楽しんでいるという情報を聞いていなければ、勇者としての使命しか頭になければ、目の前に吊るされた餌に食いついていただろう。

何かが起こっても大丈夫なように北条を先頭にして薄暗い通路を歩く。

どれほど歩いたか分からないが体感的には三十分ほどだろうか、かなり進んだ所に人が立っていた。

「…誰だお前は」

通路の真ん中に陣取る禿げ頭の男に北条が代表して問いかける。

このようなところにいるのは尋常なことではない。北条の後ろにいるメンバーもいつでも動けるように僅かに身構えるが、禿げ頭の男は硬い表情のまま言葉を発さずに背中を向けて歩き出した。

「…話を通じないな。話すのが下手なのか？」

「ついて来いって事じゃないかな？ ほら、こっち見てるよ」

「……ん、よく見たらあれはただの映像。おそらく解放者の一人だと思おう」

「神山の解放者つつーことは……あれが『ラウス・バーン』か」

もし本人の映像であれば、これで試練は終わりだろう。オルクス大迷やメルジーネ海底遺跡でも、解放者の残した映像が出てきたのは試練が全て終わってからだだったからだ。

幽霊のように消えたり現れたりするラウス・バーンと思わしき男の背中を追いかけていると、やがて彼は立ち止まり、何もない地面を指さした。

「ここに立てという事なのか？ どうする皆、もしかしたら罠かもしれないけど進むのか？」

「んー……、大丈夫みたいです。危険な未来は見えませぬね」

「シアシアの未来視、便利過ぎない？ 何だか前よりも性能が上がってるような気がするんだけど」

「再生魔法を手に入れたあたりから何だか調子が良いんですよねえ」

「魔法同士の相性がいいのかもしれないな」

光輝が迷うが、シアが未来視を使って危険がないことを確認する。

出会った当初は命の危険が迫った時に自動で発動するか、もしくは莫大な魔力を使って臃げな未来を見る事しかできない程度の能力しかなかった。

だが、旅の中で使い続けるうちにどんどんと研ぎ澄まされていき、メルジーネ海底遺跡を攻略し終えるころにはこうしてちよつとした事でも気軽に見る事が出来るようになっていた。

シアの未来視を信じて指定された場所に立つと魔法陣が現れて、光り輝いたと思ったら次の瞬間には光沢のある黒い壁の部屋に転移していた。もはや親の顔よりも見た転移である。

こじんまりとした部屋で、広さは学校の教室程度しかない。部屋の中央には魔法陣が描かれており、これに入れば今まで通り神代魔法を手に入れることが出来るのだろう。

「何かアツサリ終わったな。神山にあるからどんなエグイ大迷宮かと思っただが」

「そうだね。でも簡単に越したことはないからラッキーだったと思うところ」

「な、なあ。本当にこれに乗れば神代魔法とやらが手に入るのか？もしかしてこれこそが罠なんじゃ——」

「……さつさと乗る」

「どれだけ罠を警戒してるんですかこの人……」

魔法陣の一步前で足踏みする光輝の尻をユエが蹴とばして全員が魔法陣の中に入る。

すると魔法陣が光り輝いて今まで通り記憶を探る……のだが、今回はそれとは別にもつと違う、それこそ心や魂といった深いものまで探られているような不快な感覚が襲い掛かった。

ただしそれは一瞬の事で、不快な感覚が消え去った後はいつも通り脳に直接神代魔法の知識が叩き込まれていった。

「…魂魄魔法か」

無事神代魔法の取得が終わる。

バーン大迷宮で得られる魔法は『魂魄魔法』。魂に干渉できる、使い方によっては非常に有用な魔法だ。ミレディの魂がゴーレムに定着

しているのも、この魂魄魔法によるものである。

「おー、まさにエリリンのためにあるような魔法だね！ ついにエリリンが覚醒して完全体になる時がきたのかもしれないですぜえ……！」

「鈴はなんでそんなにテンションが上がってるの……？ でも、うん、この魔法なら上手く扱えそう」

「これが神代魔法、か……。確かにすごい強力な魔法だ。使い方は間違えないようにしないと」

大きな力は人を救える一方で、簡単に人を不幸に陥れる事ができる。

だからこそ大きな力は慎重に使うべきだし、みだりに人に振るっていいものではない。大いなる力には大いなる責任がついて回るのだ。

魂魄魔法を手に入れた後、少しだけ部屋の探索をする。他人の家に訪れると探検したくなるのは人のサガである。それは異世界に来ても変わらない。

むしろこれから役立つお宝が眠っているかもしれないので、それはある意味当たり前の行為と言えた。だが探しても部屋にあるのは魔法陣の側にある机とその上に置いてある一冊の本のみであり、残念ながら他にめぼしい物はなかった。

「ちつ、あるのは本一冊だけか。シケてんな……オスカーを見習って欲しいモンだぜ」

「清水、他人の家を荒らしといてその言い方はないんじゃないか？

仕方ないとはいえ、そもそもこうして物色する事自体がおかしいと思うんだが」

「へーへー悪うございました。つと、こりやどうやら日記帳みたいなものらしいな。なんか色々個人的な事が書いてあるぜ。おっ、この大迷宮についての情報も載ってやがる。こりや儲けモンだな」

机に置いてあった本を幸利がペラペラと捲っていく。

最初のページはラウス・バーンの懺悔から始まり、何故ここに大迷宮を作ったのか、それがどのようなものなのか綴ってあった。

どうやらこの大迷宮、場面が転換する毎に魂魄魔法で少しずつ査定

をしていたようで、欲に目が眩んで意志が折れたりすると隔離された脱出不能の何もない異空間に飛ばされるらしい。

そしてこの部屋にある最後の魔法陣で魂魄をしつかりと検査して、問題無ければ晴れて魂魄魔法が手に入れられるようになっていたとか。もちろん、最後の魔法陣で査定に落ちれば異空間送りである。

なお、脱出は空間魔法が無ければ不可能な上、魂魄魔法によって神代魔法に関しての記憶も封じ込められるので実質的な死刑宣告である。

「えっ、ちょっと初見殺しが酷くありません!？」

「簡単かと思ったら今までののに劣らないくらいヤバい大迷宮だった件について。いや、今までの大迷宮も大概だったけど」

幸利が読み上げた内容を聞いてシアとハジメが慄く。

途中で一度でも揺らいだらアウト、そこで人生終了というのはあまりにも厳しすぎる。だが逆に考えると、あれを見せられてなお迷いがないくらいに意思が固くなければ成し遂げられないと言うことではないだろうか。

「俗物を魂で篩い分ける大迷宮だったと言うわけじゃな。何にせよ神代魔法が手に入ってためでたしめでたし、というわけじゃ」

「よし、あとは二つだけだー! ゴールも見えてきたね!」

「……シユネー雪原よりハルツイナ樹海からの方がいいかも。シアの家族も居るから顔も見せられる」

「ユエさん……! ううっ、優しい親友を持って私は幸せですう!」

「……勝手にランクアップしてる。凶々しいウサギ」

「久しぶりに聞きましたよその辛辣な言葉! さきつマモルさん、素直じゃないユエさんに何か言っちゃってください!」

「分かった。……今日の夕ご飯はオムライスだ」

「……やったっ」

「喜ばせてどうするんですか! そういうところですよマモルさん!」

「なんだか楽しそうだね。ハジメくん、いつもこういうの?」

「お恥ずかしながらいつもこうなんだよね……」

ドタバタ騒ぎながら魔法陣に乗ると、先程の薄暗い通路に転移して戻ってきた。その後、特に何かあると言うわけではなく、行きと同じように闇魔法を使いながら神山を後にする。

それから数日間、王都で小休止をしてからハルツィナ樹海まで飛行艇を飛ばす事となった。

フェアベルゲン〜ハルツィナ大迷宮攻略開始

ゆゆうじようパパワー！ なRTA、はーじまーるよー！

今回はハルツィナ樹海の攻略から進めていきますが、その前にまずはハウリア族に顔見せをして一晚泊してもらいます。計算通り36日目に到着できたので大丈夫そうですね。

思わぬ豪運で急ぎよチャートを変更しましたが上手くいきそうでした。良かったです。

ハルツィナ樹海の入りで飛行艇から降りまして、ハウリア族の住んでいる村にお邪魔しましょう。鳥人族、耳長族、熊人族などの様々な種族がここで暮らしていて、当然それぞれの種族ごとに地元、もとい村があるのですが、どの村にお邪魔するときも首都のフェアベルゲンを通る必要があります。

＜フェアベルゲンは久しぶりだ

＜カム達は元気になっているだろうか……

いつ見ても美しいグラフィックだあ……。

フェアベルゲンは絶好のスクショスポットの一つです。アンカジ公国が人間の作った街の美しさとすればこちらは自然が生み出す美しさといったところでしょうか。

まあ今回はのんびりしている暇はないのでフェアベルゲン観光はキャンセルして、さっそく街の北側にある出口から出発しましょう。シア姉貴がいるのでハウリア族の村まではパパッとイけます。

「ハルツィナ樹海は私達の庭ですよ！ パパッと行っちゃいましょう！」

＜シアに案内をしてもらえば迷わずに進めそうだ

＜案内を頼もうか……

⇒はい

いいえ

「任せてください！ それじゃあ皆、私の後にしっかりと付いてきてくださいね！」

パパッと行くとは言ってますが、三十秒ほどロード画面が挟まるん

ですよね。

ハルツィナ樹海はオブジェクトが多いので読み込みに時間がかかるみたいです。SSDでこれとかマジ？ 他のゲームではもつとオブジェクトが多くてもロードは速いのに、なんでここは修正しないのかコレガワカナイ。

制作会社に対するアンチコメをしている間にハウリア族の集落に到着しました。

割とこじんまりした場所です。以前の一件でハウリア族は結構数を減らしてるみたいですし、そのためか空き家も結構あります。

音量注意！

「皆さ——ん！ 帰ってきましたよ——！」

うるせえ！

シア姉貴のクソデカボイスはライセン大溪谷以来ですね。シア姉貴の声に反応して次々にウサミミ達が家から出てきて暖かく出迎えてくれます。

「おおシア、帰ってきたか！ 大きな怪我もないようで何よりだ！

マモル殿、ユエ殿もお久しぶりです。以前はお世話になりましたな。

ハウリア族一同、歓迎いたしますぞ」

一晩お世話になりナス！

ハウリア族には一人一人に台詞が用意されているのでシア姉貴との絡みを見ることが出来ます。スキットも5つほどあるので興味がある方は自分の目で確かめてみよう！

「どうですかなマモル殿、シアは問題なく出来ておりますか？ マモル殿が居れば大丈夫だと思いますがやはり大切な妻の忘れ形見、どうし」

残念ながらRTAなので無駄な会話はキャンセルだ。カムの家……つまりシア姉貴の実家ですね、これに直行してさっさと時間を進めてしましましょう。

「せっかくですし、家で休まれますか？ シアも交えて旅の話の色々と聞かせていただければ嬉しいのですが……」

〈『カム』の家に泊まることが出来るがどうでしょうか……

⇒はい

いいえ

「それでは部屋を用意致しましょう。ご自身の家と思いごゆるりと寛いでください」

「久しぶりの我が家ですし、今夜は腕によりをかけますよー！ 楽しみにしててくださいね！」

すいませくん、ほもですけど。シア姉貴を合わせれば10人居るんですが、大丈夫そうですかね。

気付けばかなりの大所帯となっております。そのせいかイベントで全員が動いたりすると若干の処理落ちが発生しているような気がします。

時間が過ぎて夕餉の時間です。11人で食卓を囲んでおります。はえ、すつこい美味しそうな料理……。シア姉貴の手料理を食べたいけどなく俺もな。

カムおじさんとの会話イベントが発生していますが当然早送りです。会話の内容も今までの思い出とか明日の予定とか、当たり障りのない内容で重要なものはないので問題ないでしょう。

＜『カム』と楽しい一時を過ごした

＜『カム』との絆が深まった！

当然ですがカムおじさんとも友好を深めることが出来ますし、何気に攻略も可能です。女主人公で友好度10にすればカムおじさん再婚ルートもあるので興味がある人はやってみてね！僕はやりません。

でももしそうなるシア姉貴とは義理の親子になるんですね。同じパーティで旅するとかクツソ気まずいんですがそれは……。

＜朝になった

はい、それじゃあ37日目になりましたのでとつと大迷宮を攻略しに行きましょう。

カムおじさんの家にはシア姉貴の私室があり、物色すると破廉恥極まりないハウリア族の衣装を手に入れることが出来ます。手に入れた衣装はシア姉貴以外にも着せることが出来るのでお気に入りのキャラに着せてやると捗るかもしれません。

ユエ姉貴に着せてシア姉貴とテイオ姉貴の間に挟もう（凸凹凸）。

「おはようございませす。昨日はよく休めましたかな？」

「おはようございませす！ 皆さん、朝ご飯出来てませすよ！」

シア姉貴がやけに張り切つてませす。お友達を招待した時に普段より高いお菓子とか出しちやうあのテンションですな。それじゃあパパッと飯を食つて出発ませすよ。

今日の朝食は野菜・穀物系統の料理ですな。魔力関係のステータスが若干アップするのどうませす。

オラツ、ユエ！ メイン火力のお前が腹パンパンになるまで詰め込むんだよ！

それではユエ姉貴にフオアグラ農場したので先に進ませませすよ。

「それでは父様、行ってませすね」

「ああ、十分に気を付けるんだよ。マモル殿、ユエ殿、それに皆様もまたいつでもお越しくださいませ。ご武運を」

お世話になりました。もう用二度と来ねえよ、ぺっ！（豹変）

おっ、ちゃんと霧が晴れてませすね。とはいっても普段に比べてという話なので結構視界は悪いですが。

あらかじめマップは作つてあるので最短距離で駆け抜けませすよ。ちなみにですが、霧があつても樹海を歩くことはできませんが、大迷宮を中心として侵入不可ゾーンが発生しているようで、一定以上近付こうとすると『これ以上は霧が深くて進めない』というメッセージが出てきて強制的に引き返させられます。

なので、霧が晴れる37日目まで待つ必要があつたんですね。

道中は特にナニモイウコトハナイ。ハルツイナ樹海のモンスターはレベル90の清水くんで追つ払えますのでエンカウントもなし、ひたすらに走るだけで特にこれと言ったイベントは起こりませせん。

×4 甥の木村、加速ませす。

……話すことがないのでハルツイナ大迷宮についての解説をします。

ハルツイナ大迷宮は戦闘自体はあまり行われませせん。流石に神山よりは多いですが、それでも徹底してエンカウントを回避すれば2、

3回程度であり、そのどれもがそこまで強くはありません。今の戦力であれば問題なく切り抜けられるでしょう。

基本的にヌルゲーダンジョンですが、唯一の事故地点は大迷宮のラストバトルです。これについては実際の場面で説明しましょう。クツソストレスが溜まるので。

＜ハルツイナ大迷宮があると思わしき大樹に辿り着いた

＜どうやら枯れてしまっているようだ……

到着しました。相変わらず枯れたままですが今回は問題ありません。再生魔法+大迷宮4つクリアという条件を満たしているのでね。

なお、人力ではほぼ不可能ですが不法侵入する方法があります。この大迷宮、枯れた大樹の中にある魔法陣が出現する座標にキャラが入れば入場できるので、『ミウウ&ジンすり抜けバグ』を使えば条件を満たしていなくても挑戦できるのです。

最もサイズの小さいミュウ姉貴と最もサイズの大きいジン兄貴を1フレーム毎に切り替えながら、異なる移動速度の二人をぴったり同じ速度で移動させて、枯れた大樹の左側面にある出っ張りの間に擦り付けるとぬるつとすり抜けて中に入れます。

少しでもすり抜ける角度を間違えると暗黒空間に囚われて身動きが取れず詰む上にセーブデータにもダメージが行く可能性があるののでTASさん以外にはお勧めできません。

「これが大迷宮……？ でもこれって……」

「おう、見事に枯れてるな」

「……でも『再生魔法』と攻略の証が四つあれば入れるはず」

「確か石板があつたはずですよ。とりあえずはめ込んでみましょう！」

では順番に攻略の証を石板にはめ込んでやりましょう。アイテム欄から『使う』を選べばOKで、証はいずれのものでも大丈夫です。

＜『オルクスの指輪』を石板にはめ込んだ

＜『ライセンの指輪』を石板にはめ込んだ

＜『メルジーネのコイン』を石板にはめ込んだ

＜『バーンの指輪』を石板にはめ込んだ

〽石板が光を放ち始めた！

これで万事OKだわ。後は枯れた大樹を調べればイベントで再生魔法を使ってくれます。

「わわっ、大樹が光ってる！ これどうすればいいの!？」

「石板の文字通り再生魔法を使えばよいと思うのじゃが……妾がやるのかの?」

「いえいえ、ここは私にお任せあれ！ はああああっ！ 〽再生魔法
“！”

「その掛け声いるのか?」

シア姉貴が気合の再生魔法で大樹を復活させてくれました。あつという間に青々しい若葉をそよがせる昔の姿に元通りです。

大樹の幹がくぱあして入り口が出来ました。ここから大迷宮に入れます。

そして、突入の前にメンバーチェンジです。

今回のメンバーはフロントにほもくん、ユエ姉貴、テイオ姉貴、清水くんの四人です。バックは誰でもいいです。いつものハジメくんと谷口姉貴を突っ込んでおきましょう。

〽ここから大樹の中に入れるようだ

〽ハルツイナ大迷宮に入りますか？

はいを選べば試練開始です。中に踏み込むと地面から魔法陣が浮かび上がってきて転移されます。

〽どうやら転移の魔法陣だったようだ

〽ここはハルツイナ樹海の中だろうか……

森の中で森の中に転移するって変な気分ですね。

さて、第一の試練開始です。第一の試練は『すり替えておいたのさ！ ドキドキスライム危機一髪くゴブリンを添えてく』です。

これはネタさえ割れていれば非常に簡単な試練です。原作履修済みの兄貴方々であれば迷う事は無いと思います。まずはメニューを開いてメンバーを確認しましょう。

谷口姉貴、テイオ姉貴、白崎姉貴の霊圧が消えていますね。

と言う事はこの森の中にこの三人の姿をした偽物と、三人が姿を変

じたゴブリンが居る事となります。ちなみに、ゴブリンと化すキャラは主人公以外から完全にランダムです。

つまり、道中でこの三人が出てきたら無視するか即札して、それっぽいゴブリンが居たら話しかけて回収すればいいのです。パーティメンバーが変じたゴブリンにはそれぞれ行動に特徴があります。

例えばシア姉貴であれば手でウサミミを作って、飛び跳ねてアピールしてきます。あゝゴブリンがピヨンピヨンするんじやゝゝ。なお、ユエ姉貴であれば原作と同じようにじつと見つめてくるだけです。

それじゃあ探しましょ。キャラクター毎に居る場所は固定なので、wikiを見ながら最短距離で駆け抜けます。えーっと、今回だと谷口姉貴、白崎姉貴、テイオ姉貴の順番ですね。

確かこの辺りに……いました。木の窪みで膝を抱えてゴブゴブ泣いている小さいゴブリンが谷口姉貴です。ゴブスレさんなら容赦なく命を刈り取るのですが、正体は分かっているので話しかけて回収しましょう。

「ゴブ!? ゴブブブ! ゴブウ……」

「……あれ? このゴブリンってもしかして……」

「どうしたんですか恵理さん、気になる事でもありましたか?」

〈『小さいゴブリン』は何かを伝えたいようだ

〈どうしようか……

⇒連れていく

無視する

倒す

「ゴブ——!! ゴブブブーン!!」

〈『小さいゴブリン』を連れていくことにした

「ゴブゴブ——! ゴゴブ!」

日本語でおk。あ、ちなみに倒してしまおうとキャラロストです。

初見殺しとかそういう問題じゃないんだよなあ……。

お次は白崎姉貴です。白崎姉貴はハジメくんを操作キャラにする
と、一定距離以内に近付いたら向こうから勝手にホーミングして来て

くれるので楽です。テイオ姉貴がいる場所まで真っすぐに進めば白崎ゾーンに入ります。

「ゴブブ——!!」

「うわっ、急に何!？」

めつつちや追尾してきて草生える。

「しまった、南雲がゴブリンに襲われた! くっ、このまま攻撃したら南雲も巻き込んでしまう!」

「……敵意は感じない。攻撃する必要はないと思う」

「ちよっ、待っ、服の中に潜り込もうとするのはやめてっば!」

「ゴブ——!」

〈『白いゴブリン』は『南雲ハジメ』が気に入ったようだ

〈どうしようか……

⇒連れていく

無視する

倒す

「ゴブゴブ! ゴブブブ!」

〈『白いゴブリン』を連れていくことにした

これで二人目ですね。あとはテイオ姉貴を回収して、その後中ボスを倒したらこの試練は終了です。

今回はまだ偽物に出会ってませんが、運が悪いと原作のように転移した瞬間に横にスタンバイしている時があります。その場合は仕方がないので容赦なくボコボコにしましょう。転移した直後から偽物三人にエンカウントした原作ハジメくんはクス運だった……?」

「ゴブウ……」

居ました。背の高い樹に背を預けて黄昏ているゴブリンがテイオ姉貴です。

原作では嬲られて喜んでいましたが、このチャートではきれいなままなので（暴行を加えられて喜ぶ変態は居）ないです。

「なんだア? やけに落ち着いてんな」

「うーん、この仕草、どこかで見たとような気が……」

〈『落ち着いたゴブリン』は意味ありげにこちらを見ている

くどうしようか……

⇒連れていく

無視する

倒す

「ゴブリン、ゴブブー！」

く『落ち着いたゴブリン』を連れていくことにした

これで回収完了です……。ゴブリンになったメンバーは戦闘に参加できないので、メンバーを並び替えましょう。……これって入る前にメンバー並べ替えの意味なくないですかね？ 結局ここでまた並べ替える事になるんですし、二度手間でした。

これを、専門用語でロスと言います。次は中ボス前にメンバーを入れ替えるよう、チャートにちやーんと書いておきましょう。フロントにシア姉貴、バックには天之河師範を入れておきます。連携はいつものほもユエと、後はシア姉貴と清水くんを設定しておきます。

あ、ちなみに天之河師範の補助効果は敵の攻撃力をダウンするデバフを撒くという何とも地味なものになっています。役に立たねえ……。

……うげっ、中ボスの目の前でティオ姉貴(偽)がうろろうしてる。頼むからどいてくれ。お前のようなものは出現すらしなくてくれ。気付かれないように木の陰に隠れてどこかに行くのを待ちましよう。

ティオ姉貴(偽)の後ろに居るのが中ボスの『エルダートレント』です。そこまで攻撃力は高くないですが、ターンごとに再生する能力を持っているので持久戦を仕掛けるのは愚策です。高い火力で一気に削りきってやりましょう。弱点は炎と雷、耐性は土、無効は水です。物理は打撃と斬撃、どちらも普通に通ります。

よーし、立ち去ったな。それじゃあ中ボス戦です。お覚悟を。

く大樹が蠢いて襲い掛かってきた！

エルダートレントは、物理オンリーでしか攻撃してきません。

威力の高い単体一回攻撃、威力の低い単体複数回攻撃、それなりの威力の広範囲攻撃とバリエーションは豊富ですが、普通に挑発が効く

のでいつもの戦法で問題ありません。

ほもくんは挑発を使用、触手プレイに勤しんでもらって後は袋にしちまいます。

「エルダートレントは大きな枝を叩きつけた！」

「……お返し。『破断』」

単体強攻撃ですが、ほもくんの防御力の前には無駄無駄ア！ そしてユエ姉貴反撃は炎か雷属性で頼むよー。水属性は無効だからなー。

「空の怒りよ、地に落ちよ！ 『雷槌』！」

「せーのっ、そりゃあー！」

清水くんは中級雷魔法の『雷槌』、シア姉貴は『剛閃』で攻撃します。連携は魔法だけではなく、物理と魔法の組み合わせでも発動する事があります。

「いよっしやあああ！ バチバチきましたよお！」

「焼き切れちまえー！」

「『紫電一閃』!!」

画面が暗転して紫の光が閃き、次の瞬間にはすれ違いざまに大剣を振り切ったシア姉貴が映し出されます。ヴォーカツコイー……。

威力もかなり強いですし、なにより雷属性が乗っているので今回の敵には特攻があり、『轟爆』よりもダメージが出ます。そして何よりも演出がかっこいいです。

ほもくんとユエ姉貴の連携技は無いの？ と思われる方もいるかもしれませんが、当然あります。ただし今チャートでほもくんは防御に専念するので出番はないです。残念。

〽戦闘に勝利した！

そうこう言っている間に戦闘が終了しました。特段強い相手でもないの見所さんはありませんでした。

エルダートレントを倒し終わると、彼(?)が再生後の大樹のようにくぱあして次の試練への道が開かれます。

「これは……入って事なのか？」

「えつと……全員揃ってるかな？」

次のステージに進むためには居なくなつたメンバーを全員回収し

なければいけません。

偽物を間違えて連れて入った場合は後ろから襲い掛かれて面倒なことになるので、しっかりと真の仲間を見分けて連れていきましよう。

〽 次の試練に進めそうだ

〽 どうしようか……

⇒ 入る

入らない

中に入ると白い光に飲み込まれて次の試練へ挑めます。

戦闘はない試練なのでさくつと終わらせて今回はここまでです。ご視聴ありがとうございます。

□ どうでもいいオマケ□

「ククツ……い！ ついに完成したぜエ……い！」

「どうしたんだ清水、何が完成したんだ？」

それは王都を旅立つ前日の事であった。男子連中は王宮の一室で旅の準備をしていた。

その中でなにやら作業をしていた幸利が意気揚々と何かをやり遂げたような、それでいて悪だくみをしているような顔をしていたので荷物をまとめていた光輝が首をかしげる。

「それはな……これだ！」

ニヤリと笑った幸利は、手に持ったそれを自慢げに見せびらかした。

それは、光輝も見ることがある物だった。小さい黒光りするボディに小さいプロペラのようなものが装着されているそれは、一般的にドローンと呼ばれる物だ。

「それってもしかしてドローンか？ そんなもの、トータスでどうやって作ったんだ？」

「北条が色々書いてある本を都合よく持ってたからなア、再生魔法を手に入れた後くらいからちよつとずつ作ってたんだよ。パーツに關しちや南雲がいるから困らねえしな」

「清水……、南雲も忙しいんだからそんな玩具を作らせるのはどうかと思うぞ」

「僕は大丈夫だよ天之河くん。片手間に作れる程度だったし、清水くんが設計図を書いてくれたからそれほど気にしてないよ」

「……？ 誰か来たな」

ドアをノックする音が聞こえたので、北条が一旦作業をやめてドアまで向かう。

幸利は聞かれてもいないのにドローンの事について説明をし始めた。オタク特有のアレである。

「いいか天之河。このドローンはな、神代魔法が組み込んであるんだ。空間魔法による迷彩機能があるからよっぽどの事が起こらねエ限りは飛んでるところは見つからねえ。さらには再生魔法によってこのドローンで映し出される映像や音を限りなく実物に近い状態で視聴できるんだ。コイツはすげエゼ」

ペラペラと話しているうちに、部屋を訪ねてきた人物が幸利のすぐ後ろまで移動してきていた。当然、自分作のアーティファクトを自慢することに夢中になっているので、幸利はそれに気付いていない。

光輝とハジメは「あっ」と何かを察したような表情をした。

「へへっ、これがありやあ、普段は見れねえようなあの場所もバレずに覗きたい放題ってわけだ」

「成程、して何処を見るつもりなのじゃ？」

「何処って、察しが悪いな。女子の着替えや風呂を鑑賞するに……」

やれやれと首を振った幸利は、後ろから聞こえてくる男のものではない声に反射的に答えて、そして固まった。

「ほう」

「決まっ……て……」

ギギギ、と首から錆び付いたような音を出して振り向くと、そこには笑顔のティオが立っていた。

女性陣の準備が出来たことを知らせに來ただけのつもりだったが、しかし、何やら幸利が興奮しているのを見て少しだけ話を聞いていこうと思ったのだが、この有様である。

「済まぬのう三人共、忙しいと思うのじゃが少しこやつを借りてゆくぞ」

「どうぞどうぞ」

「お、おいお前ら、俺を見捨てるのか!? 俺達は仲間だったはずじゃ、うげっ! ギブギブ! 首が絞まっつでるゝ! 生ゝぎだいゝっ!!」

幸利の襟を強く掴んだテイオが笑顔のまま退室しようとする。それをかばう勇気が二人には無かったので、幸利はアツサリと売り飛ばされて部屋から引きずられて姿を消した。扉が閉まる音がやけに耳に残る。

「…北条、南雲。テイオさんは怒らせないようにしよう」

「…そうだね」

「…ハジメ、もう一回り大きい鍋が欲しいんだが」

「ああ、うん。人数が増えたからね。後で作っとくよ」

静寂が訪れた中、男三人は旅の支度を整えていく。

その日の夜、王宮には男の断末魔が響き渡ったらしい。

ハルツイナ大迷宮攻略

この迷宮作った奴絶対にニチャアって顔してただろRTA、はーじまーるよー！

さて、ハルツイナ大迷宮の第一試練をクリアしましたので、今回はその続きですね。二つ目の試練は特にするのではないです。ひたすら毒にも薬にもならぬイベントが垂れ流されているだけですからね。ボタンを連打して会話をスキップしているだけで勝手にクリアしてくれます。

そして二つ目の試練は原作にもあったように理想の世界みたいな夢を見てその誘惑を振り切る、精神力とかが試される試練です。

ただし、オリ主人公の場合は精神系の人間ステータスが低くても失格になる事は無いです。地球パートですつと寝てばかりでもしい限り、自然に上がる分の能力だけで試練達成率百パーセントなので安心！

夢の内容はキャラクリの時に選んだ背景とか、特別な関係になつているキャラクターの有無で変化します。最初に選んだ背景だけでイマイチ過去の事が分からない主人公の事を知る数少ない機会です。

ただし、ガッツリ描写されるわけではなくある程度フロム脳を働かせて想像する必要があります。裕福な家庭で何不自由なく育った幸せな過去から役立たずの狛犬みたいな惨めで滑稽でつまらない過去まで色々と揃っております。初期の背景から今までの過ごし方、人間ステータスで決まるんじゃないかと言われていますが詳細な条件は分かっていません。一説では忍耐や寛容、疎通が関係あるとか。

ほもくんの場合は『家族なし』であり、特別な関係のキャラクターが居ないので、つまりそう言う事です。それでは今回のほもくんの夢の内容はどうかと言うと……。

家族と戯れていますね。どこかの原っぱでピクニックをしているみたいです。

……つまり、どう言う事だつてばよ？

両親と、妹と弟が一人ずつみたいです。はえー、ほもくんは長男

だったんですね。でも家族全員顔がぼやけてますし、あまり記憶力が良くないのかな？

▽……こんな光景はあり得ない！

▽これはただの夢だ、早く目覚めなければ！

もしやこれは……人間だった時に盲目だったか弱い儂と同じくらい悲しい過去がある可能性があるかもしれぬ。

このメッセージが出たと言う事はイベントは終了ですね。あんまりよく分からなかったですが、ほもくんの過去なんぞタイムには関係ないので気にしないようにしましょう。

もう行かなくちゃ、ごめんねと一言断って二つ目の試練は終了です。チヨロいぜ。

夢から覚めるとそこは小部屋でした。琥珀色の棺から起き上がりまして、他のメンバーが寝こけている棺を調べましょう。それぞれ一回ずつ調べるとイベントが進行します。

「ああ、うん、おはよう。良い夢だったけど結局はただの夢だからね」
起床一番手はハジメくんですね。原作でも一番最初に起きていました。このハジメくんはどんな夢を見ていたのか気になりますが、余計な詮索はしないでおきましょう。

「……ん、おはよう。やっぱりこっちのマモルの方が好き」

「鈴はすぐに気付いたよ、これは夢だって。だってまもるんはあんな気障なこと言わないもん！」

「ふああ〜おはようございませう……。いやあ、久しぶりにお母様に会えてラッキーでした！ でもやっぱり皆さんと一緒に良いですね！」

「理想の世界とは抗い難いものじゃが、今を受け入れるしつかりとした芯があれば跳ねのけるのは容易い。妾にとっては楽な試練だったのう」

ハジメくんを皮切りに次々と起床し始めましたね。谷口姉貴は原作では全然ダメでしたが、今回は大丈夫みたいだったようです。中村姉貴が敵じゃないからね。

他のメンバーも概ね勝手にクリアしますが、清水くんと中村姉貴と

天之河師範は時々失格になることがあります。今回のチャートではこの三人がこの後の神代魔法を取得できなくても問題はないので、何回も挑み直したりする必要はありません。

むしろラスボス撃破までのプレイなので、最悪でもほもくん一人が突破できていればラスボス戦フラグが立つので大丈夫です。

「おお、良い夢だったな。まあ、露骨に都合が良すぎるんですけどすぐに気付けたんだが」

「……うん、そうだね。でも大事なことを思い出せた気がする」

「くっ、なんて試練だ。こんな卑劣な手を使ってくるなんて……。でも大丈夫だ、俺はこんな誘惑に負けたりなんかしない！」

「うくん、何て言うか、『違う』んだよね。やっぱりハジメくんはこっちの方が良いかな」

天之河師範さらっとクリアしてる……。負けないうって言って本当に負けないなんて師範らしくもないです。彼がこの試練を突破する確率は大体三割くらいなので今回は当たりを引いたようですね。

そんじゃあ無事に全員がクリアできたので魔法陣に乗って先に進みましょう。

▽ 転移の魔法陣だ

▽ 先に進めそうだがどうしようか……

⇒ 進む

心の準備が必要だ

お次のステージは地下空間にある樹海です。

遠くに一等大きな木があるのでそこまで真っすぐに進みましょう。

進む前にメンバーチェンジをしまして、今回はフロントにほも、ユエ姉貴、テイオ姉貴、あとは清水くんを入れておきます。三つ目の試練で戦う相手が火属性弱点なので、火属性魔法が使えるのであれば誰でもいいです。パーティ内ではこの三人が魔法攻撃力上位三名なので今回はこの三人です。

では進みますが、ここから先のステージは非常にストレスが溜まりますので覚悟の準備をしておきましょう。

▽ 上から白い粘液が落下してきた！

「わぶっ!? な、何ですかこれえ!!」

「上から降ってくるぞ! 皆、気をつけろ!」

「あ、あ、ああっ!! 眼鏡が、眼鏡がああ〜!!」

「エリリンがやられたっ! 結界! 結界!」

これですね。白くべたつく何か、もといエロ同人に出てきそうなやつです。原作では発情効果がありましたが、これは全年齢対象のゲームなので違う形で再現されています。

とにかくさっさと先に進みましょう。グリユーエン大火山と同じように時間経過でケファイアゲージが溜まって、MAXまで溜まると強制的に戦闘になってしまいます。

最短距離で進めば戦闘は一回だけで済むので、道中に何故か置いてある宝箱は全て無視します。入っているものは回復薬とかのシヨボイものだけなのでね。

走れ走れー! 迷路の出口に向かってよー!

移動するだけなので倍速。

×3 甥の木村、加速します。

こうして淡々と移動しているとケファイアの効果が無いように見えますが、スキットを見てみるとバツチリ効いています。そして、それに対する各々の対処(意味深)の仕方をやり取りしている話もあるので、興味がある人は自分の目で確かめよう!

〜ようやく出口にたどり着いた!

〜早く先に進まなければ!

最終試練への入り口にたどり着きました。だがそう簡単には問屋が卸さないのが現実つてもんです。出口にたどり着くと大量に積もったケファイアが行く手を塞いでいます。じゃけん駆除しましょうね。

〜大量のスライムが行く手を塞いでいる!

〜手早く片付けなければ!

第三の試練のボス(?)である『ラストスライム』との戦闘です。

とは言っても向こうから攻撃してくることはないです。ひたすらダメージを与えるのみ!

一見楽勝なボスのようですが、そうは問屋が（以下略）。

【ユエは身動きが取れない！】

【ティオは身動きが取れない！】

【清水は身動きが取れない！】

はい、これですね。この戦闘では各キャラに順番が回ってくる毎に『気絶』『魅了』『混乱』のバッドステータスが付与与されてしまいます。ほもくんのように状態異常に耐性があれば問題なく行動できますが、他のメンバーは以上のようにかなり高い確率で行動不能になります。

デバフ・状態異常を解除する天之河師範の聖剣を使えば？ と思うかもしれませんが、天之河師範の聖剣の加護は現在かかっているものを解除するだけで、予防はできません。そして天之河師範の耐性は割とガバガバなのでほとんど動けません。

つまり、キャラが動くように祈ることによりタイムを短縮できるというわけです。

はあ〜〜（クソデカ溜息）。 あ ほ く さ 。

向こうから攻撃してこないのもユエ姉貴の魔法反撃も意味がないし、何気に物理攻撃は無効だし、私いじけちゃうし。

ほもくんの無駄に高い防御力もこうなっては形無しですね。幸い彼だけは普通に動けるので辛うじて使える中級の炎魔法でちまちま攻撃しましょう。

【ユエは身動きが取れない！】

タイムこわれる。

【ティオは身動きが取れない！】

精神こわれる。

【清水は身動きが取れない！】

魂こわるる（歴史的仮名遣い）。

この中ボスの攻略法ですが、耐性をガチガチに固める以外にはありません。装備さえ揃えば瞬札できますが今回はそんな手間も素材もないから仕方ないね。これだけのために態々時間をかけてまで装備を作るのは割に合わないので強行突破することになりました。

混乱によって味方を攻撃してしまえば、パーティメンバーによっては敗北する可能性もありますが、ほもくんが居るのでまず敗北はあり得ません。

「『蒼龍』」

おお、ユエ姉貴が動きましたね。こういう時、詠唱がいらぬ彼女は非常に頼りになります。清水くんのように詠唱がいる場合は詠唱↓発動という二回分の行動阻害を潜り抜けなければいけません。詠唱したのに発動できなかった、などと言う事が頻繁に起こり、ストレスがぎゅいんぎゅいん溜まります。

【ティオは身動きが取れない！】

【清水は身動きが取れない！】

仲良く蹲つてないで動いて、どうぞ。

ティオ姉貴はメルジーネ海底遺跡での竜人族カミングアウトイベントの後は詠唱なしで魔法を使えるようになります。

「『蒼龍』」

もしかしてユエ姉貴つてすごいのでは？ 二回連続で行動するなんて勲章ものですよ。

【ティオは身動きが取れない！】

【清水は身動きが取れない！】

あのさあ……。イワナ、書かなかった？ これはRTAだって！
せつかくここまで来たのにこんなのでタイムロスとか嫌になりますよ。

あ、ほもくんがとどめさした。

＜戦闘に勝利した！＞

＜『乳白色の粘液』を手に入れた！＞

「ふふ、我等からすればこの程度、ものの数ではないのう」

「……ん、余裕の勝利」

ユエ姉貴はともかく、ティオ姉貴は膝をついてやり過ぎしてたけなんだよなあ……。悔い改めて。

戦闘後のやりとりは残HPの割合によって変わるので、今回のこのざまでも楽勝扱いです。

ちなみに、ドロップアイテムの『乳白色の粘液』は好感度を上げるアイテムの素材です。

好感度を上げる？ あっ、ふーん……（察し）。

ともかく、次に進みましょう。試練は後一つだけです。ラストスライムを倒したことで大樹の幹がくぱあしたので中に入ります。

▽ 転移の魔法陣だ

▽ 先に進めそうだがどうしようか……

⇒進む

心の準備が必要だ

最後の試練はこれまた非常にいやらしいです。

降り立ったフィールドは巨大な枝の上で、見た感じはドラクエの世界樹みたいな感じの場所ですね。そして下が見えるところまで行く……。

「……っ!? つ!!」

「ヒイヒイヒイ!! ゴ、ゴキだあああ!!」

「しかも地面が見えないくらい沢山いるよおお!!」

「全員ぜってエに落ちるなよ! 落ちたら死ぬぞ! フリじやねえぞ!」

そこには大量のゴキブリがいます! わしやわしやと動き回る姿は黒い海のごとし!

あ、今更ですがお食事中に視聴するのはやめようね!

それでは気持ち悪いカサカサ音を聞きながら進みましょう。今回の戦闘メンバーは誰でもいいです。何故かというと、この後のボス戦の仕様が関係しています。説明は実際の場面で。

なお、ボスまでの道中はちよつとしたミニゲームがあります。まただよ（笑）。

とは言ってもそこまで手の込んだミニゲームではなくて、タイミンがよくボタンを押して結界を張り、時々飛んでくるゴキブリを弾き飛ばすだけの簡単なものです。

オラッ、結界っ!

ボス到着までにミスしなければノーエンカですが、ミスすると当然

戦闘に入ります。

ゴキブリ自体は弱いのですが、開幕で一定確率で行動不能になる『恐怖』の状態異常を付与してくるので、タイムロスを避けるために絶対にエンカウントは回避しましょう。

▽ゴキブリたちが一斉に集まり始めた！

▽巨大な魔法陣を形作っていく！

よし、切り抜けましたね。最低限のエンカウントでクリアできそうです。

ゴキブリたちがその身を使ってデカイ魔法陣を形成して光がドーン！

「ギチチチチッ!!」

見事なボスが出来上がりました。ゴキブリと言うか羽の付いたサソリみたいな感じの見た目です。

▽新たな魔物が出現した！

▽あれがおそらくこの主だ！

それではハルツィナ大迷宮最後の試練のボスである『エンヴィエヴィル』との戦闘開始です。

このボスとの戦闘は非常に特殊であり、先程戦闘メンバーが誰でもいいと言った理由でもあります。

原作で試練の内容としてあった『好感度の反転』がこのゲームの戦闘に移植された結果……酷いことになりました。戦闘開幕で確定で放たれる赤黒い光線がメンバーの好感度を反転させるのですが……。

「……生理的に無理。近寄らないで。消し炭にされたいの？」

「ううむ、これは……まいった、いかんのう。お主が嫌いじゃ」

「ハッ！ お前みたいなのやつ、こっちから願い下げだぜ」

まずはこれですね。仲の良いお仲間から辛らつなお言葉を頂けません。

普段は優しいキャラからそういう言葉を聞くと精神壊れる。ユエ姉貴、生理的に無理とかなんでそんなひどい事言うの……（トラウマ発症）。

酷いになると生まれたことから否定されます。これ全年齢対象

だよね……？

さて、この状態のまま戦闘が始まるのですが！

なんと、操作できるのは主人公キャラのみです。他のキャラは自分で勝手に動く上にフレンドリーファイアしてしまうので放っておくと勝手に氏んだりします。

大乱闘スマッシュブラザーズかなにか？ 絆とは一体なんだったのか……。主人公が紙切れみたいな耐久力であれば後ろから撃たれて氏にます。

主人公の姿か……。？ これが……。？

ですが、今回のほもくんは守護者です。この戦闘中は味方にも挑発が効くようになるので、これで同士討ちを防ぎましょう。ボスの目の前まで移動して『挑発』を使います。

今日からはお前が困だ。

「……消えて。『震天』」

殺意高すぎイ！ ですが、ほもくんの魔法防御をもってすれば『アイギスの盾』の半減効果も相まって余裕で受けれます。十発くらいもらっても大丈夫です。そして自動回復があるので無限に受け続けられるってわけです。

そしてボスに密着しているので巻き込まれてボスもダメージを受けます。

これが今チャートの攻略法である『俺ごと撃て！』作戦です。ひでえ作戦もあったものですね。

なお、ボスのお供としてゴキブリくんが無限に出現しますが、魔法に巻き込まれて勝手に氏んでいくので気にしなくてもいいです。

「受けるがよい！ 蒼天！」

ティオ姉貴ナイスウ！ ほも殴って！ ほも殴って！

清水兄貴も詠唱なんかしないで早く魔力操作を覚えて、どうぞ。

【エンヴィエヴィルは黒い瘴気を放出した！】

ボスは知性がないので、当然挑発が効きます。ほもくん総受けてマジ？

『黒い瘴気』は小ダメージと共に腐食の状態異常を付与してくる攻

撃ですが、ほもくんの状態異常耐性は100%なのでボーナス行動です。

「……お返し。『劫火浪』」

なお、好感度は反転していますが、しっかりと魔法反撃は行ってくれます。ツンデレかな？

良い感じでボスのHPが削れています。ここからがこの戦闘の真骨頂です。

「『聖絶・光散華』!!」

これですね。この戦闘に限り、控えやバックに居るメンバーも画面外から主人公に攻撃してきます。

みそボンか何か？ ただ、ほもくんにとっては良い火力源ですね。ライフで受ける！

今のは谷口姉貴の攻撃魔法です。どうみても爆発ですが光属性の魔法です。

「俺が切り開いてみせる！ 神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ——神威！」

天之河師範も直線範囲攻撃ナイス！

単体攻撃の天翔閃とかだとボスにダメージが行かないのでうま味行動です。一番火力の高い魔法を使ってくれてほもくんも本望でしょう。

もう特に話すことは無いですね。あとは挑発を切らさないようにしつつ、ボスに密着していれば勝手に仲間が始末してくれます。ボスの攻撃も基本的にほもくんにとってはカスが効かねえんだよって感じですよ。

今回の守護者チャートだと楽勝ですが、主人公が狂戦士などの攻撃特化の職業の場合はかなりヤバく、その場合はお一人様で挑戦することが推奨されます。仲間との絆が無くても筋肉との絆があればそれでいいのです。

∨戦闘に勝利した！

あ、いつの間にかボスが氏んでますね。決まり手はユエ姉貴の『神罰之焰』でした。申し訳程度の原作要素。

“神罰之焰”は重力魔法、および魂魄魔法を取得後に解放される炎属性の魔法で、フィールド全体の敵に蒼天よりやや高いダメージを与えます。雑魚敵が大量に出る戦闘では有用ですが、MP当たりの火力は蒼天の方が上なので出番はこれ以降無いです。

これにてハルツィナ大迷宮の攻略は終了なんですが大丈夫なんですかね……。原作だったらアウト判定を喰らいそうなんです。まあ、ユエ姉貴の“神罰之焰”が味方に当たってなかったですしOKとしておきましょう。

絆なんて要らなかつたんだ……！

やはり暴力……！ 暴力は全てを解決する……！

それじゃあ転移の魔法陣に乗って神代魔法を頂きましょう。

魔法陣で移動した先は、美しい空中庭園です。大樹の頂上にあるっぽいですが、どうやら空間魔法やら何やらで巧妙に隠蔽されていたようです。

「お、おお……！ すっごい綺麗な庭園だね！ 王宮にあるやつにも劣つてないよ！」

「下には樹海……と言う事はどうやらここは大樹の頂点付近のようなじゃな」

「マジか。飛行艇からはそんなモン見えなかつたんだが」

「私も大樹の上にこんなところがあるなんて初めて知りましたよ。どうやって隠してたんですかね？」

「……闇魔法では規模的に無理。魂魄魔法を使ってるのかも」

正面にある石板を調べればいつもの魔法陣が起動して神代魔法をプレゼントしてくれます。

＜頭にかかが流れ込んでくる……！＞

＜『昇華魔法』を習得した！＞

これで六つ目の神代魔法である『昇華魔法』を手に入れました。全てのものが一段階進化するギア2みたいな魔法です。他のメンバーも無事に取得できたようですよ。

あれでクリア判定とかハルツィナ大迷宮さんの精査機能はガバガバですね。

「昇華魔法か……。色々悪さできそうだな」

「だね。アーティファクトに組み込めば性能が飛躍的に上昇するかも」

「回復魔法にも効果がありそう。これでもっとハジ……。皆の力になれそうだよ」

「これで六つ目。妾は三つ目ではあるのじゃが……。残る神代魔法は後一つじゃな」

一行が昇華魔法に思いを馳せていると、石板に絡みついていた木の幹が盛り上がり、人の形になりました。これが解放者の一人である『リユーティリス・ハルツィナ』姉貴です。もう許さねえからなく。

そもそもこの演出、下手をすると新手的魔物と勘違いされて攻撃されそうなのですがその辺りは考慮してたんですかね？

ハルツィナ姉貴が色々説明してくれています。昇華魔法の概要と、神代魔法のコンプ報酬である概念魔法についてですね。

概念魔法は、神代魔法を昇華魔法で増幅させて、極限の意志を一滴みして良い感じにコネコネさせると使えるそうです。確か原作では概念魔法はこの時が初出でしたっけ。

ゲームでの性能ですが、昇華魔法は文字通り全てのものを一段階昇華させる魔法です。

攻撃、防御、回復の行動に対して、追加MPを使う事で効果を増幅させることが出来ますが、この先の戦闘ではラスボス戦くらいでしか出番がありません。出てくるのが遅すぎるからしょうがないね。

概念魔法はこのゲームではラスボス戦まではイベント用の魔法として、そしてその後はエンドコンテンツ的な魔法として位置付けられています。

〈『導越の羅針盤』を手に入れた！

そして、ハルツィナ姉貴からの贈り物です。望んだ場所を指し示すという『たずね人ステッキ』の場所バージョンで、ゲームでは次にストーリー進行が起こる場所をマップ上に表示してくれます。

ですがこれはRTAであり、すでにやる事や行く場所は調査済みです。

つまりゴミだよ、ゴミ！

その後は「空間魔法と昇華魔法を組み合わせれば元の世界に帰れるんじゃない？」「専門家のユエさん、どう思いますか？」「……無理」「やっぱり概念魔法が必要か」みたいなやり取りをして、ハルツィナ大迷宮でのイベントは全て終了となります。

それじゃあご丁寧に用意された帰還用の魔法陣に乗っておさらばしましょう。もう二度と来ねえよ、ペツ！

お次はシユネー雪原、最後の七大迷宮がある場所です。導越の羅針盤くんが一生懸命マップに場所を表示してくれていますが、かなり大雑把な位置なので、羅針盤くんは無視して自分であらかじめ調査した場所に行きましょう。

ラスボス撃破まであと一息です。今のところ大きなガバもなく来られているのでこの調子で今回はここまでです。ご視聴ありがとうございました。

□どうでもいいオマケ□

ハルツィナ大迷宮に挑むため、一時シアの実家にお世話になっている北条一行。

旅に出たシアの帰省と言う事で、村に入った時は兎人族総出で出迎えられた。あれから新たに加わった旅の仲間の自己紹介をして、人当たりが良すぎる兎人族はあの時いなかった七人を大いに歓迎した。

ただお世話になるだけというのも気が引けるので、例えばハジメであれば鍋の修復をしたり、鈴であれば獣除けの结界を設置したり、香織であれば足腰の悪い老人の治療をしたりと各々に出来る事を行っていた。

そして、一行の中でも特に子供に人気があったのは勇者である天之河光輝である。

顔が良く、姿勢が良く、最近はとみに雰囲気も柔らかくなり、さらには子供が大好きなカツコイイ鎧と聖剣を装備している。これで人氣が出ない訳がなかった。

「ね〜ね〜、勇者のおにいちゃん、何かおもしろい事やってよー！」

「えっ!? 面白い事……えつと、これじゃあこれはどうかな……? 聖剣よ、我等に加護を与えたまえっ!」

自身を囲んでくる子供の無茶ぶりにもしつかりと応える光輝。聖剣を頭上に掲げるとピカーッと眩しくない程度に聖剣が光る。それはさながら子供のおもちやであるDXなんちゃら剣のようだった。

「すっごくいい!」

「ぼくもやりたい! ねえ、かしてかして〜!」

これには子供も大喜び。いつの時代、場所でも子供はこういったものが大好きなのだ。

そして、それに対抗するように大きな影がヌツと近付いてきた。他ならぬ北条だ。

「…俺の剣も光るぞ」

「え〜、でもおにいちゃんの剣ってずっと光ってるだけじゃん! そんなのつまらないよ〜!」

「勇者のおにいちゃんのもってるやつの方がおもしろいよね〜!」

「……!」

「北条、お前……」

正直で残酷な言葉にピシリ、と石化したように北条が固まった。

先程、以前のリベンジということで、みかんの果頂部に親指を突き刺して『重力魔法』などと手品をやっていたのだが、案の定というべきか見せる角度が悪かったのか、親指がモロに見えており、盛大にスベった。

それを巻き返すために青く光る剣を取り出してみたのだが結果はご覧のとおりである。

たった一日にして子供たちの人気を総取りしてしまった光輝は、トボトボと去っていく北条に哀れな者を見るような目を向けていた。

「……落ち込んでいるマモルがえつちすぎる。シア、寝室を貸してほしい」

「いやですう! そんなことを言っている暇があるならこっちの荷物を運ぶのを手伝ってください!」

「……私は力が弱い。この通り腕も細く……」

「ユエさんは身体強化の魔法を使えるでしょう！」

幕間：ハルツイナ大樹海にて

ハルツイナ大樹海は大陸の東方に位置する、非常に巨大な樹海である。

そこには多種多様な亜人族が住んでおり、協力してフェアベルゲンと言う国を作り上げ、維持している。

シア・ハウリアはそのフェアベルゲンに住む兎人族であり、族長のカム・ハウリアの一人娘だ。母親とは幼少の頃に死別しており、今は大樹の下で眠っているとか。

北条一行は、ハルツイナ大迷宮を攻略するために飛行艇でフェアベルゲンを訪れていた。

飛行艇をフェアベルゲンの首都のすぐ傍に不時着させようかという案もあったが、シアの「そんな事したら森が破壊されちゃいますし、皆ビツクリしちゃいますよう！」という意見によって却下。

フェアベルゲンの首都は森に囲まれているので、無理やり着地したら木々が損傷を負うし、それが原因で木をくり抜いて作っている家々に影響が出ないとも限らない。最悪怪我人が出るかもしれない。

再生魔法を入手しているので破壊してしまっても修復は可能だが、神代魔法はそう無闇に使っていいものではないし、『直せるから壊すけど大目に見てね☆』というのはいささか暴論が過ぎるというもの。

よって、ハルツイナ大樹海のすぐ傍で飛行艇を降りて、その後はシアの案内でフェアベルゲンまで行くという事になった。初めて来る面子は壮大な大自然に目を奪われつつ、整備も舗装もされていない獣道を遅れないように付いていく。

一時間ほど歩けば亜人族の街フェアベルゲンに到着である。

大きな門の前には熊人族の青年が佇んでいる。おそらく彼が今日の門番なのだろう。

「こんにちわー！」

「生まれ！　ここから先は我らの街だ！　兎人族はともかく人間族は

……むっ、まさかお前は北条衛か！」

「…ああ。よく覚えていたな」

「当然だ！ 俺達熊人族はお前の顔を忘れる事などない！」

シアが元気に声をかけると、門番である熊人族の青年が制止するが、北条を見た瞬間に目を見開いた。亜人族の中でもとりわけ熊人族にとつて北条衛の名前は良くも悪くも大きな意味を持っていた。

魔力を持ったことで忌み子と言われたシアと、それを庇うハウリア一族の処分を決めようとしたときに待ったをかけたのが彼である。一門番でしかない彼には経緯は不明だが、亜人族の中でも一等力が強い熊人族の、その中で最も強い族長のジンと素手で殴り合って完勝をした男。それが北条衛である。

その結果、ジンは全治一週間の打撲を負った。熊人族の中にはジンを慕うものも多く、怪我の仇を取ろうとしたものもいたが、それに待ったをかけたのは他ならぬジンだった。

曰く、『この怪我は男同士の正々堂々、尋常な力比べで負けた結果だ。敵討ちなど俺の顔に泥を塗る行為と思え』だとか。そういったジンの言葉添えもあり、ハウリア一族はフェアベルゲンから追放となったがそれ以上危害を加えられることはなく、今は森の片隅で平和に過ごしている。

「ふう……。それで、連れが沢山いるようだが今回はどのような用で来た？」

「ここに用はない」

門番は一行をじろりと睨め付ける。以前来たときはハウリア一族はいたものの、余所者は北条とユエだけだったが、今回は随分と多く、その誰もが彼の目から見てもとても強く見える。

何か狼藉を働こうとしているのであれば命を懸けてでも止める必要があるのが門番である彼の役割だった。

「だったら何で来たんだ？ フェアベルゲンは人間の立ち入りが禁止だって事は知ってるだろ？」

「必要だから通るだけだ」

「おー、そうかそうか。で、何の用で通るんだ？」

「通るだけだ。ここに用はない」

「だから！ 何で来たか答えろって言ってるだろうが！」

「通るためにだ」

「うがあああああああ!!」

頭を抱えて空に咆哮する。彼は北条が初めてここに来た時にも対応をしたのだが、その時も同じようなやり取りをしていて話を通じずに頭がおかしくなりそうだった。

「あの、そのう、私の家族に会うために来たんですが、そのためにはここを通る必要があります。この街では特に何もしないので通してもらってもいいでしょうか？」

「お、おおそうか。初めからそう言えばこっちも対応したっていうのに。それじゃあちよつと確認を取ってくるからここで待ってろよ！」

絶対だぞー!

シアの助け舟によって事情を把握した門番は、北条に指を突き付けてから門の向こうへと消えていった。彼の背中には同情の目線が送られた。

もしかして前にここに来た時もこんなやり取りをしていたのだろうか、と北条に視線をやっていると当の本人は何か言いたげな視線に気付いて首をかしげるだけだった。

「……どうした？ 言わないと伝わらないぞ」

「お前が言うな！ お前だけは言うな！」

幸利のツツコミに全員の心が一つになった瞬間だった。

「これがフェアベルゲン……!!」

「こりやまた何つうファンタジーな……!!」

「おおくく！ まるで映画の世界に入り込んだみたいだくく！」

「まさに森の民って感じだね！ ああ、写真が取れたら良い資料になるのに……!!」

「(そう言えばハジメくんのお母様って漫画家だっけ……。向こうに帰ったら挨拶しに行かなきゃ!)」

通行の許可が出て、門をくぐった一行の目に入ってきたのはフェアベルゲンの首都の壮大な景色。

木々をくり抜いて作った家、枝と枝が絡み合って出来ている通路、そして太い枝を削って作った空中水路。まさに地球ではファンタジー漫画でしか見られない光景であった。

「……ん、やっぱり綺麗」

「…そうだな」

北条とユエが見るのは二回目だったが、それでもこの大自然と溶け込んだ街は見ていて圧倒されるものだ。おそらく『トータスの美しい場所百選』があれば間違いなくエントリーされていただろう。

興奮しっぱなしの一行に門番も得意げだ。人間に対して良い感情は持つていないが、それでも自分の故郷を見てこう言った反応をしてくれるのはとても誇らしい。

待機していた別の者に門番を任せて、彼は北条一行の監視という名目でフェアベルゲンの街を先導していた。周りから送られる目線も何のその、凶太く街の光景を楽しんでいると大柄な熊人族の男性が近寄ってきた。

「久しぶりだな！ 俺を覚えているか強き人間よ！」

「ああ」

「ならば話は早い！」

「ジ、ジンさん！」

「デカ過ぎんだろ……。熊人族つてのは全員こんくらいデカくなんのか？」

「いや、ジンさんは熊人族でも特別だ。生まれた時からフェアベルゲンでは負け知らずで……。じゃなくて！」

熊人族の族長であるジンである。体長は二メートルを遥かに超えており、まさしく熊と言っても良いほどの巨軀を誇る。声をかけると同時に、丸太のような太い腕を弓を引き絞るようにぐぐつと振りかぶる。

「…来い」

「ちよつ、ジンさん街中で何やってんですか!? 北条衛もなんでノリ

ノリなんだ!？」

「うおおおおおおつ!!」

ジンの咆哮がフェアベルゲンに響き渡る。その直後、直立不動で待ち構える北条の顔面にバスケットボールほどの大きさがある拳が振り下ろされた。

いきなりの凶行に誰もが制止することもできず、拳が直撃した瞬間にまるで巨大な鐘をついたような音が辺りに響き渡った。

「ま、まもる——ん!!?」

「な、何だいきなり! くっ、いきなり殴りかかってくるだなんて卑怯な!」

「……落ち着いて。マモルなら大丈夫」

目の前で起こる超展開に鈴が悲鳴を上げ、光輝が身構えるがそれをユエが制止する。ハウリア一族の処遇について揉めた時もこうして力を試すという名目のもと、ジンと殴り合って勝利した。そして、北条はあれからさらに力をつけているので、ユエにとってはすでに結果が分かりきっているのだ。

「……っ、無傷か!」

「……いい拳だ。こちらも手を出さねば不作法というもの」

「来い!!」

案の定というべきか、ジンの拳打では北条の顔に痣すら作ることが出来なかった。

先程のジンと同じように北条が拳を握って振りかぶり、ジンがそれを受けて立つ。

「——ガッ、ハアツ!!」

北条が繰り出した砲弾のごとき拳がジンの腹筋に直撃し、ふんばりが利かなかったジンは勢いよく地面と垂直に十メートル程吹き飛んだあと、土煙を巻き上げてそのまま転がっていった。

「ジ、ジンさ——ん!」と今度は門番が悲鳴を上げて駆け寄っているけど、そこにはダメージからか蹲って足をプルプルさせているジンの姿があった。勝敗は明らかである。

「ぐ、ぐっぶううう……っ! やはり勝てないか……!」

「いや、ジンさん何やってんですか！ ていうかこいつ等の通行許可を出したのジンさんつすよね!? 何でいきなり殴りかかってんですか!?!」

「これは……雄同士の挨拶だ……っ!」

「えっ、何その脳筋極まる挨拶方法……」

他の面々もドン引きである。もしかして亜人族は皆こうなのでは？という視線を受けてシアが勢いよく首を横に振る。亜人族の中でも脳筋な熊人族の中のさらに脳筋、いわば脳筋中の脳筋と一緒にされたくない。兎人族は平和主義な一族であり、出合い頭に拳ミュニケーションを凶つたりはしないのだ。

殴り合いを見ていた野次馬が去り始める頃にはジンも回復しており、しつかりとした足取りで立ち上がって今度はしつかりと言葉で挨拶をした。

「いきなり殴りかかって悪かった。俺個人としてはお前の力に免じて認めているが、忌み子……シア・ハウリアがいる以上、族長として歓迎はできん。だが何もせず通過するだけというのであれば目を瞑ってやろう」

「そうか。温情に感謝する」

「……フン。兎人族は北側に集落を作っているらしい。北口はあつちだからそこから出ていけ」

シアをちらりと見て眉間にしわを寄せたジンは、親指で北口の方を指してから立ち去っていった。わざわざジンが北条に絡んでいったのは物理的な挨拶をするためというのものもあるが、こうして族長直々に目を瞑るとあえて周囲に聞こえるように言う事で、余計ないざこざが起こらないようにするためでもあった。

一方でそんな事を知らないシアはと言うと、居心地が悪そうに身を縮めていた。自分達の一件はもう解決して、兎人族は大丈夫だと言う事は分かっていたのだが、どうしても苦手意識というものはあるらしい。

「何と言うか、嵐のような人だったね……」

「す、すみません皆さん……私のせいで肩身の狭い思いをさせてし

まっつて……」

もうどうにでもな―れ、と若干投げやりになった門番に先導されて北口に向かつて歩き出すが、シアはしょんぼりとウサミミを萎れさせていた。

今も周囲からは好意的な目は向けられておらず、むしろフェアベルゲンの住民は『早くどっか行け』と言わんばかりの目線を一行に浴びせている。

「…俺には関係ない」

「……ん、周りの目何て気にしなくてもいい。シアは私達の仲間」

「だね。ちよつと居心地は悪いけど通り過ぎれば終わりだし、これくらいは我慢すればいいから大丈夫だよ」

「うんうん。シアシアは性格もいいし、可愛いし、何よりおっぱいが大きいからね！ 鈴としてはむしろお釣りがくるくらいだよ！」

「鈴ちゃん、それフォローになってないよ……」

「み、皆さん……！」

投げかけられる暖かい(?)言葉にじんわりと涙が出てくる。

やはりあの時、無理を言って北条の旅に付いていったのは間違いじゃなかった。こんなにも良い仲間に恵まれて、シアの胸中には感激の嵐が巻き起こっていた。

「うううううっ!! わゝだじはみゝなぎんに出会えでほんどうにゝ
幸せでずうううっ!!」

「これこれ、このような所で泣くでない。周りから見られておるぞ」

「……つたく、仕方ねえエな。おら、これでとつと涙でも拭いとけ」
微笑ましいものを見るような目でテイオがシアを見て、幸利がガラにもなく親切にもハンカチを差し出す。流石にガチ泣きしているシアを揶揄うほど空気が読めないわけではない。

「ありがとうございます」と泣きながらハンカチを受け取って涙を拭くシア。

清水もそんな気遣いが出来るんだな、と若干空気になりつつあった光輝は感心をした。ちなみに恵理は光輝の隣をキープしつつ、森林浴を楽しんでいた。

「ずび——っ！ あっ、ありがとうございましたユキトシさん。これ、返しますね」

「……おい待てクソ鬼」

「くっ、くふふっ……。ドンマイじゃな、幸利よ」

涙を拭き終えたシアは、最後に思いっきり鼻をかんでからハンカチを幸利に返した。

べったりとハンカチにこびりついたシア汁に呆然とする幸利。地球に居た頃から使っていて結構お気に入り物だったのに、あまりな扱いではなからうか。

マサカの宿で鈴に背中をびしょ濡れにされた北条の気持が少しだけ分かったような気がした幸利だった。

門番と北出口で別れ、ハウリア一族の集落を目指す一行。

亜人族全体に言える事だが、彼らもしくは彼女らは森の中で己の位置を見失う事がない。そうできている。普通であれば森の中で真つすぐ進むもうとしてもいつの間にか横に逸れていくのだが、亜人族にはそれが無いのだ。

兎人族であるシアにも当然その能力は備わっており、そのおかげで北条一行は迷わずにハウリア族の集落まで辿り着くことが出来た。

「皆さ——ん!! 帰ってきましたよ——!!」

北口からさらに二時間ほど進むと森の中に開けた場所があり、ハウリア族はそこに集落を作っていた。小さな木造りの家がいくつも寄り添って建つその様は、ハウリア族の性格を表しているかのようだ。

シアがあほみたいに大きい声で呼びかけると、次々と家の扉が開いて兎人族が飛び出してくる。

「おかえりなさいシアちゃん！ 怪我はしなかった？」

「シアおねーちゃんおかえりー！」

「おみやげないの〜？」

「人がたくさんだ〜！」

旅に出ていたシアが心配だったのか、わらわらとシアに群がっている。久々に家族たちに会えてシアも嬉しそうだ。笑顔で一人一人に挨拶をしていくシアの邪魔をしないように空気を読んで、北条達は少し離れたところで待機している。

「全員にシアさんと同じような耳が付いてるな。北条、彼らもやはり……」

「ああ。兎人族……ウサちゃんの亜人だ」

「いや、ウサちゃんってお前……。つーか男にも耳が付いてんのな。誰得だよ」

「ウサミミがあると言う事は本来の耳は無いのかな？ シアさんの髪に隠れてたせいか確認できなかったし……。もしあったとしたらあのウサミミは何のために付いてるんだろうね」

「こそこそと話をしながら待つこと十分ほど、一通り挨拶を終えたのかシアが駆け寄ってきた。

「どうやら話によるとカムは現在自宅にいるようで、皆の紹介もかねて今からそちらに行こうという事であった。特に断る理由もないので、そのままシアの先導で集落を進んでいく。」

「すでに他の兎人族には旅の仲間であると伝えていたようで、集落を歩く一行に対してはとても歓迎的だった。少なくともフェアベルゲンのように排他的な雰囲気は無く、それだけで兎人族の人柄が分かるというものだ。」

「ここです！ マモルさんとユエさんは以前も来たことがあると思いますが……」

足を止めたのは周りのものより一回り大きな家。カム自身は皆と同じ大きさの家で良いと思っているのだが、族長の家として判りやすくするために他の者が勝手に大きく建てたのだ。

「お父様、ただいま帰りました！」

「おお、おかえりシア。外の声は聞こえていたが本当に帰ってきていたのだな」

「勝手知ったる己の家。迷いなく扉を開けて入っていくと、シアと同

じウサミミをつけた中年の男性が椅子に座ってなにやら書き物を書いていた。

「マモル殿にユエ殿もお久しぶりです。以前はお見えにならなかった方々もようこそおいでくださいました。シアの父親のカムです」

彼がシアの父親であるカムである。シアと北条一行を確認したカムは立ち上がって歓迎の意を示す。

北条とユエはカムだけではなく兎人族とも知り合いであり、兎人族からすればこの二人は命の恩人でもある。

シアが魔力を扱えて忌み子扱いを受け、処刑される前に一族諸共森を去ろうとしてヘルシャー帝国の兵士に見つかつた際に彼らを助けたのが北条とユエだ。助ける前に何人か兵士の手にかかつてしまったが、それでも結果的にこうして森の片隅でひっそりと生きる事を許されることになった。

兎人族からすれば二人は足を向けて寝られない存在である。

それはさておき、前回いなかった七人の紹介をした後に、今回何故ここに来たのかを説明して、霧が晴れるまでここに滞在させてもらえないかを伺うことにした。

「もちろん歓迎しますぞ。マモル殿たつての頼みとあれば断るはずもありません。狭い家ではありますが我が家と思つて寛いでください。ああ、因みにはありますが、霧が薄くなるのは明日です」

あつさり滞り滞在許可が出たので、霧が薄くなって件の大樹のもとに行けるまで兎人族の集落に滞在することとなった。そして荷物整理をするくらいですることがないので、各々自由に過ごすことにした。

その中で一番活躍し、感謝されたのはハジメであった。というのも、森の片隅でひっそりと暮らしているので、兎人族からすれば金属製品は非常に貴重なのだ。

つまり、鍋の底が抜けたり包丁が欠けたりしても簡単に新しく替えたりはできない。

ハジメは、自身が錬成師であり、補修してほしいものがあれば持つてるように伝えたのだが、そうすれば補修希望の人が来るわ来るわでてんでこ舞いだつた。

「はあ……、まさかこんなにも直す物があるなんて。森での生活って大変なんだね」

「うん、普段便利なものに囲まれてると余計に大変だって分かつちゃうね。でもハジメくんすごく生き生きしてたよ」

「あはは……まあ僕はこれくらいしか出来ないから、せめて錬成師としての仕事は真面目にやるって決めてるんだ」

とつぷりと日が傾くころに作業が終わり、ハジメは香織と一緒にカムの家に向かっていった。香織は体が悪い人を治したりしていたのだが、本人の腕もあつてあつという間に終わってしまい、手持無沙汰だったのでハジメの横で作業を見学していたのだ。

香織からするとハジメのそれは謙遜にしか聞こえなかった。底に穴が開いた鍋も、ボロボロになった包丁も、折れ曲がってしまった鍬も、ハジメが錬成をした瞬間に新品同然の輝きを取り戻したのだ。

それだけではなく、こつそりと宝物庫にある余った鉱石を配合してより上質な物に仕立て上げるといふ高度な技術を使った心遣いまであり、さらには子供の玩具を作ることまで快く引き受けていた。

兎人族の人が笑顔で何度もハジメにありがたうと言う光景を見て、香織は自分の事のようにとても誇らしくなった。本人は地味な天職だと言っているが、こつやつて人を助けることが出来るハジメらしい能力だと思う。

二人並んで歩いていると、カムの家がある方向からとてもいい匂いが漂ってきた。どうやら夕食の支度をしているようだ。だが、その匂いの中に懐かしい『とある匂い』が混ざっているのが分かるとハジメと香織の顔色が変わる。

「……ねえハジメくん。この匂いってもしかして」

「……うん。僕もそう思った」

匂いにつられて自然と足も速くなるというもの。

カムの家の扉を開けると、そこには机に置いた背の低い木桶を団扇で扇いでいるユエがいた。木桶には艶のある米が入れており、湯気が上がっている。

「……おかえり」

「ただいま。ところでユエさん、もしかしてそれって……!」
「んっ、マモルが今日は『チラシズシ』にするって言ってた」
「!!」

背の低い木桶——いわゆる寿司桶から漂ってくる酸っぱくも甘い匂い。それはまさしく酢飯の匂いだった。ユエの言葉を聞いた二人は落雷に撃たれたような衝撃を受ける。

まさか、異世界に来て寿司が食べられるとは思っていなかった。今では愛子のおかげである程度米は広まっているものの、米の原産地であるウルの町ですら寿司に類似したものは無く、もはや日本に帰るまで寿司の類は諦めていたのだ。

「衛、いつの間にか寿司が作れるようになったの!？」

「…ウルの町に酢はあった。多少風味は異なる」

「そうなんだ……! でも北条くん、すごいよ!」

錦糸卵などの具材を用意している北条が手を止めずに答える。

ウルの町に米から作った酢が売っていたのを見て、少しでも日本を懐かしんでもらうためにいつかは作ろうと思っていたのだ。

大雑把なレシピは頭に入っていたが細かいことまでは覚えておらず、酢飯も何度も失敗を繰り返してようやく完成したものである。魚類に関してはエリセンにある店にサーモンやイクラなどの地球にある食材に近いものが売っていたのでそれで代用した。

なお、その完成までの過程の味見はユエが申し出ていた。もちろん、他の皆には内緒である。

「おい、まさか! やったのか!? やりやがったのか北条!!」

「間違いない! これはまさしく!」

「ペロッ、この匂いはお寿司!」

「あゝ、酢飯の匂いゝゝ」

「いや、お主等はしやぎ過ぎじやろう……!」

「はっはっは、賑やかで良いではないですか」

匂いを嗅ぎつけたのか、雪崩れ込むようにして幸利、光輝、鈴、恵理が入ってくる。

寿司ゝゝ寿司ゝゝ、とゾンビのように群がっていく姿にテイオは

ちよつと引いたが、カムは楽しそうにこの光景を受け入れていた。

だが四人が無理もない話である。トータスに召喚されてすでに半年、だんだんと日本が恋しくなってくる頃に寿司が来たのだ。

だから喜び余って地球組がソーラン節を踊ってしまうのも自然な流れというもの。

「ようし、これで一族秘伝のシチューができますよー！ 皆さん楽しみに……えっ、何ですこれ」

別室から戻ってきたシアが見たものは、団扇を扇ぐユエとその周りで一糸乱れぬソーラン節を踊る六人、我関せずと調理を進めていく北条という混沌としたものだった。

「……妾は何も知らぬ」

「……急に踊りだした。囲まれて動けない。怖い」

「シアよ、良い仲間に巡り合えたようで嬉しいぞ。どれ、私も混ざってみますかなー！」

「「ハードッコイシヨ、ドッコイシヨ!!」」

こうして兎人族の集落での一日は過ぎていった。

□ どうでもいいオマケ □

「あれ？ ユエユエこんなところで何やってるの？」

ある日の事。夜もとつぷりと更けて、後は風呂に入って寝るだけという状態になったその時間に鈴が何となく飛行艇の中を歩いていると、風呂場付近でユエがコソコソしているのを発見した。

鈴の記憶では確かユエはすでに入浴済みであり、風呂場付近に用は無いはずだ。

「……今マモルがお風呂に入ってる」

「ちよつ、まさか乱入するつもりなの!? そんなことはこの鈴の目が黒いうちはさせないよー！」

言い放たれたその言葉に鈴が目吊り上げるが、ユエは「分かっているなあ」とでも言いたげな、呆れた顔で溜息をついた。

「違う。むしろ出てくるのを待ってる」

「えっ、どう言う事？」

「……仕方がない。今回は見学させてあげる」
「??？」

何が何だか分かっていない鈴の手を引いて、ユエは脱衣所の出入り口が良く見える場所に陣取った。そのまま息を潜める事数分、入浴が終わった北条が脱衣所から出てきた。

しつとりと濡れた髪が首筋に貼り付き、熱を逃がすためかボタンが外された寝間着からは逞しい胸筋と腹筋がその姿を惜しみなく覗かせている。風呂上がりに水分補給をするためか宝物庫から水筒を取り出すのだが、水を飲むたびに喉仏が動き、さらには零れた一筋の水が喉から胸へと伝っていく。

「……この守護者……スケベすぎるー！」

物陰から風呂上がりの北条をガン見するユエは、控えめに言っただけだ。態だった。

無駄に全力で隠遁しているので北条は気付かずそのまま去っていく。

「……ふふ、今日も良いものを見た……。スズ、どうだった……。？」

「……」

「……スズ？」

きっと鈴も気に入っただろうと思いユエが聞いたがいつこうに返事が返ってこない。

不思議に思ったユエが振り返って様子を確認してみると、鈴は鼻血を流して目を回していた。刺激が強すぎたらしい。

「……死んでる」

幕間：惑わしの大樹海（前）

色々であった日から一日経って、ハルツイナ大樹海を覆う霧が晴れる日がやってきた。

ただし、晴れるとは言っても完全に霧が無くなるわけではなく、亜人族の案内が無ければ間違いなく迷う程度ではあるのだが、それでも固まって動いていれば遭難者は出ないくらいの視界は確保できている。

カムを筆頭とした兎人族に見送られて、北条一行は大迷宮がある大樹に向かって歩いていった。

うつそうと生い茂る木々に見通しが悪い霧に覆われた視界。確かにこれは亜人族の先導が無ければ先に進むどころか遭難しないようにするので精一杯だろう。

「皆さん、ちゃんといえますか？ このシア・ハウリアの後に続けば絶対に迷わないのでしつかりと付いてきてくださいいね！」

「それにしても霧が濃いな。これでまだ晴れてる方って言うんだから驚きだよ。皆、逸れない様に気を付けよう」

時折シアが後ろを向いて全員いるかを確認する。シアは亜人族なので迷わないが、他のメンバーはその限りではない。一度迷ってしまった。魔獣が徘徊するこの森は非常に危険な死地となることもあるのだ。

「そうそう、こんな所で迷っちゃったら白骨死体で発見されていうのがお約束だからね！」 と、と言う事でまもるん、迷わないように鈴が手を繋いどいてあげるねっ！」

「俺は迷ったりしないが」

「……むっ。それじゃあ私はこっち」

最後の方は早口気味になりながら鈴が北条の右手を取る。北条のゴツゴツした大きな手と鈴の柔らかくて小さな手は、大人と子供ほどの差があった。普段は平気で背中になぶら下がったりするのに、何故か手を握るときにはしどろもどろになってしまう。北条が不満そうに鈴を見やると、恥ずかしそうに目を逸らされた。

それに対抗するようにユエが北条の左手を取る。こちらも大人と子供ほどのサイズ差がある。鈴と違うのは特に照れたりする様子がないところだ。普段からあれこれやっているの、今更恥ずかしがるような事は無い。北条が不満そうにユエを見やると、ねっとり指を絡めてきた。

それを少し後ろから眺めるハジメは「でも初めて本屋に行ったときは迷子になってたような……。その時も同じようなことを言っていたような……」と昔の出来事を思い出す。

そう、あれは街にある地上三階建て、地下二階建ての大きな本屋に行った時の事だった。

その本屋はハジメにとっては通いなれた場所であったのだが、ジャンル毎に様々なコーナーが設置されていて通路が複雑に入り組んでおり、それが北条にとっては迷路のように見えたようで、一緒に居たはずがいつの間にか逸れてしまい、彼は地下一階の従業員用の休憩室で保護された。

店内放送で自分の名前が呼ばれた時は流石のハジメもすぐくびつくりした。

ハジメが迎えに行くときのように「俺は迷ってない」などとバレバレの供述をしていたが、今となっては笑える思い出だ。

「おーおー羨ましい限りだぜ。かーつ、俺も彼女を作ろうと思えばすぐに作れるんだけどなー、まだ旅が終わってねえから作れねえのが残念だなー」

「何を言うとするのじゃおぬしは。ほれ、右から一匹来ておるぞ」

「へいへい……」

時より寄ってくる魔物は幸利が一睨みして追い払う。ハルツィナ大樹海の魔物と北条一行の間には隔絶した実力差があった。

すでに幸利の闇魔法の扱いも手慣れたもので、今程度の魔法であればすでに視線一つで発動できるほどまでになっており、ユエからは「闇魔法だけに関してはずでに自分も及ばない領域に入っている」と惜しみない称賛が贈られるほどだ。

「にしてもすげえ樹海だな。某狩りゲーを思い出すぜ……。結局あの

マップ覚えられなかったけどな」

「あれはね……僕の父さんも泣きそうになってたよ。おじさんはこんな複雑なマップ覚えられないって。ゲーム自体は面白かったんだけどね」

シアに先導されて特に何も起こらないまま樹海を進んでいくと、やがて目的地にたどり着いた。

そこにあっただのは枯れてしまった大樹だ。見上げて頂点が見えず、葉をそよがせていたころはこの樹海のシンボリックな存在だったのだろう。

枯れてしまってもなお、それほどの存在感を放っていた。

「これが大迷宮への入り口ですう！」

「枯れていてもすごい存在感だ……！ 元々は一体何の木だったんだ？」

「ああ、気になるな」

「少なくとも今まで見たこともないような木だってことは確かだね」

「きつと、見たこともない花が咲くんだろうね」

以前カムに案内して連れてきてもらった時と変わらぬ姿。

安置されている石板もそのままである。

「……前来たときは入れなかったけど今回はちゃんと条件を満たしたはず」

「……ああ。証が四つと再生魔法だな」

「よし、それじゃあ試してみよう！ だからユエユエ、まもるんの手を放してあげてね」

「……マモルの利き手は右。手を放すのはスズの方」

「……」

「……」

北条を挟んで火花を散らす二人。お互いに手を放すつもりはさらさら無いようで、さらに手を強く握りしめるばかりである。

余談ではあるがユエはともかく、鈴はトータスに来てから身体能力が上がっているので、リングくらいならば軽々と握りつぶせるくらいの握力がある。常人であればうっ血していただろう。

「……はあ。あの三人は置いて、今まで手に入れた攻略の証っていうのは神山で手に入れたコインの事でいいのか？」

「えっと、うん。そうだよ光輝くん。今まで五つの迷宮を攻略してきたからそれを石板にはめ込めばいいんだと思う」

「そつか。ありがとう恵理。よし、それじゃあ俺がやってみるよ。南雲、証を出してくれないか？」

馬鹿をやっている三人（一人は巻き添えに遭っているだけ）を見て溜息を吐いた光輝が、ハジメに攻略の証を宝物庫から出してもらって、枯れた大樹の根元に設置されている石板に近付いていく。

エレベーターのボタンを押す子供のように少しだけワクワクしながら光輝が石板の裏側に用意された指輪とメダルをはめ込んでいく。

一つはめ込むごとに石板の放つ光が強くなっていき、四つはめ込むと眩いと言っても良いほどの光を放って、それが地面を這うように大樹に伸びていく。

そうして伸びていった光が大樹に到達すると、大樹そのものが光り輝き始めた。それだけでも不思議な出来事なのだが、それに加えて幹の辺りに七角形の文様が浮かび上がっており、それが尋常ではない雰囲気を与える。

「う、うおっ、眩しっ！　っーか、何だあの七角形！」

「四つの証……再生魔法……。四つの証はもうクリアしたはずだから、あれに再生魔法を使えって事じゃないかな？」

「ふむ、では妾がやってみようかの？」

「いえいえ、ここは私が！　昔からこの事は気になっていましたし！」

テイオが進み出ようとしたが、シアがそれを制して七角形に近付いていく。

生まれた時からずっと森で暮らしてきたシアにとって、そして亜人族にとってこの枯れた大樹というのは常々気になるようなものだった。枯れたまま、それでも一切腐敗したりする様子がない不思議な大樹。

大迷宮への入り口と分かった時は非常に驚いたものだ。そして、そ

れが今真の姿を現そうとしている。ならばここは亜人族である自分がやるべきだろう。

そつと七角形に触れて、シアは魔法を行使した。

「こほん、ではいきますよ……はああああああ!! 再生魔法
“!!”」

「いや、何だよその掛け声」

やたら力のこもった声で再生魔法を発動させると、大樹が今までとは比にならない程の光を放ち、光の波紋がいくつも生まれては消えていく。そして次の瞬間の事である。

枯れていたはずの大樹が根元から、すさまじい勢いで瑞々しさを取り戻していく。

それはまるで、木が枯れていく様を逆再生で早送りしているかのようだった。

やがて光の波紋が生まれなくなり、幹が放っていた光が収まると、そこには枯れる前の雄大な大樹が聳え立っていた。

「これが枯れる前の姿だったんですね……。すごくきれいです」

さわさわと葉がこすれ合う音が聞こえる。青々とした葉を揺らしている大樹は、まさに天を突くのに相応しいだけの威厳があった。

一同が目の前にある壮大な光景に目を奪われていると、大樹の幹がメキメキと形を変えて中へと続く入り口を作る。どうやらここが大迷宮の入り口になっているらしい。

「気になったんだけど、その、私と天之河くんは他の大迷宮を一つしか攻略してないけど入っちゃって大丈夫だったのかな?」

「神山の時は問題なく入れたから大丈夫じゃろうな。ただし、四つの証を求めたと言う事はそれ相応の実力が前提として考えられておるはずじゃ。もし危険と思うのであればここで留まっておくというのも一つの選択肢であろう。もちろん妾は行くが」

「……いや、大丈夫だ。必ず攻略して見せる。そうしたらまた神代魔法が手に入るはずだ」

テイオは二つ、香織と光輝は一つずつしか大迷宮をクリアしていない。

ハルツイナ大樹海の迷宮に入るには四つの迷宮の攻略が必要なので、本来であればこの三人は弾かれてしかるべきなのだ。

それにも関わらず入れると言う事は、おそらく迷宮を作った解放者のスタンスとしては「寄生しての挑戦はご自由に、でも実力が足りなくて死んでも知らないよ」という感じなのだろう。

幹でできた門をくぐるとかなり大きな空洞がある。おそらく、トータスに來た生徒たち全員が余裕をもって入れるくらいの大きさだ。

そしてその中央に、ぽつんと魔法陣が置いておる。

「これが入り口か」

「……転移の魔法陣で間違いない。きつとこの先からが試練」

「武器や防具は装備しないと効果を発揮しないからしつかりチェックしとけよ」

「あつ、そのセリフは流石に俺でも知ってる。懐かしいな、子供の頃ちよつとだけやってた事あつたよ」

「てつきり勉強かスポーツのどつちかしかやってないイメージがあつただけけど、天之河くんもゲームやつたりするんだね」

「えつ、香織は俺を何だと思つてたんだ？」

魔法陣に向かって歩く一行には緊張感というものがまるで足りていなかった。

もちろん周囲の確認は怠つていないし、何が起こつても対応できるようなにはしているので、余裕からくる緊張感のなさではある。無駄に気を張つていても疲れるだけなので、良い意味で手を抜くことを覚えていた。

十人が魔法陣に余裕をもって収まると、魔法陣が眩く光始め、次の瞬間には十人の姿は消えていた。

転移が終わり、一行の視界が開けた時に目に映つたのは樹海だった。

どこかダンジョンめいた場所に転移したとかではなく、うつそうと生い茂る森の中に放り出されたような感じである。上を見てみると青空は無く、代わりにあつたのは先が見えないほどの濃霧であつた。

「樹海で転移したら樹海に降り立った件について」

「……ですがいつもの樹海ではないみたいです。空気も違いますし、こんなところ見たことありません」

(……?・ 転移した時の感覚……どこかで……)

幸いなのはうつそうと生い茂る右も左も分からない場所に放り出されたわけではなく、サークル状の空き地のような開けた場所だったことだろうか。

ポツリと呟いたハジメの感想にシアが律義にも答える。彼女はハルツィナ大樹海の隅から隅まで知り尽くしているというわけではないが、少なくともシアの記憶によるとこのような場所は無いらしい。

ユエは魔法陣での転移の際に何か思う事があったようで、何かを考えこんでいる。

「これはどつちに進めばいいんだ? どつちを見ても同じようにしか見えないんだけど」

「……上には霧か。これじゃあ飛んで辺りを確認も出来そうにねエが物は試しだな。ここはテイオさんに一つ飛びしてもらって——」

キヨロキヨロと前後左右を見回す光輝。どこもかしこも木が生えているだけでヒントになりそうなものはない。樹海の恐ろしさはここに来るまでに十分に思い知っていた。迂闊に動く遭難しかねないので取りあえず進むのは不味いのだ。

上空を確認した幸利は面倒くさそうに頭を搔く。こうも霧が深くでは上空から俯瞰して見ることも出来なさそうだが、遠目に判るものがあれば目指す先が分かるかもしれない。そう思って飛行が出来るテイオの方を向いたのだが……。

「——テイオさんが居ねエ」

「そういえば……。それに香織さんも居ないね」

「本当だ、香織はどこだ!？」

「リンリンも居ないな」

「……もしかして別の場所に飛ばされた?」

お互いの姿を確認して頭数を数えてみれば七人しかいない。

居ないのは鈴、テイオ、香織の三人。転移の際、別々の場所に飛ばされたのだろうか。

三人共ハルツイナ大樹海の魔物に後れを取るほど弱くはないが、ここはすでに試練の場。何が起こるのか分からない以上、速やかに合流するのが得策だろう。

「合流するぞ」

「そうだね。でも問題はこの樹海でどうやって探すかなんだけど……」

ぐるりとハジメは辺りを見回す。上空には濃霧、そして地上には樹海。下手に動き回っても見つかるとは思えなかった。理想としてはここにキャンプを作って探索をすることだが、それはあくまで全員が揃ったらという話である。

「……鈴は北東……白崎さんは北西……テイオさんは南西にいると思う」

目を閉じて杖を構え、俯いて何やら集中をしていた恵理が顔を上げる。

元々生物や魂の感知には長けていた恵理だったが、魂魄魔法と相性が抜群に良かったと言う事もあり、神代魔法と合わさることで天職の降霊術士としての性能が数段引き上げられていた。

広範囲の魂を感知する降霊術士の魔法「索魂」と、指定した魂のみを魔法の対象とする魂魄魔法の「選定」を組み合わせることで、およそ半径数十キロ程度の指定人物を探知する魔法となる。

ただし、これは特定の人物だけ感知する魔法なので、それ以外の魔物等は範囲にいても感知することができないという欠点もあるので、通常の探知魔法とはケースバイケースで使い分けていく必要があった。

その恵理だけの魔法にあえて名を付けるのであれば「観捉」あたりになるだろうか。

「でかしたー」

「さっすがエリさんー」

「やはり天才か……」

「……ん、この広範囲を探知するのは素直にすごい」

「そ、そんな……たまたまだよ」

このメンバーの中でこのテの感知能力、魔法が使えるのはユエ、幸利、恵理の三人である。しかしユエと幸利は精々射程は数百メートルから数キロ程度であり、それに加えて個人を特定して感知することはできない。

だからこそこれからどう動こうか迷っていたのだが、その問題はアツサリと解決してしまった。

口々に褒められた恵理は謙遜こそしているものの照れくさそうだ。

「で、どうする？ 手分けして拾ってまたここで合流するか？」

「……いや、まとまって行動したほうが良くないか？ 樹海で迷わないようにするにはシアさんが必須だし、三人が現在位置から移動するかもしれない事を考えると恵理に時々探知し直してもらう必要もありそうだ」

「となると全員で動いて谷口さんから順に時計回りに回収するか、テイオさんから順に反時計回りに回収するかのどっちかになるね」

「……マモル、どうする？」

一斉に視線が北条へと向かう。一応ではあるが北条がこの一行のリーダーなのだ。

「……リンリンから順番に回るぞ」

特に考えることもなく北条は結論を出した。

聡明なテイオであれば下手に動き回ったりはしないだろう。鈴を先に回収するというよりはテイオを後回しにしても問題ないという判断である。

善は急げ、ということの方針が決まった一行は早速、北東に向けて歩を進めた。

樹海の片隅で、とある存在が膝を抱えていた。

緑色の肌。理性も知性も無さそうな醜い顔。鉤爪のように折れ曲がっている指。子供ほどの体格。

それは、いわゆるオーソドックスなゴブリンと呼ばれる存在であり、ファンタジー世界であれば程度はあれ必ず出てくる怪物だ。そんな存在が現在、迷子になった子供のように、木の陰に隠れるようにして座り込んでいた。

(うう……何でこんな事に)

谷口鈴がなぜこんな状況になってしまったのか、それを説明するのであれば非常に簡潔であり、ハルツイナ大樹海の迷宮に入る魔法陣に乗って転移した瞬間にこの姿になってしまったというだけだ。

頭に触れても髪の毛は無いし、当然いつも二つに括つてお下げだつてない。

身体能力も見た目相応で、人間の子供程度の力しかない。

(皆は今頃何をしてるんだろうな。もしかして私と同じようにゴブリンになっちゃつてるのかな)

逸れてしまった他のメンバーの事を想つたため息をつく。もしも全員が同じ状態になっているのだとすれば速やかに合流する必要があるが、現状では不可能なように思えた。

最悪なことに元々使えていた魔法も使えなくなってしまうている。周囲に生息する魔物は、普段であれば余裕をもって対処できるレベルではあるが、今の状態では到底勝ち目がない。こうして動かずに隠れていることで精一杯である。

となれば、皆が自分のようなゴブリンになっておらず、見つけてくれるのを待つしかないのだが、それこそが一番の不安だった。

(でも、もし見つかつても……こんな姿になつた自分を判つてくれるのかな?)

口を開いても出てくるのはモンスター特有の濁つたような鳴き声だけ。

身に着けていたものも消えていて、自身が谷口鈴であると証明できるものが何も無い。

そうなると元来臆病者である彼女の頭の中には嫌な想像ばかりが溢れ出してくる。

自分だと気付いてもらえなかつたら?

魔物と判断されて敵意を向けられたら？

皆の事は信じているが、そう考えただけで体が震えてくる。

きつと大丈夫、きつと大丈夫、と無理やり自分を励ましていると、ガサガサと草木を掻き分ける音と、時々剣を振るう音が聞こえてきた。もしや魔物か、と警戒してただでさえ小さい体を縮こませていると、やがて賑やかな話し声が聞こえてくる。

「多分この辺りだと思っただけ……」

「ま、まさか既に白骨死体に……！」

「そんな、谷口……！」

「いや、勝手に殺すなよ。死んでたら中村が気付くだろ。空間魔法とかで隠れてんのか？」

聞き間違えるはずもない皆の声。話の内容からして、きつと探しに来てくれたのだろう。

草木を掻き分け、太い枝や蔓などがあれば聖剣などで切り払って進んでいる。

それ自体はすごく嬉しかったが、今の姿で皆の前に姿を現すことを躊躇ってしまい動けない。

木の陰に蹲ったまま皆に視線を送っていると、視線に気付いたのか北条とパツチリ目が合った。

「……」

「……ゴ、ゴブリン……！」

ヒュツと息をのむ。心臓がバクバクと煩い。いつものように『まもるん』と言おうとしても出てくるのは濁った声のみ。じつと見つめてくる北条は普段と変わらず無表情であり、それ故に何を考えているのかが分からずに恐ろしい。

「どうしたの衛？ あ、ゴブリンだ。でも何と言うか、敵意とかは感じないね」

「……マモル、どうする？」

「……中村。確かめてくれ」

「え？ う、うん、分かった」

北条に言われて恵理が魂魄魔法でゴブリンを精査してみる。

そして、その結果は『是』であった。ずっと捕捉し続けていた鈴の魂が、たしかにこのゴブリンから感じられる。

「も、もしかして鈴?」

「……ん、確かにスズの魂がある」

「マジかよ。……マジだった」

ユエと幸利が恵理と同じく魂魄魔法で探ってみても恵理と同じ結果となった。三人が三人、それも魔法に関しては才能に溢れた者がトリプルチェックをして間違えると言う事はないので、きつとこのゴブリンが鈴なのだろう。

必死に葉っぱでお下げのようなものを示してアピールし始めたゴブリンに、北条がペンダントを渡す。

ライセン大迷宮で手に入れた念話石をハジメが加工して作ったアーティファクトで、身に付けているだけで念話ができるようになる優れものだ。

『み、皆々！ 助かったよありがとう！ いや、気付いたらこんな体になっちゃってたし魔法は使えないしでホント参っちゃうよ！』

いやあ参った参ったといつもの調子で頭をかくが、ちよつとだけ声が震えていた。なんだかんだ言ってもまだ二十年も生きていない子供なのだ。むしろこの状況に放り出されて身を隠す事ができただけ冷静と言えよう。

「そうか。待たせたな」

『……うん、でも大丈夫。ちゃんと見つけてくれるって信じてたから』
北条はゴブリンをひよいつと抱き上げると、肩車をするように首を跨がせて肩に座らせた。何はともあれ、これでまず一人回収終了である。

『いやあ、まもるんの肩車は初めてだけどこれは快適ですな。まるで鈴のためにあるようなジャストフィット感！ これはもう相性がバッチリという事で間違い無いですな！』

「……今回は見逃すつもりだったけどやっぱりダメ」

一転してご機嫌な様子で北条の頭を抱き抱える鈴を半ギレのユエが引き剥がそうとする。それに負けじと鈴は踏ん張って北条の頭を

さらに強く抱きしめる。北条の首に負荷がかかった。

「いつも通りの光景ですねえ。とにかく、何事もなくスズさんが見つかって良かったですよ」

「ああ、これであと二人だな。次は香織だけど……、恵理、香織の場所は変わってないか？」

「えっと、うん。今のところはあれから動いてないよ」

「これもしかして逸れたやつは全員ゴブリンとかになつてんのか？」

「それを前提として動いた方がいいかもね」

おそらくではあるが、この大迷宮では『姿が変わってしまった仲間』を判別することが出来るか、見ても今まで通り接することが出来るか、などが試されているのだろう。

解放者というのは趣味の悪い試練しか用意できないのかと一行がグチグチ文句を言っていると、近くの茂みがガサリと揺れた。

『……えっ』

「ふい、とんでもない樹海だぜえ……。あつ、皆無事だったんだね！
良かった、一人だと心細かったんだ」

「スズさん!? でもスズさんはゴブリンなんじゃなかったんですか!?」

「えっ、流石に失礼すぎるよシアシア！ そんなこと言われたら流石の鈴ちゃんも激おこだよ！ 全く、この可愛い鈴ちゃんをよりよつてゴブリンだなんてあんまりだよ！」

油断なく動けるようにしてそちらを見やるが、茂みを掻き分けて現れたのは、なんと今しがたゴブリンの姿で発見されたはずの鈴だった。

ぱっと見ではいつもの鈴であるそれにゴブリン鈴が一転不安げな表情になる。

『ま、まもるん……』

「中村」

北条の指示を受けた恵理が確認をするが、答えは『否』であった。

鈴の魂が感じられるのはゴブリンからであって、この鈴からは魔物のような魂しか感じられない。

ふるふると恵理が首を振ると、北条はユエをチラリと見る。それだけで通じたのか、コクリと頷いた。

「……スズ」

「どうしたのユエユエ？」

「今から五つ数えてから魔法を使うから防いで。スズなら防げるはず」

虚空に水が現れてギョルリと渦巻き、槍を形作った。

水属性の中級魔法である「渦槍」。鈴であれば結界一枚張れば防げる程度の威力でしかない。最悪直撃しても死にはしないだろう。

「五、四、三……」

「え、ちよつと待ってユエユエ、何で鈴に照準を合わせてるの!? まもるんヘルプ!」

慌てた様子で鈴の形をしたものが制止しようとするがユエのカウントダウンは止まらない。そのまま五つ数え終わると同時に水の槍が発射されて肩を抉った。

これが人間であれば血肉が飛び散るのだが、飛び散ったのは赤銅色の粘液のようなものだった。しかも肩を抉られたというのに痛みを感じるとような素振りも見せていない。

「……偽物風情がマモルの名前を呼ぶな」

ドロリと穿たれた箇所が蠢いて元の形に戻ろうとするが、その前にユエの魔法が殺到してその体を千々に弾けさせた。

『自分の形をしたものが壊れていくのを見るって複雑な気分だよ……』

「うん、そうだね……。あつ、鈴の頭が弾け飛んだ」

「お、谷口の腹に大穴が空いたぞ」

『ユエユエに容赦がない！ その、一応鈴の形をしてるんだし、もう少し手心というものがあつてもいいんじゃないかな……?』

「……偽物死すべし。慈悲はない」

頭を貫いた風の槍が決め手となったのか、地面にぶちまけられたスライムのような魔物はそのまま地面の染みとなった。

鈴は、ユエの覗き仲間（ユエ視点）である。

普段は北条を巡って争うことが多いが、それ故に鈴の人間としての能力や人格は認めていたし、対等な友達だと思っている。

その鈴になりすまし、あまつさえ気安く北条の名前を呼ぶ。

それに対する苛立ちが魔法の激しさに現れていた。

「……ふう、スツキリした」

最後に壊劫（小）でペしやんこにしてストレス解消完了である。

あまりもの容赦のなさに、ユエの内心を知る由もない鈴は顔を引き攣らせていた。

「…次に行くか」

「そ、そうだな。それにしてもまさか仲間の姿を真似る魔物がいるなんて、この迷宮も一筋縄ではいかなそうだな」

「と言う事はテイオさんとカオリさんの偽物も出てくるかもしれませんね」

「ああ。けど魂魄魔法を使えば本物と偽物の区別は出来るっぽいからまだ楽な方だな」

ユエのフルボッコ劇場は見なかったことにしてすぐさま香織の居る方向へと進路をとる一行。道中は樹海らしく蜂のような魔物が出たりしたが一蹴しつつ、やはり聖剣などで枝や蔦を払って進む。

「……さっきの転移の時、記憶を探られている感覚があった」

「そういうえば迷宮をクリアした時の魔法陣みたいな感覚があったような気がするよ。そっか、魔法陣で記憶を読み取って仲間の姿に変化してるってわけだね」

「そりやまた……悪趣味なことだな。解放者ってのは性根がねじ曲がってる奴しかいねエのか？」

おそらくこの迷宮のコンセプトは『絆』だろう。

入り口の石板にも絆がどうたらこうたら書いてあった気がするの間違いはないはずだ。

転移でバラバラに飛ばして、一部の者の姿を変えて偽物を用意する。

そして姿が変わってしまった仲間を見分けられるか、偽物を見破れるかを試す。

迷宮のタネが割れてしまったのであれば攻略法は単純である。

先程のように魂魄魔法で真贋を見極めてしまえばそれでいい。タネが割ればある意味ではあらゆる試験の中で一番簡単かもしれない。

そのまま歩を進める事数十分、香織はあっさりで見つかった。見つかったというよりは自分から見つかりに来たというのが正しい。

恵理の探知で香織がいるらしき場所まで辿り着いた瞬間、藪の中に隠れていたらしいゴブリンが飛び出して襲い掛かってきたのだ。

「ゴブツッ！」

「なにっ」

「うわああああっ！」

「しまった、南雲！」

とっさに立ちは大丈夫だった北条を驚異的なクロスオーバーステップを交えたフェイントで抜いたそのゴブリンは、勢いのままハジメに抱き着いて押し倒した。

まさに一瞬のうちに行われた早業。

北条の目には幽霊のようにゴブリンが消えたようにしか見えなかった。

危害が加えられる前に光輝が急いでゴブリンの首根っこを引っ掴んで引き剥がす。

猫のようにプラプラと宙吊りになっているゴブリンを一行は油断なく見やった。

「まさかマモルさんが突破されるなんて……」

「……初めて見た」

「……不覚」

「恵理、一応見てくれないか？ あ痛っ！ 暴れるな手を抓るなっ、地味に痛い！」

じたばたと暴れて光輝の手を抓るゴブリン。

恵理が嫌そうな顔をしながら魂魄魔法をかけると、このゴブリンからは認めたくないことに香織の魂が感じられた。それを伝えると光

輝はショックを受けたような顔をする。

「そ、そんな……！ 変わるのを見た目だけじゃないのか!? しっかりしてくれ香織、頭の中身までゴブリンになっちゃ駄目だ!」

「フッフ」

「フッフ」

「フッフ」

必死にゴブリンに呼びかける光輝の声に噴き出す声が漏れた。

きつとここに雫あたりがいたら「いつも通りの香織ね、安心したわ」とでも言っただろう。

『いやー、カオリンは平気そうだな。それにしてもあんなキモ……じゃなかった凄いいステップ、いつの間に身に着けたのか鈴はそこがすごく気になるよ』

『その声はもしかして鈴ちゃん？ 鈴ちゃんも私と同じ状態だったんだ。この足捌きに関しては王宮でちよつとね。雫ちゃんには通じなかったんだけど。天之河くん、離してもらってもいいかな?』

「え? あ、ああ……」

念話のペンダントを渡せばいつもの香織の声が響いてくる。光輝が言われた通り地面に香織を下すと、香織はハジメの傍に駆け寄っていき、スルスルと木を登るようにあつという間にハジメの体を登っていき、鈴と同じように肩車のような状態に収まった。

『うん、これで良し。よろしくねハジメくん!』

「ええ……。ま、まあ良いんだけど……」

ふんす、と鼻息を鳴らしながら香織が言えばハジメがもうどうにでもなれと投げやりな感じで溜息を吐いた。

「何か色々ツツコミ所があるような気がするが、取りあえず白崎はこれで回収出来たってことでもいいのか?」

「ですなあ。さつさとテイオさんも回収しちゃいましょう」

頭を掻きながら幸利が言う。これで鈴と香織の回収が終わったので、後はテイオだけである。

その後、鈴の時と同じように香織の偽物が出現したが、案の定ユエに瞬殺された。

再び樹海を歩きつつ、道中にある枝や蔓はやはり聖剣で切り払う。
「……今更だが鈍とか無いのか？ 俺の聖剣はこんな事に使うためにあるわけじゃないんだが」

光輝が聖剣を振るいながら愚痴る。聖剣はすでに植物を斬りまくったせいか薄汚れていた。

一切刃毀れていないのは流石に聖剣の面目躍如といったところだが、聖剣もこんな事に使われるとは予想だにしていなかっただろう。附着した何かの植物の汁が、聖剣が流した涙のようにも見えた。

「勇者がんばえ〜」

「がんばえ〜」

「こんな嬉しくない応援は初めてだよ！ 清水はともかく南雲はイイ性格になったな！」

そのまま聖剣を汚す事数十分、時々恵理の指示に従って方角を微調整しながら進んでいくとテイオが居るポイントにたどり着く。

テイオは、すぐに見つかった。

木に背を預けて腕を組んでいるゴブリンが一匹。そしてその足元の地面にはトータスの共通文字で『テイオ・クラルスなのじゃ。十七歳なのじゃ』と書いてある。普段のテイオは達筆なのだが、ゴブリンの体で木の枝を使って書いたのが原因か、少しだけ文字が歪んでいた。

「ゴブツ」

北条達に気が付くと、「よっ」とでも言うように軽く手を上げて挨拶をした。

これ以上なく分かりやすかった。むしろこれが姿を変えられた側が取る最適解なのかもしれない。

「……うん、間違いなくテイオさんだよ」

「ああ、こりや確かに色んな意味で一発で分かるな」

恵理が魂魄魔法でチェックし、幸利が念話のペンダントを渡す。

『やはりお主等を信じて動き回らなくて正解だったのう。ふむ……どうやら鈴と香織が妾と同じように姿を変じさせられているようじゃな。やはり妾の予想は正しかった』

「テイオさん、ちょっと冷静過ぎませんか？ もつとこう、取り乱したりとか驚いたりとかは無いんです？」

『いやいや、これでも驚いておる。如何なる魔法で姿を変じておるの考えてもサツパリじゃからな。おそらく何らかの神代魔法とは思うのじゃが……』

人の姿から別の姿に変わる魔法はある。他ならぬテイオが竜人族と言う人と竜の姿を行き来できる『竜化』を使える種族だ。

だが少なくともテイオは竜人族の竜化以外にそう言った魔法があるとは聞いた事はない。

「……ここに来る途中再生魔法で治せないか試したけど駄目だった」

「……この神代魔法か七つ目の神代魔法が関係してるのかもな」

『うう、この試練が終わったら元の姿に戻りますようにこの試練が終わったら元の姿に戻りますように……！』

その後に出現したテイオの偽物は案の定ユエに業務的に瞬殺された。

なお、その際に幸利が偽物であるのをいい事に「お体に触りますよ」をしようとしたのでテイオ（ゴブリン）とテイオ（偽物）の両方に足の小指を踏みつけられて悶絶したのだが、誰も幸利に同情しなかった。

さて、これで全員が揃ったのだが、試練が終了する気配はない。

じっとしていても埒があかないのでとりあえず樹海の奥へと進んでいく。

また聖剣を汚しつつしばらく歩いていると、その存在は突然現れた。

「これは……木だな」

「デカ過ぎんだろ……。いや、コイツはただの木じゃねえぞ」

「な、何か動いてませんか？ もしかして魔物ですか？」

「……ん、オルクス大迷宮にも同じようなのはいた」

高さ三十メートル程で直径が十メートル程。

一般的に言えばかなりの巨木である。それが少し開けた場所に鎮座していた。広さで言えば東京ドーム三つ分ほどだが、辺りに魔物は

見当たらず、風が吹いていないと言うのに枝葉がユラユラと揺れていて一層不気味さを感じる。

そして次の瞬間、枝が触手のようになって襲いかかってきた！
「させん」

鞭のように変則的な軌道で迫る枝を北条が剣と盾を用いて叩き落とす。圧倒的な巨体から繰り出される打ち下ろしは地面を抉るほどの威力があり、直撃すれば並の者ではひとたまりも無いだろう。

特に今は非力なゴブリンに姿を変えられてしまっている三人がいる。足手纏いを抱えながらの戦闘はかなりのハンディを強いられている状況だ。

「風袈」

すかさずユエが風属性の上級魔法を放つ。圧縮された大気を槍として生成、それを機関銃のように打ち出すが、巨大な木の魔物……トレントは葉や木の実を弾丸のように打ち出すことでこれに対抗する。

風の槍と植物の弾丸がぶつかり合い弾ける音が樹海に響いた。

当然全てがぶつかり合ったわけではなく、いくつかの弾丸がすり抜けてくるが、それは北条が全て弾き飛ばした。

「……むっ」

ユエが放ったいくつかの槍はトレントに命中したが表面を抉るだけに留まる。

相手は植物系の魔物であり、間違いなく火に弱い。だがここは平原ではなく樹海であり、不用意に派手な魔法を放とうものなら周りに引火する恐れがある。もし使えたとしても中級がせいぜいだろう。

「空に雷雲満ち満ちて、運びてきたるは裁きの光。天の怒りよ、地に落ちよ！　『雷槌』！」

「氷の海に揺蕩いて、白き息吹に飲まれて眠れ。『凍棺』！」

トレントには痛覚を感じる機能は無いようで、構わず木の実を飛ばしたり枝を叩きつけてきたり、はたまた地面から根を突き出して攻撃してくるが、その全てがごとごとく北条に防がれ、ユエの魔法で反撃を受けて少しずつその身を削り取られていく。

しつかりと詠唱をして威力を最大まで高めた幸利が放った雷魔法

がトレントの幹を焼き焦がし、恵理の氷魔法が枝葉を凍り付かせる。天職のせいで誤解されがちだが、二人は闇魔法、降霊術しか使えないというわけではない。

ユエやテイオという特級の魔法使いが傍におり、直接指導してもらえるのだ。すでに上級魔法程度であればどの属性でも実践レベルで使えるようになっていた。

「お二人とも流石ですう！　せーのっ……」

地面から槍のように突き出す根を「未来視」を用いて最小限の動きで躲しながら走り、思いつきり跳躍する。シアの目の前には間抜け面（シア視点）を晒しているトレントの姿。

「よいしょおおおっ!!」

重力魔法で自重を上げて反動で吹き飛ばされないようにして、バルムンクを思いつきり振り抜く。

すると、薪を割るような小気味よい音とともにトレントの上半分が斬り飛ばされた。斬り飛ばされた部分は恵理の魔法によって凍り付いており、地面に着弾すると同時にガラス細工のように枝葉が砕けた。

シアが使っているバルムンクは神代魔法を会得する毎におもちや……ではなく実験台になっており、様々な機能が雪だるま式に積み上げられているのである。

今回の使用されたのは生成魔法によって付与された空間魔法であり、刃の周りの空間を歪ませることによって見た目より遥かにリーチが長くなるというものである。

「神の慈悲よ！　この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！　　神威
“！”」

たつぷり時間をかけて詠唱をした光輝の聖剣が眩い光を放つ。

現時点で光輝が出せる最大火力である光魔法の「神威」である。

光の衝撃波がトレントに向けて、地面を抉りながら迫る。固有魔法なのか、地面から大量の樹を生やして盾にしようとするトレントだったが――。

「残念、それは読めてるよー！」

ハジメの錬成によって突如地面が大きく隆起して、突き出してきた樹が道を譲るように横倒しに倒れた。

的確なサポートによって光輝が放った光の衝撃はトレントに直撃してその体を半分ほど消し飛ばし、最大火力の名に恥じぬ働きを見せつける。

「……やったか!？」

『天之河くん、それは生存フラグだよ!』

立ち込める土煙を睨みながら光輝が露骨な生存フラグを立て、鈴がツツコミを入れる。

だが鈴の心配は杞憂だったようで、煙が晴れた時、トレントは完全に沈黙していた。

「どうやら光輝の一撃が止めになったようだ。」

「何と言うか、あつさりと終わったな。無駄にデカイからもうちつと体力があるような気がしたんだが」

「だよね。見た目的にはレイドボスって感じがしたよね。あの、香織さん、そろそろ降りてもいいんじゃない?」

『す——は——』

『それだけお主等が強くなったと言う事であろう。すでに五つの迷宮を突破したお主等の実力はおそらくこの世界では比類なきものになっておる。とは言え、お主であればまだまだ魔法の発動は早く出来るはずじゃ。これからも精進するがよい』

「へいへい……頑張りますよっ」と

うむうむ、とテイオが幸利の頭の上で師匠面をして頷く。事実、このトレントはサイズも相まってベヒモスより遥かに強い。王国の兵士であれば全滅を覚悟しなければいけないような相手だ。

なお、香織は無言でハジメをキメていた。いつも通りである。最早誰も気にしなくなっていた。

「……ふふっ。マモルの盾と私の魔法。二つが合わさって最強に見える。攻守において完璧」

『むぐぐ……今回はお荷物だったから何も言い返せない……!』

「リンリンはお荷物じゃない」

なお、今回の戦果に一番驚いたのは光輝であった。

トレントのサイズからして苦戦は免れないと思い、最悪の場合は“限界突破”を使う事も考えていたのだが、蓋を開けてみれば楽勝だったのだ。まだ迷宮が続くかもしれない事を考えると僥倖であると言えるだろう。

「……何か、皆で戦うのっていいな」

「光輝くん……。うん、そうだね」

思い返せば、王宮に居た頃は皆で戦っていたようで個人個人で戦っていたような気がする。

今回の戦いで何か感覚をつかめたような気がした。

光輝が感慨にふけっていると、メキメキツ！ と何か板を無理やり突き破るような音が聞こえてきた。一同が音の発生源を見やると、倒したはずのトレントが徐々に再生を始めていた。

「……再生魔法」

「えっ、もしかしてまた戦わなくちゃいけないんですか？」

ユエの言う通り、まさに再生だ。

ユエに削り取られ幸利に焼かれた幹も、恵理によって氷漬けにされてシアによって斬り飛ばされた上半分も、光輝によって消し飛ばされた下半分も、見る見るうちに元に戻ってしまった。

再生するならば、再生出来なくなるくらいに跡形もなく消し飛ばせばいい。

各員が再び戦闘態勢に入るが、再生したトレントは一向に攻撃してくる気配がなかった。

少しの間睨み合っていると、トレントの幹が蠢いて入り口の大樹と同じように洞を作り始めた。

人が並んで十分に入れるだけの大きさ。ここに入ってくれと言わんばかりである。

「…入るか」

『成程のう。こやつは試験官であり、次の試練への扉としての役割も兼ねておるわけじゃな』

「つまり、こここの試練はクリアできたってわけか」

北条を先頭に洞に入っていくと、中は空っぽであり何も無い空間が広がっていた。

最後尾の恵理が入ると自動的に洞が閉じていき、やがて足元に魔法陣が現れて光り輝き始めた。

「また転移だね」

『あの、まだゴブリンのままだけど、もしかして今回の迷宮ってずっとこのままなの？』

北条に肩車されたままの鈴が不安そうに言う。

おそらくこのトレントを倒したことでこの試練はクリアしたはずなのに、一行に元に戻る気配が無いのだ。この先の試練もこのままであれば、完全な足手纏いである。

『現状どうにも出来ぬのじゃから、それについては祈るしかないのう』
ため息交じりのテイオの言葉を聞きながら、一行の視界は白い光に塗りつぶされた。

幕間：惑わしの大樹海（中）

カーテンから優しい朝の陽射しが差し込む。眩しさを感じて、北条衛は手を翳してうつすらと目を開けた。目覚まし時計は置いてない。それが無くても毎日ほぼ決まった時間に目が醒めるからだ。

「…今日は良い天気だな」

欠伸を一つして布団を跳ね除け、カーテンを開けてからベッドから降りて大きく伸びを一つ。朝の陽射しによつてその日一日の体内時計がスタートした。

時計を見ると時間は午前六時。学校に遅刻せずに到着するためには七時に出れば十分に間に合うので、一時間ほど余裕がある計算である。

手早くクローゼットを開けて制服を取り出すと、一分ほどで着替えを終わらせた。

こうして身支度が素早いのが密かな特技となっているが、誰かに自慢などしたことは無い。どうでもいい事だと笑われるのが分かっているからだ。

ポコポコとスリッパの音を響かせながら階段を下りてリビングルームに行くと、そこにはすでに二人の男女が居た。フライパンで料理をしている女性と、椅子に座つて新聞紙を読んでいる男性。北条家の父と母だ。

「おはよう、今日も早いわね。感心、感心」

「おはよう。流石お兄さんだな。弟たちの良い見本だ」

「…うん。おはよう、父さん、母さん」

優しい笑顔で挨拶をする両親に、同じく微笑んで挨拶を返す。

ご飯が出来るから席に着きなさい、という母の声に椅子を引いて着席した。

長方形のテーブルに父と母が隣り合つて座り、その向かい側に子供達が年順に並んで座る。

誰が取り決めたわけではないが、それが北条家のルールだった。

どうやら弟や妹はまだお眠らしい。相変わらず朝が苦手なんだな、

と苦笑いを一つ。

「おや？ 今日のは確か休日だったはずだから制服は着る必要は無かったと思うんだけど」

「…えっ」

「あらら、おつちよこちよいね。うふふ、まあそんなところも可愛いんだけどね」

「ほら、今日は久しぶりの休日だから家族全員、水入らずでピクニックに行こうって話をしてたじゃないか。天気予報によると今日は一日晴れらしいから、絶好のピクニック日和だね」

そうだった。父親が仕事で忙しい中、久しぶりにゆっくりと休める日が出来たので、家族全員でどこかに出かけようという話を昨日していたのだ。

それで弟達は張りきって母の弁当作りの手伝いをすると思気込んでいたが、結局朝に弱いので自分がこうして休日なのに早起きをして手伝うことになったと。段々と思いついてきた。

「ご飯を食べたら母さんの手伝いをするよ。五人分となると量も多いだろうから」

「ありがとうね。親孝行な息子を持って母さんは幸せだね」

「大げさだよ。家族を助けるのは当たり前じゃないか」

「ふふん、そういう言葉が自然に出てくるのもやはり、父さんの背中を見て育って——あいたた、母さん、お玉で叩くのは反則だって！」

「もう、直ぐにそうやって調子に乗るんだから。さ、ご飯が出来たわよ。他の子はまだ起きてないみたいだけど冷めないうちに食べちゃいなさいな」

「分かった。それじゃあいただきます」

温かい朝ご飯を食べた後は制服から私服に着替えて、母の手伝いである。

父は朝食を食べ終わると車の調子を確認しに外へ出て行った。

二人並んでお昼の弁当を作っていると、バタバタと慌ただしい音が聞こえてきてリビングのドアが勢い良く開く。

「ね、寝坊だ〜！ ごめん母さん、手伝うって言ったのに！」

「同じく寝坊だ〜！ 休日だと思つてつい！」

雪崩れ込むようにして入つて来たのは髪がところどころ寝癖で跳ねてしまつている少年と少女。

北条家の長女と次男だ。北条衛にとつての妹と弟と言う事になる。二人は入つて来た勢いそのままに「姉ちゃんが起こしてくれなかったからだ」「弟が目覚ましをかけなかったからだ」と母と衛の前で益体の無い言い争いを始めてしまった。

そんな二人に微笑まじさを感じてつい笑顔がこぼれてしまう。

「あつ、ほら、兄さんにも笑われた！ 兄さんも休みだつていうのにちゃんと早起きして母さんの手伝いをしてるし…、これはもう言い出しつぺである弟に償いをさせるしかないね！」

「いやいや、ここは年功序列で姉さんが責任を取るべきでは!? そもそも手伝いをするつて言い出したのは姉さんだからね!」

「俺は大丈夫だよ。弟や妹のフォローをするのが兄の役割だから。二人とも朝ご飯を食べたら手伝つてくれるかな?」

こうしてしよつちゆう言い合う二人を宥めるのが兄である自分の役割だ。

二人の見本となれるように出来る限り品行方正、成績優秀に。

頼れる兄になつて家族を守る、家族に頼られるようになるように努力を重ねるのが密かな日課となつている。

「はあい、いただきます」

「いただきます」

食器と箸が鳴らす音を聞きながら衛は重箱の中におかずを詰めていく。

五人分で、食い盛りの子供もいるので量は多めだ。卵焼き、唐揚げ、アスパラの豚肉巻き、などを入れていくと、あつという間に重箱の中が彩で飾られていく。

「ごちそうさま〜！」

「ごっそさんでした〜！」

「はい、お粗末様でした。それじゃあ着替えてらっしやい。父さんが車の調子を見に行つてるから、それが終わつたら出発するわよ」

はくい、と気の抜けた返事をして弟と妹は食器も片付けずリビングを出ていった。

「まったくあの子たちは」と苦笑いをして食器を下げようとする母を衛は手で制した。

「皿洗いと弁当の残りは俺がやっておくよ。母さんも準備があるだろう？」

「あら、それじゃあお言葉に甘えちゃいませうか。敷物とかおしぼりとかの用意もしなくっちゃね」

助かるわ、と言ってエプロンを椅子に引っ掛けてから母はリビングを出ていった。

その後、一人で黙々と作業を行い、重箱の蓋を閉め終わった瞬間に準備を終えた弟が入ってくる。

「……よし、これで終わり」

「俺は準備終わったぞ。姉さんはもうちよつと時間かかるってさ。で、兄さん、弁当は何が入ってるの？」

「それは着いてからのお楽しみだな」

後ろから覗き込もうとしてくるが時すでに遅し、風呂敷で重箱を包んでお弁当は準備完了である。時計の長針は九時を少し過ぎたころであり、出発するには丁度いい時間だ。

その後少しすると妹が身支度を済ませて二階から下りてきて、車の確認を済ませた父と細かい準備を終えた母が戻ってくると家の戸締りをして一家揃って車に乗り込んだ。

父が運転し、母が助手席に。後部座席には左から順に衛、妹、弟が座っている。

「そうそう、聞いてよ兄さん！ この前私の友達が——」

流れていく景色を見ながら色々な事を話した。それは学校で流っている事だったり、今やっているゲームの事だったり、あの服が欲しいなどといった何でもない話ではあったが、それが衛にとっては愛おしく掛け替えのないものに感じられる。

「……………」

ふと、何かが引っ掛かった。心の中で感じる違和感がある。忘れて

いるものがあるような、今すぐにどこかに行かなければいけないような、上手く言葉で説明できない衝動がへばりついている。

それがどういったものかは分からない。何故そんな感情があるのか分からない。だが、とても大切なもののような気がして――。

「兄さん、聞いているの？ ……もしかして車酔いでもしちやった？」

「ああ、うん。もちろん聞いているよ。車酔いも大丈夫」

ふと、妹の心配そうな声で現実を引き戻される。横を見てみると不安げにこちらを見る妹の姿。

体調に問題がないと笑って言うと、今度は弟が少し考えてからハツとしたように言った。

「なんか窓の外見ながら考え事してたけど……、もしかして兄さん、好きな人でもできたのか？」

「なにつ、それは本当か衛！ 誰を好きになったのか父さんに言ってみなさい！」

「えっ、いや、俺は別に恋愛事での悩みなんて無いんだけど……」

父親が弟の言葉に反応して振り向かんばかりの勢いで体を揺らす。急に全く考えていなかった内容がやってきて衛は困惑を隠せない。

「ここら、お父さんはハンドルを握ってるんだから興奮しないの。そう言えば衛の通う高校には綺麗な娘がたくさんいるわよね。うふふ、隠さなくてもいいわよ。誰が気になるのかしら？」

「私も気になるなく。その人が将来的に姉さんになるかもしれないわけだし？」

「二人まで……。勘弁してくれ……」

そこに母と妹も参加して集中砲火を受け、お手上げといった風に両手を小さく上げると笑い声が車内に響き渡った。

そんな下らない話をしていううちに街を抜け、郊外を通り過ぎ、やがて緑豊かな自然公園へと辿り着く。ごみを持ち帰る事が条件だが食料の持ち込みが出来る場所で、休日には家族連れの人達で賑わう事が多い。

「うーむ、流石に祝日だと人が多いな。まだお昼時までは時間があるし、少し歩くか」

「確か林道を抜けると小さな丘があったはずよ。お弁当を食べるのならそこに行きましょう」

「うへえ、こっから歩くのか」

げっそりとした様子で弟が肩を落とした。自然公園はとても広く、目指す丘は遠目に見えるばかりであったからだ。丘の前には木々が生い茂っており、おそらくはそこに設けられた道を通っていくのだろう。

目算でも辿り着くのに一時間くらいはかかりそうだった。妹もそれに気付いて弟同じように肩を落とす。

「荷物は俺が持つよ。だから頑張って歩いてみよう」

「さっすが兄さん、頼りになる！ それじゃあこれお願いっ！」

「あつ、兄さん！ せっかくだからこれも持つてくれ！」

「はいはい」

衛が水筒やら鞆やらを持つように申し出れば、妹の顔がぱあつと輝く。現金な妹だなあと苦笑いをして妹と、あと便乗して渡してきた弟の荷物を受け取って丘に向けて出発した。

移動中は車内と同じように談笑しつつ、周りの景色を楽しむ。自然公園というだけあって人工物は最低限にしているようだ。吹き抜ける風を感じ、草木のざわめく音を聞きながら、青空を流れていく雲を眺めているとまるで違う世界に来たような感覚になる。

林を分断するように整備されている道を通り抜け、木組みの階段と緩やかな坂からなる登り路を進んでいく。目的地に到着するころには流石に皆歩き疲れていたようで、口数も最初に比べるとめっきり減っていた。

「つ、着いたぞ……！」

「こんなに歩いたのは久しぶりねえ……。流石に足が痛くなってきたわ……」

一時間ほど歩いてたどり着いたのはあの時遠目に見えた丘の天辺であり、備え付けられている柵越しに見下ろしてみれば自然公園が一望できる程度の高さがある。

父と母は体力を使い切ったのかベンチに座り込んでいる。なお、弟

と妹は先程まで「疲れて歩けない、おんぶしてえ」などとヒイヒイ言っていたのに、それを忘れたかのようにスマホで丘の上からの風景を撮っていた。

ここにはいくつか机とベンチが置いてあり、疎らではあるが他の家族がそれに腰かけて風景を楽しむなり持ち込んだ弁当を食べたりして平和に過ごしている。だが今回、北条一家が過ごすのはそこではなく、丘の上に生えた大きな樹の下である。持ってきた大きいレジャーシートを広げて、そこで朝に作ったお弁当を皆で食べるのだ。

「用意は出来たよ。たくさん歩いてお腹も減っただろうし、ご飯にしよう」

「おつ、用意してくれたのありがとう。それじゃあちようどいい時間だし、お弁当食べるか！」

ちようど木陰になっていて風が涼しい場所があったので、誰かにとられる前に手早くシートを敷いた衛が声を上げると、歩きすぎて腰が痛くなったのか腰をさすりながら、それでも楽しそうに父が号令を出した。

「やった、弁当だ！ 兄さんの隣はもらったっ！」

「あつ、抜け駆けはずりいぞ姉ちゃん！」

重箱を包んでいる風呂敷を解いていると妹が衛の左を陣取り、負けじと弟が右側を陣取る。それを見て母は「まあまあ、モテモテねお兄ちゃんは」とからかうように笑う。

お弁当のおかずを取り合ったり、ほっぺに付いたご飯粒を取ってあげたり、ご飯の後にお茶を飲んでごちそうさまを言ったりする。

それは仲の良い家族の、少しだけ特別でありふれた日常の一部だった。見ているだけで頬が綻んでしまうような、幸せな光景だった。

「……」

「衛、どうしたんだ？ 何かを我慢してるみたいだが、お腹でも痛いのか？」

「まじか兄さん。俺は何ともなかったんだけどなあ」

幸せな時間はあつという間に過ぎ去って、傾いた太陽が橙色の光を

放つようになったところになると、天辺にいた家族はもう北条一家だけになっていた。さあ帰ろうと後片付けをして出発しようとするのだが、衛だけはその場から動こうとしなかった。

「……ごめん。俺は一緒には帰れない」

「衛？ 何言ってるの、早く帰りましょう。夜になっちゃうわよ」

「そうだよ兄さん、このままじゃ夕ご飯がスーパーの売れ残った微妙な総菜ばかりになっちゃうよ」

心配そうにする父、訝し気な母、呆れたようにため息をつく妹、首をかしげる弟。その四人を前に、衛は正座して俯いたまま膝の上に乗せた手を強く握り締めた。

「……」

本当は最初から気付いていたのだ。それなのに、文字通り夢にまで見たあまりにも幸せな光景が目の前にあつて、ずっと心が暖かくて、いつまでもこのままなら良いのにと感じてしまった。もう少し幻想に浸っていたいと思ってしまった。

父も母も、自分が産まれてきたせいでいなくなった。弟や妹に至ってはそもそも存在しない。自分のせいで生まれてくる事すら出来なかった。こんな都合のいい現実なんてあり得ない。だから、車に乗っている時にはすでに夢だと分かっていたのだ。

ずっと夢に見た家族がいる一日は想像通り幸せだった。きっと自分さえ居なければ、こうして目の前にいる四人は当たり前前の幸せを掴んでいたのだろう。

いつまで経つても俯いたまま動かない衛を心配したのか、妹と弟が駆け寄ってきて顔を覗き込もうとしたが、二人は衛の顔を見る事はできなかった。両腕で二人一緒に抱きしめられたからだ。

「に、兄さん……？」

「えっ、いきなりどうしたんだ？」

「……ごめんな」

急に抱きしめられて驚いており、それでも嫌がるような素振りがない事が声色から伝わってくる。流石に恥ずかしいのか、あたふたしている二人に投げかけられたのは謝罪の言葉だった。

「もし生まれてこれたなら、今日みたいに楽しいことが一杯待ってたはずなのに。俺のせいで、本当にごめんな」

名前の無い弟と妹に、そして名前も知らない父と母に聞こえるようにただ謝った。衛は二人を抱きしめたまま俯いていて顔色は何えな。ただ、普段の感情の籠つていない声が嘘のように少しだけ震えていた。

そんな衛を気遣うような目で見る両親は、やはり想像した通りの優しい人だ。あまりにも理想的で、それ故に現実感がない。きっと本物がいたら恨み言の一つや二つ投げつけてくるだろう。

「本当はずっとこうしていたいけど、もう行かなきゃ。あともう少しで全部終わると思うから、最後までちゃんと頑張るよ」

最後に一度、弟と妹を強く抱きしめてから衛は二人を放して立ち上がった。

この夢は、おそらく試練だ。きっと他の皆も同じように自分が理想とする世界を夢見ているのだろう。苦痛が無く、都合のいい世界という誘惑を振り切つて進めるかを試されている。

「……兄さん、私達と一緒にいてくれないの？」

「ごめんな。やらなくちゃいけない事があるんだ」

「ここにいればずっと幸せなの？ 辛い思いも寂しい思いもしなくて済むの？」

「そうだな。でもこれはただの夢だ」

弟と妹が引き留めようとするが、迷いは無かった。

どんな人でも理想とする世界はある。辛い思いなんてしたくないに決まっている。都合のいい夢があったらそれに縋れば楽にはなれるだろう。

しかし、どれだけ辛いことがあっても時間は待たずに流れていく。幻想に縋つても現実是不変変わらない。だから人間はどれだけ打ちのめされようとも、ただ歯を食いしばって立ち上がり歩いていくしかないのだ。

後ろを振り向いて、丘の天辺に生えている大きな樹に向かって歩いていく。その手にはいつの間にか剣が握られていた。

木陰で休むのはこれでお終いだ。休んだらまた、歩き出さなければいけない。

剣を一閃するといとも簡単に樹は切り倒され、それが引き金になったのか世界が崩れ始めた。

緑の大地が遠くの方から崩落していく。橙と白と藍色の空がガラスが割れるように砕けていく。家族がいる理想の世界が消えていく。「うん、合格だね。苦痛のない理想の世界というのはすごく魅力的だけど、それは誰かに与えてもらうものじゃない。辛くても苦しくても、自分の手で掴み取ってこそ意味のあるものだ。今は無理でもいつかは君に救いが訪れる事を祈っているよ」

割れていく空を見上げていると、ふと後ろから声が出た。

振り返ってみるとすでに母、弟、妹は消え去っていたが父はいまだにそこに存在した。だが、今までの男らしい声ではなく中性的な声だ。まるで他の誰かがそれをスピーカーにして話しているようにも聞こえる。

「……そうか」

一体誰が話しているのか何となく見当はついたが今更訊くことに意味は無い。

短く返して後は黙り込む。やがて世界の全てが崩れ去り、北条の視界は黒く塗りつぶされた。

目が覚めて、起き上がる。それなのに視界は真っ暗なままだ。

手をかざして一言二言唱えるとテニスボールくらいの大きさの光の玉が出現して辺りを薄く照らし出した。ほんのわずかに光属性の魔法適性があるので、戦闘には使えないがこの程度の魔法であれば北条でも使えるのだ。

北条が目覚めたのはドーム状の空間。そこに十個の琥珀色をした棺が設置されている。

立ち上がって周囲を確認してみると、北条はこの琥珀色の棺に入っていたことが伺えた。きつと、他の棺には皆が入れられているのだろう。そしておそらく、同じように都合のいい世界を夢見させられているはずだ。

修学旅行の夜に見回りをする教師のように棺を見て回ると、予想通り他の皆が棺の中で横たわっていた。先程までゴブリンだった三人も元の姿に戻っている。

「……」

あれからどれだけ時間が経ったのかは分からない。北条に出来る事と言えば、皆を信じてひたすら待つことだけだが、その間にもやれる事はある。

ハジメが作った魔法のコンロと鍋を取り出してスープを作り始める。目覚めたらお腹がすいているかもしれないし、もしかしたら匂いにつられて起きるかもしれない。そんな頭の悪い考えからの行動だった。

コトコトと材料を入れてスープを煮込んでいると後ろで動く気配が一つ。

見知った気配に振り向くことなく調理を続けていると、背中にかかる重さと共に金色が視界の端に割り込んできた。

「……ん、おはよう」

「……ああ」

そのまま腕を回してぎゅっと抱きしめる。いつにも増してくつき虫になっっているユエはどのような夢を見たのだろうか。少し気になるがプライベートな内容かもしれないので訊くのは我慢した。

「……夢の中ではマモルは婚約者だった。私とは超ラブラブで国王の座も約束されてた」

我慢したのだが、訊いてもいないのにユエは夢で見た内容を勝手に語りだした。

曰く、その世界ではユエはお姫様、北条は世界を救った英雄であり、二人は将来を約束した間柄だとか。早々に夢であると気付いて何時でも脱出できたのだが、しばらく北条（英雄のすがた）とのイチャラ

ブ生活を楽しんで、適当な所で切り上げて終わらせてきたらしい。

「俺は英雄じゃない」

「……マモルは私の英雄。迷わずにあの暗闇から助け出してくれた」
柔らかく微笑んで甘えるようにぐりぐりと頭を頬に押し付ける。

北条自身は頼まれたから助けただけだというが、あの状況で封印されている何者とも知れない存在を見返りすら求めず血を吐きながら、体に穴を開けながら、助けて守ってくれる人が他にいるだろうか。余裕があるのであればともかく、あの時は北条自身お世辞にも余裕があるとは言えない状況であった。

だから他の誰がどう言おうと、北条衛はユエにとっては自分を救ってくれた世界一の英雄なのだ。それだけは誰であつても否定させない。

「……マモル。私は、マモルが——」「はい、そこまでだよっ!!」——
ちっ」

熱のこもった視線と共にユエが顔の距離を詰めていこうとするが、その前に二人の間に割り込むようにして入ってきた小柄な人影が二人に距離を取らせるようにぐいつと両腕で押しのけた。

「ふうっ、危なかったあ……」

一仕事終えたという風に手の甲で額をぬぐう仕草をするのは先程までゴブリンの姿だった鈴だ。鈴が目覚めたのはつい先ほどだったのだが、起き上がって自分の体が元に戻っていたことを喜んだ瞬間に目に飛び込んできたのがキスをする一秒前のような北条とユエだった。

自分でも驚くほどの速さで移動して二人の間に割り込み、間一髪で間に合ったというのが今の状態だ。良い所を邪魔されたユエは露骨に舌打ちをした。

「ユエユエ……神代魔法をコンプリートするまではこういうのは無しだつて約束したじゃん!」

「……記憶にない。刹那で忘れた」

「ぐぬぬ……絶対覚えてるじゃん、確信犯めえ……!」

詰め寄る鈴に対してユエは目線を逸らして白々しい態度をとる。

実は少し前に、七つ目の迷宮を攻略し終えて帰還の目途がつくまではお互いに手出し無用という盟約（笑）を交わしていたのだ。受験が終わるまでは遊んだりするのを我慢するのと同じでようなものである。

なお、その盟約は一週間もしないうちに崩れ去った模様。

北条に抱き着こうとするユエを鈴がディフェンスしていると、続々と他の仲間達が起き始めた。

三番目に試練をクリアしたのはハジメ。その次にティオ、シア、香織と続き、お互いの試練についてスープで体を温めつつ意見を交わし合っていた。

「ううむ、この迷宮では絆を試されていると思うておったのじゃが……。どうやらそのような単純なものではないようじゃな。此度の試練は、方向性は違えど神山と同じような『誘惑を跳ね除ける意志の強さ』を確認するといったところかのう」

「そうですね。私の場合はお母様がいて、マモルさん達もいて、皆仲良く暮らしている夢でした。……確かに現実には辛い事がいっぱいありますが、それがあつたから皆さんとこうしていられるんです！

だったら私には今を否定する理由なんてありません！ あ、おかわりお願いします！」

「……マモル、私もおかわり」

キメ顔でシアはそう言って、空になったお椀を北条に勢いよく突き出した。確かに夢の中であっても母親に再会できたのは嬉しいのだが、シアはすでに母親の死を受け入れている。夢に逃げるほど心は弱くないのだ。

良い意味での凶太さ。それがシアの真骨頂である。

あはは、と苦笑いするハジメだったが、彼の場合はなんてことない夢だった。

いつも通りの生活を送っているだけで、そこにトータス組が追加になっただけの夢。これと言って自己顕示欲もなく、オタクとしての日常を送っているだけで幸せだったので特別何か変わった事は無い。

むしろ神代魔法をコンプリートして世界を超える術が見つかったら正夢になるんじゃない？ と割と暢気なことを考えている始末である。「……………」このスープ美味しいよね。塩加減も丁度良くて……………」ところで谷口さんはどうしたのさ？」

「ゆ、夢の内容を思い出して…………」。お願い、今は何も言わないで…………！ 冷静に考えなくてもまもるんがあんな事言うわけじゃないじゃん…………」胃に溜まる熱を感じながらちらりと視線を横に向けると、両手で顔を覆った鈴が耳まで真っ赤にして蹲っていた。ユエとの攻防が一段落し、試練の内容を話し合うにつれて鈴の脳内に溢れ出した夢の中の記憶。

内容について言うのであればユエと大差ないレベルだったが、こちらの北条は絶対に言わないような甘ったるい言葉を使っていたという違いがある。

例を挙げるのであれば、「鈴、お前以外の女は考えられない（イケボ）」「世界一強い男になって一生お前を守る（イケボ）」「髪に芋けんぴ、付いていたぞ（イケボ）」などである。それも壁ドンや顎クイツのオプシオン付き。

うがー！ と鈴が記憶を消し去ろうとしていると、やがて幸利と恵理がゆっくりと起き上がる。

どうやらこの二人も試練をクリアしたようだ。残りは光輝だけである。

「……………」あー、うん、そう言えば…………。そっかあ、あの時からかあ…………」恵理は寝起きで頭が上手く働いていないのか、頭をフラフラと前後させながら何やらブツブツと呟いている。心なしか、普段よりも雰囲気が違うし声が低く聞こえる。

対して幸利の方はと言うと、シアを見て、テイオを見て、それから他のメンバーを見て、顔面崩壊を起こした後、棺に頭をぶつけ始めた。「ぬうおおおおお!! ワンチャン現実かと思ったけどやっぱ夢じゃねエかあああ!!」

急に奇行に走り始めた幸利だったが、すぐに気持ちの整理がついたのか北条からスープを受け取ると一気に飲み干した。

「はあはあ、と荒い息を吐いて再びシアを見て、テイオを見て、それから他のメンバーを見て、再び顔面崩壊を起こした後、今度は頭を抱えて鈴と同じように蹲ってしまった。」

「ユキトシさ〜ん、どんな夢を見たんですかあ〜？ 教えてくださいよ〜」

「ほれほれ、言うてみよ。シアと妾の方を見ておったのじゃが、気のせいかのう？ ん？」

「ぜ、絶対に言わねえ！ くっ……、殺せ！」

幸利の行動を見てある程度夢の内容を察した面々。これ幸いと言わんばかりにシアとテイオが殴りたくなるようなニヤつき顔で幸利をツンツンと指で突き始めた。

「……あはは、なんだかんだでいつも通りの空気になってきたね」

「……私が見た理想の世界にはね。ハジメくんがいたんだ」

ハジメが苦笑いをしていると、隣に座っていた香織がポツリと話し始めた。あまり声は大きくないが、不思議とハジメには良く聞こえる。

「僕が？」

「うん。その世界ではハジメくんはすごく強くて、何でもできて、皆から人気があつて、私だけを好きでいてくれたんだ」

目を閉じて、香織は試練の内容を思い浮かべる。そこらのチンピラであればワンパンで追い払えるくらいに強くて、勉強もスポーツもお洒落も出来て、色んな女の子から好意を寄せられていて、それでいて香織だけを愛してくれる。

まさに夢のようだった。いつも妄想している世界がそこにあつた。最初はその状況に喜んだ。自分の都合のいいように受け答えしてくれる大好きな男の子。夢の中のハジメはどんな我儘だって笑顔で受け入れてくれた。

「だけど、違うんだよね。私は中学の時からずっとハジメくんを見てたけど、ハジメくんはそんな人じゃない」

「ちよつと待って。僕と香織さんって中学校は別々だったよね？ 出会ったのって高校が初めてだよね？」

「……？ そうだけど、私はずっとハジメくんを見てたよ？」

「どういう事なの……」

真剣な顔でとんでもない事を言い放った香織に頭を抱えるハジメ。確かにハジメは高校で香織と出会ったが、香織はそれ以前からハジメの事を知っていた。

中学生の時、ハジメは不良に絡まれているおばあさんを助けるために土下座をしたことがあるのだが、香織はその場面をたまたま目撃してハジメに興味を持ったのだ。

その時は声をかけなかったので名前を知ること出来なかったのだが、ハジメが着ていた制服から学校を特定し、さらに探偵さながらの張り込みをすることで個人を特定したという、ハジメが聞いたら顔を引きつらせそうな事を行っていたのだ。控えめに言ってストーリーである。

「優しくて、控えめで、人を気遣えて。オタク趣味で、好きなことに熱中するとちよつと周りが見えなくなることがあつて。でもそういう時は決まつてすごく楽しそうで——」

「っあ、やっぱり夢だったのか……？ そうだ、香織——！」

香織は真つすぐにハジメを見つめながら言葉を続けていく。視界の端っこの方で光輝が目覚めて棺から起き上がるが、全く意に介する様子は無い。

雰囲気から香織が言おうとしている事を察して、光輝が香織に向けている感情を分かっている面々は「あつ」と憐みの目を光輝に向けた。

「私が好きになったハジメくんは、そんな男の子なんだよ？」

「……あ、うん、ありがとう……」

少し恥ずかしそうに、それでも言い淀むことなく香織は言い切った。誤魔化しようがないほどの真つすくな告白だった。今まではそれらしい行動を取っていたが、言葉で伝えてきたのは初めてだ。さしものハジメも顔に熱が集まる。

ハジメは割と学校ではそれなりに人気があるが告白されるのは初めてで、しかもその相手が見ただけなら雫と並んで『二大女神』と称される、極上の美少女である香織である。ちよつとおかしい所があ

るが基本的に性格もいい。

「その、気持ち嬉しいけど。旅が終わるまではそういうのは控えるべきかなって僕は思うんだけど……」

「うん、分かっている。だから、それまでにハジメくんが好きになってもらえるようになるね。……ふふっ、言っちゃった。こうなったら覚悟してね、ハジメくん」

「て、手加減してもらえると嬉しいかな……?」

頬を染めてはにかむ香織と照れくさそうに頬を搔くハジメ。そしてそんな二人を囁し立てる鈴、幸利、シアと優しく見守っているユエ、ティオ。恵理は腰のあたりでガッツポーズを作っていた。

「?????」

「なお、起きたばかりの状態で目を疑いたくなるような光景を目撃してしまった光輝は、情報を処理しきれずそのままフリーズした。」

その後、全員試練達成と言う事で次に進むための魔法陣が現れたのだが、光輝は脳が破壊されて動けなかったのでシアが憐みの目を向けながら引きずって魔法陣に乗せる事になった。

幕間：惑わしの大樹海（後）

なんやかんやで二つ目の試練をクリアした一行。

転移の魔法陣によって三つ目の試練が待ち受けている場所に移動をしたのだが、目に映った光景を前に早くもゲンナリとする者が現れた。

「まーた樹海かよ。マップの使い回しはやめろっつーのに……」

「あ、でもそれらしい目印はあるね。空に霧もかかってないし最悪飛んでいけば大丈夫そうだよ」

ハジメが指をさす方には明らかに他の木々よりも抜きん出ているほどに高い巨木がある。かなり距離はあるようだが、それでもスタート地点からハッキリと見えるほどだ。

「…全員いるな」

「……ん、大丈夫。偽物は居ないはず」

「う、うん、ちゃんと全員本物だよ」

数えてみるとちゃんと十人おり、恵理が魂魄魔法で探ってみても誰かがすり替えられていると言う事は無かった。さすがに同じ手は使ってこないと言う事だろう。

そうと決まれば話は早い。あからさまに怪しいあの巨木に向かって進むのみだ。

「????」

「勇者殿は……回復するには今しばらく時間がかかりそうじゃな」

「天之河くん、上の空だけどどうしちゃったんだろうね」

「カオリンエ……。天之河くんが可哀そうになってきたよ。バグったままだけど、むしろこれはチャンスだっ！ エリリン、お願い！」

「分かった、任せて！」

光輝は未だに現実を受け入れられていなかった。都合のいい理想の世界から脱出できたのだが、それはそれ、これはこれである。『後でちゃんと想いを伝えよう』などとバカ真面目に思っていたのに、目が覚めたら想いを寄せる相手がオタクで有名な南雲ハジメに告白していたのだ。

その結果、光輝はバグった。

ウツキウキの恵理に手を引かれて歩く光輝は、しばらく使い物にならないだろう。

「それにしても静かですねえ。魔物の気配もありませんし、最初の試練の時とは大違いですよ」

北条を先頭にして樹海を進んでいく。今回はどこからでも見える目印があるのでシアの先導は必要がない。ただ、ひたすら真つすぐに進んでいけばいいだけだ。

シアの言う通り、辺りに魔物の気配はなく、それどころか虫の一匹も存在しない。

静寂の中に草木を掻き分ける音が聞こえているだけで、ある種の不気味さすら感じる。

「しかしただ歩くだけの試練とも思えぬな。各々、十分に注意して進むのじゃ」

「あいよ。つっても俺の探知でも何も見つかってねえんだけどな。もう歩くのもめんどいし、いつその事テイオさんに竜化してもらって――あ？」

ぼたり、と雨が一滴落ちてきた。

ハルツイナ大樹海でも雨は降る。だが、今ここに至ってはそれはあり得ない。雨というのは雲があつての現象なので、地下空間と思われるこの場所で雨が降るのは明らかに不自然なのだ。

「雨が降る魔法でもかかつてんのかこの場所。つーか結構降ってきてんぞ！ スコールかよこれ！」

「流石にびしょ濡れは勘弁！ “聖絶”！」

あつという間にバケツをひっくり返したかのように降り注ぐ雨に對して鈴が“聖絶”を発動させて、一行をすっぽり覆うようにして障壁を張った。

「……ただの雨じゃない」

障壁に打ち付けられる雨を見てユエが警戒を強める。障壁の表面を滑り落ちていく液体は、水のように滑らかではなく、いつか見たスライムのようにねばつきがあつた。

それはすなわち、この降り注ぐ謎の粘液が今回の試練に関連している可能性が高いと言う事だ。いつでも魔法を使えるように神経を研ぎ澄ませます。

「…囲まれたか」

ポツリと北条が周囲を見回して呟いた。上空からだけでは無い。地面はおろか、草木からも粘液がじわじわと染み出して来ており、よく見ると乳白色の色をしていた。

幸い障壁が溶かされる様子もないので、メルジーネ海底遺跡の時のような事にはならないだろう。だが、障壁は乳白色で塗りつぶされており、このままでは移動も覚束ない。

地面から染み出してくる粘液のネチヨネチヨ感を楽しんでいると、突然ぐにやりと障壁の内側、足元にある粘液が意志を持ったかのように動き出して覆いかぶさろうとしてきた。

狙いは片手で杖を持ち、もう片方の手で光輝の手を引いている恵理。両手が塞がっている魔法使いは襲いやすと判断したのだろうか。

だが、恵理は杖による接近戦も最低限はこなせる。普段、暇なときに北条やシアにちよつと稽古をつけてもらって暴漢くらいなら容易く抑え込める程度の腕前を身に付けていた。

すぐさま恵理が杖による打撃で迎撃しようとしたのだが、それよりも光の刃が真っ二つにする方が速かった。

「……えっ、光輝くん？」

「おお、復活したんですね天之河さん！」

恵理に迫る粘液塊——スライムを斬り飛ばしたのはバグってフリーズしていたはずの光輝だった。立ち直ったと思われる光輝にシアが喜びの声を上げるが、実際は違った。

「?????」
「……いや、復活しておらぬ。よもや勇者殿、無意識に剣を振っておるのか？」

「無我の境地ってやつか」

再び粘液が蠢いて襲い掛かってくるが、光輝が流麗な剣技で一閃す

る。

テイオの言う通り、光輝は未だにバグったままである。だが、それ故に目の前の敵に対して余計な思考や力みが存在しない、ある種理想的な状態となっていた。

八重樫の剣術道場で身に着けた剣技。トータスに召喚されてからの戦闘経験。体に染みついたそれらを無意識レベルで繰り出す光輝は普通に強かった。むしろ普段が雑念だらけなので、これが本来の実力であると考えると悲しく思えてくる。

片っ端から切り伏せていく光輝だったが、良い事ばかりではなく問題点もあった。それは切ったスライムが飛び散ってしまう事である。一行は障壁内に固まっているので、飛び散ってしまったスライムが降り注ぐ先は自ずと決まっていた。

「ぶべっ!?! ちよつ、こつちに飛ばさないでください!」

「あ、あ、ああつ!! 眼鏡が、眼鏡がああ〜!!」

「?????」

白い粘液が近くにいた者から順にぶっかけられる。しかし光輝は止まらない。出現するスライムをあらかじめ倒し終えるころには一行は男女関係なく白濁にまみれていた。

「……酷い目に遭った」

「うへえ、べとべとだよ。シャワー浴びたい……」

気持ち悪そうな表情をする女性陣と、それから目を背ける男性陣。ぶっかけられた白濁の粘液はそれっぽく見えなくもないので思春期の男子には非常に目に毒だった。

「……はっ! お、俺は一体……? ここはどこだ!?!」

そして今になって光輝が復活するが、彼に向けられたのは女性陣からの恨みがましい視線であった。スライムを倒すという仕事はしたのだが、それはそれ、これはこれである。

白濁液まみれの女性陣に睨まれて光輝は慌てて視線を逸らす。一応、彼も思春期の男子なのだ。いきなり目の前にどうみても事後な姿の良く見知った女性が現れたら混乱するのは当然と言える。

「あー、とにかくだ。これどうするんだ? 結界の外の様子が全く見

えねエんだが」

「取りあえず結界が破られる気配はないからこのまま進んでみる？」

「そうですねえ。一応私の未来視でも命の危機は見えないですし、それもいいんじゃないですか？」

「そ、その恰好は一体……？」とか「何か分からないけどごめん」などともにもよるに言っている光輝を尻目にぐるりと辺りを見回すと、全方向が白かった。

何時までもこのまま立ち往生しているわけにもいかず、かといって進むことも難しい。冬の道民のような悩みである。白濁の海の中に揺蕩う障壁の内部でどうしようかと考えていると、ユエが魔力を陽炎のように揺らめかせた。

「……スライムなら火に弱いはずだから一気に燃やす。『劫火浪』」

「妾も手伝おうぞ！ 『嵐焰風塵』！」

押し寄せる炎の津波と直進する炎の竜巻が白濁の海を焼き尽くしていく。酷い目に遭った腹いせか、いつもより出力多めである。

そのお陰かある程度の分量は焼却できたようで、少しでも視界が開けるが相変わらず雨は降り続けているようで、見る見るうちに再び水位が上がっていく。

「……効果はあるけどきりがない」

「それじゃあ突っ切るしかないのかな？ 形はこんな感じで地面にあるのも押しのけるように……」

球状であった結界が新幹線のような流線形へと変形する。

結界の形状変化。決められた形でしか作ることが出来ない結界を、作ってから変形させる高等技術である。「結界つて出してから形を変えることはできないのか？」というオタク二人の疑問を聞いてやってみたら出来そうだったので、毎日寝る前に練習して出来るようになった。継続は力なり。

ただし、かなり難しいのでこういう場面であればともかく、目まぐるしく状況が移り変わる戦闘ではまだ実用に耐えないレベルではある。

「…進むか」

そうして再び一行は歩き出す。水位が上がればその都度ユエとテイオが焼き払って視界を確保して方角を確認し、おおよそ道程の半分程度を過ぎたところに先頭を歩く北条は右腕を力強く締め付けられる感覚で足を止めた。

「…？ どうした」

そこには腕を組むように、ではなく文字通り体全体を使って腕を抱きしめているユエが居た。心なしか、プルプルと震えて何かを我慢しているようにも見える。

「……っあ、マモルっ……」

はあはあと息を荒げて継りつくユエを怪訝に見ていたが、北条に電流が走る。

そう言えば先程ユエはスープをおかわりしていなかったかと。内股気味になってもじもじしているのも併せて考えればその答えは明白である。

「もしかしてトイレか」

「ちっ、違うっ……、はあっ……、そうじゃないっ……！」

見当違いで失礼な発言にユエが顔を上げて睨む。上気して赤くなっており、目には涙が浮かんでいて今にも零れ落ちそうだ。半開きになった口からは熱い吐息が激しく吐き出されている。

「体が熱くて……っ、すぐくマモルが欲しいっ、……はあっ、んんっ」
すりすりと北条の腕に体を擦り付ける。腕から伝わってくる体温は普段よりも明らかに高く、尋常な様子ではなかった。

体調不良であれば治療術が使える香織に頼るのが正解だろうと思いついて後ろを振り返ると、程度はあれどほぼ全員がユエと同じような体調の異常を感じていた。

「リンリン、大丈夫か」

「だ、大丈夫じゃ、ないっ……！ あううっ……！」

鈴はかなり重症なようで、蹲って自分の体を抱きしめていた。

ユエと同じように顔は真っ赤になっており、目の端からは涙がぼろぼろと落ちて地面に染みを作っている。歯を食いしばって体調の異変に耐えようとしているが、如何ともしがたいのか時々ビクビクと痙

擧をしていた。

集中力が切れてしまったのか、障壁が解けそうになっていたので北条がタリスマンを取り出して代わりに障壁を張る。ちよつと人には見せてはいけないような状態になっている鈴に、宝物庫から取り出した普段使っている桜色の上着を被せてやった。完全な親切心からだったのだが、むしろ今回はそれが悪手となってしまった。

「あつ、待ってまもるんつ、これつ、まずいからつ、絶対まず——
—あつ」

ふわり、と全身を包み込む好きな男の匂い。それを思いつきり吸い込んでしまった鈴は、ぶるりと一度大きく全身を震わせた後、動かなくなった。

「……リンリン？」

なお、止めを刺した北条は訳が分からないと言った風に動かなくなった鈴を見て首をかしげるばかりであった。

「谷口がやられた！ くつそ……、薄い本みてエな試練しやがつて……！ 男がそんな展開になって誰が得をするんだよつ……！」

げしげしと幸利が杖に頭を叩きつけながら悪態を吐く。白濁のスライム、体のほてり、奥底から湧いてくる熱。これだけ材料が揃えば答えなど自ずと出てくるというものだ。すなわち、今もなお降り注ぐ雨には催淫作用とか、おそらくそういうのがある。

とつさに闇魔術を自身にかけて感情、欲望をデフォルトの状態に戻したが、油断すれば再び熱が広がっていくだろう。

そして当の本人は気付いていないが、北条はこのメンバーの中で唯一毒の類を無効化するだけの能力があったので特に体調に異変を感じる事もなく平然としていた。

「はあつ、はあつ、香織——」

「ハジメくん！ 大丈夫、痛くしないから！ 天井のシミを数えてる間に終わらせるから！」

「はつ、まつ、待って香織さん！ さつ、流石にマズいよこの状況！

はあつ、はあつ……！」

ふらふらと光輝が香織に手を伸ばすが、ハジメに突進していった香

織に撥ね飛ばされて地面に衝突し、その衝撃で一度痙攣してそのまま動かなくなつた。

ハジメはある程度影響を受けているが、防御系のアーティファクトをいくつか常時装備しているおかげでそこまで酷くはなく、かなりムラムラする程度にまで抑えられており、十分に耐えられる程度で済んでいた。

目の据わつた香織に押し倒されそうになってハジメは快樂とかよりも身の危機を感じたので、急いで北条を盾にするように移動する。それを追いかけるようにして香織も移動するが、ハジメも捕まらないように間に北条を挟むように動き回る。

そのままハジメと香織は北条を中心としてグルグルと回り始めてしまった。

「つくうつ……なるほど、ああやつて体を動かせば……てりやりやりやりやあああつ!!」

それを見てシアはバルムンクの素振りを始めた。男子中学生が急に筋トレを始めて体の高ぶりを発散させようとするアレである。それでいいのか、と思わなくもないが本人はそれである程度緩和できているようなので放っておくことにして、素振りの範囲内に間違つても巻き込まれないように一歩後ろに下がつた。

「なる、ほどのうつ……! これはそういう試練というわけじゃなつ」「おお、ティオさんは大丈夫そうだな。で、そういう試練つてのは?」

隣から聞こえてきた声に幸利がそちらを見ると、ほんのりと顔を赤くして心なしかいつもよりも着物をはだけたティオが居て咄嗟に目を逸らした。白濁の粘液が豊満な胸を滑り落ちていく様は闇魔法で感情を平坦にしている幸利にも刺激が強い。

なお、ティオは余裕そうに振舞っているが手に持った扇子を強く握りしめている。気を抜けば呑まれるという点では幸利と同じであった。さすがにこの状況ではティオと言えども魔法を十分に使える程の集中力を確保するのは難しい。

「うむ。快樂に耐えることは出来るか。よしんば耐えられなかつたとしてもその後いつも通りに接することが出来るか。肉体的な誘惑に

打ち勝つ試練と仲間との絆を試す試練の二段構えといったところであろうな」

「……なあ、すでに二名ほど脱落者と思わしき奴が居るんだが」

ちらりと視線を動かすと地面に横たわったままの光輝と蹲ったままの姿勢で昇天している鈴の姿があった。快楽に耐えることがクリアの条件であるならばまずこの二名は助からない。

ハジメ、香織、シアはギャグ時空に突入しているので大丈夫だろう。まともに試練に耐えているのはメンバーの内の半数にも満たないという壊滅的な状態であった。

「……いや、大丈夫じゃろう、うむ。きつと、おそらく、たぶん、もしかすると……クリア出来ておるとよいな、うむ。それにしても体が熱いのう……幸利よ、お主は平気そうじゃな」

「っ！ あ、ああ、俺は闇魔術で何とか……。中村の方もそれで凌いでるみたいだな。っ！か何やってんだアイツ」

熱がこもっているのか、テイオがさらに着物をはだける。もはや肩は丸出しになっており、何かの拍子でずり落ちれば胸がまろび出そうだ。裾からは白い太ももがチラチラと見えており、幸利は少しだけ前屈みになりかけたが何とか持ち直す。

恵理の方を見ると比較的落ち着いているようで、顔色も若干赤くなっている以外はさして影響はないようだ。具体的には、横たわっている光輝に膝枕をしてさらにアへらせる作業に勤しむくらいの余裕があった。

「それはよいな。のう、幸利よ、それを我ら全員にかける事はできぬか？ 命の危機は無いとはいえ、このままでは色々と後に引きずる事になつてしまいそうじゃ」

「今使つてるのじゃねエが……この状況にピッタリな魔法があるぜ。とは言えちよつと時間がかかるし集中しなきゃいけねエ……。中村ア、お前が使つてるやつ、俺と同じの难道？ ついでに俺にもかけれるか？」

「ふふふ……えいつ、えいつ。ああ、うん、もちろんかけれるよ。……はい」

「おうサンキュー。そんじゃあ、ちよつと待ってるよ」
「せいっ！ せいっ！ とりやあつ！ せりやあつ！」

シアの素振りで生まれる風を感じながら幸利は精神を集中させる。平時ならともかく、この状況で魔法を維持しながらもう片方の魔法の詠唱を行う事は不可能である。だがそれは光輝の頬を突いている恵理が肩代わりしてくれた。

「……ユエ、もう少し我慢できるか」

「ふーっ、ふーっ、……んっ、大丈夫……マモルがセツ〇スしてくれば耐えられるっ」

「はあっ、はあっ、ハジメくん！ 先つちよだけ！ 先つちよだけでいいからー！」

「止まったら死ぬ止まったら死ぬ止まったら死ぬ！」

「二百五十六！ 二百五十七！ 二百五十八！」

息を荒げながら北条の腕に抱き着いて身体を擦り付けるユエと、二人のすぐ横で動かなくなったが時々思い出したかのように痙攣する鈴。さらにその三人周りをグルグルとフェイントを入れつつ回るハジメと香織。少し離れた場所でひたすら素振りを続けるシア。恵理に突かれてアへっている光輝。

「だいぶ頭が茹っっておるようじゃな……はあ」

「準備完了つと。おーい、今から闇魔法使うから抵抗すんなよー！」

混沌とした状況にテイオがため息をつく。媚薬効果のせいかな、やらと艶っぽい吐息だった。

完成した幸利の魔法が発動する。高く掲げた杖から光の玉が人数分飛び出してそれぞれの頭上に浮かび上がり、光の粒子を雪のように降らせた。

「『賢者ノ時』」

「……おお、これは」

光の粒子が降りかかるにつれて熱が冷めていく。体の奥底から煮えたぎっていた欲望が、潮が引くかのように去っていく。十秒も経てばすっかり元通りの平常心に戻り、それどころかむしろ悟りを開いたかのような心持ちになってくる。

きつと今なら目の前でどのような痴態が繰り広げられようと何も感じることもなく、感情のない瞳で眺めることが出来るだろう。それはまさに賢者タイム。

「……ふう。ハジメくん、ごめんね。ちよつとだけ変になってたみたい」

「……ふう。いいよそんなの。ところで清水くん、魔法の名前ってこれ……」

「……ふう。南雲の想像したとおりだ。ピッタリだろ？」

「……ふう。ん……、落ち着いた」

無の表情になった面々は普段の落ち着きを取り戻す。ハジメと香織は追いかけてこを止め、ユエは北条の腕を開放する。シアは素振りを止めて「何で私はこんなことしてたんでしょうか……」と今更自分の行為に疑問を抱いた。

なお、昇天した鈴と光輝は未だに動かないままだ。おそらくこの試練を抜けるまでは使い物にならないだろう。何はともあれ幸利の魔法で媚薬効果を中和したので、後は積もり積もった白濁の海を焼き払いながら進むだけだ。

「蒼龍」

チベットスナギツネのような表情でユエが最上級複合魔法を行使する。

蒼い炎でできた巨大な龍が外側に広がる渦巻の軌道を描きながら辺りの白濁を焼失させる。あまりもの高温に巻き込まれた草木は一瞬で燃え尽きて黒い粉になってしまった。

「獄雨」

チベットスナギツネのような表情でティオが上級魔法を行使する。

炎の雨が降り注いで広範囲の白濁を焼き尽くしていく。

「炎天」

「讓天」

チベットスナギツネのような表情で恵理が上級魔法を行使し、チベットスナギツネのような表情で香織がそれを補助する。

香織の魔力を上乘せして強化された小型の太陽のごとき炎が白濁

と草木を焼いていく。

降り注いでいた雨も限りがあるようで、最初は土砂降りだったが今は小雨程度にまで落ち着いていた。その後もひたすら無心で周囲を焼いていき、およそ十分ほど経つと雨が降りやんで白濁も残らずに焼き尽くされた。

「……終わったね。色んな意味で」

後に残ったのはぺんぺん草も生えないほどに焼き尽くされた大地のみ。樹海だった場所は荒野へと姿を変えてしまっていた。不思議と遠目に見える大木は焼けた様子がないので、あれがゴール地点だという予測は当たっていたようだ。

ひとまず次に進む前に『後片付け』をしなければならぬ。約二名を見てハジメは深いため息をつき、いそいそと錬成で仮設の更衣室を作り始めた。

「……コロシテ……コロシテ……」

服が汚れてしまったので替えの服に着替えて合流したのだが、鈴と光輝は致命的なダメージを負っていた。鈴は膝を抱えて、光輝は四つん這いになってどんよりした空気を垂れ流している。闇魔法を使っていないのに二人の周囲には暗い気が漂っていた。

光輝はともかく、鈴は自身の痴態をガツツリと北条に見られている。よりにもよって一番見られたくない相手にだ。

チラチラと北条の方を見て、目が合いそうになると急いで目を逸らす。ひたすらにそれを繰り返していた。耳まで真っ赤になっており、今にも泣きだしそうである。

「うう、もうお嫁に行けない……」

「……大丈夫。私もほぼイキかけたから」

「何の慰めにもなっていないよユエユエ……でもありがとう」

親指を立てて恥ずかしがる様子もなく言い切るユエに少しだけ救

われたような気がした。そのままユエは流れるように鈴が肩に羽織っていた北条の上着を回収しようとして、鈴はひらりと身をおかわした。

「ユエユエ、この手は何かな？　これはまもるんが鈴にくれたものだよ？」

「俺はあげてない」

「……スズはさっきので堪能したはず。だから次は私が使う」

じりじりとユエが今にも飛び掛かりそうな体勢で距離を詰めれば、鈴がその分だけ距離を取る。

「もうユエユエは今着てるのもらってるじゃん！　鈴だってまもるんの上着欲しいからこれは絶対に渡さないよっ！」

「俺はあげてない」

今現在ユエが着ているのはフードが付いた白いコート。元々は北条が着ていたもので、オルクス大迷宮の封印部屋でもらってから飽きもせずに使っている一品だ。北条がある程度仕立て直したがサイズの差はいかんともしがたく、少しブカブカだがユエはむしろそれを気に入っていた。

ブルツクの町で再会した日の夜、ユエが自慢げに見せびらかしてきた時から羨ましいと思っていた。それがやっとな手に入ったのだ（入ってない）。絶対に渡さない！　という強い意志で桜色の上着を抱きしめる。

先程までのしおらしい雰囲気はどこに吹き飛んだのか、そのまま北条の上着を巡って争奪戦が繰り広げられた。もしかしたらこれがユエなりの気の遣い方なのかもしれない。

勝手に上着を持ち去られて北条はしばらく固まっていたが、上着一つで元気になるならそれでいいかと結論付けてそのままにしておく事にした。

「いやあ、大変な試練でしたね。私はいい汗をかいただけでしたが」

「うむ、まさかこのような手で来ようとは……この試練を考えた者の顔が見てみたいのう」

「お、おう。そうだな……」

しっかりと服装を整えたテイオを見て幸利はちよつと残念な気持ちになった。きつとこれからふとした拍子に先程のはだけたテイオの姿が脳裏に蘇るのだろう。脳内に保存した映像を再生魔法で見える形に投影出来ないか真剣に考える必要があるかもしれない。

「ぐえっ！ な、何しやがるんだ！」

「鼻の下が伸びておったぞ。大方、助平な事でも考えておったのじやろう？」

「ユキトシさん……最低のスケベ野郎ですう」

「何で!? 俺、ここでのMVPなのに扱いがひどくねエか!？」

そんな考えを見透かされたのか、額を折りたたんだ扇子の先で突かれた。この三人に関しては幸利がちよつと得をしたくらいで問題なさそうだ。

「ハジメくん、本つつつ当にごめんさい！」

「あはは、いいよいよ。結果的には何ともなかったわけだし」

「ありがとう……。この償いはいつか、ちゃんと身体でするから……えへへ」

「あつ、それは結構です」

香織はハジメに謝り倒していたが、そこまでダメージを負っていないようだ。ついでとばかりに自分を押し売りするのを忘れていないあたり、むしろピンチをチャンスに変える強かさがあるとも言える。「……俺、思うんだ。俺は勇者なはずなのに扱いが粗末すぎるんじゃないかって。今のところこの大迷宮でやった事って神威を一回使っただけだし。勇者の姿なのか？ これが……」

「だ、大丈夫！ さつきちゃんと凄い剣術で敵を倒してたから！ 光輝くん、すごくカッコ良かったよ！」

「ああ、ありがとう恵理。恵理は優しいんだな……。でも剣を振った記憶は全く無いんだ……」

どんよりとしている光輝は恵理が褒め殺しで回復を図っていた。しかし、光輝には先程の八重樫道場の師範が感心しそうな流麗な剣術の記憶は一切ない。

光輝の認識では気付いたら白濁まみれの女性陣が居て、急に体が熱

くなつて衝動が抑えられなくなり、香織に撥ね飛ばされてブラックア
ウトしただけだ。散々である。非戦闘職でステータスが圧倒的に格
下のハジメが問題なく最後まで耐えれたという事実がさらに気分を
落ち込ませていた。

「……そろそろ行くか」

「！ あ、ああそうだな！ 今回はみつともない所を見せたけど次は
絶対に乗り越えてみせる！」

だが良くも悪くも切り替えの早い光輝である。自分の痴態は刹那
で忘れることが出来る。

北条の言葉に立ち上がった光輝は決意の炎を目に灯した。先程ま
でアヘっていた男と同一人物とは思えないほどのキリつとした顔で
あった。

幕間：惑わしの大樹海（後②）

三つ目の試練を終えて、巨木の中にあつた魔法陣で転移をした一行。

もうそろそろゴール地点だと予想をしていたのだが、どうやらそうはいかないらしい。

転移した洞窟を抜けた先にあつたのは広い通路であつた。

ただし、通路と言つても土や石でできたものではなく、硬い枝の上であつた。十人が横並びになつても余裕があるほどに太い枝であり、それがさらに幾本も絡み合つて広大な空中回廊を築いている。

上を見てみると、そこには青空は無く石か土かですでた天井があり、ここが今までと同じように地下にある空間であると推測できた。

「……まだ終わりじゃないんだね」

「そうみたいですわねえ。それよりも後ろのあれ、もしかして大樹ですか？」

辺りを警戒していたシアが指さす先には規格外と言つても良いほどに巨大な木の幹があつた。そうやら現在立っている枝はそこから伸びているようだ。

「あつ、本当だ！ でもここつて地下だよな？」

「そ、そうだと思う。だったら本当はもつと地下深くに根つこがあるって事になるけど……」

争奪戦でユエから守り切つた桜色の上着を揺らしながら鈴が首を傾げ、恵理が頷いて幹の下の方を見ようとす。かなりの高さがあるのか、下の果ては見えない。

「となるとハルツイナ樹海で見たのは地上に突き出たほんの一部分だったというわけじゃな。いやはや、全高がどれだけあるのかもはや想像すらつかぬな」

「んっ、世界には不思議がいっぱい」

この中で長く生きているテイオですらもこのような大樹は見たことがない。ユエも長生きだが三百年封印されていたので実質的には二十三歳と言える。愛子（25）よりも年下である。

「それにしても下が見えねえな。……いや、先に進むしかねえんだけど一応下に何かあるのか見ときたくねエか？」

「確かに……方が一のことを考えるとそうかもしれない。でも飛び降りて確認するわけにもいかないし、そんな下の様子が確認できる都合のいい道具なんてあるわけが……」

「あるんだよなあ、それが。ほれ」

「それって……もしかしてドローンか？ よく無事だったな」

「……ああ、まアな」

幸利が取り出したのはいつぞやの王宮で見せたドローン。

あの時はティオに野望を阻まれてしまい、そのままシアのバルムンクで破壊されそうになったが、拝み倒してなんとか返してもらったことが出来た。

なお、その代償として王都のスイーツ店巡りをさせられて財布に甚大なダメージを受ける事になった模様。

ドローンの効果は地球にある物とさして変わらないが、あれから少しだけ改良を加えており、スクリーンがあればプロジェクターのように映像を映し出して、ドローンで撮影したものをリアルタイムで見ることが出来るようになっていた。

「あつ、ユツキーが覗きに使おうとしてたやつだ！」

「幸利が覗きに使おうとしていたやつじゃな」

「うん、清水くんが覗きに使おうとしてたやつだね」

「ユキトシさんが覗きに使おうとしてたやつですう」

「マモルに覗かれたかった」

「むしろハジメくんを覗きたかった」

「う、うるせえ！ そろって覗き覗き言うな！ あと最後の二人は何がおかしいぞー！」

音もたてず、空間魔法によって姿さえ見えなくなったドローンが枝の下へと降りていく。

スクリーンに映し出される映像はしばらく真つ暗なままであったが、一分ほど経つと底にあるものの全貌が見えてきた。

「「ピツニ！」」

「……………ツッ!!」

ガサゴソと動き回る黒い塊。いや、小さな黒いものが山のように重なっている結果塊のようになっていくだけだ。それを見てしまったメンバー……………主に女性陣が顔を引きつらせる。もちろん男性陣も一人を除いて表情が歪んだ。

「……………ゴキちゃんか」

「言わないでまもるん! あ、あんなに、いつ、いつぱつ、いいいつ、一杯つ……………!」

「……………無理無理無理っ」

鈴とユエが顔を青ざめて北条のコートの内側に避難した。わさわさと地下空間に蠢くゴキブリは数々の試練を潜り抜けてきた者でも精神的にキツいらしい。

他の面々も同じようなものだ。香織はハジメの腕がうつ血しそうなほどに強く抱きしめているし、恵理は足が笑っていて光輝に縋りついている。

シアは神速でバルムンクを取り出し、テイオは「何と言う事じゃ……………何と言う事じゃ……………」と慄いていた。口元を隠している扇子がカタカタと震えているし、今にも吐きそうな表情だ。

「な、なあ。これ、足を滑らせたらあの中に落ちてくんだよ……………」

「や、やめてよ光輝くん! あそこに落ちるくらいなら死んだほうがマシだよっ!」

ぼそりと呟いた光輝の言葉に恵理が珍しく悲鳴のような声を上げた。あのゴキブリの中に落ちていくなど考えただけで気が遠くなりそうだった。

とにかくこれ以上映像を見るのは精神的にまずいのでドローンに戻して、ゴキブリに気付かれないうちに進んでいくことにした。皆が皆、足音と気配を出来る限り消して暗殺者のような足取りで枝の上を進んでいく。

「いいか、俺達は風だ。空気だ。今ここに居ないんだ」

「自然と一体となり気配を溶け込ませるのじゃ。そう、妾自身が大樹となるのじゃ……………」

このままゴール地点まで何事も無ければと心から思っていたが、やはり試練なのでそう簡単にはいかないようだ。しばらく進んで足場となる枝から他の枝へと飛び移ったすぐ後に、下から巨大な気配と羽音が迫ってきた。

「やっぱり気付かれたあああつ！」

「ひいひいっ!! 『聖絶』 つ!! 『聖絶』 うううう!!」

「……焼き払うっ！」

「こうなりやヤケクソですよ！ かかって来いですよ！」

下から巨大な黒い津波が襲いかかってきた。それは数え切れないほどの、おそらくは一万匹を超えるゴキブリであった。トータスにゴキブリが存在するかは分からないが、認識としてはゴキブリなのである。

半狂乱となった鈴が全力で結界を張り、その他が迎撃をする。

「でやあああつ!!」

シアが勢いよくバルムンクを振るうと、風の刃が乱れ飛ぶ。生成魔法によって付与された能力の一つだ。それによってゴキブリは切り刻まれ、体液をまき散らしながら絶命した。

「『蒼龍』……っ、キリがない」

「『閃熱』！ ここでは場所が悪いのうっ！ どこか広い足場があればいいのじゃが！」

蒼い炎の龍が黒い波に突っ込んでいき、さらに追従するようにして放たれた白い熱線が斜線上とその周囲にあるゴキブリを灰にしている。

だがゴキブリの数は圧倒的で、焼いても焼いても数が減る様子がない。まさかこのゴキブリを全滅させろという試練ではあるまいし、きつと他にクリアの条件があるはず。

となると強引に進んでいくしかないのだが、そのためには今もバシバシと結界にぶつかり群がり続けるゴキブリをどうにかしなければならぬ。

「……前に広い足場があった。そこまで行ければ……」

「もう無理……吐きそう……」

「頑張つて鈴っ！ 命が懸かつてるから！」

「そ、そうだよ鈴ちゃん！ 絶対に結界は解かないでね!? もし壁が無くなったら私達死んじゃうよ！」

火炎放射器を構えた北条が前を見るが、そこには這い回るゴキブリの腹しかない。だが、確かに見たのだ。この先、いくつかの枝を飛び越えればかなり広い足場がある。そこであれば滑落の危険もないだろう。

ただし、頼みの綱である鈴は顔を真っ青にしており今にも気を失つてしまいそうで、恵理と香織が必死に励ましている状態だ。

「谷口さんは動けなさそうだね。かなりマズい……あつそうだ。衛、ちよつと耳を貸して。僕に良い考えがあるから」

「……？ 分かった」

何かを思いついたのか、北条や幸利と一緒に火炎放射器で結界に張り付くゴキブリを焼いていたハジメが北条に耳打ちをする。ハジメが伝えた内容はシンプルであったが有効であった。なるほど、と頷いて北条は火炎放射器を宝物庫にしまう。

「うう……もう限界だよ……」

「リンリン、耳を塞いで目を瞑り結界だけに意識しろ」

「ふえ……？ わかった……わきやつ!？」

言われた通りに鈴が耳を塞いで目を閉じる。それを確認した北条はひよいと鈴を横抱きにした。これならば何かを見る必要も見く必要もなく、移動も北条が行えばよい。多少揺れはあるだろうが、無音無明の状態で他の事を考えずに結界の維持に専念できるだろう。

メルジーネ海底遺跡以来、二度目のお姫様抱っこである。嬉しいやら恥ずかしいやらハジメくんナイスウやら色々と言いたいことはあったが現在は試練中なので鈴は黙って結界に意識を集中させることにした。

「……私ももう無理……マモルのお姫様抱っこがあればもっと魔法を使えるのに……」

「ユエさんも限界なんですか？ それじゃあ私が運びますね！」

「……ウグッ」

お姫様抱っこされている鈴を見てユエがわざとらしく立ち眩みをしたようなモーションをして北条を露骨にチラチラと見やる。それを見たシアはユエを横抱きにした。完全に善意からの行動だったが、それによりユエの目論見は粉微塵に砕け散ってしまった。

その際にユエに自身が持つていないシアの大きくて柔らかいものが当たって、格差社会を目の当たりにしたことにより地味に精神的ダメージを受け、小さく呻き声をあげた。

「キマシタワー」

「ここにキマシタワーを建てよう」

「何を言うとするのじゃお主等……遊んでおる場合ではなかるうに。ほれ、早う往くぞ！」

「全く、ティオさんの言う通りだ！ 二人とも火炎放射器を持つてるんだから仕事をしてくれ！ “天翔閃” ツ！」

不思議な事を言うハジメと幸利を呆れたような目で見てからティオは“劫火浪”を放ち、光輝が“天翔閃”を放つ。津波のごとく押し寄せた炎がゴキブリを焼き払い、さらに光の衝撃波が前方に道を作り出した。再生魔法のおかげなのか、この大樹は焼けたら削られたりしなくてもすぐに元に戻るので炎魔法を使っても安心である。

全力で枝の通路を駆け抜け、いくつか枝を飛び移り、やがて広い足場にたどり着く。幾本もの枝が連なって出来ている足場であり、まるで空中に浮いている巨大な筏のようだ。

「よし、足場確保！ 滑落の危険性は無し！ 谷口の結界も乱れ無し！」

「ふふふ……安全な場所から一方的に虫駆除してやりますう……！」

「いきなり元気になったね清水くんとシアさん」

「あ、あはは……」

安全圏から石を投げるのは人間が最も楽しく思う事の一つである。イキリ黒ローブ、およびユエを降ろしてイキリ兎と化した二人が杖と大剣を構えるが、それよりもゴキブリが動く方が速かった。波が引くように結界から撤退していく。

逃げたのか、と思っているとゴキブリがワサワサと統率された動き

を見せて空中に円陣を組むようにして連なつた。それはまさにゴキブリで描かれた黒い円。さらにその円の内側や外側にも紋様を描くようにして連結する。

「……まさか魔法陣を作ってる？」

「リンリン、降ろすぞ」

「え？ うん、うん」

ゴキブリが連結して魔法陣を作るという意味不明な光景であった。北条が鈴を降ろして、どの様な攻撃が来ても対応できるようにいつも通り前が出る。

やがて魔法陣が光を放ち、光が弾けるとそこには巨大なゴキブリが出現していた。

とは言つても鋭い鎌のような爪や針のような尻尾が付いているので、昆虫のキメラと言つた方が正しいかもしれない。

「ギチチチチッ!!」

体格に見合つた巨大な虫の羽を広げて威嚇の声を上げる。

あからさまなボスモンスターの登場である。おそらく、これがこの試練での倒すべき相手なのだろう。と言うか最初からこのモンスターを登場させておけば良かったのにゴキブリを大量に用意して嫌がらせをする必要はあつたのだろうか？

この大迷宮を作つたというリューティリス・ハルツィナ。解放者と言ふことはミレディの同志ということ。圧倒的な説得力であつた。

「どうやらアレがここのボスみたいだね」

「そのようじゃな。分かりやすくして良いではないか」

「ああ。あれを倒せば——」

ぱつと見、今のメンバーで苦戦するような相手には思えなかつた。とは言つても大迷宮にわざわざ用意されていたモンスターである。当然、素直にクリアさせてくれるようなものではない。

各々が戦闘態勢に入った瞬間の事である。現在の足場の下側からの強大な魔力反応が発生した。紫のような、赤いような光を伴うそれは、足場の上にいる者にもハッキリと感じ取れるくらい程に強いものだ。

北条達からは見えないが、彼らの下ではコツソリと、ドサクサに紛れてゴキブリが魔法陣を形作っており魔法の発動の準備を進めていたのである。

「……マモル、下っ！」

「分かっている」

魔法が完成して魔力が爆ぜ、風が吹き抜けるようにして赤紫色の魔力が北条達を襲った。

間一髪で盾から使い慣れた魔力壁を鈴の結界を覆うようにして展開し、二重の結界とする。

物理的な攻撃に強い鈴の結界と、魔力的に強い北条の結界。これであれば容易く突破されるような事は無いだろう。

「……！」

「ぬおおっ!?! 何の光い!?!」

だが下から足場をすり抜けてきた魔力の波は抵抗もなく二重の結界をすり抜けて視界を塗りつぶした。

物理的な破壊力は無いようで、前が見えない以外には特に痛みなどは無いようだ。

数秒もすれば効果不明の魔法は収まったようで、特に体調に異変も感じる事もなく視界も回復する。まさかただの目つぶしだったのだろうかと北条が思い、皆が無事かどうか確かめるために後ろを振り返る。

「……気持ち悪いからこっち見ないで。殺されたいの?」

たまたま目が合ったユエから飛んできたのは普段からは考えられないような冷たい言葉だった。眉をひそめて、まるで汚物を見るような目で北条を睨んでいて、今にも魔法を放ってきそうな剣呑な雰囲気すらある。

「……」

「無理」

そっと視線を外して鈴を見ると、こちらも同じようなものであった。こちらは目を合わせようとすらしらない。嫌悪感丸出しの表情で一言だけ呟いてそそくさと北条から距離を取った。

明らかに異常な事態である。というのも、北条自身も二人を見ていたくないほどの嫌悪感を感じているからだ。それは例えるならば台所のしつこい油汚れを前にした時のような、早く消えてなくなってしまうという感覚。

しかし、それはあり得ない感情である。確かに自分が二人に嫌われることはあるかもしれないから、二人の態度には納得がいく。だが、たとえ何をされたとしても自分が二人を嫌う事は無いはずだ。

不可解な感覚を抱きつつ、他の面々を見てみる。

「ちつ、何だつてんだ今のは……」

「ええ、ええ。本当ですよ。お得意の闇魔術があるんですからとつとと虫くらい支配して見せてくださいよお。あなた、何のためにここにいると思ってるんですか？」

「ああ？　何で俺がそんな事しなきゃいけないんだよ」

「いや、だって全体的に黒っぽくてゴキブリみたいですし。せつかくだからこの際ゴキブリの王様にでもなってみたらどうですか？」

「ぶち殺されてエのかクソゴリラが……！　頭に行く栄養が全部無駄にデカイ胸に吸い取られてんじゃねエのか……！」

「ぬうつ……この感情は……。一先ず落ち着くのじゃ二人とも。一応とは言え仮にも仲間なのじゃから内輪揉めはいかんぞ。今はこの試練を突破することだけを考えるのじゃ。妾の見立てではこの試練は――」

「うるせエ！　クソババアは引っ込んでろ！」

「自称十七歳は自分の年齢を堂々と言えるようになってから出直せですう」

「くつ、お、お主等……！　言わせておけば調子に乗りおつて……！」
全然駄目だった。ぎゃあぎゃあ騒ぐ三人は遠慮なしに大罵倒祭を繰り広げていた。

ハジメは悪態を吐く事こそ無かったものの、明らかかな作り笑顔を浮かべて距離を取り、香織や恵理もハジメと同じようなものだった。むしろ二人に関しては笑顔の下に殺意を隠していそうな気配すら感じる。

「これは一体どういう事なんだ……？ 取りあえず南雲は俺の後ろに隠れてくれ。白崎が今にも南雲に襲い掛かりそうな凶悪な顔をしてる。何かされそうになったら絶対に守ってみせる」

「えっ、ああ、うん」

「うーん……天之河くんならともかく、南雲くんが視界に入ると殺したくなっちゃうから私としても天之河くんが間に入ってくれるのは有難いかなって」

「南雲を殺すだって？ そんなふざけた事、俺がさせると思ってるのか？」

「いっその事天之河くんが白崎さんに殺られてくれればいいのでは……？ 色々手間が省けるし」

ささつと光輝がハジメと香織の間に入り、聖剣を抜き放って香織を睨みつける。睨まれた香織はと言うと、にっこりと笑顔のまま穏やかではない発言をした。そしてそれを眺めていた恵理がボソツと黒い事を呟く。

突如陥った仲間割れのような状態。

だが状況は待つてはくれない。ゴキブリキング、略してゴキングが鋭い爪が付いた前足を振り抜くとその軌道上に赤黒い光弾がいくつも出現して北条達に襲い掛かった。

そこそこの速さで飛んできた光弾は鈴の維持していた結界を容易く突き破り、そのまま北条に叩き落された。弾き飛ばされた光弾はそのまま足場となっている枝に当たり、当たった部分を腐食させた。

結界が消失したのを好機と見たか、ゴキングが音速に迫る速度で突進を仕掛けるが、北条がそれを正面から迎え撃つ。鉄すらも切り裂くであろう爪を振りかざしての一撃。シンプルではあるが速度、威力共に非常に強力だ。

「ギッ!」

瞬きにも満たない交錯の後、吹き飛ばされたのはゴキングの方だった。爪を完璧に受け流して出来た隙に盾での打撃を打ち込む、ただそれだけの事をしただけだ。一連の動作は淀みなく、相手からすると『攻撃したのに手応えがなく、気が付けば反撃されていた』としか感じ

られない程に極まっていた。

吹き飛んだゴキングを確認して、鈴がすぐに結界を張り直す。

当然、北条は結界の外だ。わざわざ入れてあげる必要もないし、自身の領域内に入れるのは嫌だった。

今の反撃で足が何本か折れてしまっていたゴキングだが、損傷個所にゴキブリが集まると、次の瞬間には折れた足が元通りになっていた。周囲のゴキブリを消費することで傷を治せるようだ。

ゴキングの両隣に赤黒い魔法陣が浮かび、そこから黒い煙のようなものが湧き出てくる。その効果は分からないが、先程の光弾のように触れたものを腐食させる可能性がある。北条自身はそう言ったものに耐性があるが他の面々はそうはいかないので注意しなければならぬ。

煙を纏ったゴキングが再び襲い掛かってくる。

それを先程と同じように迎え撃とうとして、咄嗟に身体を捻った。

「ギチッ!？」

背後から放たれた炎の槍が北条の脇を掠めてゴキングに直撃して、体勢を崩したゴキングは突っ込んできた勢いをそのままに足場をズザーと滑っていった。おそらく回避しなかったらそのまま北条の背中に直撃していただろう軌道だ。

「……惜しい、外した」

「いや、当たっている」

ちらりと後ろを振り返ると不満げなユエの姿。どうやら今の攻撃は彼女が放ったものらしい。苦々し気に悪態をつくが北条はいつもの無表情で受け流す。

その姿が気に入らなかつたのか、次は当てると言わんばかりに魔力を揺らめかせているユエは殺意満天といった有様だ。

起き上がろうと藻掻いているひっくり返ったゴキングに追撃を入れようとする北条が踏み込むと、視界を光る花卉が行く手を遮るように横切った。

「させないよ。『聖絶・光散華』」

「……!」

「ギチーーツ!!?」

ひとときわ強く花卉が輝いた直後、大爆発が北条とついでにゴキングを飲み込んだ。今の鈴からしてみれば北条は殺意すら湧くような相手であり、ゴキングは敵ではあるが好ましい相手である。

どうせちよつとやさつとでは死なないだろうし巻き込んでもいいか、と思つて細かい制御を放棄して放たれた攻撃が見事に一人と一匹を打ち据える。ゴキングはギャグ漫画のように吹き飛んでボロボロになった体を枝に強かに打ち付けた。

一方、余裕をもつて受け身を取つた北条はと言うと軽い擦り傷程度で済んでおり、それも自動回復の技能により瞬く間に回復を終えてしまつていた。

「ごめんごめん、目測誤つちやつた！ 次からは気を付けるね！」

「……あれを仕留めるのは私。邪魔をするならまずお前から倒す」

悪びれもせずテヘペロのポーズをする鈴と「主人公のピンチに駆け付けて敵に啖呵を切るツンデレライバルキャラ」みたいな事を言いつ出したユエを一瞥してゴキングに目をやると何とか回復を終えていたようで、今度は突つ込んでこずに滞空して様子見をしていた。

「ええいお主等、妾の話聞くのじゃ！ この試練ではおそろく、先程の魔法で感情を反転させられておる！ つまり今まで様々な試練と共に乗り越えてきた仲間を嫌いになつても背中を預けて戦えるかどうかを試されておるのじゃ！」

言い争つていたテイオがついに痺れを切らせ、叫ぶようにしてその試練の内容についての考察を言う。

それについては北条も同意見であつた。自身が仲間を嫌う事は無いと思つているので、ユエや鈴などを見た時に感じた嫌悪感は無自然なものではなく、先程の光にカラクリがあると考えている。

「はあ？ つまり本来の俺はクソゴリラとかババアとかが好きで好きでたまらないってか？ 笑わせんなよ、冗談は年齢だけにしとけや」
「婚活ドラゴン（笑）。五百……あれ、何歳でしたっけ？ あつ、ちなみに私は十六歳ですよ」

「流石に言い過ぎじゃ……確かにとんでもない年齢かもしれないけど

竜人族では適齡期かもしれないだろ！」

「ぐぎぎ……！ お主等あ、後で覚えておれ……！ ……ふう。よいか、妾もお主等の事は嫌いじゃが今はお互い争い合っているも仕方があるまい。不本意ではあるが協力をすべきじゃ」

相変わらず悪態まみれの幸利と煽りまくるシア。光輝も止めようとして何気に心に刺さるようなことを言っている。ビキビキと血管を浮かび上がらせて、その後深呼吸をして無理やり心を静めたティオは結界に群がるゴキブリをぐるっと見回した。あれだけ嫌いだったゴキブリが今は愛おしくてしょうがない。

「……ちっ、ババアなんてこっちから願い下げだがしょうがねエか。ボスはゴキブリを吸収して回復できるようだし、取りあえず数を減らしとくか」

「お二人にならともかく、ゴキちゃんを攻撃するのは心が痛みますが……今回だけは仕方ないですね」

お互いに顔を見ないように反対側を向く。顔を突き合せたら間違いないと殺意とかが湧いてくるので視界に入れないようにする方が効率的だからだ。炎で焼き払い、または大剣を振って出した風の刃で薙ぎ払っていく。ハジメや香織、恵理もそれに倣って出来るだけお互いの顔を見ないようにして渋々無言でゴキブリの処理を始めた。

「くっ、この嫌な気持ちも試練って事なのか。なんて卑劣な試練なんだ」

剣先をあっちこっちへウロウロさせる光輝。やるべき事を理屈では分かっているても感情はそうはいかないようだ。

「我慢する他あるまい。親玉の方は……まあ、あちらに任せておけばよいじゃろうな、っとー！」

北条、ユエ、鈴の三人であれば余裕をもって勝利できると今までの記憶が訴えているので、ティオもゴキブリの駆除に勤しむことにした。

扇子を一振りして炎の竜巻を発生させ、ゴキブリを処分していく。

一方、ゴキングと交戦中のユエは手数中心の魔法を放ちながら北条の背中を見やる。

先程のテイオの言ったことが正しいのであれば、自分はこの憎らしい男の事が好きだと言う事になる。鼻で笑いたくなるが成程、確かに理性的に考えてみればそうだろう。

これまでの旅路の記憶はちゃんとある。奈落の封印部屋で助けられたこと。オルクス大迷宮の最深部で一時的に一緒に生活していたこと。確かに大切な記憶だったのだろうが、今となってはそれは憎々しい記憶になってしまっている。

魔法の弾幕を旋回して掻い潜り、ユエに向かって突進するゴキング。鈴の結界があるとはいえ、瘴気を纏った音速の体当たりが相手では防ぐ事はできないので北条がゴキングを横合いから殴り飛ばす。殴り飛ばされたゴキングは空中で体勢を立て直し、お返しとばかりに腐食の瘴気をビームのように束ねて撃ち放つ。

「むっ……助けなんて要らなかつた」

放たれた瘴気を魔法で焼き消しながら文句を言う。普通なら感謝の一つでもするものだが感情はそう簡単なものではない。意識していないと罵詈雑言が飛び出しそうになってしまう。

ゴキングは音速で飛び回ることが出来るので、ユエや鈴の魔法では捉えるのは難しい。それに多少のダメージであればすぐに回復してしまう。強力な魔法で一気に削ってしまうのが理想だが、そのためには足を止めさせる必要がある。

空中から強襲してくるゴキングの爪を受け流していると、ようやくその時が来た。

反撃はせずにそのまま脚を掴み、その場から動かないように力づくで抑え込む。腐食の霧を纏っているので若干爛れるような気がするがお構いなしだ。

「我慢比べだ」

次の瞬間、北条の後ろから飛来した炎の龍が北条もろともゴキングを飲み込んだ。

「えっ」

「ギッ……!?!」

今まで軽く受け流していたのに、あっけなく自身が放った魔法を受

けた北条にユエは驚きの声を上げて硬直する。感情が反転してユエは北条が憎くなっていたが、『きつと自分がどんな魔法を放とうが捌いてしまうだろう』というある種の信頼を抱いていた。

悲鳴を上げて堪らず逃げ出そうとするゴキングだったが、北条がそれを許さない。

彼自身も炎に焼かれているが、目を閉じて息をしないようにしているので問題ない。

どれだけ熱い炎も肺に入れなければ安泰である。

自分に火力がない以上、こうして頑丈さに物を言わせてユエや鈴の魔法に巻き込んでしまうのが手っ取り早い。凄まじくゴリ押しな戦法であった。

そうして鈴の追撃が来るのを待っていると、期待通りに後ろから攻撃が飛んでくる。

「『聖絶・桜花千刃』」

花卉のような形をした鋭い刃状の結界が幾千も飛来して北条とゴキングに襲い掛かる。

だが、北条は素の物理的耐久力が桁外れであった。ゴキングを切り刻んでいく刃が北条には通らない。アザンチウム鋼線が織り込まれている外套を着ているのもあるが、そもそも身体自体が硬く、ただグツと力を籠めるだけで鋼鉄のような強度と化す。鈴もそれを分かっていたからこそ北条もろとも魔法の範囲に巻き込んだ。

流石に慌てたユエが炎を消して、刃の吹雪が通り過ぎた後に残されたのは若干焦げ付いて引っ掛かれたような傷があるがほぼ無傷の北条と、重度の火傷を負った上にあちこちが切り裂かれた哀れなゴキングの姿。

「ギ、ギギギッ……！」

ズダボロになったゴキングが「マジかよこいつ」と言わんばかりの悲鳴を上げて空中に逃げようとする。とにかく今の損傷では危険なので、一度回復をしなければならぬ。

だが、ここでゴキングに悲劇が起こる。

実はこの感情反転の魔法、ゴキングが弱っていくのに比例して効果

が弱まっていくという特性があった。

反転した感情が弱まっていく。憎しみや嫌悪感が薄れていくと同時にユエと鈴の心にある感情が灯った。

それはフラフラと空中を漂って傷を癒そうとしている存在と、感情に流されてしまった己の不甲斐なさに対する怒り。大切な人を想う気持ちを踏み躪られてキレた二人の魔法が襲い掛かる。

「……よくもやってくれたね。もう絶対に許さないから」

普段の陽気な雰囲気は何処へ行ったやら、ゾツとするほどに冷たい声が鈴から発せられる。それは後ろで見ていた面々が「ヒエツ」と声を漏らす程の怒気であった。

球状の結界が一瞬にしてゴキングを包み込むようにして展開される。治癒するために集めようとしたゴキブリは結界に阻まれてしまい治癒が出来ない。なので、ゴキングは腐食の霧を放出して結界を消滅させようとした。

「試すのに丁度いいかな」

だが、それよりも鈴の方が速い。杖の先に取り付けられた宝玉が光を放つと最初に展開した結界を内側に包むように次々と結界が重なっていく。その数およそ十枚。まるで結界で作られた玉ねぎのようであった。

「『聖絶・連爆』」

とん、と地面を杖で叩くとそれが合図となり結界が爆ぜた。

一番内側にある結界を爆発させ、その衝撃で割れた一つ外側の結界をさらに爆発させ、さらにその衝撃で割れた一つ外側の結界を……と重ねた結界の数だけ内側にいる者を蹂躪する凶悪な魔法。

結界内という閉所空間で爆発するので『聖絶・光散華』より遥かに威力が高いのだが消費魔力が多大な上、高速で動き回る相手であれば捉えるのは難しいので汎用性では劣ってしまう。ここぞという時、止めに使うと決めていた魔法だ。

足場が揺れる程の凄まじい衝撃が空間を伝って足場を揺るがす。

爆心地に漂う煙の中からゴキングが落下してそのまま受け身すら取れずに足場に叩きつけられた。

すでにほぼ逝きかけているゴキングはピクピクと痙攣をするのみである。周囲に呼び寄せていた回復用のゴキブリも今の爆発でついでと言わんばかりに処分されてしまっていた。

「『神罰之焰』」

そこに容赦のないユエの魔法が襲い掛かる。

最上級魔法の『蒼天』を重力魔法で圧縮したのち、魂魄魔法の『選定』で対象を選んで広範囲の敵を焼き尽くすユエが開発した凶悪な魔法である。

選んだのはゴキングおよびゴキブリ。そんな強力な魔法があるなら初めから使えよと言いたくなるかもしれないが、感情が反転していた状態であれば仲間も巻き込みかねなかった。効果が薄れた今であれば問題なく行使できる。

圧縮された蒼い火の玉が弾けて波紋のように広がり、選定した存在を一切合切焼き尽くし灰にしていく。蒼い波紋が触れた瞬間から灰になって散っていく様は芸術性すら感じさせる光景だ。

射程距離は地下空間全体。当然のことながらすでに瀕死のゴキングも触れた先から灰になり、サラサラと風に乗って散ってしまった。

「やっべ、あの二人は怒らせないようにしねエと……」

「普段怒らない人が怒ると怖いよね」

敵が全滅したのでゴキブリを阻んでいた結界が解かれる。あれほどに高度な結界術を立て続けに使っていたのに、こちらの結界の維持も片手間に行っていた鈴の結界術の腕前は、すでにヤバい級にまで成長していた。ディフェンスタイプの天職とは一体何だったのか。

「ふう、やっつと終わったのう。本っ当に疲れたのじゃ。これだけ叫んだのはいつぶりか……」

全てが終わったことを確認してティオがゲツソリと肩を落とす。

今回の試練で一番苦労したのは彼女かもしれない。

□ どうでもいいオマケ □

アンカジ公国で『豊穰の女神』としての仕事を終えた愛子は宿屋の一室にいた。

仕事とは言ってもここでは北側に果樹園があるだけなので、農作物をどうこうするというよりは偉いさんにお話を聞くことが主な仕事なのだが。

この大公と面識のある檜山達が予め一筆したためてくれていたおかげで驚くほど順調に事は運んだ。愛子が仕事を終える三日間ほどで雫達はグリュウエン大火山を攻略し終えた。情報無しでは危険な場所だが、北条チーム、檜山チームの二チームがまとめた攻略情報があれば拍子抜けするほどあっさりとクリアできたようだ。

檜山チームも無事にメルジーネ海底遺跡を攻略したようで、次は神山の攻略に取り掛かるとのこと。

一日だけ休養日を設けて、アンカジ公国の観光を存分に楽しんだその日の夜。

皆が寝静まった時間に、ランプの明かりを頼りに書き物をしていた愛子のお腹が可愛らしく「くう」と鳴った。

「お腹が空きましたね……」

コトリ、とペンを置いて預けられた共有の宝物庫を漁り始める。

あれでもないこれでもないと手を突っ込むこと十数秒、御目当ての物を見つけた愛子が手を引き抜くと竹皮のような物で包まれた物と水筒が握られていた。

「ふふふ、今日の具は何でしょうか」

わくわくしながら包みの紐を解くとそこには愛子が食べるにちょうど良いサイズのお握りが二つ並んでいて、水筒の蓋を開けると湯気とともにお吸い物の良い匂いが漂ってきた。

宝物庫に入れられたものは時間が止まったかのようなので、こうして料理などの消費期限があるものを入れても作りたての状態が維持できると言う利点があるのだ。

「お夜食はあまり良くないとは分かっているのですが……。うう、それもこれもお握りが美味しいのが悪いんです……」

こうして愛子が夜食を摂るようになったのはここ最近のことである。ある日の夜、何となしに宝物庫の中を漁っていたら手紙が括られている包みがあった。

『畑山先生へ』

いつもお疲れ様です。こちらの旅路は順調ですがそちらはいかがお過ごしでしょうか。

忙しいとは思いますがしつかりと食事と休憩はとるようにしてください。

簡単なものですが料理を入れておきましたのでよければ召しあがっていただければと思います。

アンカジ公国は砂漠の中にあり、夜は冷えるので暖かくして過ごしてください。

北条 』

そんな内容の手紙と一緒にあった包みを開けるとホカホカ握りたてのお握りがあつた。その日は嬉しい気持ちで胸が一杯になり、泣きながらお握りを頬張った覚えがある。ちなみに具はおかかとツナマヨだった。

その日からほぼ毎日、こうしてこつそりと夜食をいただくのが最近の密かな楽しみとなつている。ちなみに今日の具は鮭と鳥そぼろだった。

「あつ、美味しい。……しかし、どうして北条くんはこうして毎日と言つても良いほどに私に夜食を作つてくれるんでしょうか？」

もそもそとお握りを食べて、ずずーと温かいお吸い物を啜りながらぼんやりと考える。

北条は共有の宝物庫に毎日と言つていいほどに皆で摘まめる料理を作り置きしてくれているし、時にはクッキーやらケーキやらお菓子が入っている事だつてある。

だがそれに加えて自分だけにこうしてこつそりと皆に内緒で毎日手作りの夜食を振舞ってくれるのは何故か。

「(はっ、まさか……！　だ、駄目ですよ北条くん！　いくら私がセクシーで魅力的な女教師であろうと私と北条くんは先生と生徒の関係なのです！　それに北条くんにはもう谷口さんやユエさんという女性がいるのに……！)」

実際のところは激務で疲れているだろう愛子を気遣つての行動

だったのだが、勝手に勘違いをした愛子は衝撃の事実（笑）に顔を赤くして一人でもじもじし始めた。

なお、少し先の未来でその勘違いをしたままの愛子が北条に「ごめんなさい。北条くんのお気持ちは嬉しいのですが、やはり教師と生徒が恋愛関係になるのはイケナイと思うのです。そ、それですね、もし卒業してからも気持ちが変わらなかつたらその時は真剣に考えます」とフラれたのかオツケーなのか分からない事を言われる事となる。

何のお気持ちも表明していないし、そもそも恋愛感情など持っていないのにいつの間にか告白した事になっていた北条はクラスメイト達から生暖かい目で見られるようになったとか。

幕間：惑わしの大樹海（終）

ユエの魔法により全てが灰燼と化して試練は終わった。

それに伴って反転した感情も元通りとなつてめでたしめでたし……と、そう簡単にはいかなかった。

「……いいもん。どうせ妾は五百六十七歳の行き遅れじゃし。お向かいのバハムーン子ちゃんは今もう二人も子供がいるし。爺様にもいい加減身を固めてほしいと心配されておる始末じゃし……」

膝を抱えて影を背負うティオは、大きな精神的ダメージを受けていた。ゴキングを倒して感情が元に戻ったのは良いのだが、今までの口撃のダメージが遅れて一気にやってきた形だ。

「わ、悪かつたってティオさん。その、あれは言葉の綾つつーか、なあシア？」

「そ、そうですよ！ まだティオさんは全然イケますって！」

地面に『のの字』を書いているティオを元凶の二人が必死に慰める。

感情が反転している時は怒りの方が勝っていたのだが、思ったよりもデリケートな話だったようだ。

「ふふふ、そろそろ相手を見つけねば本当に婚活ドラゴンになつてしまふのじゃ……。でも妾より弱い男には嫁ぎたくはないのう」

「面倒くせエなこの人！」

頭を抱える幸利だが、むしろこのまま有耶無耶になつてくれないかなー、と淡い期待を抱いていた。

と言うのも先程の試練での口喧嘩中に『普段の自分は二人が好き』と捉えられる発言をしてしまったのをバツチリと覚えてしまったいたからだ。流石にあれを追及されれば羞恥やらなんやらで死ぬ自信がある。

「何と言うか、すさまじい試練だったな。感情が反転するだけでこんな事になるなんて」

「ハジメくんを殺したい、なんて思つちやつた自分を殴り飛ばしたいよ。でも、反転してこんな気持ちになるって事は、つまりそう言う事だよ。ごめんねハジメくん、この償いはちゃんと体でするから」

「なんでやねん……。香織さんの中では体で償うのが流行ってるの？」

反転して殺したいほどに憎いという事は、普通の状態では死んでも良いほどに愛しているという事。好きの反対は無関心などとよく言われるが、それは違う。プラスの反対はマイナスなのだ。

改めて自分の気持ちを確認できた香織はこれからもっと攻勢をかけていこうと決めた。

「反転した時の気持ち、か……」

「……恵理？ どうしたんだ、そんな考え込んで」

「ううん、何でもない。やっぱりそうだったんだなって思ったただけだから」

「？」

恵理は顔を伏せて何かを呟き考えこんでいたが、自分で答えを出せたのかどこか吹っ切れたような様子だった。

「……あ、あの、……その」

「……」

重症だったのはユエと鈴の二人だ。すっかりと感情が元に戻った二人は、自分がやっていた事を思い返した瞬間、血の気が失せた。いくら試練だったとは言え後ろから打ち続けた事実は変わりない。

本人の防御力のおかげで軽傷で済んでいるが、もし北条の耐久が並しかなかったら間違いなく死んでいる。それほどどの攻撃だった。

ユエは俯いたまま何も言わない。何も言えない。だが、蒼白と言っても良いほどの顔色が彼女の心の内を表していた。

実のところ、ユエが北条に攻撃をしたのはこれが初めてではない。オルクス大迷宮には、目標に種を植え付けることで身体の制御を奪う魔物がいた。その恐るべき能力によって自由を奪われたユエは北条に向かつて魔法を放ってしまった事がある。

だがあの時は身体の自由が奪われていて自身の意思が介入する余地がなかったのでやむを得なかった。しかし今回は違う。反転していたとは言え、自分の意思で明確な殺意をもって魔法を放ってしまった。

これで北条が「やられたらやり返す」タイプの人だったらまだ良かったのだが、北条は感情が反転しているにも拘わらず自分たちに反撃しなかったし、変わらずに守り続けた。

鈴にしても同じようなものだ。いつも守られてばかりだからせめて背中だけは守ると決心していたのに、よりにもよってその背中を撃つような真似をしてしまった。

もし嫌われたら。呆れられたら。これから背中を預けてもらえなくなったら。不要だと言われたら。北条がそんな事を言わないと言う事は分かっている。だが、そんな嫌な考えばかりが次々に浮かんでくる。

そんな二人の様子を見て、なんとなく状況を察した北条は二人を慰めるために口を開いた。

「……お前達が何をしようが俺には関係ない」

たとえ嫌われようと憎まれようと、それこそ背中から刺されたとしても自分には関係ない。一度決めたからにはどんな事になっても守るから今回の事は気にしなくてもいい。

そういった意味を込めた北条なりの言葉。

普段であれば、言葉の裏に隠された意味をある程度読み取ることはできただろう。

だがネガティブになっている今の状況でそのような事を言われたら悪い方向にしか捉えられなくなってしまふ。自分たちの気持ちや想いなどには興味がないと、そう言っているように聞こえてしまふ。

感情が反転している時の北条がいつもと変わらない調子だったこともそれを後押ししてしまう。

『好き』が『嫌い』になるのであれば、全く態度が変わらなかつた北条は自分たちの事を元から何とも思ってたのではないのか？

居ても居なくてもいい、どうでもいい存在と思っているのではないか？

「……あ」

ほぼ同時にその答えに行きついてしまった二人は顔面蒼白を通り越して土気色になった。

実際にはそんなことは無く、感情反転は北条にもガッツリ効いているが、正直反転中は二人の事は嫌い、憎いとすら思ってしまったのだが、すごく我慢して表情や態度に出さなかっただけだ。

だがそんな事は知る由もないので悪い方向に結論が傾いてしまう。鈴はスカート裾を皺が出来る程に握って今にも泣きだしそうで、ユエは寒くもないのに体をかたかたと震わせて今にも倒れてしまいそうだった。

「ちよつと衛、こつち来てー！」

黙って事の経緯を見守っていたハジメは「これはマズイ」と判断して北条の腕を掴み、少し離れたところまで移動した。周りに聞こえないように顔を近づけて、小声で作戦会議の開始である。

遠巻きに見ていた恵理は「いや、流石にそうはならんやろ」と北条の言葉足らずに内心ドン引きしていた。やはり言いたいことはしっかりと言葉にしないと伝わらない、と良い反面教師になったようだ。自分の想いを伝えるときはちゃんと言葉を選ぼうと、恵理は強く心に誓った。

「(言い方ア！ 流石に今のはちゃんと伝えなきゃマズイよ！)」

「(……？ ちゃんとやったはずだが)」

「(なんでやねんっ！ あれじゃあ二人には無関心だって聞こえちゃうから！ とにかく、今回はもつと口数を増やしてあげて！)」

「(そうか、分かった。なんとかやってみる)」

作戦会議終了。

北条はのしのしと歩いていき、ユエと鈴の前に立つ。すると、怒られる前の子供のようにビクリと二人の肩が跳ねた。ちらりと上目遣いで北条を見やると、いつも通りの無表情のままであった。それが噴火前の火山のように見えて、二人はますます体を縮こませる。

「や、やっぱり怒ってる……よね？」

「怒る必要はない。仕方がなかったというやつだ」

青白い顔で震えている鈴の声に、即座に首を振る。北条としては今回の事は本当に気にしていないし、もしも怒る相手がいるとしたらそれはあのゴキングか、もしくははこの試練を用意したりユーティリス・

ハルツイナのどちらかだろう。むしろ、二人に関しては被害者ですらある。

そんな事を思っていると、突然金色が抱き着くように飛び込んできた。

「なっ、なんでもするっ！ マモルの言う事だったならなんでもするからっ！ もし怒ってるのなら殴ってもいい！ だからっ、だから……！」

紅い瞳を涙で潤ませたユエが必死な表情で胸に縋りつく。

あまりにも普段とは違った様子であり、焦りや悲しみの他に恐怖すら顔に浮かべている。

「お願い……っ、置いていかないで……！」

それは、嗚咽交じりの涙声だった。

ユエはおおよそ三百年間、光が一切差し込まない暗闇に囚われていた。そこから連れ出してくれた北条はユエにとっての光のようなものだ。

それは仲間がたくさん出来て、仲良くしてくれる人達がいる今でも変わらない。北条に置いていかれると言う事はつまり、またあの奈落に逆戻りしてしまうと言う事に他ならない。

もしもそうなってしまうたら、今度こそ耐えられないだろう。

そんなユエの心情を知っているのかは定かではないが、北条は少しでも慰めになるようにと優しく頭を撫でてやる。

「置いていかない」

「……ぐすっ、……ほんと？」

「ああ。少なくともお前が必要としなくなるまでは」

「んっ……ふふっ、だったら……ずっと一緒……」

北条の言葉とナデナデで安心したのか、目の端に涙を浮かべながらユエが微笑んで胸に顔を埋める。硬くて大きな胸板に耳を押し当てると、暖かい体温と共にトクントクンと心臓の鼓動が伝わってくる。寂しい時や悲しい時はこうしていると感じている不安や孤独がすとと溶けていくのを感じる。

「……本当にごめんね。あれだけ頼ってって言ったのに、守っても

らってばかりでごめんね」

「気にするな。やりたくてやっているだけだ」

心から申し訳なさそうな表情の鈴がそつと手を伸ばして北条の頬を触る。先程の試練で鈴が攻撃をして薄い引つ掻き傷が付いてしまった場所だ。その傷はすでにすっかり消えてしまったけれど、それでも傷付けたという事実は消えることは無い。

まだ心を覆うものはあるが、それでも雰囲気はかなり直ったように、これでもう大丈夫だろうと一仕事終えたハジメはふうと安堵の息を吐いた。

後は時間が解決してくれるはずだ。

「……うむ、もう大丈夫じゃ。すまぬのう、みつともない所を見せてしまった」

「いえ、そもそも私達が色々言ってしまったのが原因ですし……」

「なんつーか、俺らも悪かったって事で。と、とにかくこれでもうこの話は終わりにしようぜ。ほら、試練も終わったし後は道なりに進んでいけば——」

沈んでいたティオが立ち直る。触れられなくなかった話題が上手い事有耶無耶になりそうで、幸利はやや食い気味に先に進もうと促した。

だが、幸利が歩き出そうとしたタイミングでシアがあつと声を上げる。

「あつ、そう言えばユキトシさんがさらつととんでもない事を言っていたような気がします！ えーつと、何でしたっけ……ティオさん覚えてます？」

「クソゴリラア!!」

思わず試練中のような悪態を吐き出してしまった。だが、幸いにしてシアはぼんやりとしか覚えていないようで、何とかして誤魔化そうと考えていると、ティオがニツコリと深い笑みを浮かべる。美しい笑顔だったが、幸利にはそれが死刑宣告の笑みにしか見えなかった。

「もちろん覚えておるとも。『本来の俺はクソゴリラとかババアとかが好きで好きでたまらない』じゃろう？ ふふ、幸利よ。お主も中々

大胆な男じやのう」

「何で一語一句間違えずに覚えてゐるんだよ。お、お、お、お、お、お!!」

試練中に言った事や行った事は全て記憶にある。テイオは記憶力が良いので幸利とシアに言われた事は全て覚えていた。無かつたことにしたかつた言葉を完璧な形で叩きつけられて幸利は絶叫する。

羞恥心で顔を真っ赤にして汗をダラダラと流す幸利は、魔法使いとは思えないほどの猛スピードで走って逃げていった。

「あつ、逃げた！ 待ってくださいよお！」

「嬉しそうじゃなシアよ。……ふふつ、これはしつかりと聞き出さねばな」

ニヤニヤしながらシアが追いかけていく。

テイオはゆつくりと歩いて追いかけたが、その顔は何処か嬉しそうに少しだけ紅潮していた。

「雨降って地固まるというか……とにかく皆、何事もなく終わったよ。うで良かった」

北条の発言に最も突っかかりそうな光輝は珍しく見に徹していた。

本当のところは一言言ってやろうと思っていたのだが、行動に出る前にハジメが何とかしてしまい出番を潰されてしまったので、こうして「後方良い奴面」をしているだけである。

『今回も自分は何もしてないけど大丈夫かなあ』と一抹の不安を抱えつつ、それをおくびにも出さずに「皆、試練は終わったし先に進もう！」と言って歩き出した。

「ねえハジメくん。さっきの試練中に私を嫌な目で見てたけど、これは期待してもいいのかな？」

「……………」

「あつ、逃げた！ 待ってよハジメくん！」

枝を進んでいった先にある長い階段を上り、いつもの転移の魔法陣で移動した先は、まさに『空中庭園』と呼ぶに相応しい所であった。流石に王宮の中庭などには及ばないが、それでもどこか神聖さを感じさせる雰囲気を漂わせている。

所々にある小さな水路、ぽつぽつと生えている小さな木、そして白亜の小さな建物。おそらくここが解放者の一人であるリユーティリス・ハルツィナが作り上げたアジトなのだろう。

見上げてみると空は青く、庭園の下には雲海が広がっており樹海が僅かに見えるので、ここが頂上であると察せられる。

「わあ……すごくきれいな場所……」

「どうやら此処が頂上のようなだな。と言う事はさっきのが最後の試練だったというわけか？」

「奥の方に露骨なゴール地点があるな。デカイ樹と……ありや石板か？」

奥の方には水路に囲まれるようにして、まるで離島のようになっている場所があり、そこに大きな樹がぽつんと聳え立っている。よく見れば小さな石板のようなものに蔦が絡みついて樹に固定されていた。「ふむ……、これほど大きな樹であれば地上にいる何者かが気付いてもいいはずなのじゃが……。飛行艇で移動しておる時もそれらしきものは見えなかったしのう」

「隠蔽してたんだろ。こんだけの規模となると認識阻害の闇魔法だけじゃねエ、魂魄魔法とか空間魔法とかの神代魔法を掛け合わせてるんだと思うぜ……つーか、そろそろ放してくれよ」

ガツチリと両腕を掴まれた幸利がため息をつくが、シアに「ええ？ どうしましょうかねえ？ 実は満更でもないんでしようユキトシさあん」と煽られ、ニヤついた顔に一発ぶち込みたい衝動に駆られる。

あの後、結局階段途中でシアに追いつかれてしまい、そこからずっとシアとテイオの二人に先程の試練の事を蒸し返されていた。その時の心境としては「くっ、殺せ！」である。

両腕を掴まれていると言っても両手に花と言うわけではなく、警察

に連行される不審者のような情けない格好である。己の胸の中にある物をぶちまけてしまえば解放されるのだろうか、幸利はこういう事に関しては何れである。普段鈴に臆病者だのなんだの言っているが、これでは人の事をとやかく言えない。

「……それだけだと……これだけのものを隠すのは無理だと思う」

「神代魔法か」

「……ん、多分。もしかしたら……ここの神代魔法が関係してるのかも」

最後の試練が終わってからずっと、北条の腕を抱きしめているユエが辺りを少しだけ見回して、幸利の考察に捕捉を入れる。闇魔法や魂魄魔法などの認識を歪ませる魔法だけではなく、ここで入手できる神代魔法が関わっているというのがユエの考えだ。

「ここではどんな神代魔法が手に入るんだろうね。えーっと、今まで手に入れたのは生成、重力、空間、再生、魂魄の五つだから……ば、爆発とか？」

「さ、流星にそんな安っぽい魔法じゃないと思うけど。それにそんな危険物みたいなのをもらっても使い道が……。あつ、南雲くんなら生成魔法と組み合わせて色々作れるかも？」

「うーん、それだったら……。でもそれだと兵器だけになっちゃうし、僕としては色々補助できるような魔法の方がいいかな」

「確かに、鈴の言った通り爆発魔法となると完全に戦闘特化になってしまうのう。ハジメ殿の言うようにもつと応用の効くものであると良いのじゃが」

「爆発オチには使えるかもしれねえな。あと戦隊ヒーローの登場シーンとか」

「そう言えば、最近は登場時の爆発って滅多に見なくなっちゃったよな。時代の流れって事は分かるんだけど少し寂しい気がするよ」

鈴が指折りしながら今までの神代魔法を振り返り、今から得ることが出来る神代魔法について思いを馳せる。それに対して意見を言い合っているとだんだん話題がズレていき、橋を渡って離島にある石板の下まで辿り着くころには今日の夕飯の話にまで脱線していた。

石板が光を放つと、それに連動して離島を取り囲む水路が若草色の
燐光を放ち始める。

今までのように魔法陣が床から現れるのではなく、予め張り巡らさ
れている水路が魔法陣代わりになっているようだった。そうして魔
法陣が効果を発揮して、内部にいる者の記憶を読み取り始める。今ま
での迷宮と同じく、クリアしたかどうか確かめているのだろう。

色々とハプニングがあったせいで、第三試練あたりから結構怪し
いと思っていたので、少しハラハラしながら待機する事十数秒、記憶
の確認が終わった後に頭の中に直接情報が刻み付けられるような感
覚がした。どうやら無事、クリアしたと認められたようだ。

「よ、よかった。今回ばかりはダメかと思つたよ」

「……ん、同感」

ほつと胸をなでおろしたのは鈴とユエの二人。特に最後の試練で
の出来事が未だ心に影を落としていたので、不合格として弾かれても
おかしくないと思つていたのだ。

あの試練で大切なのは、仲間を攻撃してしまつてもその後仲違いし
ない事である。だからもし、先程ハジメが間に入らずにいたならば不
合格にされていた可能性があつたのだが、その事実を知る者はいな
い。

「し、神山でも体験したけど……この感覚は中々慣れないな。必要な
事だつていうのは分かるけど記憶を覗かれるのはあまりいい気分
じゃないかな」

「神代魔法を全部取るんならあと五回くらい同じのが待つてるぞ。今
更だが、これも魂魄魔法が使われてんのかね。だったらとんでもなく
高度な魔法陣だな」

「とにかく新しい神代魔法が手に入って良かった。私と天之河くんは
二つ目で、皆はもう六つ目だよ」

「妾は三つ目じゃな。香織殿が手に入れたものに加えて再生魔法を得
ておる」

「あつ、皆さん見てください！」

記憶を覗かれる感覚と、知識を刻み付けられる感覚。まるで自分が

メモリーカードにでもなったような気分である。

突如、シアが声を上げて石板が設置されている樹を指さす。そちらに皆が目をやると、幹が形を変えて盛り上がり、見る見るうちに人の姿を取った。肩から上だけしか形成されなかったが、輪郭からしてどうやら女性のようだ。木製なので本来の配色は分からない。全身木の色である。

天之河は咄嗟に身構えるが、他の面々は特に身構えることは無く自然体である。

オルクス大迷宮の最深部にあったオスカー・オルクスの立体映像のようなもの。あれの亜種であると判断したからだ。

「まずは、おめでどうと言わせてもらおうわ。よく数々の大迷宮とわたくしの、このリューティリス・ハルツイナの用意した試練を乗り越えたわね。あなた達に最大限の敬意を表し、ひどく辛い試練を仕掛けたことを深くお詫び致します」

凜とした声。どこか高貴な雰囲気を感じさせるその女性は、自身を解放者の一人であると名乗った。

その後、リューティリス・ハルツイナから語られるのは、まずこの大迷宮を攻略したことで得られる神代魔法についての情報。

ハルツイナ大迷宮で得られる神代魔法は「昇華魔法」という他の神代魔法とは一味違ったものである。

その効果は『全てのものが持つ力を最低でも一段階上に押し上げる』というシンプルなものであり、それ故に非常に強力なものであった。

そして「昇華魔法」は通常の魔法だけではなく、理の根幹に作用するという神代魔法にすらその効果を及ぼす。

「その全てが一段進化し、更に組み合わせることで神代魔法を超える魔法に至る。神の御業とも言うべき魔法——「概念魔法」に」

ごくり、と誰かが唾を飲む音が静寂の中にやけに大きく聞こえた。

説明は続く。概念魔法とは、術者の望む概念を顕現、行使することが出来る、すなわち「権能」を作り出すことが出来る魔法である。おそらく、これを思うがままに使うことが出来れば不可能なことは無い

だろう。

だがそう旨い話は無いようで、概念魔法は非常に扱いが難しく、大迷路を作った七人の解放者をしても使えたのは数十年に渡ってたったの三回のみである。「もつとも、わたくし達にはそれで十分ではあったのだけれど」と付け加えていたが、それだけ難しい魔法であると言いたかったのだろう。

リユーテイリス・ハルツイナの説明でも『極限の意志』と言うあまりにもふわつとした条件しか明言されなかった。

そして概念魔法の説明が終わり、設置されていた石板がスライドして、その奥から懐中時計のようなものが現れた。北条はそれを手に取ってしげしげと検分する。通常の時計とは違い、針は一本しかない。裏にはハルツイナの紋様が描かれていた。

「その内の一つをあなた達に。名を『導越の羅針盤』——込められた概念は『望んだ場所を指し示す』よ」

それは、神を倒すために作られた羅針盤であった。何処にいるともしれない神を倒すという、解放者七人の『極限の意志』によって生み出された探知機。その効果はリユーテイリス・ハルツイナの言った通りであり、羅針盤の針が『神のいる場所を指し示す』のではなく『望んだ場所を指し示す』というもの。

そう、望んだ場所である。

おそらくリユーテイリス・ハルツイナは神の居場所の事を言っているのだろうが、この羅針盤の能力次第では地球に帰る道標と成り得るのだ。

「自由な意志のもと、あなた達の進む未来に幸多からんことを祈っているわ。……あ、全てのものとは言ったのだけれど、バストサイズは昇華魔法では押し上げられないわ。もつとも、わたくしはそのままです十分ではあったのだけれど。胸が小さい人は残念だったわね（笑）」

「は？」

自由な意志があればどこにだって行ける。そう言い残してリユーテイリス・ハルツイナを形作っていた樹は逆再生するかのように戻っ

ていった。もちろん、解放者らしく最後に煽るのを忘れずに。

自由な意志。オスカー・オルクスも、ミレディ・ライセンも、メイ
ル・メルジーネも言っていたフリーズだ。解放者同士での合言葉のよ
うなものなのだろうか。

全ての話が終わって、しばらくしんとした空気が漂っていたが、北
条がその静寂を破った。

「……昇華魔法と空間魔法を使えばいけるか？」

眩くような言葉だったが、静かな空間ではやけにハッキリと聞こえ
た。

ハジメ、シア、光輝、香織は弾かれたように北条を見る。空間魔法
が文字通り空間に作用する魔法であるならば、昇華魔法を用いれば世
界の壁を越えられるのではないか。そう考えるのが一般的だ。

だが、魔法使い組は難しい顔をしている。神代魔法と言うのはただ
でさえ扱いが難しく、天才であるユエであっても『使えるから使って
いる』のであって、未だにその深淵には手がかかかっていないのが現状
だ。神代魔法についての書物も残っていないので、魔法陣によってあ
る程度知識を刻み付けられているが、そこからは完全な独学である。

「むむむ……、私はあまり魔法については詳しくないんですが、専門家
のユエさんとしてはどう見ます？」

いつも通り能天気な様子でシアがユエに話を振る。ユエは北条の
腕を抱きしめたまま目を瞑って考えて、十秒経ち、二十秒経って、答
えが出たのかゆっくりと目を開けた。

「……ごめんなさい。無理だと思う」

「だよー」

「知ってた」

「やっぱり概念魔法とやらがねエとダメか……」

ユエは申し訳なさそうに答えるが、予想通りと言ったふうに鈴、恵
理、幸利が肩を落とす。

これはハードの問題ではなくソフトの問題だ。どれだけ優れてい
るハードであってもソフトが無ければ宝の持ち腐れ、と言う事であ
る。

だが、光明は見えた。リユーテイリス・ハルツイナの言う「概念魔法」。彼女の説明が正しいのであれば、これを用いれば地球への帰路が切り開けるはずだ。

なにせ、解放者は三つの概念魔法を作っている。一つが神の居場所を知るためのものであれば、残りの二つについては容易に想像がつく。

すなわち、神の居る場所——神域に向かうものと、神を倒すためのものである。逆説的に言えば、概念魔法を使うことが出来れば世界の壁を超えることが出来る可能性が高いと言う事だ。

「そう言えば気になる事を言っておったな。神代魔法は理の根幹に作用する魔法、じゃったか」

「……ん、それは私も気になってた。……もしかしたら神代魔法は……私達が思ってるよりもずっと奥深いのかも」

「理の根幹か……。もしかしたらそれを理解するのが概念魔法を使うのに必要なのかもな」

だが、疑問も多く残る。

極限の意志とは何か？ 理の根幹とは何か？ 考えればキリがない。

「な、なあ……。その概念魔法っていうのが使えれば……。地球に帰れるのか？」

「百パーセントとは言えねエけど、かなりの高確率で帰れると思うぜ？ 都合良く行き先を示す羅針盤も手に入ったしな」

「そ、そうか……。良かった……。本当に……。！」

恐る恐る光輝が尋ねるが、幸利の答えを聞いてほっとしたような、肩の荷が下りたような表情になった。忘れそうになるが、クラスメイトの皆は勇者の巻き添えで召喚されていたので、光輝なりに責任を感じていたようだ。

喜んでるのは光輝だけではない。ハジメも、鈴も、香織も地球に帰れるかもしれない手段を見つけて喜色満面である。

「……そろそろ行くか」

一旦ユエに腕を放してもらって、庭園の隅に墓石を設置した北条が

戻ってくる。実はラウス・バーンの時には墓石を設置していなかったのだが、それは本人が残した手記に『私に墓はいらない』と書いてあったのと、どうやら彼は宗教関係者のようだったのでその辺りを考慮して控えていたのだ。

「そうだね。あつ、あそこにあるのはショートカットの魔法陣かな？」

ハジメが指さした先には薄っすらと光を放っている魔法陣がある。どうやら麓までのショートカットになっているようで、ライセン大迷宮やメルジーネ海底遺跡とは違いシンプルで優しいものようだ。

「いや、帰る前にやることがあるんだろ」

「む？ どうしたのじゃ幸利よ」

ずんずんと石板に絡みついていく樹に向かって歩いていく幸利をテイオは訝し気な目で見る。すでに神代魔法は手に入れて、解放者からも話を聞いた。他にやることは残っていないはずだ。

そんな視線を無視して宝物庫に腕を突っ込んだ幸利は、一つの壺と一本の刷毛を取り出す。

パコッと木製の蓋を開けると、壺の中に刷毛を突っ込んで中にある物をたっぷりと含ませた。

「このクソ解放者！ よくもクソみてエな試練を用意しやがって！ 仕返しだオラア！」

ねちよつとした黄金色の粘液——ハチミツを容赦なくリユーテイリス・ハルツィナが出てきた辺りの幹に塗り付ける。最後の試練で大恥をかかされた恨みを晴らすようにたっぷりと何度も何度もハチミツを塗り付ける。

「お主は何をやっておるのじゃ……」

「ハチミツ塗れにされる気分はどうだア!? お前を芸術品にしてやるよ！」

「お、おい清水、流石にそれはやりすぎじゃないか？ それに食べ物を粗末にするのは——」

「……私もやる」

「鈴も加勢するよ！」

「ちよつ」

あまりにも陰湿な行為だったので光輝が注意しようとするが、ユエと鈴が同じく刷毛を持って突撃していく。一歩間違えれば北条との関係が壊れるところだった。しかも、最後の最後にコンプレックスを煽るような事まで言われたのだ。乙女の怒りを発散するように、正面だけではなく側面や根っこ辺りにも出来る限り隈なくハチミツを塗り付ける。

他の面々は付いていけずに呆然と眺めている事しかできなかった。

「……ん、完璧。良い仕事をした」

「ふーっ、良い汗掻いた〜！ 今回はこれくらいで勘弁してあげる！」
テカテカと光を放つ樹を見て、ユエと鈴が一仕事終えたと言うように腕で汗をぬぐう仕草をする。

「仕上げだ！ ハウリア族のガキどもから貰った虫を放てっ！」

さらに幸利が木の枝で作られた虫かごを開けると、そこからクワガタやカブトムシのような昆虫が飛び出して一斉に樹に群がり始めた。流石のリューティリス・ハルツィナもこれは予想外だろう。

「ククク、そのまましばらく虫に集られてろ。因果応報つてやつだ」

「そ、それじゃあ帰りましょうか。皆さんもだいぶ疲れてるようですし、今日はまたうちに泊まっていてください！」

「そっ、そうだね！ 今晚もお世話になっちゃおうかな！ ねっ、恵理ちゃん！」

「う、うん！ お夕飯楽しみだな〜！」

満足気な三人から露骨に目を逸らしながらシアが転移の魔法陣の方へと歩き出すと、それに続くようにぞろぞろと他のメンバーも移動を始める。

「あはは……、何とか無事に終わって何よりだよ。神代魔法はあと一つだけだし、旅の終わりがやっと思えてきた感じだね。それにしても昇華魔法かあ。これで作れるものの幅も広がりそうだよ」

苦笑いを一つして、ハジメも後を追う。ハジメの中ではすでに、昇華魔法をどうやって自身の錬成に生かすかの検討が始まっていた。根っからのクリエーター気質である。

「……そうか。もう終わるのか」

一番後ろを歩いていた北条が立ち止まり、ふと呟いた。
そう、ハジメの言った通り、残る神代魔法は一つだけ。

最後の神代魔法を手に入れて、神を倒したらそれで旅は終わる。

「……マモル？」

「おっいまもるくん、早くいかないと置いてかれちゃうよー！」

急に立ち止まった北条をユエが心配そうに覗き込む。

今行く、と返事をして歩き出した北条はいつも通りの無表情だったが、気のせいだろうか、ユエにはいくらか足取りに元気がない様にも思えた。